

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書
(2007)

2009. 3

大阪市教育委員会
(財)大阪市文化財協会

例 言

1. 本報告書は平成19年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. これらの調査は大阪市教育委員会の指導のもと、(財)大阪市文化財協会が、各原因者より委託を受けて実施したものである。
3. 本報告書の執筆は(財)大阪市文化財協会 南 秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会文化財保護担当において行った。

目 次

I 北 区

中之島蔵屋敷跡発掘調査 (NX07-1) 報告書	3
天神橋遺跡発掘調査 (TJ07-1) 報告書	13
天満本願寺跡発掘調査 (TN07-1) 報告書	23
天満本願寺跡発掘調査 (TN07-2) 報告書	33

II 中央区

高津御蔵跡発掘調査 (KD07-1) 報告書	53
難波宮跡・大坂城跡発掘調査 (NW07-1) 報告書	63
難波宮跡発掘調査 (NW07-2) 報告書	69
大坂城跡発掘調査 (OS07-4) 報告書	81
大坂城跡発掘調査 (OS07-6) 報告書	87
大坂城跡発掘調査 (OS07-7) 報告書	97
大坂城跡発掘調査 (OS07-8) 報告書	103
大坂城跡発掘調査 (OS07-9) 報告書	115
大坂城跡発掘調査 (OS07-10) 報告書	125
大坂城跡発掘調査 (OS07-12) 報告書	135
大坂城跡発掘調査 (OS07-13) 報告書	151
大坂城跡発掘調査 (OS07-14) 報告書	161
大坂城跡試掘調査 (OS07-17) 報告書	167
大坂城下町跡発掘調査 (OJ07-1) 報告書	171
大坂城下町跡発掘調査 (OJ07-2) 報告書	183
大坂城下町跡発掘調査 (OJ07-8) 報告書	191
大坂城下町跡発掘調査 (OJ07-10) 報告書	199

III 西 区

埋蔵文化財発掘調査 (TL07-1) 報告書	207
------------------------	-----

IV 天王寺区

堂ヶ芝廃寺発掘調査 (DS07-1) 報告書	221
伶人町遺跡発掘調査 (RJ07-2) 報告書	227
摂津国分寺跡発掘調査 (SK07-1) 報告書	239
上本町遺跡発掘調査 (UH07-2) 報告書	249
上本町遺跡発掘調査 (UH07-5) 報告書	263

V 浪速区	
埋蔵文化財試掘調査 (RJ07-1) 報告書	269
埋蔵文化財試掘調査 (RJ07-3) 報告書	275
VI 淀川区	
埋蔵文化財発掘調査 (JH07-1) 報告書	281
VII 東淀川区	
埋蔵文化財試掘調査 (SP08-1) 報告書	291
埋蔵文化財発掘調査 (TY07-1) 報告書	297
西淡路1丁目所在遺跡B地点発掘調査 (WA07-1) 報告書	305
VIII 生野区	
埋蔵文化財発掘調査 (TA07-1) 報告書	319
IX 鶴見区	
埋蔵文化財試掘調査 (ML07-1) 報告書	327
X 阿倍野区	
埋蔵文化財発掘調査 (OZ07-1) 報告書	335
XI 住吉区	
埋蔵文化財試掘調査 (MN07-1) 報告書	347
XII 東住吉区	
桑津遺跡発掘調査 (KW07-1) 報告書	351
XIII 平野区	
平野環濠都市遺跡発掘調査 (HN07-1) 報告書	361
埋蔵文化財発掘調査 (KG07-1) 報告書	367
亀井北遺跡発掘調査 (KK07-1) 完了報告書	371
長原遺跡発掘調査 (NG07-2) 報告書	375
瓜破遺跡試掘調査 (UR07-7) 報告書	385
XIV 西成区	
埋蔵文化財試掘調査 (NH07-1) 報告書	393

I 北 区

中之島蔵屋敷跡発掘調査(NX07-1)報告書

調査個所 大阪市北区中之島3丁目6
調査面積 160m²
調査期間 平成19年8月16日～9月5日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

調査地のある中之島とその周辺は江戸時代に「天下の台所」と称された大坂の経済の中心地であり、各藩が米など領内の産物を貯蔵・販売するための出先機関である蔵屋敷が軒を連ねていた。調査地は鳥取藩32万石の蔵屋敷跡に当り、これまでに蔵屋敷跡内で行われた調査(NX99-1次)では、17世紀前半以降の建物や井戸、排水溝、区画塀などが検出されている[大阪市文化財協会2000](図1・2)。

本調査に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表面下約100~210cmで近世の遺構および遺物包含層が良好に遺存していることが確認されたため、本調査を実施することとなった。本調査では事業者側による重機掘削に続き、8月16日から人力掘削を開始し、第1層上面から第3層上面にかけて礎石・溝・土塋など17世紀後半以降の遺構を検出した。続いて、第5a層上面では蔵屋敷成立以前の遺構であるとみられる畝・畝間を検出し、9月5日には調査を終了した。本調査で出土した遺物は瓦を中心にコンテナ12箱に及ぶ。

なお、調査に当り、調査区北端から南に向って10m毎に地区割杭を打設し、北から1~4区を設定した。ただし、3・4区の境界部は鋼矢板で仕切られており、杭が打設できなかったことから、鋼矢板を境として地区割を行っている。また、本報告書で使用する示北記号は図1が真北、その他は磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4、図版上段)

第1層：におい黄褐色極細粒~極粗粒砂を主体とする整地層で、分布は局部的である。上面で礎石を検出した。



図1 調査地位置図

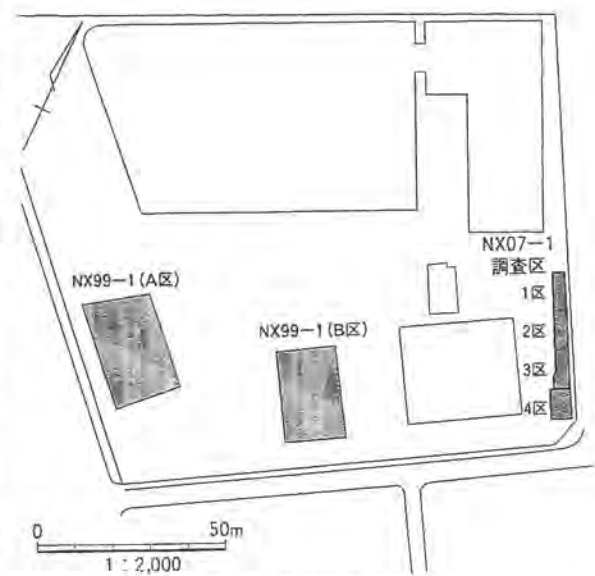


図2 調査区位置図

ii) 遺構と遺物(図5～7、図版中・下段)

a. 第5a層上面

2～4区の第5a層上面では畝・畝間からなる畝遺構を検出した。2区北部のものは東西方向に、他のものは南北方向に延びている。畝の幅は0.30m程度、畝間は幅0.25m、深さ0.03m程度のもが多い。遺構の詳細な時期を判断しうる遺物は第5a層から出土していないが、NX99-1次調査では当蔵屋敷を造成した最初の盛土の上面遺構は17世紀前半のものであることが判明しており、本遺構を覆う第4層が当該盛土層に相当するとみられる。第4層に肥前磁器が含まれることから、本遺構は蔵屋敷が造成された頃の17世紀前半に営まれていた可能性が高いと考えられる。

b. 第3層上面

第3層上面では土壙(SK09～11)を検出した。

SK09 1区の北端で検出した深さ0.04mの浅い土壙で、重なり関係からSK10よりも新しい。暗オリーブ褐色シルト混り極細粒～細粒砂からなる埋土からは、土師器、備前焼、肥前陶器、肥前磁器染付、丸・平瓦など17世紀中葉から後葉にかけての遺物が出土している。5は肥前陶器溝縁皿である。見込みには3箇所目跡があり、高台はいわゆる三日月高台である。

SK10 1区の北端で検出した不整形な土壙で、深さは0.7m程度である。埋土はオリーブ褐色シルト混り極細粒～細粒砂層など5層に細分され、焼土や炭化物を含む。本遺構からは土師器灯明皿、肥前陶器、肥前磁器染付・色絵・白磁、土製鈴・人形など、17世紀中葉から後葉にかけての遺物が多く出土した。6は高台端部を除く全面に施釉した、刷毛目の肥前陶器碗である。9・10は肥前磁器染付碗で、ともに17世紀後半のものであろう。1～3は土師器皿、4は灯明皿である。2・3の底部外面には糸切り痕が観察される。

SK11 3区で検出した直径0.6m、深さ0.2m程度の土壙で、丸・平瓦が出土した。

c. 第2b層上面

4区の第2b層上面では溝群(SD03～08)を検出した。SD05～07と東壁断面で検出したSD03は南北方向、SD04・08は東西方向に延びている。幅は0.3～0.5mで、深さは残りのよいSD05・06で0.4m程度ある。SD05・06の埋土は焼土・炭化物・シルト偽礫を含む、褐色シルト混り極細粒～細粒砂層など3層に細分され、人為的な埋戻し土と考えられる。溝群からは土師器灯明皿・羽釜・播鉢、瓦器、肥前磁器鉄釉・染付、瓦、鉄製釘などが出土しているが、細片が多く詳細な時期は不明である。

d. 第1・2a層上面

第1・2a層上面では両層の上面遺構と、上位層に伴う遺構を一括して検出した。

SE01 第4区で検出された直径1.9m、深さ2m以上の円形の井戸で、出土遺物の年代から上位層に伴う遺構であると考えられる。井戸側の下部では壁面に木質が残存しており、また埋土⑨層上面では抜き取りの際に落ちたとみられる井戸瓦が出土していることなどから、井戸側は上部に井戸瓦を、下部に木製桶などを使用していたと考えられる。掘形の埋土は4層、井戸側の埋土は5層に大きく区分される。いずれも人為的な埋戻し土である。本遺構からは焼継ぎのある19世紀代の肥前白磁や、左巻きの連珠巴文軒丸瓦13などが出土している。

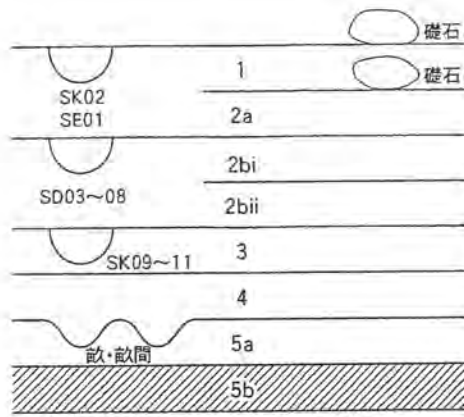


図3 地層と遺構の関係図

第2a層：褐色シルト混り極細粒～細粒砂を主体とする整地層で、層厚は12cm程度である。多量の焼土や炭化物を含む。上面では礎石・井戸(SE01)・土壙(SK02)などを検出した。

第2b層：オリーブ褐色シルトと極細粒～細粒砂の互層からなる第2bi層と、オリーブ褐色極細粒砂混りシルトを主体とする第2bii層に細分される。層厚は30cm程度で、シルト偽礫を含む。両層の層理面が不明瞭な部分もあり、一連の整地層である可能性もある。本層上面では溝群(SD03～08)

を検出した。

第3層：にぶい黄褐色細粒～中粒砂を主体とする整地層で、層厚は30cm程度である。3区以北に分布しており、1区の北部では層厚を増す。炭化物を少量含む。上面では土壙(SK09～11)を検出した。

第4層：黄褐色極細粒～極粗粒砂からなる分級の悪い整地層である。2区以南に分布しており、層厚は50cm程度である。部分的に斜面堆積を示すラミナが観察される。

第5a層：にぶい黄褐色シルト混り極細粒～細粒砂からなり、層厚は10cm程度である。第5b層の上部が作土化されたもので、層理面が不明瞭な部分もある。上面では畝・畝間を検出した。

第5b層：褐色極細粒～中粒砂からなる河成層で、上方細粒化する。

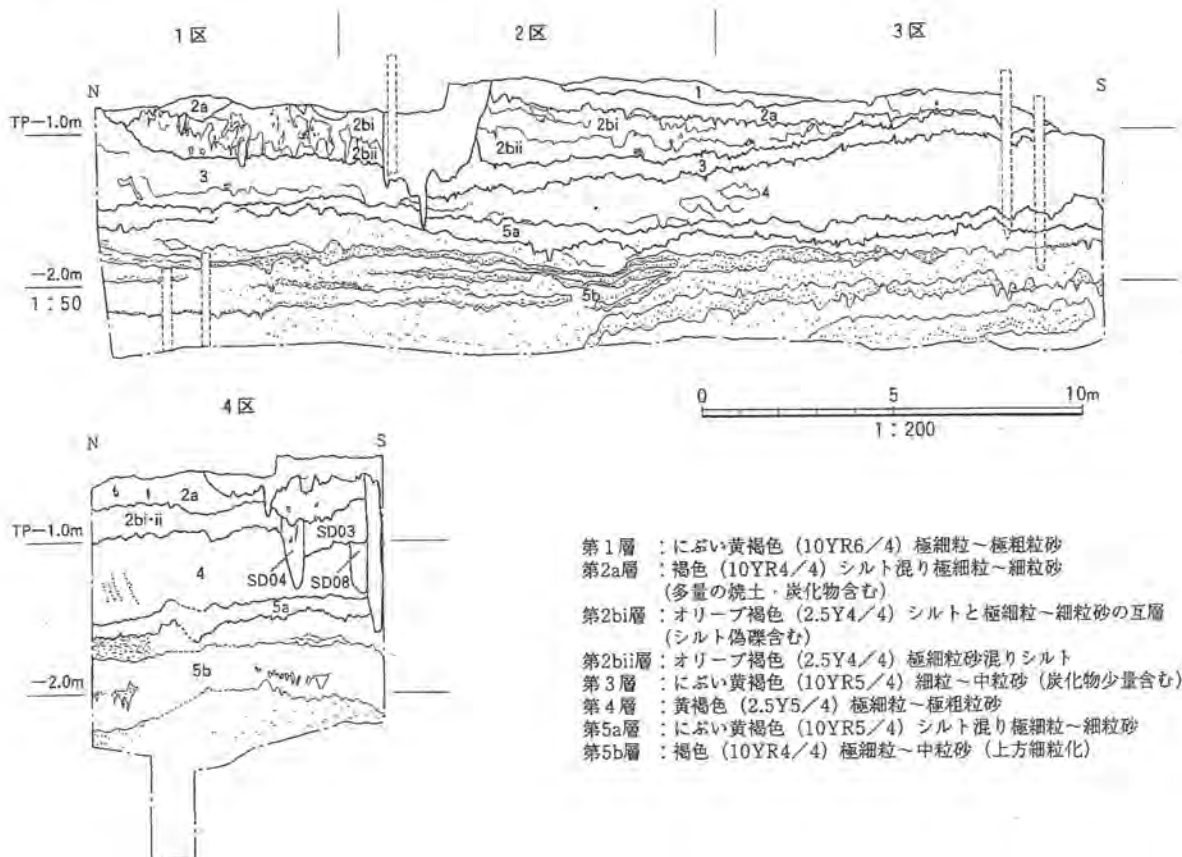


図4 東壁地層断面図

- 第1層：にぶい黄褐色(10YR6/4)極細粒～極粗粒砂
- 第2a層：褐色(10YR4/4)シルト混り極細粒～細粒砂(多量の焼土・炭化物含む)
- 第2bi層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトと極細粒～細粒砂の互層(シルト偽礫含む)
- 第2bii層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)極細粒砂混りシルト
- 第3層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒～中粒砂(炭化物少量含む)
- 第4層：黄褐色(2.5Y5/4)極細粒～極粗粒砂
- 第5a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト混り極細粒～細粒砂
- 第5b層：褐色(10YR4/4)極細粒～中粒砂(上方細粒化)

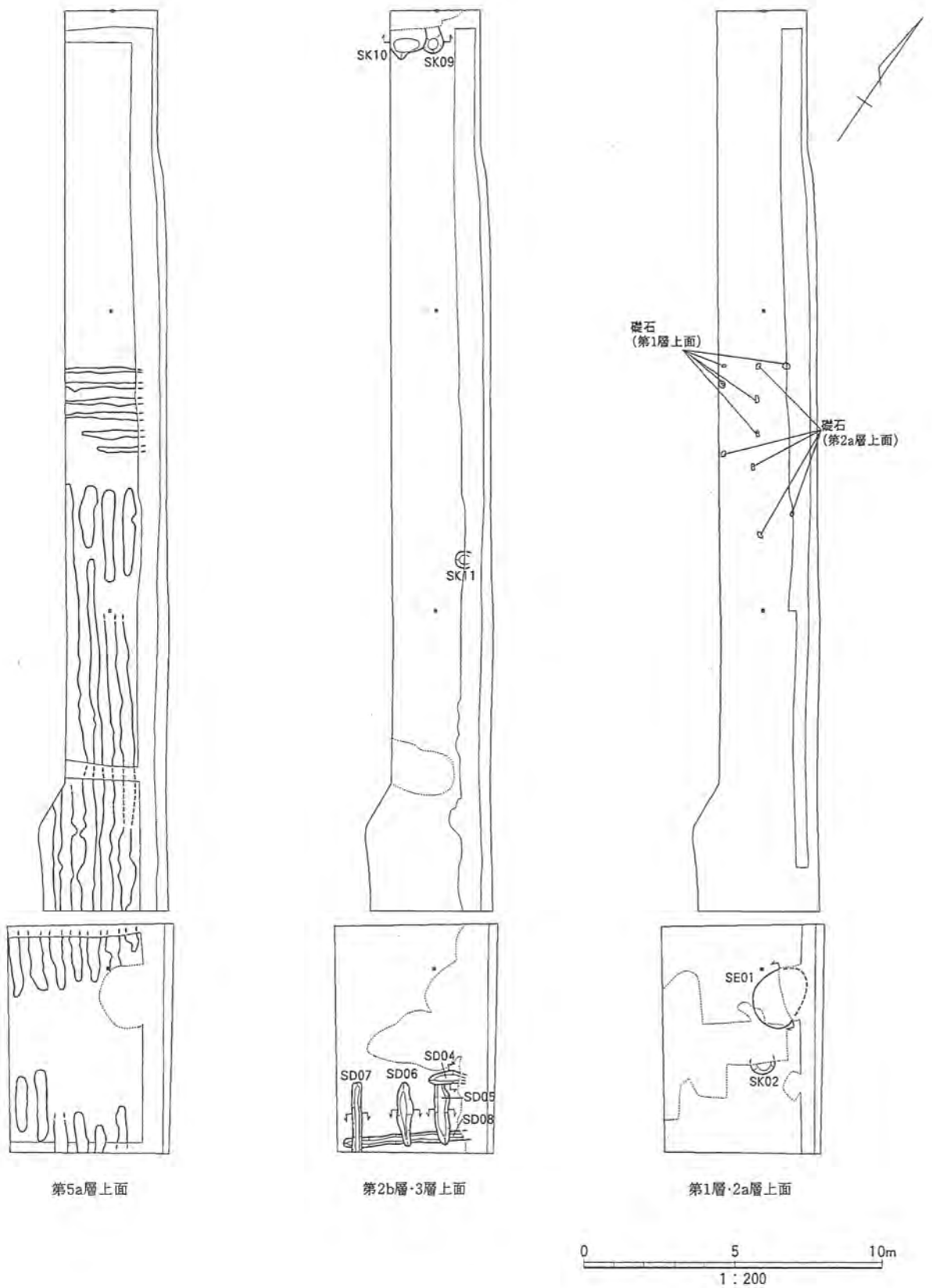


図5 遺構平面図

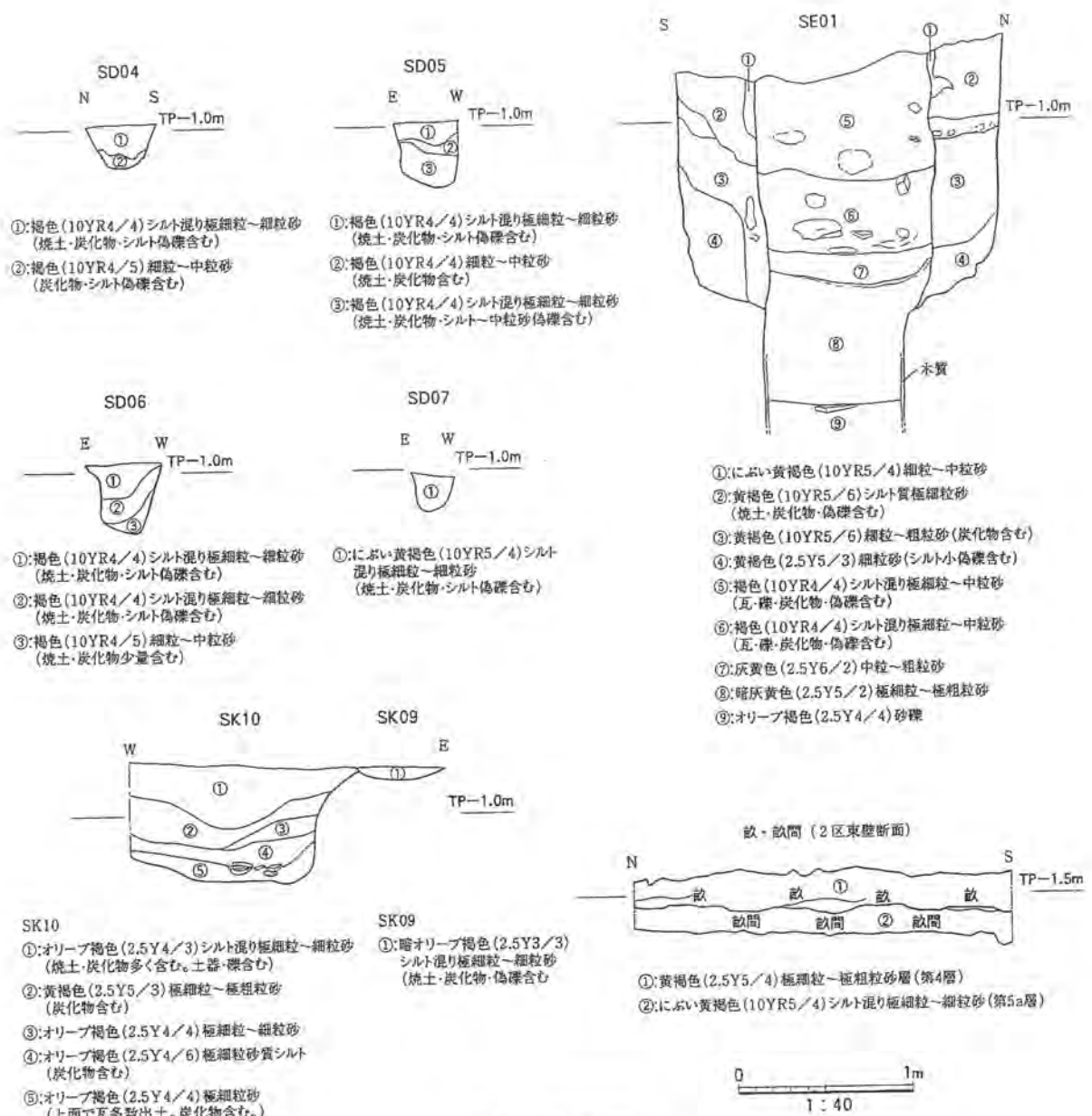


図6 遺構断面図

礎石 2区の第1層上面、第2a層上面では礎石とみられる複数の礎を検出した。人頭大程度のものが多く、第1層上面の2つは二段に積み重ねられていた。

e. 遺構と絵図にみられる蔵屋敷内施設の対応関係について

図8は18世紀代の鳥取藩大坂蔵屋敷を描いたとみられる、鳥取県立博物館蔵「大坂御屋敷図」に、今回の調査を含めた3箇所の調査区の範囲を推定して加筆したものである。今回の調査区は屋敷の東南部に位置し、南端が東西に並ぶ借家棟との境界付近、北端は米蔵で囲まれた役所の建物付近と考えられる。検出された遺構との対応関係では、第1・2a層上面の礎石群が東南端区画内の建物に関連するものである可能性がある。また、19世紀代に埋没するSE01については、絵図が描かれた時点では掘削されていなかったと考えられる。一方、4区南部の第3層上面の溝群は、前述した東南端区画と借家棟の間の空地に位置しており、小規模な耕作などが行われていた可能性もある。



図7 遺構・包含層出土遺物

SE01(13)、SK09(5)、SK10(1・4・6・9・10)、第2a層(7・8・11・17)、第2bii層下面(14)、第2層以下(16)、第4層(15)、攪乱(12)

iii) 包含層出土の遺物(図7)

第5a層：土師器、瀬戸美濃焼など少量の遺物が出土したのみである。

第4層：土師器、須恵器、肥前磁器染付、瓦など少量の遺物が出土した。15は右巻きの連珠巴文軒丸瓦である。巴文の尾の折れや珠文の配列、瓦範の木目が一致することから、第2bii層下面出土の14と同範関係にあると考えられる。徳川前期のものであろう。そのほか、本層上面ではウマの肩甲骨が

出土している。

第3層：土師器、中国製青磁、瓦、壁土など少量の遺物が出土した。

第2層：瓦や壁土が多く出土したが、陶磁器類は少量である。

第2b層からは肥前磁器染付・瓦・壁土などが出土した。14は第2bii層下面から出土した右巻きの連珠巴文軒丸瓦で、コビキB手法である。

第2a層出土遺物には土師器、瓦質土器、備前焼壺7、丹波焼、肥前陶器、青花、肥前磁器染付・青磁、瓦、壁土、小柄17や釘などの金属製品、ヤマトシジミをはじめとする貝類などがある。8は丹波焼甕で、17世紀後葉から18世紀代のものであろう。11は豊臣期前後に出土例の多い、粗製の中国製青花碗である。漳州窯産とみられ、高台端部には繊維状の付着物が観察される。

このほか、16は第2層以下の側溝から出土した唐草文軒平瓦で、唐草文は凸線で表現されている。

第1層：土師器、肥前陶器・磁器、瓦などが出土した。

その他：12は4区の攪乱から出土した肥前磁器染付皿である。高台端部には砂が付着しており、17世紀前半のものと思われる。

3)まとめ

今回は鳥取藩大坂蔵屋敷の東南部における初めて調査であり、施設の配置状況やその変遷について新たな知見が得られた。蔵屋敷を描いた絵図との対比では、調査区の大部分は屋敷の東南端区画内にあり、一部が南北に隣接する区画まで及んでいると推定されるが、区画塀の存在や、区画ごとの整地の差異などについては明瞭でなく、今後の課題として残された。

一方、17世紀前半の蔵屋敷造成以前の土地利用のあり方については、従来の調査ではよく分かっていなかったが、今回の調査で畝・畝間からなる畝遺構を検出することができた。今後、当屋敷地とその周辺において、そうした畝遺構や作土層に含まれる遺物に関する調査が進展すれば、より詳細な時期や期間、規模など、耕作の実態が明らかになるものと期待される。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2000、「中之島3丁目共同開発(仮称)に伴う埋蔵文化財発掘調査(NX99-1)完了報告書」

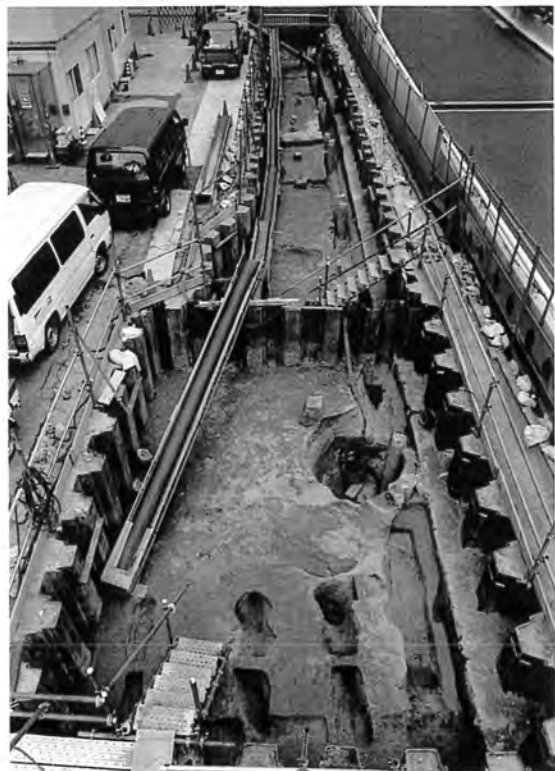
東壁地層断面
(北西から)



畝・畝間検出状況
(3区：北東から)



第1～3層上面遺構
(南から)



天神橋遺跡発掘調査(TJ07-1)報告書

調査箇所 大阪市北区天神橋1丁目14・13-1
調査面積 140m²
調査期間 平成19年7月9日～8月3日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地北方の長柄砂洲上に立地し、周辺では各時代を通じて人々の活動が活発に行われていた。古代には東大寺新羅江庄あるいは安曇江庄、中世には京都と瀬戸内以西を結ぶ交通の拠点であった渡辺津が周辺に存在したと考えられており、近世では豊臣氏大坂城期における城下町天満として、さらに大阪天満宮の門前町として発展した。

これまでに行われた周辺の調査では、TJ00-2次調査で古墳時代から江戸時代にいたる遺構や遺物が見つかり、中でも大量の貝類が出土した井戸など、鎌倉～室町時代の遺構が多数検出された。また、TJ94-4次調査では豊臣後期と17世紀中頃の遺構が、TJ01-1次調査やHX99-1次調査では古代の遺構や遺物が見つかった(図1)。

本調査に先立つ大阪市教育委員会の試掘調査では、現地表面下約190cmで大坂夏ノ陣によるとみられる焼土層が、さらにその下では中世の地層が確認されたことから、本調査を実施することとなった。本調査では事業者側による重機掘削に続き、7月9日から人力掘削を開始したが、大坂夏ノ陣の焼土層の分布は局部的であったため、直下の

整地層である第2層上面で豊臣期と徳川期の遺構を一括して検出した。その後、地山である第5層上面では中世に埋没したと考えられる小規模な谷を検出し、8月3日には調査を終了した。なお、本調査で使用した方位は図1が座標北、図2・5が磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図2～4)

第0層：現代盛土である。

第1層：オリーブ褐色シルト質極細粒砂からなり、焼土・炭化物・偽礫を多く含む。大坂夏ノ陣による焼土層とみられる。



図1 調査地位置図

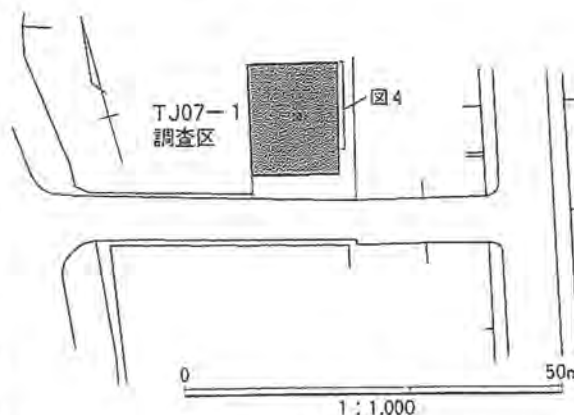


図2 調査区位置図

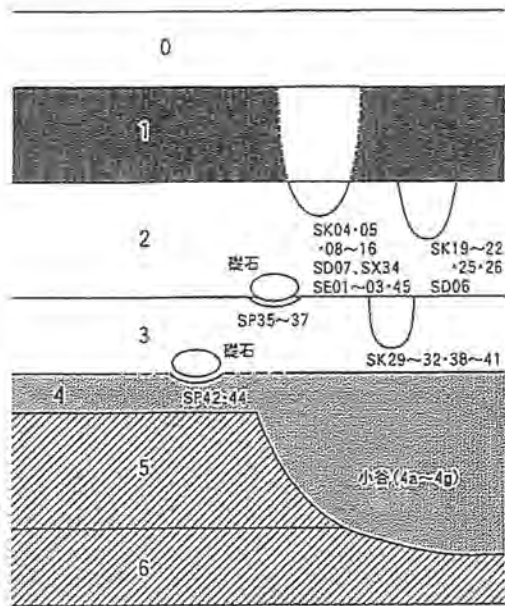


図3 地層と遺構の関係図

第2層：褐色シルト質極細粒砂を主体とする整地層で、焼土・炭化物を少量含む。本層上面では上位層に伴う徳川期の遺構と、豊臣期の遺構を一括して検出した。

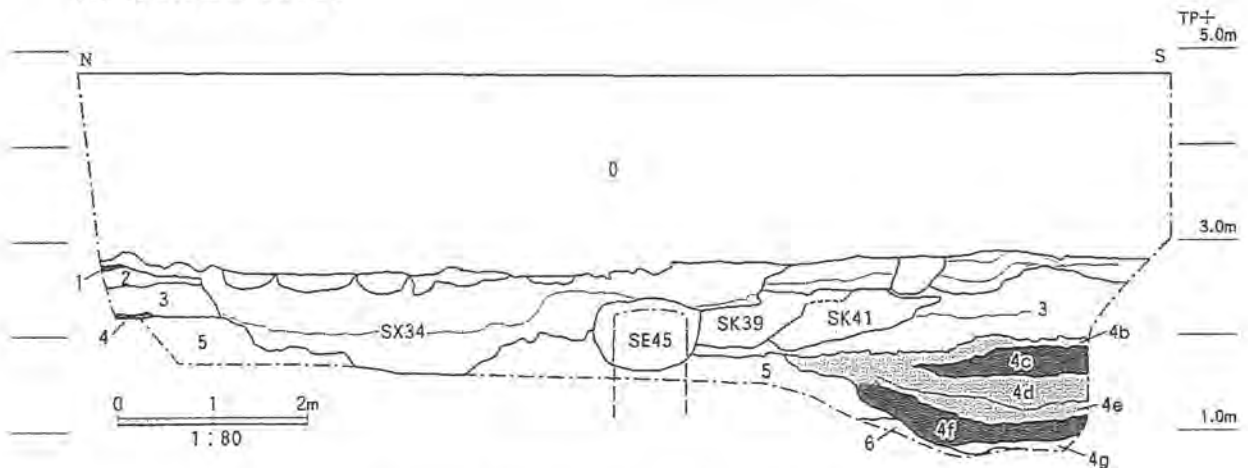
第3層：にぶい黄褐色シルト質極細～中粒砂を主体とする整地層である。焼土・炭化物を少量含む。本層上面では土城・礎石・ピットなどを検出した。

第4層：谷の内部を中心に分布する地層で、第4a～4g層に細分されが、谷の外部では収斂し、分布も局部的である。第4a～4f層は古土壌あるいはその二次堆積層と、淘汰がよく風成とみられる砂層の互層で、暗色化の程度に強弱がある。第4a層は暗オリーブ褐色細～中粒砂からなり、部分的に分布する。第4b層は暗褐色細～中粒砂からなり、小偽礫を含む。第4c層は黒褐色細～中粒砂から

なり、谷中央部ではさらに細分が可能である。第4d層は灰黄褐色細粒砂、第4e層はにぶい黄褐色細～中粒砂、第4f層は黒褐色細～中粒砂からなる。これらの地層のうち、第4a・4c・4e層は暗色化が強い。また、第4g層は褐色細～中粒砂からなり、地山層の再堆積層と考えられる。

第5層：浅黄色細粒砂からなる水成の地山層である。上方細粒化する。

第6層：にぶい黄色砂礫からなる水成の地山層である。淘汰が悪く、直径6 cm程度の礫を含む。トラフ型斜交ラミナ内のフォアセットラミナの傾きを観察した結果、東北東から西南西方向の流れにより堆積したとみられる。



- 第1層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒砂(焼土・炭化物・偽礫を多く含む焼土層)
- 第2層：褐色(10YR4/4)シルト質極細粒砂(焼土・炭化物を少量含む)
- 第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質極細～中粒砂(焼土・炭化物を少量含む)
- 第4a層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細～中粒砂(暗色化は強い)
- 第4b層：暗褐色(10YR3/3)細～中粒砂(小偽礫を含み、暗色化は弱い)
- 第4c層：黒褐色(10YR3/2)細～中粒砂(暗色化は強い)
- 第4d層：灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂(暗色化は弱い)
- 第4e層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細～中粒砂(暗色化は弱い)
- 第4f層：黒褐色(10YR3/2)細～中粒砂(暗色化は強い)
- 第4g層：褐色(10YR4/4)細～中粒砂
- 第5層：浅黄色(2.5Y7/4)細粒砂(上方細粒化する)
- 第6層：にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫(淘汰悪く、直径6 cm程度の礫を含む)

図4 東壁地層断面図

ii) 遺構と遺物(図3・5～8)

a. 第5層上面および第5層上位の第3層基底面

第5層上面では谷を、第5層上位の第3層基底面では礎石、ピット(SP42・44)を検出した。

小谷 調査区南部では東西方向に延びる小規模な谷(小谷)を検出した。小谷は幅3.5m以上、深さ1.2m程度ある。人為的に掘削された明瞭な痕跡は確認できなかったが、直下で観察された第5・6層のラミナがほぼ水平であることから、小谷は後世に形成されたもので、濠などの遺構である可能性もある。一方、小谷を埋める第4a～4f層は古土壤あるいはその二次堆積層と、風成層の互層とみられるが、後述する通り各層の出土遺物に大きな年代の隔たりはなく、14世紀頃に埋没した可能性が高い。

礎石、SP42・44 調査区北部では人頭大の礎石を検出した。また、その下では据える際に掘られた可能性がある浅いピットSP42・44を検出した。SP42・44は長径0.5m程度の楕円形を呈し、深さは0.07～0.18mある。

b. 第3層上面

第3層上面では土壙(SK29～32・38～41)、礎石、ピット(SP35～37)などを検出した。

SK29・31 調査区中央部で検出した土壙で、切合い関係からSK29の方が新しい。ともに大部分が攪乱を受けているが、SK29は深さが0.16mある。土師器、平瓦、釘とみられる鉄製品などが出土した。一方、SK31は長径が5m程度の楕円形を呈し、深さは0.7m程度ある。埋土は5層に細分され、土師器、東播系とみられる須恵器、瓦器、平瓦などが出土した。

SK30・32 調査区南部で検出した土壙である。SK30は直径0.7mの円形で、深さは0.3m程度ある。埋土にはおい黄褐色極細～細粒砂質シルトからなり、土師器、瀬戸美濃焼、平瓦、焼土塊などが出土した。SK32は北部が攪乱を受けているが、深さは0.7m程度あり、埋土は3層に細分される。土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、管状土錘18・24などが出土した。

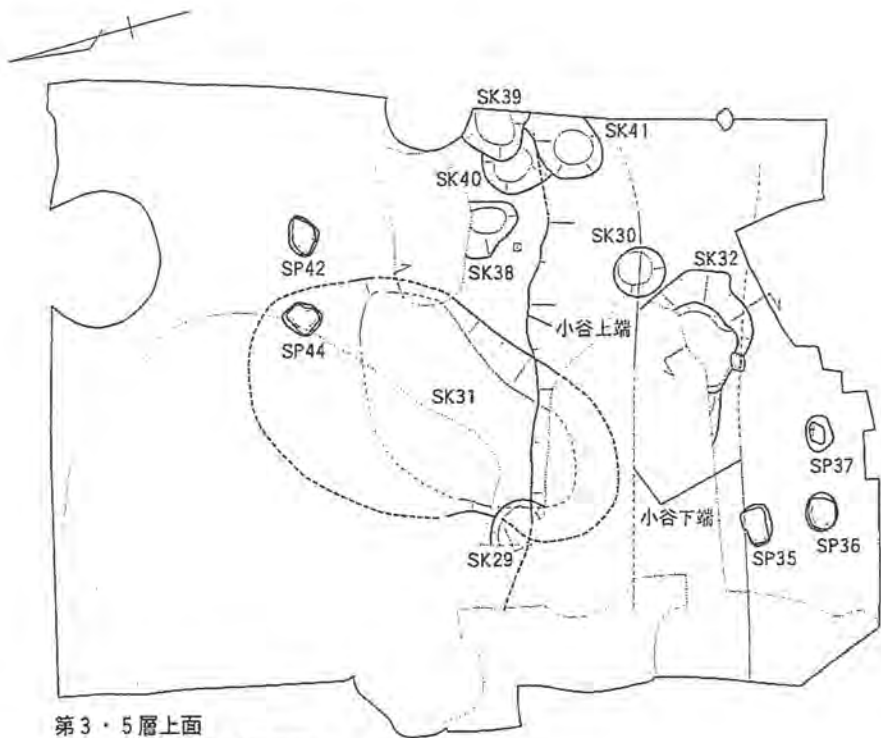
SK38～41 調査区東部で検出した土壙で、SK39～41は切合い関係からSK39がもっとも新しく、SK40がもっとも古い。深さは0.15～0.22mといずれも浅く、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、平瓦、釘とみられる鉄製品などが出土している。

礎石・SP35～37 調査区南部では人頭大の礎石を複数検出した。そのうち、南西部にある礎石の下では、据える際に掘られた可能性がある浅いピットSP35～37を検出した。SP35～37は長径0.5m程度の楕円形を呈し、深さは0.15～0.25mある。

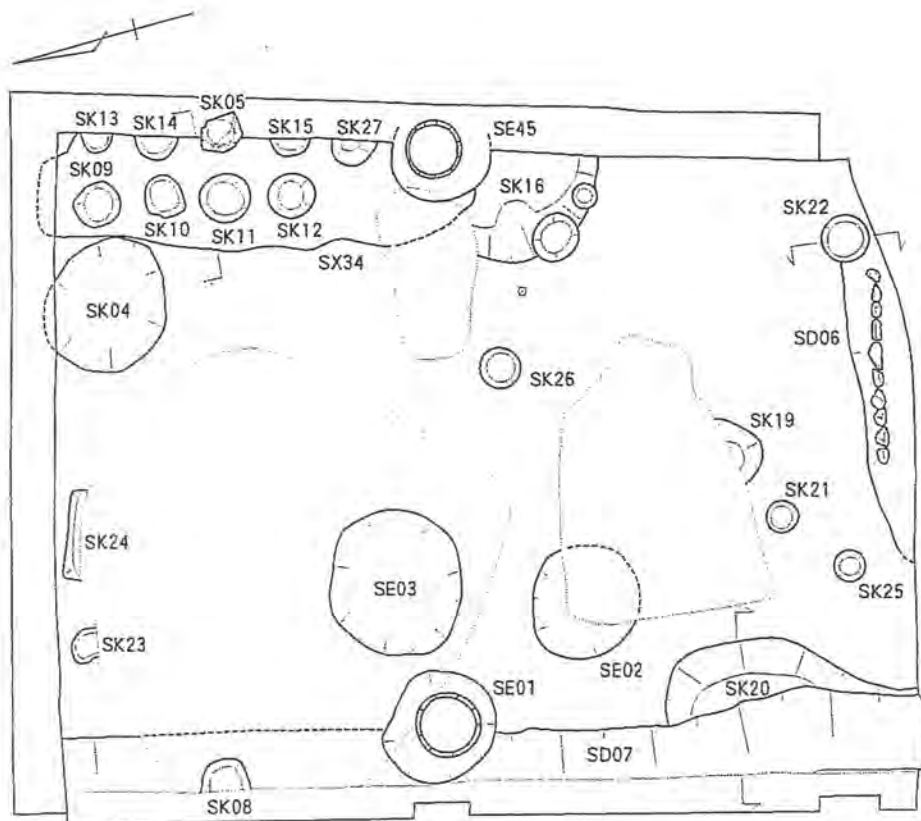
c. 第2層上面

第2層上面では豊臣後期の遺構と、上位層に伴う徳川期の遺構を一括して検出した。遺構には溝(SD06・07)、土壙ほか(SK04・05・08～16・19～26、SX34)、井戸(SE01～03・45)などがあるが、このうち出土遺物の年代などから徳川期の遺構と判断されたのは、SD07、SK04・05・08～16、SE01～03・45、SX34である。以下、主要な遺構について報告する。

SD06 調査区南端で検出した東西方向の溝である。幅0.7m以上、深さ0.3m程度で、埋土は暗灰黄色細～中粒砂からなる。肩付近で直径20～30cm程度の礫からなる石列が検出されたが、対になる南側の石列は確認されなかった。土師器、備前焼、瓦、貝類などが出土した。



第3・5層上面
第5層上位の第3層基底面



第2層上面

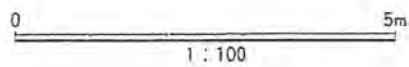


図5 遺構平面図

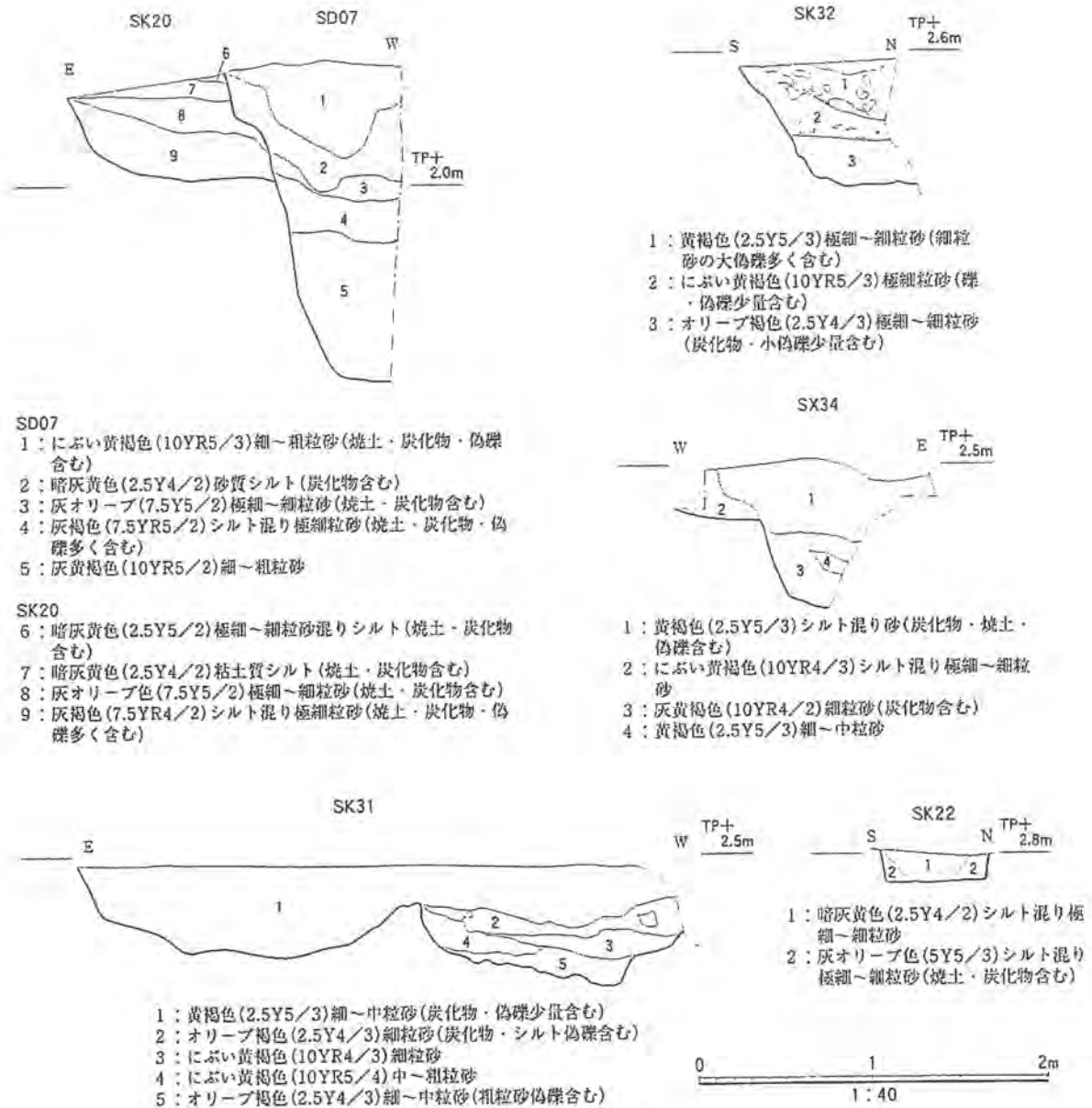


図6 遺構断面図

SD07 調査区西端で検出した南北方向の溝である。幅0.8m以上、深さ1.8mで、南端付近ではやや東に振れるか、あるいは幅が広がっている。埋土は5層に細分され、焼土・炭化物・偽礫を含む第1～4層は人為的な埋戻し土、にぶい黄褐色細～粗粒砂からなる第5層は機能時の堆積層である。SD07は規模が大きく、現在の敷地境にほぼ沿って延びており、屋敷境の溝である可能性がある。当遺構からは土師器、須恵器、瓦器、備前焼、丹波焼、堺播鉢、瀬戸美濃焼志野、肥前陶器および磁器、青花、連珠巴文軒丸瓦、土製品、小柄、貝類など多くの遺物が出土した。遺物には時期幅があるが、18世紀代の堺播鉢や肥前磁器染付を含んでおり、それらが溝の埋戻された年代を示していると考えられる。1は土師器皿、3は瀬戸美濃焼天目碗である。4は肥前陶器皿で、4箇所に胎土目がある。5は肥前陶器片口鉢である。7は草花文の青花皿で、高台端部には砂が付着している。8は高台内無釉の肥前磁器染付碗である。28は用途不明の土製品である。直径6.0cm、最大厚1.3cmで、中央に穿たれた円孔の直径は凸面側が0.7cm、水平面側が0.4cmある。同様の土製品が重機掘削後の清掃中に6点出土して

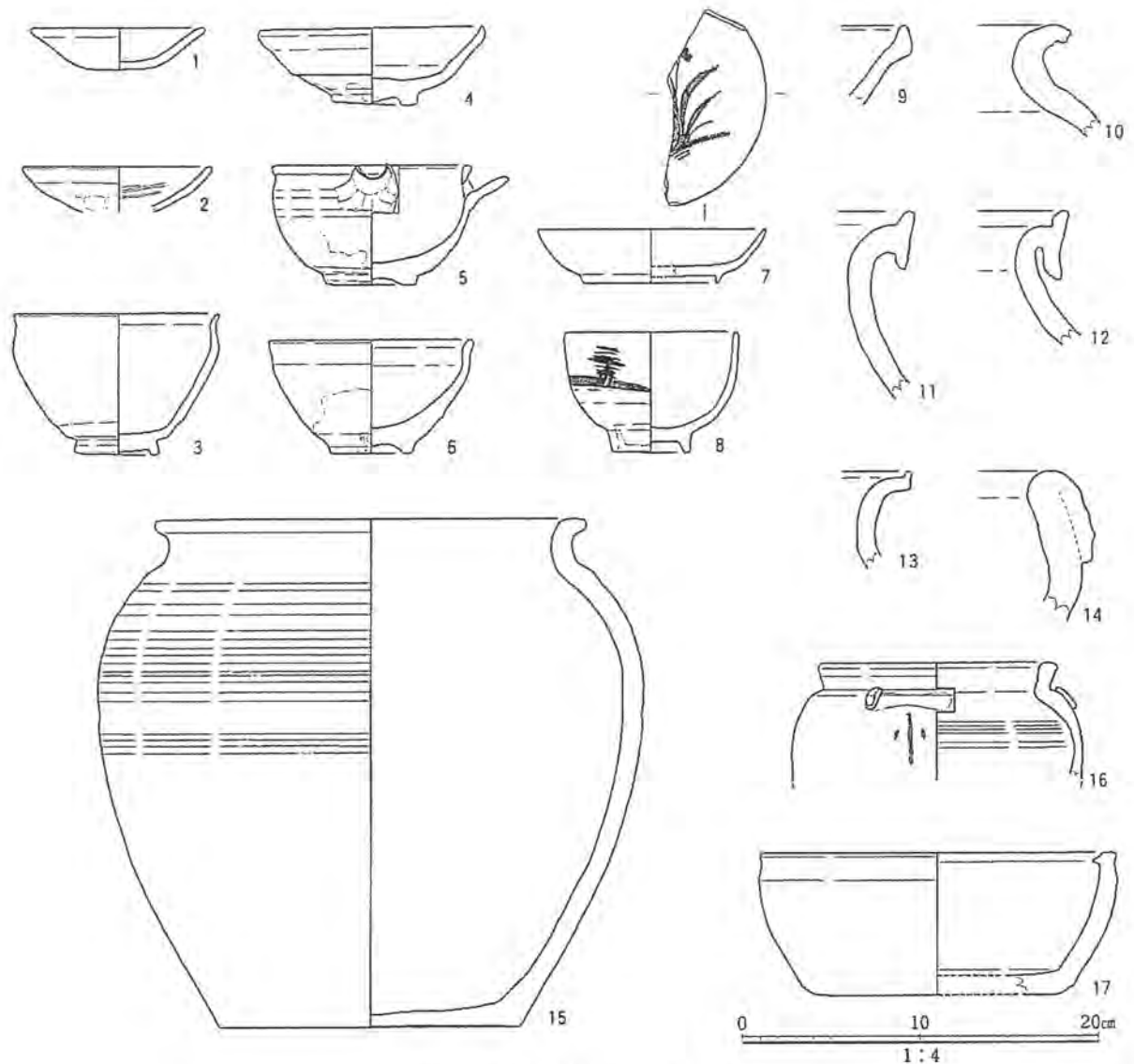


図7 遊構・包含層出土遺物(その1)

SD07(1・3～5・7・8)、SK05(15)、SK09(16・17)、SK15(14)、SK20(6)、
第4b層以下(11・12)、第4c層以下(13)、第4e層(2)、第4f層(9・10)

おり、土錘である可能性もある。

SK05・09～15・27、SX34 調査区北東部で検出した土壌群である。上部は削平されており、残りの良いものでも深さは0.2m程度である。SK05では備前焼大甕の底部が据えられた状態で検出されたほか、SK09・10・15からも備前焼大甕の破片が多数出土していることから、これらの土壌はいずれも埋甕遺構であったと考えられる。一方、SX34は長さが5.8m程度、幅1.5m以上、深さは0.8mあり、埋土は4層に細分される。SX34の範囲は土壌群の分布範囲と重なるが、土壌群よりもはるかに深く掘込まれていることから、埋甕を設置するための整地を目的とするものかどうかは不明である。

土壌群からは土師器、備前焼、丹波焼、信楽焼、青花、平瓦など、17世紀前葉のものと思われる遺物が出土している。SK05から出土した15は丹波焼甕である。体部上半の外面は回転ナデの痕跡が明瞭で、底部には砂が付着している。SK09から出土した17は信楽焼鉢とみられる。内面には自然釉が厚く掛かり、胎土には直径6mm以下の長石を多く含む。口縁端部は内面に肥厚しているが、水平な面

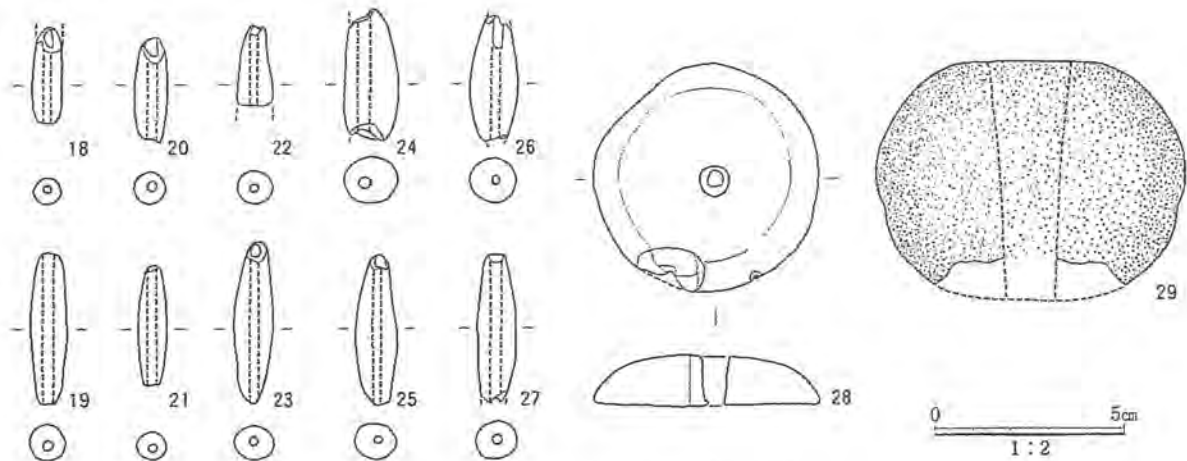


図8 遺構・包含層出土遺物(その2)

SK32(18・24)、第2層(22)、第3層(20)、第4a層(19・23)、第4a層以下(29)、
第4a～4b層(25)、第4c層(26)、第4e層(21)、重機掘削後清掃中(27)

をなす上端部は器面が平滑で、自然釉も認められないことから、本来はより上方に伸びていた口縁部が破損した後、研磨により現在の形状に加工された可能性がある。同じくSK09から出土した16は備前焼壺である。肩部には把手の剥がれた痕跡があり、その直下には「小」の字が刻まれている。SK15から出土した14は埋甕に使用されていたと考えられる備前焼大甕の口縁部である。一方、SX34からは土師器、瓦器、瓦質土器、肥前陶器、釘とみられる鉄製品などが出土している。

SK20 調査区西南部で検出した土壌で、切合い関係からSD07よりも古い。深さは0.6mあり、埋土は4層に細分される。本遺構から出土した6は肥前陶器天目碗で、豊臣後期のものであろう。

SK22 調査区東南部で検出した円形の土壌で、直径0.6m、深さは0.17mある。断面が台形で、壁面には木質が残存していることから、木桶が据えられていた可能性がある。埋土は2層に細分され、瓦質土器や丸・平瓦が出土した。

SE01～03・45 いずれも完掘できなかったが、調査区中央部で検出した井戸とみられる遺構である。SE01・45はいずれも井戸側に井戸瓦を用いている。そのうち、SE01はSD07との切合い関係から18世紀以降に形成されたもので、瀬戸美濃焼、丹波焼、肥前磁器染付や青磁、火打ち石などが出土した。また、「炭」という文字がモチーフに用いられた鬼瓦が出土しているが、『延享版難波丸綱目』を見る限りでは調査地のある天満丸・十丁目に炭間屋の記録はない。SE02は19世紀代の肥前磁器や瀬戸焼磁器とともに、土師器、種不明の銭、平瓦などが出土した。SE03は18世紀代の肥前磁器とともに、土師器、丹波焼、堺播鉢、肥前陶器、青花(景德鎮窯)、連珠巴文軒丸瓦などが出土している。

iii) 包含層出土の遺物(図7・8)

第2層からは土師器、土鈴、丸・平瓦、鉄製釘、貝類などとともに、管状土鍾22が出土した。

第3層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、備前焼、中国製青花(豊臣前期以前)や青磁、丸・平瓦、砥石、鉄製釘、魚骨などとともに、管状土鍾20が出土した。

第4a層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、瀬戸美濃焼、常滑焼、中国製青花・青磁・白磁(口

秃)、平瓦、土錘、火打ち石、種不明の銭などが出土した。19・23は第4a層、25は第4a～4b層から出土した管状土錘である。29は第4a層以下で出土した石錘とみられる石製品である。形状は偏球形で、直径は8.2cm、厚さ6.3cmに復元された。中央に穿たれた円孔の直径は1.3～2.2cmある。

第4b層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、中国製青磁、平瓦、釘とみられる鉄製品などが出土した。11・12は第4b層以下で出土した常滑焼甕である。ともに口縁端部は上下に肥厚しており、肩部と口縁部内面には自然釉が付着している。14世紀代のものである。

第4c層からは土師器、東播系とみられる須恵器、瓦器、瓦質土器、焼締陶器、土錘、釘とみられる鉄製品などが出土した。26は管状土錘である。13は第4c層以下で出土した丹波焼甕である。口縁端部が上方に肥厚しており、13世紀代のものとみられる。

第4d層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、ウマの下顎骨などが出土した。

第4e層からは土師器、須恵器、瓦器、土錘、ウマの大腿骨(L・R)や脛骨(R)などが出土した。2は瓦器椀で、14世紀前半のものであろう。21は管状土錘である。

第4f層からは土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、常滑焼、備前焼、中国製青磁、平瓦、釘とみられる鉄製品、ウマの下顎歯などが出土した。9は東播系の須恵器鉢である。谷底部付近から出土した10は瓦質土器甕で、体部の外面には横方向のタタキメがある。14世紀代のものであろう。

このほか、重機掘削後の清掃中に管状土錘27が出土した。他の資料と合わせると、本調査で出土した管状土錘は計10点にのぼる。管状土錘の孔の直径は18・21・22・23・25・26が2.0mm、19・20・27は2.5mm、24は3.0mmといずれも小さく、投網や刺網に用いられた[真鍋篤行1994]と考えられる。

3)まとめ

まず、徳川期に関する成果としては、埋甕群や規模の大きい溝が検出された。徳川期の諸絵地図を見る限り、調査区は道路と接しておらず、地割や屋敷地内の建物配置について検討するのは難しいが、調査区は北側に間口をもつ屋敷地の南半に当り、北部には埋甕の設置された蔵などの建物が、その南には井戸が配置されていた可能性がある。その場合、SD07が西側の、SD06や石列が南側の屋敷地との境であったとみることもできる。次に、豊臣期に関しては徳川期の遺構を同時に検出したため、不明な部分が少なくない。出土遺物から豊臣後期には町場の一部として開発が及んでいたと推測されるが、遺構の分布はまばらである。

一方、中世に関しては礎石や東西方向の小谷を検出した。また、多数が出土した土錘や石錘などの漁撈具は、渡辺津の周辺で、漁商が集住していたと考えられている天満鳴尾町にも隣接する、本調査地の立地環境をよく現しているといえよう。

引用・参考文献

真鍋篤行1994、「弥生時代以降の瀬戸内地方の漁業の発展に関する考古学的考察」：『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第7号、pp.21-93.

東・南壁断面と小谷
(北西から)



第3層上面
(西から)



第2層上面
(北から)



天満本願寺跡発掘調査(TN07-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満1丁目14-2・14-4・14-8
調査面積 66㎡
調査期間 平成19年5月7日～5月18日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は天満本願寺跡に比定される位置に当る。天満本願寺は天正13(1585)年に泉州貝塚にあった本願寺に対して羽柴秀吉が天満の地に寺地を与えたことにより創建された。その後、天正19年(1591)に京都に移転するまで当地で栄えた。天満本願寺に係る調査はこれまでに独立行政法人造幣局構内において実施されている(図1)。その結果については、『天満本願寺跡発掘調査報告』I～V等において報告されている。

今回表記の地で建設計画が起これ、それに伴い大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、豊臣期～徳川初期と考えられる搬入層が検出されたことにより本調査を実施した。

調査の方法は、掘削残土は敷地内に仮置きし、調査終了後に埋戻すこととした。また、後述する江戸後期以降の整地層である第1層までを重機で掘削し、第2層以下は人力で掘削・調査を行った。

また、第5層以下については残土置き場や調査期間等の関係から、トレンチ調査を実施した。

なお、本報告で用いた方位は磁北・座標北で、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇mと記した。

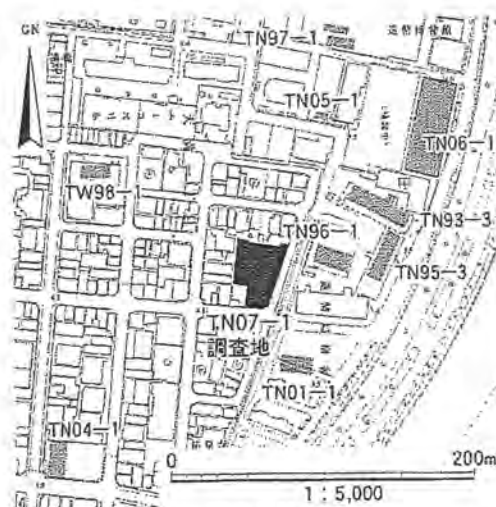


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

第0層：近代以降の盛土層である。

第1層：暗オリーブ褐色の細粒砂質シルトの盛土層である。層厚は最大で60cmある。重機で掘削したため、正確な時期は不明であるが、江戸後期から幕末ころの整地層である。

第2層：明黄褐色中粒砂層である。層厚は90～140cmの盛土層である。調査はこの上面から行った。江戸時代に一気に整地された層である。

第3a・b層：褐色細粒砂質シルト層で、一部に焼土・焼壁を含む。層厚は最大40cmであった。上部の第3a層は作土層であった可能性があり、上部数cmはにぶい黄褐色から灰色を呈した。大坂冬ノ陣

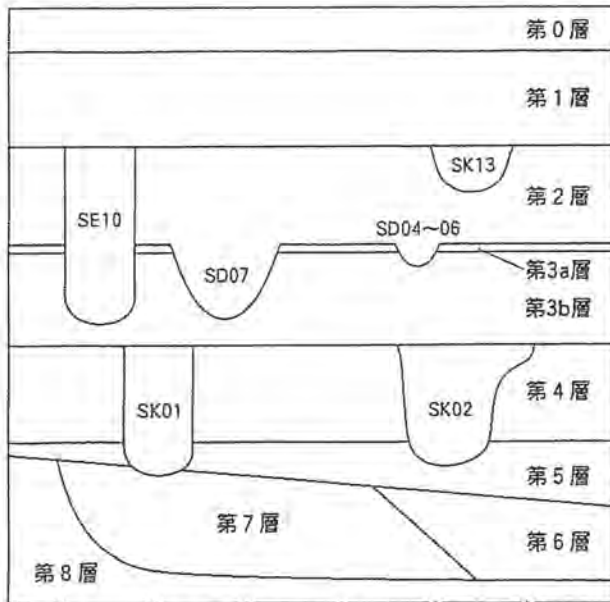


図3 地層と遺構の関係図

後の盛土層と思われる。

第4層：にぶい黄褐色シルトからなる盛土層であり、層厚は約30cmであった。

第5層：灰色シルトの盛土層で、層厚は約20~30cmあった。この層以下はトレンチ調査で確認した。北から南に向かって厚く堆積しているが、さらに調査区南縁から南では薄くなり、かつ分布高度を上げている。調査最終日に重機でこの層を掘削したところ、最大層厚部付近に40~60cm大の巨礫を多数検出した。

第6層：かなり暗いオリブ灰色粘土層で、上述の段の際にあった溝状の凹地の埋土層である。層厚は20~30cmであった。

第7層：暗オリブ灰色粘土からなる盛土層で、層厚は最大50cmである。第6層の北側に土手状に分布した。

第8層：灰黄色中粒砂からなる自然堆積層である。層厚は100cm以上で、分布高所でわずかに土壌化を受けた状況が認められる。

ii) 遺構とその遺物

第7層上面の遺構

調査区南壁付近に認められた東南東-西北西方向の溝状の凹地と、これに並行するとみられ調査区

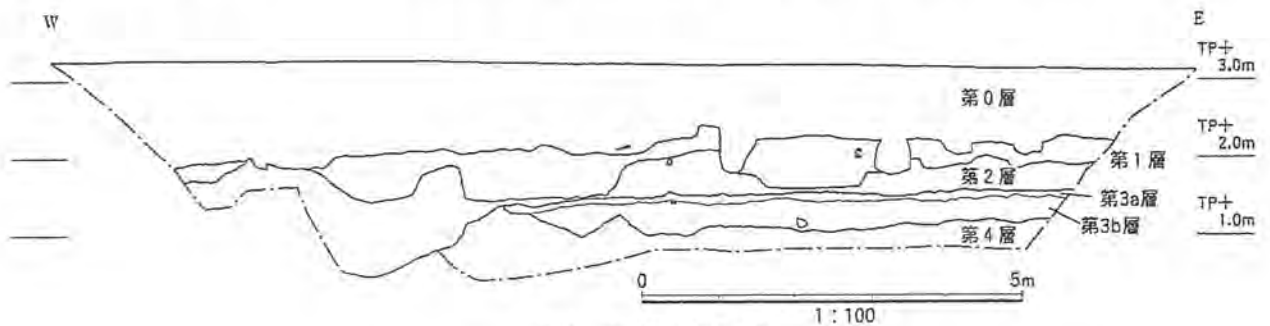


図4 北壁地層断面図

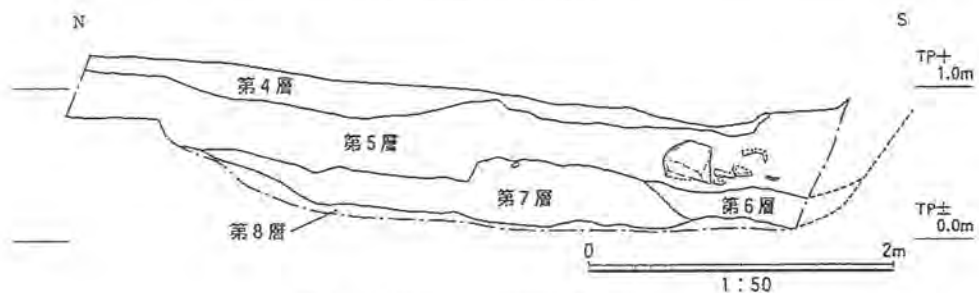


図5 中央トレンチ東壁地層断面図

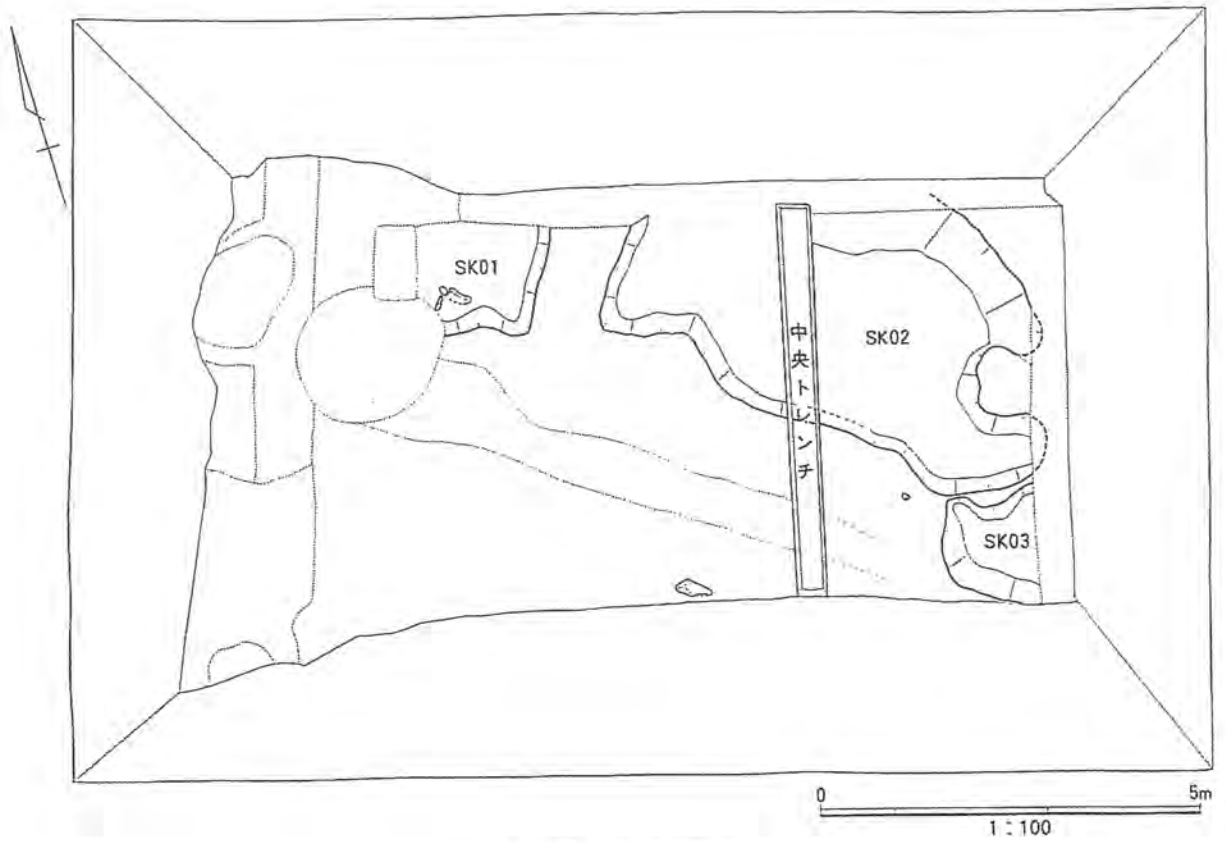


図6 第4層上面遺構平面図

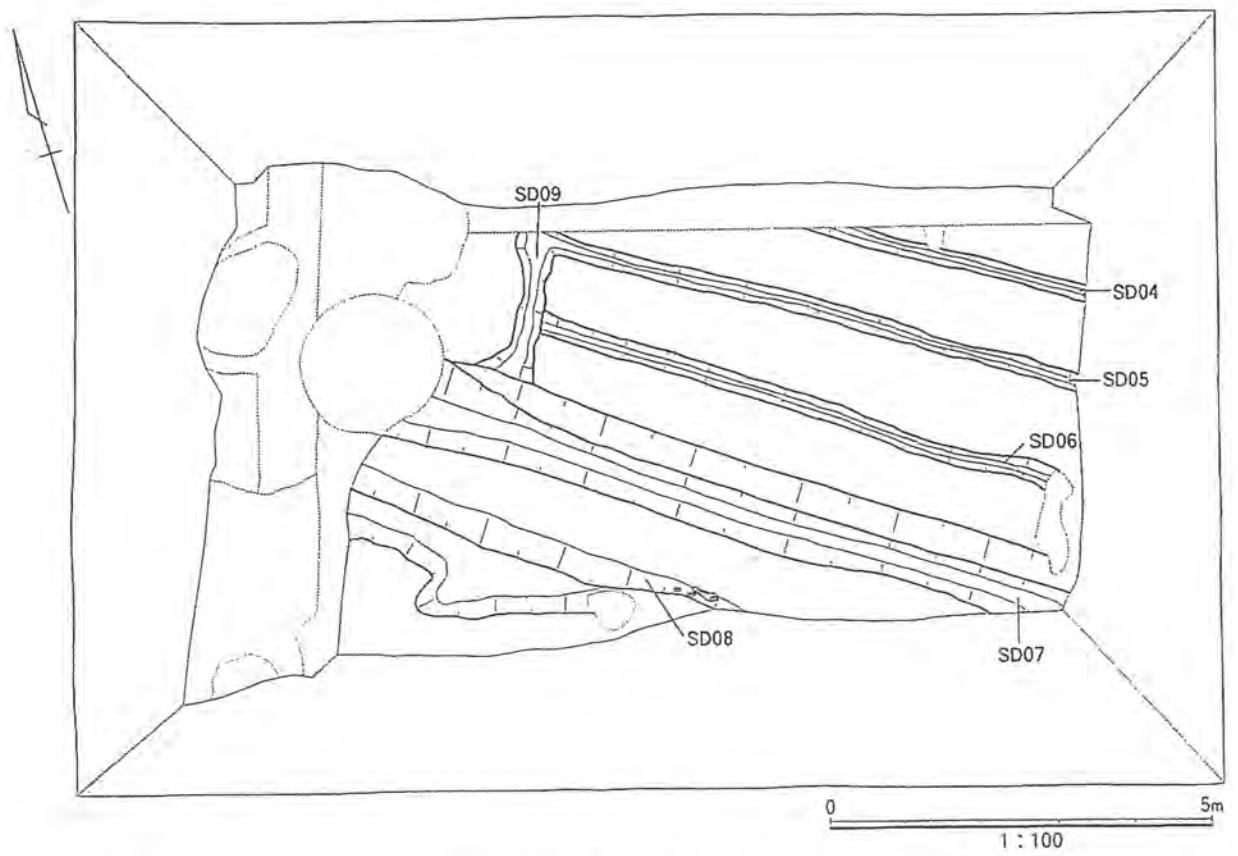


図7 第3層上面遺構平面図

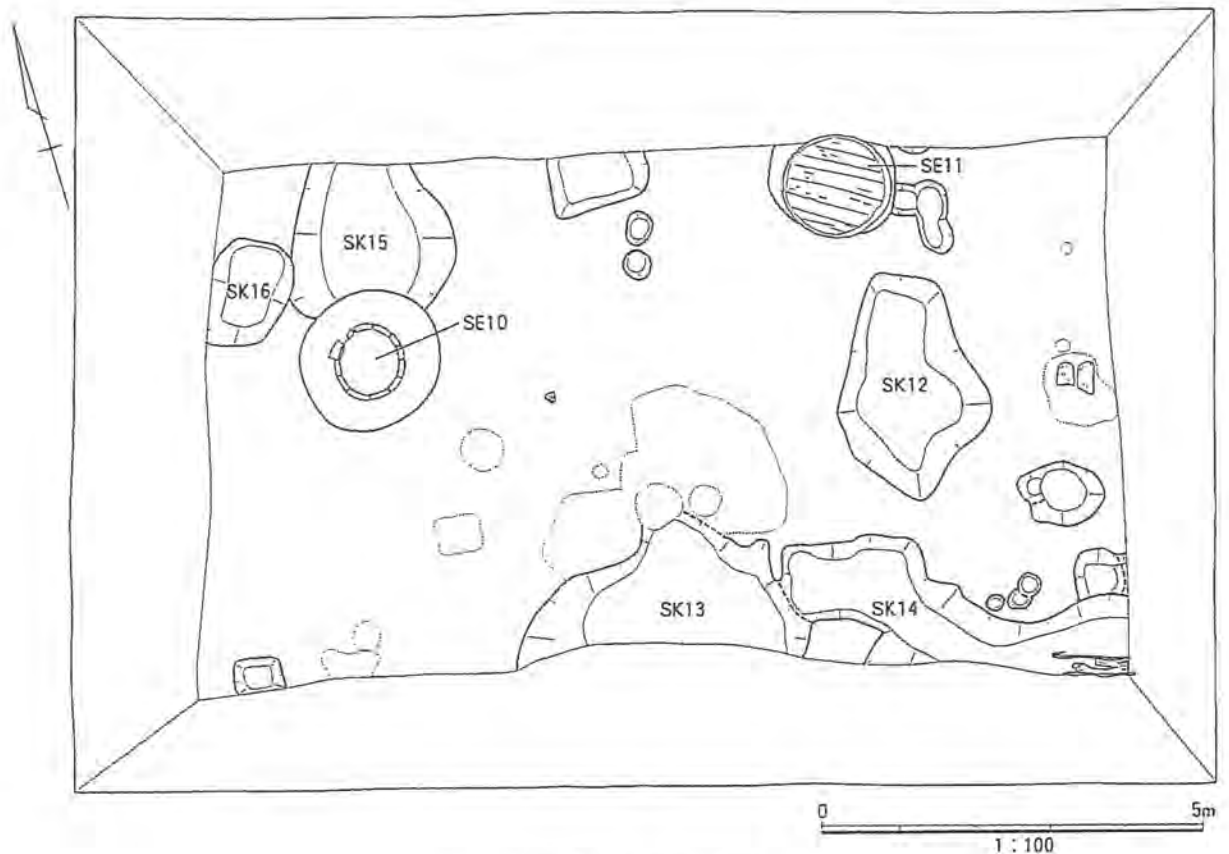


図8 第2層上面遺構平面図

南側に推定される段である。溝状の凹地を埋める第5層には多数の巨礫が分布したが、これらの礫は、東北東から西南西方向に存在し、南側に推定される段の上から落とされたか、投げ入れられた状況であった。その方向は後述するSD07と等しく、当地において東北東から西南西方向の区画が存続したことがうかがえる。

ところで、調査地の東側道路は北北東—南南西に走り、江戸時代の堤の跡ではないかと推定されている[大阪市文化財協会1998b]。本遺跡におけるこれまでの調査では、推定堤跡に直行する東南東—西北西方向の屋敷境は、大川のある東側で確認されていたが、今回の溝状の凹みと段は、推定堤の西側にも同方向の区画が存在した可能性を示唆するものであり、これらが屋敷境であった可能性がある。

第4層上面遺構と遺物(図6・9)

SK01 北西部で検出した土壙で、東西1.5m以上、南北1.5m以上の規模のものである。深さは約0.5mである。出土遺物には瀬戸美濃焼皿2、巴文軒丸瓦3、中心飾3葉の唐草文軒平瓦4がある。

SK02 東部で検出した不整形な土壙で東西6.0m以上、南北3.5m以上を測る。深さは最大約0.4mである。埋土中から李朝白磁5、瀬戸美濃焼皿6、肥前陶器皿7・8、瀬戸美濃焼志野輪花皿9、肥前陶器碗10・11、備前焼播鉢12、唐草文軒平瓦13が出土した。

SK03 南東部で検出した土壙で、SK02にほぼ接する。東西1.2m以上、南北1.2m以上の規模で、深さは約0.1m程度の浅いものである。埋土中から肥前陶器皿14が出土した。

以上の3基の土壙は、オリーブ褐色細粒砂質シルトで埋められていた。SK01～03の時期は豊臣後

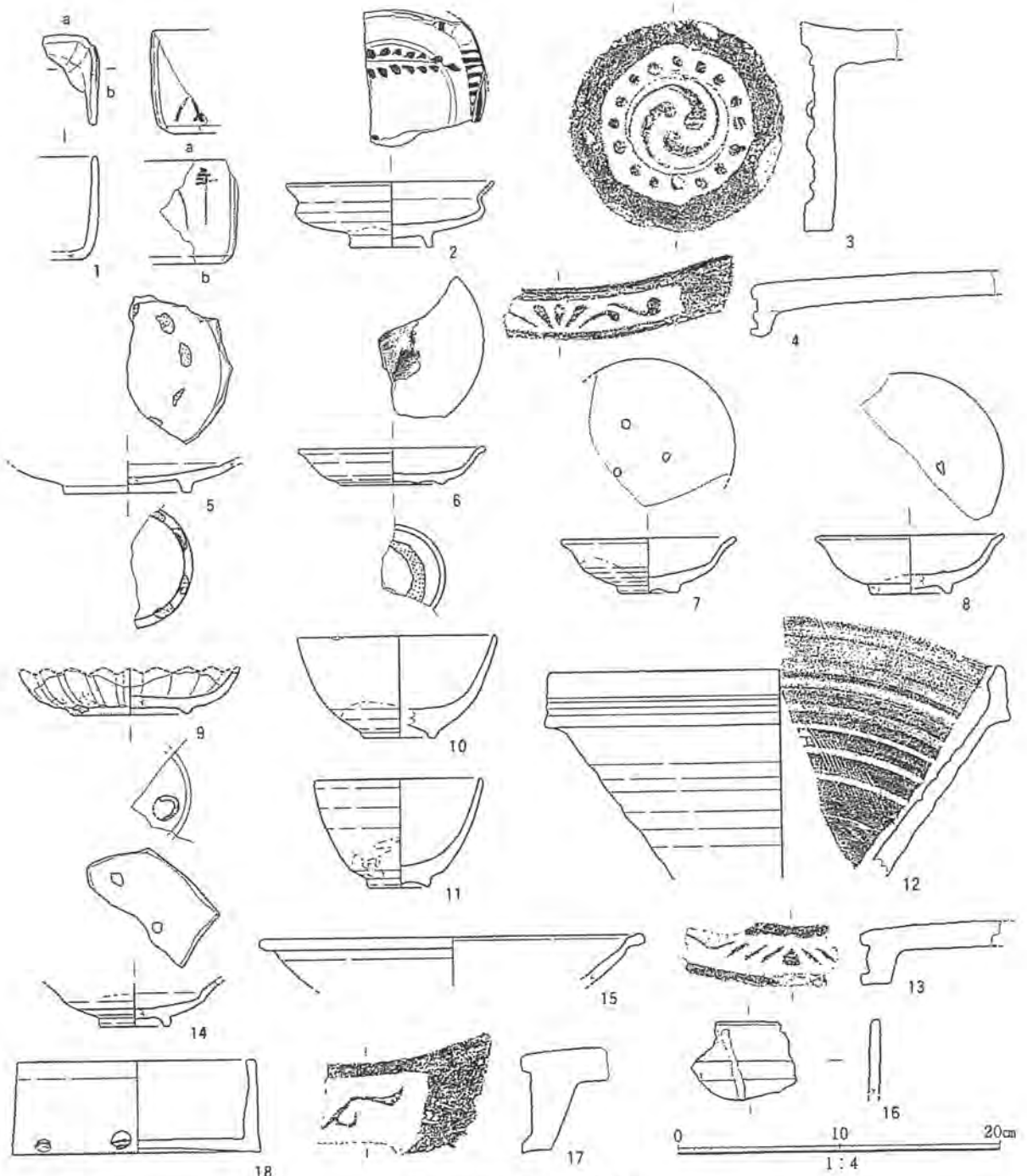


図9 出土遺物実測図(1)

第5層(1)、SK01(2~4)、SK02(5~13)、SK03(14)、第4層(15~17)、SE10(18)

期と思われる。

第3層上面遺構(図7)

この層の上面からは、北東から南西方向の溝5条とそれに直行する方向の溝1条を検出した。

SD04~06 はほぼ同規模の溝で、幅0.3m前後、深さは0.05~0.10mを測り、断面はU字形を呈するものである。SD05・06の西端は後述するSD09より西側には延びない。

SD07 幅1.0m、深さ約0.7mとSD04~06に比べて大型の溝である。北側は2段に落込み、断面は

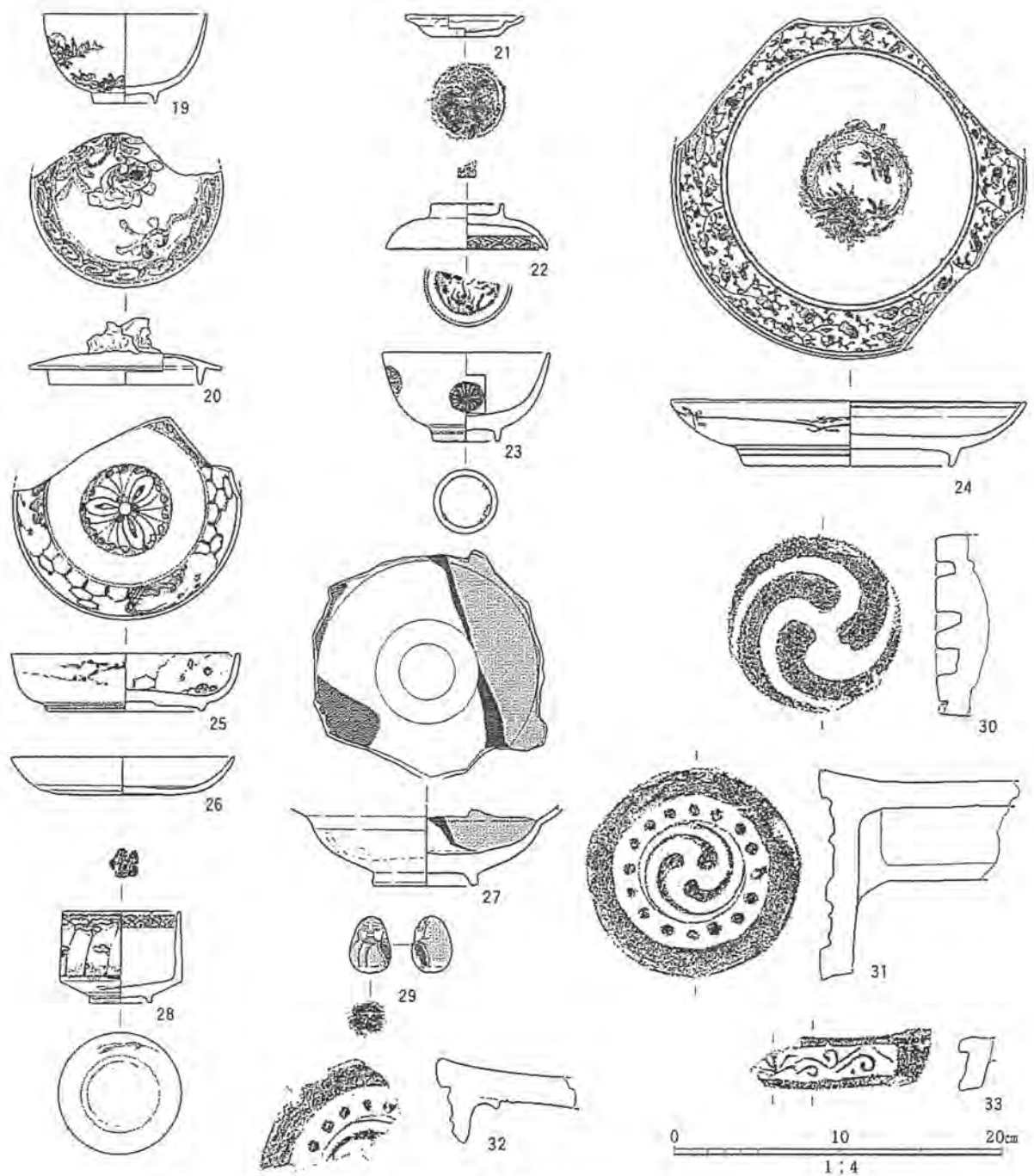


図10 出土遺物実測図(2)

SK13(19・20・30)、SK15(21~27・31~32)、SK16(28・29・33)

U字形を呈する。

SD08 南部で検出したやや不整形な溝であるが、基本的には他の溝と同様な方向をもつ。幅1.0~1.5mで深さは約0.2mである。

SD09 西北部で検出した溝で、上記の溝群に対して直交する方向である。幅約0.3mで深さは約0.1mである。

SD04~09は第2層の砂によって埋積されていた。これらの溝は耕作に伴う排水溝、畝間溝でその時期は徳川前期頃であろう。

第2層上面遺構と遺物(図8～10)

第2層から検出した遺構のうち主なものを以下に記述する。

SE10 西端付近で検出したいわゆる井戸瓦で井戸側を設けた井戸である。瓦11枚で井戸側を構築し、その直径は1.0mで、掘形は直径約1.9mである。深さについては1.5mまで掘削を行ったが、それ以下は未確認である。褐色の細粒砂で埋められていた。埋土から丹波焼鉢18が出土した。この井戸の構築時期は井戸瓦から江戸時代後期と考えられる。

SE11 北東部で検出した遺構で、木製の桶のものと思われるの底板を検出した。直径は約1.4mである。側面の木質は腐朽して判然としなかった。ここでは井戸としたが、水溜め用途を持つものとも考えられる。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。埋土中の遺物がなく、その時期は確定しがたいが、江戸時代の範疇でおさまるものであろう。

SK13 南部で検出した不整形な土塋で、東西約3.4mで、南北約1.9m以上で深さは約0.5mである。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。埋土中から肥前磁器碗19、関西系陶器蓋20、巴文の経の巻の一部である30が出土した。19は外面にコンニャク印判で文様を施す。この土塋は18世紀後半以降の時期があたえられる。

SK15 北東部で検出した土塋で、SE10とSK16に切られる。東西1.9m、南北1.8m以上で深さは約0.6mである。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。埋土中から肥前磁器の青磁染付蓋22、碗23、大皿24、蛇の目凹型高台皿25、肥前陶器で内面は銅緑釉と鉄釉を掛け分け、内底面を蛇の目釉剥ぎした皿27、軟質施釉陶器の灯明具21、土師器皿26、巴文軒丸瓦31・32が出土した。これらの遺物からこの土塋は18世紀後半のものと思われる。

SK16 北西部で検出した土塋で、東西1.0m以上で、南北約1.3mで、深さは約0.3mである。埋土は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトである。埋土中から肥前磁器筒形碗28、磁器ミニチュア玩具29、巴文軒平瓦33が出土した。これらの中で28の18世紀後半がこの土塋の時期を示すものであろう。

iii)各層出土遺物

第5層出土遺物

瀬戸美濃志野向付1が出土した。方形を呈するもので外面に鉄釉で文様を描く。

第4層出土遺物

肥前陶器皿15、瀬戸美濃焼碗16、巴文軒平瓦17が出土した。陶器類は小片が多く、図示しうるものは以上であった。

3)まとめ

今回の調査では確実に天満本願寺に伴う遺構は検出することができなかった。

ただ、今回の調査では江戸時代の一括の盛土層(第2層)や大坂冬ノ陣後の盛土層(第3層)が確認された。これらは、今後周辺での調査において基準となる層である。また、第3層上面で耕作に伴う溝群が検出され、その上を砂層(第2層)で一気に盛土していることは、当地における大坂冬ノ陣後の土

地利用の状況を示しているものである。

今回は、調査地における土置き場等の関係で、第4層以下の調査について面的に広く行えなかったが、天満本願寺期の東南東—西北西方向の屋敷境が堤の西側にも広がっていた可能性を指摘することができた。今後の調査に対しての期待は深まるものである。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会1995、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅰ
- 大阪市文化財協会1997、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 大阪市文化財協会1998a、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 大阪市文化財協会1998b、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 大阪市文化財協会2003、『天満本願寺跡発掘調査報告』Ⅴ

第4層上面の遺構
(西から)



第3層上面の遺構
(西から)



第2層上面の遺構
(西から)



天満本願寺跡発掘調査(TN07-2)報告書

調査個所 大阪市北区天満1丁目3-11
調査面積 154m²
調査期間 平成19年7月24日～8月9日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、松本啓子

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大阪城の北西、大川(旧淀川)を挟んで対岸に位置し、大川が大きく蛇行して南から西へと流れを変える地点の川の西側にある(図1)。

この付近には『日本書紀』仁徳11年条の「難波堀江」や、東大寺領新羅江荘など、古代の重要な施設の比定地があり、また、本調査地の北東約300mに位置する独立行政法人造幣局の構内を中心に、調査地一帯は豊臣期の天満本願寺の推定地とされ、江戸時代は大坂三郷の「天満組」として天下の台所の一端を担って栄えた場所でもあった。

造幣局構内では7度にわたる発掘調査が行われ、中世～近世の遺構が見つかった(TN93-3・

95-3・96-1・97-1・01-1・05-1・06-1次調査)。これらの中に天満本願寺を直接的に示す資料はないものの、同時期の石垣や建物群が検出された。また、江戸時代の城下町の遺構や遺物も見つかっており、ここにあった大坂町奉行所与力屋敷のようすを窺い知ることのできる資料などが出土している[大阪市文化財協会1995・1997・1998a・1998b・2003、南秀雄1994・1996、積山洋1997、豆谷浩之1997・1998、松尾信裕2007]。

本調査地の北約50mのTN04-1次調査では、中世末～近世の遺構のみならず、古墳時代中期

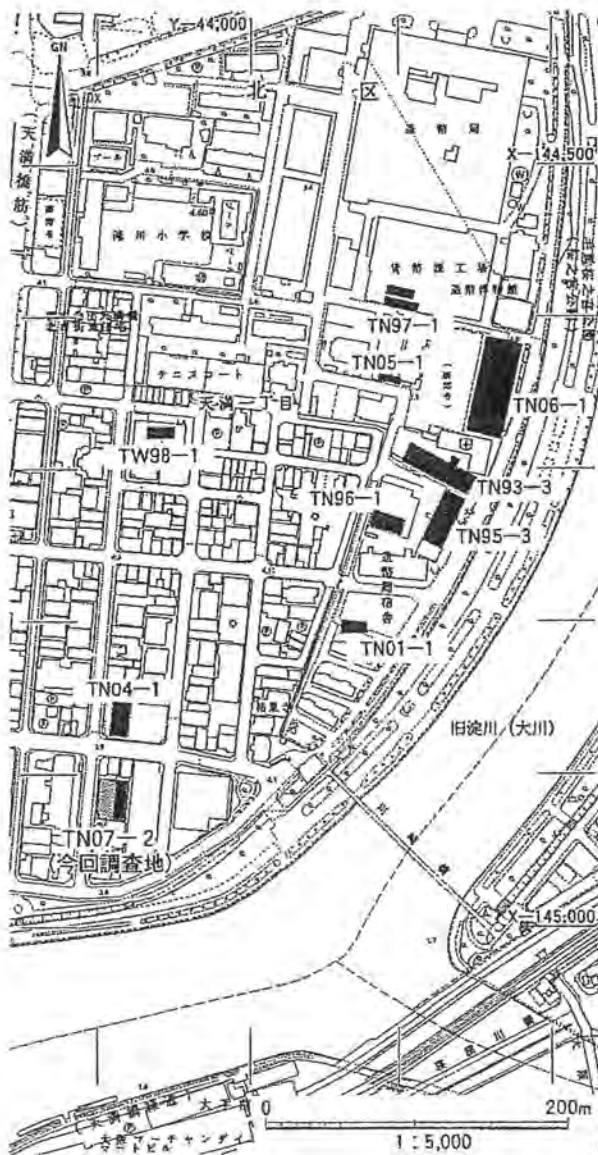


図1 周辺の調査地

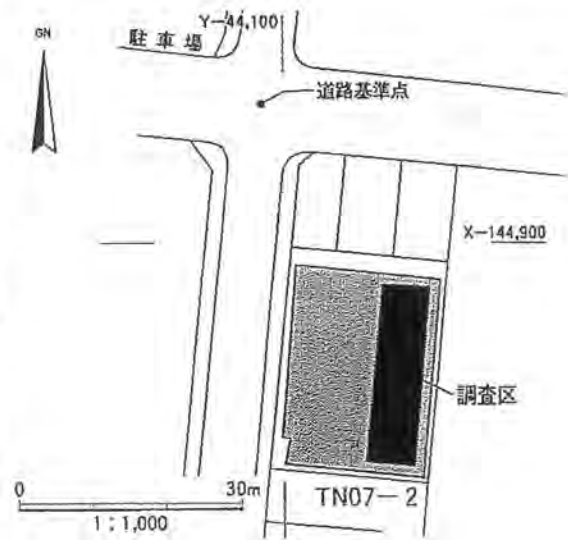


図2 調査区配置図

の竪穴建物や、平安～室町時代の遺構・遺物も検出され、出土品としては極めて珍しい13世紀の高麗象嵌青磁梅瓶の破片も見つかっている[市川創2004、小田木富慈美2004]。

工事に先立って行った大阪市教育委員会の試掘調査により、地下約1.8mで中世～近世初期の整地層と、地下約2.2～2.4mで古墳時代から古代の遺物包含層が確認された。そこで関係諸機関との協議を経て、地層の年代や遺構・遺物の分布状況などを明らかにすること、天満本願寺や城下町の手掛かりを探ること、およびそれ以前の土地利用の状況など、歴史的変遷を復元するための情報を得ることを目的として、本調査を行うことになった。

調査は2007年7月13日より大阪市教育委員会立会いのもと、事業者によって敷地全体を地下約2.2mまで重機で掘削し、敷地東半に東西約6.5m、南北約23.5mの調査区を設定した(図2)。

その後、平成19年7月24日から大阪市文化財協会によって地山層の上面までを人力で調査した。近世の整地層、古墳時代～古代の遺物包含層、および各層の上面・層中・下面・基底面の遺構を慎重に観察・確認しながら、随時、図面・写真等の記録を取り、地山上面まで掘り進めた。平成19年8月9日にすべての調査を完了した。

なお、本調査で使用した水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中ではTP+〇mと記している。また、示北記号は図1については座標北であるが、他は調査地周辺の送電線等の影響を受けて現地で正確に磁北を計測できなかったため、図1をもとに座標値を当てはめている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである。

第0層：重機により除去した18世紀から現代までの地層である。

第1層：豊臣後期の人為的な盛土層で、大きく2回の整地作業が確認できる。中央以西に盛られた暗灰褐色砂・礫混り粘土質シルト主体の整地層(第1-2層)と、東端の第1-2層や第2層を掘下げて灰黄褐色の砂や砂・礫混り粘土質シルトを交互に盛った第1-1層である。第1-2層には炭や焼土が混る。第1-1・1-2層とも現状で上面の標高はTP+1.4mで、削平を受けているため明確な生活面は確認できなかった。層厚は最も厚いところで第1-1層が90cm以上、第1-2層が40cmある。

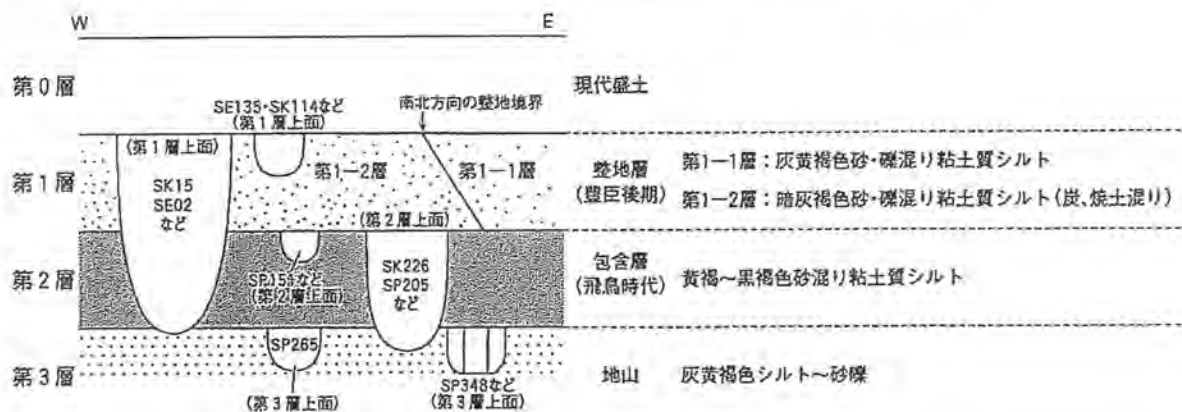
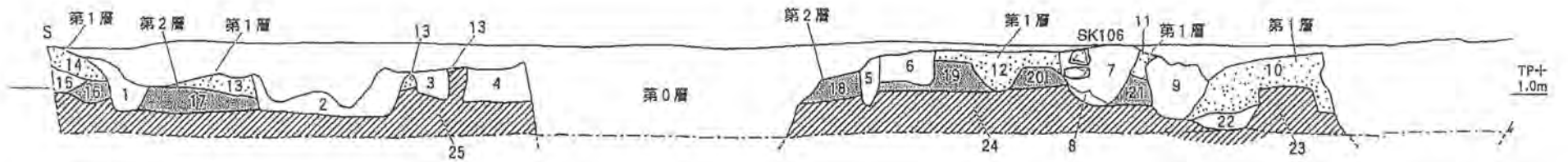


図3 地層と遺構の関係図

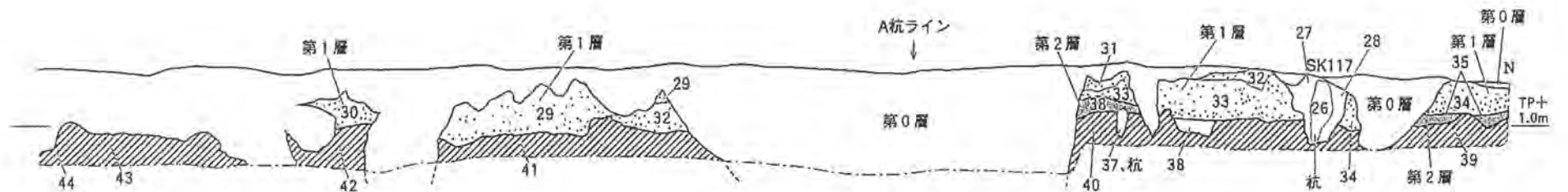


- 1: にぶい黄褐色(10YR4/3)砂混り粘土質シルト
- 2: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂・礫混りシルト
- 3: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混りシルト
- 4: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂・礫混りシルト
- 5: 灰オリーブ色(5Y5/2)砂混り粘土質シルト(杭)
- 6: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト混り砂礫
- 7: オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂混りシルト質粘土
- 8: 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂混り粘土質シルト(炭)
- 9: 明黄褐色(10YR6/6)砂混りシルト質粘土
- 10: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混りシルト(第1層)
- 11: にぶい黄褐色(10YR4/3)砂混り粘土質シルト(第1層)
- 12: 灰オリーブ色(5Y5/3)砂・礫混りシルト～粘土質シルト(第1層)
- 13: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混りシルト(第1層)

- 14: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂・礫混りシルト(第1層)
- 15: 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂・礫混り粘土質シルト
- 16: にぶい黄褐色(10YR4/3)砂・礫混りシルト(第2層)
- 17: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂・礫混りシルト(第2層)
- 18: 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト混り砂礫(第2層)
- 19: 黄褐色(2.5Y5/3)シルト混り砂礫(第2層)
- 20: 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト混り砂礫(第2層)
- 21: にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト混り砂礫(第2層)
- 22: オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂混りシルト
- 23: にぶい黄色(2.5Y6/3)砂礫(地山)
- 24: オリーブ黄色(5Y6/3)砂礫(地山)
- 25: オリーブ黄色(5Y6/3)巨礫～粗砂(地山)

0.0m

-37-



- 26: 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト
- 27: 黒褐色(10YR3/2)砂混りシルト
- 28: 黒褐色(10YR2/2)砂混りシルト
- 29: 灰黄褐色(10YR4/2)砂・礫混り粘土質シルト(第1層)
- 30: 黒褐色(10YR3/2)砂・礫混り粘土質シルト(第1層)
- 31: 黄褐色(2.5Y5/4)砂混り粘土質シルト(第1層)
- 32: 黄褐色(2.5Y5/3)砂・礫混り粘土質シルト(第1層)
- 33: 黒褐色(10YR3/2)砂・礫混りシルト(第1層)
- 34: 黒褐色(10YR3/2)砂・礫混りシルト(第1層)
- 35: 黒褐色(10YR3/2)砂混り粘土質シルト(マンガンを含む。第2層)

- 36: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混り粘土質シルト(第2層)
- 37: 灰黄褐色(10YR4/2)砂混りシルト
- 38: 灰黄褐色(10YR5/2)砂・礫混りシルト
- 39: にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト～砂礫(地山)
- 40: 灰黄褐色(10YR4/2)砂礫(地山)
- 41: 暗灰黄色(2.5Y4/2)礫混り砂(地山)
- 42: 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫(地山。下部に巨礫)
- 43: 灰黄色(2.5Y6/2)砂礫(地山)
- 44: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂～礫(地山)

0.0m

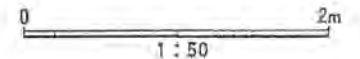
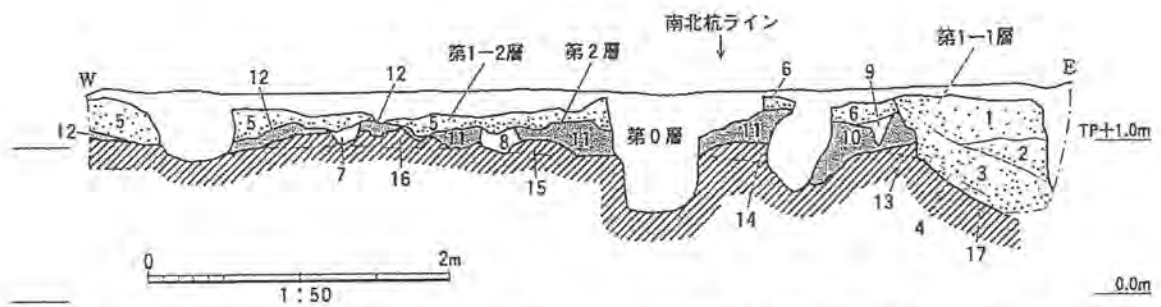


図4 西壁断面実測図



- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1: 灰黄褐色(10YR4.5/2)巨礫~砂(第1層) | 10: 灰黄褐色(10YR4/2)砂混りシルト(第2層) |
| 2: 灰黄褐色(10YR4.5/2)砂・礫混り粘土質シルト(第1層) | 11: 灰黄褐色(10YR4/2)砂・礫混りシルト(第2層) |
| 3: 黄褐色(2.5Y5/4)砂礫(第1層) | 12: 黒褐色(10YR3/2)砂混り粘土質シルト(マンガンを含む。第2層) |
| 4: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混り粘土質シルト(第1層) | 13: オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混り砂(地山) |
| 5: 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混り粘土質シルト(第1層) | 14: 黄褐色(2.5Y5/3)砂礫~砂混りシルト(地山) |
| 6: 灰黄褐色(10YR5/2)砂・礫混り粘土質シルト(第1層) | 15: 黄褐色(2.5Y5/3)砂混りシルト(地山) |
| 7: 灰黄褐色(10YR4/2)砂・礫混り粘土質シルト(マンガンを含む) | 16: 灰黄褐色(10YR4/2)礫混り砂(地山) |
| 8: 灰黄褐色(10YR4/2)砂混りシルト質粘土 | 17: 暗灰黄色(2.5Y5/2)細~粗砂(地山) |
| 9: 灰黄褐色(10YR4/2)砂・礫混りシルト | |

図5 北壁断面実測図

本層の上面では、18世紀代の遺構と、17世紀前半~中葉(江戸時代初期)および16世紀末~17世紀初頭(豊臣後期)の本層上面の遺構が検出された。18世紀代の遺構には遺構記号のアルファベットの後に2桁の数字を、また本層上面の遺構には100番代の数字を付して遺構名を示している。近代以降の遺物が入るものは攪乱として扱った。

第2層: 黄褐~黒褐色砂混り粘土質シルトの遺物包含層である。層厚は厚いところで25cmほどあるが、調査区の中央部は削平されてほとんど残っていなかった。本層上面の最高所はTP+1.3m、第3層との境は比較的平坦で、TP+1.0~1.1mである。調査区北半と南半では本層は若干層相が異なっている。北半は黒褐色を呈し、細粒砂が比較的多く混るが、南半は黄褐色で粗粒砂が多く混る。古墳時代中期~飛鳥時代の遺物を含む。

本層上面で6世紀末~7世紀前半の飛鳥時代の遺構と、瓦器の破片を含む中世の遺構を検出した。6世紀末~7世紀前半の遺構には遺構記号の後に200番代を、中世の遺構には100番代を付して遺構名としている。

第3層: 川の営力によって堆積した灰黄褐色シルト~砂礫の自然堆積層である。本層上面の標高はTP+1.0~1.1mで、ほぼ水平である。本層から出土した遺物はなく、本層以下を地山と考えた。

本層上面では古墳時代中期の遺構のほか、古墳時代後期の遺構が見つかった。本層上面の遺構には遺構記号の後に300番代を、第2層基底面の遺構には200番代を付して遺構名としている。

ii) 遺構と遺物

a. 古墳時代中期の遺構と遺物(図6~8、300番代の遺構)

第3層上面では古墳時代中期の土壘・柱穴・小穴が見つかった。柱穴は建物や塀を構成するものと思われるが、後世の攪乱等で失われたものも多く、本調査区内で有効な組合せを見つけることはできなかった。

以下におもな遺構と遺物について述べる。

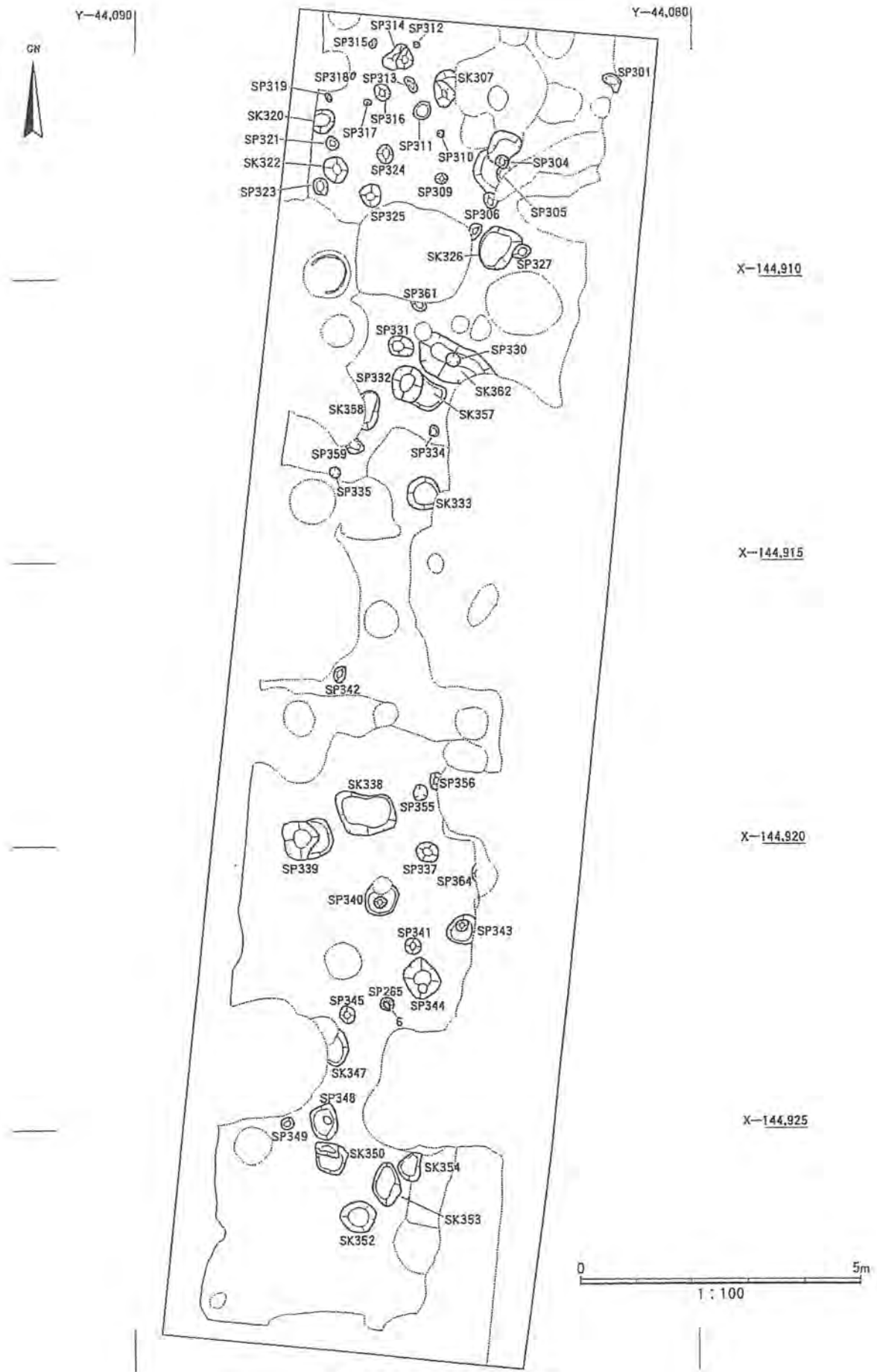


図6 第3層上面の遺構実測図

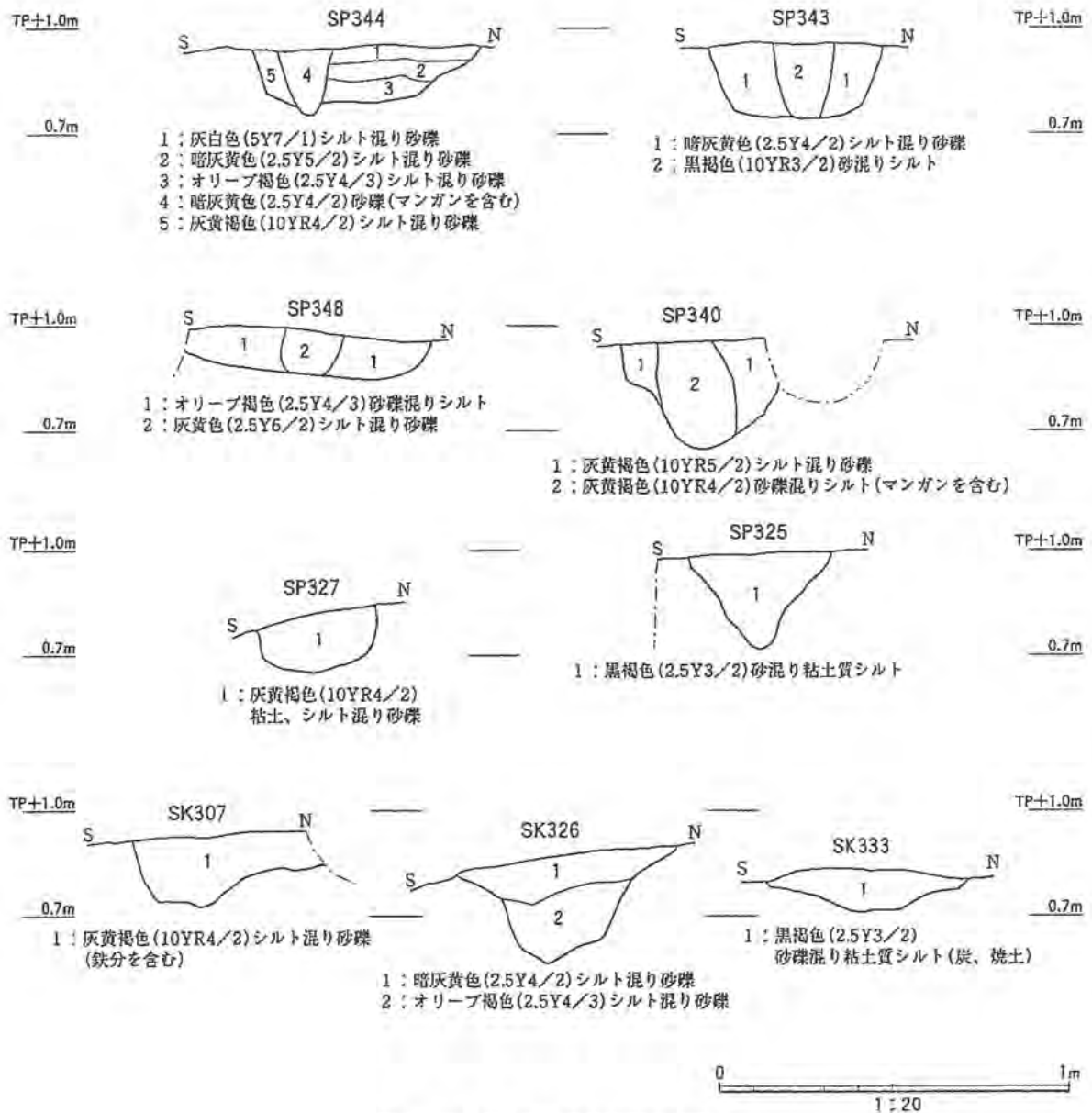


図7 第3層上面の遺構断面実測図

土壌

SK307 南北約0.7m、東西0.4m以上の楕円形の土壌で、南側が深く0.20mの深さがある。埋土は鉄分を含む灰黄褐色シルト混り砂礫である(図7)。土師器の破片が出土した。

SK322 直径0.45m程度の円形の土壌で、深さは0.24m、埋土は灰色砂混りシルトである。土師器の破片が出土した。

SK326 長径0.8m、短径0.6mほどの隅丸長方形の土壌で、深さは0.30m、埋土は上部が暗灰黄色シルト混り砂礫で、下部はオリーブ褐色シルト混り砂礫である(図7、図版2中段)。出土遺物はない。

SK333 直径0.6mほどの円形の土壌で、深さは0.12m、埋土は炭・焼土が混る黒褐色砂・礫混り粘土質シルトである(図7)。出土遺物はない。

SK347 平面が楕円形とみられる土壌で、東西約0.4m、南北約0.6m、深さは約0.3mある。埋土は黄褐色粘土質シルトで、炭・焼土が混る。土師器の破片が出土した。付近の柱穴と規模や形状が似

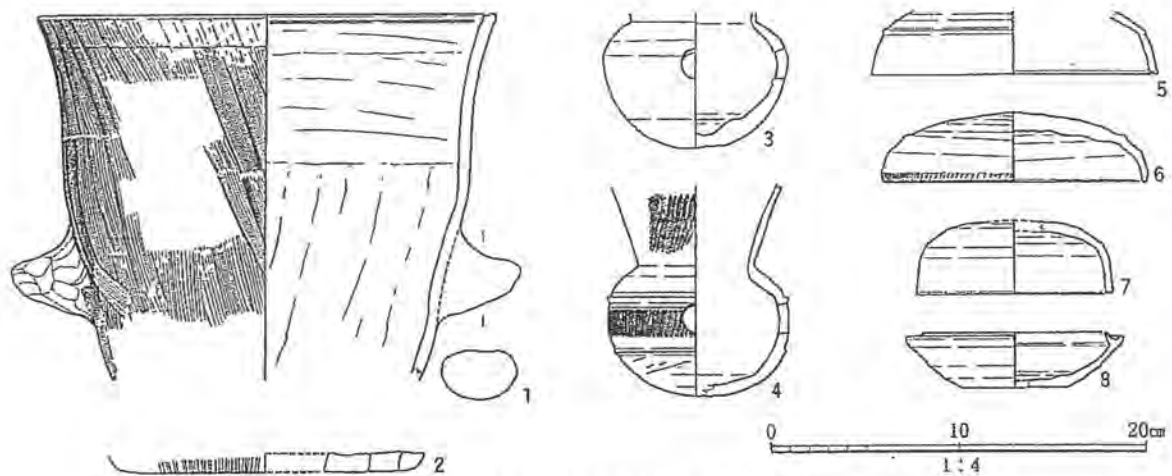


図8 遺構出土遺物実測図(古墳～飛鳥時代)
SP304(1・2・4)、SP305(3)、SP206(5)、SP265(6)、SK207(7)、SK263(8)

ているが、柱や柱抜き穴が見つかっていないことと、埋土が明らかに異なるため土壌とした。

SK362 短径が約0.7m、長径が1.5m以上の土壌で、深さは0.15mある。灰黄褐色砂混りシルトの埋土に炭・焼土が混る。図化した遺物はないが、須恵器甕や土師器高杯・牛角状把手など5世紀代の遺物が出土した。

柱穴

SP304 削平されて全体の形状が大きく損なわれているが、もとは一辺が0.6m程度の隅丸方形の柱穴だったと考えられる。深さ0.15mほど残っていた。柱痕跡の直径は0.18mある。掘形の埋土は淡灰褐色砂・礫混り粘土で、柱痕跡は灰シルト混り砂礫である。土師器甕1、韓式系軟質土器甕2、須恵器甕4が掘形から出土した(図版2下段)。1は器表面をハケで調整し、2は縦方向の平行タタキを施している。これらは5世紀から6世紀初頭のものである。

SP305 SP304とSP306によって壊された柱穴で、もとは一辺0.6m程度の隅丸方形の掘形の柱穴であったと考えられる。深さは0.15mほど残っていた。直径0.2mほどの柱または柱抜き穴に淡灰色シルト混り砂礫が堆積していた。掘形の埋土は灰色シルトで、ここから6世紀代の須恵器甕3が出土した(図版2下段)。

SP339 東西0.8m、南北0.7mほどの隅丸長方形の柱穴で、深さは柱の抜き穴で約0.4m、掘形の下端で0.2mほどである。掘形、抜き穴ともよく似た埋土で、暗褐色砂混りシルトである。柱抜き穴から須恵器と土師器の破片が出土した。

SP340 東西・南北とも0.6mほどの円形または隅丸方形とみられる柱穴で、深さは約0.3mある。掘形の埋土は暗黄褐色シルト混り砂礫、柱痕跡はマンガン斑紋を含む灰黄褐色砂・礫混りシルトが堆積する(図7)。出土遺物はない。

SP343 東西0.5m以上、南北約0.5mの円形もしくは隅丸方形の柱穴で、深さは約0.2mある。柱痕跡は円形で、下端は直径0.15mある。掘形の埋土が灰褐色シルト混り砂礫で、柱痕跡に暗灰褐色砂混りシルトが堆積する(図7)。土師器の破片が出土した。

SP344 長径0.7m、短径0.6m、深さ0.2mほどの隅丸長方形の柱穴である。柱穴の掘形の埋土は

灰褐色シルト混り砂礫が主体で、柱痕跡はマンガン斑紋を含む灰黄褐色砂礫が堆積する(図7)。出土遺物はない。

SP348 長径約0.6m、短径約0.5m、深さ0.15mの隅丸長方形の柱穴で、掘形の埋土はオリーブ褐色砂・礫混りシルトが主体で、柱痕跡に灰黄色シルト混り砂礫が堆積する(図7、図版2上段)。出土遺物はない。

小穴

SP325 上端が直径約0.4m、下端が直径0.12mの逆円錐台形をした小穴で、深さは0.27mある。埋土は黒褐色砂混り粘土質シルト(図7)で、柱穴の可能性もある。出土遺物はない。

SP327 直径0.3mほどの小穴で、深さ0.16mある。埋土は灰黄褐色粘土・シルト混り砂礫である(図7)。出土遺物はない。SP325同様に柱穴の可能性はある。

SP330 SK362の下で見つかった直径0.25mの円形の小穴で、深さは0.14m、埋土は炭と焼土が混る灰褐色砂混りシルトである。須恵器の破片が出土した。柱穴の可能性はある。

SP337・341・345・349・351・356・364 これらは直径0.3mほどの円形の小穴で、深さはいずれも0.3m程度、埋土は灰褐色砂・礫混りシルトである。遺物はSP356から須恵器・土師器の破片が出土した。

b. 古墳時代後期の遺構と遺物(図6・8、200番代の遺構)

第3層上面で検出した第2層基底面の遺構で、6世紀後半の遺物が出土した小穴1基がある。

SP265 直径約0.3mの円形の小穴で、深さは0.15m、埋土は暗灰褐色砂混りシルトである。須恵器杯蓋6のみが出土した(図版3中段)。口縁端部外面をハケ状の工具で右斜め方向にナデ上げて仕上げている。第2層の形成時期よりやや古い6世紀後半ごろのものである。

c. 飛鳥時代の遺構と遺物(図8・9、200番代の遺構)

6世紀末～7世紀前半の第2層上面の遺構で、土壙と小穴が見つかった(図9)。

土壙

SK207 長径0.7m、短径0.3mほどの楕円形の土壙で、深さは約0.1m、埋土は暗灰褐色砂混りシルトである。須恵器杯身・短頸壺蓋7・甕・甗、土師器、製塩土器が出土した。これらには5世紀代の遺物が多いが、第2層上面で見つかっているのもので、飛鳥時代の遺構である。

SK216 南北約0.4m、東西0.5m以上の土壙で、深さは0.2m、埋土は灰黄褐色砂混りシルトである。須恵器と土師器の破片が出土した。

SK219 長径0.5m、短径0.4mほどの土壙で、深さは約0.3m、埋土は灰褐色シルトに黄褐色粘土の偽礫が混る。須恵器の破片と土師器高杯が出土した。

SK220 直径0.4mほどの土壙で、深さは約0.4m、埋土は灰褐色シルトに黄褐色粘土の偽礫が混る。須恵器の破片が出土した。

SK226 長径約1.0m、短径約0.5m、深さ約0.7mの土壙で、埋土は淡灰褐色砂混りシルトである。須恵器の甗・甕と土師器の破片が出土した。

SK263 東西1.2m以上、南北1.0m以上の土壙で、南半分は削平されて失われている。深さは0.15

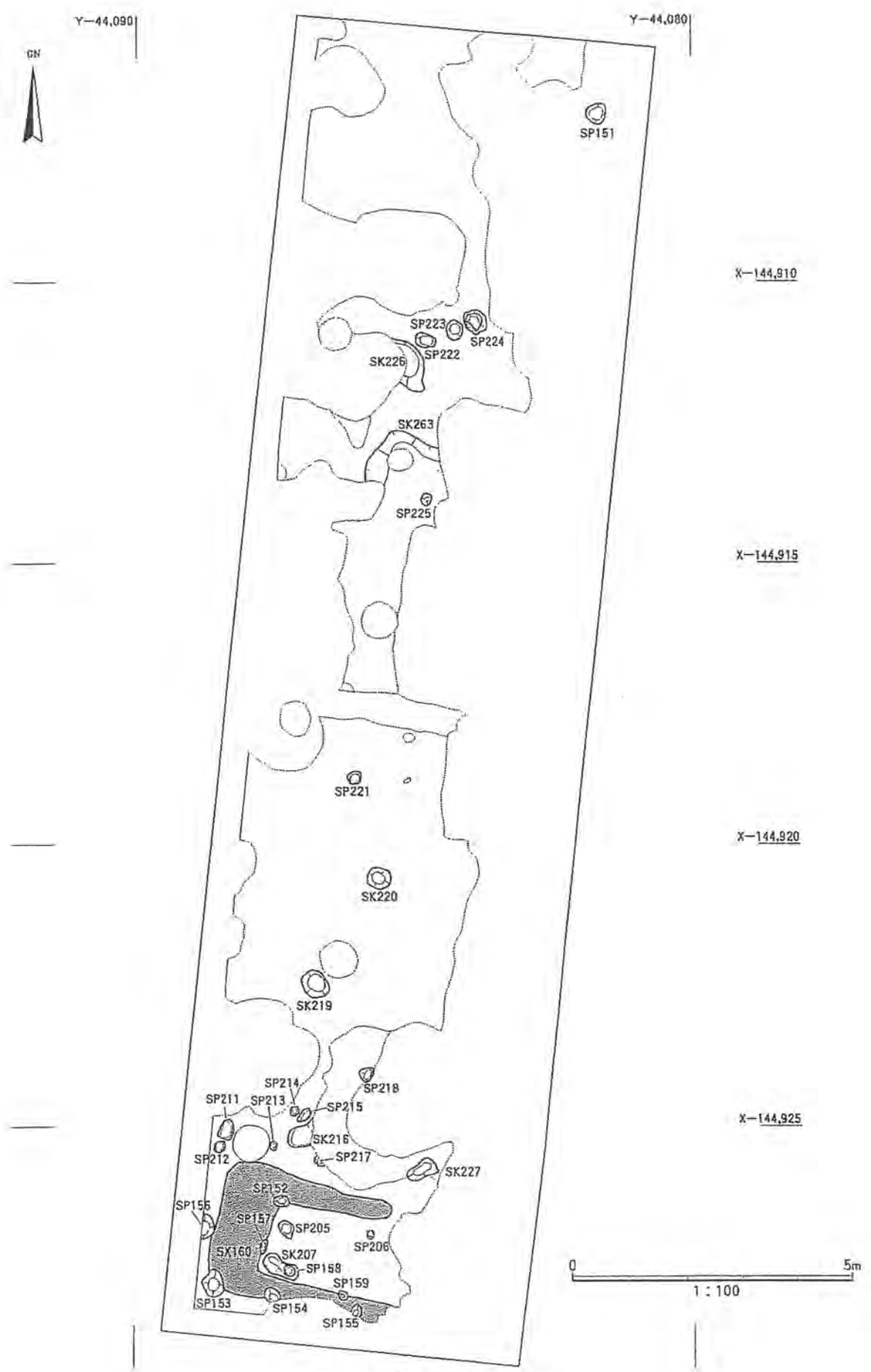


図9 第2層上面の遺構実測図

m残っていた。埋土は暗灰黄～赤褐色砂混り粘土質シルトで、炭・焼土が混る。須恵器杯身8と甕の破片が出土した。杯身は7世紀中葉のものである。

小穴

SP205 長径約0.4m、短径約0.2m、深さ約0.1mの小穴で、埋土は暗灰褐色砂混りシルトである。須恵器杯身・杯蓋の破片が出土した。

SP206 直径0.15mの小穴で、深さは約0.1m、埋土は灰褐色砂混りシルトである。須恵器の杯蓋5・甕、土師器の破片が出土した。杯蓋5は第2層よりやや古い6世紀前半のものである。

SP212 深さは直径0.2mほどの小穴で、埋土は灰黄褐色シルトである。土師器の破片が出土した。

SP214 直径0.15mの小穴で、深さは0.06m、埋土は暗灰褐色砂混りシルトである。土師器の破片が出土した。

SP221 直径0.25mの小穴で、深さは約0.1mある。埋土は灰黄褐色砂混りシルトで、褐色粘土の偽磔が混る。土師器の破片が出土した。

SP222・223 長径0.4m、短径0.2mほどの小穴で、深さは約0.5mある。埋土は灰褐～灰黄褐色砂混りシルトである。SP222から須恵器甕・高杯・杯蓋、土師器高杯・牛角状把手などの破片が、またSP223から土師器の破片が出土した。

SP224 直径0.4mほどの小穴で、深さは0.15m、人頭大の石が据えられていた。埋土は灰褐色砂混りシルトである。須恵器杯身と土師器の破片が出土した。

SP225 直径約0.2mの小穴で、深さは約0.4m、埋土は灰黄褐色砂混りシルトで、黄褐色粘土の偽磔が混る。

c. 室町時代後期の遺構と遺物(図9、100番代の遺構)

第2層上面で検出した第1層基底面の遺構で、小穴と貼り床状の遺構がある(図9)。

SP151 埋土が灰褐色砂混り粘土質シルトの、南北約0.4m、東西0.4m以上の楕円形土壌で、深さは0.07mである。粗いヘラミガキのある瓦器と土師器の破片が出土した。

SP152 暗褐色砂・磔混りシルトが埋土の、長径0.25mの楕円形をした小穴で、深さは0.25mある。後述するSX160の縁にSX160を掘込んで設置されている。瓦器の破片、銅銭、壁材が出土した。

SP153・154・155 この3基の小穴は、径が0.5～0.2m、深さがいずれも0.45mほどで、すべて埋土が灰褐色砂混りシルトである。いずれも後述するSX160の南の縁に位置する。出土遺物はない。

SP156 深さが0.22m、直径約0.5mの平面が円形とみられる小穴で、埋土は灰色砂混りシルトである。出土遺物はなく、SP153と形状・埋土がよく似ているので、同じ時期のものとした。

SP157 南北約0.3m、東西約0.1m、深さ0.15mほどの小穴で、埋土は暗黄褐色砂・磔混りシルトである。遺物はないが、上述のSP152～156同様にSX160の縁に設置され、埋土も類似しているため、同じ時期のものと考えた。

SP158 直径約0.2m、深さ0.07mほどの小穴で、0.15m四方、厚さ0.06mの板石が平らに据えられていた。埋土は暗褐色砂・磔混りシルトである。遺物はない。

SP159 直径0.15m、深さ0.12mの小穴で、埋土は暗褐色砂・磔混りシルトである。遺物はない。

SX160 2cmほどの厚さの固く締まった淡灰褐色粘土混りの砂礫が「コ」の字状に広がる範囲である。砂礫を混ぜた粘土を貼った叩きの床のようなものではないかと考えられる。出土遺物はない。

d. 豊臣後期～徳川初期の遺構と遺物(図10・11、100番代の遺構)

第1層上面の遺構で、16世紀末～17世紀初頭の豊臣後期の遺構と17世紀前半～中葉の徳川初期の遺構とがある。船場地域など、大坂城下町では鍵層となる大坂ノ陣の焼土層が両者の間に挟まることになるが、焼土層・生活面が失われていて両者とも同じ面で検出しているため、同じ第1層上面の遺構とし、出土遺物で時期を判別した。

井戸と土塋、溝、小穴が見つかった。土塋はすべて整地境界に沿って設置されていることから、屋敷の奥に掘られた廃棄土塋と考えられる。

以下に主な遺構について述べる。

d-1. 豊臣後期の遺構と遺物(図10・11)

SK129 SK15によって壊された、短径約0.3m、長径0.3m以上の土塋で、現状で深さは約0.25mある。埋土は炭や焼土が混る暗灰褐色シルトで、土師器皿や青花の破片、巴文軒丸瓦10、李朝白磁またはこれを精巧に写した肥前陶器の皿15が出土した。黄白色を呈する皿である。

SK131 削平のため元の規模は不明であるが、南北約1.0m、東西0.4m以上、深さ約0.3mの方形または長方形の土塋である。埋土は炭や焼土が混る灰褐色シルトで、図示した中国製白磁型押皿14のほか、備前焼甕、土師器皿・羽釜、平瓦と下位層由来の須恵器の破片などが出土した。

SK132 SD133の下で見つかった楕円形の土塋で、東西約0.8m、南北約0.7m、深さは0.05mほどである。埋土は暗黄灰色砂混りシルト質粘土で、近世の土師器皿と須恵器・土師器の破片が出土した。

SD133 約0.5mの幅で東西に掘られた溝である。深さは0.1mほどである。埋土は灰黄色砂混り粘土質シルトで、流れによるラミナは見られなかった。瓦や土師器と須恵器の破片が出土した。整地の境界線にほぼ直行することから、区画溝の可能性も考えられる。

SE135 平瓦を井戸側に使用した円形の井戸である。円筒形の掘形は直径約0.9m、井戸側の直径は約0.7m、深さは約0.5m以上ある。掘形の埋土は暗黄褐色砂混りシルトであるが、掘形から出土した遺物はない。井戸側内の暗黄灰色砂混り粘土質シルトから、焼塩壺9、瀬戸美濃焼志野皿11、肥前陶器大皿12、青花小杯13と、丹波焼、備前焼、近世瓦、壁材、土錘、須恵器などが出土した。

SP104 南北0.3m、東西0.2m、深さ約0.1mの平面楕円形の柱穴で、茶褐色砂・礫混り粘土の掘形埋土から土師器皿と、粗いヘラミガキの残る瓦器の破片が出土した。暗黄灰色砂混り粘土質シルトの柱痕跡は直径約0.1mの円形である。

このほか下位層由来の遺物のみが出土したSK113(埋土は暗黄褐色砂・礫混りシルト、以下同じ)・SK122(橙色砂・礫混り粘土質シルト)・SK126(灰褐色礫混り粘土)、SP134(暗黄灰色砂混りシルト質粘土)などの遺構も、埋土の状況からみて豊臣後期の可能性があるものである。

d-2. 徳川初期の遺構と遺物(図10・11)

上記以外の100番代の遺構は徳川初期のものと考えられる。土塋や小穴などがあるが、このうち代表的な土塋2基を記す。

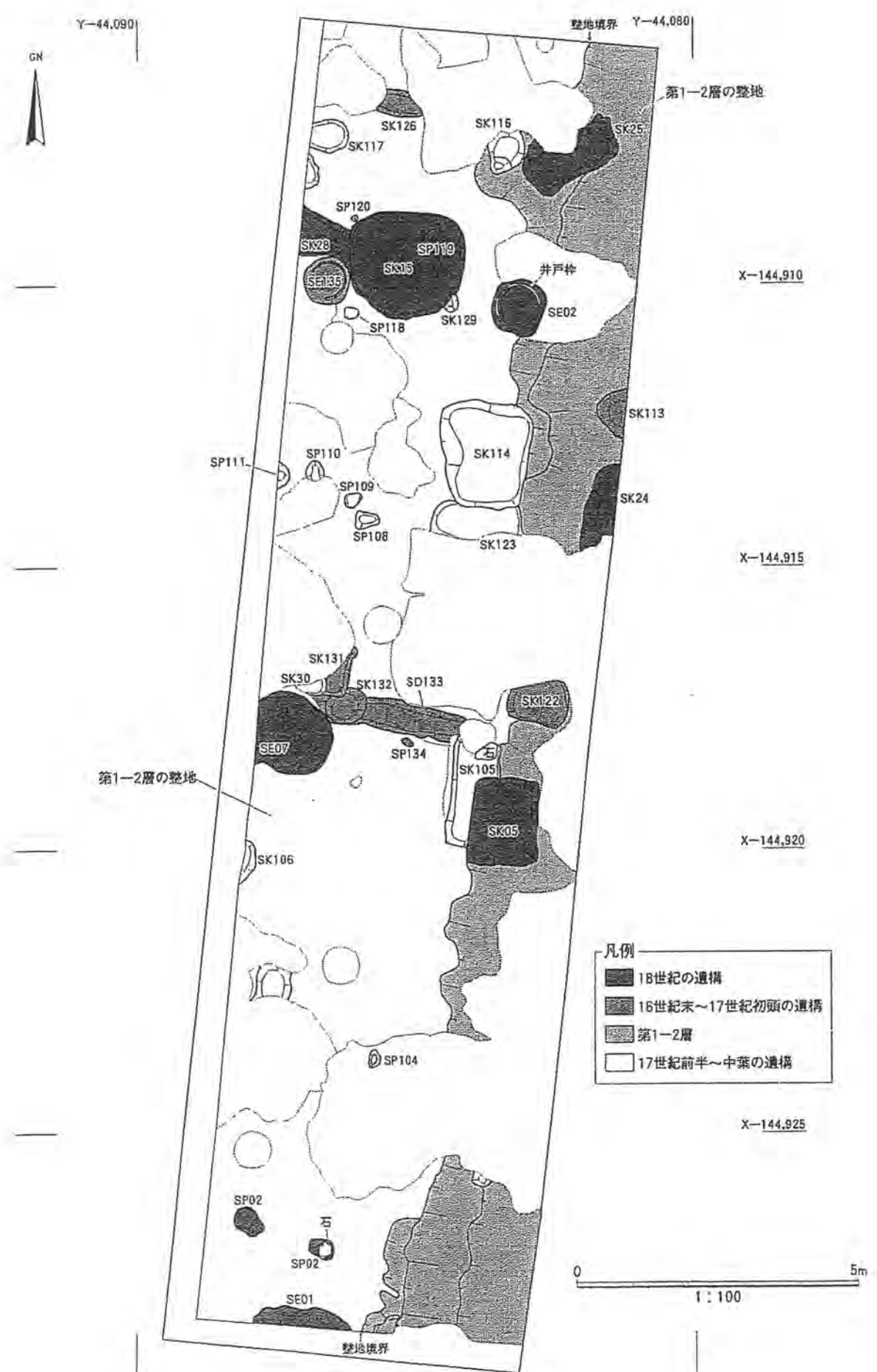
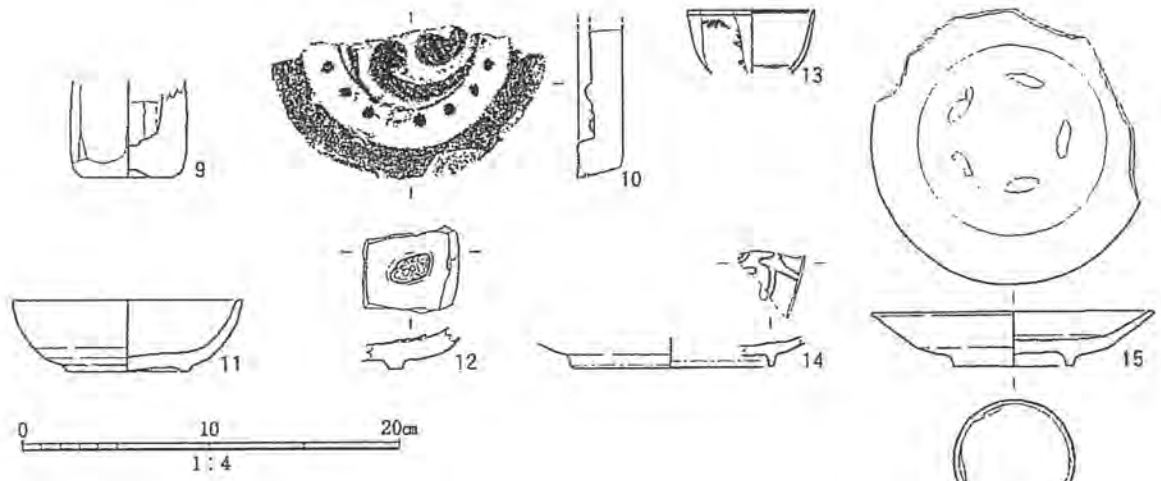
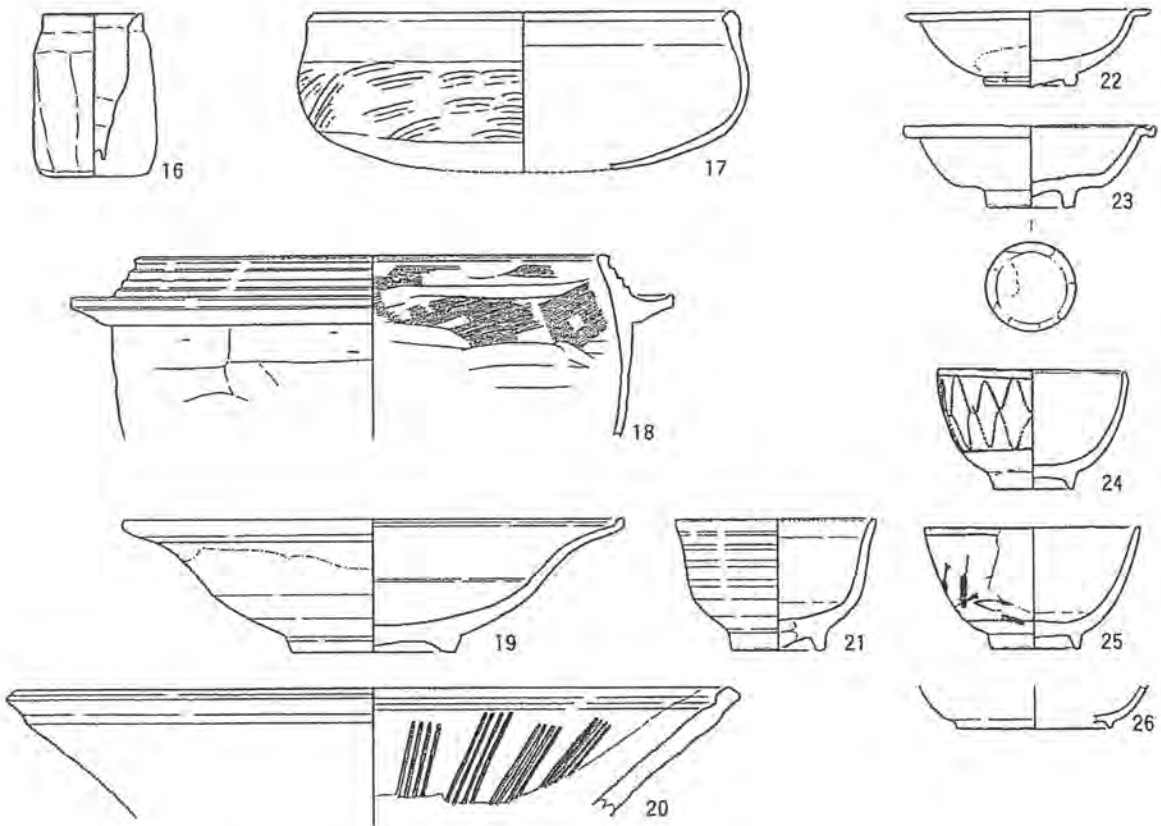


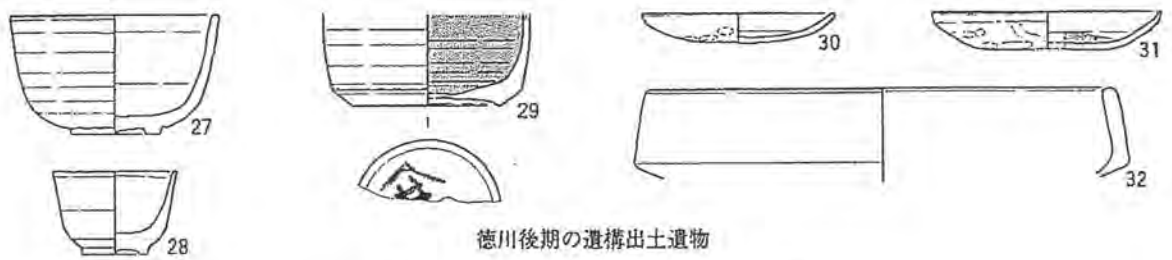
図10 第1層上面の遺構実測図



豊臣後期の遺構出土遺物



徳川初期の遺構出土遺物



徳川後期の遺構出土遺物

図11 遺構出土遺物実測図(中世末~近世)

SK129(10・15)、SK131(14)、SE135井戸側内(9・11~13)、SK105(18・19・21・24・25)、SK114(16・17・20・22・23・26)、SE02(29)、SK05(31・32)、SE07(27)、SK25(28・30)

SK105 東西約0.9m、南北約2.0mの平面が長方形の、垂直に掘込まれた土壌で、深さは0.4mある。埋土は灰褐色砂混り粘土質シルトである。多くの遺物が出土したが、このうち土師器羽釜18、肥前陶器大皿19・碗21、肥前磁器碗24・25を図示した。17世紀前半～中葉頃の土壌である。

SK114 東西約1.5m、南北約2.0mの平面が長方形の、垂直に掘込まれた土壌で、現状では北西部分がやや広がっている。深さは0.7mほどである。埋土は暗灰褐～暗褐色砂・礫混りシルト質粘土で、炭や焼土を多量に含む。出土遺物のうち、焼塩壺16、土師器焙烙17、丹波焼播鉢20、肥前陶器折縁皿22・23、中国製白磁皿26を図示した。これらは17世紀前半までのものである。

e. 徳川中期以降の遺構と遺物(図10・11、2桁の遺構)

SE02 井戸瓦を直径約0.8mの円筒形に積んだ井戸で、掘形は直径約1.0m、深さ約0.7mである。井戸側の中を暗灰褐色砂・礫混りシルトで埋めており、遺物はこの中から大量に出土した。このうち関西系陶器鉢29を図示した。内面に鉄釉、外面に白濁釉をかける。面取りをした底部は無釉で、上げ底状の底部外面に「へ(山笠か)」に「井(井桁か)」の墨書がある。18世紀後半ごろのものと思われる。

SK05 東西1.2m、南北1.5m、深さ0.5mほどの平面長方形の土壌である。炭が大量に混る暗赤褐色粘土で埋められている。多くの遺物が出土したが、このうち土師器皿31と焙烙32を示した。焙烙は18世紀のもので、この遺構の時期を示す。

SE07 直径約1.7mの円形土壌で、深さは約0.5mある。埋土は灰黄褐色砂混りシルトで炭・焼土が混る。出土遺物のうち、透明な緑灰色の灰釉をかけた肥前陶器碗27を図示した。

SK25 東西約1.8m、南北約1.0m、深さ約0.3mの平面長方形の土壌である。埋土は黒褐色砂・礫混り粘土質シルトで、炭や焼土が混る。出土遺物のうち肥前陶器小杯28と土師器皿30を図示した。

f. 各層の出土遺物(図12)

f-1. 第2層出土遺物

33～39・41～50は本調査の第2層から出土した遺物で、40は大阪市教育委員会の試掘の際に出土した遺物である。これらは5世紀中葉～7世紀前半のものである。33～36は格子タタキを施した軟質の韓式系土器甕の破片である。37～39は土師器で、37は高杯、38・39は甕である。40～50は須恵器で、40～44は杯蓋、45～47は杯身、48は小型壺、49は甕、50は器台である。このうち、47がこの包含層の下限を示す7世紀中葉の遺物で、ほかは5～6世紀のものである。

f-2. 第1層出土遺物

51～57は第1層から出土した遺物である。51～53は土師質の土器で、51は羽釜、52は皿、53は焼塩壺である。54・55は肥前陶器皿、56は青花皿である。16～17世紀初頭のもものが大半を占める。57は格子タタキを施した陶質の韓式系土器である。これは下位層に由来するものである。

3)まとめ

今回の調査では、16世紀末～17世紀前半の町割についての重要な情報をうることができた。

大坂城下町の調査は、整地の境界が敷地の境界になることが多く、また敷地の奥には建物は少なく、廃棄土壌を配置していることが多い。今回はこの状況によく合致し、また整地境界線に直交する溝

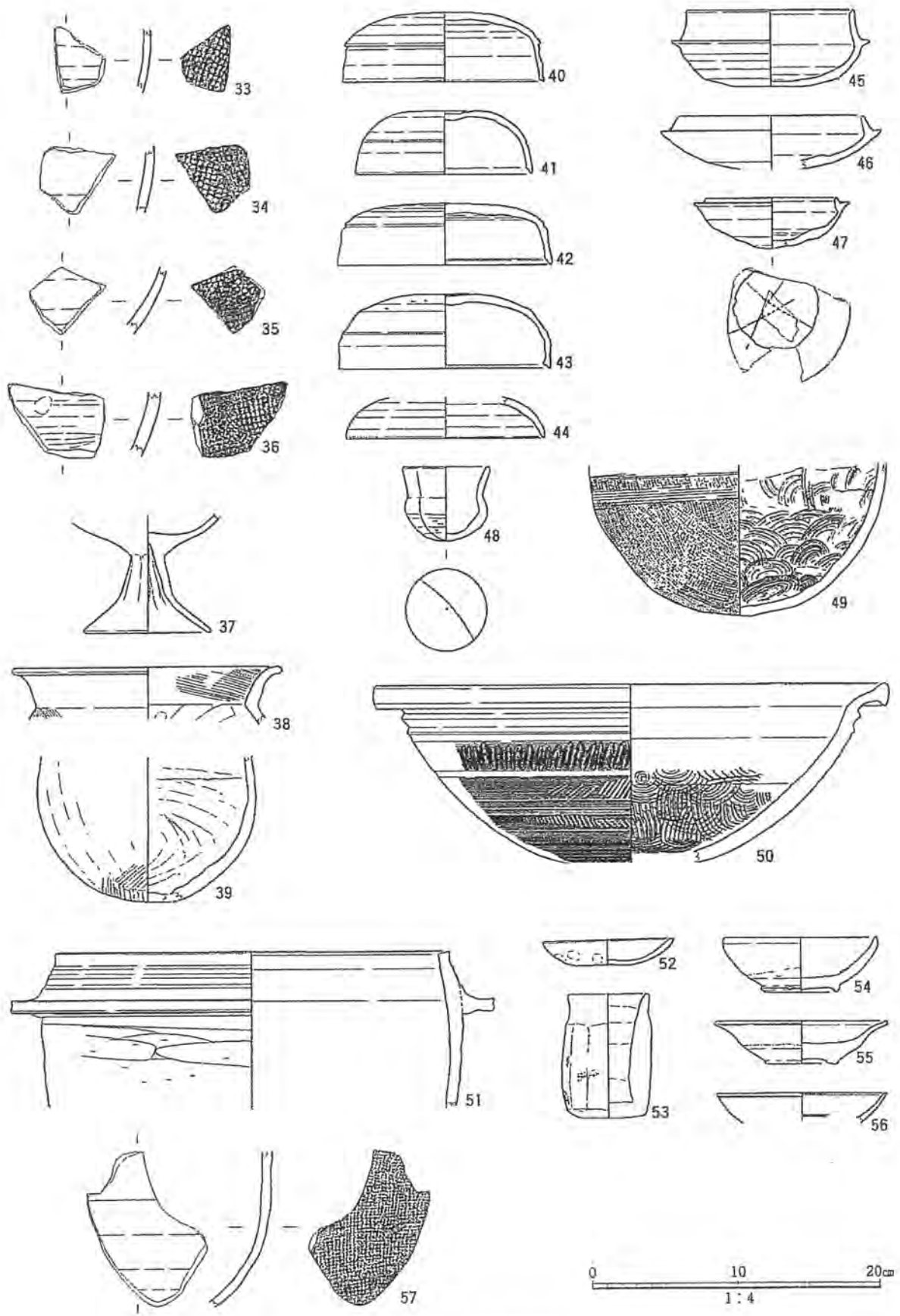


图12 各層出土遺物実測図
 第2層(33~39・41~50)、大阪市教育委員会試掘(40)、第1層(51~57)

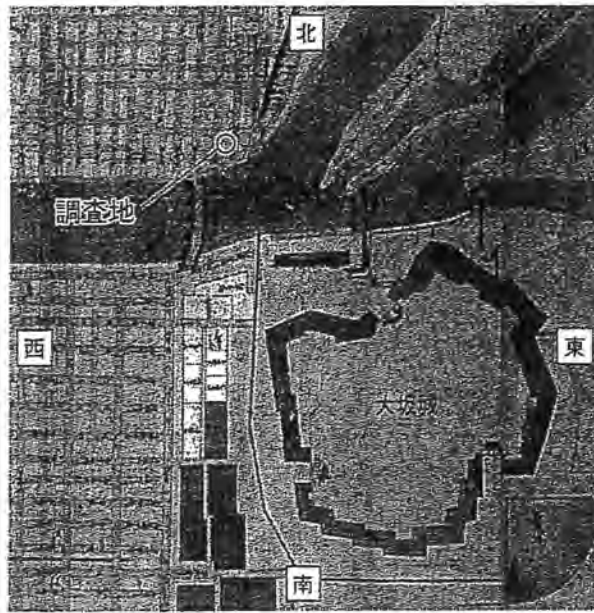


図13 【明暦元年 大坂三郷町絵図】(部分)

SD133なども検出しており、これが当時の屋敷境の溝であるとすれば、近世大坂城下町天満の西が表となる敷地の境界付近、つまり屋敷の奥を検出したのではないかと考えられる。やや後の明暦元(1655)年の絵図(図13)にもこの町割は踏襲されていることがわかる。

船場地域に比べ、天満地域の町割は、実際の発掘調査による成果がまだ少ないことから、今回の成果は歴史的景観を復元する上でのひとつの手掛かりとなろう。付近の調査成果も合わせてさらなる検討を加えたい。

また、従来の調査と同様に当地においても古墳時代や中世の遺構・遺物が見つかり、さらに

飛鳥時代の遺構や遺物が見つかったことは、大川の氾濫など自然の脅威を受けやすい場所にもかかわらず、本地域で人々が頻繁に活動していたことを物語る。中でも、朝鮮半島の土器に由来する韓式系土器が出土し、古墳時代に当地で活動した人々の中に朝鮮半島からの渡来人が含まれることが想定されることは、特筆すべきことであろう。今後これらの時期の集落も発掘調査によって次第に明らかになると思う。これらの時代についてもさらなる検討を加えて行きたい。

参考文献

- 大阪市文化財協会1995、「大阪市北区天満本願寺跡発掘調査報告」Ⅰ
 1997、「大阪市北区天満本願寺跡発掘調査報告」Ⅱ
 1998a、「大阪市北区天満本願寺跡発掘調査報告」Ⅲ
 1998b、「大阪市北区天満本願寺跡発掘調査報告」Ⅳ
 2003、「大阪市北区天満本願寺跡発掘調査報告」Ⅴ
- 市川創2004、「天碧く雲たなびき—天満出土の高麗背磁—」：大阪市文化財協会「葦火」113号、p.8
 小田木富慈美2004、「古墳時代の天満～砂洲上のムラ～」：大阪市文化財協会「葦火」113号、pp.1-3
 積山洋1997、「天満出土の元文一分金—大蔵省造幣局の調査から—」：大阪市文化財協会「葦火」66号、p.7
 松尾信裕2007、「天満本願寺跡の石垣」：大阪市文化財協会「葦火」127号、pp.1-3
 豆谷浩之1997、「大坂町奉行所与力屋敷跡の調査から」：大阪市文化財協会「葦火」70号、p.8
 1998、「再び大坂町奉行所与力屋敷跡の調査から」：大阪市文化財協会「葦火」72号、pp.6-8
 南秀雄1994、「城下町天満を発掘」：大阪市文化財協会「葦火」50号、pp.6-8
 1996、「その後の天満本願寺跡の調査から」：大阪市文化財協会「葦火」62号、pp.4-5

調査地全景
(北から)



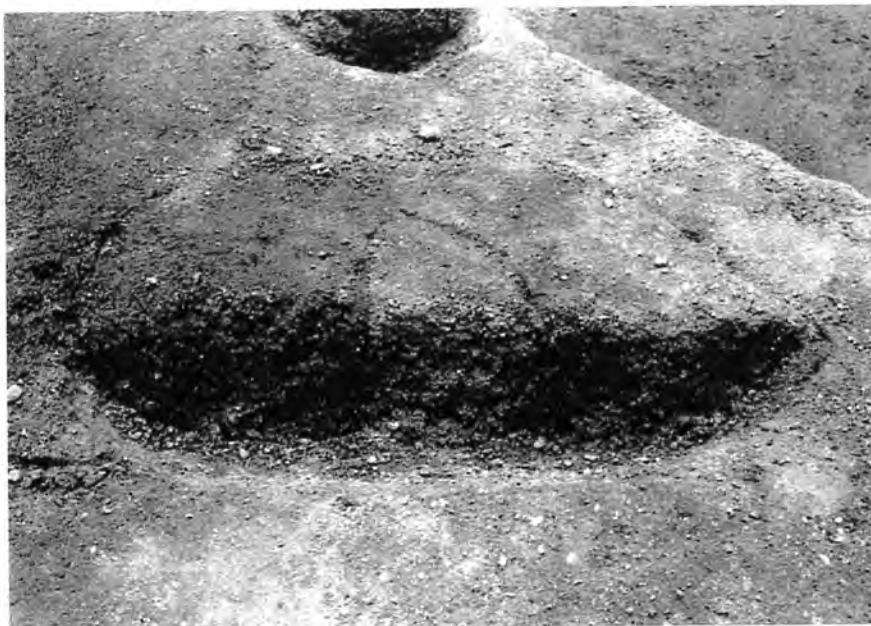
第3層上面の遺構
(中央部、東から)



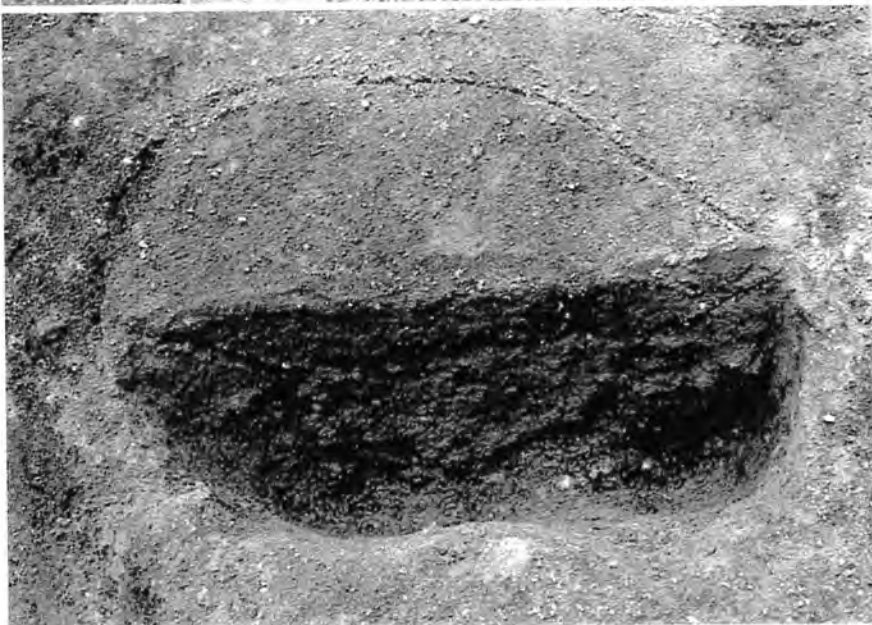
第3層上面の遺構
(北半部、東から)



SP348
(東から)



SK326
(東から)



SP304・305
遺物出土状況
(東から)



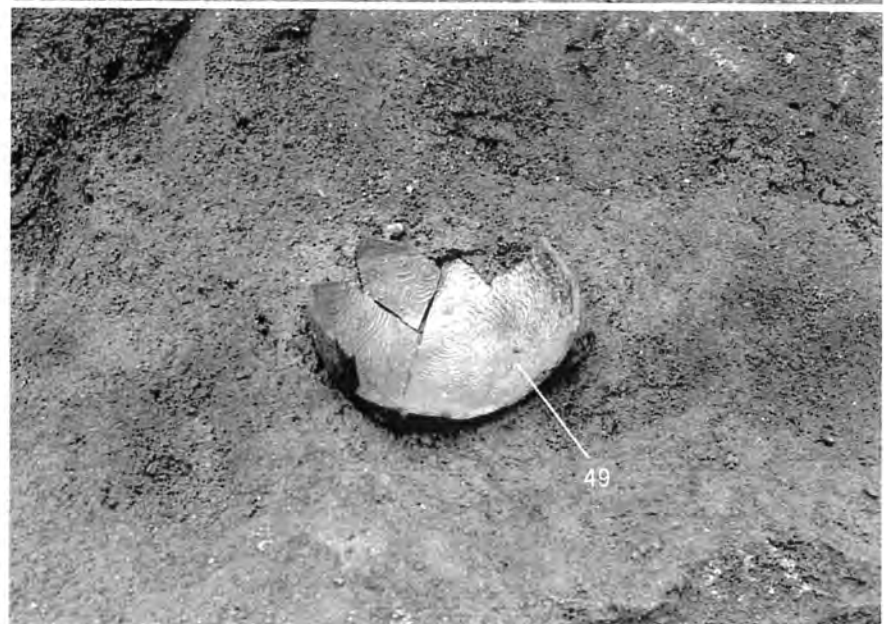
第2層上面の遺構
(南から)



SP265
遺物出土状況
(南から)



第2層上半部
遺物出土状況
(東から)



II 中 央 区

高津御蔵跡発掘調査(KD07-1)報告書

調査個所	大阪市中央区高津3丁目17-6
調査面積	48m ²
調査期間	平成19年7月4日～7月10日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は元文5(1740)年に建設された「天王寺村銭座」、その廃止後の宝暦2(1752)年に建設された幕府米蔵である「高津(天王寺)御蔵」の跡地に位置する。調査地の周辺では、寛政3(1791)年に高津御蔵を吸収統合した難波御蔵跡が南西約750mの位置にある(図1)。これまでの調査では、本調査地に南接するNP05-1次調査で、18~19世紀代の陶磁器を含む落込みが検出されている(図2)。

本調査に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表面下約130cmで近世の遺構および遺物包含層が良好に遺存していることが確認されたため、本調査を実施することとなった。本調査では事業者側による重機掘削に続き、7月4日から人力掘削を開始し、近世の整地層である第2層の上面で18~19世紀代の遺物を伴う遺構を検出した。その後、第4層下面まで平面的な調査を行うとともに、調査区南西角を深掘りして断面調査を行ない、7月10日には調査を終了した。なお、本調査で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：現代盛土である。

第1層：近代以降の整地層で、第1a~1c層に細分される。第1a層は黒色砂質シルトを主体としており、第二次大戦時の焼土層とみられる。第1b層は黒褐色砂質シルト、第1c層は灰黄褐色砂質シルトを主体とし、陶磁器や焼土、炭化物を含む。

第2層：黄灰色砂質シルトを主体とする近世の整地層である。陶磁器や焼土、炭化物を含む。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

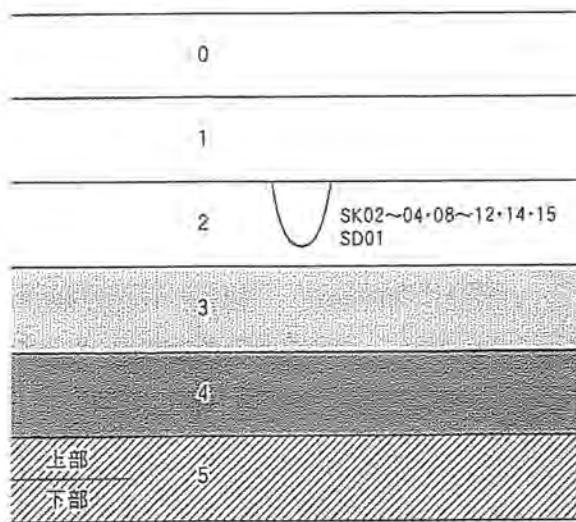


図3 地層と遺構の関係図

第3層：黒色極細～細粒砂混りシルトからなり、やや暗色化している。堆積構造は乱されており、作土層である可能性もある。

第4層：黒色粘土～極細粒砂からなり、暗色化している。NP05-1次調査の第5a層に比定され、湿地化していたと考えられる。

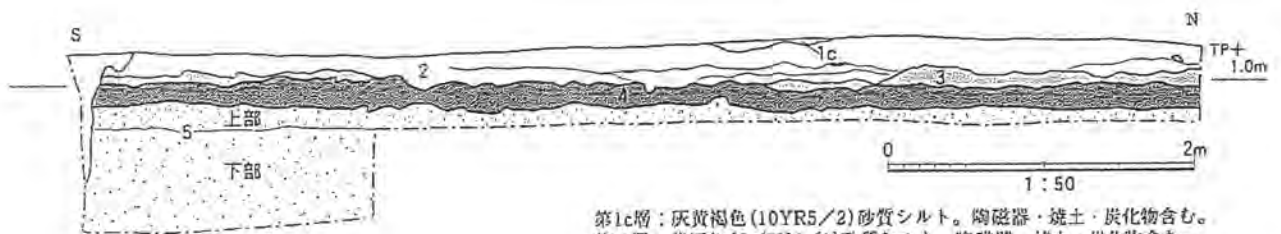
第5層：にぶい黄褐色極細～極粗粒砂からなる。NP05-1次調査の第5c層に比定され、海成の地山層と考えられる。にぶい黄色極細～細粒砂からなる上部は淘汰が良く、風成層である可能性もある。

ii) 遺構と遺物(図3・5～8)

第2層上面では溝SD01、土塋SK02～04・08～12・14・15を検出した。以下、主要な遺構について報告する。

SD01 調査区東端で一部を検出した、北北西-南南東方向に延びる溝である。幅0.3m以上、深さは0.4m程度で、埋土は黒褐色砂質シルトからなる。土師器、丹波焼、堺播鉢、関西系陶器、肥前磁器、瀬戸美濃焼磁器、棧瓦や丸・平瓦、土人形、羽口、硯、砥石、火打ち石、貝類など多くの遺物が出土した。9は瀬戸美濃焼磁器染付の蓋で、19世紀代のものである。

SK02・03・04 調査区北東部で検出した土塋で、切合い関係からSK04が最も古く、SK02が最も新しいと考えられる。SK02は長辺1.6m、短辺1.2m程度の方形で、深さは0.4mある。SK03・SK04は深さが0.05～0.10mと浅い。埋土はSK02が黒褐色砂質シルト、SK03は灰黄褐色砂質シルト、SK04は灰黄色極細～細粒砂からなる。これらの遺構からは土師器、瓦質土器、堺播鉢、丹波焼、関西系陶器、肥前陶器および磁器、瀬戸美濃焼陶器および磁器、棧瓦や丸・平瓦、土人形、砥石、焼土塊、スラグ、ウロコなどが出土した。



第1c層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト。陶磁器・焼土・炭化物含む。
 第2層：黄灰色(2/5Y4/1)砂質シルト。陶磁器・焼土・炭化物含む。
 第3層：黒色(10YR2/1)極細～細粒砂混りシルト。やや暗色化。
 第4層：黒色(10YR1.7/1)粘土～極細粒砂。暗色化。
 第5層上部：にぶい黄色(2.5Y6/4)極細～細粒砂。
 第5層下部：黒色(10YR1.7/1)極細～極粗粒砂。淘汰悪い。

図4 西壁地層断面図

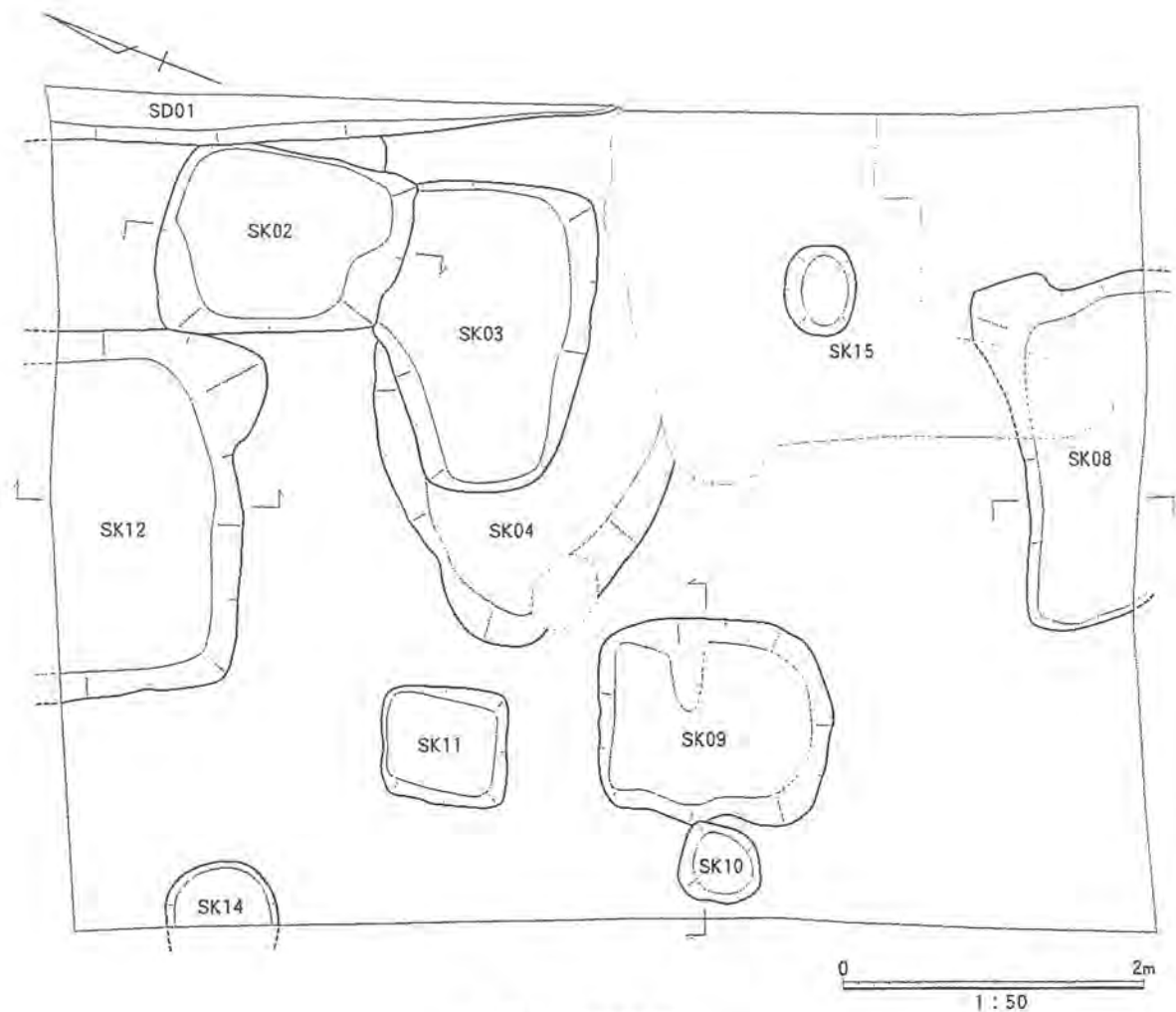


図5 遺構平面図

SK08 調査区南端で一部を検出した土坑で、深さは0.18m程度ある。埋土は黒色極細～細粒砂質シルトからなり、偽礫を含む。出土遺物には土師器、堺播鉢、関西系陶器、肥前磁器、棧瓦や平瓦などがある。そのうち、肥前磁器染付は宝尽くし文や扇文、四方禪文など共通した文様や銘款をもつ皿・鉢がまとまって出土しており、代表的な資料8点(1～6・13・14)を図示した。

14は口径が18.4cm、器高は5.7cmある。口縁部内面には四方禪文を巡らせており、見込みや高台内は無文である。図化できなかったものの中には、口縁部内面に四方禪文を巡らせ、体部内外面には唐草文などを配するものがある。6は口径が20.2cm、器高は6.7cmある。外面には草文、内面には巻物・隠れ蓑・傘・宝珠などの宝尽くし文を配しており、同じ文様構成をもつ資料が計9点確認された。高台端部には砂が多く付着している。

1～5・13はいずれも体部の外面に唐草文、内面に宝文や扇文を配しており、確認不能な13を除き、見込みにはコンニャク印判による五弁花文がある。高台内には1条の圈線を巡らせており、銘款の渦「福」には方形枠をもつものと、もたないものがある。また、いずれも高台端部には砂が付着しており、図化できなかった資料の中には高台内に「二」字状の朱書のあるものが2点確認された。4・5は区画内にくずし「寿」字文や宝珠文を配する芙蓉手の資料で、4は口径18.3cm、器高5.8cm、5は口径19.1cm、

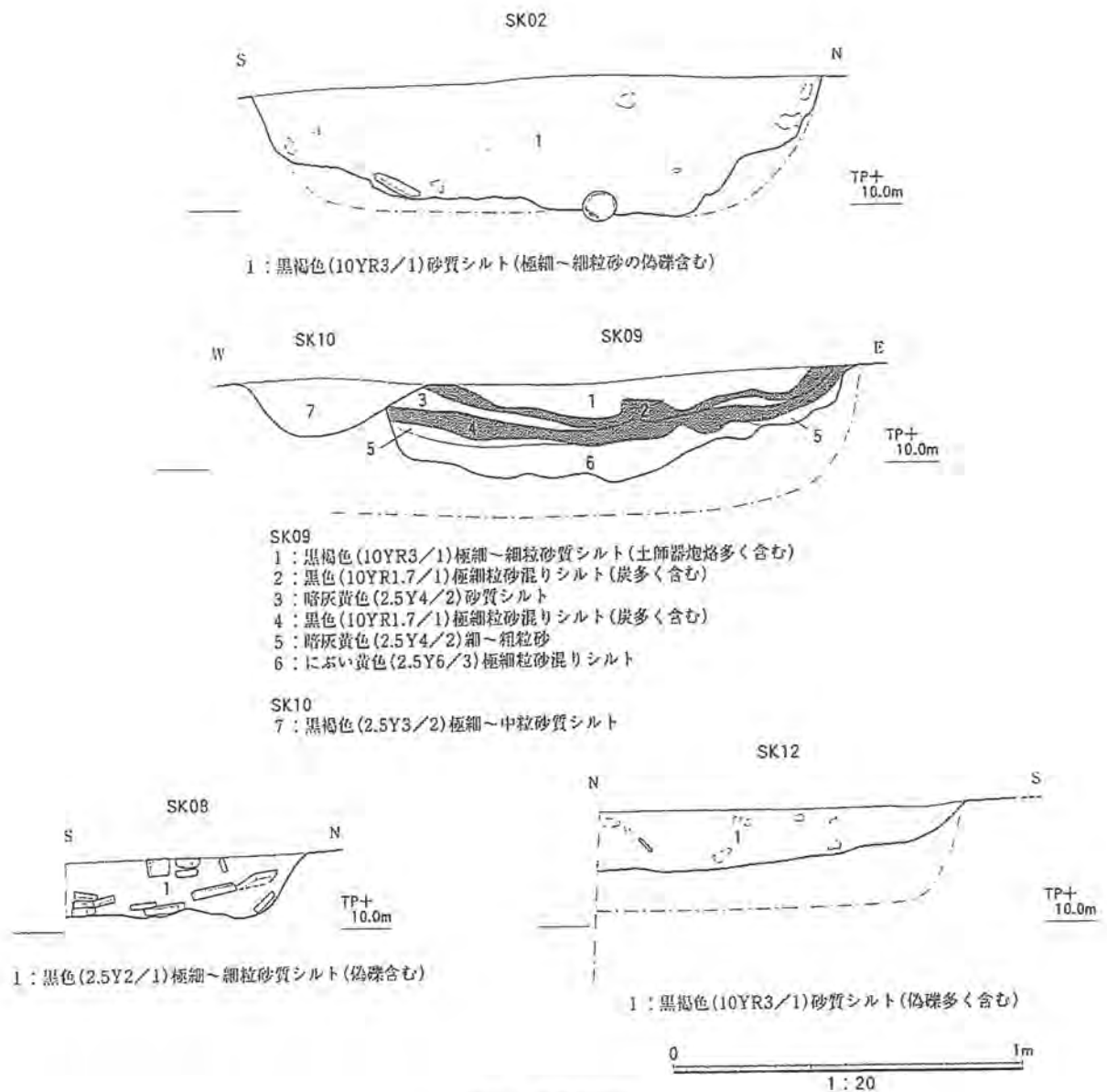


図6 遺構断面図

器高5.9cmある。1～3・13はいずれも体部内面に扇文を配するもので、1は口径19.5cm、器高6.0cm、2は口径19.0cm、器高5.4cm、3は口径18.4cm、器高6.5cm、13は口径19.2cm、器高6.1cmある。1・2・13には焼継の痕跡が観察される。

これらの資料はいずれも18世紀代の波佐見窯の製品とみられるが、銘款の渦「福」に方形枠がない1・3～5や、口縁部内面に四方禪文を巡らせる14などは、その中でもやや後出するものかもしれない。また、焼継の痕跡が確認されることから、これらの資料が廃棄されたのは19世紀代であると考えられる。

SK09 長辺1.5m、短辺1.3m、深さ0.25m程度の隅丸方形の土坑である。埋土は6層に細分され、黒褐色極細～細粒砂質シルトからなる第1層からは、内面にベンガラとみられる赤色顔料が付着した土師器焙烙が大量に出土した。また、第2・4層は黒色極細粒砂混りシルトからなり、多量の炭を含む。出土した土師器焙烙はコンテナ4箱に及ぶが、完形のものではなく、比較的残りのよい17～20・26～29を図示した。このうち17～20・27は内面にベンガラが付着しており、図ではトーンで付着範囲

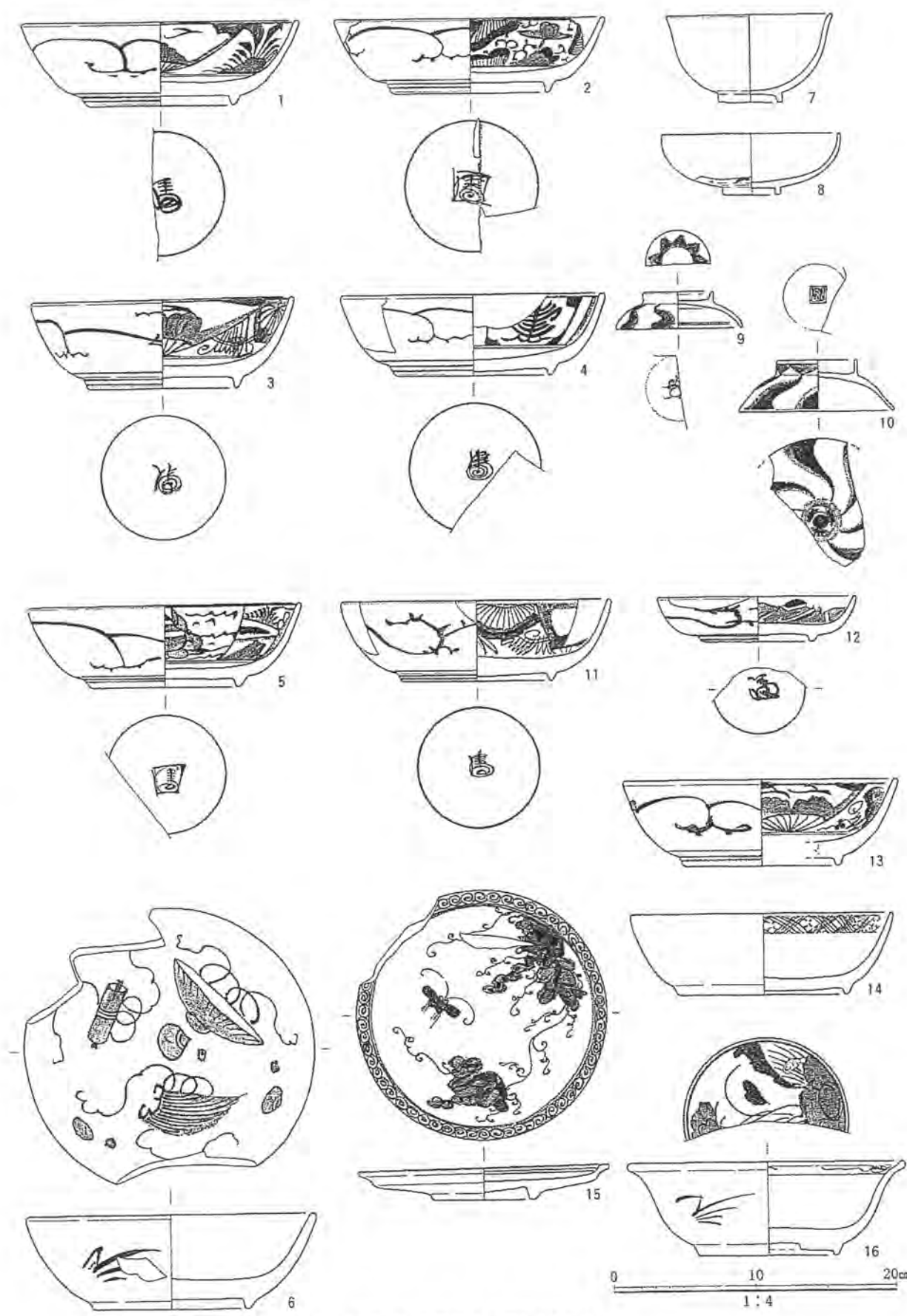


図7 遺構・包含層出土の遺物(その1)

SD01(9)、SK08(1~6・13・14)、SK09(7・8・11・12)、SK12(15・16)、第2層(10)

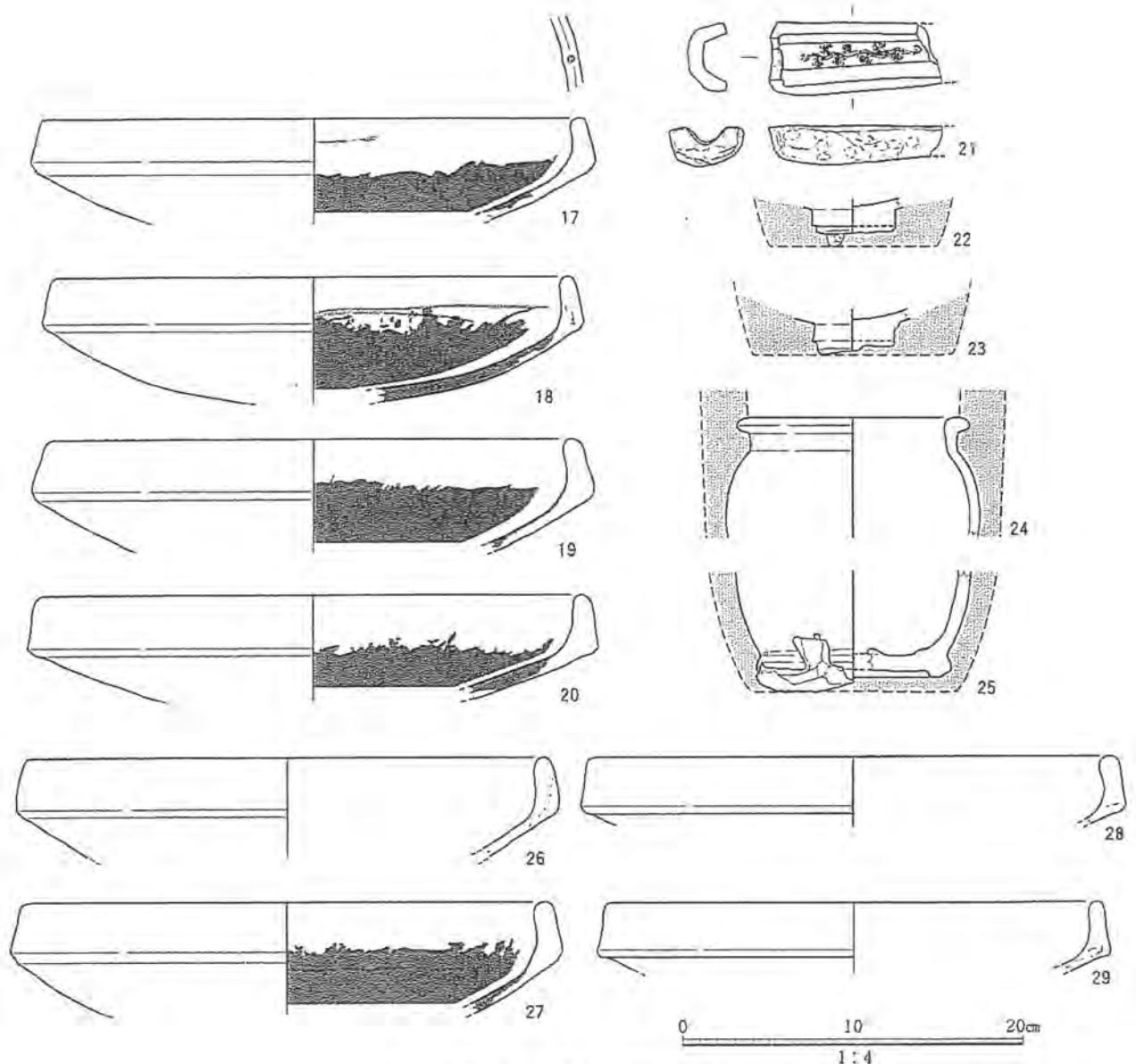


図8 遺構・包含層出土の遺物(その2)
SK09(17~20・26~29)、SK10(22)、SK12(23~25)、攪乱(21)

を示した。ベンガラが付着範囲は断面に及んでおり、ベンガラを入れた状態で破損したと考えられる。

17~20・26~29は口径が28.4~31.6cm、口縁部の厚さが1.0~1.3cm、体部の厚さは0.4~0.8cmある。また、17の口縁部上端には直径約0.3cmの円孔が穿たれているが、貫通はしていない。このように円・楕円孔が穿たれている資料は、図示したもの以外に39点が確認された。器面の調整はいずれも口縁部がヨコナデ、体部はナデで、口縁部と体部の境がケズリにより小さな面をなすものが多い。これらの焙烙は積山洋による型式分類のD類(孔の穿たれたものはD3類)に分類され[積山洋1999]、当地域では18世紀以降、普遍的に見られるものである。ただ、体部の厚さが0.6cm前後のものが多く、通有の焙烙と比較して厚味があることから、1~2日間連続で高温焼成を加えるベンガラ製造のために、特注されたものである可能性も考えられる。

一方、焙烙以外の遺物としては、瀬戸美濃焼陶器、関西系陶器、肥前磁器染付、棧瓦や丸・平瓦な

どがある。7・8は関西系陶器碗・皿である。ともに針状の目跡があり、19世紀代のものである。11・12は肥前磁器染付皿・鉢である。ともに見込みにはコンニャク印判による五弁花文があり、18世紀代のものである。11は器形・文様構成・高台内銘款など、SK08出土の3との共通点が多く見られる。

本遺構から出土した焙烙は、ベンガラが付着が内面だけでなく断面に及んでいること、出土量が大量であるにもかかわらず完形のものがないことなどから、ベンガラの製造に使用されたものである可能性が高い。江戸時代のベンガラ生産では硫化鉄鉱石から取出した緑礬を原料とする方法と、鉄屑を原料とする方法が存在していたが、18世紀代以降は良質なベンガラを製造できる前者が主流になったと考えられている[北野信彦ほか1998]。また、18世紀前半にベンガラの製造方法を確立した備中吹屋(岡山県高梁市)では、硫化鉄鉱石から取出した緑礬を焙烙に盛り、積み重ねて焼成したことが知られており、今回出土した焙烙も緑礬を原料とするベンガラ製造に使用された可能性が高い。緑礬を原料とする製造方法を開発した吹屋は、国内のベンガラ生産において独占的な地位を占めていたが、19世紀に入ると競合する他の生産地が出現したようである。現岡山県井原市では文政6(1823)年に、ベンガラ製造会社「精勤舎」(東証一部、戸田工業株式会社の前身)が設立されており、大阪市内でも天満本願寺跡(TN04-1次調査)で19世紀前半の遺物を伴う土壙SK04から、ベンガラとみられる赤色顔料が付着した大量の焙烙が出土している[大阪市教育委員会ほか2005]。今回出土した焙烙はそうしたベンガラ生産地の一つが、調査地あるいはその周辺に存在したことを示すものと考えられる。

SK10 直径0.46mの円形の土壙で、切合い関係からSK09よりも新しい。深さは0.10mあり、埋土は上層が黒褐色極細～中粒砂質シルト、下層は浅黄色極細粒砂質シルトからなる。出土した遺物は少量で、埴塼22、ベンガラの付着した土師器焙烙、棧瓦などがある。

SK12 調査区北端で一部を検出した土壙で、深さは0.17mある。埋土は黒褐色砂質シルトからなり、偽磔を含む。本遺構からは土師器、瓦質土器、丹波焼、関西系陶器、萩焼、肥前磁器、瀬戸美濃焼磁器、棧瓦や丸・平瓦、泥面子、土人形、砥石、火打石、銭、魚骨、ウロコなどが出土した。また、埴塼、炉壁、鑄型片など鍛冶関連の遺物も多く出土している。

15・16は肥前磁器染付皿・鉢である。15は口縁部に渦文、体部に蝶と葡萄文を配する皿で、高台端部には砂が付着している。今回の調査で出土した遺物の中では最も時期が古く、17世紀前半のものである。16は端反りの口縁部をもつ鉢で、高台は蛇の目凹形高台である。19世紀代のものであろう。23～25は梅干埴塼である。耐火性のある土(図トーン部分)を外面に貼り付けており、類例が大坂城跡(OS97-1次)調査で出土している[大阪市文化財協会1999]。

iii) 包含層出土の遺物(図7・8)

第2層からは土師器、瓦質土器、関西系陶器、肥前磁器、瀬戸美濃焼磁器などが出土したが、第3層以下では遺物は出土していない。10は第2層から出土した瀬戸美濃焼磁器染付の蓋で、19世紀代のものである。攪乱から出土した21は、土師質の鑄型、あるいは焼物などの型とみられる。外面はユビオサエで調整しており、内面には草文が彫り込まれている。

3)まとめ

今回の調査で検出された諸遺構はいずれも19世紀代に形成されたものと考えられるが、中でもSK09からはベンガラ製造に使用されたとみられる焙烙が大量に出土した。それらが緑礬を原料とするベンガラ製造の過程で使用されたものであるとすれば、備中吹屋の独占的なベンガラ生産体制が19世紀に入り、綻び始めたことを示唆するものとして、産業史の研究の上でも重要な資料となりうる。

ベンガラ生産の裏付けや実態の解明については今後、微量元素の分析や、焙烙の型式学的研究を進める必要があるが、緑礬を原料とするベンガラ製造過程では大量の亜硫酸ガスが発生するため(註1)、大都市大坂で生産が行われたことについてもその理由を検討する必要がある。土屋家文書(国立史料館蔵)によれば、寛政3(1791)年に「高津(天王寺)御蔵」が廃止された理由として、「湿気が強く米を傷める」ことが挙げられている。また、SK12からは鍛冶関連の遺物が多く出土していることなどから、調査地周辺では「天王寺村錢座」・「高津(天王寺)御蔵」が廃止された後も、居住に適さない環境が一定期間続いたことから、ベンガラ製造や鍛冶などの生産施設が群居していたとも考えられよう。

次に、「天王寺村錢座」・「高津(天王寺)御蔵」がこの地にあった18世紀代に関する成果としては、SK09からセット関係にある肥前磁器染付皿・鉢が出土したことが挙げられる。現段階でそれらを両施設と直接結びつけるのは早計であるが、当該時期のものとしては初めてとなるまとまった資料であり、今後の調査の中でその関係が明らかにされていくことを期待したい。

註)

(1)武田式賀氏(戸田工業株式会社)の御教示による。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005、「天満本願寺跡発掘調査(TN04-1)」報告書：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.13~32

大阪市文化財協会1999、「大坂城跡」Ⅳ

北野信彦・肥塚隆保1998、「江戸時代における鉄丹ベンガラの製法に関する復元的実験」：文化財保存修復学会誌42、pp.26~34

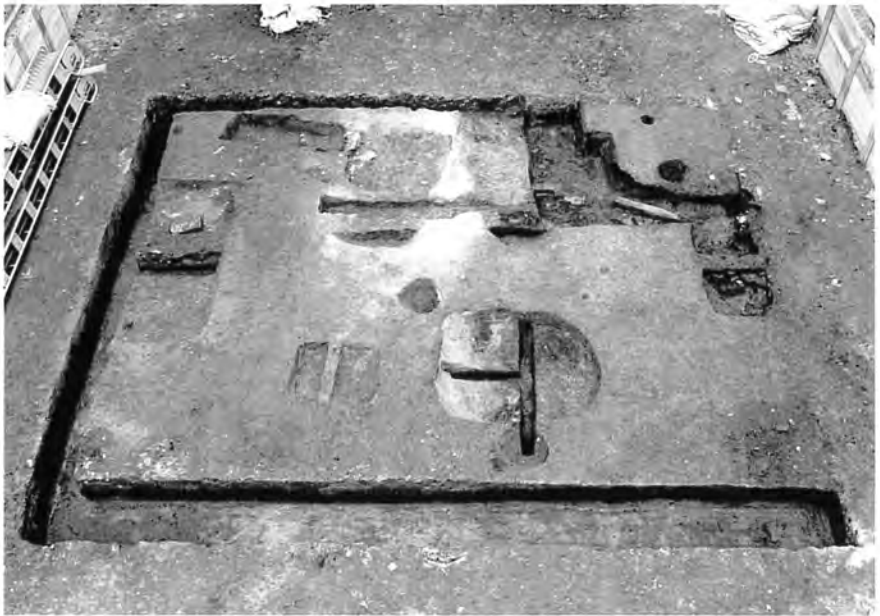
積山洋1999、「大坂の土師質土器」：関西近世考古学研究会編『関西近世考古学研究』Ⅶ、pp.41~53

戸田工業株式会社「彩磁記」(<http://www.todakogyo.co.jp>)

西壁地層断面
(東から)



第2層上面
(西から)



SK08(左下)
(東から)

SK09(右下)
(南から)



難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW07-1)報告書

調査個所 大阪市中央区法円坂2丁目
調査面積 230m²
調査期間 平成19年月9月21日～10月11日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、独立行政法人国立病院機構大阪医療センター(以下、国立病院)に接する中央大通りの南側歩道に当る(図1)。前期難波宮の西限という考えのあるNW88-1次調査のSA303の西約60mになり(図3)、周辺は難波宮や豊臣期大坂城の調査で大きな成果が上がっている地域である。

調査は、中央大通り歩道が国立病院西の南北道との交差点へ至る急な坂を解消する工事に先立って行った。歩行者の通行を確保するため、東西44m、南北5.3mの間を南北2分割して調査し、遺構の有無を確認して記録をとったのちは、真砂土・碎石を敷いてアスファルトによる仮舗装を行って復旧した。掘削・調査・復旧を含めた全作業は、北区を9月21日～10月1日の間、南区を10月2～11日の間に完了した。

報告で使用した示北記号は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)で、TP+〇mと記している。

2) 調査の結果

今回の調査では、難波宮をはじめ江戸時代以前の遺構はまったく検出されておらず、いわゆる地山(更新世の地層)の上に近代以後の地層が堆積していた。更新世の地層の上面は現地表から約20cmの深さであり、東端でTP+21.1m、中央部でTP+20.9m、西端でTP+20.8mと、ほぼ平坦になっていた(図2)。現在、調査区の西の国立病院西側の南北道との交差点は急激に低くなっており、大きなアップダウンがある。しかし、今回の調査結果からこれは旧地形を反映しているのではなく、中央大通りとの接続を良くするために地盤を削込んでいたことがわかった。本来の地形は、調査地点から北西に向けて現況より緩やかに低くなっていったと推定される。

近世の遺構もまったく検出されなかったのは以下の理由が考えられる。

江戸時代における周辺の屋敷割をもっとも正確に表現しているのは、福山藩阿部家「大坂御家中屋敷割図」(福山城博物館蔵)である。この絵図には、藩主阿部伊勢守正福が延享2～4(1745～47)年の間、大坂城代を勤めたときの家臣団の屋敷の割付が記されている。この絵図と、北側の大阪歴史博物館・NHK地域で検出した遺構や現況の境界・道路を整合的に対比すると、ちょうど中央大通り南側歩道付近に農人橋へ至る通りが当ることになる

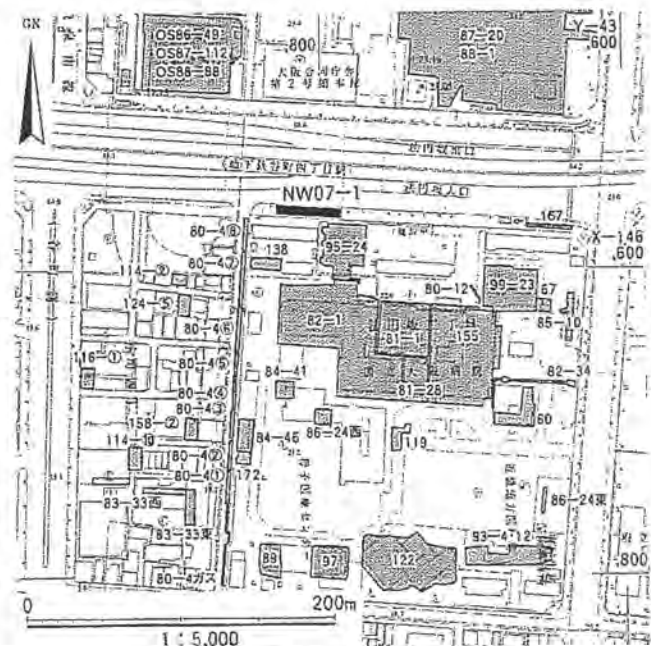


図1 調査地位置図

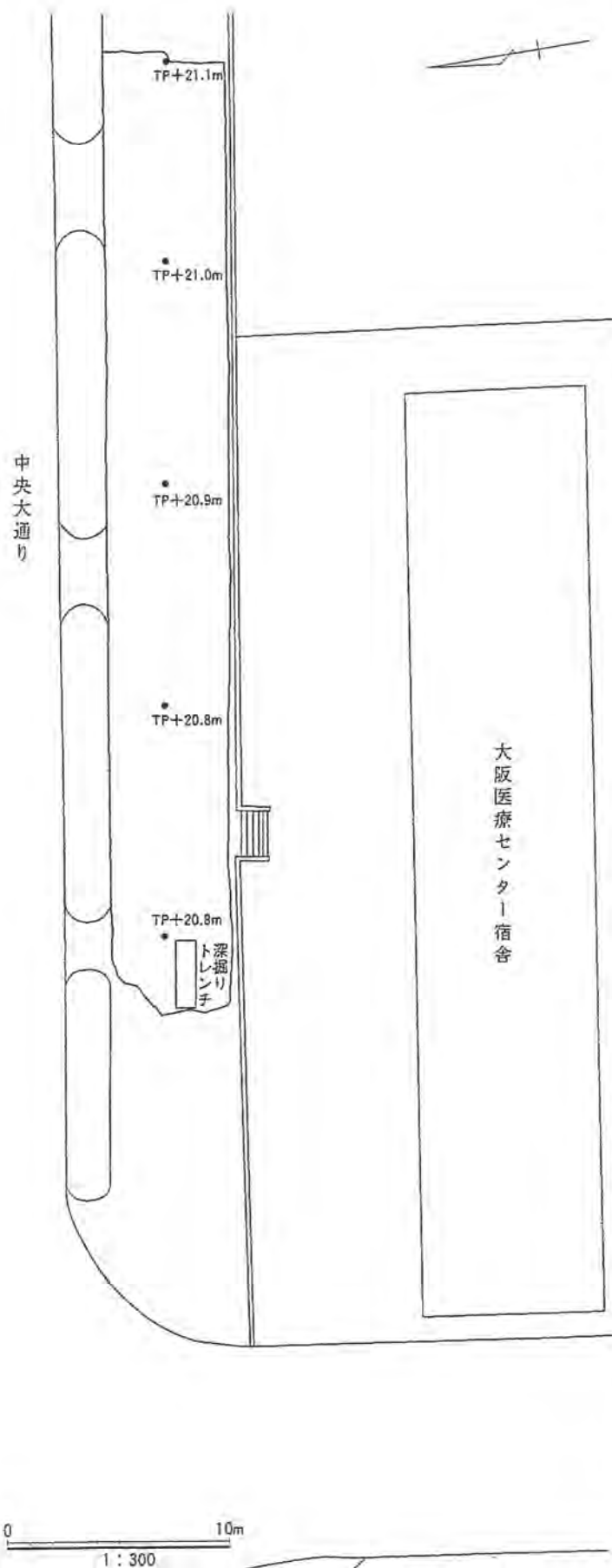


図2 調査区位置図

[大阪市文化財協会1992]。道路内にはゴミ穴などを設けるのは相応しくなく、浅い遺構は削平された可能性があるとして、調査区で近世の遺構がまったく検出されなかったのはこのためと考えられる。

次に、前期難波宮の西端と地形との関係にふれたい。

難波宮跡では、中心部の難波宮跡公園の周辺とともに国立病院敷地に高い部分が広がる(図3)。今回の調査によって、TP+20mの等高線が従来の復元案[寺井誠2004]よりやや北西に張出すことがわかった。その傾斜は緩やかで、国立病院敷地や北側の大阪歴史博物館・NHK地域において難波宮の遺構が占地できる余地は従来の推定より少し広がると考えられる。現況で歩道は国立病院敷地より約85cm低く、この部分が後世に削られた可能性が考えられる。削平がこの程度であれば、本来、難波宮の柱穴が存在したとすれば調査区で検出されてもおかしくないかもしれない。

なお、深さ1.4mまで観察した更新世の地層は、下部0.9mは上方細粒化する細礫質粗粒砂～シルト質細粒砂層で平行葉理が発達し、上部0.5mはシルト質中粒～細粒砂層で波成リプル葉理が発達した。深さ0.3m付近にあったリップルは波長10cm前後、波高3～4cmの2Dリップルと認められた。このリップルの波頭は片側に寄っており、砂干潟の上げ潮時に打ち寄せた脈動流によって形成されたとみられる。波頭方向は北30～40°東であり、東側にあった当時の海岸も似た方向に延びていたと推定される。

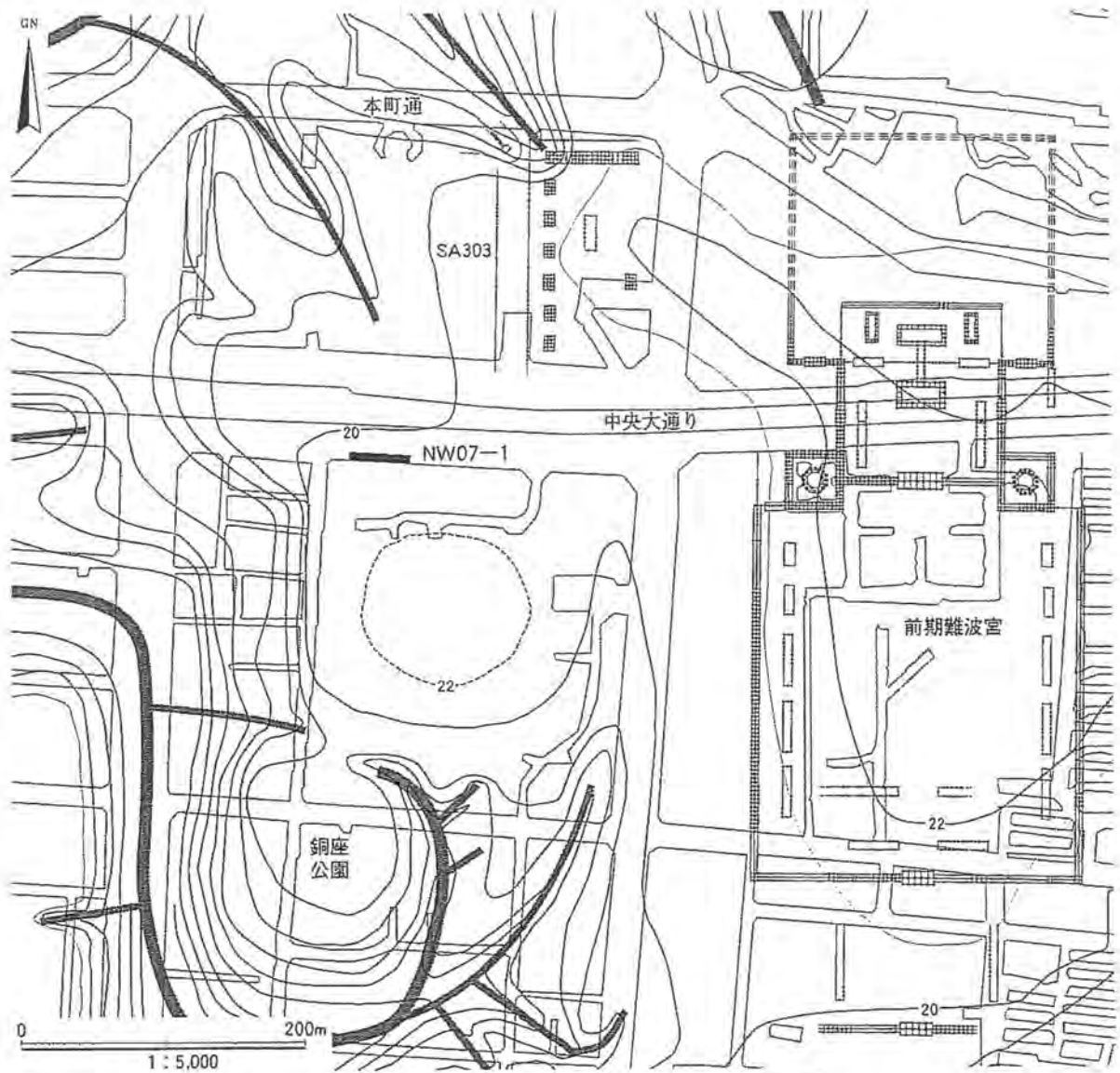


図3 前期難波宮跡と地形復元([寺井2004]を一部修正)

3)まとめ

今回の調査では遺構は検出できなかったが、周辺地域の地形復元に寄与できるデータを得た。難波宮周辺の地形復元、難波宮の西限、西方地域での難波宮の遺構と地形との関係は、今後の確実なデータの積み重ねに期したい。

参考文献

大阪市文化財協会1992、『難波宮址の研究』第九、pp.242-245

寺井誠2004、『難波宮成立期における土地開発』：『難波宮址の研究』第十二、pp.161-170

調査区と中央大通り
(東より)



調査区と国立病院敷地
(東より)



南半調査区全景
(東より)

北半調査区全景
(東より)



調査区西端
(東より)



深掘りトレンチ北壁



難波宮跡発掘調査(NW07-2)報告書

- ・調査箇所 大阪府中央区法円坂1丁目
- ・調査面積 190㎡
- ・調査期間 平成19年10月3日～12月17日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

〈調査に至る経緯と経過〉

難波宮跡では1954年から始まった発掘調査によって前・後2時期の宮殿跡が見つかった。今回の調査地は史跡難波宮跡の西南部で、大手前整肢学園の跡地に当る(図1)。後期難波宮では朝堂院西外郭築地の西側で、五間門をもつ区画(五間門区画)の南端から15m程南側に位置している。

東隣で行われたNW27・28次調査では、五間門区画の南端から15m南側に、同区画の東面1本柱塀を南に延長したラインを東端として、西に延びる3本の柱穴が見つかり[大阪市文化財協会2005]、今回の調査はその西側で柱列の延長を確認することを主目的として実施した(図2)。

調査では東西10m、南北19mの調査区を設定し、南北に基準杭を打設した。現代盛土層から近世の整地層である第2層の上部までを重機で掘削し、それ以下を人力で掘削した。調査区内は旧整肢学園や旧陸軍第八連隊の建物などにより大きく攪乱を受けていたが、18～19世紀代の遺構群を検出したのち、地山上面では豊臣期前後の遺構や後期難波宮の柱穴、宮殿造営前のものとみられる溝・ピットなどを検出した。また、後期難波宮の柱穴が東西方向に並び、2列の柱列を形成することが判明したことから、各柱列の延長線上とその中間点の3箇所を西側に調査面を掘り、柱穴の有無を確認した。12月17日には保護砂による遺構の保護および埋戻しを含むすべての作業を終了した。また調査期間中、12月8日には現地説明会を開催し、多くの市民の参加を得た。

なお、本調査で使用した座標は既往の調査成果との関係上、旧来の日本測地系(国土平面直角座標第VI系)を用いた。また、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を使用しており、以下ではTP+〇mと記した。

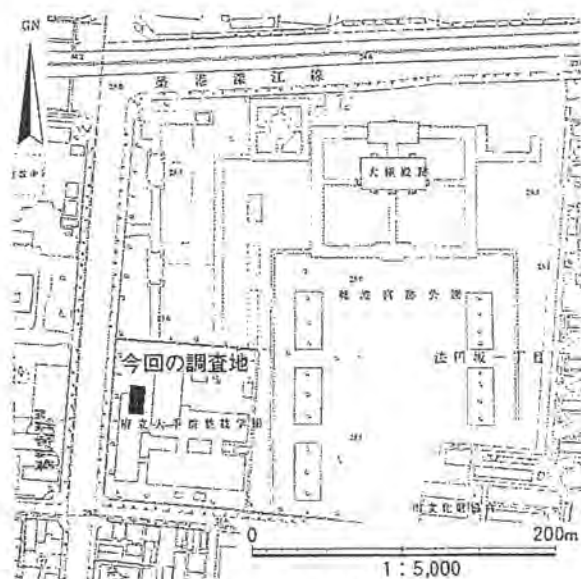


図1 調査地位置図

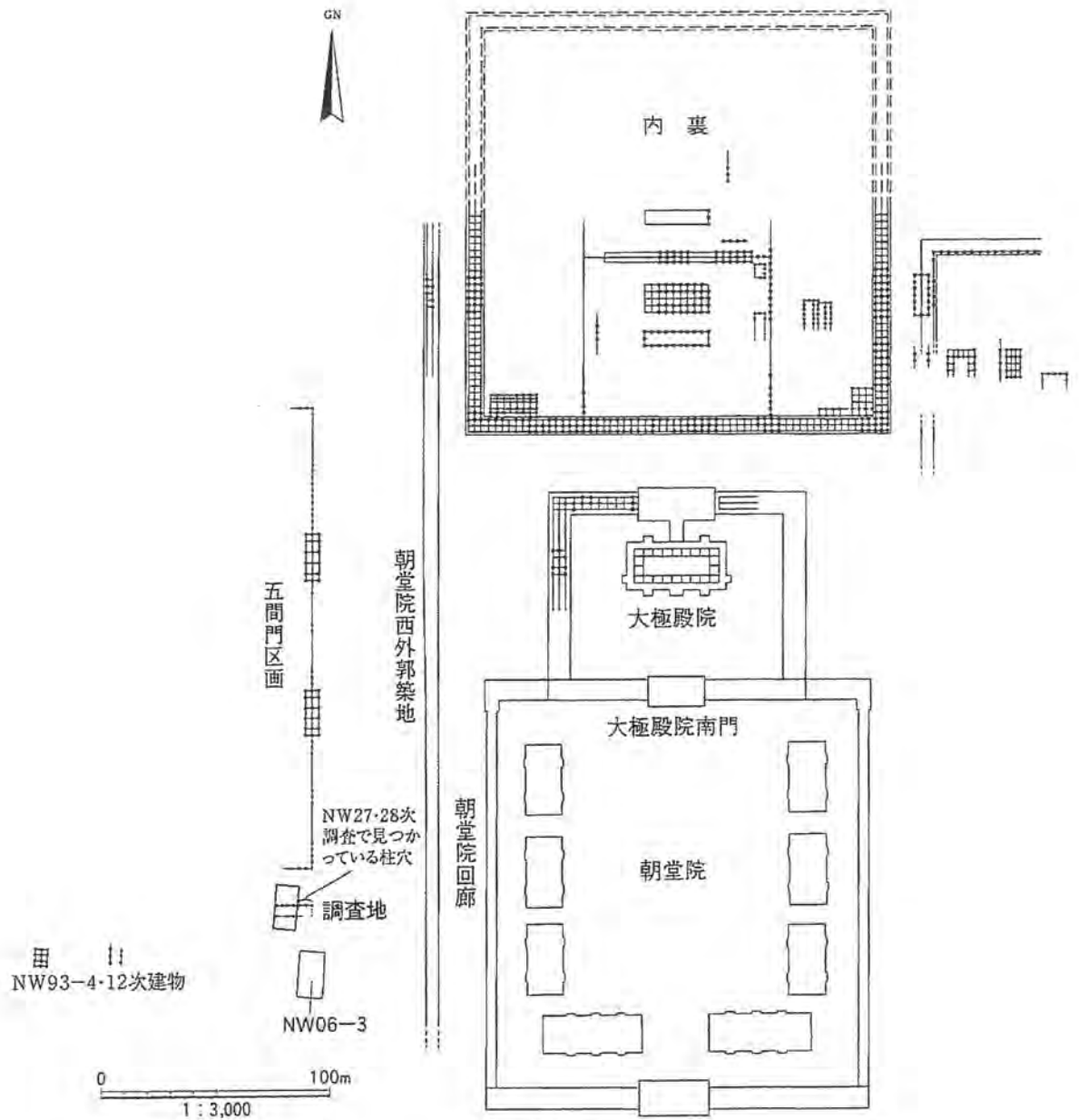


図2 調査区配置図

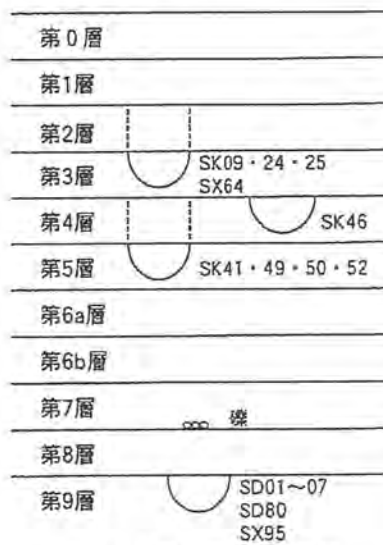


図3 地層と遺構の関係図

〈調査の結果〉

1. 層序(図3・4)

第0層：黄灰色(2.5Y6/1)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする現代盛土層である。

第1層：にぶい赤褐色(5YR4/4)極細粒～極粗粒砂質シルトからなる焼土層である。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～極粗粒砂質シルトを主体とする近世～近代の整地層で、焼土・炭化物・偽礫・礫を含む。

第3層：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルトを主体とする近世の整地層である。上面ではSK09など本層および上位層に伴う18～19世紀代の遺構を一括して検出した。

第4層：褐灰色(10YR4/1)極細粒～中粒砂質シルトを主体とする近世の整地層である。上面ではSK46など近世の遺構を検出した。

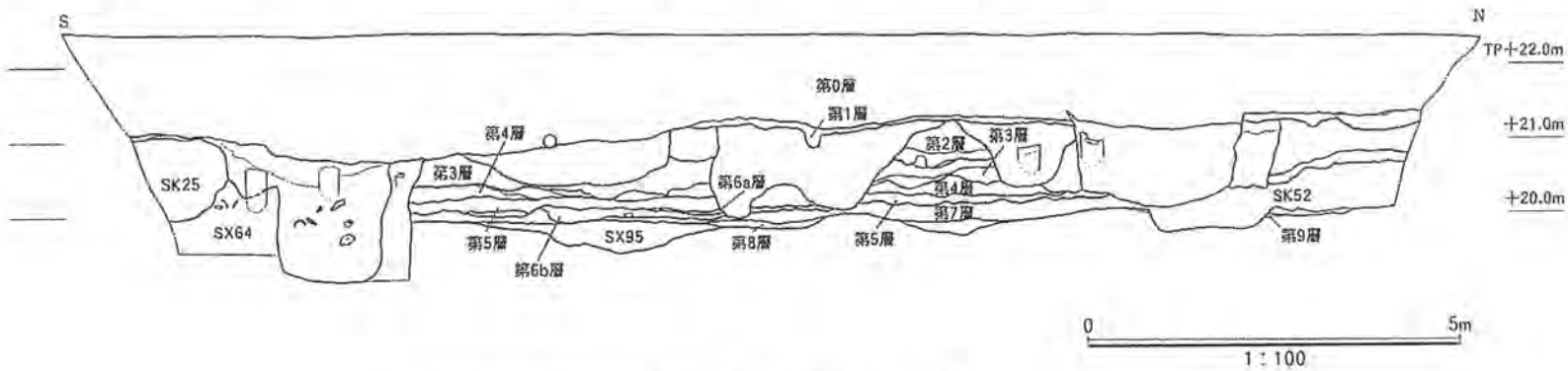
第5層：にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒～中粒砂質シルトを主体とする近世の整地層である。上面ではSK57など近世の遺構を検出した。

第6a層：褐灰色(10YR4/1)粘土からなり、炭化物を含む。

第6b層：黒褐色(10YR3/2)極細粒～細粒砂質シルトからなり、炭化物を多く含む。

第7層：灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトを主体とする豊臣期前後の整地層である。

第8層：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～細粒砂質シルトを主体とする豊臣期前後



- 第0層：黄灰色(2.5Y6/1)極細粒～極粗粒砂質シルト(現代盛土)
- 第1層：にぶい赤褐色(5YR4/4)極細粒～極粗粒砂質シルト(焼土層)
- 第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)極細粒～極粗粒砂質シルト(焼土・炭化物・偽礫・礫含む)
- 第3層：黄灰色(2.5Y4/1)極細粒～細粒砂質シルト
- 第4層：褐灰色(10YR4/1)極細粒～中粒砂質シルト
- 第5層：にぶい黄色(2.5Y6/4)極細粒～中粒砂質シルト
- 第6a層：褐灰色(10YR4/1)粘土(炭化物を含む)
- 第6b層：黒褐色(10YR3/2)極細粒～細粒砂質シルト(炭化物を多く含む)
- 第7層：灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルト
- 第8層：暗灰黄色(2.5Y5/2)極細粒～細粒砂質シルト(粘土偽礫を含み、上面には礫が密に分布)
- 第9層：明黄褐色(10YR6/6)粘土(地山)

図4 西壁地層断面図

の整地層である。粘土偽礫を含み、上面には細～中礫が密に分布している。

第9層：明黄褐色(10YR6/6)粘土からなる地山である。上面では豊臣期前後の遺構や、難波宮後期の柱穴、古墳時代のものとみられる溝・ピットなどを検出した。

2. 遺構と遺物

i) 第9層上面(図3・5・7・9)

地山である第9層上面では豊臣期前後の遺構や、後期難波宮の柱穴、宮殿造営前の溝・ピットなどを検出した。

a. 宮殿造営前の遺構

地山の残りがよい調査区北部では、SP89・90をはじめとする複数のピットや溝SD80など、宮殿造営前のものとみられる遺構を検出した。

SP89は直径0.30m、SP90は直径0.45mの柱穴とみられる。中央部には直径0.10～0.12m程度の柱痕跡がある。平面観察によれば、両者の掘形埋土は明黄褐～黄褐色の極細粒～細粒砂質泥からなり、粘土の小偽礫を含む。柱痕跡は黄褐～にぶい黄褐色の極細粒～中粒砂質シルトからなる。このほかにも調査区北部では柱穴の可能性のあるピットを複数検出したが、建物として組合うものは確認できなかった。

SD80は東西方向の溝で、幅1.0m、深さ0.4m程度ある。埋土は人為的な埋戻し土で、2層に細分される。上層はにぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒～中粒砂質シルトからなり、焼土・炭化物を含む。下層は暗褐色(10YR3/4)極細粒～細粒砂質シルトからなり、焼土・シルト偽礫・礫を含む。本遺構からは土師器、須恵器が出土した。

b. 後期難波宮の遺構

SP01～07は後期難波宮の柱穴である。今回の調査区の東側で行われたNW27・28次調査では五間門区画の南端から15m南側に、同区画の東面1本柱塀を南に延長したラインを東端として、西に延びる3本の柱穴が見つかっているが、SP01～03・07はその延長上にあり、少なくとも7つの柱穴が東西方向に並ぶことが判明した(以下、「北柱列」)。隅丸方形の掘形の一边はSP01・03が1.05m、SP02・07は0.97m程度ある。SP01では直径0.22m、SP02では0.25m程度の柱痕跡が検出されており、柱間寸法は2.50mである。また、残りのよいSP01では検出面の標高がTP+20.4mで、深さは0.6m程度である。攪乱部での断面観察によれば埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄褐色(10YR5/3)極細粒～中粒砂質シルトからなり、焼土・炭化物・粘土偽礫を多く含む。下層は褐色(10YR4/6)極細粒～細粒砂質泥からなり、焼土・炭化物・粘土偽礫を含む。また、柱痕跡はにぶい褐色(7.5YR5/4)極細粒～中粒砂質シルトからなり、礫や粘土偽礫を含む。

一方、北柱列の南側5.30mのところには3つの柱穴SP04～06を検出し、北柱列と平行する東西方向の柱列(以下、「南柱列」)の存在が新たに確認された。隅丸方形の掘形の一边はSP04が1.13m、SP05・06が1.15m程度あり、SP04で検出された柱痕跡は直径0.23m程度ある。残りのよいSP06では検出面の標高がTP+20.2mで、深さは0.7m程度ある。攪乱部での断面観察によれば、埋土は褐色

(7.5YR4/4)極細粒～中粒砂質泥からなり、焼土・炭化物、地山起源の粘土の小偽礫を含む。柱間寸法はSP04とSP06が2.5m、SP04とSP05が5.0m程度と推測され、SP04とSP05の間にはもう1つ柱穴が存在していたとみられるが、SX95による攪乱で確認できなかった。

掘形の平面プランや埋土の特徴、NW27・28次調査で検出された柱列との位置関係などから、これらの柱穴は後期難波宮のものであると考えられるが、こういった施設に伴うものかということについては大きく2通りの考え方が可能である。まず、1つ目は五軒門区画の南側に同様の区画が存在し、北柱列が北面の1本柱塀のものであるとする考え方で、その場合、南柱列は区画内の別遺構のものとなる。こうした考え方は区画の存在を前提としており、北柱列の東端が五間門東面1本柱塀を南に延長したライン上に位置すること、南西約30mの場所で行われたNW06-3次調査ではそのライン上で築地塀基壇の存在をうかがわせる高まりを検出した

こと[大阪市文化財協会2007]、南北柱列の掘形の規模に若干の差異があることなどがその根拠として挙げられる。

一方、2つ目は南北柱列が組み、1つの建物が存在したとする考え方である。南北柱列の中間で調査面を西側に上げたが、妻柱は検出されなかったことから、想定される建物の規模は梁行2間、桁行7間以上となる。こうした考え方は、南北柱列が平行し、柱間距離も等しいという柱穴群の平面配置を根拠としている。攪乱を受けていたため、NW27・28次調査では南柱列を延長したライン上で柱穴を確認できなかったが、この考え方では建物の北壁が区画の一部を構成するか、あるいは区画そのものが存在しないこととなる。

五間門区画は宮廷の儀式や宴会を行う施設、皇太子・上皇などの皇族が生活する御在所、外国からの使節を迎える迎賓館など、特別な性格を有する区画であった可能性が高いと考えられているが、その南側の地域は調査例が少なく、これまで実態がよく分かっていなかった。今回の調査で南柱列が見つかったことにより、区画の有無はともかくとして、五軒門区画のすぐ南側に建物が存在した可能性が強くなったといえよう。

そうした建物の性格を考える上でひとつの参考となるのが、1993年に国立大阪病院(現独立行政法人大阪医療センター)内で行われた(NW93-4・12次)調査の成果である[大阪市文化財協会2004a]。



図5 第9層上面遺構平面図

今回の調査地の西方約100mに当り、五軒門区画の南側にもう1つ区画があるとすれば、同調査地もその区画内に位置すると考えられる。同調査では、前期と後期の難波宮のいずれに属するかその時期について議論はあるが、2棟の建物が見つかっており、1棟は梁行2間の側柱建物、別の1棟は桁行3間(7.9m)以上、梁行2間(5.3m)の総柱の掘立柱建物と考えられている。また、両者とも柱穴の掘形は1辺が1.00~1.30mで、今回の調査で見つかったものとはほぼ同規模である。総柱建物が床面に重量がかかる倉などに用いられる建築様式であることから、特別な性格をもった空間であったとみられる五間門区画とは異なり、その南側には実用的な建物群が配置されていた可能性もある。

c. 豊臣期前後の遺構

SX95は調査区中央西寄りで検出した遺構である。一辺が6m程度の方形で、西は調査区外に続いている。深さは0.8m程度あり、埋土は偽礫を含む褐色(10YR4/4)極細粒~細粒砂質シルト層などからなる。本遺構からは、中世から豊臣期にかけてのものと思われる土師器や常滑焼片、古代の瓦などが出土した(図7・9)。21は土師器皿である。1・3は6015A型式の重圏文軒丸瓦である。5は6572型式の重圏文軒平瓦である。4は面戸瓦である。6は鷗尾の破片とみられ、胎土には直径1mm程度の長石を多く含む。

ii) 第3~5層上面(図3・6・8・9、表1・2)

a. 第4・5層上面

第4・5層上面では土壌SK41・46・49・50・52ほかの遺構を検出した。SK46は第4層上面で検出したが、整地層である第4・5層の層相は近似しており、遺構の掘込み面は明確でないものが多い。これらの遺構のうち、SK41からは18世紀前半、SK50からは18世紀代の遺物が出土しているが、その他の遺構からは時期を判断できる遺物は出土していない。

SK41は調査区の北端で検出した土壌で、北は調査区外に続いている。深さは1.3m程度あり、埋土は焼土・炭化物・シルト偽礫などを含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質極細粒~極粗粒砂層などからなる。本遺構からは土師器、瓦質土器、丹波焼、備前焼、肥前陶器、軟質施釉陶器、肥前磁器、魚骨やウロコなどが出土した(図9)。23は完形の軟質施釉陶器灯明受皿である。体部外面の調整はヘラケズリで、器面全体に鉄化粧を施したのち、内面から口縁部外面にかけて柿釉をかけている。31は肥前磁器染付碗である。

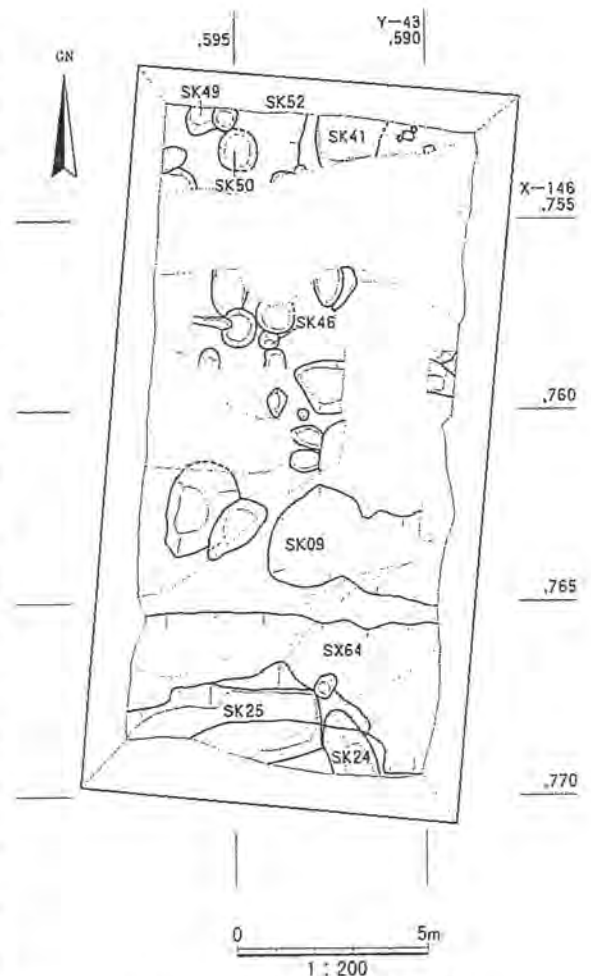


図6 第3~5層上面遺構平面図

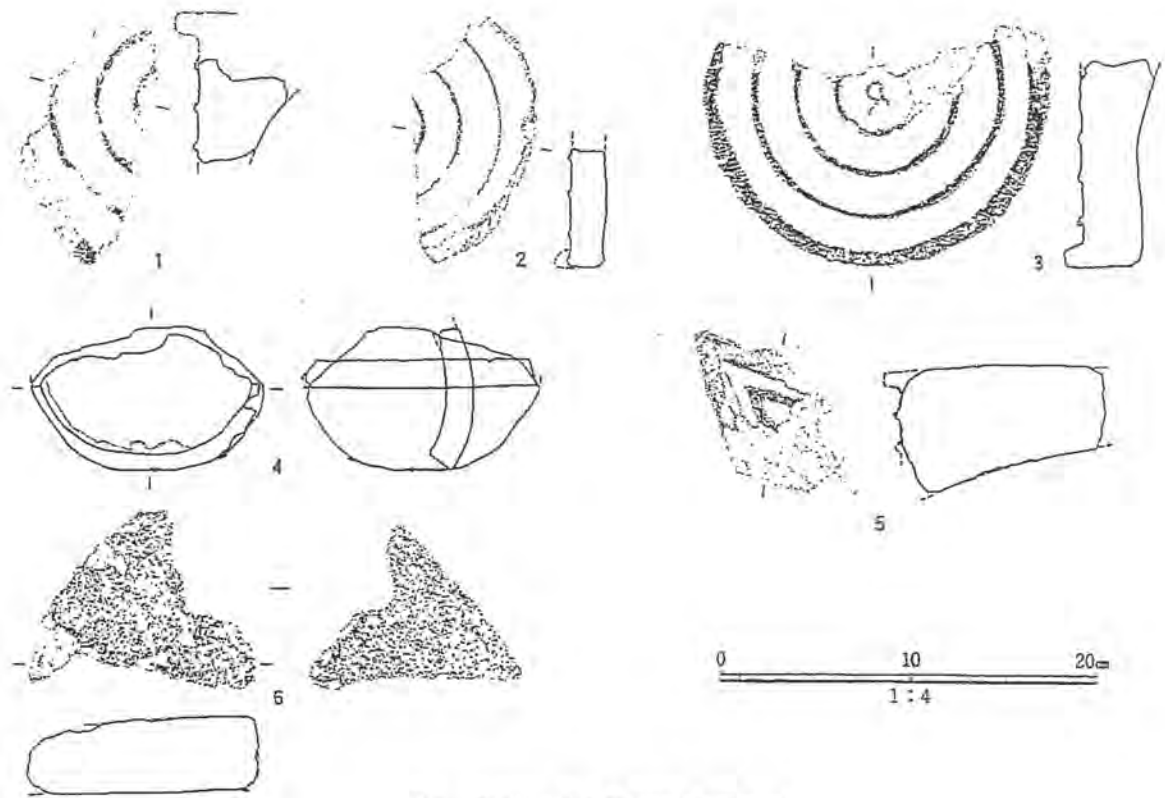


図7 SX95・第7層出土遺物実測図
SX95 (1・3～6)、第7層(2)

b. 第3層上面

第3層上面で土壙SK09・24・25やSX64など、本層および上位層に伴う18～19世紀代の遺構を一括して検出した。以下、主要な遺構について触れる。

SK09は調査区の東半で検出した大規模な土壙で、東は調査区外に続いている。完掘できなかったが深さは1.6m以上ある。埋土は焼土・炭化物・粘土偽礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒～中粒砂質シルト層などからなり、陶磁器、銭貨、イヌの下顎骨や貝類など、18世紀代を中心とする多くの遺物が出土した(図8)。

7は完形の土師器皿、12は備前焼播鉢である。11は当地域で出土例の少ない瀬戸美濃焼播鉢である。内外面に薄く鉄釉を施しており、露胎の底部外面には糸切り痕が観察される。10は丹波焼甕である。外面全体と口縁部の内面には鉄釉を施す。9は完形の丹波焼壺である。底部外面と頸部以下の内面を除いて鉄釉が施されており、外面には部分的に自然釉がかかる。内面には酸化鉄が付着しており、鉄漿壺として用いられたと考えられる。18は肥前陶器刷毛目鉢である。見込みは蛇の目状に釉剥ぎしており、高台端部には砂が付着している。13は京・信楽系陶器碗である。8は完形の軟質施釉陶器「ゆずでんぼ」である。体部の外面は果実を模して全面を浅く刺突しており、中ほどには4箇所の指頭大の凹みがある。また、外面には黄色の釉を施しており、3箇所に緑色釉で葉を描く。15～17は肥前磁器染付碗、14・20は皿、19は輪花鉢である。14は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として用いられたとみられる。内底面は蛇の目状に釉剥ぎしている。また、図化していないが19・20の高台内には渦「福」銘があり、20には5つのハリ支えの跡が残る。

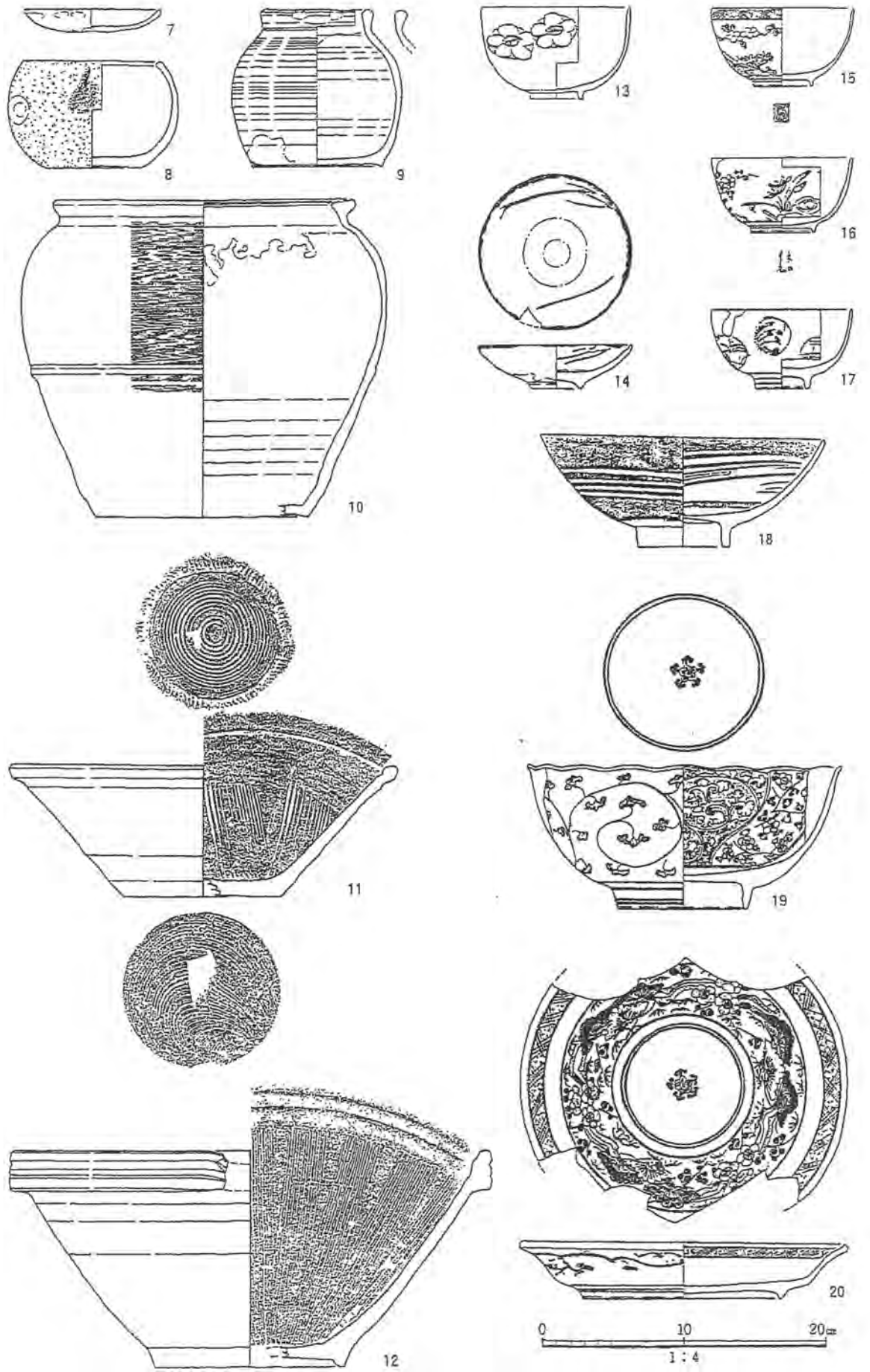


图8 SK09出土遗物实测图

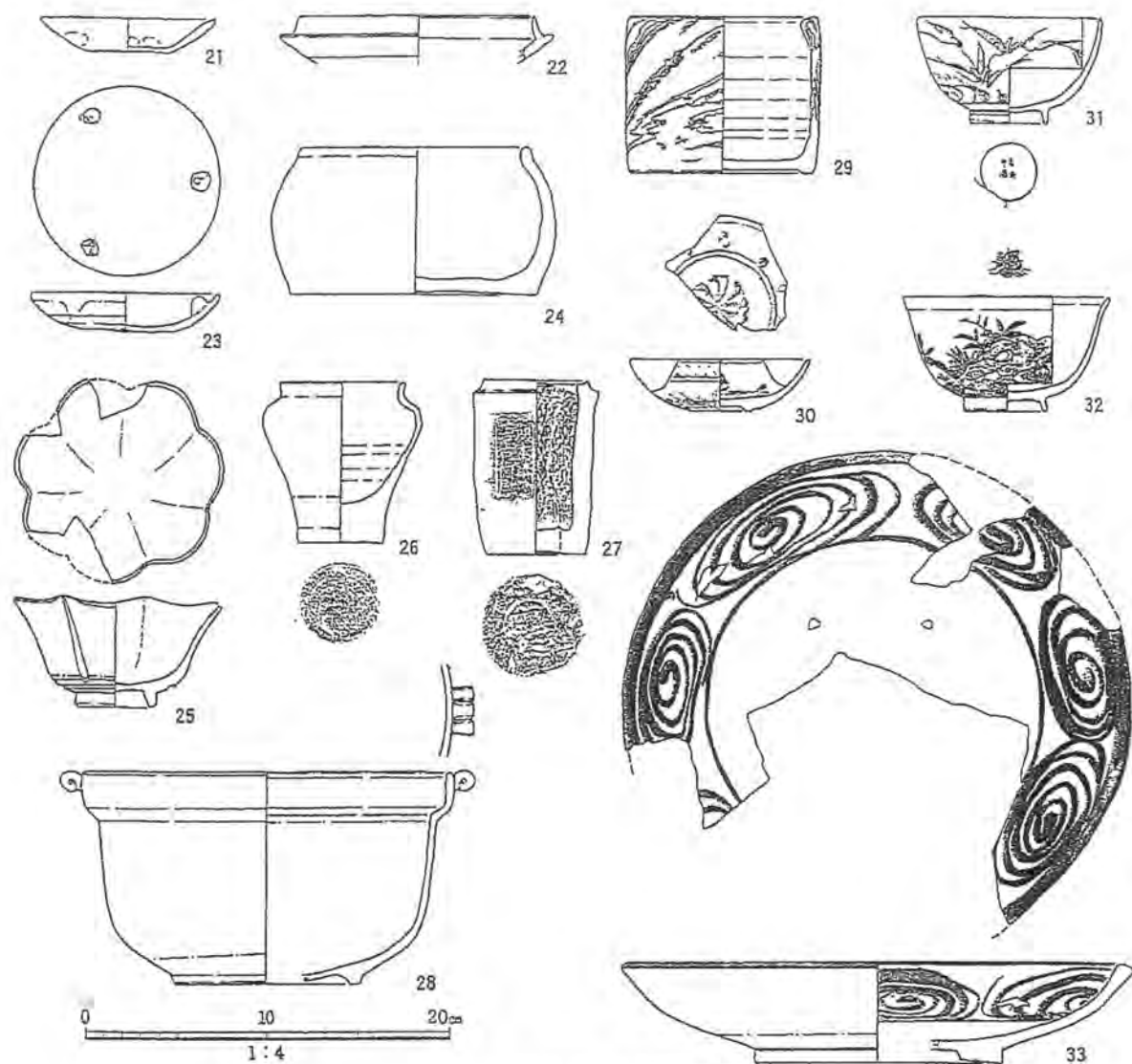


図9 SK25ほか出土遺物実測図

SK41(23・31)、SK25(25・28・29・32・33)、SX95(21)、
第3層以下(30)、第7層上面(22)、重機掘削中(26)、攪乱(24・27)

SK25は調査区の西南端で検出した大規模な土壌で、西は調査区外に続いている。深さは1.1m程度である。埋土はオリブ黒色(5Y3/2)極細粒～中粒砂質シルトからなり、炭化物や粘土偽礫を含む。本遺構では陶磁器、鞆の羽口、貝類、哺乳類骨や魚骨など、18世紀後半から19世紀にかけての遺物が大量に出土した。29は関西系練り込み火入れである。明赤褐色の精良な胎土に白泥を練り込んでおり、底部は渦巻状の粘土紐痕跡が観察される。28は関西系の陶器鍋である。筒状の把手が2箇所につくとみられ、体部の下部から底部にかけての外面と、口縁部の内面は露胎である。33は瀬戸美濃焼陶器馬の目皿、25は萩焼鉢、32は肥前磁器染付碗である。

c. 貝類(表1)

今回の調査では近世の遺構群や包含層から1444個体の貝類が出土した。出土量の多い遺構について見てみると、SK25の561個体を筆頭に、SK19が401個体、SK50が351個体と続いている。SK19は19世紀代、SK25は18世紀後半から19世紀代、SK50は18世紀代の遺物を伴う廃棄土壌であるが、ヤマトシジミの占める割合がSK19は97%、SK25は96%、SK50は91%と、いずれも圧倒的である。ま

表1 遺構別出土貝類一覧

遺構・層名	フネ ガイ科	アカ ガイ	イサ ガイ	ハマ グリ	ササ シジミ	オノ ガイ	ソノ フネ	ヤマト シジミ	イシ ガイ	トブ ガイ	アカ ニシ	アサ ビ	カキ 77ビ	カ 77ビ	イサ サコ	サ エ	クサハ ニ マイ
SK09				1				2				○					
SK19		1		4				389(合1)	1	5	1						
SK24				1				1									
SK25?	○	○	○	14	1		4	536			2	○			2	蓋1	1?
SK41				3				26									
SK49				2												3	
SK50		4		25				319								蓋3蓋1	
SK52										1							
SX64				2								1					
第2層		17		5													
攪乱・側溝		9		35	3	1?	3	4		2		2	1	6			

た、SK19・25には通有のヤマトシジミに比して側歯角が広く、低い殻頂をもち、輪脈が明瞭であるなど、マシジミに似た特徴をもつタイプが多く含まれていた。大坂城・城下町周辺の地域における貝種構成の時期的な変化については、18世紀から19世紀にかけて、それまで圧倒的であったハマグリ
の比率が低下するのに対して、ヤマトシジミの比率が上昇する傾向が見られ、またその中でも側歯角の広い新たなタイプが含まれるようになる[池田研2004・2005]。今回の調査で出土した貝類はそうした傾向を裏付けるとともに、蓄積が少なかった18世紀以降の資料に関するデータを補完するものとして重要な意味をもつといえよう。

d. 銭貨・鍛冶関連遺物(表2)

今回の調査では寛永通寶を中心に、14点の銭貨が出土した。そのうち、SK46出土の祥符通寶、SK50・52出土の元豊通寶、攪乱出土の元祐通寶は北宋銭あるいはその模鑄銭である。また、SK25からは鞆の羽口が、SX64からは同じく鞆の羽口と埴塙片が出土している。

表2 遺構別出土銭貨一覧

出土層・遺構	銭種
SK09	(古)寛永通寶
SK25	(古)寛永通寶
SK41	寛永通寶
SK46	祥符通寶
SK50?	元豊通寶
SK52	元豊通寶
SX64	寛永通寶
側溝・攪乱	寛永通寶6点 元祐通寶

3. 包含層出土の遺物(図7・9)

第7層から出土した2は6014型式の重圈文軒丸瓦である。第7層上面で出土した22は須恵器杯身である。TK209型式に属するものであろう。第3層以下で出土した30は中国製青花皿である。体部外面の下端を露胎とするが、碁笥底内は施釉している。

このほか、削平された遺構に伴っていたとみられる遺物が、攪乱などから大量に出土している。ここでは完形の土師器胞衣壺あるいは火消壺24、陶器壺26、焼塩壺27を図化した。重機掘削中に出土した26は北部九州産とみられる陶器壺で、底部は非常に厚く、糸切り痕が観察される。水飴を納める壺として用いられた可能性がある。当地域では広島藩蔵屋敷跡など、蔵屋敷を中心に出土例が見られる[大阪市文化財協会2004bほか]。27は「堺本湊焼 吉右衛門」の刻印をもつ焼塩壺で、全国的にも類例が少ない[小川望2000]。大阪府内では初出の資料とみられる。成形は板作りで、底部は粘土円盤を充填しており、体部内面には全面に布目が観察される。胎土は精良で、微細な長石・チャート粒を含む。

〈まとめ〉

今回の調査では、これまでどのような施設が配置されていたか不明な部分が多かった、後期難波宮五間門区画の南側の地域の構造を検討する上で新たな知見を得ることができた。まず、五間門区画の南側で同様の区画の存在を想定する根拠となってきた東西柱列の西延長上で、さらに3つの柱穴が並ぶことが明らかとなった。また、その柱列の南側には新たに3つの柱穴が見つかり、東西方向に並ぶもう1列の柱列が存在することが確認された。

現状では2つの柱列の関係を断定できる材料はないが、いずれにせよ当該地域に建物が存在した可能性が強くなった。今後、調査地周辺の調査が進めば区画の有無をはじめ、建物の規模やその性格などが次第に明らかになるものと期待される。

引用・参考文献

池田研2004、「大坂城下町跡出土貝類の分析」；大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.452-467

2005、「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」；大阪大学考古学研究室編『待兼山考古学論集 一都出比呂志先生退任記念-』、pp.859-886

小川望2000、「「堺本湊焼／吉右衛門」の刻印をもつ焼塩壺」；江戸在地系土器研究会編『江戸在地系土器の研究』Ⅳ

大阪市文化財協会2004a、『難波宮址の研究』第十二

2004b、『広島藩大坂蔵屋敷跡』Ⅱ

2005、『難波宮址の研究』第十三

2007、『平成18年度難波宮跡環境整備事業に伴う難波宮跡発掘調査(NW06-3)報告書』

西壁地層断面
(北東から)



第9層(地山)上面
(北から)



調査区北部の
宮殿造営前の遺構群
(西から)



後期難波宮の柱穴SP01～07、
豊臣期前後の遺構SX95
(北西から)



北柱列SP03
(南から)



南柱列SP04・06(左下)
(北西から)

同SP05(右下)
(南東から)



大坂城跡発掘調査(OS07-4)報告書

調査箇所	大阪市中央区錦屋町 2-5
調査面積	30m ²
調査期間	平成19年 8月 1日～ 8月 4日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南 秀雄、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城の西側惣構の中央部に位置し、上町台地の頂部からやや西に下りた斜面地にある(図1)。周辺の調査から、この地の北約100mには南南西方向の深い開析谷が復元され、調査地はその谷の南側斜面に当たっている。近隣で実施された調査では、OS87-18次調査の奈良時代の井戸、OS89-23次調査の奈良時代包含層、OS87-14次調査の豊臣期の背割下水など、奈良時代から豊臣・徳川期の遺構・遺物が多数見つかっている[大阪市文化財協会2003]。

今回の調査地において大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約180cm以下の各地層から、古代から中世の遺物が出土した。当該期の遺構の存在を確かめるために、本調査を実施することとなった。

調査に先立ち、7月26日から調査担当者が適宜立ち会い、調査区南側全体の現地地表下180cmまでを重機で掘削し、場外搬出した。その後、調査区を南北10m、東西3mの長方形に設定し(図2)、人力による遺構の検出・掘削を8月1日から開始した。遺構・地層の記録作成等を4日まで行い、実働4日間で現場作業を終了した。

試掘調査の所見どおり、現地地表下180cm以下の地層からは奈良時代を中心とする、古代から中世の多様な遺物がコンテナ2箱分出土した。しかしながら、調査の進行とともに、最終調査面である地山面が当初の想定以上に深いことが明らかとなったため、安全な掘削深度、土置き場の確保を考慮して、順次、調査面を縮小せざる得なかった。地山層は検土杖によって一部で確認したのみであり、調査は地層の記録が中心となった。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いている。本文・挿図中ではTP+〇mとしている。



図1 調査地位置図

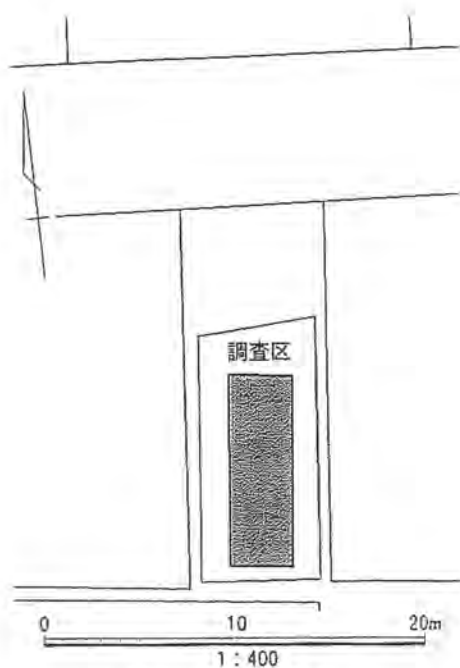


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

本調査地の地盤高はTP+約9.5mである。重機掘削後にTP+8.0mで確認した最上層から、TP+5.2mで確認した地山層まで、11層に分類した(図3・4)。

第1層は黄褐色粘土偽礫を多く含んだ、しまりの悪い黄褐色の粗粒砂質シルトの盛土層である。遺物は確認できなかったが、本層の上面で確認した2基の土壙からは、19世紀代の磁器が出土した。層厚は最大で40cmであった。

第2層は粗粒砂からなる明黄褐色の水成層であり、遺物は確認できなかった。層厚は最大で15cmであった。

第3層は暗灰色細粒砂の作土層(いわゆる地味土)であり、その上面で畦と思われる幅60cm、高さ約5cmの北西-南北方向の高まりを中央やや北寄りで検出した。高まりの周辺では、動物の足跡と思われる小さな踏込みが多数に見られた。層厚は10~20cmであった。遺物は確認できなかったが、土質の特徴から近世以降の地層の可能性が高い。

第4層はにぶい黄褐色粗粒砂質シルトの作土層であり、遺物は中世の東播系須恵器鉢が出土した。層厚は15~20cmであった。

第5層はにぶい黄褐色粗粒砂質シルトの作土層であり、奈良時代の須恵器が出土した。調査区中央から北側に分布し、最大層厚は60cmであった。

第6層は褐色中粒砂質シルトの自然堆積層である。奈良時代の土器が出土した。層厚は北部に向けて大きくなり、最大50cmであった。

第7層は黄灰色粘土質シルト・粗粒砂質シルトからなる盛土層である。調査区南部から中央にかけては、地山と類似した粘土質シルトであるが、北半部では、粗粒砂、小礫を多く含む。奈良時代の土器が出土した。層厚は最大70cmであった。

第8層は灰色中粒砂の水成層であり、古墳時代の土器、円筒埴輪、奈良時代の土器が出土した。層厚は20cmであった。本層と第9層からは、一辺80cmの巨礫のほか、人頭大、拳大の未加工の礫が多数見つかった。これらはいずれも設置されたものでなく、掘込まれたような乱雑な状況で検出された。

第9層は灰色細粒砂の水成層であり、遺物は確認できなかった。層厚は20cmであった。

第10層は灰色細粒砂の水成層であり、遺物は確認できなかった。層厚は50cmであった。

第11層は黄褐色粘土質シルトの地山層である。検土杖により、確認した。

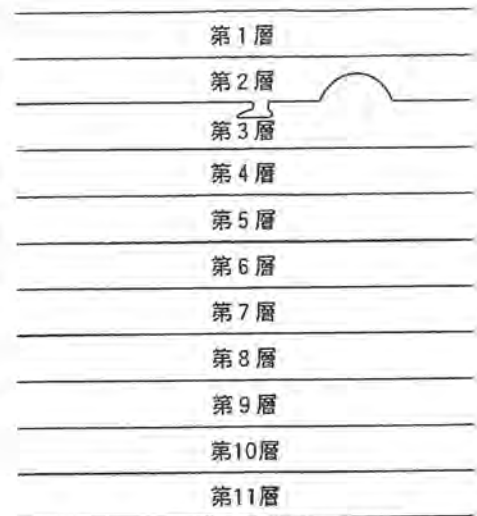


図3 地層と遺構の関係模式図

ii) 遺構と遺物(図5・6)

今回の調査では、明確な古代~中世の遺構を確認することはできなかったが、当該期の多様な遺物が出土した。土師器甕1、円筒埴輪2は第8層から出土した。前者は口縁端部をややつまみ上げた肉厚

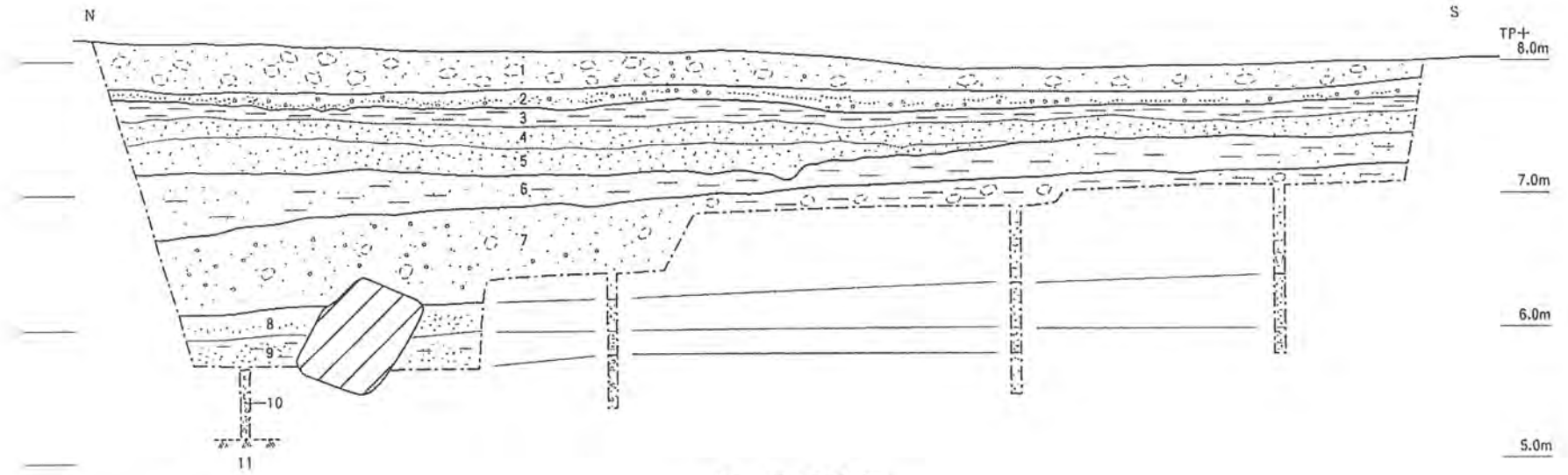


图4 調査区断面图

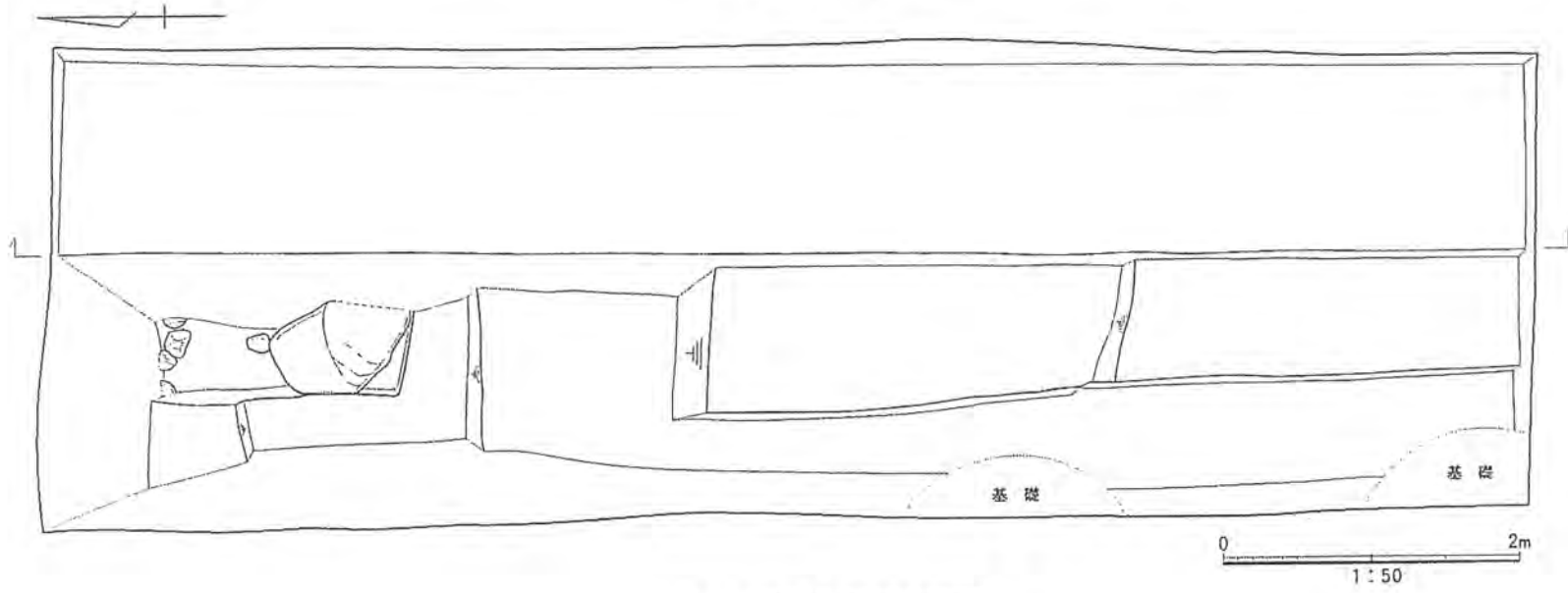


图5 調査区最終調査面平面图

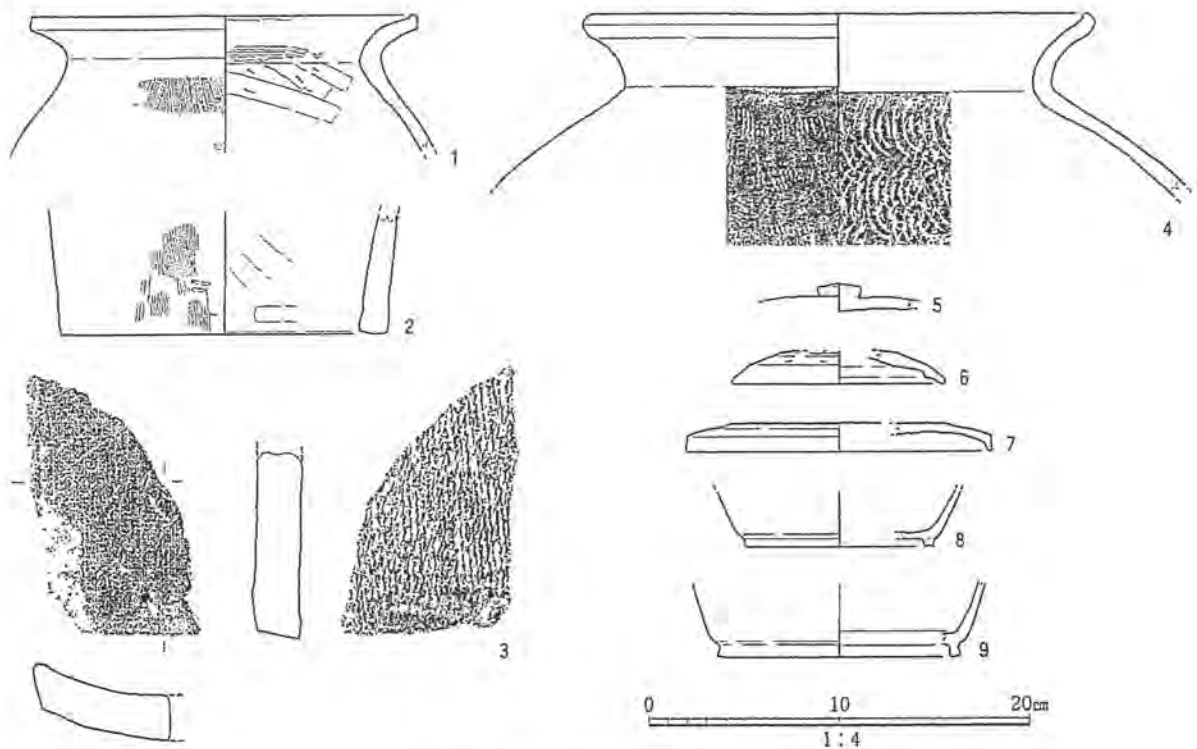


図5 遺物実測図
第8層(1・2)、第5層(3～9)

な甕であり、古代に多いタイプである。後者は直径20cmぐらいの小型の円筒埴輪であり、後期に属するものだろう。平瓦3、須恵器甕4、杯蓋5～7、杯B8・9は第5層から出土した。平瓦3は縄目タタキを施す。須恵器はいずれも小片であるが、杯G蓋6が7世紀後半から末に属する以外は、奈良時代に属する。

3) まとめ

本調査地では、中世以降の遺物は第4層で東播系須恵器鉢が1点出土したのみで、そのほかは古墳～奈良時代の遺物に限られるが、OS87-14次調査で検出された豊臣期の石列、背割下水や、OS89-23次調査の地層との対比を踏まえると、第7層の比較的大規模な盛土や、第8・9層に投げ込まれた80cm×70cm×60cmの四角い巨礫は、豊臣期以降に属し、古代に遡るのは第8層以下の地層と考えられる。今後、周辺地域の調査が進めば、古代から豊臣期の開発の具体的な姿とともに、個々の遺構・地層の位置づけもより明確になるだろう。

参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

調査地の状況
(北から)



最終調査面の状況
(北から)



巨礫の埋没状況
(北西から)



大坂城跡発掘調査(OS07-6)報告書

調査個所 大阪市中央区大手通3丁目37-3・4
調査面積 85m²
調査期間 平成19年10月7月23日～8月7日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城跡の惣構内にあり、松屋町筋と大手通の交差点の北西角になる。西100m強で東横堀川にかかる大手橋があり、大坂城の防御において重要な場所であったと推測される。周辺ではこれまで多くの発掘調査が行われて、北隣のOS97-45次調査では、豊臣後期の堀と推定される南北の大きな溝(SD01)や豊臣前期の南北方向の土塁状遺構が、西側のOS06-4次調査では豊臣前期の屋敷境の塀や礎石建物が見つかった(図1・5)。

大阪市教育委員会の試掘調査では、現地表下2.1mで大坂夏ノ陣の際と推定される焼土層が見つかり、その下の地層の残存状況が良好なことから本調査を実施することとなった。調査は江戸時代初期の整地層である第2層上面より開始し、OS97-45次調査のSD01と一連のものとして推定される豊臣後期の大きな溝SD801を掘上げて記録を取ったところで終了し、埋戻した。SD801の底で地表から4m以上に達したことから、調査期間との兼ね合いから、周辺で調査されている豊臣前期の調査は断念した。

報告で使用した方位は磁北と座標北、標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)で、TP+〇mと記している。

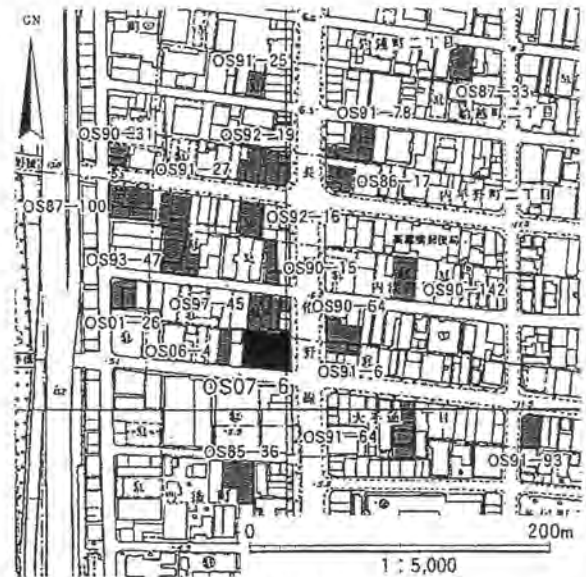


図1 調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図2・3)

第1層：初期を除く江戸時代の整地層で層厚は約90cmである。大まかにa～c層に区分した。

第2層：大坂夏ノ陣後最初の整地層で、この上面で初期伊万里を出土したSK201を検出した。黄褐色(2.5Y5/4)粗粒砂混り粘土～シルトの偽礫から成り、層厚は25～35cmである。

第3層：灰オリーブ色(5Y4/2)シルト

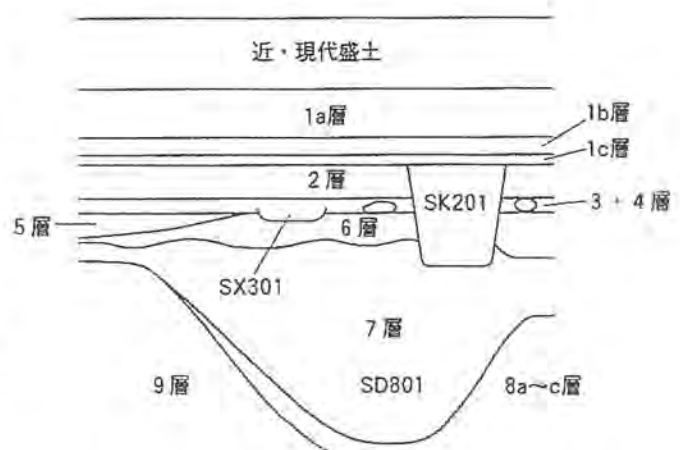


図2 地層と遺構の関係図

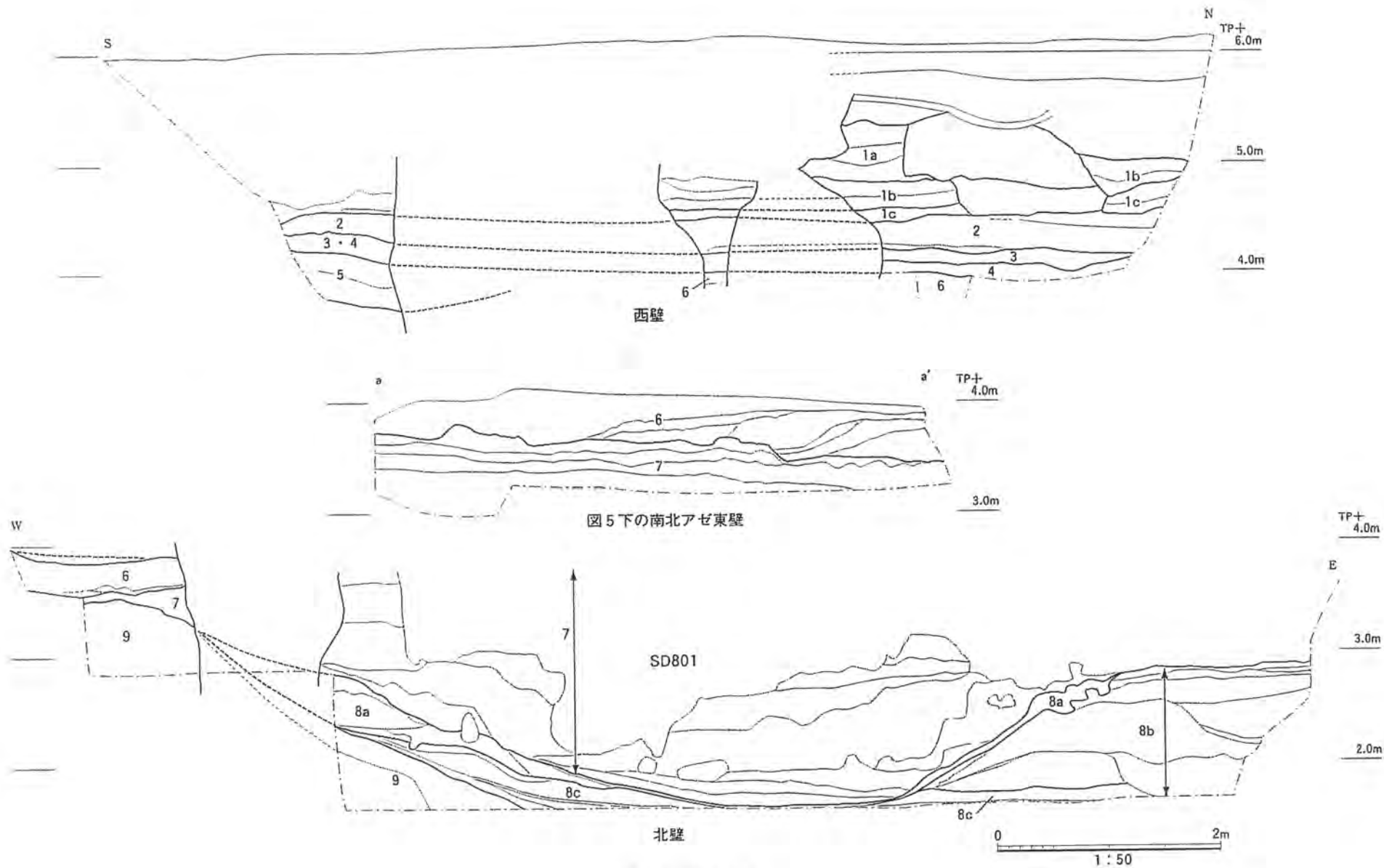


図5下の南北アゼ東壁

図3 地層断面図

質粗粒砂層で、層厚は10cmである。第3・4層は豊臣末期の薄い整地層で、第3層の上面には点々と炭が拡がっており、これが大坂夏ノ陣に関連する。

第4層：にぶい黄色(2.5Y6/4)シルト偽礫混り細粒砂層で、層厚は10cmである。

第5層：調査区の南西部にしか存在しない明黄褐色(2.5Y6/6)シルト混り中粒砂層で、最大層厚は45cmである。

第3層の層中から第5層上面では礎石や土塼、竈などが検出されており、これらは共存していた可能性のある豊臣末期の遺構である。

第6層：明黄褐色(10YR6/8)シルト偽礫混り粗粒砂層で、層厚は55cmである。豊臣後期の盛土で、北から南へ作業が進められている。

第7層：黄褐色(2.5Y5/6)シルト混り粗粒砂層などからなる豊臣後期の盛土で、これにより南北の大きな溝SD801は埋まる。第7層はほぼ平らに盛土している点が、第6層と異なる。

第7層の上面は東西に平行する凹凸を成しており、畠と推定した。第7層上端の5～20cmの間は褐色味を帯び、畠の作土と考えられる(写真1頁目下段)。また、畠間と推定したところには、畠の機能時堆積層と考えられる厚さ3mm程度の薄い水成層があり、これによっても第7層から6層に至る土盛り過程で休止面があり、盛土作業の中断期に耕起されていたことがわかる。

第8層：SD801の前身の遺構の埋土を第8層とした。8a層はにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂層などから成り、最大層厚は47cmである。8b層は黄褐色(2.5Y5/6)シルト偽礫混り中粒砂層などから成る盛土で、これを東側に盛ることでSD801に近い形態になったと推定される。8c層はにぶい黄色(2.5Y6/4)中粒砂の水成層を主とし、層厚は30cm以上である。

第9層：調査区の西にあるオリーブ褐色(2.5Y4/6)シルト質粗砂層で小礫を含む。層厚70cm以上の盛土で、北隣のOS97-45次調査で南北方向の土塁状遺構としたものと関連する可能性がある。

第8・9層が豊臣前期まで遡るのか否かは、出土遺物からはわからなかった。

ii) 遺構と遺物

a. 第8層上面(図4～6)

調査区の中央部の大きな落込みは、位置や層序が一致することから、北隣のOS97-45次調査で検出されたSD01と一連のもので、長さ29mの南北溝の南端と推定される(図5)。図4のSD801は埋められる前の最終段階の形態である。幅は、一旦少し平坦になった部位で7.0m、西側のもっとも高いところを起点に測ると約9mになる。深さは東からの比高で1.25m、西側の最も高いところからで1.9mある。SD801の埋土の底には厚さ25cmの水成層があった。SD801の前段階は東へさらに続く、幅の広いものであったと考えられる。また、西側には大きいもので長さ約20cmの石が並ぶところがあった。

この周辺の遺構は、松屋町筋の方向のものと、少し方向が振っている内平野町通や大手通の方向のものが混在しているが[松尾信裕2003]、SD801は松屋町筋と同方向である。

SD801の埋土やSD801と関連する第8層からは1～10の遺物が出土した(図6)。1は瀬戸美濃焼の

鉄釉天目碗、2は肥前陶器の瓶の底部、3は鉄絵の肥前陶器向付である。4・5は中国製青花で、4は粗製の鏝皿、5は碗である。6は土師器土釜で、下半部に煤が厚く付着している。7は土師質の錘で、重さ66.3gある。何かを編むための錘と思われる。8は巴文軒丸瓦、9は砥石、10は北宋銭の元豊通宝(初鑄1078年)である。出土遺物から、SD801が機能していたのは豊臣後期である。

b. 第7層上面(図4)

東西方向の畝3条とそれに伴う畝間と推定される遺構を検出した。畝の幅は0.6~0.8m、高さは最大0.15mである。南北アゼの西ではうまく検出できていない。

c. 第5~3層(図7)

薄い整地層の中で検出面が混在するが、豊臣末期の共存した可能性のある遺構である。東約3分の2は攪乱されており、西端にしか残っていない。

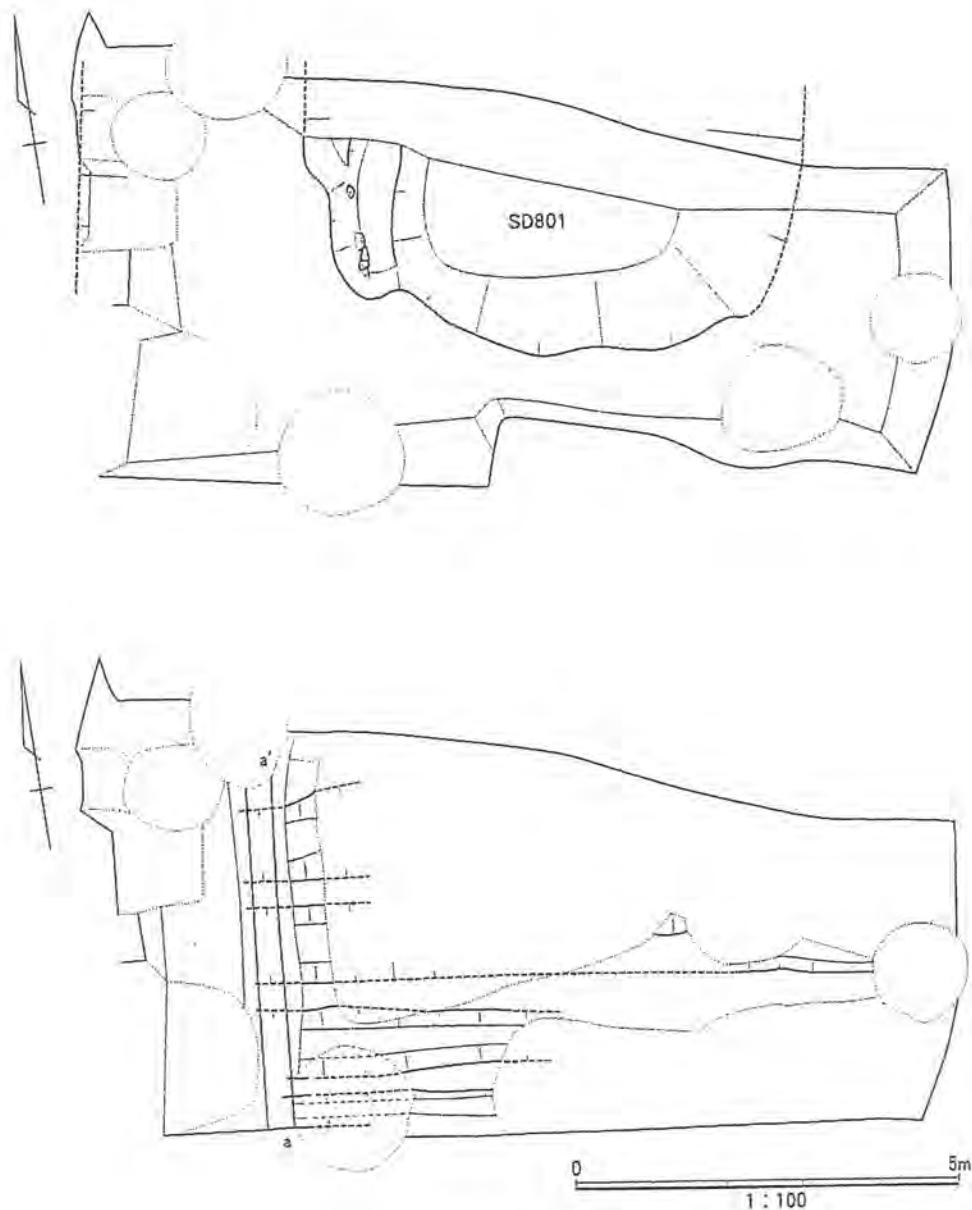


図4 第8層上面(上)、第7層上面(下)遺構平面図

竈SX301は、約10cmの高さまで壁体が残っており、残存部で直径0.65mである。黄白色の粘土で築いた壁体の内側は約5cmまで赤く焼けていた(図8)。三方に石を据え、焚き口は南向きである。周囲には礎石や小規模な土塋SK302・303があり、この辺りは屋内に当たっていた。

SX301から土師器皿12、SK303から焼塩壺の蓋11が出土した。

d. 第2～1層(図7)

確実な第2層上面の遺構はSK201のみで、百番台の遺構は第2層上面で検出したが、第1層かさらにその上から掘込まれた井戸などである。

SK201は長さ1.1m以上、幅0.85mの長方形で、深さ0.8mである。廃棄土塋で、陶磁器や貝殻、魚骨が出土した。13は土師器甕、14は土師器土釜である。13は体部外面の中位以下にヘラケズリ調整を施し、口縁部外面に針で描いた文様が残る。15～17は17世紀前半の肥前磁器染付である。15は花唐草文を描いた碗、16・17は菊花形に型打ち成形した皿である。16は見込みに花、17は口縁部内面に櫛歯文を描いている。また、銅製の煙管吸口18、文様のわからない銅製小柄19が出土した。

e. 各層出土の遺物

第9層からは中国製青花皿20、第7層からは肥前陶器碗21・22と備前焼播鉢23、唐草文軒平瓦24が出土した。また、第2層から焼塩壺の蓋25と肥前陶器碗26が出土した。

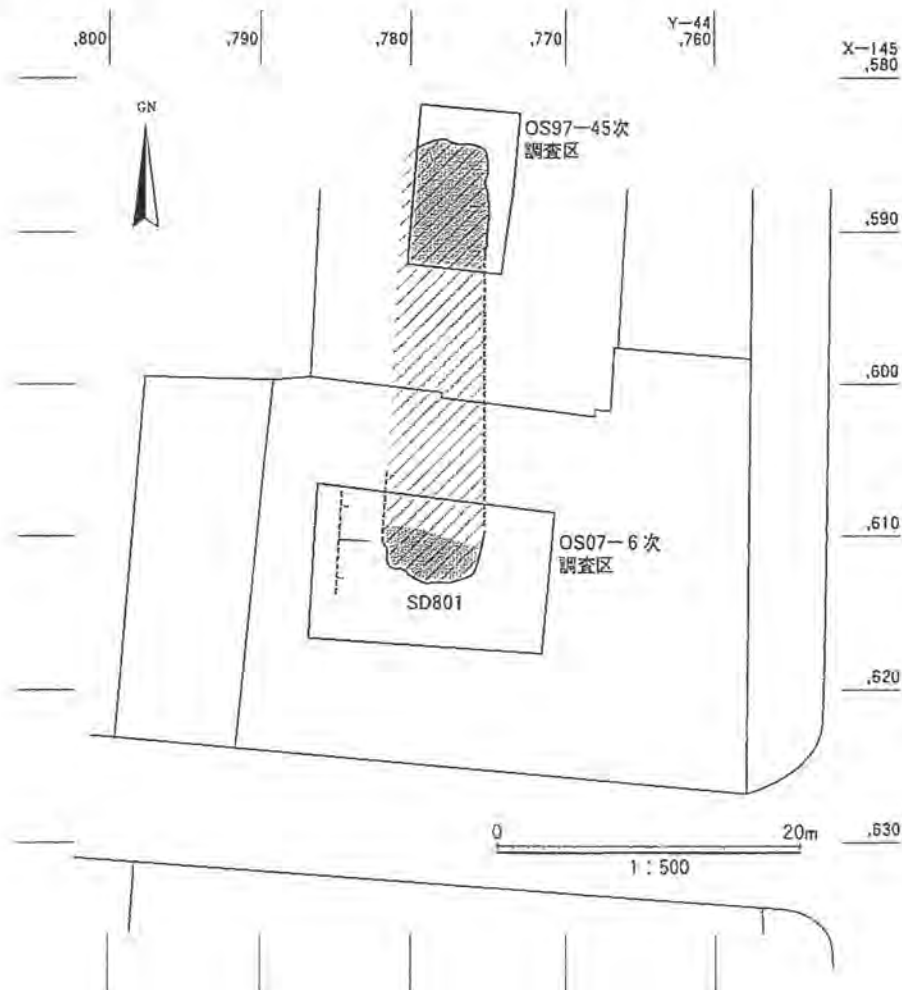


図5 SD801とOS97-45次調査のSD01

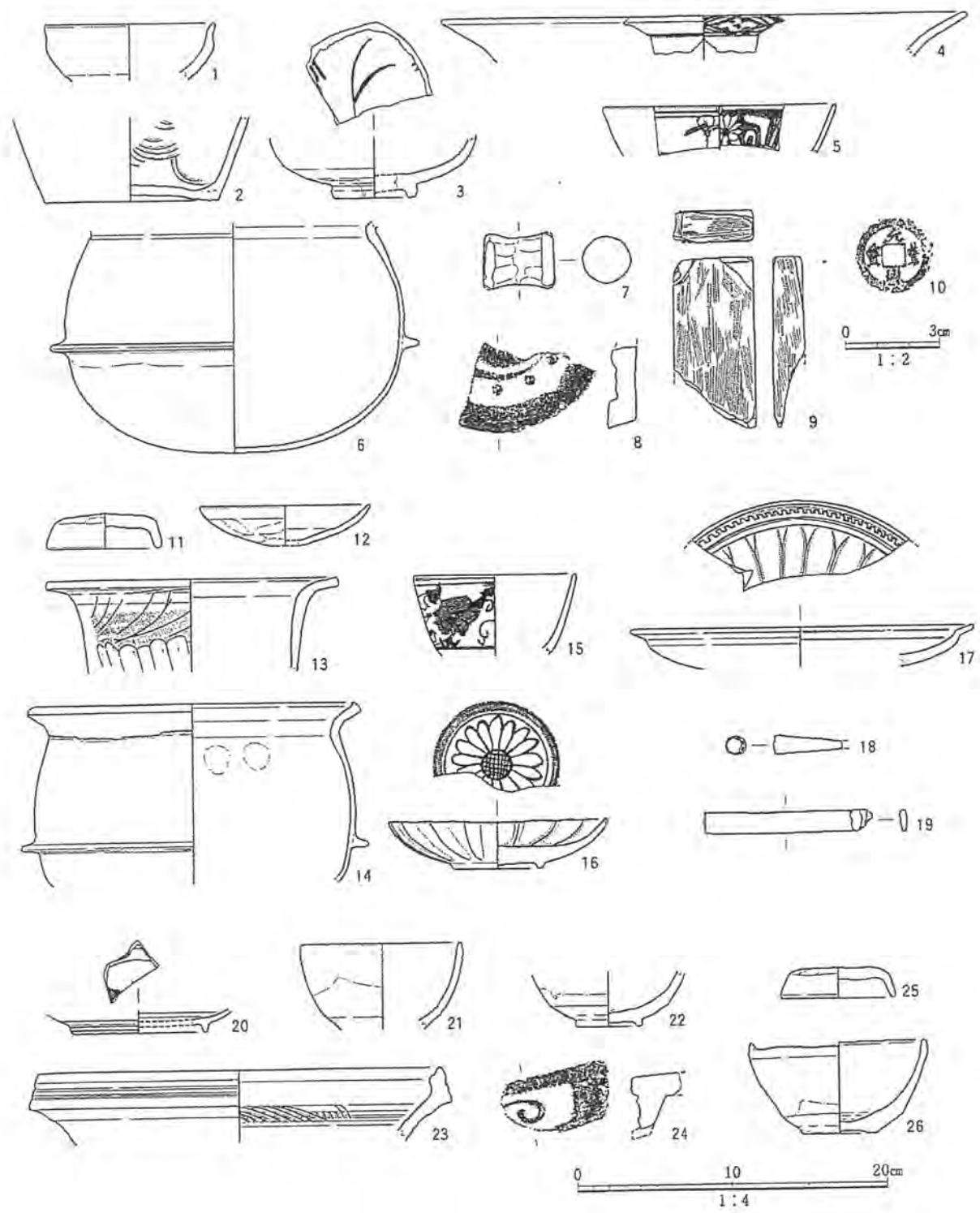


图6 出土遺物実測図

SD801関連(1~10)、SK303(11)、SX301(12)、SK201(13~19)、第9層(20)、第7層(21~24)、第2層(25・26)

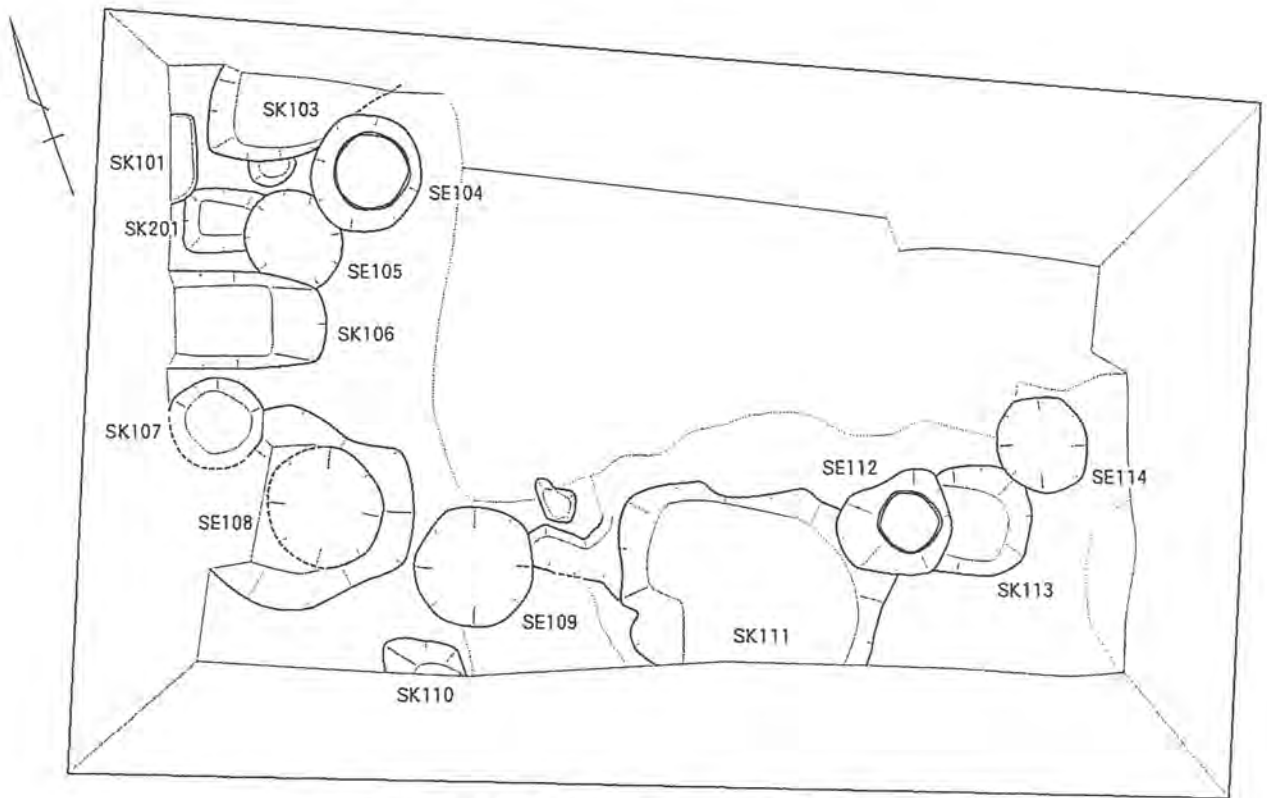
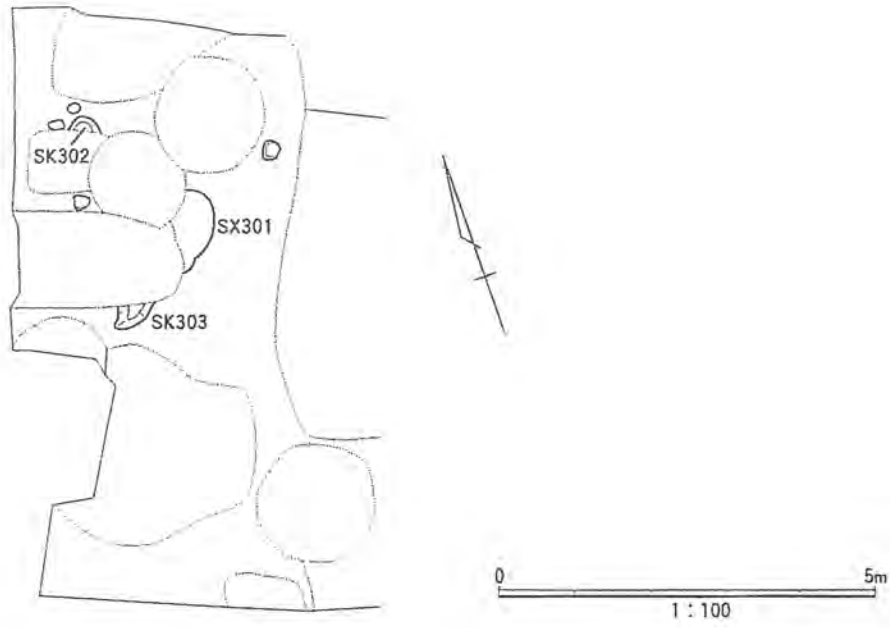


圖7 第5~3層(上)、第2~1層(下)遺構平面圖

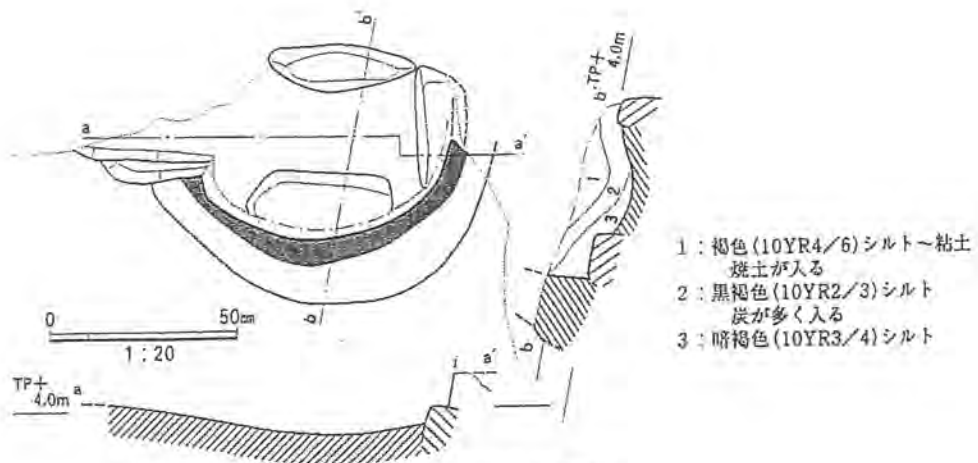


図8 SX301平面・断面図

3)まとめ

本調査の第一の成果は豊臣後期の大溝SD801で、北隣のOS97-45次調査のSD01と一連の遺構と推定できた点である。SD801については、OS97-45次調査時に大名屋敷を囲う堀の可能性が提示されている[黒田慶一1999]。SD801の性格については、東横堀川や大手橋と関連する防御のための堀なのか、大きな屋敷を囲むものなのかなど、周辺での調査の進展により明らかにしたい。

また、攪乱によってかなりの部分が破壊されていたが、周辺に豊臣末期の屋敷の遺構面が良好に残っていることがわかった点も重要である。

参考文献

黒田慶一1999、「OS97-45次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』、pp.73-

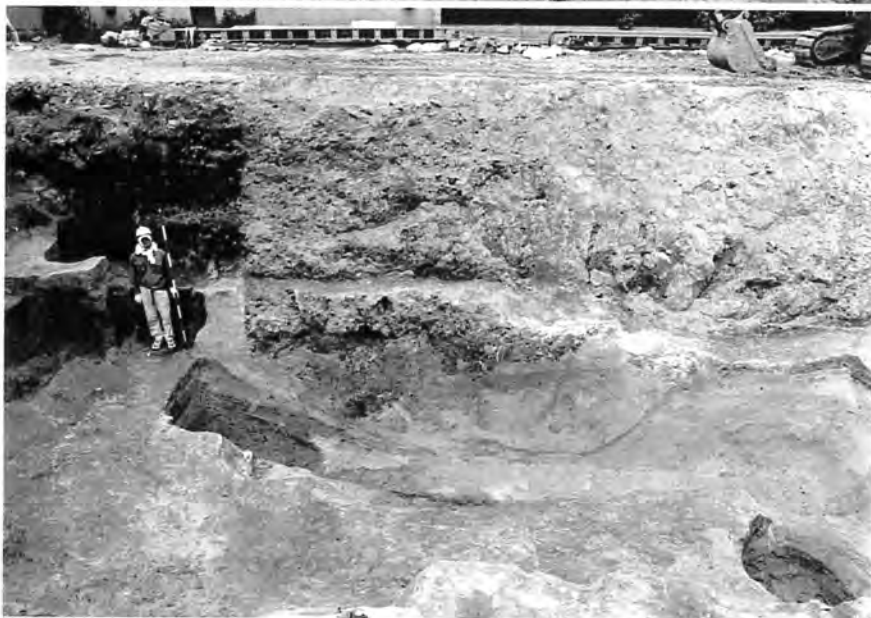
78

松尾信裕2003、「豊臣氏大坂城惣構内の町割」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.325-338

SD801
(東より)



SD801
(南より)



第7層上面の島の断面
中位の黒っぽい地層



第5～3層の遺構
(西より)



SX301
(南より)



第2層上面検出遺構全景
(西より)



大坂城跡発掘調査(OS07-7)報告書

調査箇所 大阪市中央区徳井町2丁目6-1・7
調査面積 33m²
調査期間 平成19年7月7日～7月11日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋寛

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は谷町筋の西側 300 m、本町通りの 1 本北側の通に南面する地点に位置する(図 1)。

事前に大阪市教育委員会により行われた試掘調査で、現地表から約 1.4 m 下で、瓦器片を含む中世の包含層と思われる灰色砂質土が確認され、その上面に豊臣期の遺構が、下位の地山層と思われる黄色砂層の上面に古代から中世の遺構が存在する可能性が考えられた。

そこで、南北に長い敷地の奥側(北側)に 11 m × 3 m のトレンチを設定し、発掘調査を行うこととなった(図 2)。事前に事業者側で現地表面から 1.4 m まで重機による掘削が行われたのち、7 月 7 日から試掘時の灰色砂質土層以下を人力で掘削し、調査を進めていった。

7 月 11 日に記録作業を終了し、機材類の撤収を含め現地におけるすべての作業を完了した。

この調査で用いた水準値は T.P. 値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中では T.P. + 〇 m としている。また、図 1 を除く挿図中で使用する北方位は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図 3・5・6)

第 1 層：近現代の整地層および攪乱で、層厚は約 100 cm ある。

第 2 層：灰オーリーブ～オーリーブ黒色中粒～粗粒砂混りシルトの整地層で、層厚 20～30 cm ある。

SK01 は本層上面から掘られている。

第 3 層：オーリーブ灰～暗褐色砂質シルト～粗粒砂の整地層で、上面で SK02 が検出された。層厚は



図 1 調査地位置図

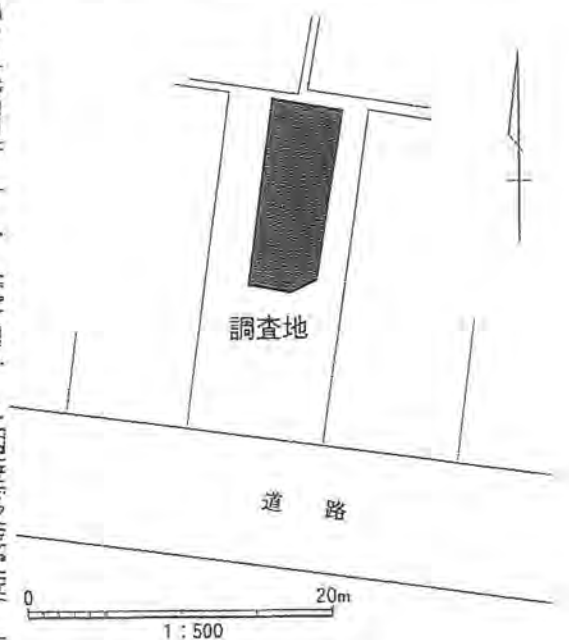


図 2 調査区位置図

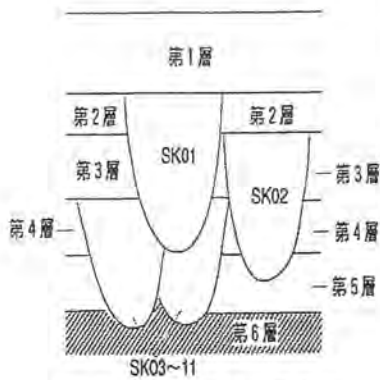


図3 地層と遺構の模式図

10～30 cmある。

第4層：浅黄～灰オリーブ色細粒砂～シルトの整地層である。層厚は20～40 cmある。本層が試掘時の灰色砂質土に相当する。上面でSK03～11が検出された。古代の土師器甕1を出土しているが、砂目のある肥前陶器皿2なども出土するため徳川期初期の段階の整地層とみられる。

第5層：灰白～にぶい黄橙色シルト混り細粒砂～細礫からなる層厚20～40 cmの整地層である。試掘で地山層と考えられた地層で

あるが、地山層を主体とする整地層である。最下部で丸瓦が完形で出土した。

第6層：黄色細粒～粗粒砂の地山層である。南壁際を深掘りして確認した。

ii) 遺構と遺物(図4・6)

今回の調査では第4層上面から遺構検出を行い、調査を進めていったが、断面の地層観察により第2・3層上面の遺構も確認できた。

a. 第4層上面

SK03～11 長軸1.5～4.6 mの土塋である。SK03・04・06は炭を多く含む暗褐～黒色シルト～細粒砂を埋土とし、鉄滓が出土する点で共通する。SK03から鞆羽口や炉壁、土師器小皿、肥前染付磁器碗3が、SK04から軟質施釉陶器小皿4、肥前染付磁器皿5、丹波焼播鉢6、焙烙のほか鞆羽口7などが出土した。SK05は長軸3 mの楕円形を呈する土塋で、土師器小皿8・9、軟質施釉陶器小皿10、肥前染付磁器皿12・13、肥前陶器鉢、被熱した関西系陶器筒形碗11、ミニチュアの土製太鼓橋、亀形の染付磁器水滴片など多くの遺物が出土した。SK07からは肥前陶器鉢14、唐草文軒平瓦15が

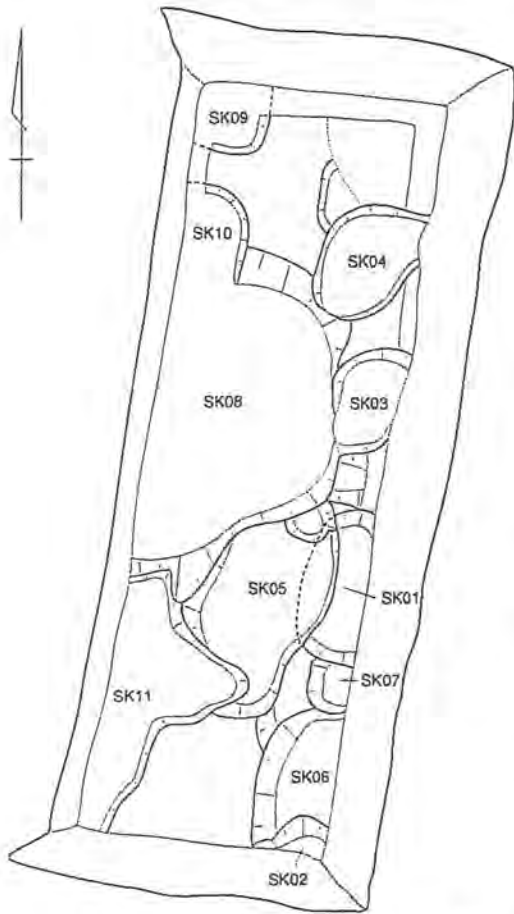


図4 第4層上面遺構配置図

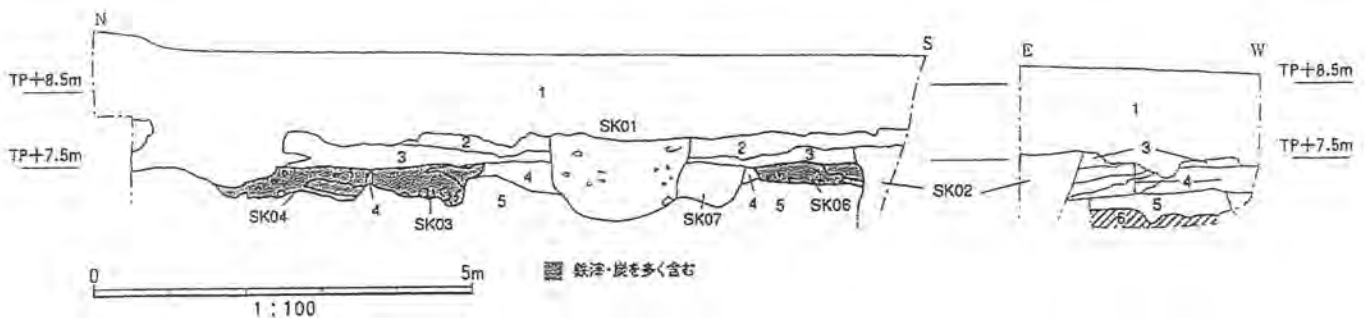


図5 東壁・南壁断面実測図

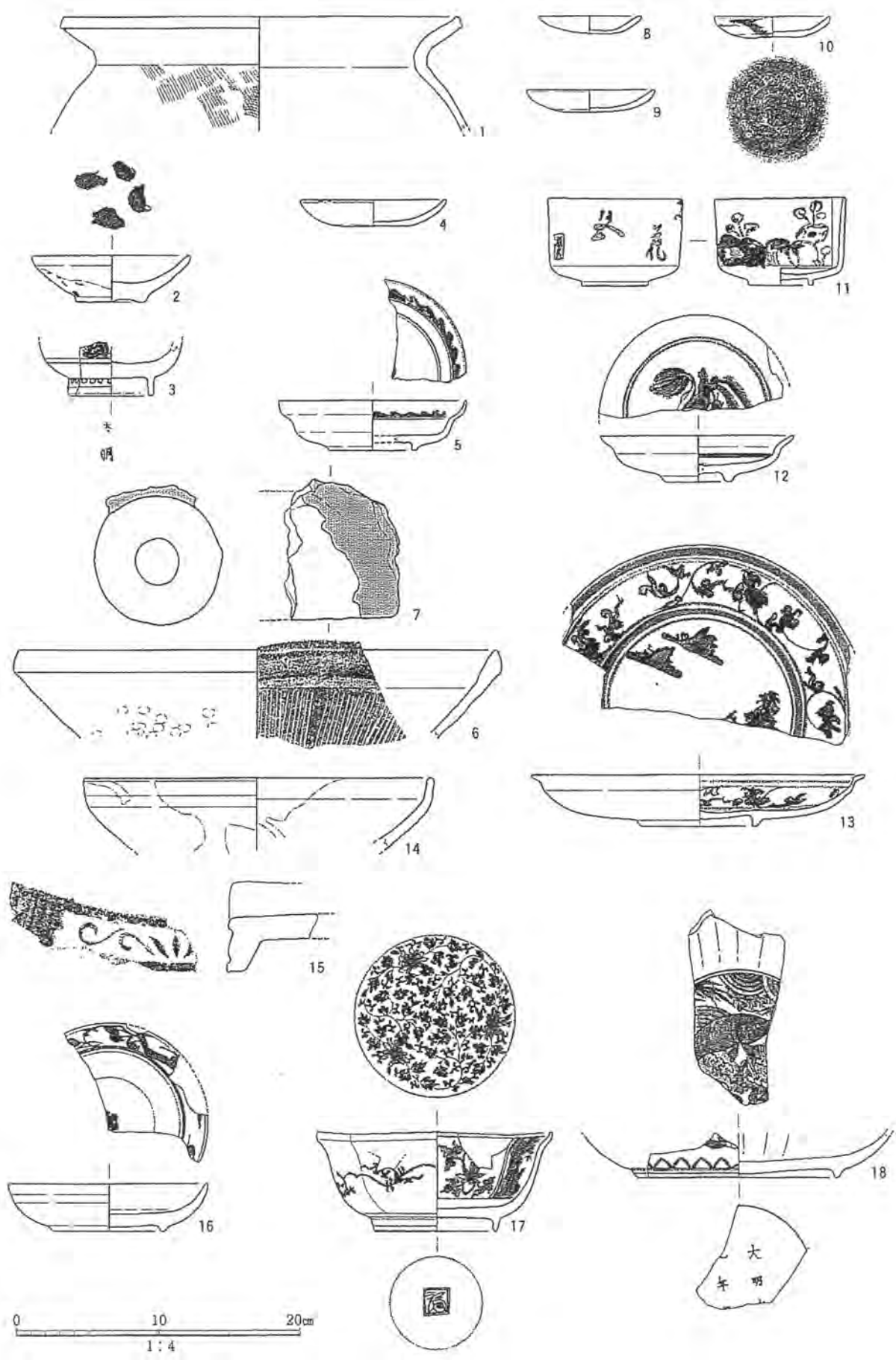


图6 出土遺物実測図

第4層(1・2)、SK03(3)、SK04(4~7)、SK05(8~13)、SK07(14・15)、SK08(16~18)

出土した。SK08は最大規模の土壙で、火災で焼けた瓦の廃棄土壙である。瓦以外に肥前染付磁器皿16・18、口縁部が八角をなす鉢17、砥石などが出土した。

これらの土壙から出土した遺物は18世紀前半代までのものと考えられる。

b. 第3層上面

SK02 調査区南東隅で検出された東西0.3 m以上、深さ0.8 m以上の土壙である。炭・焼土を含む灰オリーブ色シルトを埋土とし、土師器小皿、国産染付磁器碗、鳥形染付磁器が出土した。

c. 第2層上面

SK01 調査区中央の東壁際で検出された南北1.4 m以上、深さ1 mの土壙である。埋土は灰褐色中粒砂混りシルトで焼土を大量に含む。国産染付磁器碗・平瓦などが出土した。

3)まとめ

今回の調査地周辺では、図1でも示したとおり多数の発掘調査が行われており、豊臣期の遺構が検出されている地点も多い。西側に近接するOS92-60次調査地でも豊臣後期の土壙が検出されている[大阪市文化財協会1993・2003]。しかし、本調査地では多数の土壙が密集している状況は類似するが、豊臣期に遡る遺構を確認するには至らなかった。

全体に認められる第4層の整地層が大坂ノ陣以後のものと思われることや、確認された地山層の上面の標高がOS92-60次調査地より1 m余り低いことから、大坂ノ陣後に一旦削平され、その後整地された可能性が考えられる。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1993『安藤芳子氏による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS92-60)略報』

大阪市文化財協会2003『大坂城跡』Ⅶ、pp.257-258

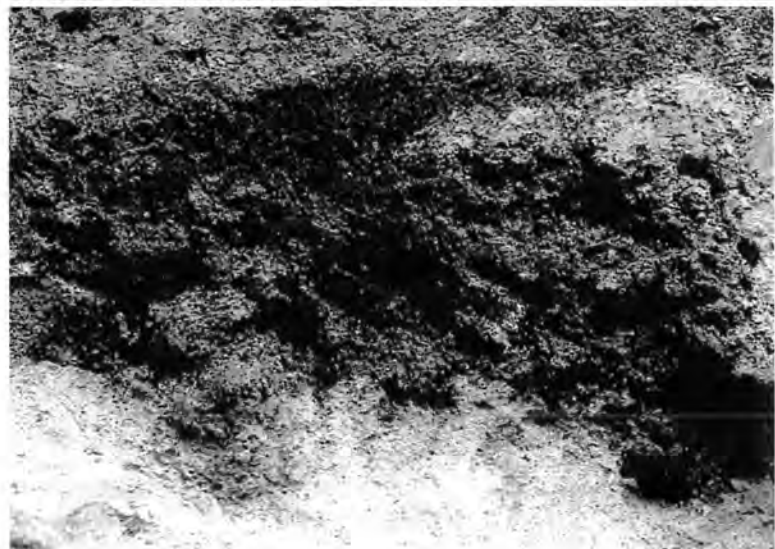
第4層上面検出状況
(南から)



第4層上面完掘状況
(南から)



SK03断面



大坂城跡発掘調査(OS07-8)報告書

調査個所 大阪市中央区東高麗橋30-6
調査面積 81m²
調査期間 平成19年8月3日～8月10日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査研究部次長 南秀雄、杉本厚典

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀川に架かる高麗橋の南東約150mで、豊臣期大坂城惣構の北西端に当たる(図1)。調査地の北で実施されたOS05-5次調査地では17世紀第2四半期の精錬炉が見つかる[大阪市文化財協会2006]。

2007年に実施した大阪市教育委員会の試掘調査で現地表下2.1~2.2mにおいて大坂夏ノ陣の焼土とみられる地層が検出され、豊臣期およびその下位の中世・古代の地層を対象とした調査を行うことになった。

調査区は敷地の北側に設定し(図2)、現地表下210cmまでを重機で取り除いた後、8月3日から

平面調査に入った。各層で遺構・遺物を検出し、写真撮影・図面作成を行った。TP+2.0m以下の自然堆積層はトレンチ調査を行い、8月10日に現地での調査は完了した。図1には座標北を用いているが、現地調査に用いた方位は磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、挿図の中ではTP+0mとした。

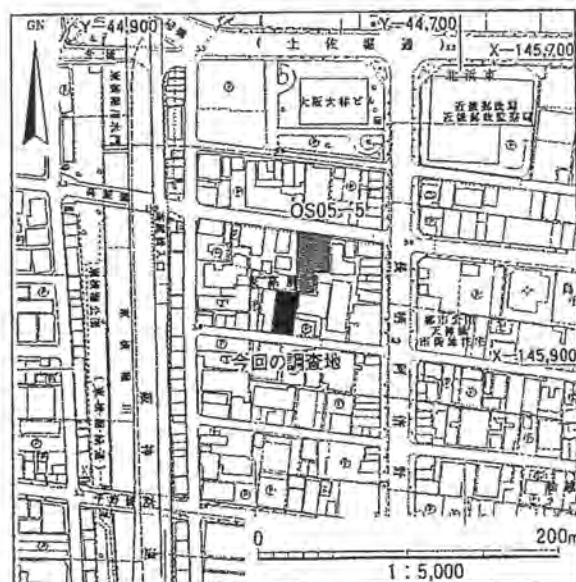


図1 調査地の位置

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

試掘調査の成果から豊臣期以前の遺構面を調査対象として、現在の地表面から2mを掘削後、平面調査を開始した。TP+2.0mまでを平面調査した後、調査区中央にトレンチを設け、TP+0.8mまで掘削し、地層断面の記録を行った。

第0層：TP+3.5~3.6mに堆積しており、明黄褐色細粒砂で構成されていた。層厚は10cmで、層中には18世紀の遺物が認められた。

第1層：TP+3.4~3.5mに堆積しており、明褐色細粒砂よりなる第1a層と、暗褐色細粒砂を主体にして焼土と炭を多く含む第1b層に区分された。第1b層は第2a層上面の礎石建物が火災で焼失した時に形成された層であり、その上に盛土をして整地したものが第1a層である。

第2a層：TP+3.0~3.4mに堆積し、細礫混り中粒砂で構成される盛土層である。この上面で礎石建物やピット、土壌群を検出した。

第2b層：TP+2.8~3.0mに堆積し、オリーブ褐色礫・シルト混り細粒砂で構成される整地層であり、上面に礎石建物が認められた。



図2 トレンチ位置図

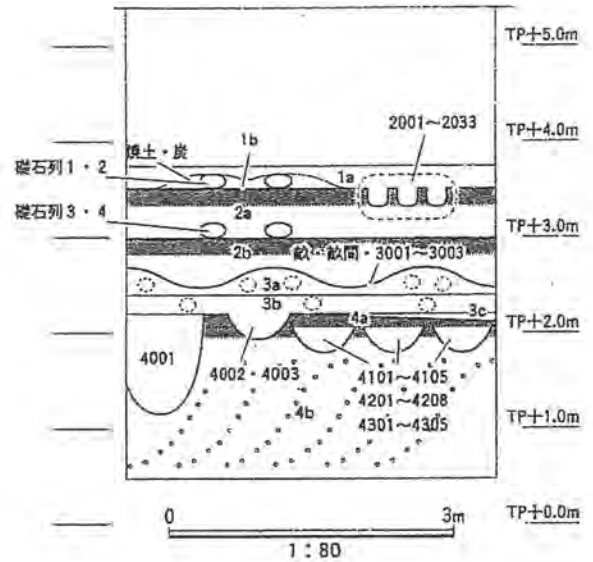


図3 地層と遺構の関係図

第2c層：TP+2.6~2.8mに堆積する淘汰のよい黄褐色細礫混り細粒砂で構成される盛土層である。

第3a層：TP+2.4~2.6mに堆積する黒褐色シルト・細礫混り細粒砂で構成される。上面で畝を検出しており、畠の作土層である。

第3b層：TP+2.4~2.6mに堆積する黒褐色シルト・細礫混り細粒砂層である。第3a層と同様に淘汰が悪く、畠の作土層とみられる。

第3c層：TP+2.2~2.4mに堆積する暗褐色シルトの偽礫を含む細粒砂層である。層中に偽礫が含まれており、調査区東半の低い部分に分布しているため、低所部を埋めた整地層である。

第4a層：TP+1.8~2.2mに形成された暗褐色細粒砂の古土壌である。

第4b層：TP+2.2~0.8mに堆積する暗褐色細礫~細粒砂の互層で、トラフ型斜行層理の明瞭な水成層である。フォアセットラミナの傾斜方向から本層堆積時の水流は東から西方向と判断された。

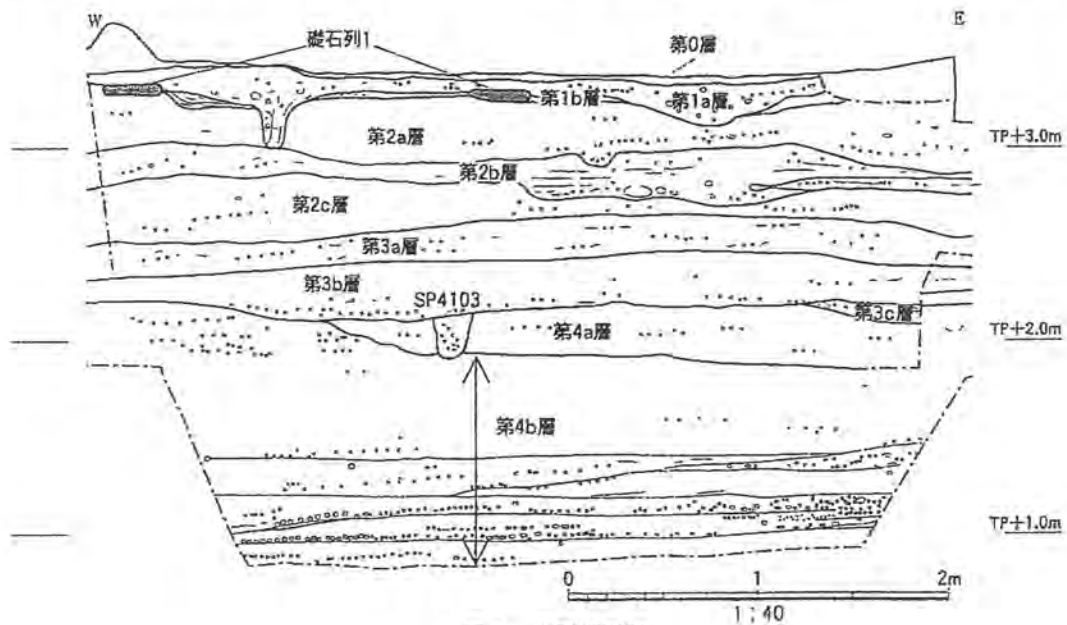


図4 北壁断面図

ii) 遺構と遺物

a. 第4b層上面の遺構と遺物(図5・9・11)

埋土が暗褐色シルト混り細粒砂の遺構を4100番台、埋土が暗褐色細粒砂の遺構を4200番台、埋土が黒褐色細粒砂の遺構を4300番台として報告する。このうちを4100番台の遺構からは古代の遺物、4300番台からは弥生時代の遺物が出土している。

SP4101は一辺が0.8mの隅丸方形で深さ0.76mの柱穴である。SP4102～4104は直径0.2～0.3mで深さ0.1mの小穴である。

SP4201～4204は直径0.2～0.3m、深さ0.1mの小穴で0.5～1.0m間隔で並んでいた。柵とした場合、北30°西に偏る。SP4205は南北0.3m、東西0.2m、深さ0.1mの小穴であり、SP4101に切られていた。SP4206は南北0.9m、東西0.7mの楕円形で、深さ0.17mの土塋である。

SX4301は浅い窪みであり、完形に復元される弥生中期初頭の甕20が口縁部を東に向け横倒しの状態で出土した。20は外面は横方向のハケを肩部に施した後、底部から肩部までを縦方向のハケで整える。内面下半部は磨滅しているが、上半部には横方向のハケ調整が認められ、ハケ調整後にナデで整える。これらの体部調整を行った後、口縁部を内外面ともに横方向のナデで整える。

SK4302は南北1m以上、東西0.75mの土塋である。SK4303は南北0.8m、東西0.5m、深さ0.08mの土塋である。埋土より22が出土した。22は弥生時代後期の甕底部である。SP4304は東西0.4m、南北0.3m、深さ0.08mの小穴である。SK4305は一辺が0.65m、深さ0.08mの土塋である。

b. 第4a層上面の遺構と遺物(図5・9・10)

SX4001は南北2.9m東西4.1mの長方形の落込みである。SX4002は東西3.0m南北3.1m以上の円形の落込みである。

SE4003は直径4.0mの円形の井戸とみられる遺構である。埋土は最下部に加工時形成層とみられる黒褐色細粒砂層があり、黒褐色細～中粒砂、黒褐色シルト混り細粒砂で埋戻されていた。埋土より瓦器碗や常滑焼甕などが出土した。2は土師器杯である。内外面ともに横方向のナデで整える。8世紀末から9世紀初頭にかけてのもので、SE4003の埋土に混入した資料とみられる。3・4は瓦器碗である。外面にオサエ、内面に暗文が認められる。5は瓦器碗の底部である。内面に平行線状の暗文が施される。12は瓦質土器脚付き釜である。脚は縦方向のナデで整える。16は土師質の平瓦である。凸面に一辺が4.6cmの格子タタキ、凹面に細かな布目が認められる。古代から中世のものと考えられる。19は常滑焼甕である。肩部外面には押印文が施される。口縁部、肩部外面には自然釉が厚く掛かり、胴部最大径から底部にかけて釉垂れが認められる。また、底部内面には炉壁とみられる粘土塊が付着し、自然釉が厚く溜まる。口縁部が短く屈曲する特徴から13世紀第3四半期頃と判断される。

c. 第3a層上面の遺構と遺物(図5・9・10)

東西方向の畝を3条、南北方向のものを1条検出した。畝間からは焼土や支脚、鑄造炉の炉壁が出土した。18は第3a層上面より出土した支脚である。長さ10.6cm、直径5.3cmで、側面が焼けて発泡している。

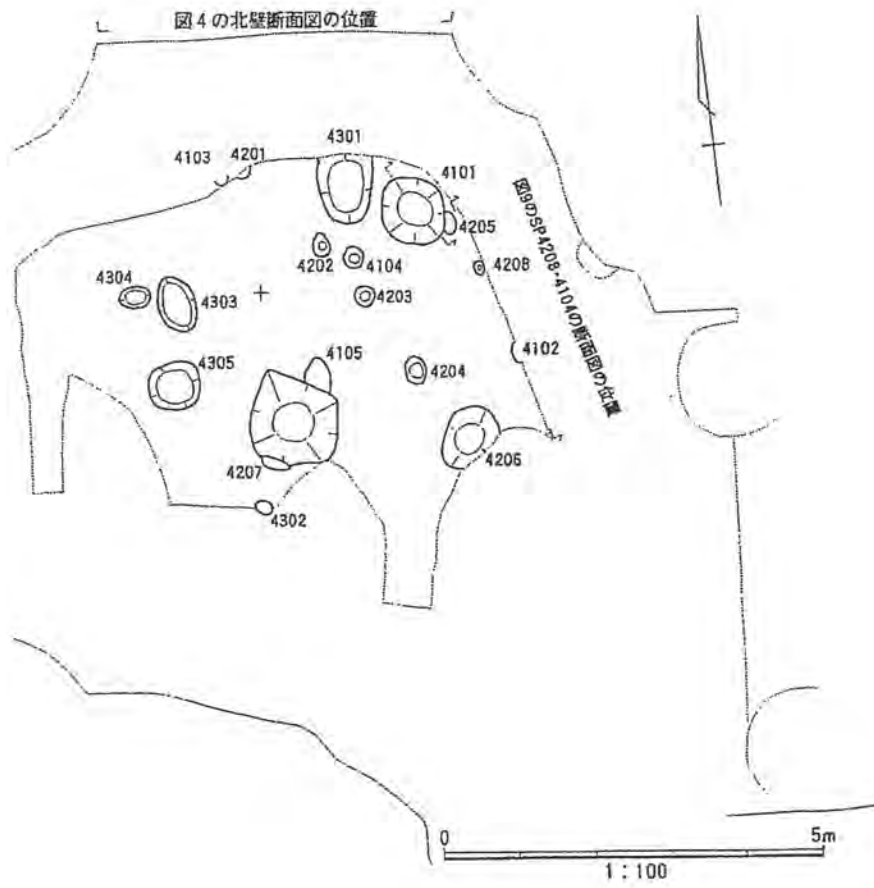


図5 第4b層上面の遺構

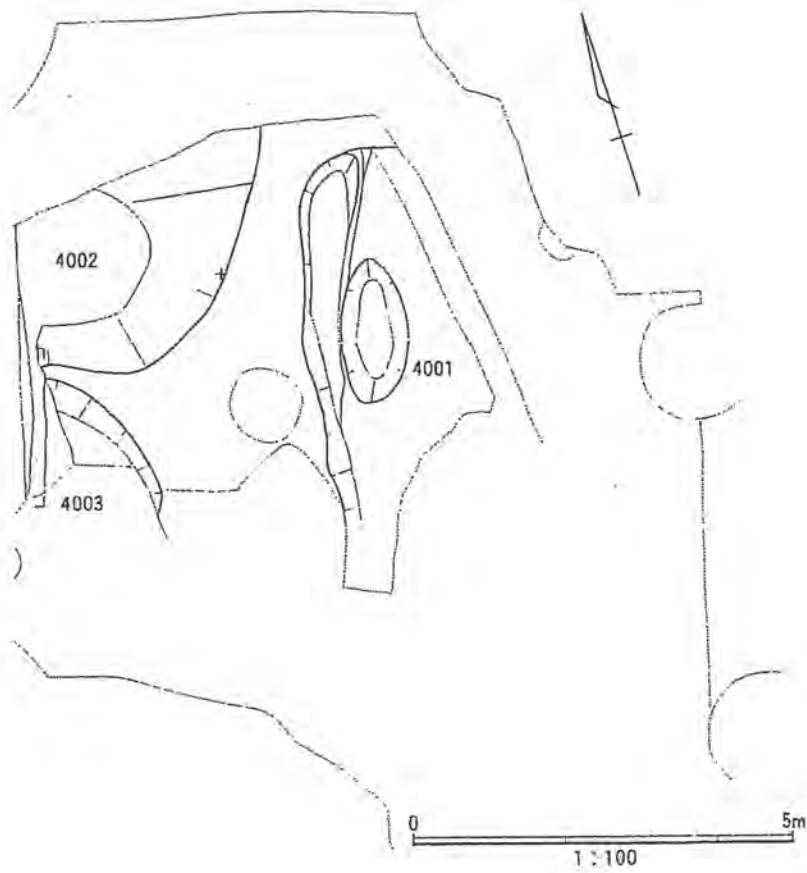


図6 第4a層上面の遺構

図9の竈・竈間溝の断面図の位置

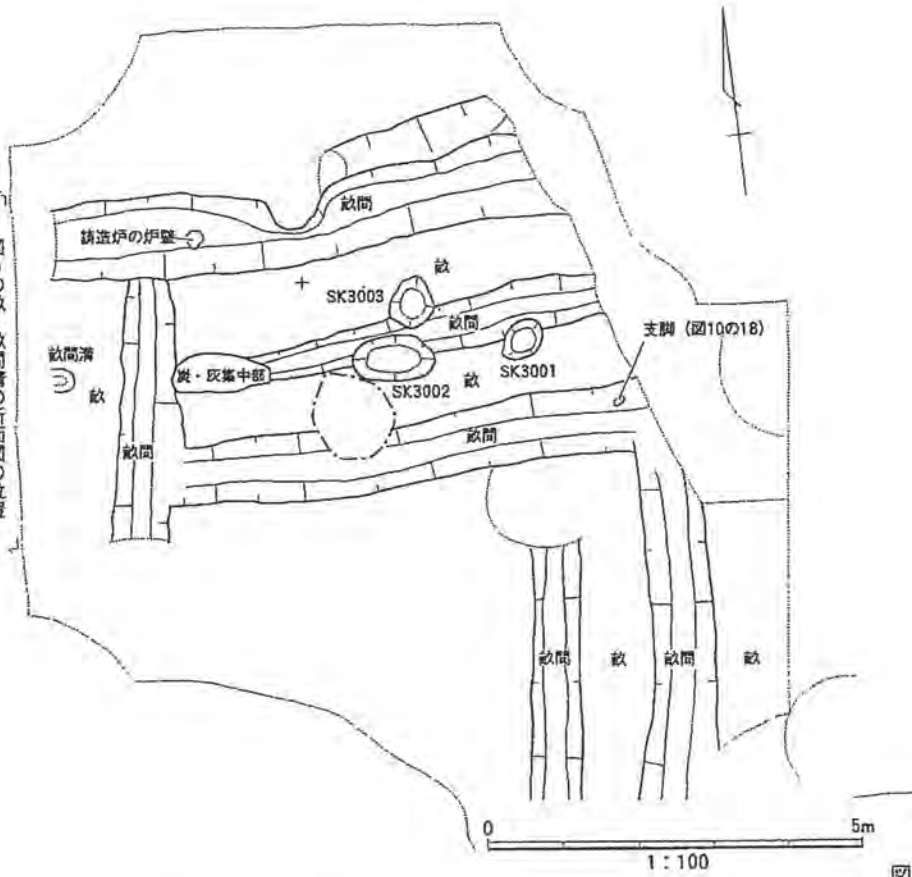


図7 第3a層上面の遺構

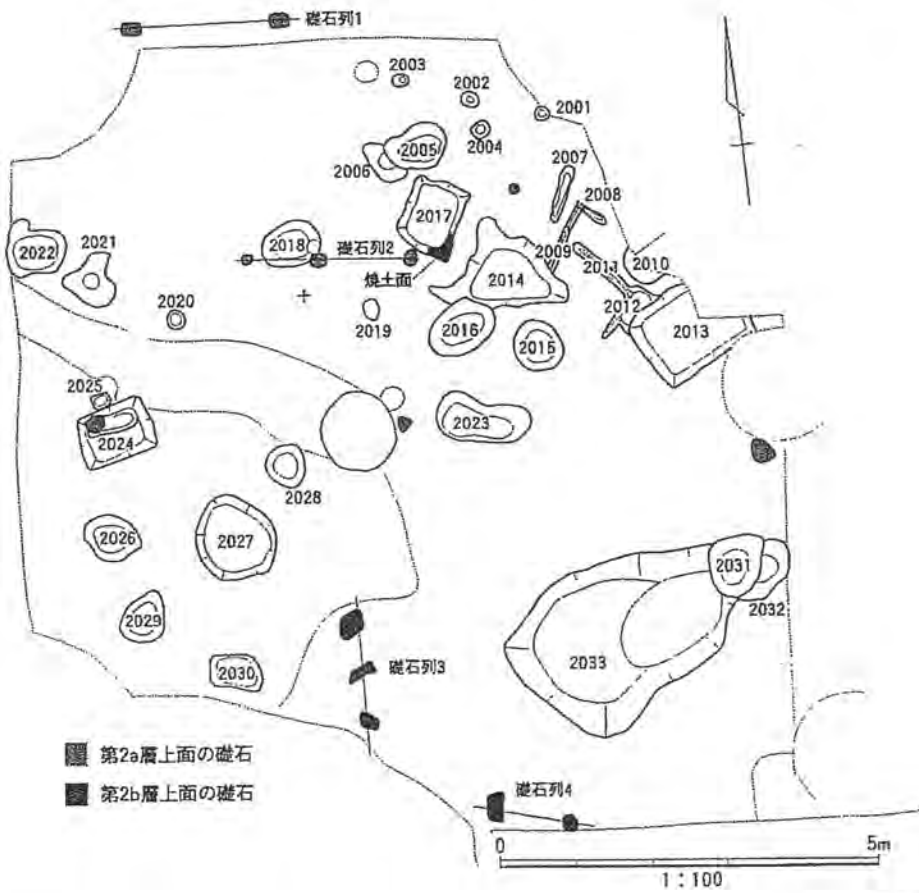


図8 第2a・b層上面の遺構

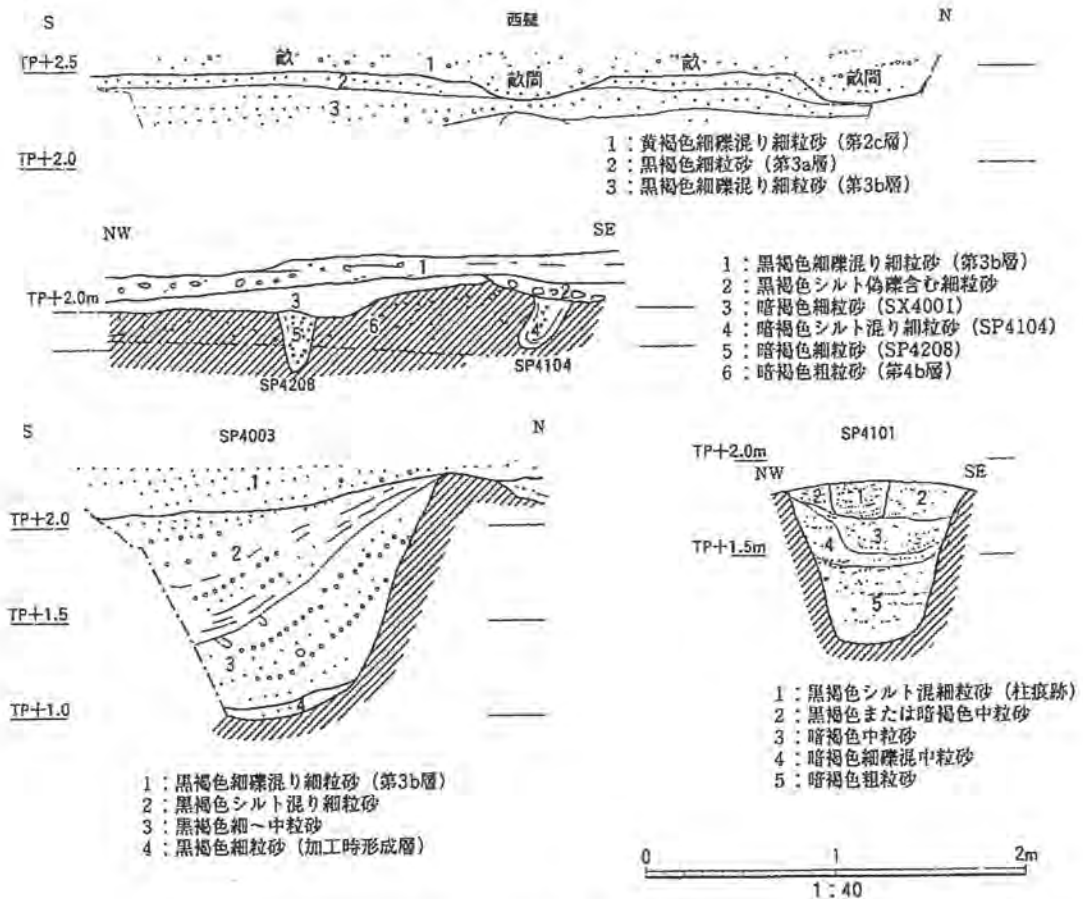


図9 主な遺構の断面図

また、畝・畝間を切って深さ0.3m前後のSK3001～3003が設けられていた。SK3001は長径0.7m、短径0.5m、SK3002は長径1.1m、短径0.6mの楕円形、SK3003は直径0.6mの円形の土壇であった。

d. 第2b層上面の遺構と遺物(図8・10)

東西および南北の礎石列をそれぞれ1箇所確認した。礎石列3は0.3m大の花崗岩が0.4～0.5m間隔で並ぶもので、南端の礎石は石臼とみられる石製品を転用していた。礎石列4は0.3m大の花崗岩が0.8m間隔で並ぶものであった。

e. 第2a層上面の遺構と遺物(図8・10)

本層上面で建物礎石、小穴、溝、土壇、浅い窪みを検出した。

礎石列1は調査区の北辺で検出した。長辺0.3m、短辺0.2mの隅丸長方形の扁平な花崗岩が1.65m間隔で並んでいた。礎石列2は調査区のほぼ中央で検出した。0.2mの花崗岩の割石が0.8～1.0m間隔で並んでいた。

SP2001～2003は直径0.2m、深さ0.04～0.21mの小穴であった。

SP2004・2019・2020・2025は直径0.2m、深さ0.02mの小穴である。

SD2007～2011は幅0.15m、深さ0.03～0.06mの小溝である。これらはSK2012から延びていた。

SK2005・2006は長径0.6mの楕円形で、深さ0.1mの土壇で、SK2005がSK2006を切って設けられていた。SK2012は長辺0.6m、短辺0.3m以上の長方形で、深さ0.1mの土壇である。SK2013はSK2012

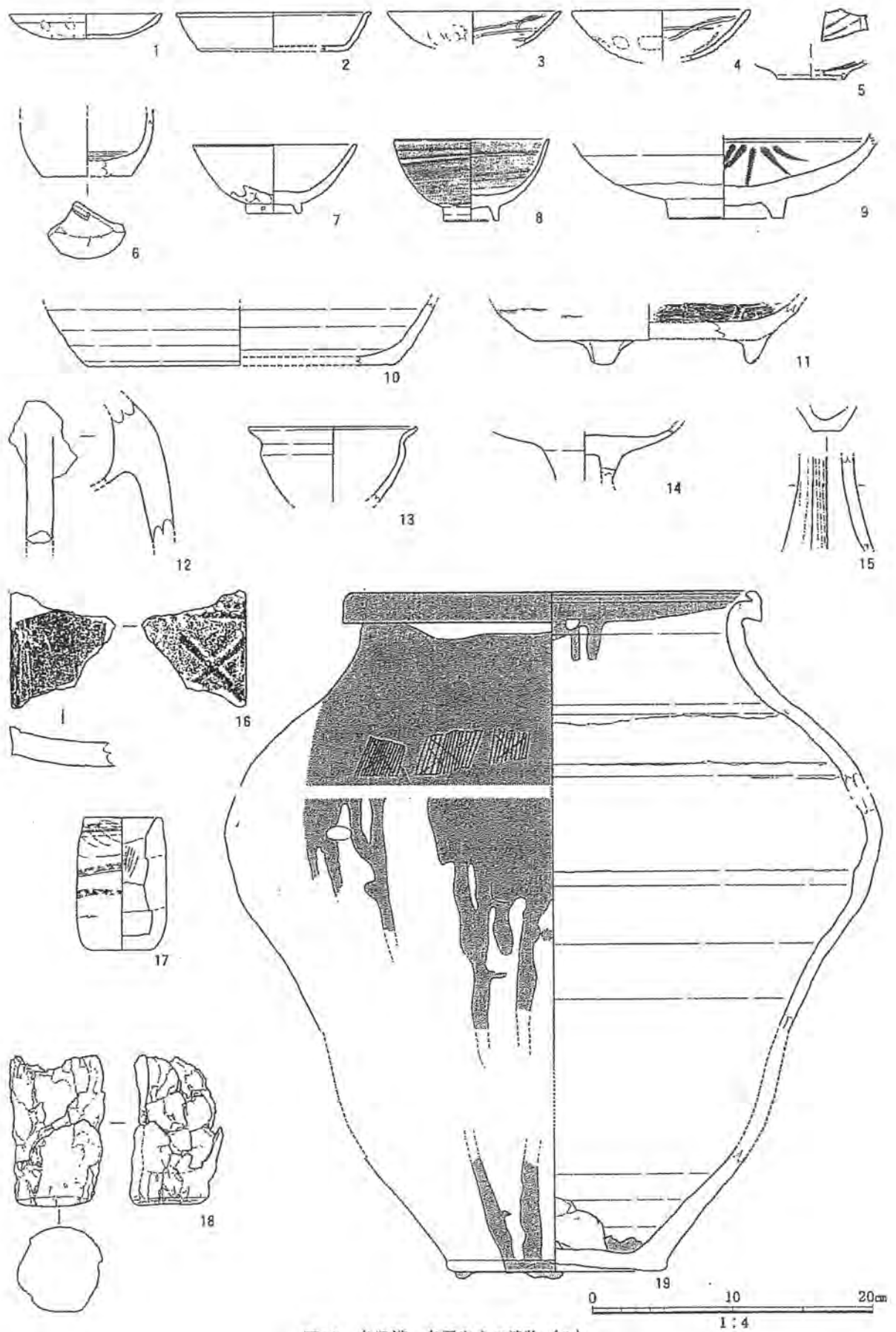


図10 各遺構・各層出土の遺物 (1)

SE4003(2・5・12・16・19)、第3a層上面(18)、SK2014(7)、SK2016(6・10)、第1a層より上から掘り込まれた遺構の残欠(8・17)、第1b層(9)、第2c層(1)、第3a層(11)、第3b層下部から第4a層上面(13~15)

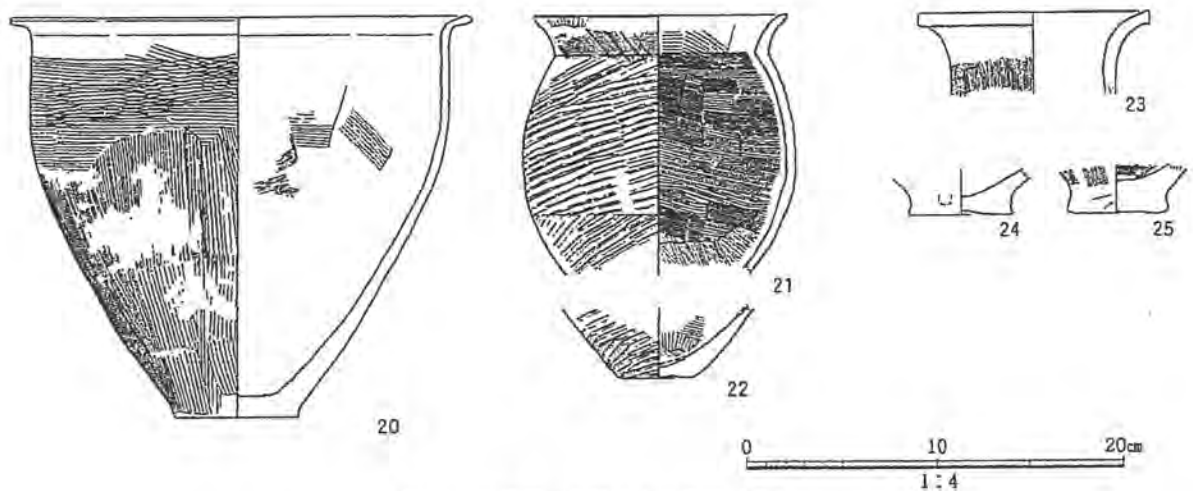


図11 各遺構・各層出土の遺物(2)

SX4301(20)、SK4303(22)、第4a層中(21・23・24)、第4b層上面(25)

を切って設けられており、長辺1.5m、短辺1.2mの長方形で、深さ0.2mであった。

SK2014は東西1.8m、深さ0.07mの不定形の土塋である。埋土より7が出土した。7は肥前陶器碗あるいは皿とみられる。見込みに釉剥ぎが認められ、高台内部にはケズリを施すが、兜巾状には整えていない。

SK2015は直径0.8m、深さ0.21mの円形の土塋である。SK2016は長径1.0m、短径0.6m、深さ0.2mの楕円形の土塋で、6と10が出土した。6は備前焼小型壺で底部外面に線刻が認められる。10は体部から底部にかけて内外面にオリブ黒色の褐色釉が掛かり、胎土に含まれる砂粒も多く筑前系陶器とみられる。また同遺構からは鉄釉を口縁部に施した17世紀頃の肥前陶器向付も出土している。

SK2023は東西1.3m、南北0.5m、深さ0.11mの土塋である。SK2026・2028・2029は直径が0.5～0.7m、深さ0.01～0.10mの円形の土塋である。SK2027は直径1m、深さ0.09mの円形の土塋である。SK2030は東西0.75m、南北0.45mの長方形の土塋である。検出時に上部を削りすぎたため0.03mしか残っていなかったが、元来は深かったとみられる。SK2031は直径0.8m、直径0.3m以上の円形の土塋である。

SX2017は長辺1.0m、短辺0.8m、深さ0.05mの長方形の浅い窪みである。南東隅の壁面が焼けていた。SX2018は長径0.8m、短径0.6m、深さ0.01～0.05mの浅い窪みである。SX2021は東西0.8m、深さ0.03mの浅い窪みである。SX2022は東西0.8m、南北0.6m、深さ0.03mの浅い窪みである。SX2024は東西1.0m、南北0.75m、深さ0.03mの浅い窪みで、埋土に0.3m大の割石が入っていた。SX2033は長辺3.0m、短辺2.0m、深さ0.04mの浅い窪みで、埋土から礎石に用いられたとみられる0.3m大の割石が出土した。

f. 各層出土遺物(図10)

8・17は第1a層より上から掘込まれた遺構の残欠から出土した遺物である。17は17世紀前半の焼塩壺である。内面に布目が認められる。8は18世紀前半の肥前陶器碗である。ハケメで縞を描く。高台は無釉で、内面は蛇ノ目に釉を剥ぐ。古い時代の遺物も含まれるが第1a層は18世紀前半までには形成されていたといえる。

9は第1b層より出土した肥前陶器鉢である。見込みには草花の葉と茎を鉄釉で描く。1は第2c層より出土した土師器小皿である。口縁部内面に炭化物が付着しており、灯明皿とみられる。11は第3a層作土層中より出土した瓦質土器火鉢である。外面を浅いケズリ、内面をハケで整えた後、足を3箇所に取り付ける。13～15は第3b層下部から第4a層上面にかけて出土した須恵器鉢である。口縁部をシャープなナデで整え端部を上方につまみ出す。14は須恵器高杯である。15は土師器の高杯脚部である。六角形の断面で、各面は工具を用いて面取りする。これらはいずれも平安時代前半のものと思われる。

21・23・24は第4a層中より出土した。21は弥生時代後期の甕である。外面をタタキ、内面は底部を縦方向のハケ、胴部最大径位から頸部直下にかけてを右から左方向のハケで整える。また口縁部外面は縦方向のハケ、内面は斜め～横方向のハケを施した後、口縁端部に横方向のハケをめぐらす。23は弥生時代中期短頸壺口縁部である。頸部外面に縦方向を施した後、口縁部内外面を横方向のナデで整える。24は弥生時代後期のものとみられる壺底部である。外面はオサエで整える。25は第4b層上面より出土した弥生時代中期の甕底部である。内外面ともハケで整える。外面は熱のため赤く変色している。

3)まとめ

今回の調査では江戸時代(18世紀第1四半世紀)、豊臣期、中世、古代、弥生時代の各遺構が検出され、調査地およびその周辺が長期間にわたって居住域であったことがうかがえた。

調査地ではTP+2.0m付近で弥生時代中期より前に形成された水成堆積層を確認した。この水成堆積層の上面が土壌化しており、そこで弥生時代中・後期の遺構を検出した。

第4b層上面では平安時代の柱穴を検出した。柱穴の長軸や柱列は西に約10°偏っていた。検出した遺構は決して多くないが、古代の土器は一定量出土しており、周辺に居住域が分布する可能性が高い。

第4a層上面では鎌倉時代13世紀後半の井戸と落込みがあった。井戸の中からは常滑焼甕や瓦器碗などが出土しており、居住域であったと推測される。その後、第3a層においては豊臣期から江戸初期の畠が営まれていたが、盛土・整地された後、17世紀後半からは屋敷地となっていた。この屋敷地も1724(享保9)年の妙智焼によって消失し、以後の時代はそれを整地して建物が設けられていた。

また、第3a層の畠から铸造炉の炉壁の破片や支脚とみられる土製品が出土した。本調査地の北に位置するOS05-5次調査地では17世紀第2四半期の精錬炉が検出され、この炉跡は層序の対比から本調査地の第3a層上面に当たるとみられる。本調査地で見つかった铸造関連製品は遺構に伴わないため、近隣に铸造作業を行った工房が存在していた可能性が高い。OS05-5次調査地で検出された工房の南側に当たる本調査地では、人家が密集していた証拠はなく、畠が広がる景観が復元される。この畠は17世紀後半には埋めて整地され、その後、屋敷地として土地利用されるようになったとみられる。

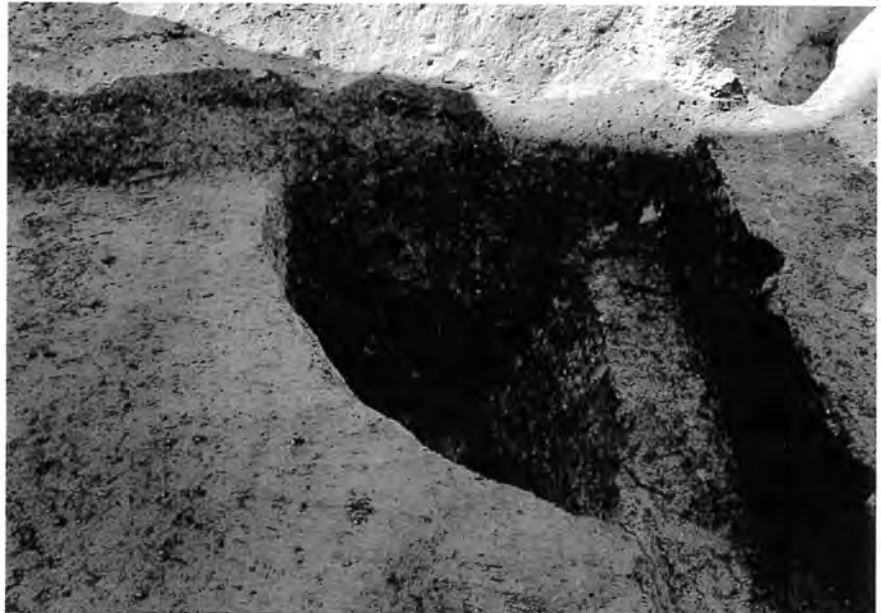
引用参考文献

大阪市文化財協会2006、「東高麗橋における大坂城跡発掘調査(OS05-5)報告書」

第4b層上面検出遺構
(北から)



SE4003
(東から)



第3a層上面検出畝・畝間
(東から)



大坂城跡発掘調査(OS 07-9)報告書

調査個所 大阪市中央区安堂寺町2丁目26・1-3・1-12・5-4
調査面積 120m²
調査期間 平成19年8月28日～9月10日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋覚

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は谷町6丁目交差点の西側約200mで、長堀通と1本北側の安堂寺通に挟まれた位置にある(図1)。豊臣期大坂城の惣構の南西部に当り、周辺ではいくつかの調査が行われているが、南東から北西に延びる谷が復元されている。安堂寺通を挟んだ向い側(北側)のOS99-59次調査は、この谷の中に位置し、豊臣前期の遺構や豊臣後期の盛土が検出されている。

事前に大阪市教育委員会により行われた試掘調査では、現地表から約0.7~0.8m下で黄色砂礫の地山層が確認され、溝などの遺構も確認された。地山の上面に豊臣期の遺構が存在する可能性が考えられたため、発掘調査を行うこととなった。

調査は敷地北半部の西寄りに10m×12mの調査区を設定し(図2)、8月28日から重機による表土掘削を開始し、29日から人力掘削を行い調査を進めた。

9月7日には記録作業などの調査作業を完了し、10日に埋戻し作業と機材類の撤収を行い、現地におけるすべての作業を完了した。

この調査で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中ではTP+〇mとしている。また、平面図における座標値は、調査区位置図を大阪市道路現況図(1/500)に照合させて得た値(国土平面直角座標第Ⅵ系)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

以下に基本的な層序について記述する。



図1 調査地位置図

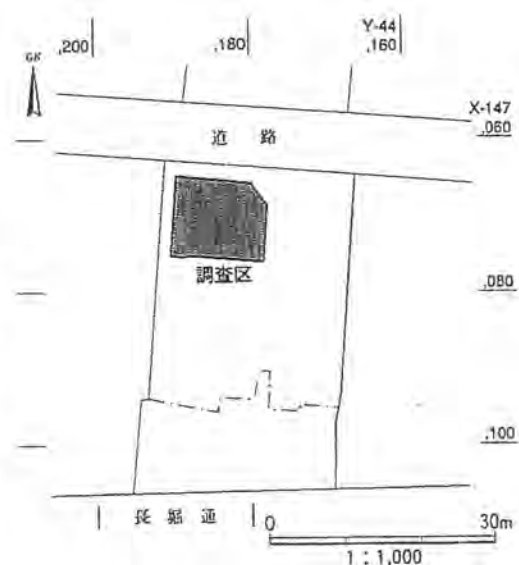


図2 調査区位置図

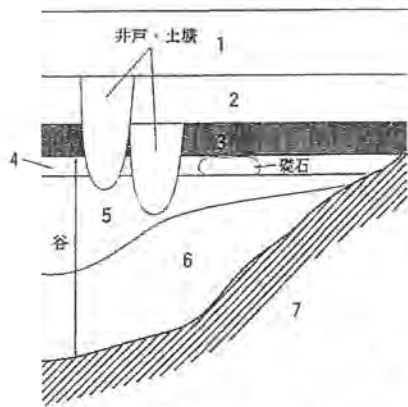


図3 地層と遺構の関係模式図

第1層：近世末期から近現代の整地層および遺構(攪乱)の埋土で、層厚は20～100 cmである。

第2層：にぶい黄褐～黒褐色シルトの炭や焼土を含む整地層で、層厚は20～30 cmある。本層以下第4層までは調査区の北半部だけに存在する。

第3層：褐色砂質シルトの焼土を主体とする整地層で、出土遺物から大坂夏ノ陣に際しての焼土層である。層厚は10～30 cmある。

第4層：黄褐～オリーブ褐色細質シルトの整地層でごく薄い炭層が介在する。層厚は10 cm未満で、後述する通路部分の硬化面上にも薄く存在する。

第5層：明黄褐～オリーブ褐色砂質シルト～粘土などが東にやや低く堆積する整地層で、南壁東端で最大層厚240 cmに及ぶ整地層である。出土遺物は少ないが、備前焼播鉢・肥前陶器・土師器皿などがあり、豊臣後期の整地層で、OS 99-59次調査の第3層に相当する地層であろう。

第6層：黄褐～明黄褐色砂質シルト～粘土質シルトである。層厚は約200 cmである。極細粒砂のラミナがわずかにみられるが、おおむね均質な粘土質シルトである。西側の斜面には地山層の流れ込みによるとと思われる明黄褐色粘土質シルト～粘土が20 cmほどの厚さで堆積している。鉄・マンガン酸化物の斑文が部分的に見られる。土師器・東播系須恵器鉢・瓦器・青磁・白磁の細片が出土し、古代～中世の水成層である。

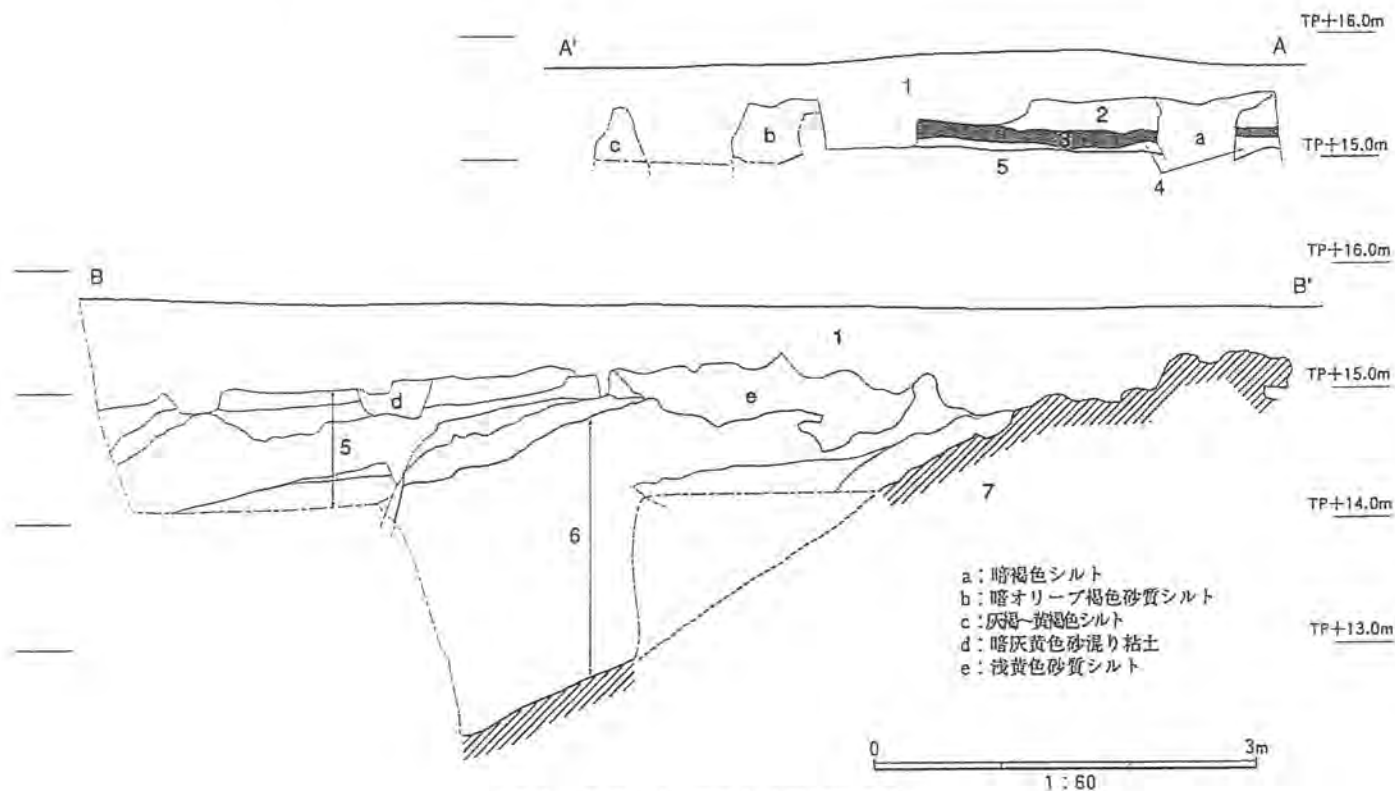


図4 北壁(上)・南壁(下)断面実測図

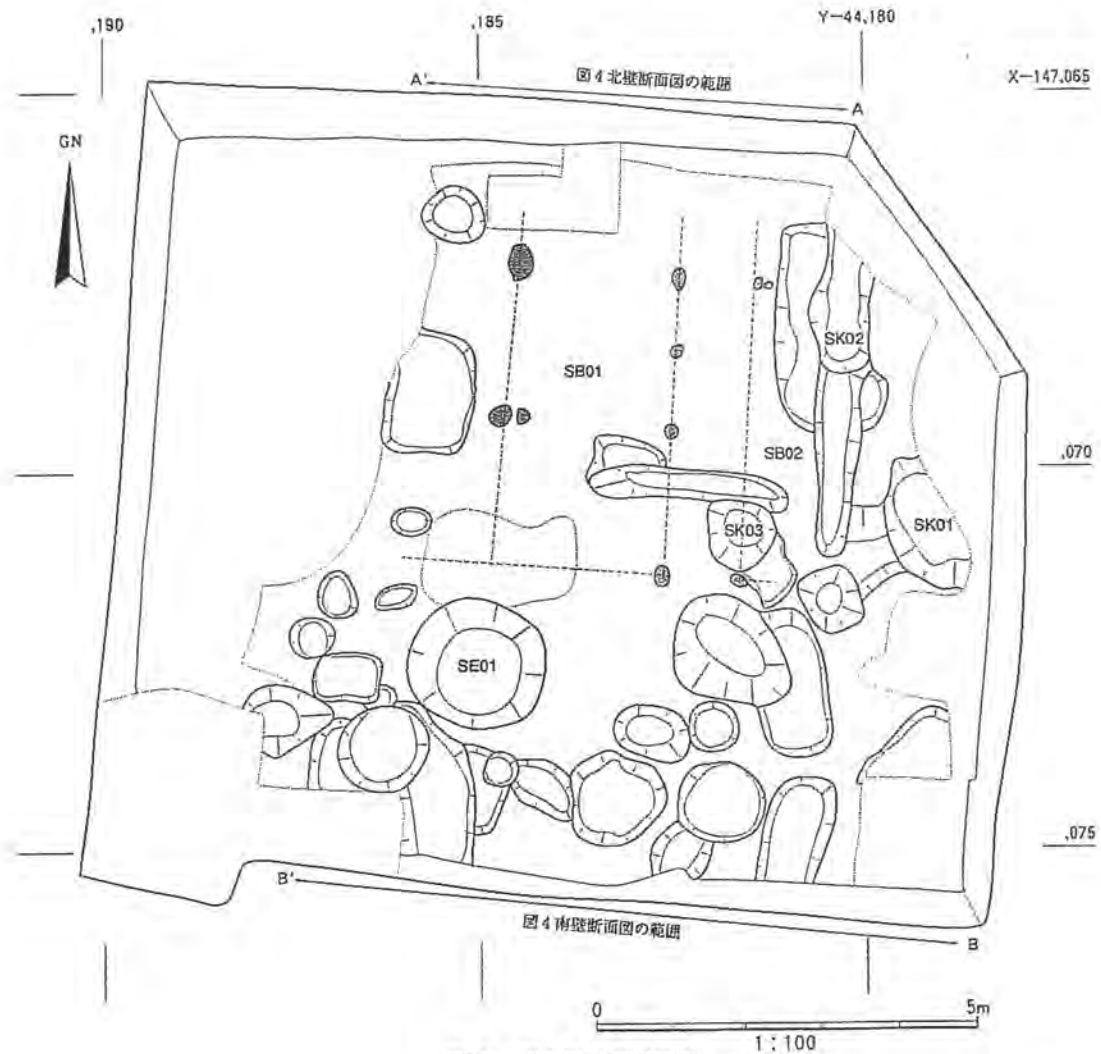


図5 第5層上面平面図

第7層：明黄褐色粘土の地山層で、調査区南西端に高く残る。粘土部分は上端から下に40 cmほどまでで、それ以下はにぶい黄色シルト～細粒・中粒砂である。東側の谷斜面ではTP + 12.7 mの位置から硬く締まった淡灰黄色砂礫となる。

ii) 遺構と遺物(図4～9)

遺構検出は北半部の第2層上面、南半部の第5層上面で最初に行い、その後、北半部だけに遺存する第2～4層を掘削して礎石建物などを検出した。図5で示す第5層上面の平面図は、第2～4層が遺存しなかった南半部などでは上層から掘られた遺構も含まれる。主要な遺構について記述する。

a. 礎石建物

調査区の北半部で、3列の礎石列を確認した。

西側の礎石列は長軸0.4～0.5 mの花崗岩の礎石を芯々2.0 mで配置している。南側礎石の東に接して長さ0.25 mの小さな礎石がある。さらに1間南に礎石があったと推定されるが、新しい土壌で失われている。この礎石列の東2.2 mに長軸0.2～0.3 mの礎石が北から2.0 m、3.0 m、4.0 mの間隔で4個検出された。さらに東に1.0 m離れて同規模の礎石列があったと推定されるが、南端の1個を除いて礎石は失われていたものの、礎石片と思われる石片がその位置付近で確認できた。

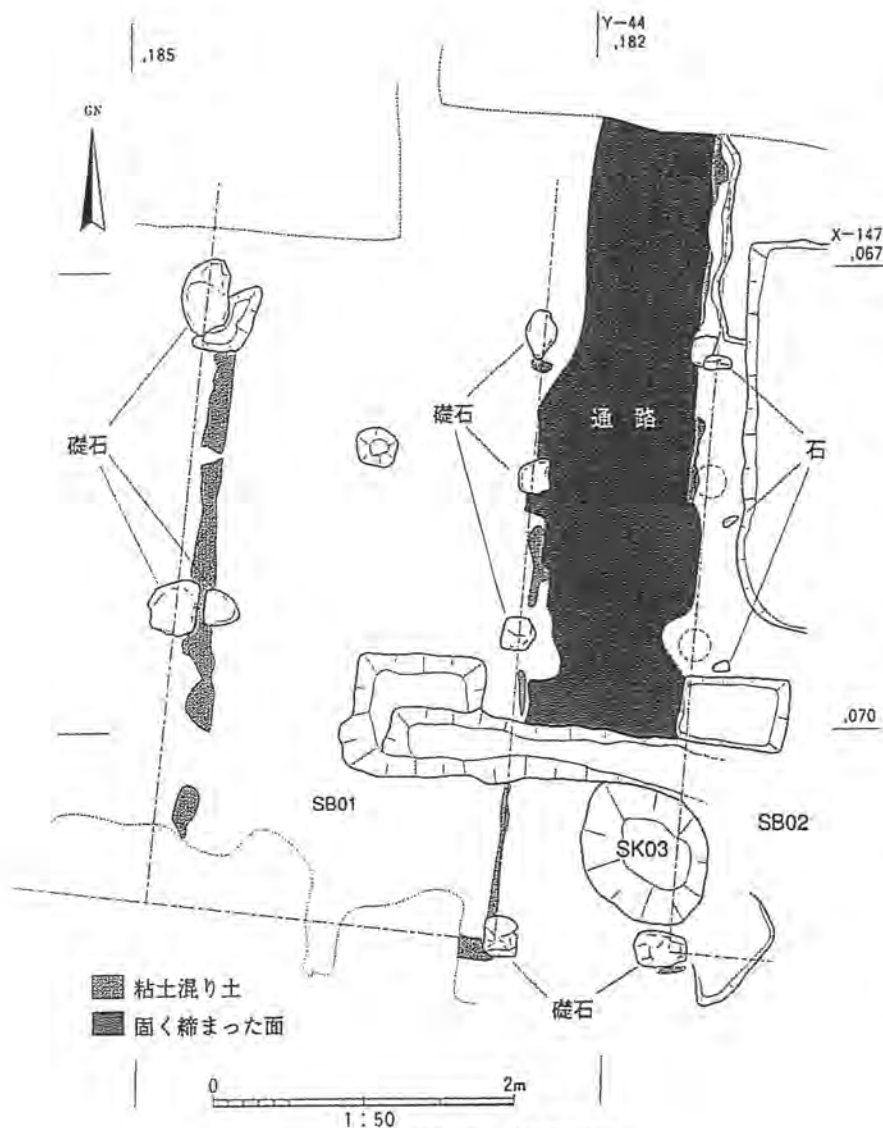


図6 SB01・02平面図

図6で図示したように、これらの礎石列には礎石間をつなぐように地山の黄色粘土を主体とする土が細い帯状に置かれていた。これが何のためのものか明らかでないが、同一建物を構成する各礎石の一連性を示すものと考え、中央礎石列は南端で西に粘土混り土が延びるのに対して、東礎石列が東に延びるとみられることから、東礎石列は西側2列の礎石列とは別の建物を構成すると推定することができる。

すなわち、西礎石列の大型礎石が母屋、中央礎石列がその東庇を

なすSB01と、東礎石列により構成されるSB02を復元することができる。この2棟の建物に挟まれた幅1.0mほどの南北の空間は表面が硬く踏み固められ、表面が青みがかって汚れるなど、建物間の南北通路になっていたことを推測させる。

これらの礎石建物跡を被覆する形で第3・4層の整地層が存在し、第3層中から土師器皿5、肥前陶器皿8・鉢11、備前焼水指12、青花小碗10、白磁皿9、青磁香炉7、石硯14、瓦、銅銭などが出土した。肥前陶器はいずれも胎土目がある。これらの遺物から第3層は大坂夏ノ陣による焼土で整地したものと考えられ、SB01・02はその際に焼失したものと思われる。

b. 井戸

SE01は調査区南部で検出した。直径1.8mの円形で、深さ1.2m以上である。肥前陶器、国産染付磁器などが出土した。

c. 土塹

SK01は調査区東端で検出された南北2.0m、東西1.0m以上の楕円形になると推定される土塹である。深さは約0.25mで、埋土はオリーブ褐色シルトである。胎土目のある肥前陶器皿1や碗2・鉢

3、瓦質土器甕、土師器焙烙などが出土した。いずれも被熱しており、埋土には焼壁なども含まれていた。第3層の焼土層との層位関係は確認できなかったが、SB02に伴う可能性がある。

SK02も調査区北東部で検出された。南北4 m以上、東西0.6 m、深さ0.8 mの溝状の深い土坑である。埋土は締まりのないオリブ褐色シルトであった。砂目の肥前陶器皿4・丸碗などが出土した。

SK03は調査区中央のやや東寄りで検出された。直径0.9 mの不正円形を呈し、深さ0.4 mで埋土は上層が暗灰黄色砂礫混りシルトで、下層がオリブ褐色シルトである。上層に遺物が多く含まれており、土師器皿、肥前陶器碗、常滑焼播鉢などとともに、「山崎・・」、「神宮寺・・」の文字を凸面にスタンプで陽刻した平瓦片15が出土した。この平瓦は全面をナデ調整で丁寧に仕上げられており、厚さ約2 cmの大振りの瓦である。図9拓本の右側破損面の下端部にごく一部表面が残る。

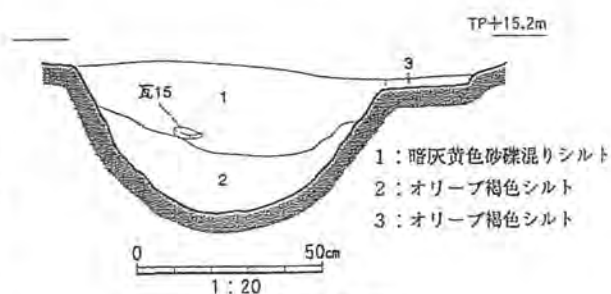


図7 SK03断面図

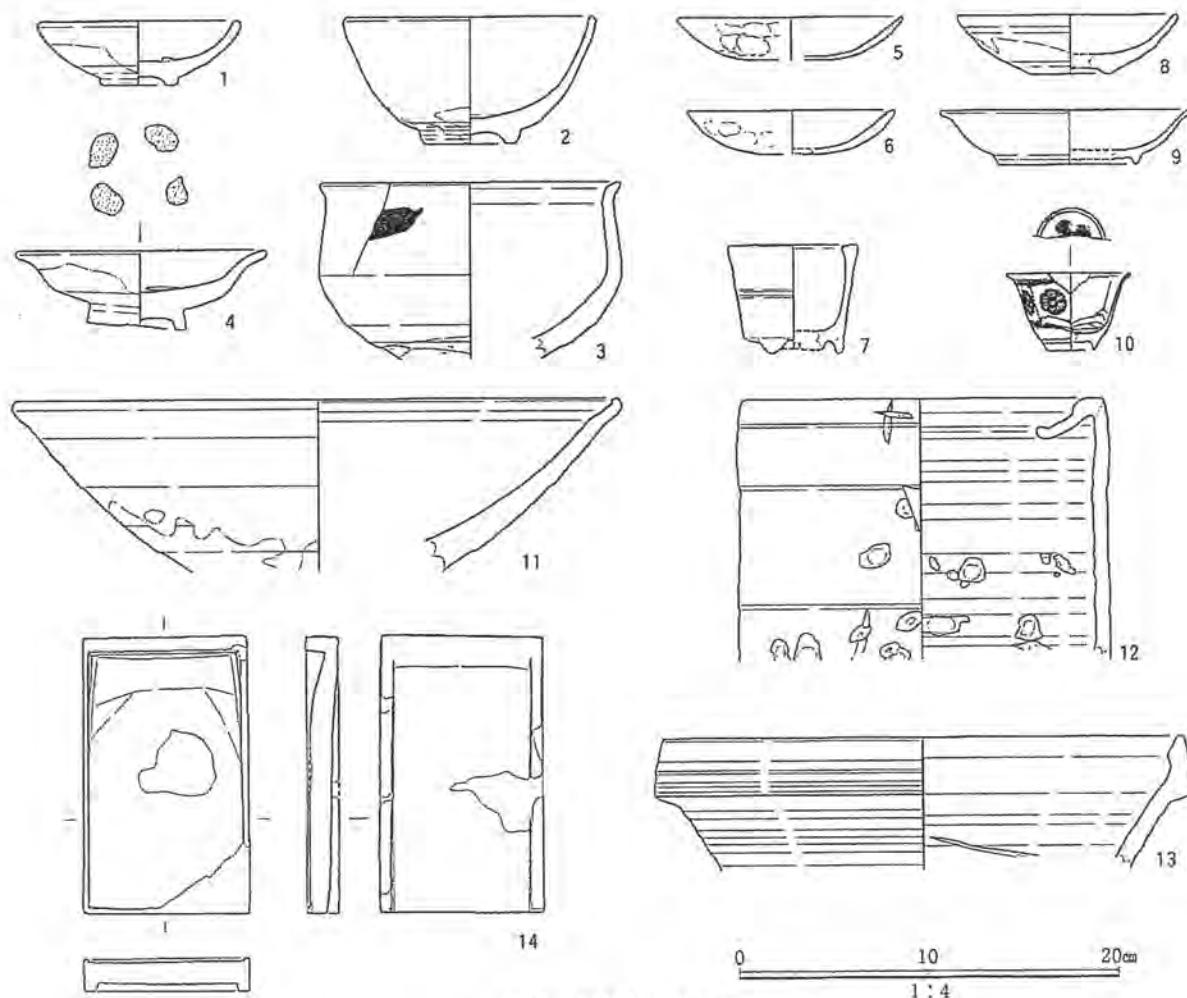


図8 出土遺物実測図

SK01 (1~3)、SK02 (4)、第3層 (5・7~12・14)、第5層 (6・13)

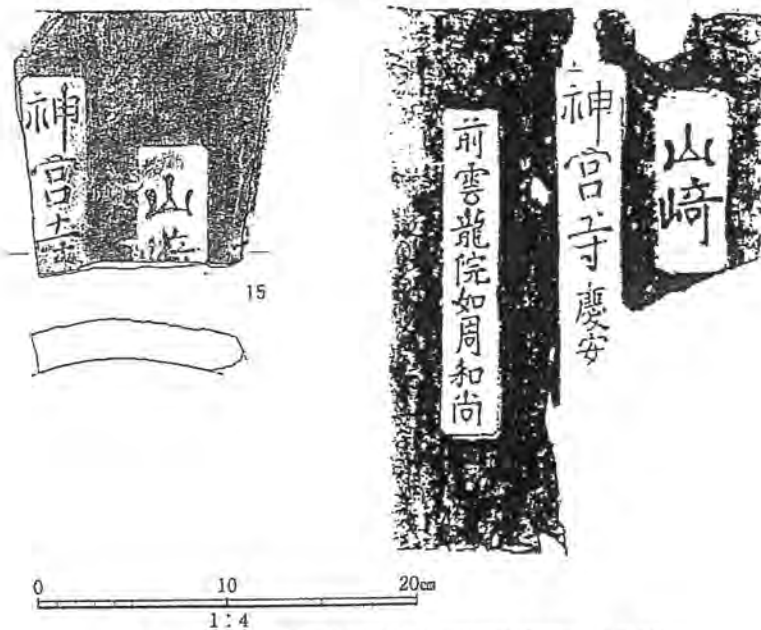


図9 SK03出土瓦(15)と大山崎町妙喜庵出土瓦(右)

この文字瓦と同じスタンプの瓦は、京都府大山崎町の大念寺所蔵丸瓦、妙喜庵出土の丸瓦のほか離宮八幡宮内で多く出土している。これらの資料から、スタンプ文字は「山崎」、「神宮寺慶安元季再建」であり、さらに「前雲龍院如周和尚」のスタンプ文字があることがわかる。前述のとおり15の断面に一部残る面はこのスタンプの押圧による可能性がある。このように、SK03

から出土した文字瓦15は、山崎の離宮八幡宮社領内にあった神宮寺に入寺した前雲龍院如周和尚が慶安元(1648)年に堂舎を再建した際に生産されたものとはほぼ断定できる。

以上のことからSK03は17世紀中葉以降のものと思われる。



図10 調査地周辺の古地形復元図

この他、調査区南部に密集する土壌は17世紀後半から18世紀後半ごろまで下るものであろう。

d. 谷状地形

調査区の東側3分の2が谷状地形に当たり、南西隅に谷の肩に当たる地山層が検出された。南壁際を深掘りして谷の傾斜を確認したが、図4の南壁断面図に示したとおり東に急な斜面をなしていることが確認できた。斜面部には古代から中世ごろと推定される厚い水成層(第6層)があり、土師器、東播系須恵器鉢、瓦器・青磁・白磁の細片が出土した

が、図化できるものはなかった。それを削り込むようにして豊臣期の整地層(第5層)がある。土師器皿6・備前焼播鉢13・肥前陶器などが出土した。SB01・02はその整地層上に建てられている。

この谷は、安堂寺通を挟んだ北側のOS99-59次調査やOS05-7次調査でも確認されており、北でやや西に振る方向に延びていると推定される(図10)。

3)まとめ

今回の調査では豊臣期に盛土されて埋められた谷を確認し、その上面で大坂夏ノ陣で被災したSB01・02を検出した。これまで周辺の調査ではこの時期の建物や焼土層は確認されていなかった。SB01・02は現在の町割と等しく、北でやや東に振る方位をとる。OS99-59次調査で検出された豊臣前期の柵は正方位であったことから、谷部における豊臣後期の整地事業を契機に現在の町割方位がとられたと考えられる。

また、SK03から出土した文字瓦は大山崎の離宮八幡宮社領内にある大念寺・妙喜庵などからの出土資料とともに、17世紀中葉の神宮寺再建のために生産された瓦であることが確実である。

山崎神宮寺は大念寺・妙喜庵と同じく離宮八幡宮の社領内にある。中世の大山崎は八幡宮の神人による油業が盛んで離宮八幡宮も隆盛をきわめたが、江戸時代になって大坂付近の製油業にとって代わられ、離宮八幡宮も衰退する。しかし、寛永10(1633)年に幕府は離宮八幡宮の社殿の再建を行うなど、17世紀末ごろまで手厚い助成を行っており、それが原因で岩清水八幡宮との争いを引き起こしている。こうした状況からみて、離宮八幡宮の社領にある神宮寺に対しても幕府の援助があった可能性が高く、慶安元(1648)年の再建に際して、新しい堂舎の屋瓦を大坂の幕府の御用瓦師に作らせたとみることもできるのではなかろうか。

調査地周辺は寛永7(1630)年に幕府の御用瓦師である寺島藤右衛門の請地となった造瓦用粘土の採掘地が広がっていた区域であり、山崎神宮寺の再建時にはすでに寺島家の請地であったと考えられる。今回の出土瓦は、山崎神宮寺の再建に大坂で生産された瓦が使用された可能性を示す資料として重要であろう。

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会 1999、「丸紅株式会社による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査(OS99-59)報告書」
2002、「OS99-59次調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』
pp.84-89
2005、「株式会社マンダムによる建設工事に伴う大坂城跡・難波宮跡発掘調査(OS05-7)報告書」
2006、「安堂寺町2丁目における大坂城跡発掘調査(OS06-1)報告書」
大山崎町教育委員会 1997、「妙喜庵-大山崎町埋蔵文化財調査報告書第15集-」
2000、「大山崎町埋蔵文化財調査報告書20集」
吉川一郎 1953、「大山崎史叢考」

調査区全景
(東から)



SB01・02全景
(南から)



SB01の礎石と第3層
(焼土層)



大坂城跡発掘調査(OS07-10)報告

調査個所 大阪市中央区内久宝寺4丁目50・51・52-2
調査面積 50m²
調査期間 平成19年9月21日～9月26日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、田中清美

1) 調査の経緯と経過

調査地は上町台地の西側斜面の末端近くに位置しており、豊臣氏大坂城の東横堀から東へ約150m地点に当る(図1)。調査地の周辺では内久宝寺4丁目の東西道路を隔てて南側にOS90-109次調査地、北には約50m離れてOS88-73次調査地がある(図1)。OS88-73次調査地ではN7°E方向に延びる現在の街区とほぼ同じ方向の18世紀代の石垣をはじめ、明代の染付磁器や埴輪を含む北側に落ちる谷地形が確認されており[大阪市文化財協会2003]、OS90-109次調査地では現地表下2.6mの第7層の上面から18世紀代に属する礎石建物や小穴群が検出されているほか、第7層から5世紀代に属する円筒埴輪が出土している[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991]。大阪市教育委員会が実施した試掘調査でも現地表下2.3m前後で、中世や古代の土器片を含む地層が確認されたため、本調査を行うことになった。

調査はまず、旧建物の基礎の影響を受けていない敷地内の東南部に事前に設けられた東西6.0m、南北12.0mの調査区の清掃から着手した(図2)。調査区の4壁のうち、東・南・北壁は調査面まで土留の木矢板が設置されていたほか、西壁はすべて旧建物の攪乱層であったため、本調査では現地表から調査着手面間の層序は明らかにできなかった。掘削は人力によったが、掘削土の排出や深掘りの際には重機を使用した。

調査面を精査すると、調査区の東南から北西にかけて当地域の地山層である第4層の偽磔を主体とする第3層(整地層)が広がっており、第3・4層上面で豊臣後期から徳川初期の土蔵や井戸を検出した。これらの遺構の調査を行った後、第3層の厚さや基底面の状況を確認するため、深掘りしたが、

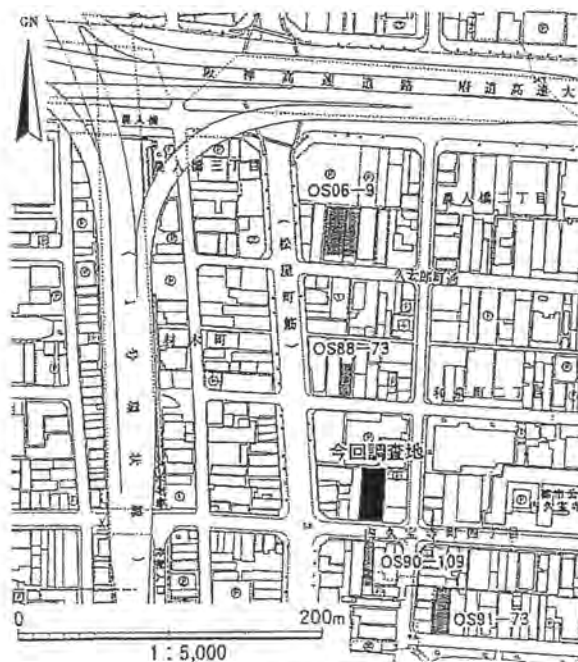


図1 調査地位置図

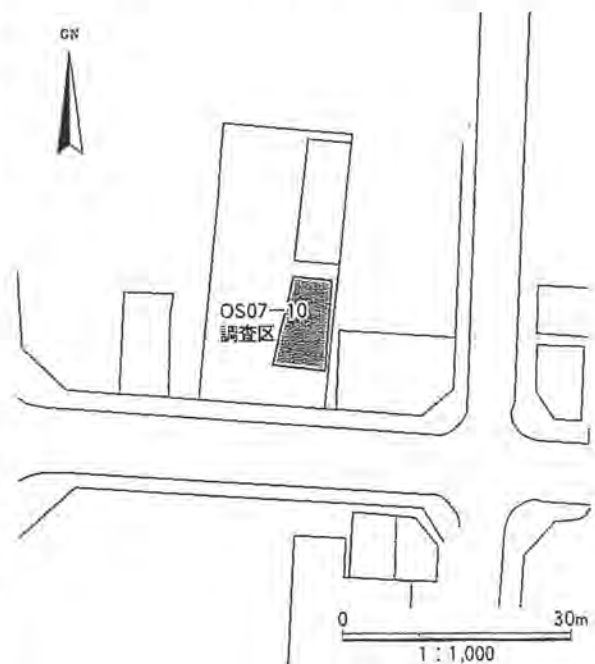


図2 調査区位置図



図3 地層と遺構の関係図

掘削深度内では明らかにしえなかった。

9月25日に写真撮影や実測図などの記録作業を終えた後、翌26日には現場におけるすべての作業を完了した。

本報告で用いた指北記号は図1・2が座標北、図5・7は磁北で、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いて、本文中ではTP+〇mとした。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層 暗褐色砂・礫混りシルト層で、重機掘削時の残土である。

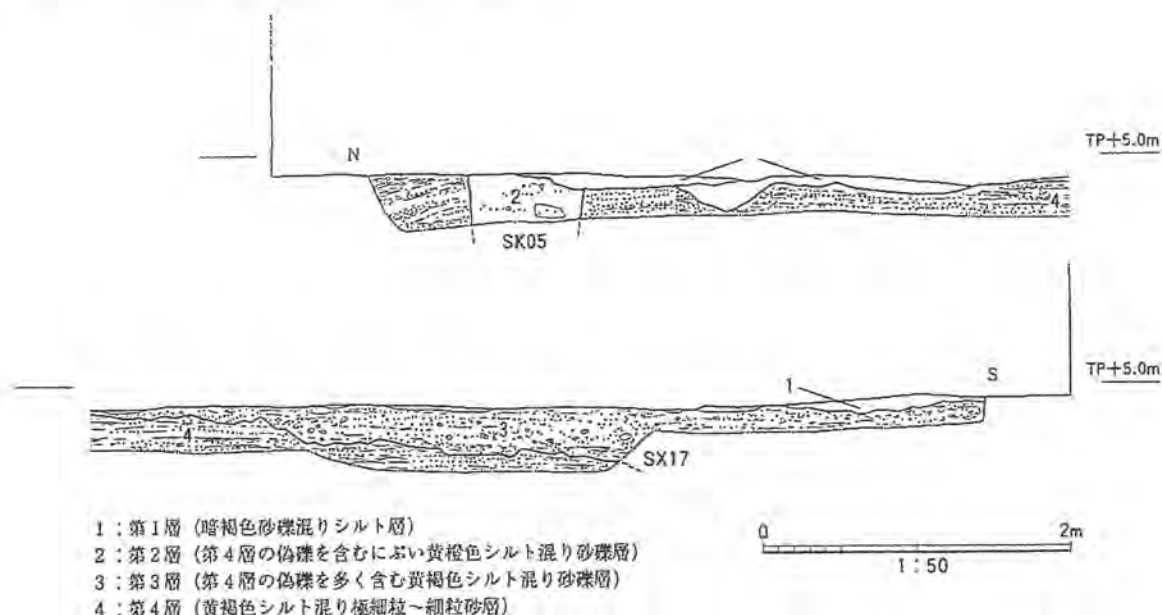
第2層 本層は土壌SK02~05・11・12・15などの埋土であり、第4層の偽礫を含むにぶい黄橙色シルト混り砂礫である。色調や質は異なるが井戸SE01・07・10、SP16の埋土も本層準に相当する。

第3層 第4層の偽礫を多く含む黄褐色シルト混り砂礫層で、東南から北西に延びる東肩があり、西側に落ちる第4層の窪地(SX17)を埋める整地層である。調査地の南部では本層上部から古墳時代中期の円筒埴輪をはじめ、8世紀中葉の須恵器や14世紀代の瓦器碗の細片などが出土した。本層の年代は、上面で豊臣後期の井戸SE01・07・10などが検出されたことから豊臣後期以前に遡る可能性がある。

第4層 黄褐色シルト混り極細粒~細粒砂層で、当地域の地山層である。本層上面の標高はTP+4.9m前後あり、調査区の北部では南から北に斜向する細粒砂のラミナが観察された。上町層の上部層に当る。

ii) 遺構と遺物

以下、主な遺構と遺物について記述する。



- 1 : 第1層 (暗褐色砂礫混りシルト層)
- 2 : 第2層 (第4層の偽礫を含むにぶい黄橙色シルト混り砂礫層)
- 3 : 第3層 (第4層の偽礫を多く含む黄褐色シルト混り砂礫層)
- 4 : 第4層 (黄褐色シルト混り極細粒~細粒砂層)

図4 東壁断面実測図

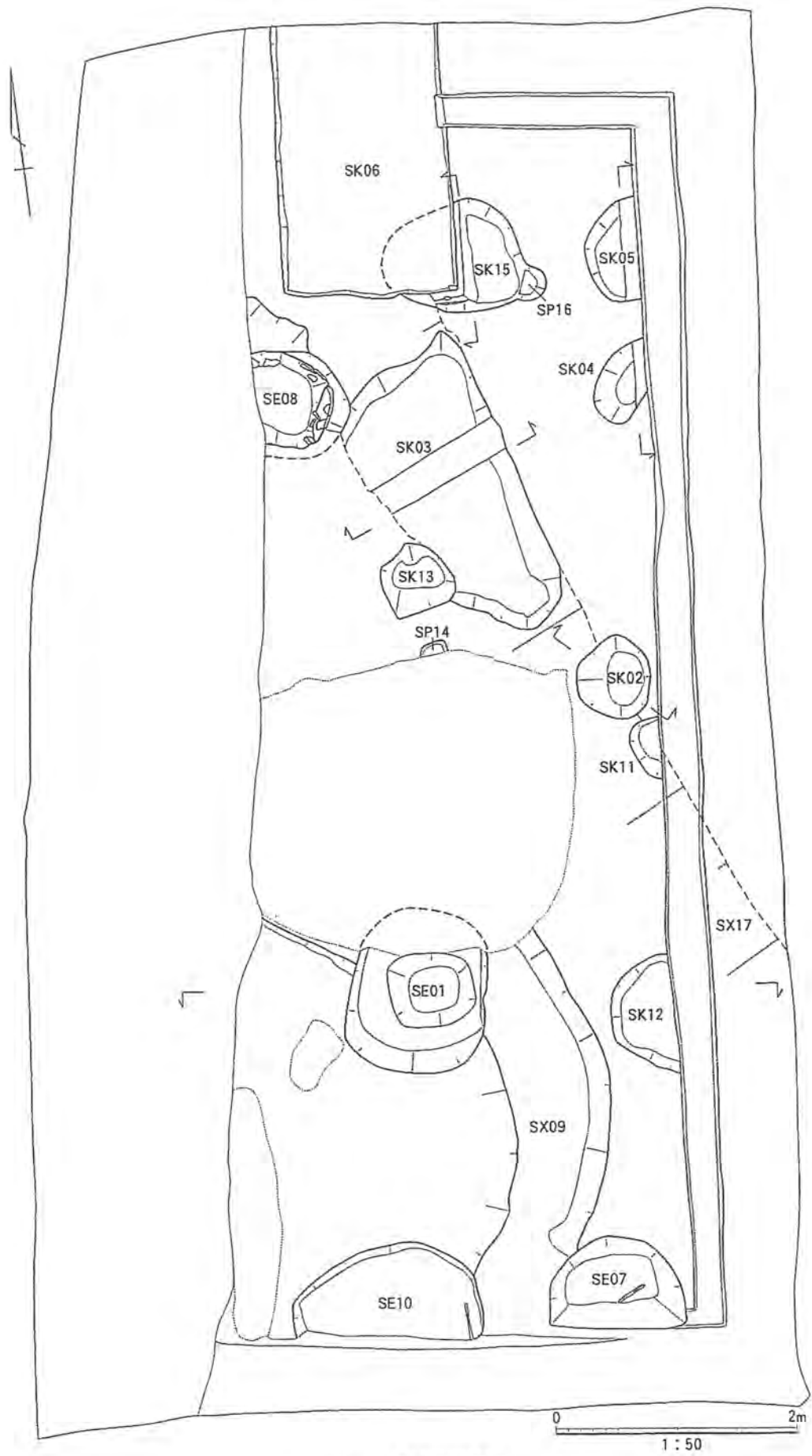


图5 主要遺構配置図

a. 豊臣後期の遺構(図5・8)

SX17 調査区の東南から北西方向に延びる東肩があり、西側に落ちる落込みで、深さ0.6m以上ある。第4層の偽磔を多く含む黄褐色シルト混り砂磔で整地されており、少量の古代の土師器・須恵器および中世の瓦器の細片が出土した。上面から豊臣後期のSE01・07・10、SK03・15、段状の遺構SX09をはじめ、徳川期の土塋SK06などが検出された。豊臣後期以前に整地された落込みの可能性はある。

SX09 調査区の南部に位置する東から西に向って深くなる段状の遺構である。埋土は褐灰色シルト・磔混り細粒砂で、古墳時代中期の形象埴輪2、古代の土師器・須恵器をはじめ、瓦器碗の細片が出土した。

形象埴輪2は器表面に3条の線刻があるが、器形は明らかでない。内面は器面の残りが悪く調整は不明である。焼成は酸化焰焼成である。古墳時代中期に属するものであろう。

SE01 調査区の南部に位置する井戸で、掘形は長径1.3m、短径1.1mの楕円形を呈している。掘形の埋土はオリブ黄色シルト混り砂磔である。井戸側は、掘形に密着して板材の断片が出土したことから、板を方形に組む構造であったようである。井戸側内には水成の灰色シルト混り砂磔層が堆積しており、肥前陶器碗4や土師器の細片が出土した。4は内面のみに施釉されているが、二次的な火を受けて変色している。高台は三日月高台で、豊臣後期に属するものである。

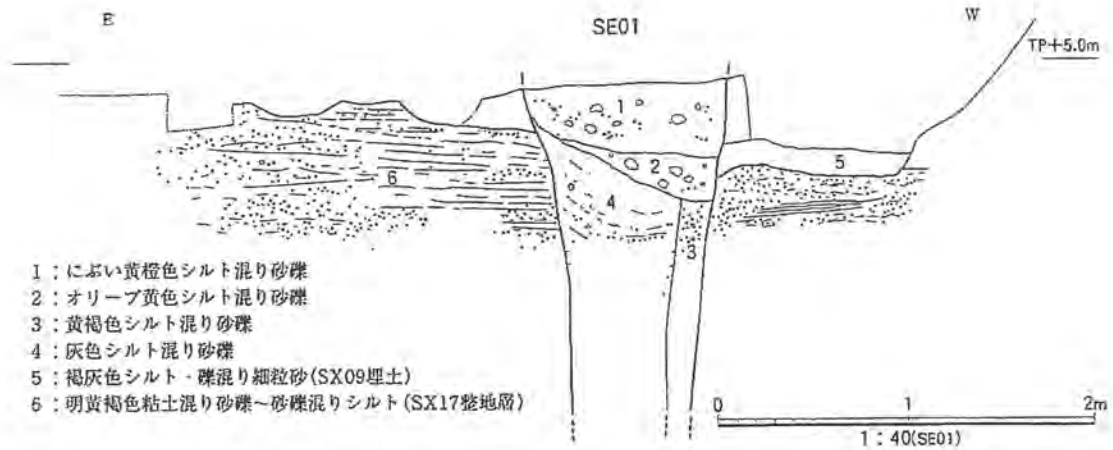
SE07 調査区の南端部に位置する径約1.1mの井戸で、南半部は調査範囲外である。検出面から約1.3mまで掘下げたが、井戸側は確認されなかった。井戸内は、第4層の偽磔を含む灰黄褐色砂・磔混りシルトで埋戻されていた。埋土から円筒埴輪5、肥前陶器碗6、巴文軒丸瓦7などが出土した。円筒埴輪5の器面調整は外面が左上がりのタテハケ、内面がヨコハケで、酸化焰焼成によっている。古墳時代中期に属するものである。肥前陶器碗6は二次的な火を受けており、高台裏面に糸切痕がある。豊臣後期に属するものであろう。巴文軒丸瓦7は丸瓦との接合部に刻みがある。このほか、幅15cm、長さ30cm、厚さ2.0cmのマツの板材が1点出土している。

SE10 SE07の西側に位置する径1.6mの素掘りの井戸で、南半分は調査範囲外である。検出面から約1.3mまで掘下げたが、井戸側は見られなかった。井戸内は第4層の偽磔を含むにぶい黄褐色砂・磔混りシルトで埋戻されており、幅20cm、長さ30cm、厚さ2cmのマツの板材が1点出土したのみである。

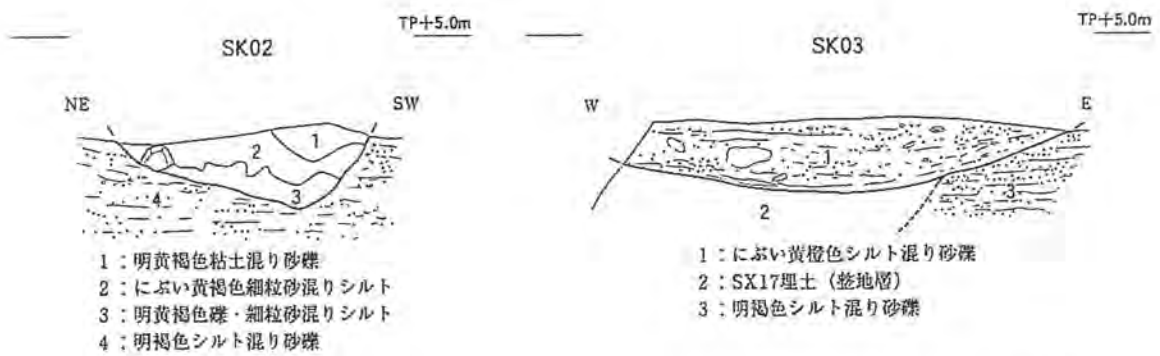
SK02 調査区の中央東側に位置する直径約0.6m、深さ0.2~0.3mの土塋である。第4層の偽磔を含む明黄褐色粘土混り砂磔・にぶい黄褐色細粒砂混りシルト・名黄褐色シルト混り砂磔などで埋戻されていた。遺物は混入品とみられる円筒埴輪の細片1が出土したのみである。

SK03 調査区の中央北に位置する東西1.0m、南北2.5m、深さ0.2mの土塋である。土塋内は第4層の偽磔を含むにぶい黄褐色シルト混り砂磔で埋戻されていた。遺物は土師器の細片が出土したのみである。

SK04 調査区の北東部に位置する短辺0.4m、長辺0.7m、深さ0.3m前後の土塋で、東側は調査範囲外である。土塋内は第4層の偽磔を含むにぶい黄褐色シルト混り砂磔・にぶい黄褐色砂磔で埋戻さ

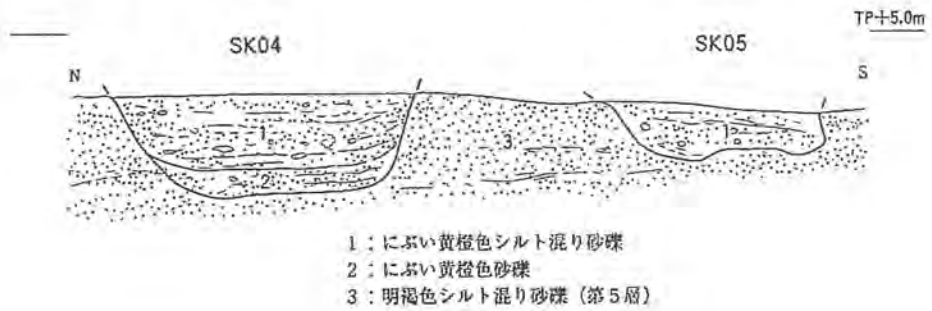


- 1 : におい黄橙色シルト混り砂礫
- 2 : オリーブ黄色シルト混り砂礫
- 3 : 黄褐色シルト混り砂礫
- 4 : 灰色シルト混り砂礫
- 5 : 褐灰色シルト・礫混り細粒砂(SX09埋土)
- 6 : 明黄褐色粘土混り砂礫～砂礫混りシルト(SX17整地層)

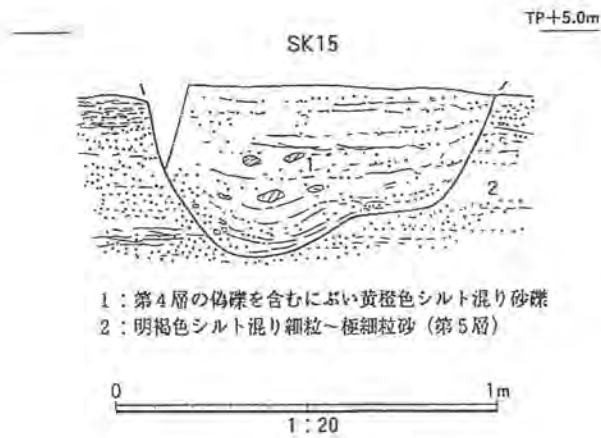


- 1 : 明黄褐色粘土混り砂礫
- 2 : におい黄褐色細粒砂混りシルト
- 3 : 明黄褐色礫・細粒砂混りシルト
- 4 : 明褐色シルト混り砂礫

- 1 : におい黄橙色シルト混り砂礫
- 2 : SX17埋土(整地層)
- 3 : 明褐色シルト混り砂礫

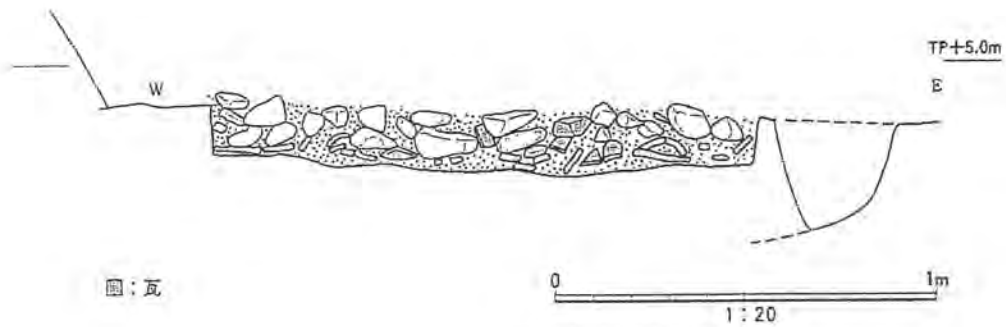
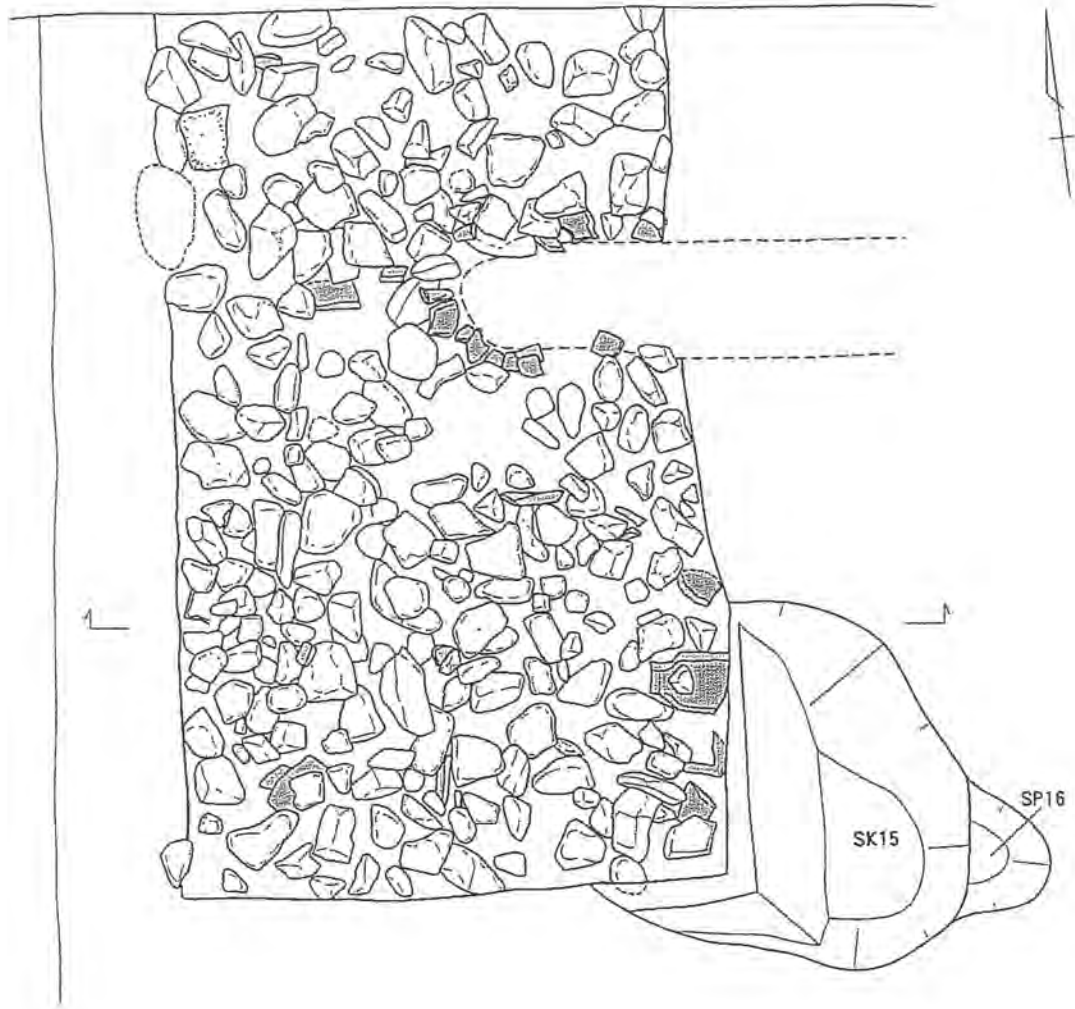


- 1 : におい黄橙色シルト混り砂礫
- 2 : におい黄橙色砂礫
- 3 : 明褐色シルト混り砂礫(第5層)



- 1 : 第4層の偽礫を含むにおい黄橙色シルト混り砂礫
- 2 : 明褐色シルト混り細粒～極細粒砂(第5層)

図6 遺構断面実測図



図：瓦

図7 SK06平面・断面実測図

れていた。遺物は出土しなかった。

SK05 SK04の北側に位置する直径約0.8m、深さ0.2~0.3mの土坑である。土坑内は第4層の偽磔を含むにぶい黄橙色シルト混り砂礫で埋戻されており、遺物は出土しなかった。

SK15 SK06に遺構の西側を掘込まれた直径約0.9m、深さ0.3m以上の不整形な土坑である。埋土は第4層の偽磔を含むにぶい黄橙色シルト混り砂礫で、土師器や円筒埴輪3の細片が出土した。円筒埴輪3の器面調整は内面が横方向の粗いハケで、外面は器面が磨滅しており明らかでない。焼成は酸

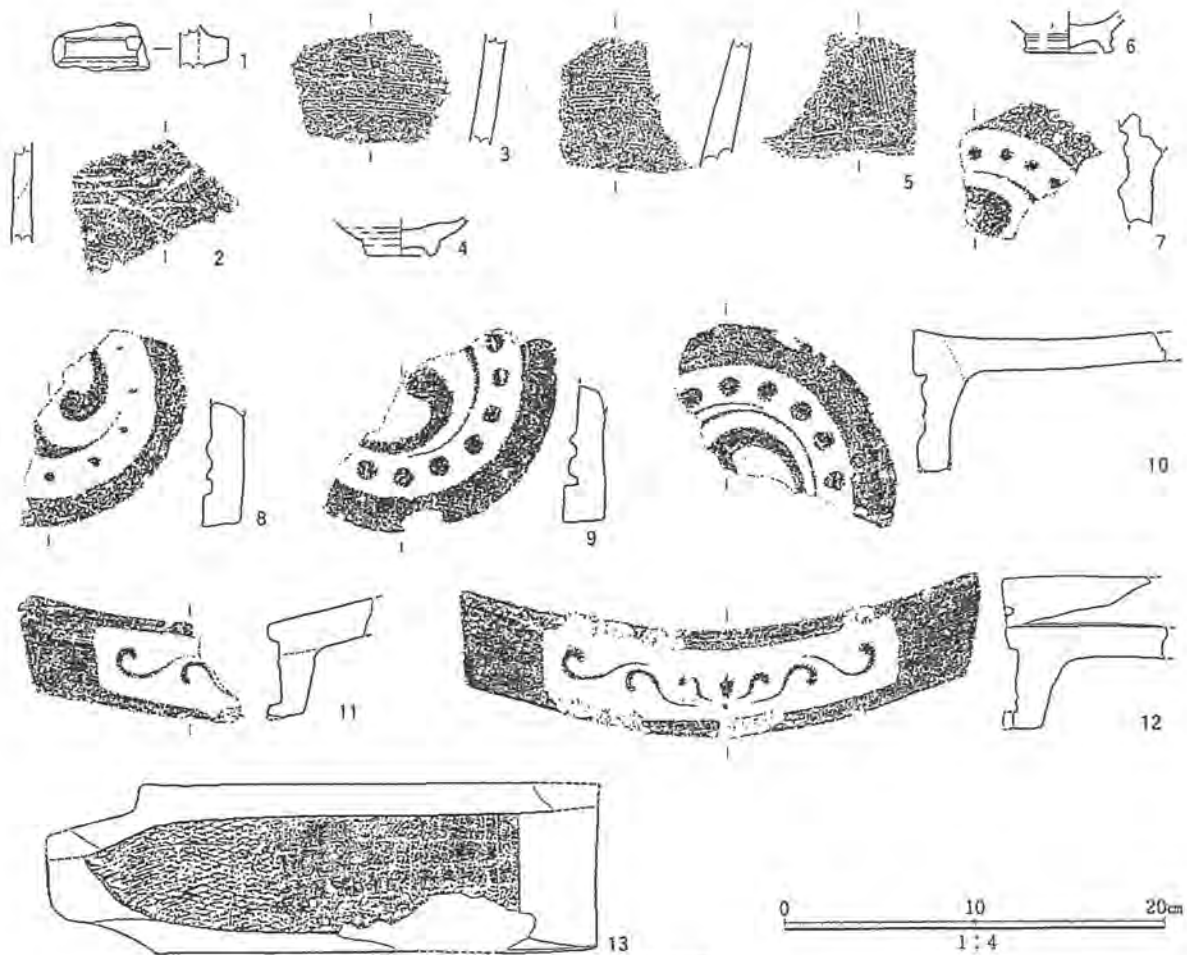


図8 出土遺物実測図

SK02(1)、SX09(2)、SK15(3)、SE01(4)、SE07(5~7)、SK06(8~13)

化焰焼成である。古墳時代中期に属するものであろう。

b. 江戸時代の遺構

SK06 調査区の北西部に位置する東西0.95m、南北2.3m以上、深さ約0.2mで、底が平坦な長方形の土塋である。土塋内には瓦および5~20cmの石が砂礫とともに詰めてあった。何かの基礎に関わる遺構の可能性もあるが、用途については明らかにしえなかった。

8~13は土塋から出土した瓦類である。8・9は巴文軒丸瓦、10は瓦当の下半部が切り取られており、建物と回廊の接合部などを葺くための付け根瓦である。11・12は均整唐草文軒平瓦で、後者の瓦当は完存している。13は丸瓦で、凹面に鉄線引の痕がある。以上の瓦類は巴文や唐草文などからみて、徳川期初期に属するものである。

SK11 SK02の南側に位置する直径約0.5m、深さ0.3mの土塋である。埋土は黄褐色砂・礫混りシルトである。

SK12 SX09の東に位置する東西0.6m以上、南北約0.9m、深さ0.1m前後の浅い土塋である。埋土は黄褐色シルト混り砂礫である。木片が出土した以外には遺物はない。

SK13 SK03を切る直径約0.6m、深さ0.4mの土塋である。埋土は黄褐色砂・礫混りシルトで、遺物は出土しなかった。

SE08 SK03の北西部を切る井戸で、井戸側は瓦質である。井戸側内から19世紀代の関西系陶器や瓦、焼土塊などが出土した。

3) まとめ

本調査は小規模ではあったが、豊臣後期から江戸時代にかけての井戸や土壙が検出された。これらの遺構は周辺の調査地と同様に当地が豊臣後期から江戸時代にかけて居住地であったことを示している。また、東から西に向って深くなる落込みSX17は、調査地周辺で検出されている谷の一角に当る可能性がある。ここを整地した第3層から出土した古墳時代中期の円筒埴輪の細片をはじめ、本調査で出土した埴輪類は、近くに古墳が存在したことを示唆している。

今後、周辺部の調査が進めば豊臣後期以前に整地された谷や古墳の実態についても明らかになるものと思われる。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.43-47.
大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ、pp.323-324.

第3・4層上面の遺構全景
(南から)



SK06近景(西から)

大坂城跡発掘調査(OS07-12)報告書

- ・調査箇所 大阪市中央区大坂城 大坂城公園内 玉造口
- ・調査面積 220m²
- ・調査期間 平成19年12月4日～平成20年1月17日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は特別史跡大坂城跡にあり、大坂城公園の南東部に位置する玉造口枡形である(図1・2)。特別史跡大坂城は、豊臣秀吉の築いた大坂城が大坂夏ノ陣(1615年)で焼失したのち、元和6(1620)年～寛永6(1629)年の徳川幕府による3次10年間の工事で再建されたものである。玉造口枡形は第3次の寛永5(1628)年に鍋島勝茂の佐賀藩が築造した(図3)。

これまで当地周辺の調査には、配水管埋設に伴って行ったOS81-2・8次調査があり、枡形の一ノ門跡の前面で石垣を検出し、土橋築造以前の姿を確認している[大阪市文化財協会2002]。

今回の調査は1954年から行われてきた整備事業の一環で、石垣・雁木の構築方法の確認と櫓台上の建物遺構の検出を主目的として行った。調査は2箇所で、一ノ門の西に繋がる雁木周辺(南区)と東櫓台上(東区)である。

南区では雁木が事前に大阪市ゆとりとみどり振興局によって取り除かれていたため、調査は裏込め

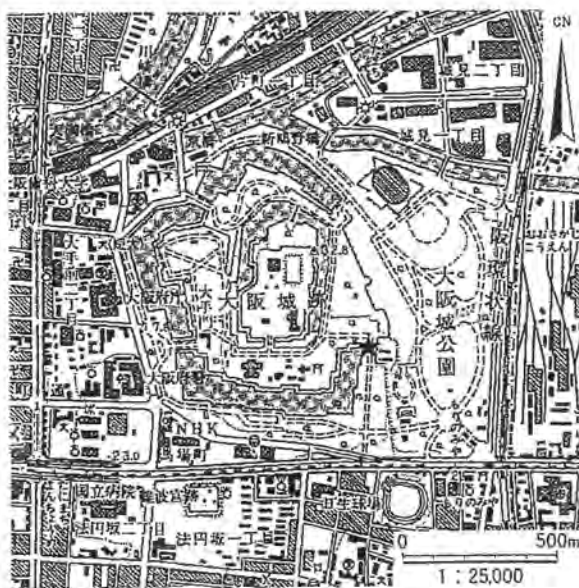


図1 調査地位置図

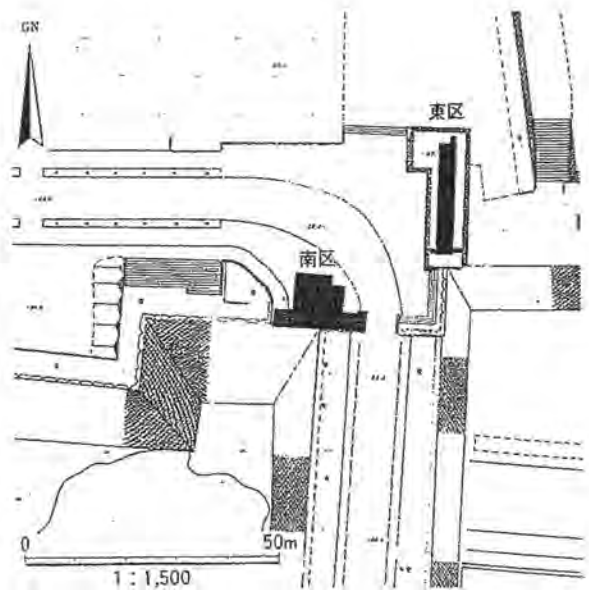


図2 調査区位置図

の栗石の状況と石垣石と栗石の関係、および裏込めの下層の確認を目的とし、東区では檜台上にあった多聞櫓の遺構の検出を行った。

豊臣氏大坂城の二ノ丸堀は、冬ノ陣(1614年)の講和後、翌年正月22、23日まで約1箇月かけて徹底的に埋められたが、その際、埋め代にするため石垣が掘り崩されたと伝えられる。また徳川幕府が再建するに当って、倍旧する石垣を積んだといわれている。南区で豊臣期の石垣や整地層が確認できるかどうか大きな目標であった。

2007年12月4日にまず南区から着手したが、現代のヒューム管や会所が出現し、それをよけて調査した。東区は草木が繁茂しており、12月10日に伐採に着手した。

南・東区の調査は平行して行ったが、年末・年始の長期休暇を挟むことから、深く掘削した南区の一部は年内に埋戻した。12月21日に大阪市ゆとりとみどり振興局と同教育委員会をはじめとする整備委員会の見分があった。東区は調査が終了した2008年1月15日から保護砂を入れて埋戻した。同月17日に資材を撤収、現地を復旧し、全ての調査を終えた。

調査では平面図は磁北を基準に図化し、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記した。

〈調査の結果〉

1. 層序

両調査区に共通する基本層序は次のとおりである(図3・4・11~13)。

第0層：戦後の整地層で、南区は層厚10~40cmの暗灰黄色シルト混り粗粒砂層、東区は層厚10~60cmのオリブ褐色細粒~粗粒砂層である。東区から軒丸瓦23・24、軒平瓦28、「甚」刻印をもつ平瓦32(刻12)、星印刻印をもつ煉瓦33、聖宋元宝35、「倉知硬質磁器」銘の磁器皿36、刻印瓦刻2・5・7・8・13~15・26・27が出土した。

第1層：南区では層厚10~40cmの瓦・煉瓦を含む黄褐色シルト偽礫を含む粗粒砂層で、煉瓦建物の裏込め土でもある。東区での近代作土層では、層厚10~50cmの黒褐色中粒砂混りシルト層である。南区で関西系陶器土瓶蓋1・身3、皿2、産地不明磁器皿4、東区で格子タタキ痕跡をもつ平瓦18、差

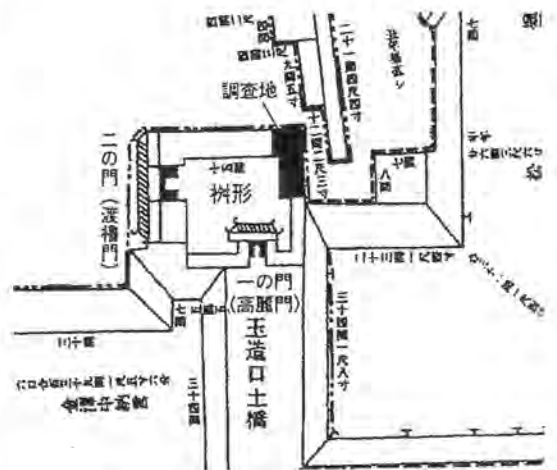


図3 「大坂城普請丁場割之図」より
(大阪府中之島図書館本の模写)

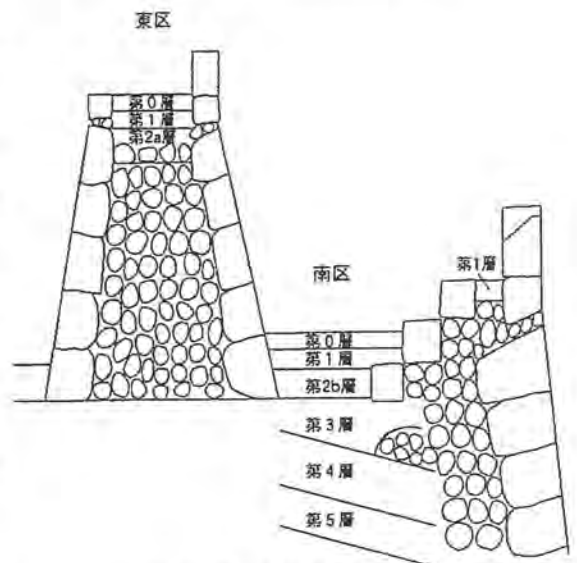


図4 地層と遺構の関係図

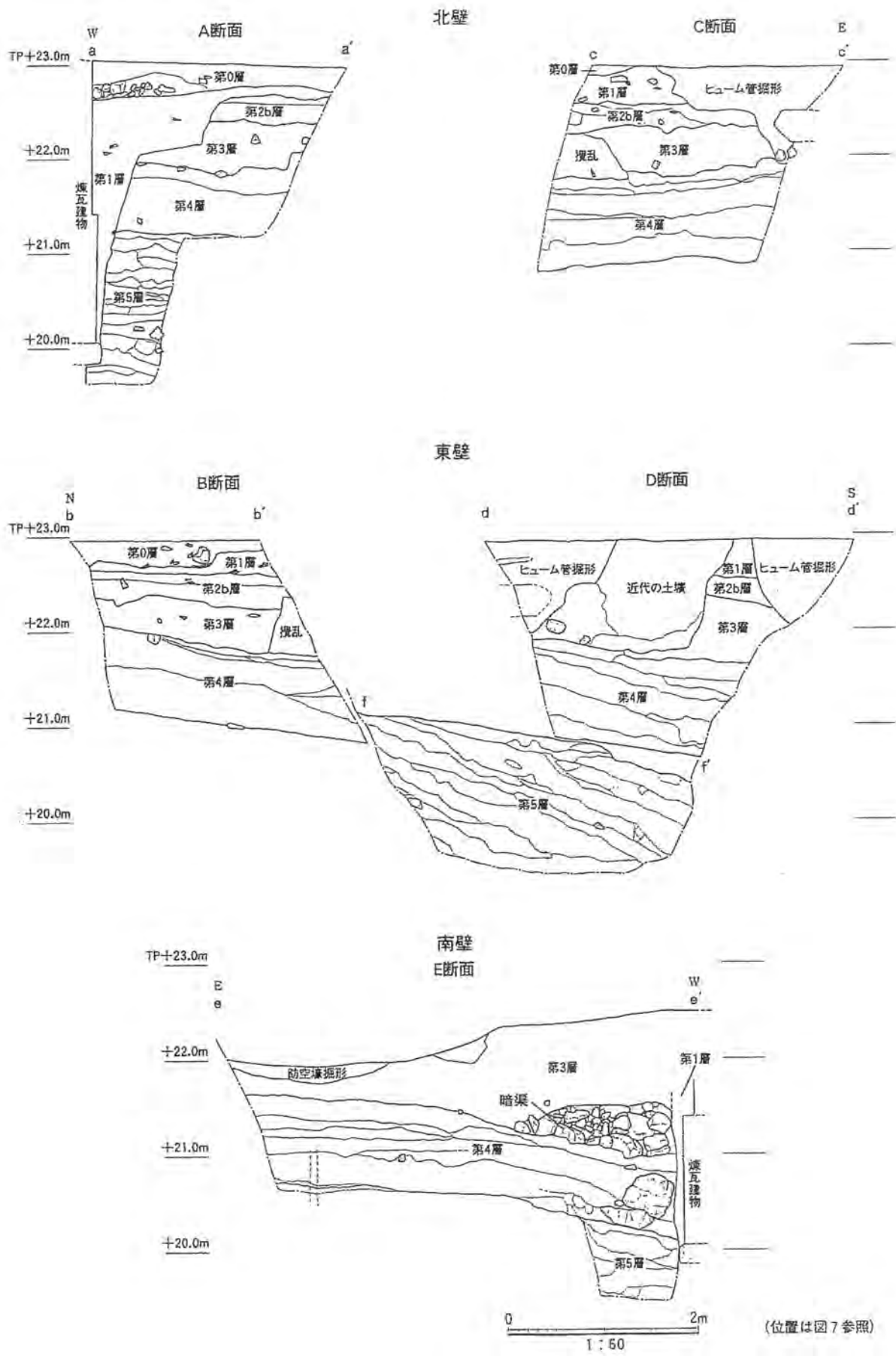
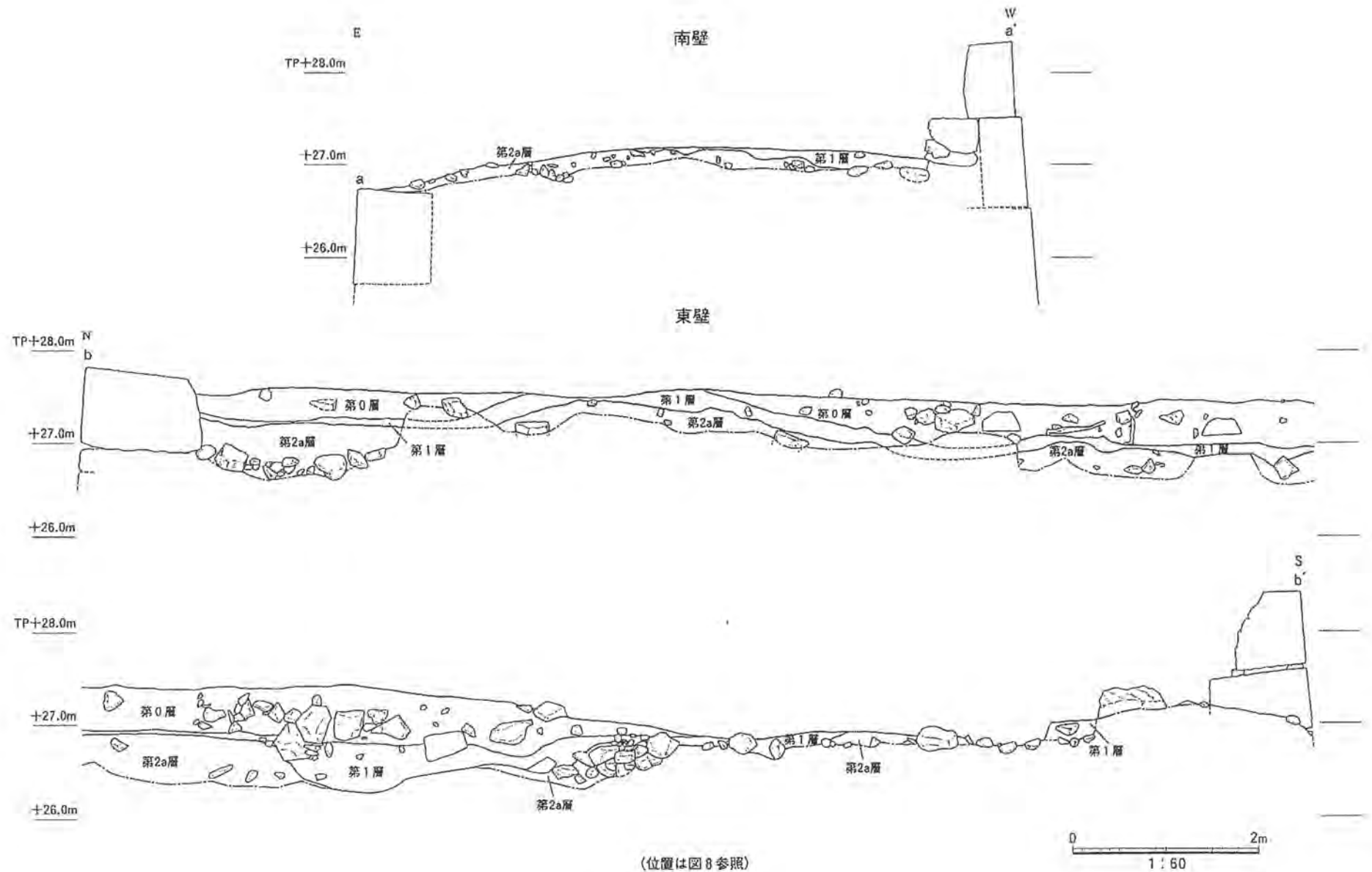


図5 南区断面図

(位置は図7参照)



(位置は図8参照)
图6 東区断面图

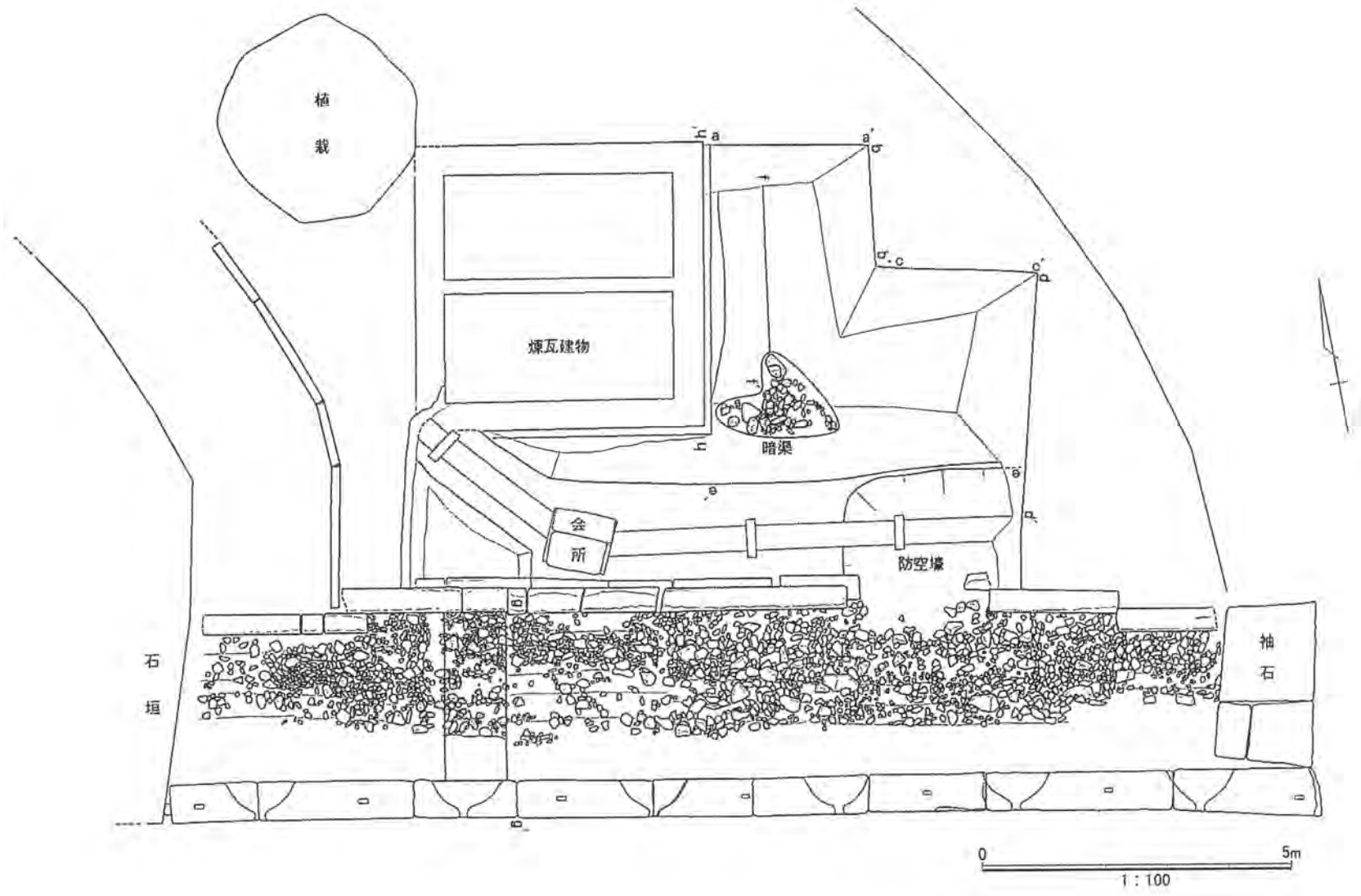


图7 南区平面图

し瓦30・31、大日本麦酒のビール瓶34、刻印瓦刻3・4・9～11・18～25が見つかった。

第2a層：東区に分布する焼土層で、赤褐色中粒～粗粒砂からなり、下層の栗石群の間隙にも入り込んでいるので、層厚は数十cmにも達する。軒丸瓦25、軒平瓦26・27、差し瓦29、刻印瓦刻1・6・16・17・28が出土した。

第2b層：南区に分布する層厚20～30cmのオリーブ褐色粗粒砂混りシルトの整地層で、雁木の根石（最下段の石）正面の中途の高さまで施されている。雁木築造後の整地層である。軒丸瓦9、軒平瓦10・12を含む。

第3層：二ノ丸外廻り石垣の最上部の整地層で、層厚30～110cmの粗粒砂が少量混る灰オリーブ色粘土混りシルト偽礫層である。

第4層：層厚70～120cmの浅黄色細礫混り粗粒砂と灰オリーブ色粘土偽礫からなる整地層である。本層整地後、上面の一部を窪ませて栗石を集積し、暗渠を造っている。

第5層：層厚70cm以上の灰オリーブ色粘土偽礫の整地層である。本層から凹面にコビキB痕跡を有する丸瓦片が出土した。

なお第3～5層の整地は、各層の上面に水成層や古土壌を有しないことから、ほとんど時間差がないものとみられる。

このほか地層ではないが、南区の雁木裏込めの栗石群、東区の櫓台内の栗石群があり、第3層より上、第2a層・第2b層の直下に位置する。

南区の雁木裏込めからは軒丸瓦5～8、軒平瓦11、14、菊丸瓦15～17が出土した。

2. 遺構と遺物

a. 南区第4層上面の遺構(図5・7)

暗渠 南壁(E断面)西端にある。整地の際、第4層上面を窪ませ幅2.2m以上の溝を造り、栗石を詰めている。栗石群の範囲は長さ1.2m以上、幅1.5m以上、厚さ0.5mで、栗石の分布は北に尖る三角形状である。整地層の層理面に溜る水を外廻りの石垣の方に排出するためのものである。

なお層序でも述べたが、第3～5層は作業過程で生じた層理による分層と考えられる。

藤堂高虎の元和6(1620)年の案紙[朝尾直弘2004]によると、松平忠明が大坂城主であった時期(1615～19年)に、すでにある程度大坂城石垣の再築はなっていたが、藤堂高虎は、將軍秀忠の「御このミ」のように「追手の御門、たまつくりの御門、京口の御門、其外土橋」以下の石垣を修築するように命じられ、高虎は大坂城普請総指図役に就任したとある。

南区の第5層からは凹面にコビキB痕跡を有する丸瓦片が出土し、コビキBは天正19(1591)年の京中屋敷替え以降に現れるから、秀吉の築造(二ノ丸は1586



写真1 外廻りの石垣(切込みハギ)
雁木裏込めトレンチの正面(矢印は図版と対応)

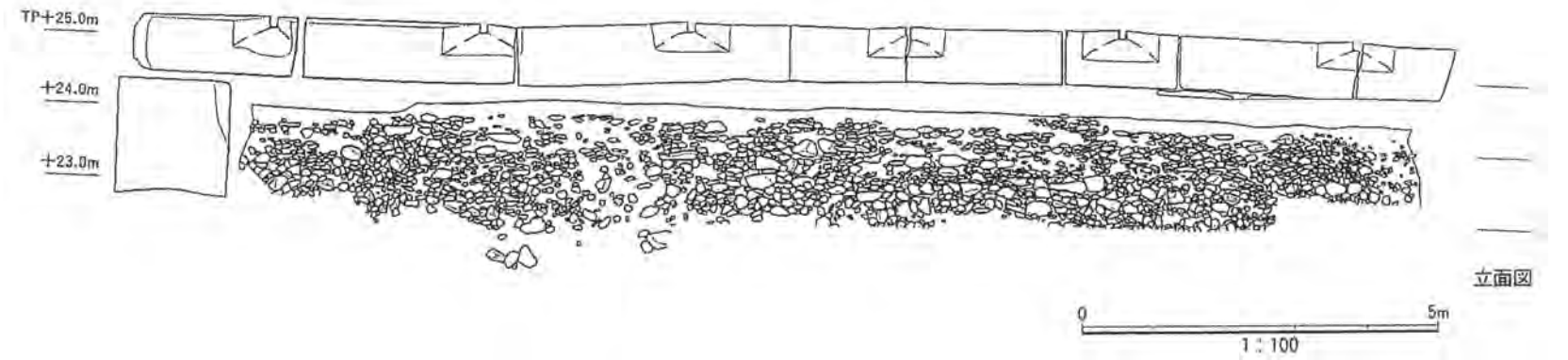
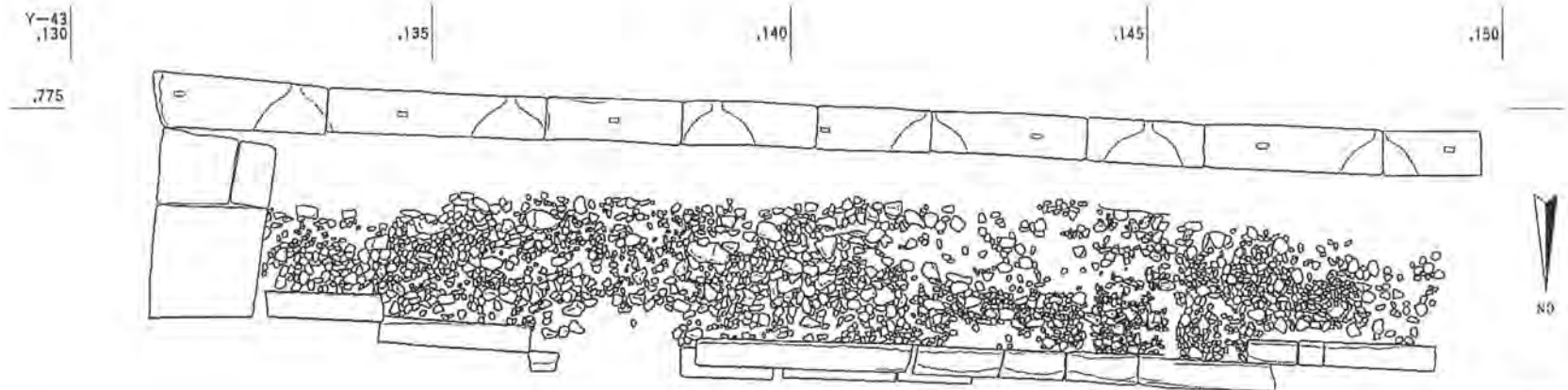


图8 东区雁木裏込め平・立面图

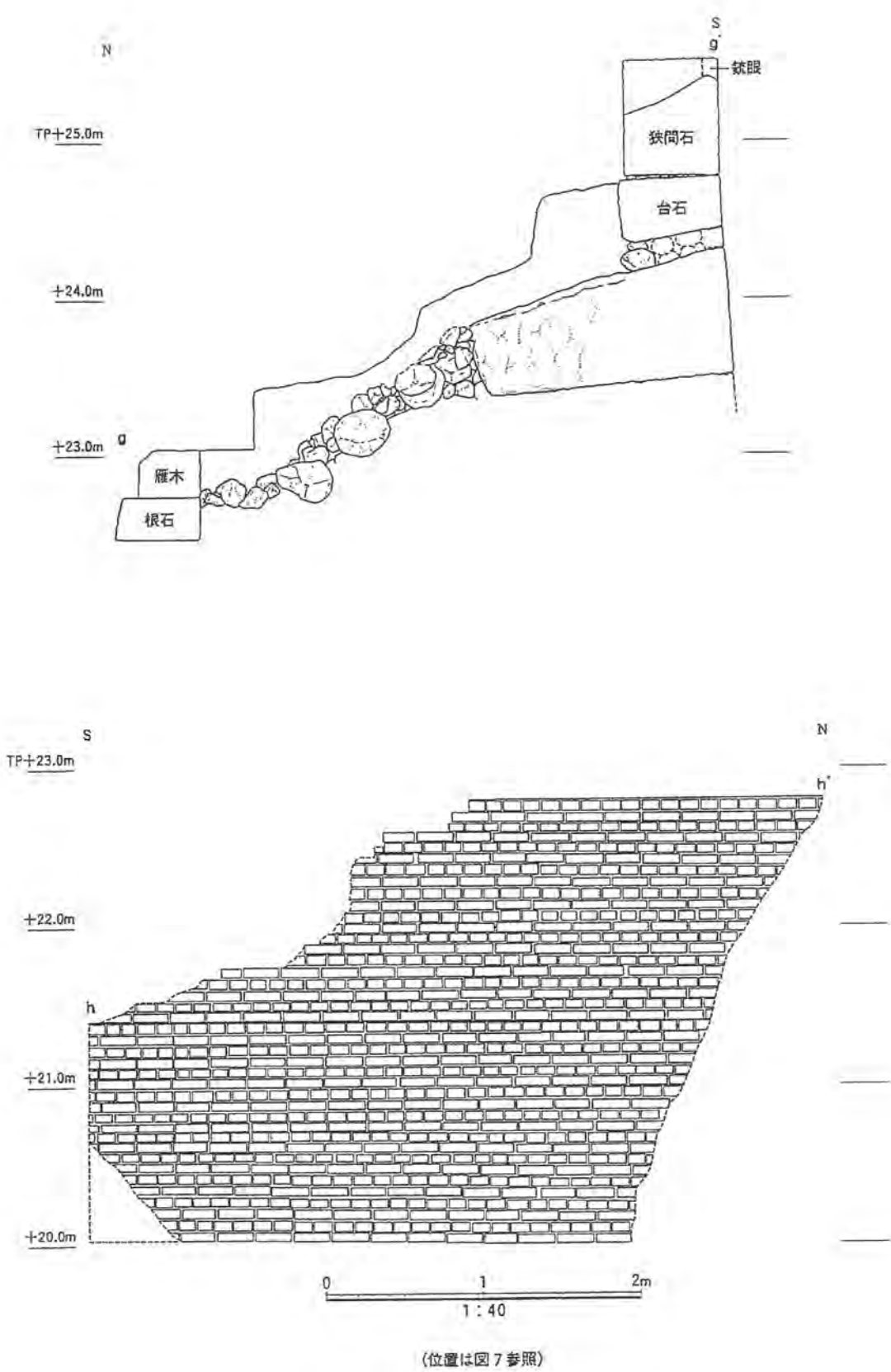


図9 南区 裏込め断面図(上)と煉瓦建物東壁立面図(下)

～88年)ではありえない。松平忠明の修築の可能性は残るが、第3層の天端は現地表下0.6mと高い位置で、忠明の時代にこの高さまで築造されたとは思えない。したがって徳川幕府による二ノ丸石垣の修築時、すなわち第1次の元和6(1620)～8(1622)年の盛土と考えられる。

b. 南区第3層上面遺構(図7～9)

雁木 調査開始時には雁木は階段を構成する直方体の加工石材(大部分は花崗岩製と思われる。以下、雁木石と称する)の多くは撤去され、雁木石は根石(最下段の雁木石)を含めて2段を残すのみであった(東西両端は3段目も残っていた)。元は根石を含めて8段あったから、上の6段分が取り外されていたことになる。残された雁木石の東側の一部は戦時中の防空壕掘削の際、根石は長さ2.6m分、2段目は長さ2.3m分が撤去されていた。台石の天端が8段目の天端と同じ高さであり、根石天端が旧地表面であろうから、約2.1m(7尺)の高さの階段である。

2段目の雁木石は、長さ1.0～3.0m、高さ0.3m、奥行0.4mで、上面は3段目と重なる数cmが不調整である以外は丁寧に加工されていた。根石は、長さ1.0～2.6m、高さ0.3m、奥行0.6mで、他の雁木石よりも奥行があるが、大坂城の一般的な根石よりも規模が小さく脆弱な感がある。

裏込めの栗石は直径数cm～60cmを測る。前述したように瓦類が見つかったほか、煉瓦等を含み、何回かの造替があったようである。

裏込め部分に幅1mの南北トレンチを入れたところ狭間石が奥行0.6m、台石が奥行0.65mであるのに対して、下の築石は奥行1.7mもあり、築石間の間詰めには正面から見ると丁寧に切込んだ板石ですき間を塞いでいる(写真1)が、裏からみると築石間に栗石が満ちていることがわかる(図版1上)。

c. 南区第2b層上面遺構と遺物(図5・7・9・11)

煉瓦建物 東西4.6m、南北4.6m、深さ3.0mの正方形の煉瓦積み地下室部分である(煉瓦積みの下に厚さ0.2mのコンクリート製基礎がある)。今回初めて確認された。この建物は写真2には写っていない。

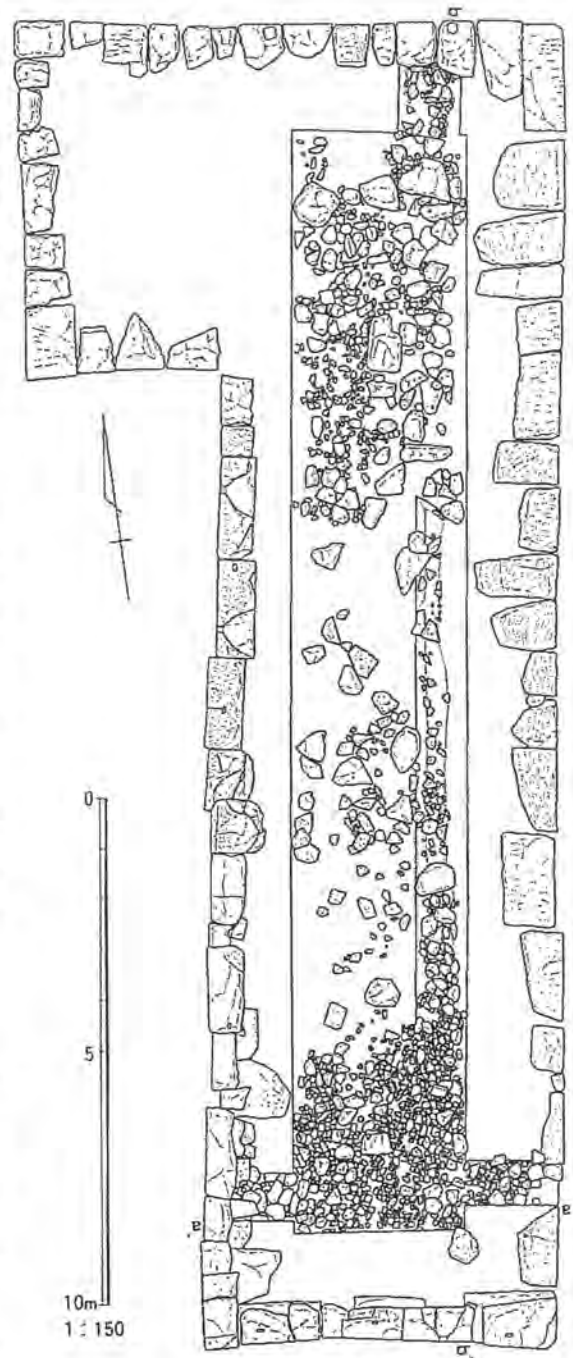


図10 東区平面図

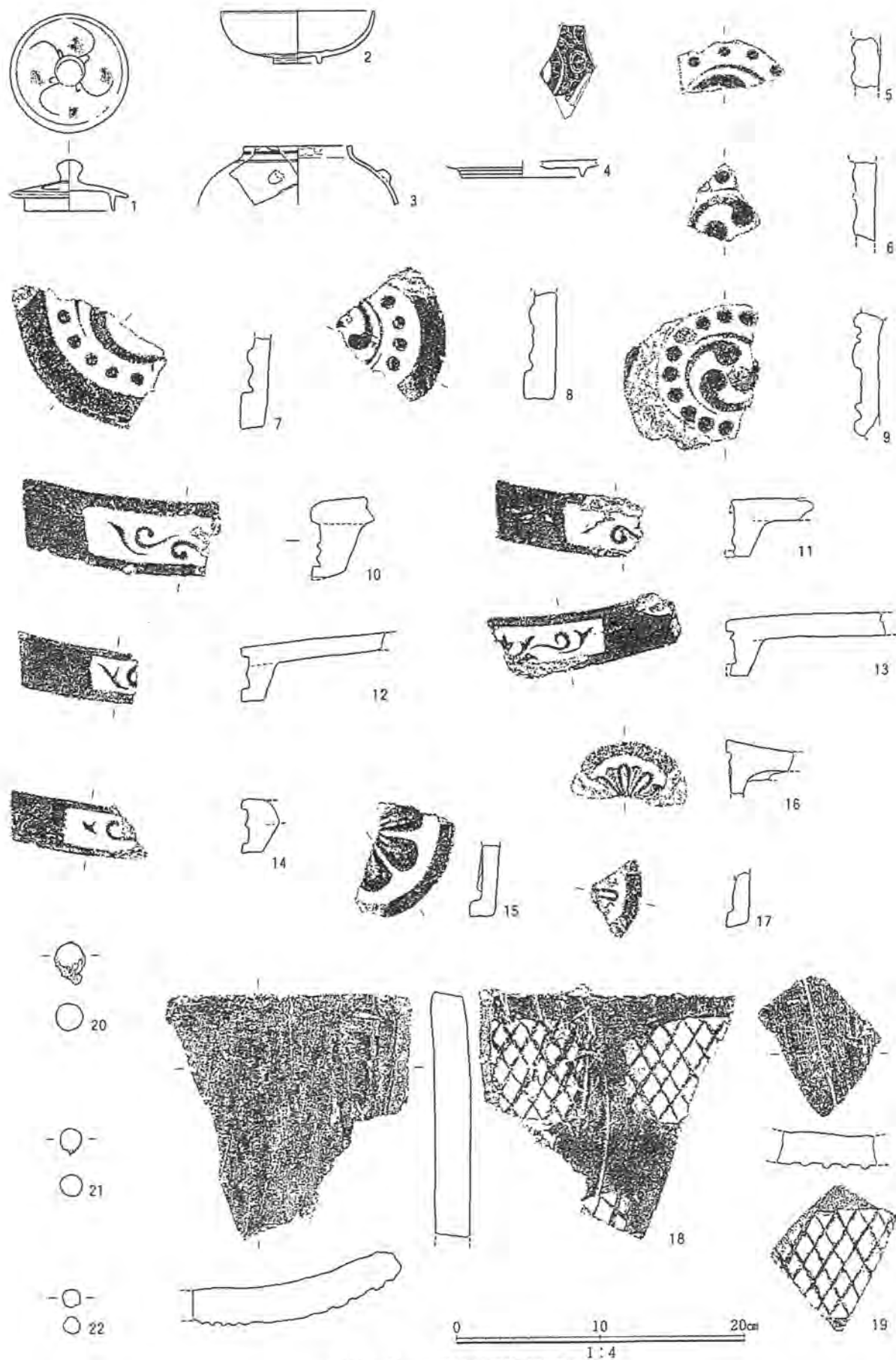


图11 南·東区出土遺物実測図

南区：煉瓦建物裏込め(1~4)、雁木裏込め(5~8、11、13~17)、第2b層(9・10・12)、
 東区：第1層(18)、第2a層(19~22)

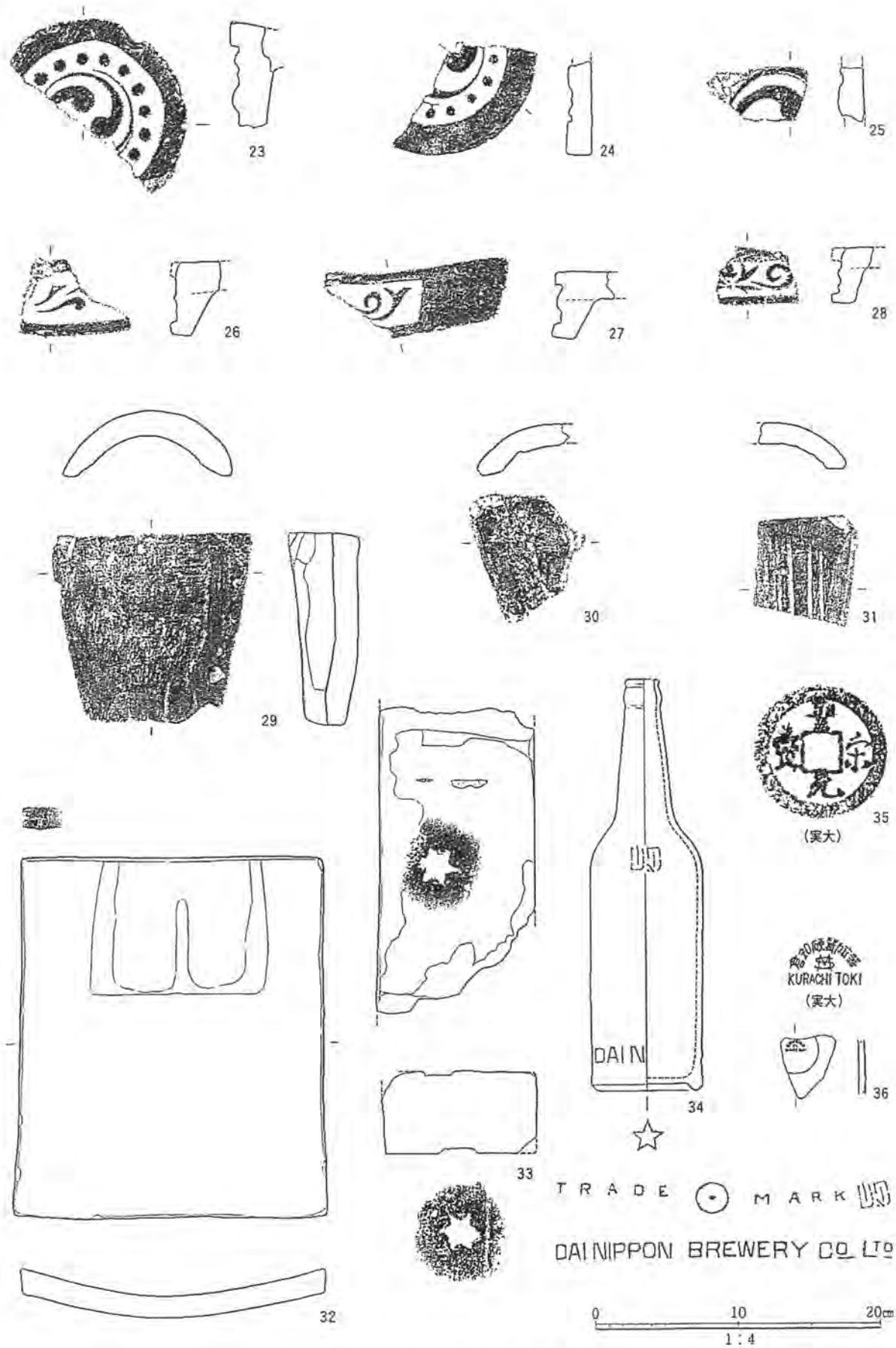


图12 东区出土遗物实测图

第0层(23·24·28·32·33·35·36)、第1层(30·31·34)、第2a层(25~27·29)

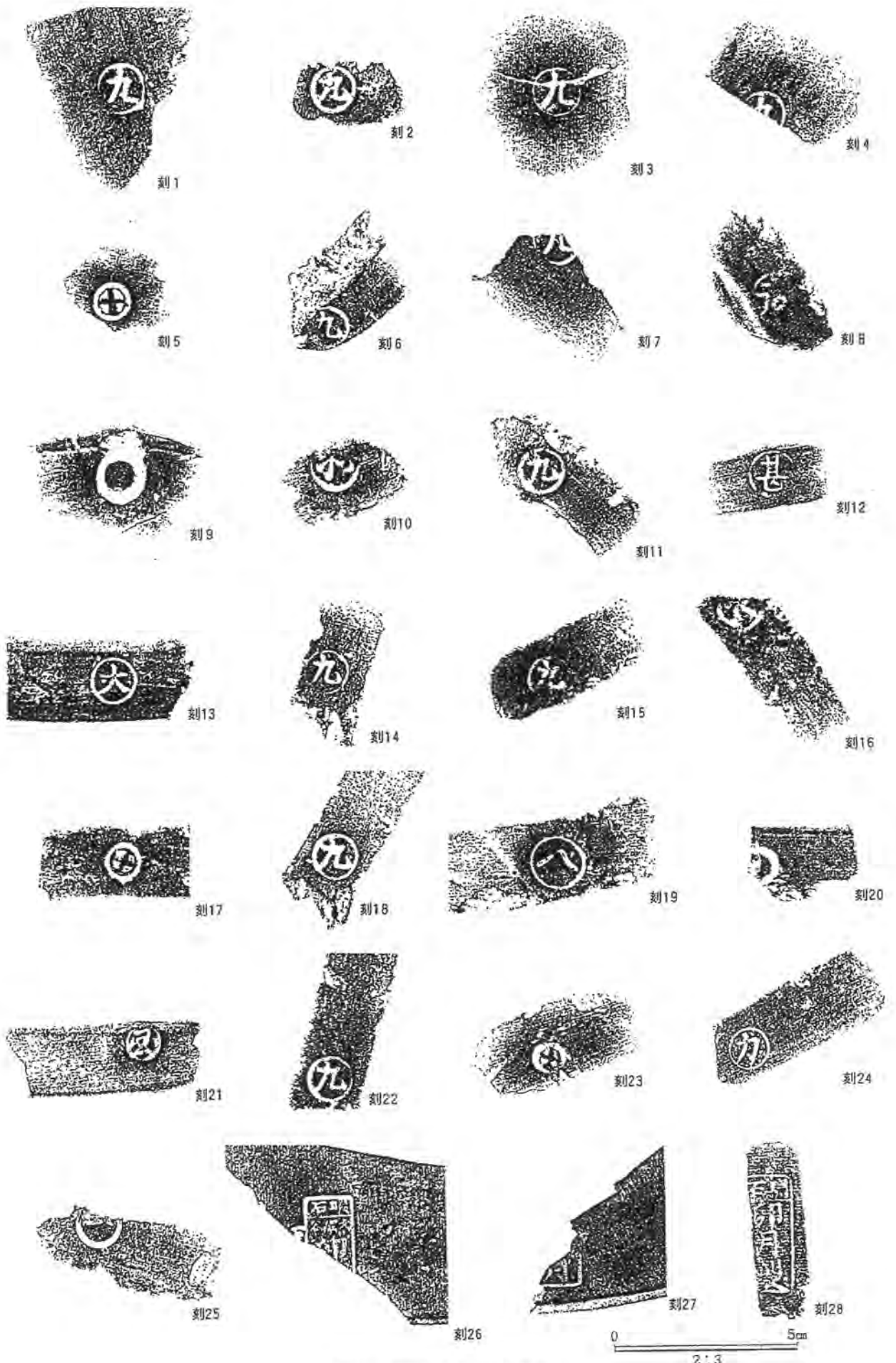


図13 東区出土刻印瓦の拓本

表1 東区出土刻印瓦

番号	文 様	瓦の種類	押 捺 面	部 位	出土層位	備 考
刻1	○ 九	差し瓦	凸面	広端辺より3cm、両側辺の中間	第2a層	
刻2	○ 九	差し瓦	凸面	ほぼ中央	第0層	
刻3	○ 九	差し瓦	凸面	狭端辺から3cm	第1層	
刻4	○ 九?	差し瓦	凸面	狭端辺から4.5cm	第1層	
刻5	○ ○十	丸瓦	丸瓦部凸面	玉縁部側、端辺より3cm	第0層	
刻6	○ 九	丸瓦	丸瓦部端面	玉縁部側、左側辺直近	第2a層	
刻7	○ 九?	丸瓦	玉縁部端面		第0層	
刻8	○ ?	丸瓦	丸瓦部端面	玉縁部側、左側辺から1cm	第0層	
刻9	○	丸瓦	丸瓦部端面	玉縁部側	第1層	
刻10	○ ?	丸瓦	丸瓦部端面	玉縁部側、左側辺より3cm	第1層	
刻11	○ 九	丸瓦	丸瓦部端面	玉縁部側、左側辺より1.5cm	第1層	
刻12	○ 甚	平瓦	狭端面	右側辺より1cm	第0層	実測図32
刻13	○ 大	平瓦	端面		第0層	
刻14	○ 九	平瓦	狭端面	右側辺直近	第0層	
刻15	○ 九	平瓦	狭端面	右側辺より1cm	第0層	
刻16	○ ?	平瓦	端面		第2a層	
刻17	○ ○十	平瓦	狭端面	右側辺より5cm	第2a層	
刻18	○ 九	平瓦	狭端面	右側辺より1cm	第1層	
刻19	○ 八	平瓦	端面		第1層	
刻20	○	平瓦	端面		第1層	
刻21	○ 国	平瓦	狭端面	右側辺より1cm	第1層	
刻22	○ 九	平瓦	狭端面	左側辺直近	第1層	
刻23	○ ○十	平瓦	端面		第1層	
刻24	○ カ	平瓦	狭端面	左側辺直近	第1層	
刻25	○ ?	平瓦	端面		第1層	
刻26	□ 明石 大□谷 卯	軒棧瓦	軒平部瓦当面	軒丸部側	第0層	
刻27	□ 月	軒棧瓦	軒平部瓦当面	軒丸部側	第0層	
刻28	□ 明石 卯月製	平瓦	狭端面	右側辺より0.5cm	第2a層	

ないことから、昭和3(1928)年には存在しなかったと思われる。図9に東壁立面図を示したが、煉瓦積みはイギリス積み(煉瓦を長手だけの段と小口だけの段を交互に積む)で、基礎から1.4m(TP+21.4m)のところ段があり、下段は0.1m張出している。用いられた煉瓦は長さが幅の倍で、建物の外壁の厚さは長手2個分(0.5m)である。

第2b層以下を基礎がざりざりに打てるように掘り、煉瓦を積上げた。裏込めの土砂は第1層で、関西系陶器1~3、産地不明磁器皿4が出土し、4は中央の圏線間に鋸歯文を巡らせ、その外側に花を配する銅版刷りである。19世紀末~20世紀初頭の遺物と考えられる。

d. 東区の遺構と遺物(図6・10~13)

多聞櫓 東櫓台上に存在した多聞櫓遺構を調査するために長さ22m、幅3.5mのトレンチを設定し、石垣石との関係を探るために一部を1m幅で拡張した。この櫓台は図3の「大坂城普請丁場割之図」に見られるように玉造口枳形を構成する櫓台の一部であったが、写真2の南北棟の軍隊建物建設時に、渡櫓門(二の門)の櫓台をはじめとする西側の櫓台は撤去されたようである。現代の東櫓台の北西部の西面する石垣は、軍隊築造のものである。銃眼をもつ狭間石は枳形内に向いた南面と西面に据えられているが、戊辰

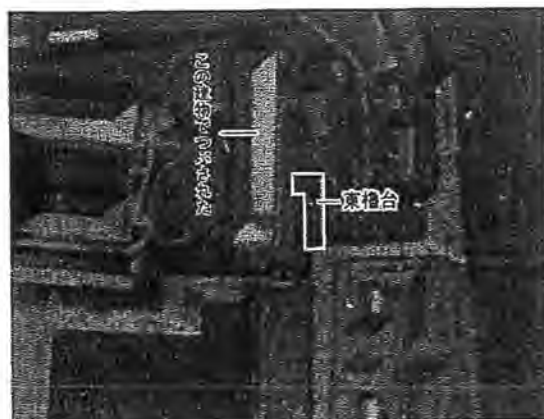


写真2 昭和3年の空中写真(大阪市指定文化財)

戦争時の慶応4(1868)年1月に玉造口櫺形は高麗門(一の門)を残して全焼し、その際の火中ではなはだしい損傷を被っている。玉造口のようなすは平野屋武兵衛の「慶応四辰年日記」に見られ、「(慶応4年1月10日)夫より玉造口之御門焼残り有之、(中略)門内へ這入見候処、むかふ一めんの火にて、門も東のふときはしら、下より一尺斗のこりて、中程もへ切、かなもの焼落有之て」とある[脇田修・中川すがね1994]。軍隊時代に東櫓台の上にも何らかの建物があったようで、トレンチ中央部が長さ14m、深さ0.7~1.1mにわたって抉られ、煉瓦・コンクリート・モルタルが見つかった。また図12の煉瓦33、大日本麦酒株式会社のビール瓶34、倉知硬質磁器の磁器片36が出土した。大日本麦酒株式会社は1949年9月に過度経済力集中排除法によって解体し、朝日(現アサヒビール)と日本(現サッポロビール)麦酒株式会社になる[アサヒビール社史資料室1990]から、それ以前に生産されたもので、倉知硬質磁器は戦前の岐阜県の洋食器会社である。刻印瓦刻26~28も軍隊時代のもので、明石の大蔵谷にあった「卯月」という製瓦会社のものであろう。

多聞櫓は狭間石の上面にホゾ穴があることから、狭間石上に壁体が立上ったことは確実に、トレンチ南・北端の栗石上に礎石が南北に2基ずつ残っており、大手口の多聞櫓(統櫓)と同様に、梁行2間で幅7.0m(石垣天端の東西幅から推定)になるものと考えられる。桁行は長さ27.5m(石垣天端の南北長から推定)で、礎石の芯々間が3.0m、南端礎石芯から南狭間石のホゾ穴まで3.5mから類推して9間と考えられる。北端の礎石の東・西には同じ規模の石がやや傾いているが並んでおり、北櫓台上に存在した多聞櫓が梁行2間とすると中央柱筋とほぼ合致し、2つの多聞櫓の交差点の礎石配置が遺存するものと思われる。また栗石上に礎石を置き、その栗石上に第2a層の戊辰戦争時の焼土が堆積していたから、三和土の施工等の地業は行われず、床張りのないところは栗石がむき出しであったと考えられる。図12・13に示した瓦類のほか多数の鉄砲玉が出土した。戊辰戦争時に格納されていた鉄砲玉である可能性が高く、鉛製と鉄製が存在する。鉄製のもので緑青が吹いたものがあり、銅成分の含有が考えられる。鉛製は多くは融けて瓦や石に溶着し、鉛釉となって瓦に釉がけしたものも見られる。20~22は鉄製鉄砲玉で、それぞれ直径1.9cm、1.4cm、1.2cmを測り、湯口が遺存する(20の下部に付いたものは他の個体成分の溶着。20の上端が湯口)。また東櫓台上からは、格子タタキ痕跡をもつ古代の平瓦片18・19が出土し注目される。

〈まとめ〉

今回の調査の主要な成果を以下のとおりである。

南区では、雁木下層の盛土の状況を調査し、二ノ丸外廻り石垣の築造およびその裏の盛土は、徳川幕府による第1次工事の元和6(1620)~8年になると考えた。

雁木の根石は、長さ1.0~2.6m、高さ0.3m、奥行0.6mで、他の雁木石が奥行0.4mであるのに比して大きいのが、大坂城の一般的な根石よりも規模が小さく脆弱である。他の大手口・京橋口・青屋口櫺形の雁木との比較で、当時の玉造口櫺形の幕府内での位置付けが判明すると思う。

知られていなかった軍隊時代の煉瓦建物の地下室を発見した。煉瓦積みはイギリス積みで、東西4.6m、南北4.6m、深さ3.0mの平面正方形の小型建物である。裏込めの遺物から19世紀末~20世紀初頭

の築造と考えられ、昭和3年には撤去されていた。

東区では、東櫓台上の多聞櫓遺構を調査した。桁行9間(27.5m)×梁行2間(7.0m)に復元され、栗石上に礎石を置き、その栗石上に第2a層の戊辰戦争時の焼土が堆積していたから、三和土は施工されていなかった。また刻印瓦をはじめとする瓦類と鉄砲玉が多数出土した。軍隊時代にも東櫓台上に建物が建てられていた可能性が出てきた。

これまで大阪城公園内で行われた発掘調査は少なく、未だ不明な点も多い。公開されている石垣・雁木なども正確な構造は明らかでないし、知られていなかった遺構が偶然に発見されることも多い。今後実施される発掘調査によって、さらに大坂城の実態が明らかになるものと期待される。

引用・参考文献

- 朝尾直弘2004、「元和六年案紙」について：『朝尾直弘著作集』第4巻 岩波書店、pp.346-408(初出は、『京都大学文学部研究紀要』16号、1976年)
- アサヒビール社史資料室1990、『Asahi100』
- 大阪市文化財協会2002、『大坂城跡』VI
- 三浦正幸1999、『城の鑑賞基礎知識』至文堂
- 三浦正幸2005、『城のつくり方図典』小学館
- 脇田修・中川すがね1994、『幕末維新大阪町人記録』、清文堂史料叢書70刊
- 渡辺武1994、『図説再見大阪城』大阪都市協会

南区雁木裏込めトレンチ
(北西から)

築石間の間詰め
の裏のようす



南区(南東から)



南区(北から)

東区全景(南から)



東区全景(北から)



東区東西石列(東から)



東区(北東から)



東区(北西から)



東区栗石と礎石
(北から)



大坂城跡発掘調査(OS07-13)報告書

調査個所 大阪市中央区釣鐘町2丁目40
調査面積 30m²
調査期間 平成20年1月21日～1月25日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南 秀雄、櫻井久之

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城惣構の西北部にあり(図1)、上町台地の西側斜面の裾付近に位置している。現在の道路から見ると、南北に走る松屋町筋から1本東側に入った南北筋が釣鐘町の通りと交差する地点の北西側になる。この交差点の北西角の敷地ではOS93-25次調査が行われ、東面する石垣が4.8mにわたって検出された[大阪市文化財協会2003]。時期は豊臣後期の可能性が考えられている。その西には釣鐘町の通りに面して向い合うOS87-23・33次調査地がある。ここでは現地地表下約5mの地層から飛鳥時代の多数の土器とともに木製下駄・輪羽口が出土している[大阪市文化財協会2003]。これらの遺物が出土した地層は有機物を多く含んだ暗黒灰色シルト層で、上町台地の西裾に、規模は不明ながら窪地状の地形が存在していたものと思われ、[趙哲済2004]の古地理図に想定される古墳時代末~古代の湿地に関連する。

今回の調査地では2007年11月に大阪市教育委員会による試掘が行われ、地表下2.7mに豊臣期と推測される整地層が確認された。それを受けて、建設工事用の土留矢板・PC杭の打設後、2008年1月21日より調査に入った。工事範囲のほぼ全域が事前に地表下2.5m前後まで事業者側によって掘下げられており、敷地南半部に東西10m、南北3mの調査区を設けた(図2)。調査区内は既設建物による攪乱によって破壊されている部分も多かったが、大坂本願寺期~豊臣期の礎石建物・溝・土塹のほか、深掘りトレンチ内では古代の包含層を確認することができた。これらの記録作成を順次進め、25日に機材の撤収を行い、現地での作業を終えた。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記した。また、周辺施設の影響からか、方位磁石が西に大きく振れる状況であったため、本報告での指北記号は、道路現況図より導いた座標北を用いている。

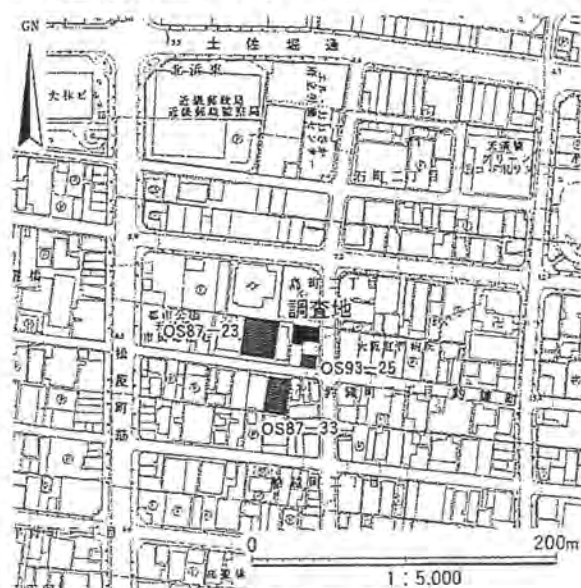


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

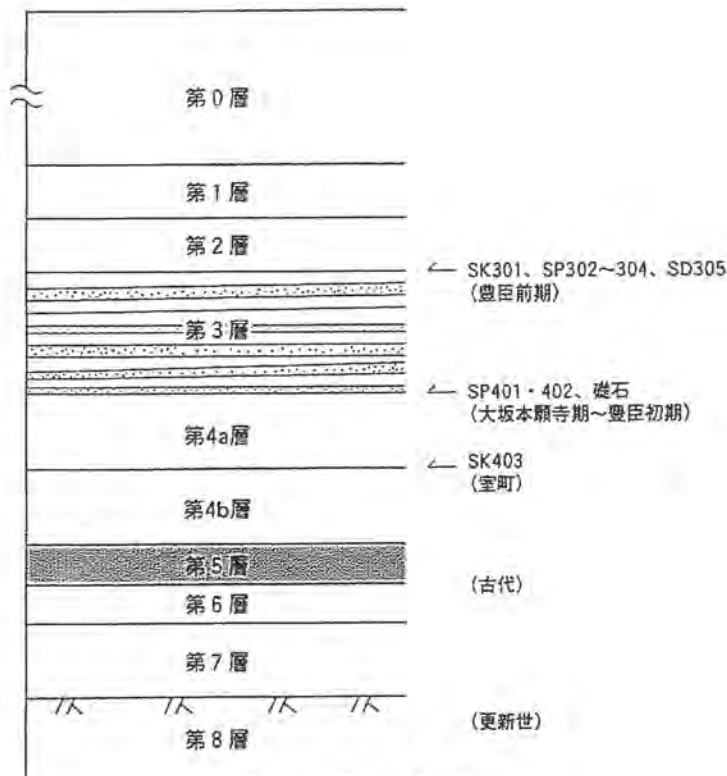


図3 地層と遺構の関係

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

上町台地の西裾に当たる調査地は東から西に向って下がる緩やかな傾斜をもっており、現地表の標高はTP+7.7m前後である。ここでは地表から約2.5m下がったTP+5.2m前後以深に観察される地層について述べる。

第0層：近代および現代の攪乱による地層である。調査区西側3分の1は近代以降に大きく破壊されていた。

第1層：灰色極細粒砂質シルト層である。調査区東壁付近にある円弧状を呈する浅い窪みの埋土で、底付近に炭化物が多く含まれる。深さは最深部で14cmである。

第2層：灰オリーブ色細粒砂質シルト層で、調査区の東北部にあって、第3層を掘込む土壌の埋土である。北壁断面では最大層厚35cmある。

第3層：浅黄色細粒砂と暗灰色極細粒砂質シルトが2～10cmの厚さで交互に堆積した整地層である。層厚は最大50cmに達する。その間に黒褐～灰色極細粒砂質シルト層が数cmの厚さで挟在している部分も見られる。本層上面にSK301、SP302～304、SD305がある。SK301の遺物に16世紀後葉のものがあり、本層は豊臣前期の整地層と推測される。

第4層：灰オリーブ色粗粒砂質シルト層の第4a層と黄灰～浅黄色細粒砂の第4b層に分かれるが、いずれも整地層である。第4a層から祥符通宝(1008年初鑄)が出土している。層厚は第4a層が45cm、第4b層が60cmある。第4a層上面にSP401・402、礎石、第4b層上面にSK403がある。

第5層：黒褐色細粒砂質シルト層の古土壌である。西に向って緩やかに下がっており、層厚が20cmある。古代の土師器・須恵器を含む。

第6層：灰黄褐色シルト質細粒砂層で、第5層と平行するように西に傾斜している。層厚は10～20cmある。布目のある丸瓦11が出土している。

第7層：浅黄色細粒砂を主体とし、下方では粗粒砂～細礫がやや目立つ。崩落した地山層が再堆積したもので、60cm以上の層厚がある。遺物は認められない。

第8層：明黄褐色極細粒砂～中礫層の地山層である。調査区中央に設けた深掘りトレンチ内東部ではTP+3.0mに本層の最高所が確認される。

ii) 遺構と遺物(図5・6)

今回検出された遺構については、第5層および第4b層上面、第4a層上面、第3層上面に分けて報

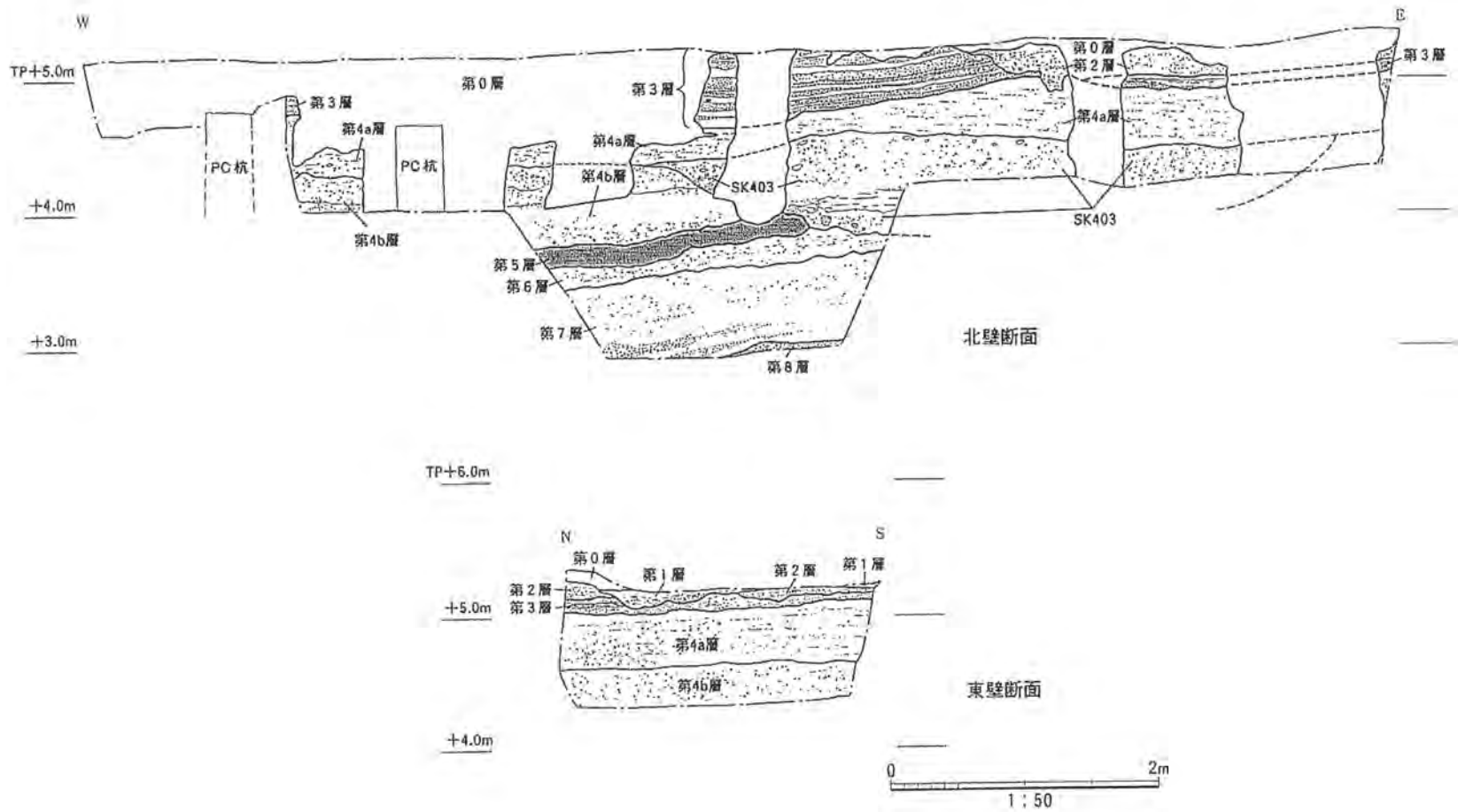


图4 調查区断面图

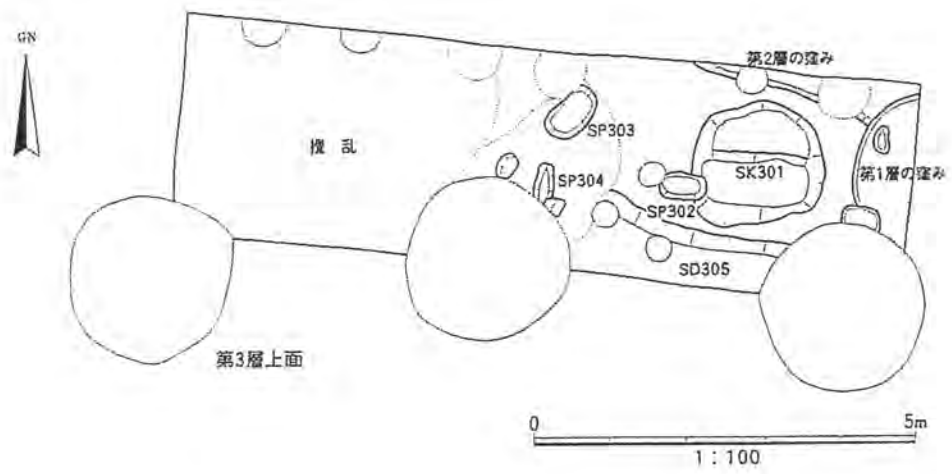
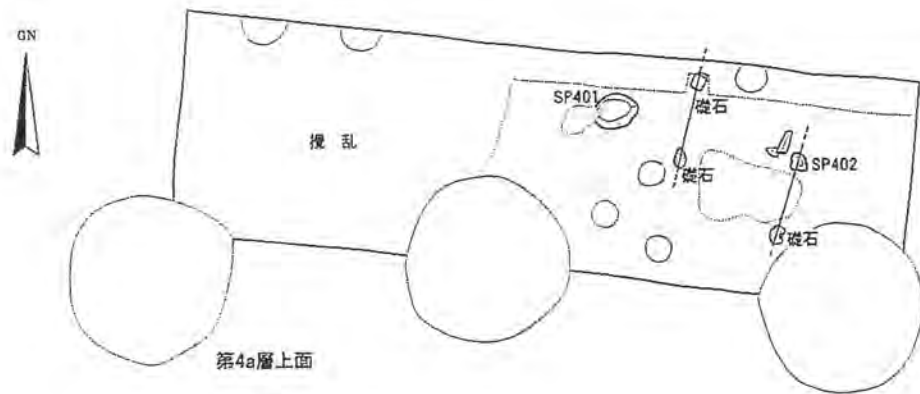
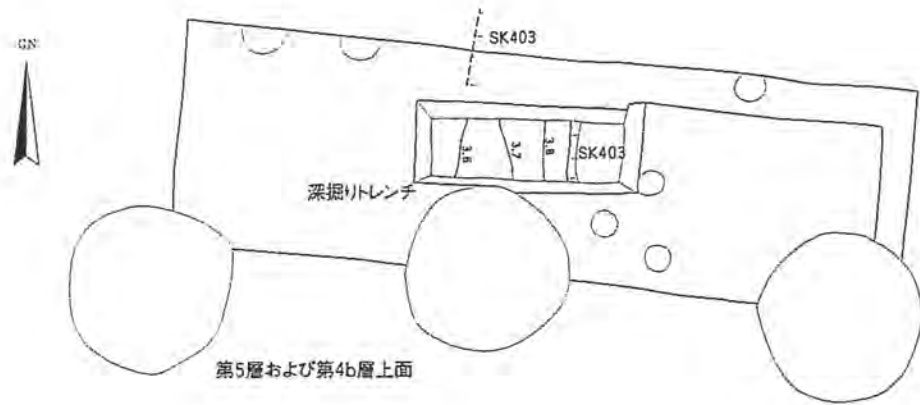


図5 検出遺構平面図

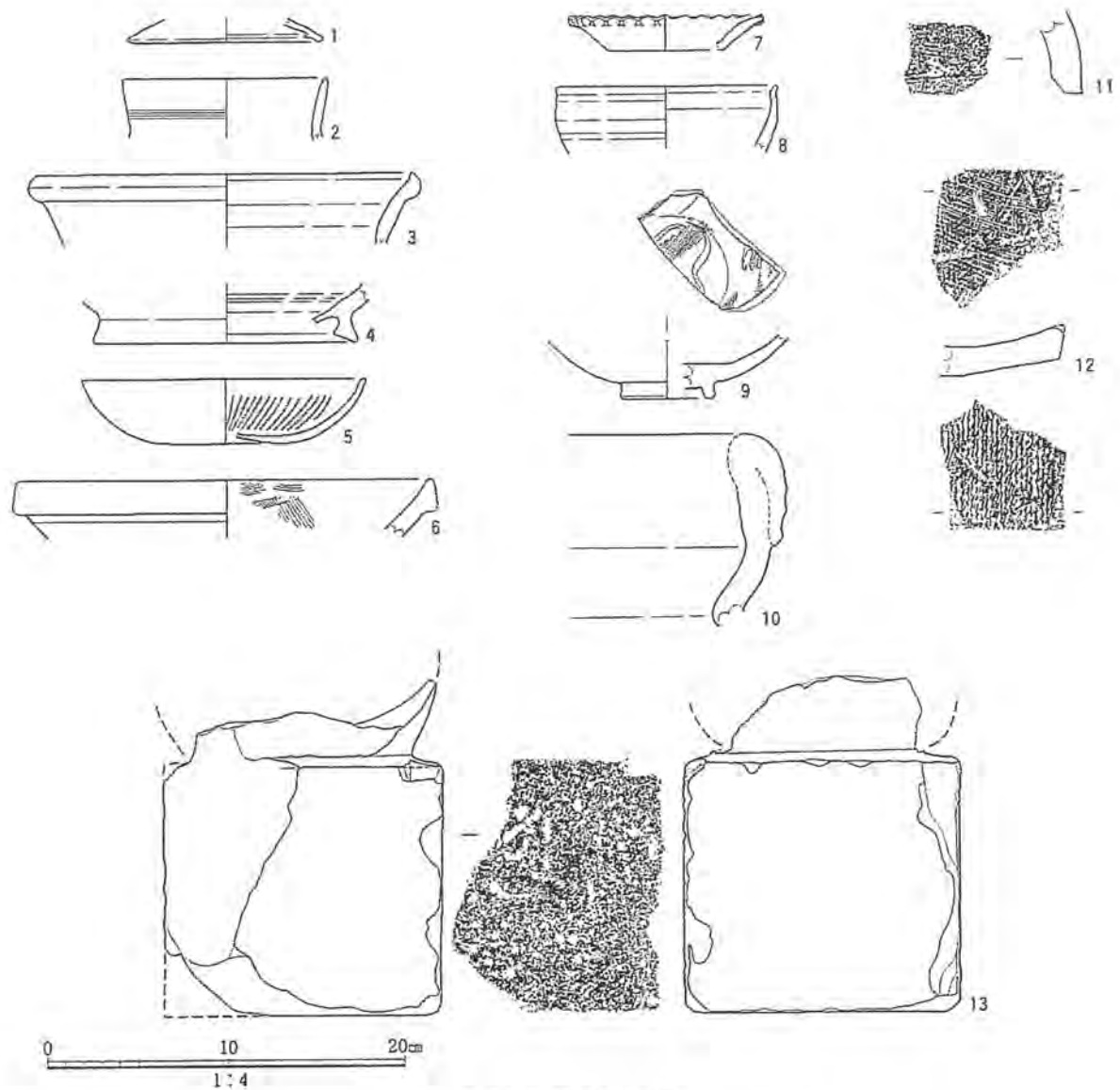


図6 出土遺物実測図

第4b層(1・3・5)、第5層(2・4)、第6層(11)、SK403(6・7・9)、SK301(8・10・12)、第4層上面礎石(13)

告する。

a. 第5層および第4b層上面

調査区の中央部に東西3m、南北1mの深掘りトレンチを設けて調査を行った。東寄りの部分は第4b層上面の土壌SK403によって掘込まれて第5層が残っていなかったが、その西では第4b層による整地が行われる以前の第5層上面の状況を見ることができた。同層上面は西へ下がる緩やかな傾斜をもっており、標高はトレンチ東端でTP+3.88m、西端でTP+3.53mであった。また、今回の調査地の南西50mにあるOS87-33次調査地では、TP+3.0mに本層の相当層があり、古代の上町台地西裾の状況の一端がうかがえる。

第4b層上面の土壌SK403は深掘りトレンチや北壁断面で部分的に確認されただけであるが、南北1.0m以上、東西約5.0m、深さ0.6mある。埋土に浅黄色粘土ブロックを多く含んでいる。15世紀代の瓦質播鉢6・灰釉ヒダ皿7、12~13世紀代の同安窯系青磁碗9が出土している。今回の調査地は中世の港

津である渡辺の推定域内[松尾信裕2006・2008]にあり、こうした資料はそれに関連するものといえよう。

b. 第4a層上面遺構

調査区東半部に3個の礎石、2基の小穴SP401・402がある。西側にある2個の礎石は0.99m間隔をもって南北に並ぶ。そのうち北側にあった四角い礎石は五輪塔の転用であることが、水輪の一部が残っていたことから判明した。残るもう1個の礎石についてはSP402を礎石の抜取穴とすれば1.4mの間隔をもって、先の礎石列とはほぼ平行する関係をもっている。しかし両者の柱位置からは異なる建物を構成するものと思われる。西側の礎石列を境に、その東側が平坦であるのに対し、西側は緩やかな傾斜地となっている。このことから西礎石列は塀などの区画施設の可能性がある。SP401は西礎石列より西側の傾斜地にある楕円形の小穴である。

礎石に使われた五輪塔13は砂岩製で、縦15cm、横14cm、高さ11cmの地輪と水輪のごく一部分が残る。地輪部の1面に梵字が刻まれている。

豊臣秀吉は1583(天正11)年の大坂築城と同時に大坂寺内町・渡辺・四天王寺門前町を基盤とする城下町建設に着手した。今回の調査地はそのうちの渡辺の地に当たっている。この周辺の町割は現在の高麗橋から大阪城方向に続く鳥町の通りが示す東で南に7度傾く方位が基本になっており、それは大坂本願寺期まで遡るものと推定されている[松尾信裕2003]。今回、第4a層上面で検出した礎石建物はその鳥町の東西通りにほぼ直交する方向を採っており、大坂本願寺期または豊臣初期の大坂城下町に関するものと推測される。

c. 第3層上面遺構

調査区東半部に溝SD305、土塼SK301、小穴SP302～304がある。

SD305は調査区南壁にかかる位置にあって、全体の規模は明らかでないが、東西方向から、西でやや北に方向を変えている。検出面からの深さは0.3mである。埋土の下半部は炭の薄層を挟在する灰オリーブ色シルト層であるが、上半部は砂または砂質シルトとなっている。

SK301は直径約1.4mの円形をしているが、南側がやや歪んでいる。北半部は浅く0.15m前後であるが、南側では0.46mの深さがある。埋土は全体にブロックを多く含む灰黄色極細粒～細粒砂である。遺物には口縁玉縁を大きく作る備前焼大甕10・瀬戸美濃焼天目碗8、凸面に縄タタキメのある平瓦12、小さな円環の付いた銅製金具2点がある。

SP302～304のうちSP302はSK301の肩を一部掘込んでいるが、SP303・304とSD305の前後関係は明らかでない。いずれの小穴も埋土中に炭を含んでいた。

d. 各層出土の遺物

11は第6層から出土した丸瓦で、灰～暗灰色に堅く焼成されており、凹面の布目も鮮明に残っている。凸面はナデ調整されている。

第5層からは須恵器壺の口縁部2および同脚台部4が出土している。7世紀代のものであろう。

第4b層から土師器杯5、須恵器杯G蓋1、同壺3が出土した。土師器杯には内面に放射状暗文がある。須恵器杯蓋の内面にはかえりが残る。須恵器壺の口縁部は玉縁状になり、先端がつまみ上げられてい

る。これらも7世紀代に属す遺物である。

3)まとめ

今回の調査地は、近現代の建物建設などによってかなりの破壊を被っていたが、古代～近世の遺跡の変遷を検討する上で役立つ成果がえられた。上町台地西側斜面における古代の遺物包含層の状況、中世の渡辺津に関係するとみられる遺物が出土した土壌の確認に加え、大坂本願寺期から豊臣期大坂城期に属する礎石建物・土塼・溝などを検出できた。そして調査地付近では地表下2.5m以深にも遺跡が確実に残されていることを再確認できたことは、今後の調査に際し大いに参考となろう。

参考文献

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ、pp.151-156.

趙哲済2004、「大坂城下町跡の自然地理的背景について」：大阪市文化財協会編『大坂城下町跡』Ⅱ、pp.347-350.

松尾信裕2003、「豊臣氏大坂城惣構内の町割」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.325-338.

2006、「上町台地周辺の中世集落—四天王寺から大坂へ—」：榮原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』、pp.141-166、和泉書院

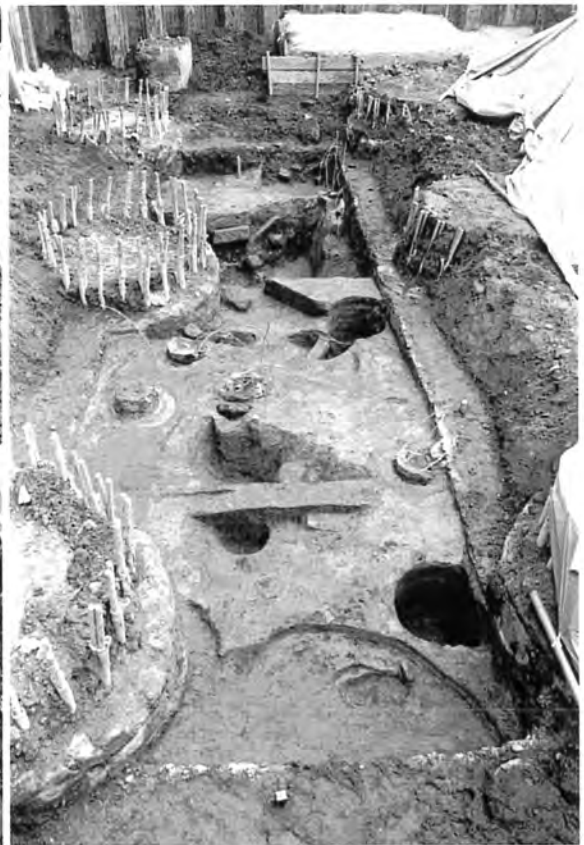
2008、「港町渡辺をもとめて」：大阪市文化財協会編『大阪遺跡』、pp.210-211、創元社



調査区北壁断面(南東から)



第4a層上面遺構(東から)



第3層上面遺構(東から)

大坂城跡発掘調査(OS07-14)報告書

調査個所 大阪市中央区徳井町2丁目29・30(2丁目4-9)
調査面積 32m²
調査期間 平成20年2月4日～2月6日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋覚

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は松屋町筋の東側20m、本町通りの1本北側の通りに南面する地点に位置する(図1)。豊臣期大坂城の惣構内の西辺部に位置し、西隣りの調査地(OS89-41次)では豊臣期の石垣や井戸などが検出されている[大阪市文化財協会2003]。

事前に大阪市教育委員会により行われた試掘調査で、現地表面から約1.5~1.8m下で、古代から豊臣期と思われる遺物包含層が確認された。そこで、南北に長い敷地の奥側(北側)に東西トレンチを設定し、発掘調査を行うことになった(図2)。調査着手前に事業者側で現地表面から1.5mまで重機による掘削が行われたのち、試掘時の灰褐色砂質土層以下を人力で掘削し、調査を進めた。

現場での作業については、2月6日に遺構・地層の記録作業と機材類の撤収を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

この調査で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中ではTP+Omとしている。また、図1を除く挿図中で使用する北方位は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：近現代の整地層および攪乱で、層厚は120~150cmである。

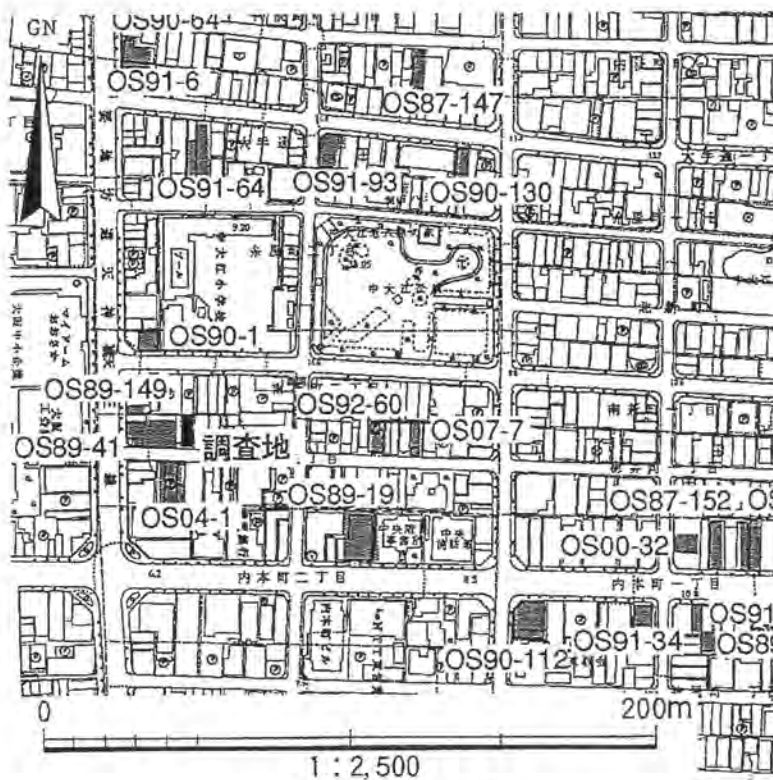


図1 調査地周辺地図

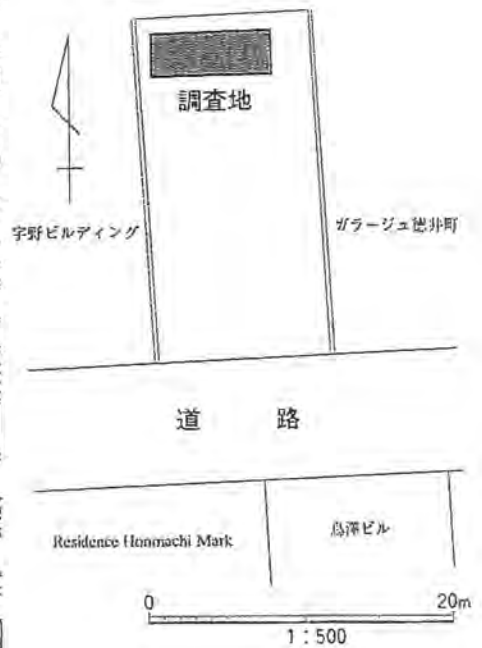


図2 調査区位置図

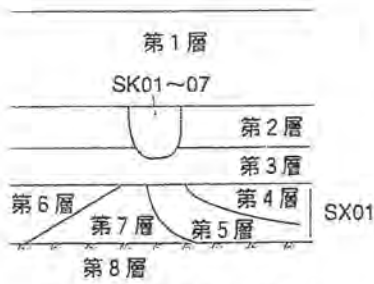


図3 地層と遺構の模式図

第2層：灰色～明黄褐色細粒～粗粒砂の整地層で部分的に細礫が混る。調査地東部の落込みSX01の窪みを埋める整地層で、本来は調査地全域に分布していた可能性がある。層厚は最大60cmである。近世の丸・平瓦が少量出土した。SK01～07は本層上面以上から掘り込まれている。OS89-41次調査において三ノ丸造成に伴う整地層と推定された第3層に相当する可能性がある。

第3層：灰オリーブ色砂質シルトの整地層で、調査地南東部に

おける層厚は約20cmある。

第4層：黒褐色シルト質細粒砂で、落込みSX01埋土の上部である。

第5層：にぶい黄色～灰オリーブ色シルト質細粒～粗粒砂で、落込みSX01埋土の下部である。

第6層：灰オリーブ色砂質シルトで細礫を含む整地層である。層厚は30cmある。北壁断面の観察から本層上面からSX01の落込みが認められる。

第7層：灰オリーブ色～オリーブ黄色細粒砂～細礫で、調査地西北部に分布する層厚20～40cmの整地層である。少量の遺物があり、古代の土師器甕口縁部1や須恵器横瓶、縄叩き目のある平瓦片のほか、近世の平瓦も含まれている。

第8層：青灰色～灰黄色シルト質細粒～中粒砂の地山層である。

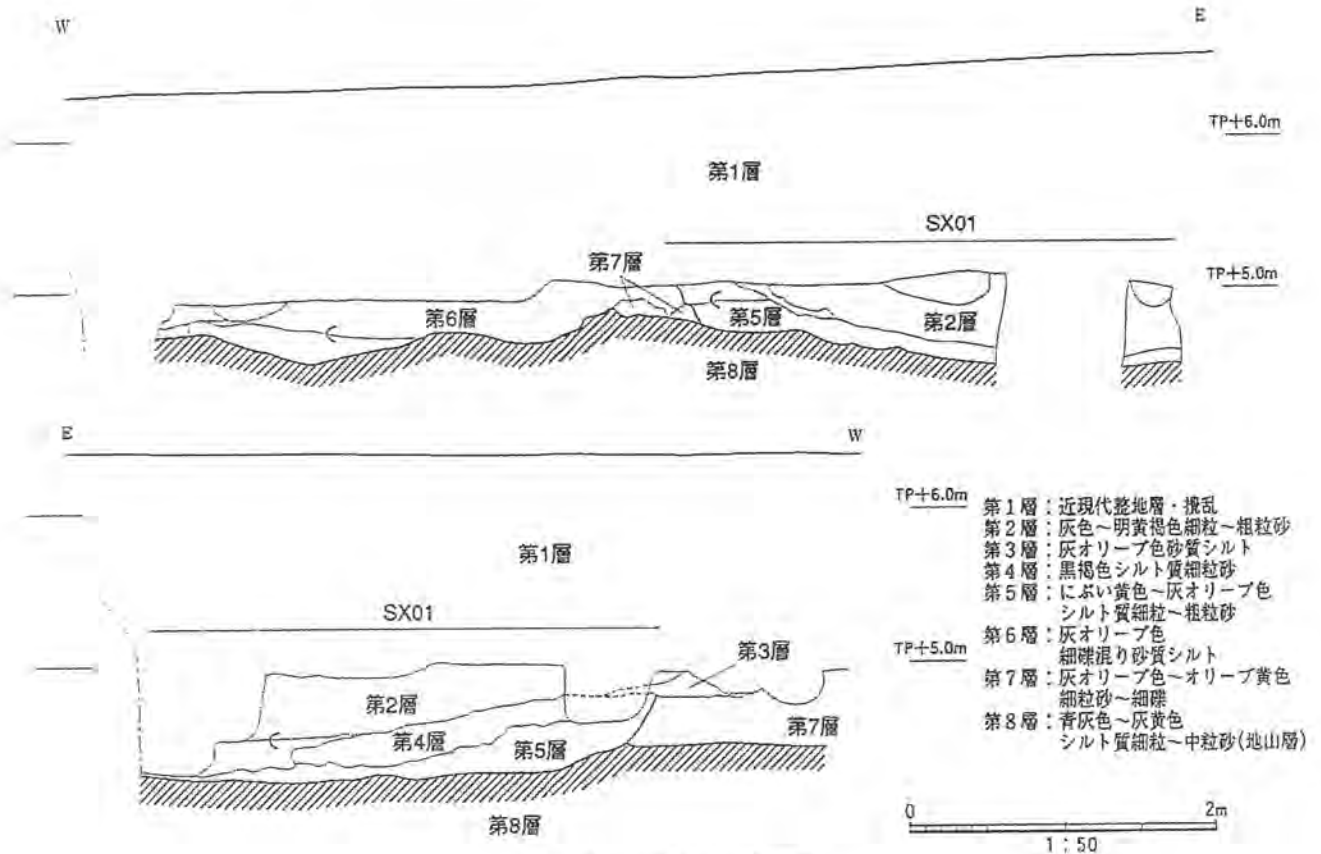


図4 北壁・南壁断面実測図

ii) 遺構と遺物(図5～7)

第2層上面またはそれ以上の層準から掘り込まれた土壌が7基検出されたが、このうち遺物が出土したSK01・02と調査地東端の第6層上面で検出された落込みSX01の3基について報告する。

SK01・02 SK01は南北1.7m以上、深さ0.25m、SK02は長軸2.7m以上、深さ0.3mの土壌である。いずれも炭・焼土を多く含む黒色シルト～粘土を埋土とし、鉄滓や鞆の羽口が多く出土する点で共通する。SK01から鞆羽口や鉄滓・炉壁のほか、砂目跡のある肥前陶器碗、古墳時代以降の須恵器壺底部や縄叩き目のある平瓦や近世平瓦片などが出土

した。SK02からは、同様に鞆羽口・鉄滓のほか、土師器焙烙3、丹波系徳利、京焼風肥前陶器4、肥前染付磁器6・7、瀬戸美濃染付磁器5がある。

SK01・02ともに17世紀中葉以前の遺物を含むものの、5があることから19世紀に下る時期の鋳造

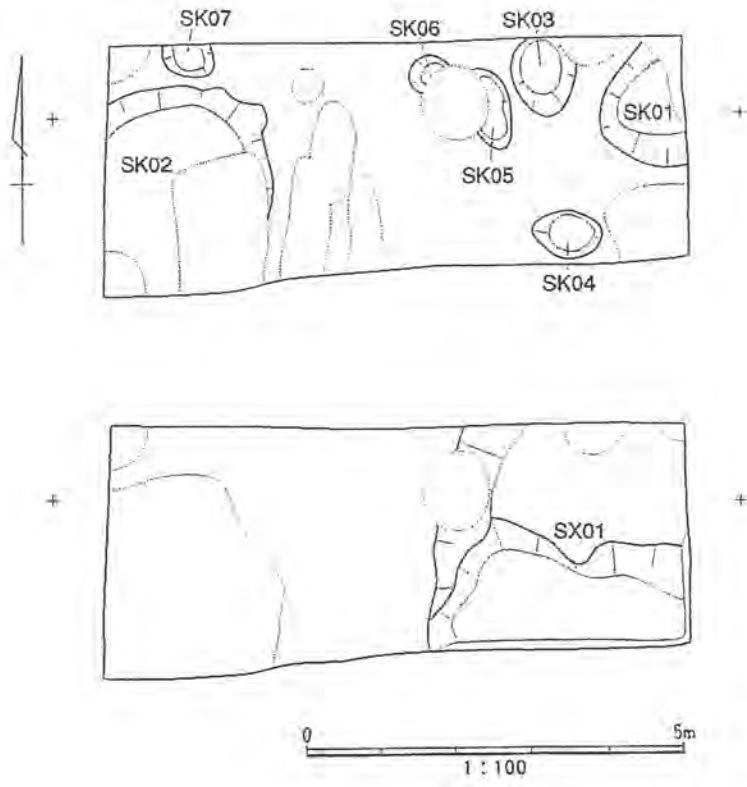


図5 第2層上面(上)および第6層上面(下)平面図

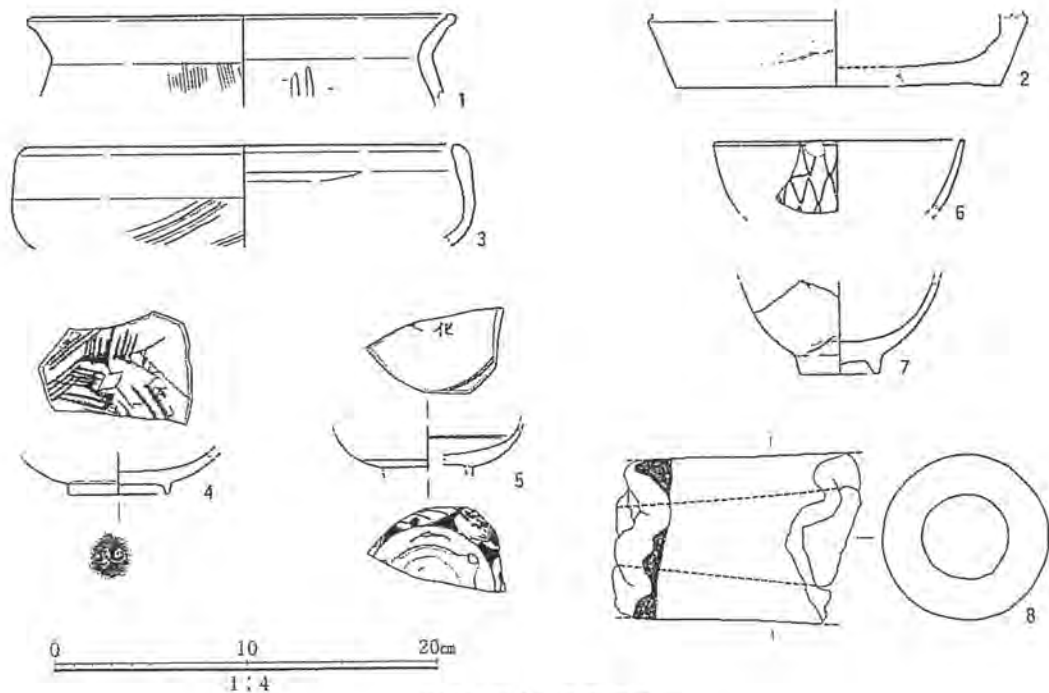


図6 出土遺物実測図
第7層(1)、SX01(2)、SK02(3～8)

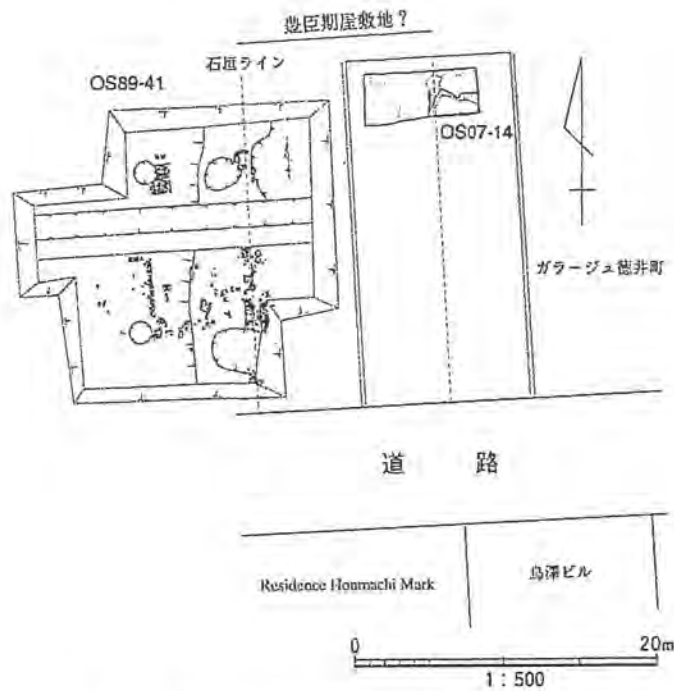


図7 OS89-41次調査地との遺構関係概略図

西側の第6・7層の整地により形成された豊臣前期と推定される敷地の東端をなす段状の落込みと考えることもできる。

3)まとめ

今回の調査地周辺では、近接して多くの発掘調査が行われ、豊臣期の遺構も各所で検出されている。特に、西隣のOS89-41次調査地では豊臣期の石垣や井戸などが検出されているが[大阪市文化財協会2003]、本調査地では明確に豊臣期といえる遺構は認められなかった。

しかし、本調査地の第6・7層整地層の上面の高さは、OS89-41次調査地で確認された豊臣期の遺構面東端(本調査地側)の高さと同じTP+5.0mほどであることから、第6・7層は隣接調査地から続く豊臣前期の遺構面を形成する整地層であると推定される。そう考えると、落込みSX01は、図7に示すような東西幅約12mの屋敷地境界を示す可能性も考えられよう。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「OS85-36次およびその周辺の調査」：『大坂城跡』Ⅶ、pp.291-298

関連の遺構と考えられる。

SX01 第6層上面で検出され、南北3.0m以上、東西3.5m以上で、深さは北半が0.5m、南半が0.6mである。埋土としてはにぶい黄色～灰オリーブ色シルト質細粒～粗粒砂(第5層)が厚さ0.1～0.3mで堆積するが、肩口付近がより厚くなる。南壁付近には黒褐色シルト質細粒砂(第4層)が堆積する。その上には第2層の整地層が窪みを埋めるようにして堆積する。近世の丸・平瓦のほか、伊賀焼水指の底部の可能性のある焼締陶器片2など少量の遺物が出土した。

SX01は第2層の堆積状況からみて、

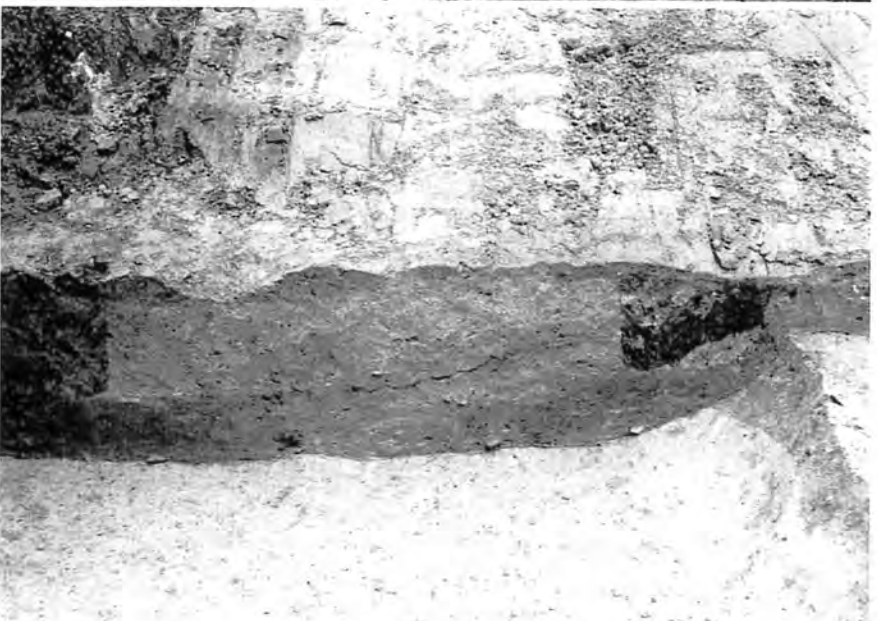
第6層上面全景
(東から)



SX01(南から)



SX01断面(北から)



大坂城跡試掘調査(OS07-17)報告書

- ・調査個所 大阪府中央区糸屋町1丁目6番外
- ・調査面積 約18㎡
- ・調査期間 平成20年3月27日～3月28日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大坂城の西側で、豊臣氏大坂城総構内に位置する。周辺では、OS98-55次、OS03-13次調査などが行われている(図1)。

道路を隔てた南側で実施したOS03-13次調査では、古代の溝や建物などが検出され、調査区の西部では谷の一部が検出され、埋土から古代の須恵器や土師器が多量に出土した。また、東方に近接するOS98-55次調査では、古代の柵や溝などを検出している。

今回の調査は、遺構の有無や地層の堆積状況を確認することを目的として、3m×3mの試掘坑を2箇所設定して実施した(図2)。

なお、本報告で使用した指北記号は図1が座標北、図2・5が磁北で、水準はT.P.値(東京湾平均海水面値)を使用し、本文・挿図ではTP+○mと記す。

〈調査の結果〉

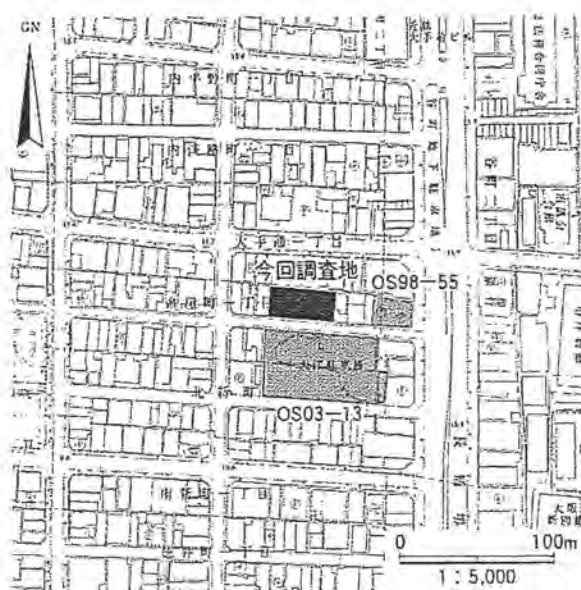


図1 調査地位置図

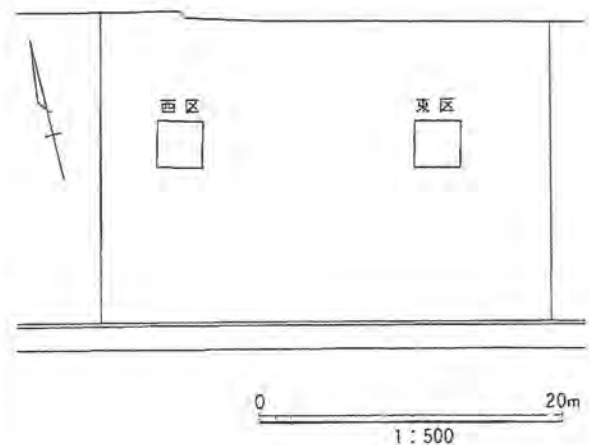


図2 調査区位置図

1. 層序(図3・4)

2箇所の試掘壕とも、同様の堆積状況を示す。

第0層：近代以降の盛土層である。

第1層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトの盛土層で、近世の焼瓦を含む。層厚は最大50cmである。

第2層：黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトの盛土層で、層厚は最大40cmである。近世肥前磁器・瓦器・須恵器・土師器の小片を含む。

第3層：浅黄色(2.5Y7/4)シルト層で地山である。

2. 遺構と遺物(図5・6)

検出した遺構の内、掘削し遺物を取上げたものについて調査区別に記述する。

西区

SD01 第3層上面から検出した東西方向の溝である。幅約1.0m、深さ約0.3m、底部は平坦である。埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂質シルトで、瓦器・須恵器壺底部1・土師器の小片が出土した。時期については中世と推定されるが、遺物量が少なく確定できない。

東区

SD05 第3層上面から検出した東西方向の溝である。南肩は検出していないので幅については不明である。深さは最大約0.6mで、土師器皿2が出土した。埋土はSD01と同様である。古代に遡る時期であろうか。

SK03 第1層上面から切込まれた土壕で、北東隅で検出した。埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトで、漆喰の塊を含む。肥前磁器蓋3・碗4、瀬戸美濃焼鉢5、丸瓦、平瓦などが出土した。これらの遺物から、この土壕の時期は18世紀後半から19世紀初頭と考えられる。

メカイアワビを主とするアワビ類、ハマグリ、ヤマトシジミ、カワニナなどの貝殻や魚骨も出土し

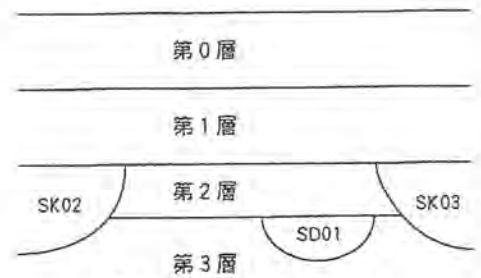


図3 地層と遺構の関係図

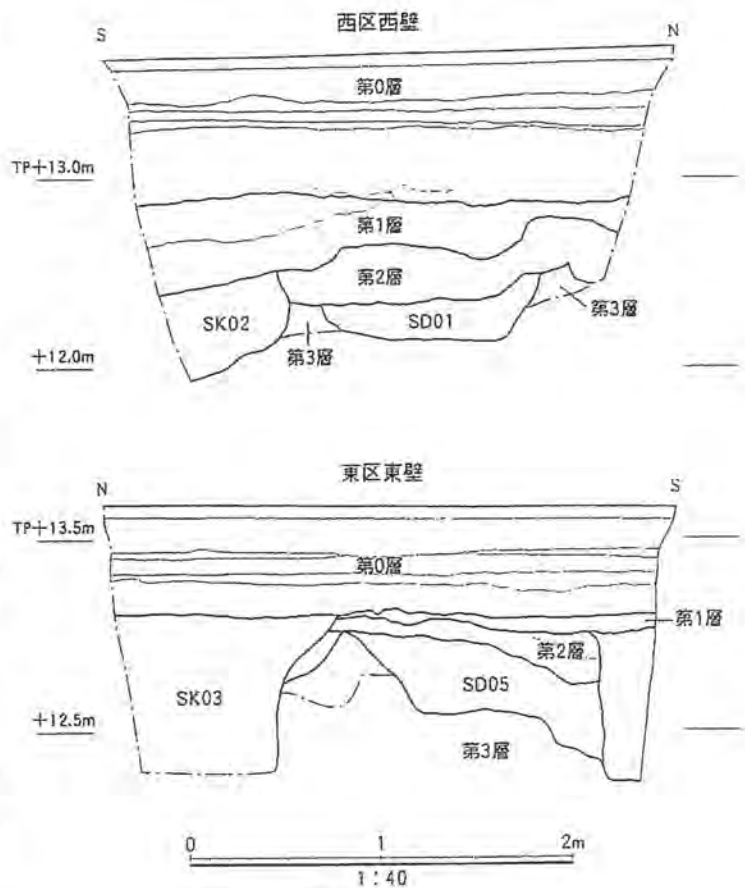


図4 地層断面図

SK02 第2層上面から切込まれた土壕で、南西隅で検出した。深さは約0.5mで、埋土は黄褐色(2.5Y5/4)細粒砂質シルトで瓦が出土した。江戸時代後期の遺構であろう。

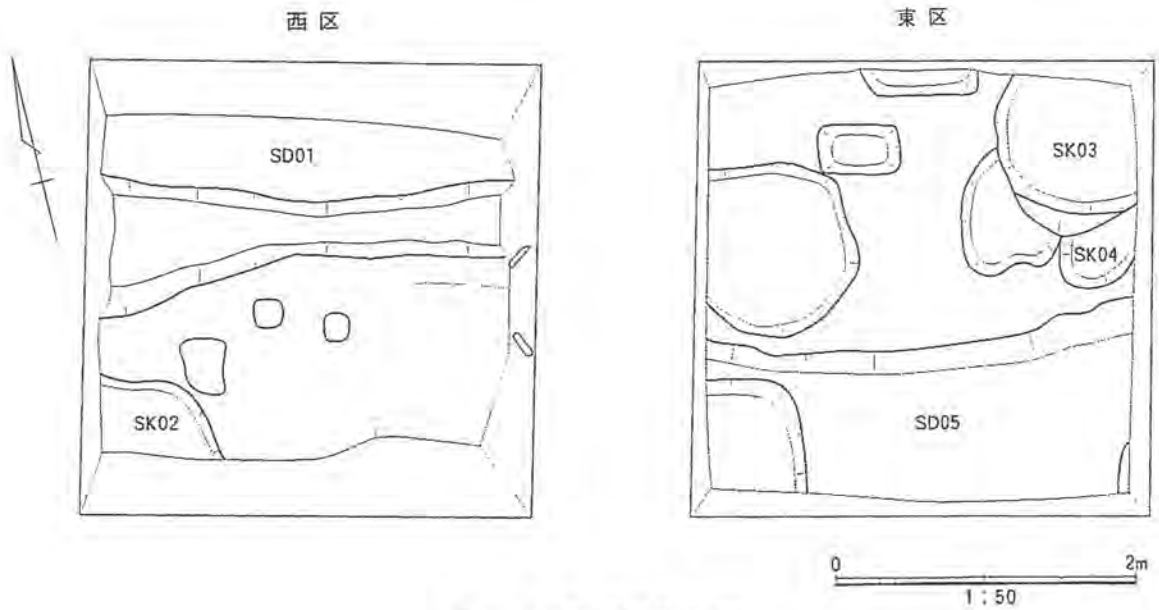


図5 第3層上面遺構平面図

た。

<まとめ>

今回の調査では、江戸時代後期の遺構と中世から古代と考えられる遺構を検出した。

地山の検出面は東区でTP+13.0m、西区ではTP+12.5mと現在の地形に沿って東から西へ傾斜している。東方のOS98-55次調査地ではTP+13.5mで、南方のOS03-13次調査地ではTP+12.8mで地山面が確認され、ともに古代の遺構や遺物が検出された。

今回の試掘調査では、古代の包含層や遺構は検出しなかったが、周辺の状況から古代の遺構が存在する可能性は高いと思われる。

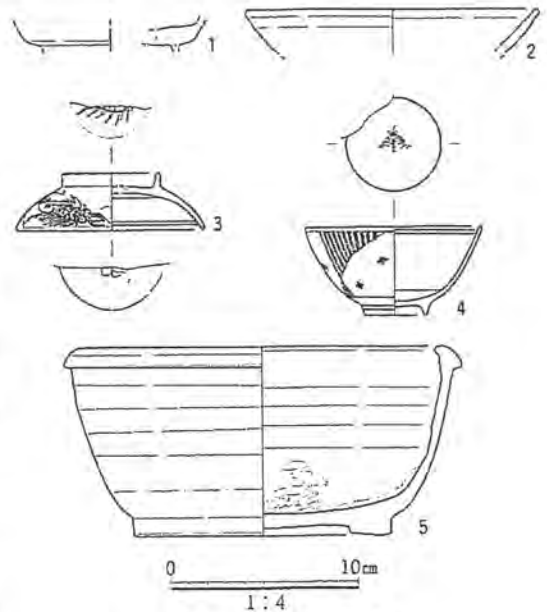
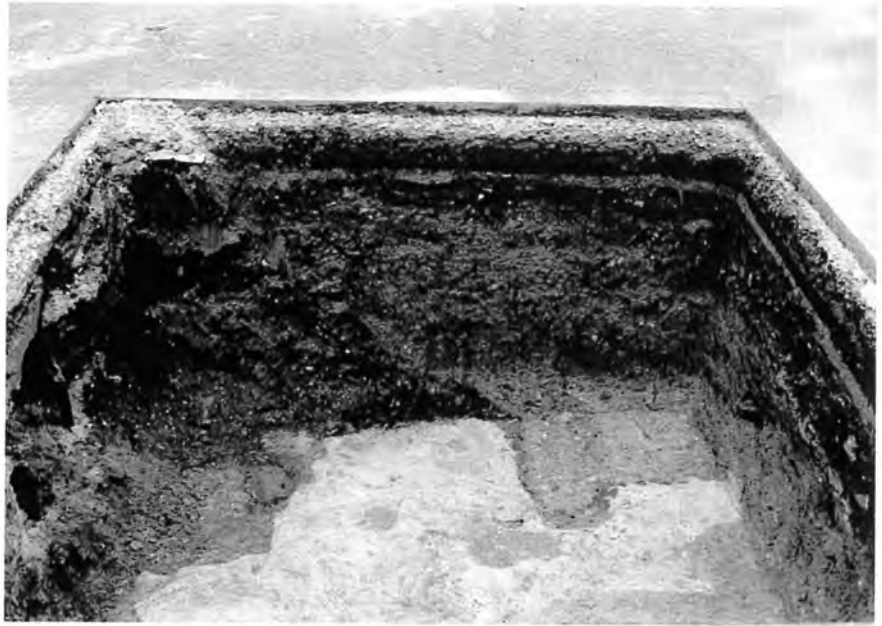


図6 出土遺物実測図

SD01(1)、SD05(2)、SK03(3~5)

西区西壁断面



東区第3層上面遺構検出状況
(南から)



東区東壁断面



大坂城下町跡発掘調査(OJ07-1)報告書

調査個所 大阪市中央区本町1丁目13-1・14-1
調査面積 220㎡
調査期間 平成19年4月25日～5月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、池田研

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東横堀の西側、大坂城下町跡の東南部に位置し、北は本町通りに面している(図1)。周辺で行われた調査では、東約30mのOJ05-2次調査で大坂冬ノ陣によると考えられる、焼土を主体とする整地層が、南東約100mのOJ92-17次調査では井戸・土塋など豊臣期のもつみられる遺構が検出されている。また、徳川期に関してはいずれの調査でも、冬ノ陣後間もない時期から18世紀にかけての、礎石建物をはじめとする遺構や遺物が見つかった。

本調査に先立つ大阪市教育委員会による試掘調査では、豊臣期から徳川期にかけての遺構面が良好に遺存していることが確認されたため、現地表面下2.7mで検出された江戸時代前期の遺構面を最初の調査対象面として、本調査を実施することとなった。

本調査では事業者側による重機掘削に続き、4月25日から人力掘削を開始した。まず、TP+3.0m前後の第1・2層上面で徳川期の遺構を一括して検出した後、大坂冬ノ陣の焼土層(第4c層)を掘削し、5月17日には被災面を検出した。被災面よりも下位については、調査区東半を排土置場として確保する必要があったことから、西半のみを平面的な調査の対象とした。豊臣期の整地層とみられる第6層から、TP+1.7~2.0mで確認した地山層(第7層)にかけては、南北端にトレンチを設定して調査を行ない、5月28日には調査を終了した。

なお、本調査で使用した方位は磁北、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)である。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4、図版①)

東西両壁断面が北端の一部を除いて攪乱を受けていたことから、調査区中央に南北アゼを残して断面観察を行った(図2)。調査区の東端は攪乱を受けている部分が多かったが、豊臣期以降の各整地層は東西方向についても基本的に連続しており、一つの屋敷地内であった可能性が高い。なお、試掘調

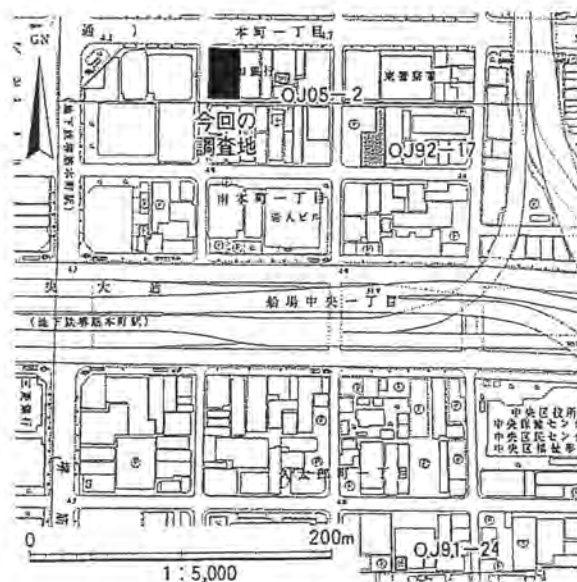


図1 調査地位置図

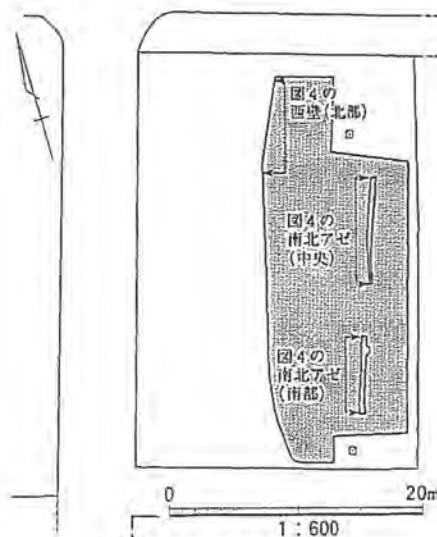


図2 調査区位置図

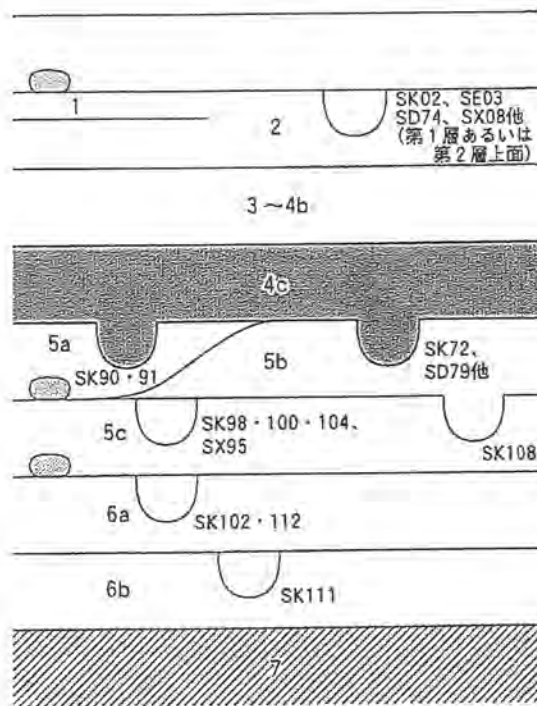


図3 地層と遺構の関係図

査の結果によれば、第1層の上位に近世中期以降の包含層が部分的に残存していたとみられるが、本調査では確認することができなかった。

第0層：現代盛土層である。

第1層：浅黄色細粒砂を主体とする整地層である。部分的に分布しており、厚さは最大10cm程度ある。

第2層：にぶい黄色砂質シルトを主体とする整地層で、厚さは10cm程度ある。炭化物・焼土を含む。第1層および本層の上面で、上位層に伴う遺構を一括して検出した。

第3層：にぶい黄色極細粒砂質シルトを主体とする整地層である。厚さは12cm程度で、炭化物を少量含む。調査区南部では砂質シルトからなる上部と、極細～中粒砂からなる下部に細分される。

第4a層：暗褐色砂質シルトを主体とする整地層で、厚さは15cm程度ある。炭化物・焼土を含む。

第4b層：黄褐色砂質シルトからなり、直径10cm前後の花崗岩質礫を多く含む。厚さは最大20cm程度である。調査区北部で、建物が存在したと考えられる部分の南側外縁部に分布する(図6・図版⑤)。

第4c層：にぶい赤褐色極細～細粒砂質シルトを主体とし、厚さは35cm程度ある。調査区北部に厚く堆積しており(図6)、南部では部分的に分布している。大坂冬ノ陣による焼土層とみられる。

第5a層：明黄褐色シルト質砂からなり、厚さ15cm程度ある。上面は大坂冬ノ陣の被災面とみられるが、下面にも火を受けた痕跡が観察される。調査区北部にのみ分布しており、建物の貼床層の可能性はある。

第5b層：褐色砂質シルトを主体とする整地層で、厚さは20cm程度ある。調査区中央部から南部にかけて分布している。

第5c層：灰オリーブ色シルト質極細粒砂を主体とし、厚さは15cm程度ある。調査区全体に分布する整地層である。

第6層：褐色極細～中粒砂を主体とする整地層で、厚さは10cm程度ある。調査区南部では灰褐色シルト混り砂からなる第6a層と、にぶい黄褐色極細～細粒砂からなる第6b層に細分され、いずれも炭化物・偽礫を含む。

第7層：黄褐色極細～細粒砂からなる、弥生時代よりも前の地山層である。

ii) 遺構と遺物

a. 第6b層上面(図5・7～9)

第6b層上面については調査区南北端にトレンチを設定して調査を行ない、豊臣後期の遺物を伴う土壌を検出した。SK111は深さ約0.5mの土壌で、埋土は暗オリーブ褐色シルト混り極細～中粒砂から

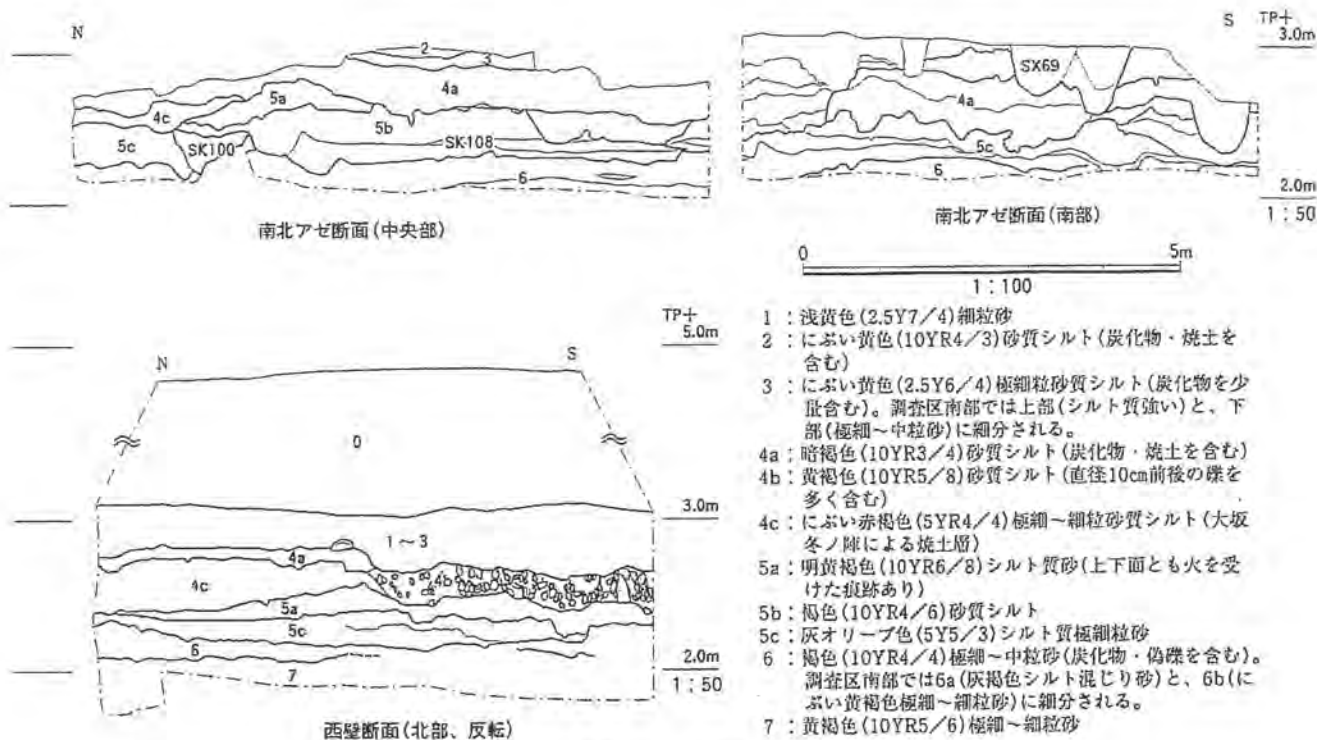


図4 南北アゼ・西壁地層断面図

なる。埋土からは瀬戸美濃焼、肥前陶器、青花、瓦、鉄製品などが出土した。6は瀬戸美濃焼の灰釉鉄絵折縁ソギ皿である。削り出しの高台内には白色土からなる輪トチの痕跡がある。21は粗製の青花碗である。高台内にカンナ痕が残り、端部は釉を掻き取っている。景德鎮窯のものである可能性がある。40は連珠巴文軒丸瓦である。47は鉄製の鍋釣金具で、一方の端部には二股の可動式金具が取り付けられている。46は鉄製の火箸である。X線写真によれば末端部は環状となっている。同遺構からは末端部が欠損した火箸がもう1本出土しており、2本が連結されていた可能性が高い。

b. 第6a層上面(図5)

第6a層上面では土壌や、礎石の可能性のある人頭大の礫を検出した。SK102は深さ0.1m、SK102は深さ0.6m程度の土壌で、SK102からは土師器や平瓦片が出土している。

c. 第5c層上面(図5・7～9、図版②・③)

第5c層上面では土壌SK98・100・104・105・108、竈SX95、礎石など、豊臣後期に属するとみられる遺構を検出した。土壌・竈は調査区中央部、礎石は調査区北部を中心に分布している。

SK98 深さ0.1m程度の土壌で、備前焼播鉢、肥前陶器向付、瀬戸美濃焼、丸・平瓦、石製品が出土した。38は石製五輪塔の空・風輪部分とみられる。また、瀬戸美濃焼には高台内に三角形と直線を組み合わせた記号が墨書されたものがある。

SK100 深さ0.3m程度の土壌で、肥前陶器皿12や平瓦が出土した。

SK105 深さ0.5m程度の土壌で、第5a層により埋まる。丸・平瓦、鉄製品などが出土した。45は鉄製鋤先で、風呂の木質が部分的に残存している。

SK108 長辺6.0m、深さ0.8m程度の大規模な土壌で、最終的には第5b層により埋まる。土師器、

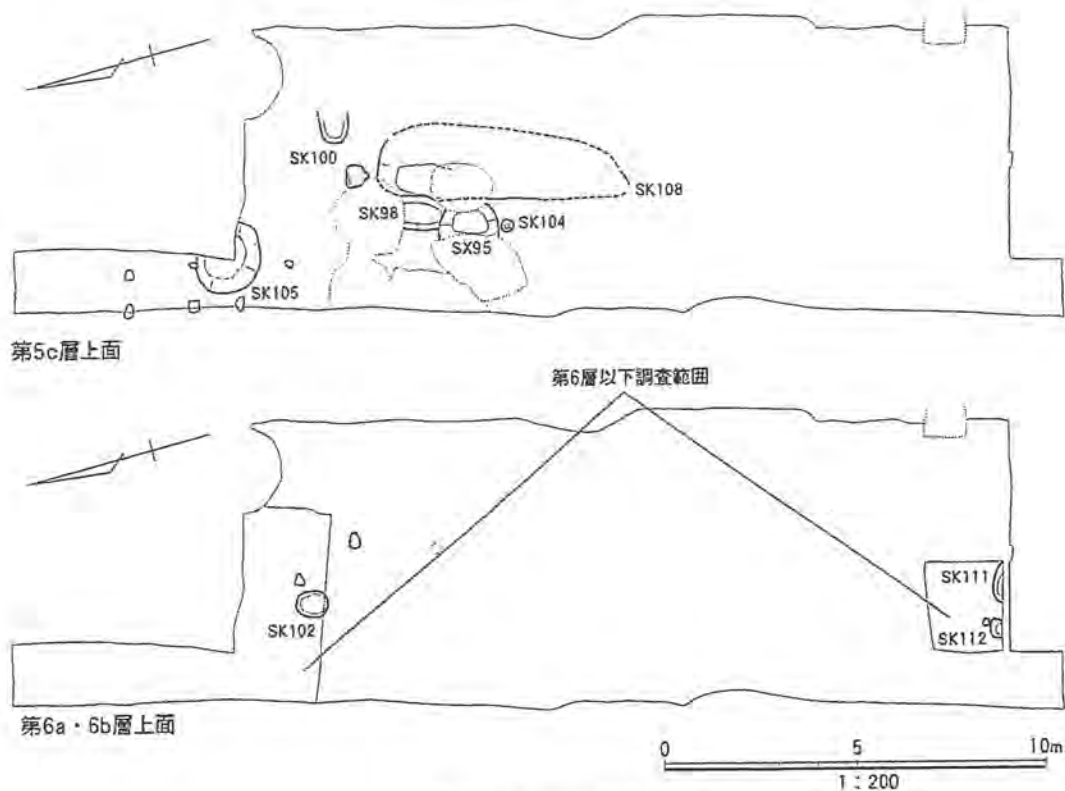


図5 遺構平面図(その1)

須恵器、漆焼、瀬戸美濃焼、輸入磁器、焼塩壺、金属製品などが出土した。25は土師器甕である。胴部の調整は外面がハケで、内面は頸部の直下がハケ、それ以下がナデとユビオサエである。8世紀後半から9世紀代のものとみられ、混入遺物であろう。5は16世紀後半のものと思われる端反りの中国製白磁皿、31は完形の焼塩壺である。44は折れ曲がった状態で出土した銅製の筭である。別作りの飾りは獅子あるいは馬をモチーフとしており、X線写真によれば、一体となったネジを本体の孔に差し込んで接合している。

SX95 東西端部が攪乱を受けているが、幅1.5m、深さ0.6m程度の窠とみられる。埋土は大きく5層に細分されるが、そのうち第3層は黄褐色砂混りシルトからなり、突き固められたようによく締まっている。埋土からは土師器羽釜・甕、須恵器、瓦質火入、肥前陶器、中国製白磁、青花、焼塩壺蓋、貝類などが出土した。13は肥前陶器皿で、見込みには4個所に胎土目が残る。41は連珠巴文軒丸瓦である。

礎石 調査区北部では人頭大の礎石を複数検出した。建物を復元することはできなかったが、上位層の段階において当屋敷地内の建物が調査区北部に存在していたと考えられることから、これらの礎石群は礎石である可能性が高い。

d. 第5a・5b層上面(図6・表1・図版④)

第5a・5b層上面では土塙・溝・礎石など、豊臣後期に属する遺構を検出した。本遺構面は大坂冬ノ陣による被災面と考えられ、焼土層(第4c層)が厚く堆積する範囲や、貼床層とみられる第5a層の分布範囲をみても、調査区北端には建物が存在したと考えられる。

土塙・溝 土塙にはSK67・72・78・82・83・85・89・96、溝にはSD79・97などがある。そのう

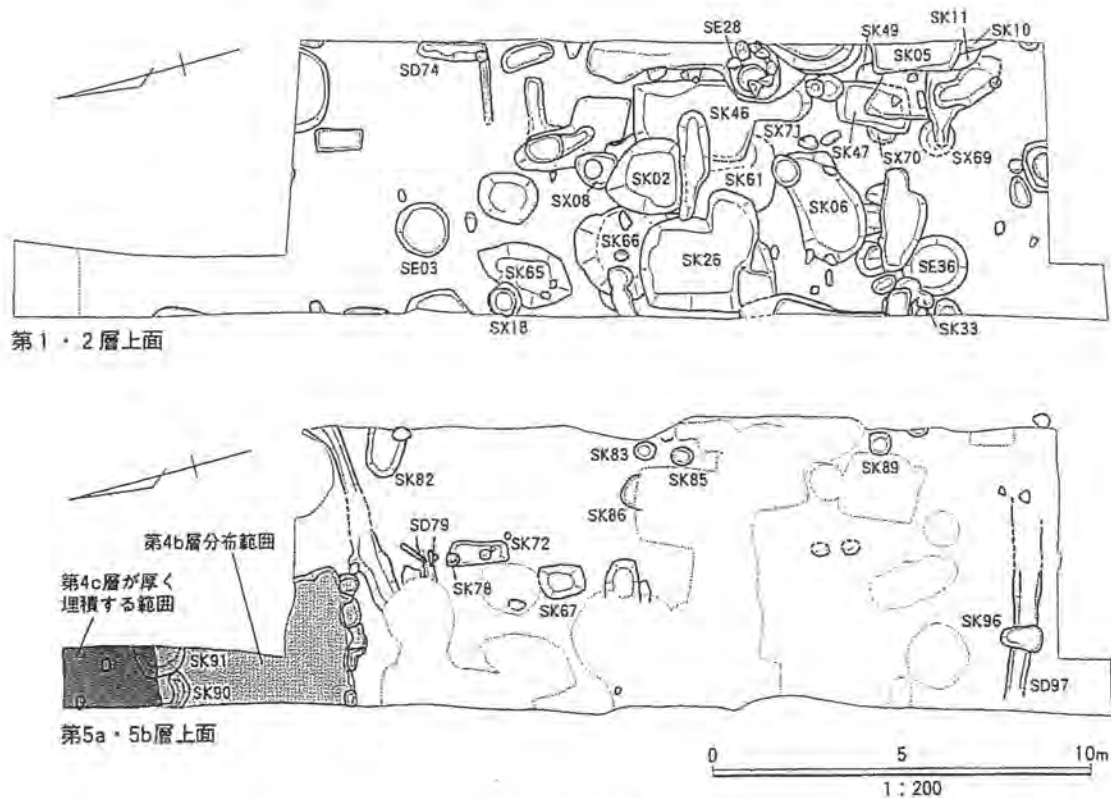


図6 遺構平面図(その2)

ちSK78は深さ0.6m程度のしっかりとした土塙であったが、他の遺構は深さ0.1m程度の浅いものであった。これらの遺構から出土した遺物は細片のみで図示できなかったが、中国製とみられる白磁片(SK96)、肥前陶器(SD97)、銭(SK78)のほか、土師器、須恵器、備前焼、瓦などが出土している。

礎石 建物として復元することはできなかったが、建物が存在したと考えられる調査区北部を中心に礎石を検出した。

e. 第1・2層上面(図6～9・表1・図版⑥)

第1・2層上面では同層上面遺構と、上位層に伴う遺構を一括して検出した。遺構は礎石・土塙・溝・井戸などが、調査区中央部を中心として密に分布している。遺構には18世紀代まで下るものも含まれるが、17世紀中葉から後葉に属するものが中心であり、それらが第1・2層上面遺構の年代を示していると考えられる。以下では主要な遺構と遺物について報告する。

土塙 埋土は炭・焼土を含む砂質シルトからなるものが多く、出土遺物から上位層に伴う遺構と考えられるものにはSK02・05・06・26・33などがある。

SK02・05・06・26は瓦溜である。最も規模の大きいSK26では深さが1.3m程度ある。火災により被災した建物の瓦を片付けたものとみられ、埋土には大量の焼土が含まれる。いずれも18世紀代の遺物を伴い、SK26からは寛永通寶2点が出土している。

SK33は18世紀前半に属するとみられる土塙である。当遺跡では出土例の稀少な土師器火もらい26が出土した。胴部には二対のスカシ孔を四方に配し、底部内面中央部には環状の粘土紐を貼り付けており、天井部と胴部の外面には直径3mm前後の円形の列点文を配する。天井部の内面にはススが付着

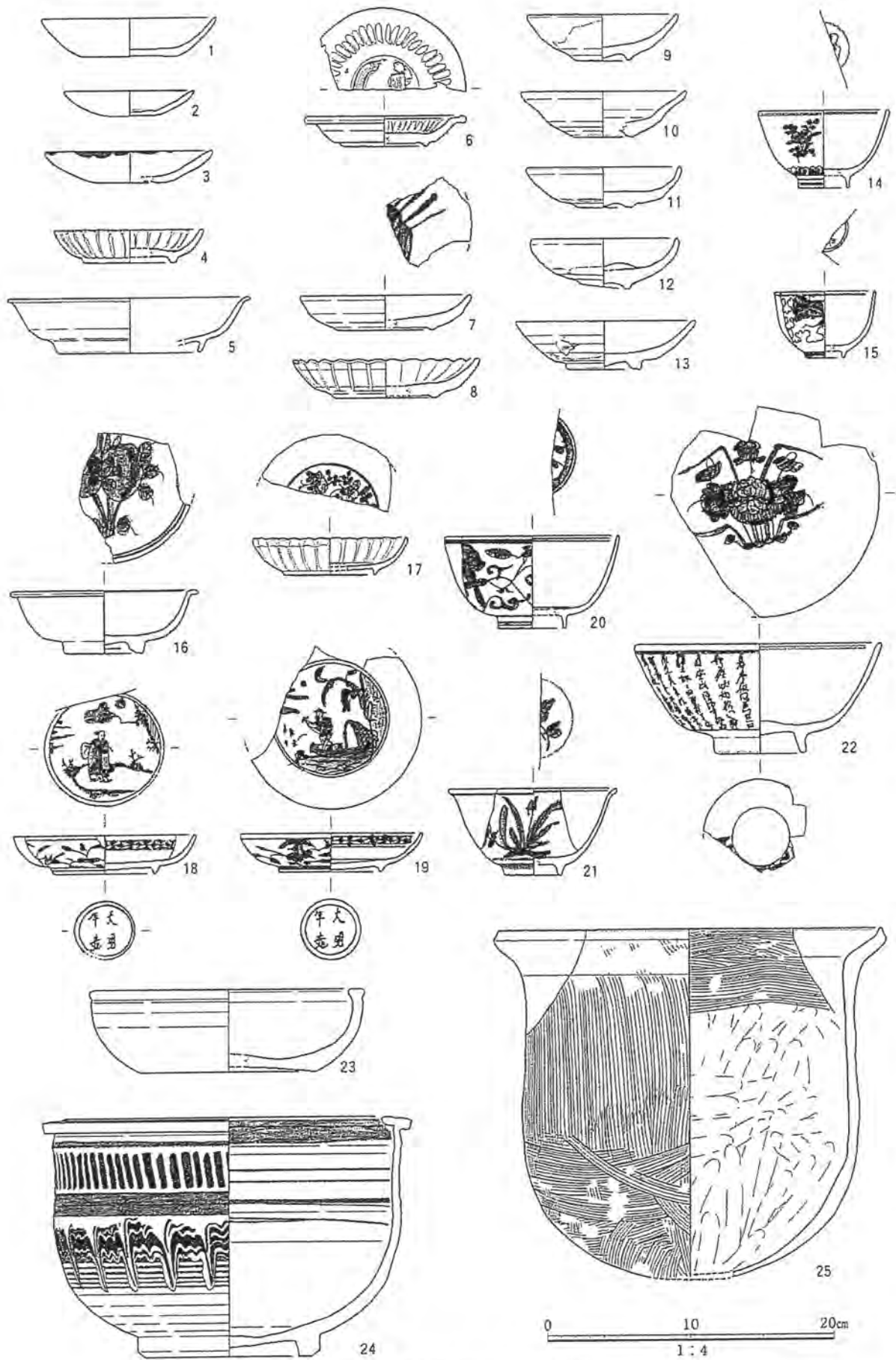


図7 遺構・包含層出土の遺物(その1)

SK11(24)、SK49(22)、SK99(18)、SK100(12)、SK108(5・25)、SK111(6・21)、SX95(13)、第3層(16)、第4b層(11)、第4c層(1・2・4・7・9・10・17)、第5a層(8・19・23)、第5b~5c層(3)、第5層(14・15)、第6層(20)

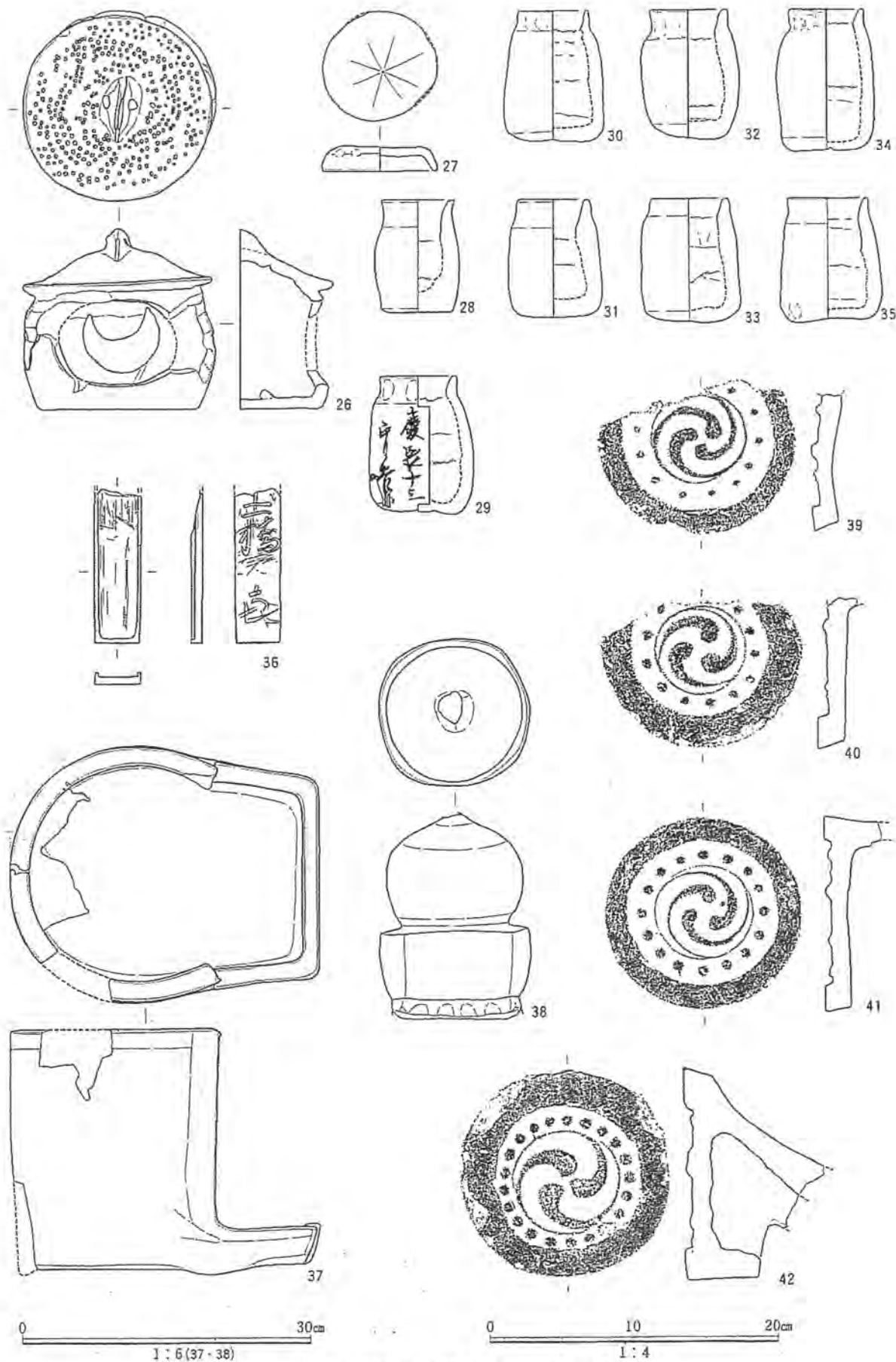


図8 遺構・包含層出土の遺物(その2)

SK11(27)、SK33(26)、SK46(33)、SK49(36)、SK63(37)、SK94(30)、SK98(38)、SK108(31)、SK111(40)、SX95(41)、第4b層(28)、第4c層(34・35・42)、第5b~5c層(32・39)、第6層(29)

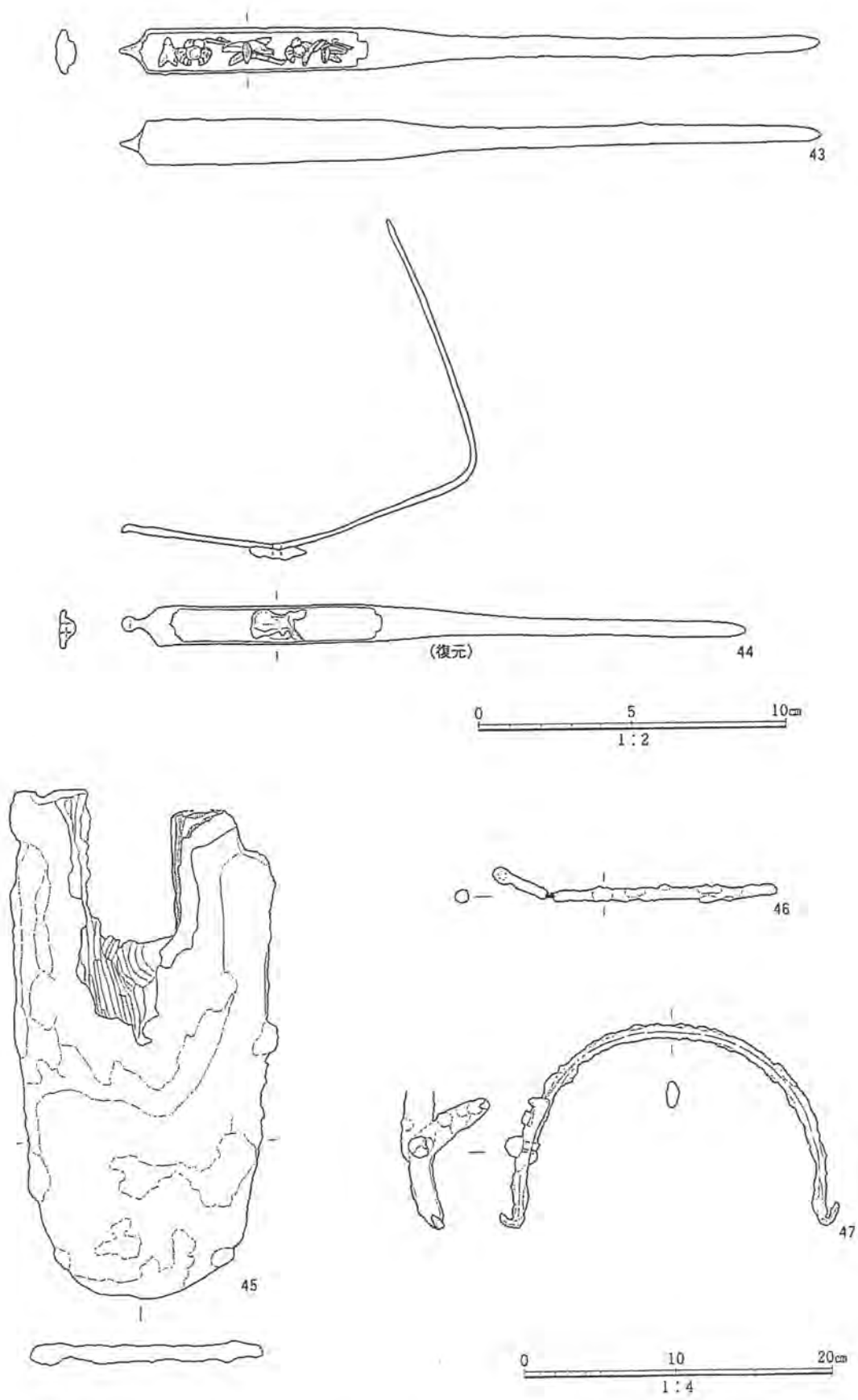


図9 遺構・包含層出土の遺物(その3)
SK49(43)、SK105(45)、SK108(44)、SK111(46・47)

している。肥前陶胎染付や三島手・刷毛目、京焼風陶器が共伴している。表1 遺構・包含層出土の銭貨

出土層・遺構	銭種
第1層上面	寛永通寶
第2層	寛永通寶
第4a層	太平通寶
第5c層	元豊通寶
SK26	寛永通寶 2点
SK46	寛永通寶
SK61	天禧通寶
SK78	□和通□

SK10・11・46・47・49・61・63・65・66・94・99は、いずれも17世紀中葉から後葉にかけての遺物を伴う土壌である。SK11はSK10に切られる土壌で、肥前陶器鉢24や、外面に線刻のある焼塩壺蓋27などが出土している。SK49は深さが1.1m程度のしっかりとした土壌で、SK05・47に切られる。埋土は大きく2層に細分されるが、上層は掘直された別遺構である可能性もある。本遺構からは土師器、備前焼、丹波焼播鉢、肥前陶磁器、中国製青花・色絵、焼塩壺、硯、貝類など多くの遺物が出土した。下層から出土した22は、蘇東坡作の詩「赤壁賦」を題材とした青花鉢である。「赤壁賦」を題材とした資料としては、大坂城下町跡(OJ91-2次調査)出土の漳州窯産青花鉢、天満本願寺跡(TN05-1次調査)出土の肥前磁器染付碗などがある。36は硯で、背面には「土橋硯」という名前とみられる線刻がある。43は銅製の筭である。耳搔き部分が無いが、欠損した明瞭な痕跡は観察されず、本来の形状を示していると考えられる。肉厚で重厚な作りで、モチーフとして彫られた「蟹と笹」には鍍金・鍍銀が施されている。

SK63はSK10の下面で検出された土壌で、移動式竈37が出土した。全体の器形を復元できる出土例は少なく、上端部から内面の上部にかけてはススが付着している。

SK46・65は大規模な廃棄土壌で、SK46は長辺4.7m、深さ0.8m、SK65は長径2.7m、深さ1.1m程度ある。SK46からは完形の焼塩壺33や銭(寛永通寶)、SK65からは中国製の青花、色絵片やサンゴ、魚骨、貝類などが出土した。また、SK46に切られるSK61からは、銭(天禧通寶)が出土している。

SK66の下面では、SK94・99など16世紀後葉から17世紀中葉の遺物を伴う複数の土壌を検出した。SK94から出土した30は完形の焼塩壺で、内面には煤が付着している。SK99から出土した18は青花皿である。

礎石・溝・井戸他 礎石とみられる礎は調査区内で散在しており、建物として復元することはできなかった。SD74は調査区東端で検出した溝で、「く」の字状に屈曲している。周辺で検出した礎群は本遺構に伴うものである可能性がある。出土した遺物は瓦片のみで、遺構の時期は不明である。

井戸とみられる遺構にはSE03・28・36などがあるが、いずれも18世紀代の遺物を伴う。そのうち、SE28は深さが0.8m程度あり、井戸側には井戸瓦を3段分積み上げ、上面には礎を環状に配置している。底面部には皿状の厚い漆喰が敷かれていたが、最下段の瓦と水準が等しく、集水機能に支障をきたすと考えられることや、漆喰の上面が焼けていることなどから、他の用途に用いられた可能性も否定できない。

そのほか、SX08は丹波焼の甕が倒立した状態で、SX18は正位の状態で出土している。SX08は水琴窟、SX18は便槽である可能性があり、ともに18世紀代の遺物を伴う。また、調査区南部で検出したSX69・70・71からは、直径3cm前後の那智黒石がまとまって出土した。大部分の形状は基石に用いることができるような正円形ではなく、屋敷地内で敷き詰められていた玉石が片付けられたものである可能性がある。

iii) 包含層出土の遺物(図7～9・表1)

a. 第6層 20は景德鎮窯のものとみられる精製の青花碗である。29はほぼ完形の焼塩壺で、体部外面には全面に墨書が残る。判読可能であったのは一部であるが、「慶長十三年 正月吉日」という年号や、花押とみられる墨書が確認された。

b. 第5層 第5a層からは備前焼鉢23や、瀬戸美濃焼志野菊皿8、青花皿19などが出土した。19は器形や文様構成などから、SK99から出土した18とセット関係にあった可能性がある。

第5b～5c層からは土師器灯明皿3、ほぼ完形の焼塩壺32、連珠巴文軒丸瓦39などが出土した。

第5c層から出土した14・15は景德鎮窯のものとみられる青花小碗である。また、同層からは二枚貝の貝目をもつ肥前陶器皿や、銭(元豊通寶)が出土している。

c. 第4層 第4c層からは土師器皿1・2、瀬戸美濃焼鉄絵皿7、肥前陶器皿9・10、中国製青磁皿4、青花皿17、鳥衾42、完形の焼塩壺34・35などが出土した。土師器皿のうち、色調は1が白色、2は橙色を呈し、1の底部外面には糸切り痕が観察される。肥前陶器皿9・10はいずれも見込みに胎土目が残る。17は景德鎮窯の精製品とみられる。

d. 第4b層 11は第4b～4c層から出土した肥前陶器皿である。28は第4b層から出土したほぼ完形の焼塩壺である。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土はやや粗く、本調査で出土した他の焼塩壺とは異質である。

e. 1～4a層 16は第3層から出土した漳州窯のものとみられる粗製の青花鉢で、高台端部には砂粒が付着している。また、第1層上面と第2層からは寛永通寶、第4a層からは太平通寶が、第3層からは北陸産凝灰岩製とみられる石製品が出土している。

3) まとめ

平安時代の土器がまとまって出土したOJ92-17次調査を始め、周辺の調査では古代の遺構や遺物が見つかったが、本調査では混入とみられる8世紀後半から9世紀代の土師器が1点出土したのみであった。

豊臣期に関する調査成果としては、大坂冬ノ陣の焼土層が北部を中心に厚く堆積していることを確認し、被災面を含めて豊臣後期の複数の生活面で、礎石・竈・土塋・溝などの遺構を検出した。焼土層の下位の整地層では、慶長十三(1608)年の年号を墨書した焼塩壺が出土しており、焼塩壺の編年における基準資料としてはもちろん、焼土層の堆積年代を検証する上でも重要な意味をもつ資料となった。また、当遺跡では出土例が稀少である筭が、豊臣期と徳川期で各1本出土した。そのうち1本には鍍金・鍍銀が施されており、本屋敷地の居住者の階層について考察する上で注目される資料である。

最後に、徳川期に関する調査成果としては、礎石・土塋・溝・井戸など、17世紀中葉から18世紀にかけての遺物を伴う遺構が多数検出された。近接して行われたOJ05-2次調査では大坂の陣後、間もない時期の建物が確認されているが、本調査地では17世紀中葉までまとまった遺構は検出されなかった。調査地周辺に本格的な再開発の手が及ぶ時期については、引き続き慎重に検討していく必要があるといえよう。

①西・北壁地層断面
(南東から)



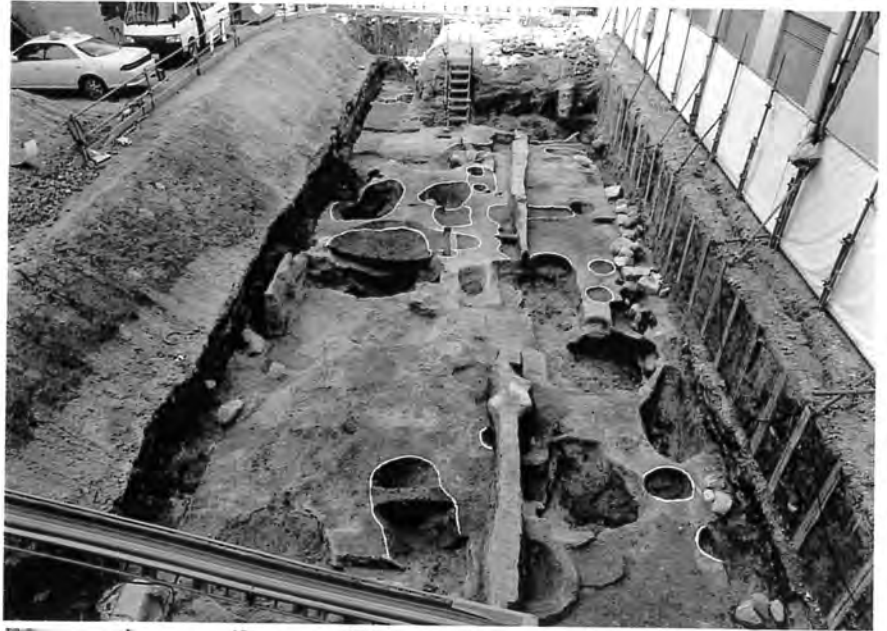
②第5c層上面
遺構検出状況
(南から)



③SX95検出状況
(西から)



④第5a・5b層上面
(大坂冬ノ陣被災面、
南から)



⑤第4b層堆積状況
(西から)



⑥第1・2層上面
(南から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ07-2)報告書

調査個所 大阪市中央区今橋2丁目17-1の一部・49-2
調査面積 126m²
調査期間 平成19年4月5日～4月16日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、積山洋

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣期の大坂城下町である船場の北端に位置する(図1)。船場は慶長19(1614)年の大坂冬の陣に際し、豊臣方が自焼したため、その際の焼土層が各所で発見されている。1990年代に調査が進んだ船場北部の道修町・平野町一带に比べ、この付近はさほど調査例が多くないが、OJ96-13次調査などで冬ノ陣とみられる焼土層が検出されている。江戸時代の延宝2(1674)年以後、当地は「大坂十人両替」の筆頭であった豪商鴻池家の本邸となった。

2007年3月13日、表題の建設工事に先立つ試掘調査が行われ、遺構・遺物の遺存が認められたので、敷地内の東南部で本調査を実施することとなった(図2)。

調査は機械力によって現地表面から110cmまで掘削したのち、人力による調査を実施した。断面観察では、自然堆積とみられる第13層までの地層が確認された。このうち、調査対象は第6層上面までであったが、現代の攪乱がひどく、また層位的かつ平面的な調査に努めたものの、遺構・遺物はさほど検出されないという結果に終わった。とはいえ、調査区の東側の深い攪乱の底面で発見された一部の遺構に限って、部分的な平面調査を実施することができた。実働は9日間であった。

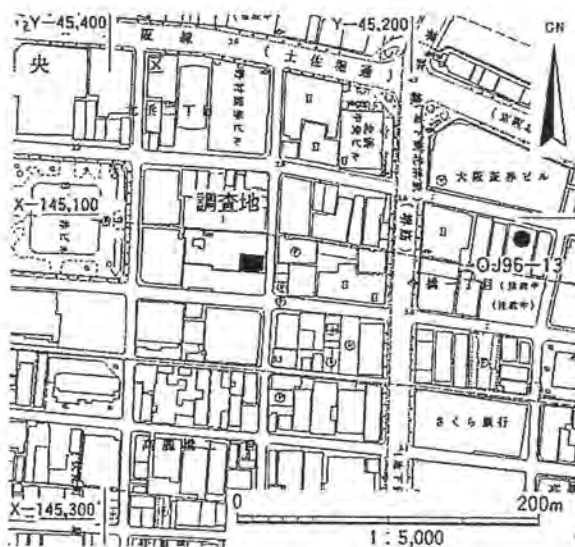


図1 調査地の位置

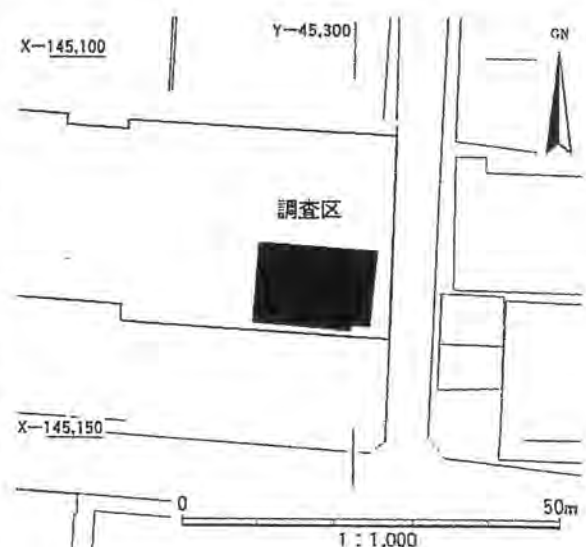


図2 調査区の配置

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：シルトの偽礫を含むにぶい黄色粗粒砂・黄褐色粗粒砂や、暗オリーブ色砂混りシルトなどからなる整地層で、層厚は約20cmである。後述するSX03～05は本層より新しい。

第2層：第2a層はシルトの偽礫を含む灰黄色砂混りシルト、第2b層は黄褐色砂混りシルトなどが

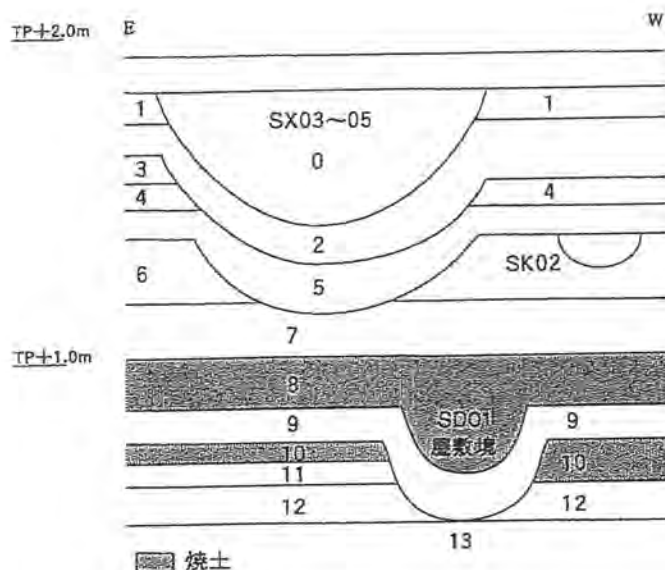


図3 地層と遺構の関係

らなる。いずれも整地層で、最大層厚は15cmである。第2a層はわずかに焼土塊を含み、その上面は生活面とみられる。

第3層：シルトの偽礫を含む黄褐色中～粗粒砂・オリブ褐色粗粒砂からなる整地層である。18世紀の陶磁器が出土している。層厚は最大約30cmである。

第4層：第4a層は黒褐色の砂・シルトなどの薄層の集積で、第4b層はオリブ褐色粗粒砂の整地層である。第4a層

の上面は生活面とみられる。a・bの2層で、厚みは10～15cmであった。

第5層：灰黄色小礫混り粗粒砂で、これも整地層である。ところによって30cm以上の厚さがあるが、遺物は少ない。

第6層：にぶい黄褐色砂混り粘質シルト、暗褐色粗粒砂、暗褐色シルト混り粗粒砂などがそれぞれ数cmの厚みで積み重なっていた。17世紀後半の陶磁器を含み、18世紀の遺物を含むSK02は本層上面で検出されたが、5層に伴う可能性も残る。ともかく、鴻池本邸が移ってきたのはこのころであろう。

第7層：黄褐～黄灰色粗粒砂の整地層である。厚みは15～20cmで、17世紀の肥前陶器を含む。

第8層：第8a層は暗赤褐色中～粗粒砂の焼土層で、第8b層はその下位の黒色炭層である。厚みは5～20cmである。17世紀中ごろまでの肥前陶磁を含む。

第9層：均質な暗褐色砂混りシルトで、平均層厚は15cmである。肥前磁器は含まず、17世紀前半の肥前陶器を含む。整地層というより、畠の耕作土の可能性が高い。本層の上面で石組溝SD01が検出された。

第10層：本調査地で検出された最下位の焼土層である。出土陶磁器からみると、大坂冬ノ陣より新しい可能性が高い。

第11層：シルト・粘土の偽礫を含むオリブ褐色の細～粗粒砂で、炭も多量に含む。厚さは15～20cmである。豊臣後期ごろの肥前陶器を含むが、わずかである。おそらく整地層であろう。本層の上面で礎石の存在を確認している。

第12層：にぶい黄色の粗粒砂～小礫の第12a層と、黄褐色シルト混り中～細粒砂の第12b層からなる。後者には瓦の細片を含むが、年代の詳細は不明である。

第13層：オリブ褐色砂(細～粗粒砂)で、第13a層は部分的ながら細粒砂のラミナが観察されるの

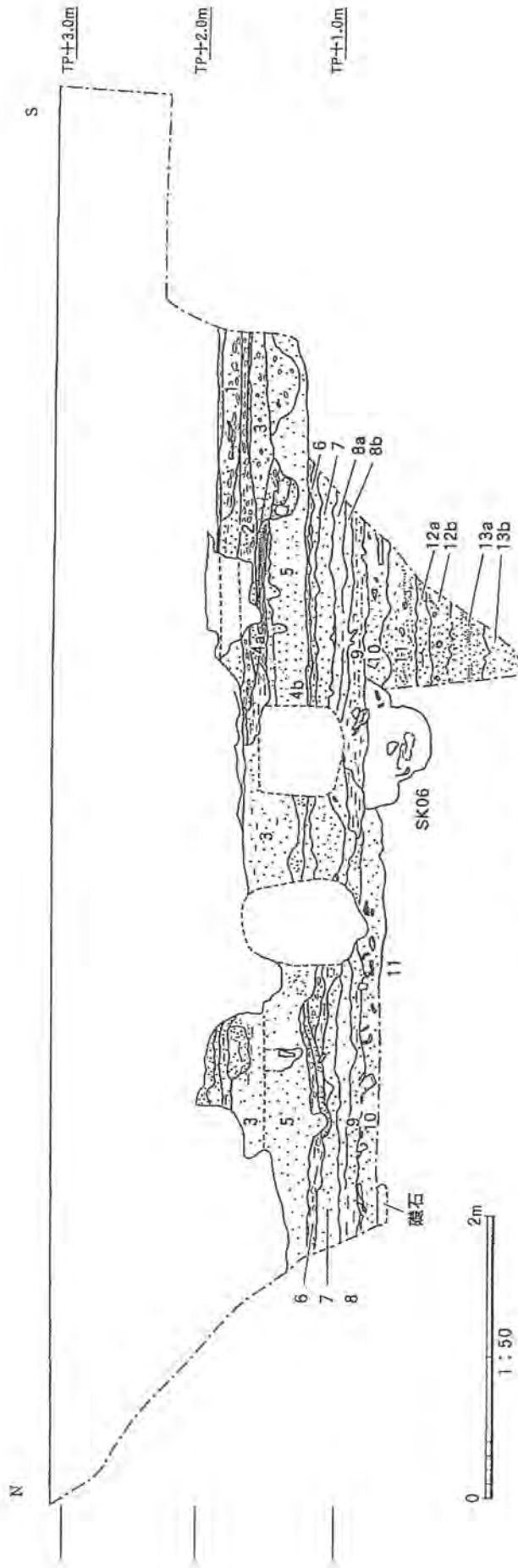


図4 東壁地層断面図

で、水成層である。第13b層は限られた範囲しか観察できなかったが、粗粒砂が主体で、やはり水成層と思われる。

ii) 遺構と遺物

a. 徳川初期の遺構と遺物

屋敷境溝：調査区東側の攪乱の底で検出された南北方向の石組溝SD01(図5)は、第9層の上面に築かれたもので、溝は第8層(焼土)で埋まって廃絶していたが、その下にも第9層の砂で埋まる素掘りの南北溝が認められた。このことから、SD01とその下位の溝は屋敷境の溝であったと考えられる(図3)。またその上では、第7層段階が判然としないものの、第6層以後は、わずかに東に寄った位置で溝の存在が連続的にかがえる(図3)。なお、SD01からの出土遺物は、第8層から肥前陶器溝縁皿(図6-18)・同皿(同19)である(後述)。

b. 徳川中期の遺構と遺物

土壇：SK02(図5)は、第6層上面で検出されたが、大半は攪乱により失われ、東端部のみ、深さ15cm前後が残っていた。ここから箱形の銅製品(図6-20)が、出土した。この銅製品は縦5.9cm、横12.3cm、厚さ2.8cmの大きさで、図の下端以外の各面に、多数の小孔が穿たれている。中には黒色の有機物がコールタル状に残っていた。これが放熱に適した形態だとすると、懐炉である可能性が考えられるが、類例を待ちたい。なお、この土壇から出土した肥前磁器の碗はやや厚めで、高台外面に二重圈線を描き、畳付きの断面がU字状をなす18世紀前半ごろのものである。先述のように、第6層以後、この地は鴻池の屋敷地となった

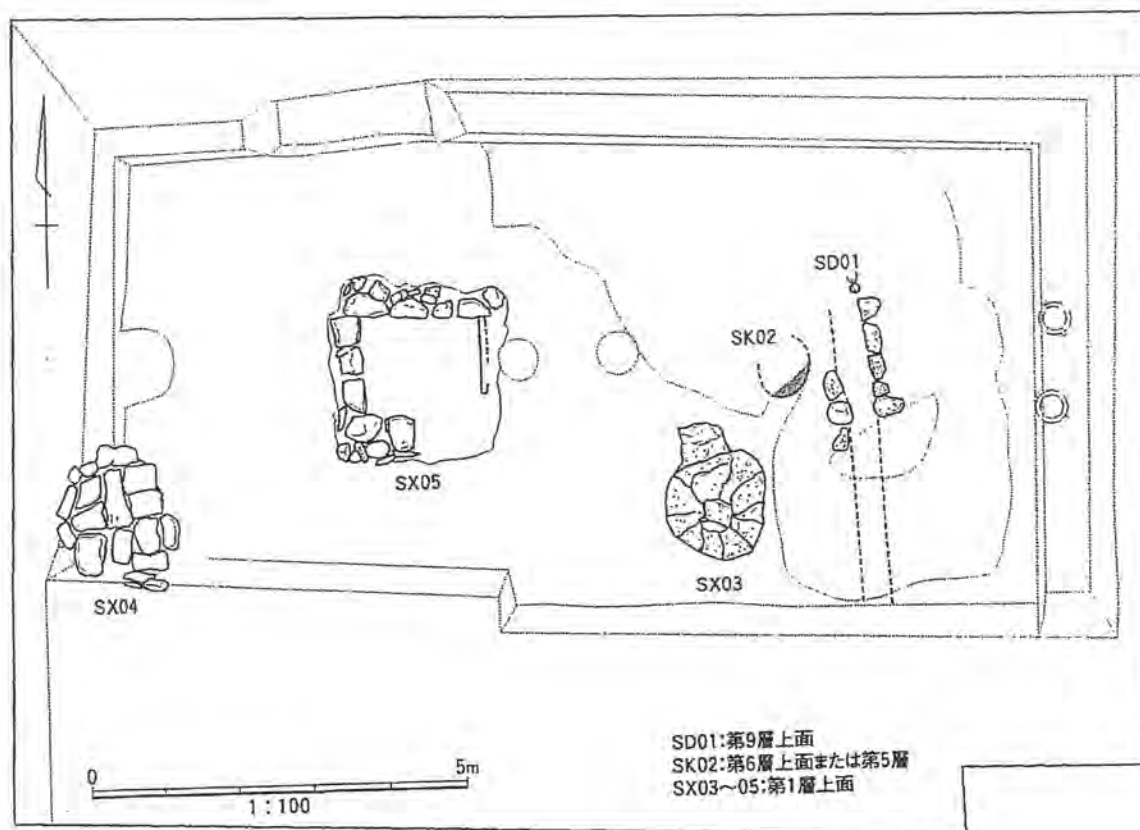


図5 主要遺構平面図

とみられる。それ以後、地層断面に連続してみられる南北溝は、屋敷地内の小区画に係わる可能性が高いが、近世初期の屋敷境が踏襲されたのかもしれない。

c. 徳川後期以後の遺構

石組基礎：第1層上面のSX03とSX04(図5)はいずれもケンチ石を組み合わせて2～3段積み上げ、隙間を漆喰で固めたものである。03は東西1.25m、南北1.40mの規模で、一部にコンクリートによる補修の跡が見られ、北側に一石が倒れていた。04は東西・南北とも1.70mの規模だが、石組はやや雑である。両者は芯々で約8m離れているが、これらは柱の基礎とみられる。原因者側の話によると、先ごろ取り壊した建物には非常に大規模な柱が使われており、位置も大体合うとのことであった。鴻池本邸は天保8(1837)年の「大塩焼」で罹災したが、その際再建された建物か、またはさらに降る建物の柱基礎であろう。

石組穴倉：SX05はSX03・04と同時期かやや先行する石組穴倉の跡で、石組は最下段のみ残っていた。内法で東西1.55m、南北1.25mと小規模で、東南に階段があったものとみられる。

d. 各層出土の遺物

図6-1～19は各層準から出土した遺物である。1・2は第12a層の出土で、前者は土師器皿である。後者は肥前陶器皿で、いわゆる「皮鯨手」である。3～6は第11層からの出土である。3・4は手づくねの土師器皿であるが、5は回転ナデ・糸切り底の土師器皿である。6は肥前陶器皿で、目積跡はない。7～15は第10層(焼土層)から出土した。7・8は回転ナデ・底部糸切りの土師器皿で、9・

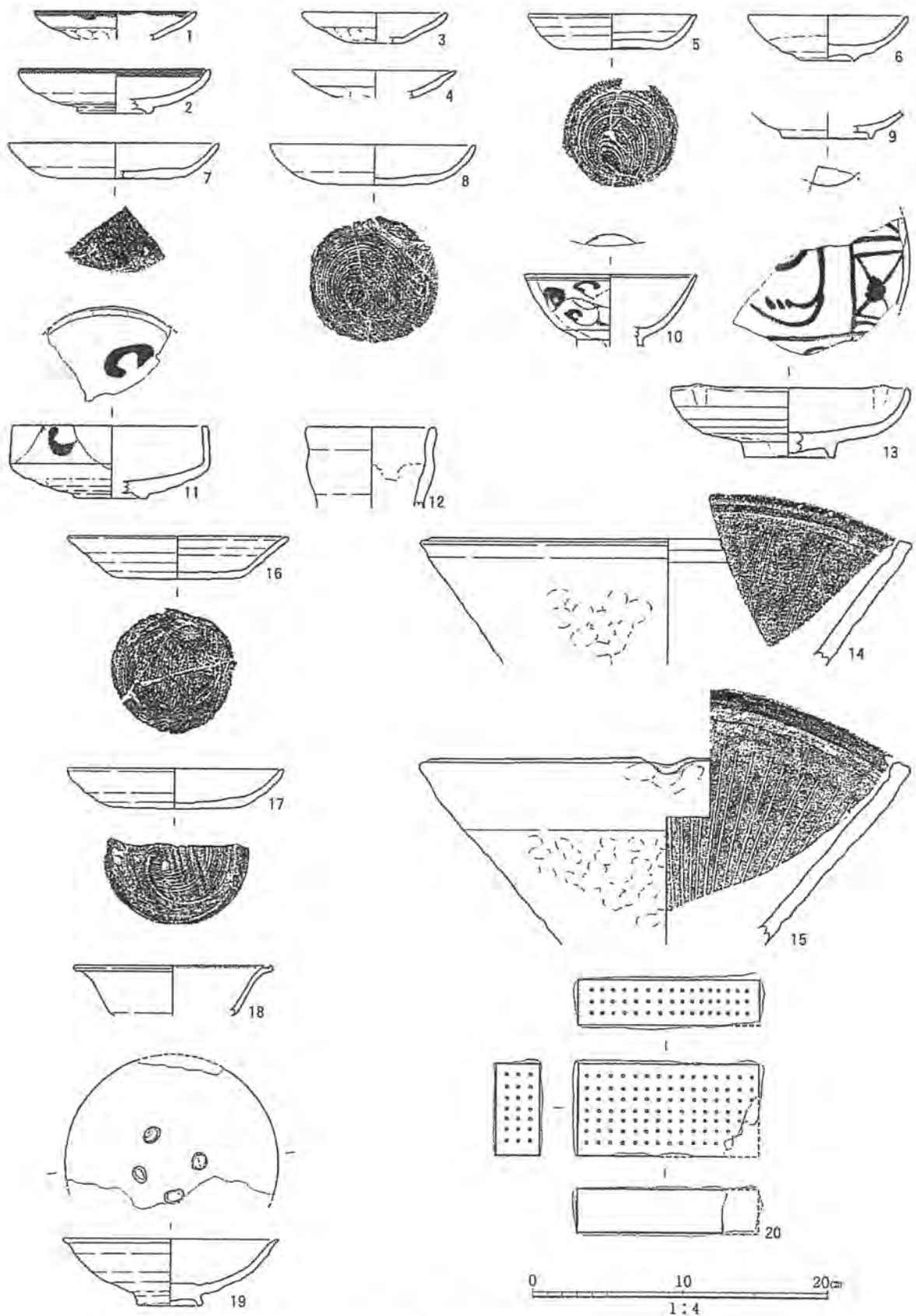


图6 遗物实测图

第12a层 (1·2)、第11层 (3~6)、第10层 (7~15)
 第9层 (16·17)、第8层 (18·19)、SK02 (20)

10は青花である。10は漳州窯系の碗である。11～13は肥前陶器で、11・13はいわゆる絵唐津であるが、12はよくわからない。壺であろうか。14・15は丹波焼播鉢で、14は播目が櫛状の工具で施されている。この焼土層の遺物は豊臣後期の特徴に近似するが、14の播鉢はそれより新しい。16・17も回転ナデ・底部糸切の土師器皿で、第9層から出土した。第8層からは18・19が出土した。前者の肥前陶器溝縁皿は深手で薄く、17世紀第2四半期に位置づけられる。後者の皿は口縁が端反りで目積跡は胎土目であり、かつ全面施釉されている。このような特徴をもつ陶器は、類例が少ないが、一応、肥前産と考えられる。

3)まとめ

今回の調査では明確な大坂冬ノ陣の焼土層を確認することができなかったが、皮鯨手と呼ばれる古手の肥前陶器皿2が出土した第12a層は、豊臣後期段階の整地層かと思われる。その後、第10層・8層と、17世紀前半の短期間のうちに、この地は相次いで火災に遭っていること、また屋敷割も行われていたことが判明した。

ただ、それ以後の鴻池本邸の様相があまり明確に捉えられなかったことが惜まれる。とはいえ、珍しい銅製品20が出土し、また19世紀の巨大な柱基礎を検出できたことは大きな成果であった。今後もこうした事例を積み重ね、調査例の少ない船場北端部の様相が明らかとなっていくことが期待される。

調査風景
(東から)



近世～近代の遺構面
手前からSX03、05、04
(東から)



近世～近代の遺構面
右からSX04、05、03
(北西から)



南壁の地層断面
(北から)



敷地境の溝SD01
(南から)



SD01(最下層)と近世の敷地境
地層断面
(北から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ07-8)報告書

調査箇所 大阪市中央区南久宝寺町3丁目14-1他
調査面積 24m²
調査期間 平成20年2月5日～2月14日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の南西端に位置し、北西ではOJ05-9次調査が実施されている(図1)。OJ05-9次調査では、豊臣前～後期の土塀・ピット・溝を検出している。このことから、今回の調査では大坂城下町南西部の状況を明らかにすることが期待された。

今回は、敷地内北側に調査区を設定して調査を実施した(図2)。

調査の方法は、近・現代層および江戸時代後期の盛土層を重機で掘削し、それ以下については人力で掘削した。

なお、本報告で用いた指北記号は図1は座標北でその他は磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第0層：近代以降の盛土で、層厚は120cm前後である。

第1層：にぶい黄褐色細粒砂質シルトなどの盛土で、層厚は110cm前後である。徳川期後期以降の盛土層で、今回の調査ではこの層の下面まで重機で掘削した。

第2層：黒褐色細粒砂質シルト層で、層厚は40cm前後の盛土層である。この上面からSK09～16などを検出した。

第3層：にぶい黄色細粒砂の盛土層で、層厚は最大40cmである。この上面からSD02、SK03～05などを検出した。

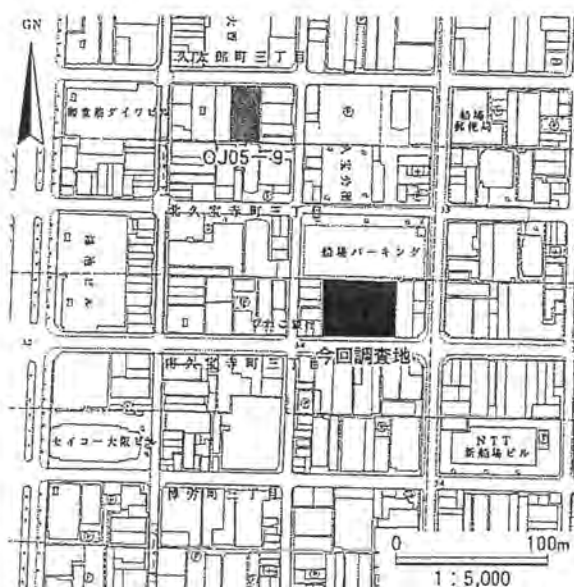


図1 調査地位置図

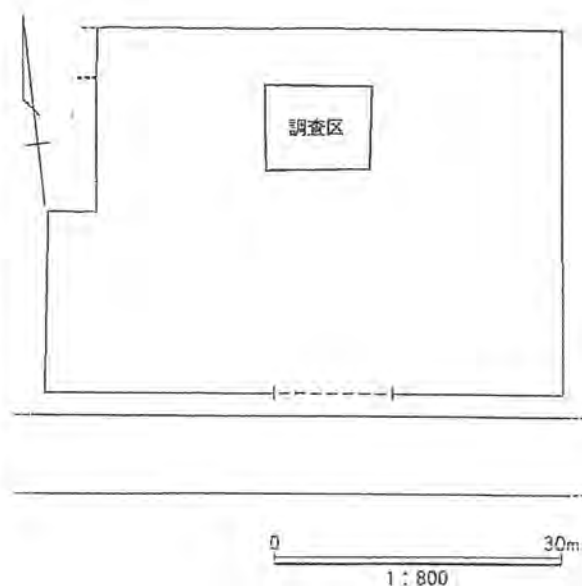


図2 調査区位置図

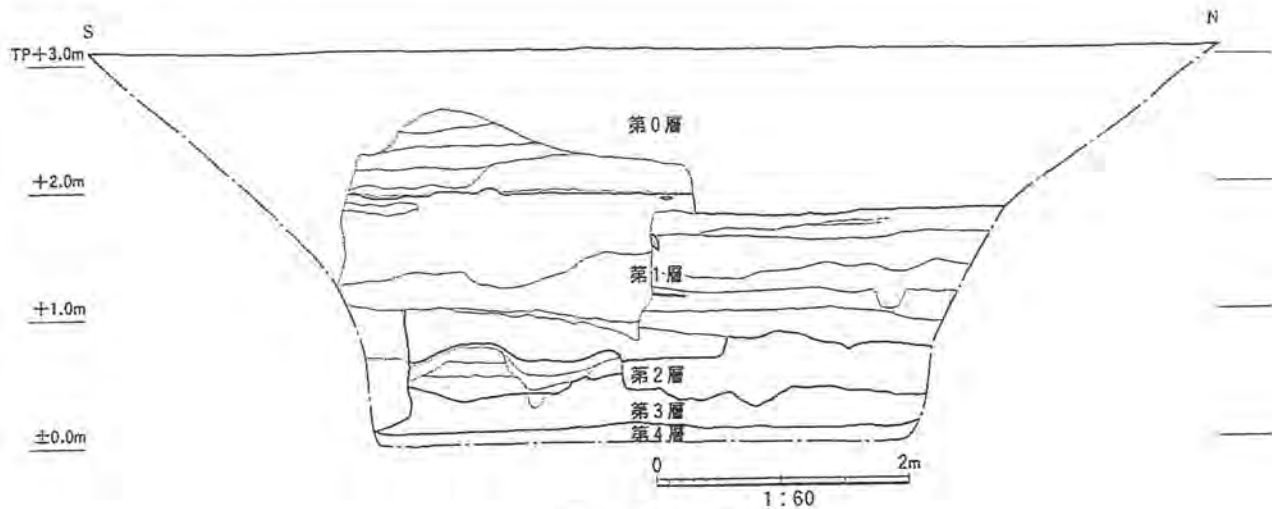


図3 西壁断面図

第4層：浅黄橙色細粒砂層である。トレンチ調査で層厚40cm以上の堆積であることを確認したが、それ以下については湧水が激しく確認できなかった。第4層上面からSK01を検出した。

ii) 遺構と遺物(図5～8)

今回検出した遺構はすべて近世である。

a. 第4層上面の遺構と遺物(図5・8)

SK01 東西2.2m、南北3.0mの楕円形の土塋である。深さは0.2mで、埋土はにぶい黄色細粒砂である。肥前陶器1・土錘2が出土した。1は碗で上部は欠損しているが、豊臣期であろうか。2は外面を強いナデで円柱状に成形している。直径3.0cm、長さ9.1cmで、孔の直径は0.9cmである。

b. 第3層上面の遺構と遺物(図6・8)

第2層の遺構などで攪乱されているものが多いが、ピット・溝・土塋などを検出した。

SD02 幅0.3mの南北方向の溝で、長さ1.0mを確認した。深さは0.1mで埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SK03 径0.4mのほぼ円形の土塋で、深さは0.2mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SK04 径0.4mのほぼ円形の土塋で、深さは0.1mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。

SK05 南側の一部が確認された土塋である。東西0.5m以上で、深さは0.2mである。埋土は、他の遺構と同様の黒褐色細粒砂質シルトである。肥前磁器碗3が出土した。3は口径10.6cm、器高12.8cmで、外面に草花文を描く。17世紀後半であろう。

SP06～08 直径は0.2m前後、深さ0.1m前後のピットで、東部で検出した。埋土は他の遺構と同様である。

c. 第2層上面の遺構と遺物(図7・8)

第2層上面からは土塋・溝を検出した。今回の調査では、第2

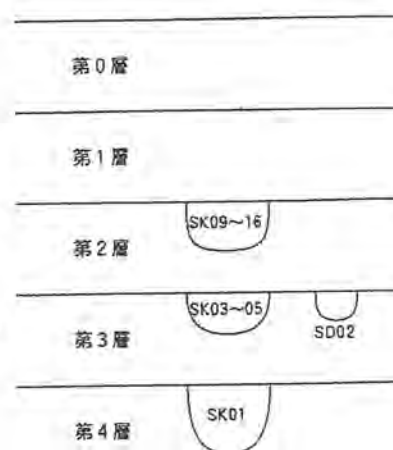


図4 地層と遺構の関係図

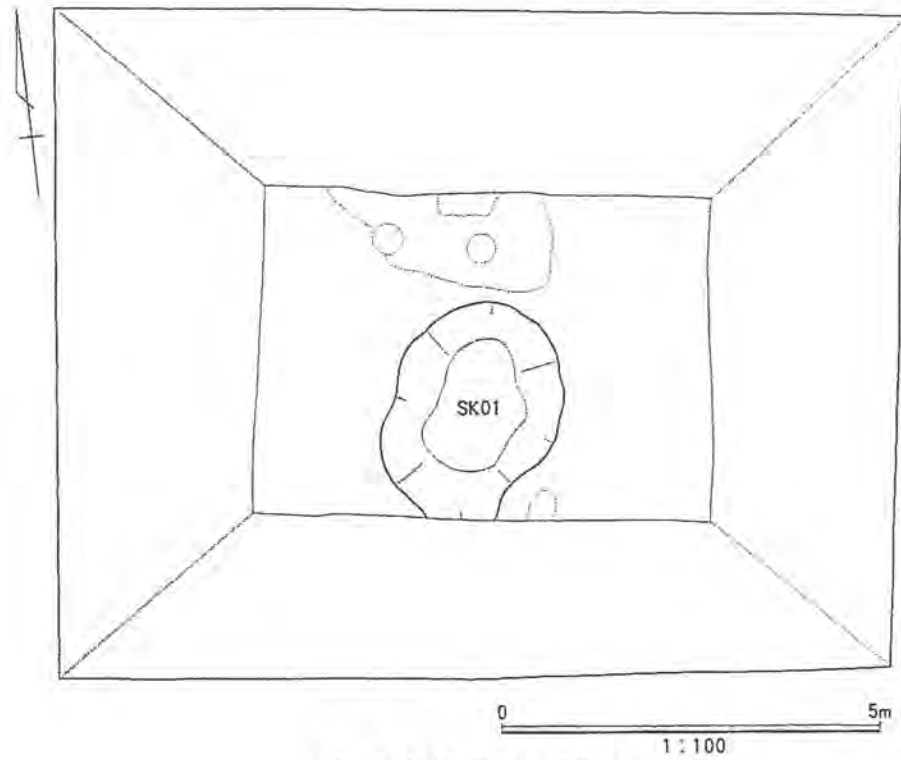


図5 第4層上面の遺構平面図

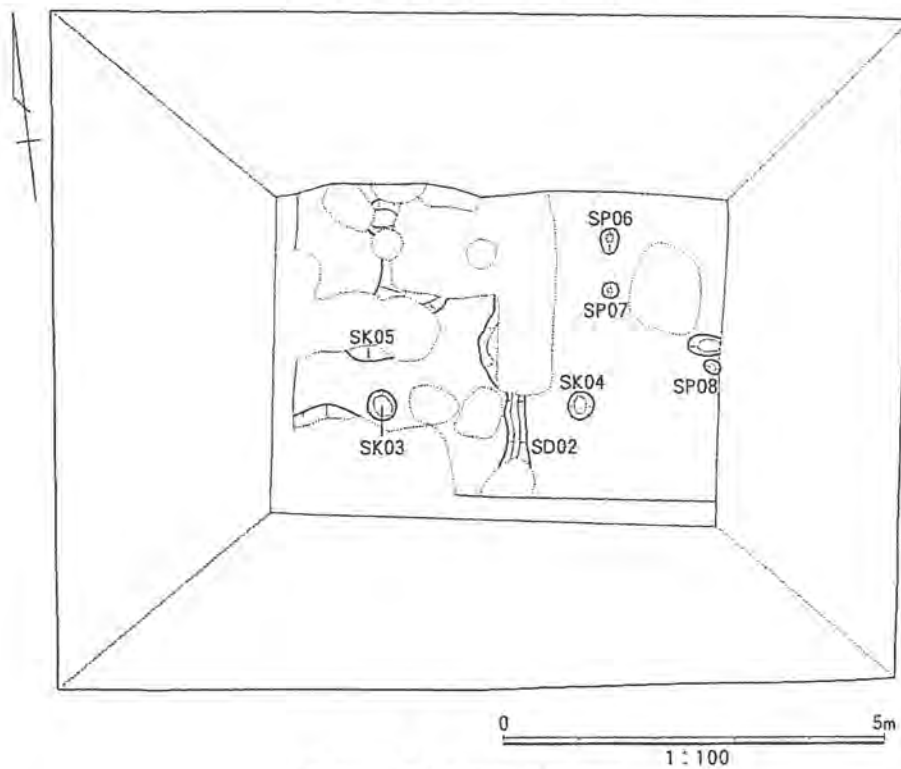


図6 第3層上面の遺構平面図

層上面まで重機で掘削したので、17～18世紀の遺構を含む。以下、おもな遺構について述べる。

SK09 北部で検出した東西方向の長方形を呈する土壇である。後述するSK13との前後関係については、コンクリート杭で攪乱されていたため確定できなかった。東西2.1m、南北1.1mで、深さは0.4mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。土人形4、丹波焼壺5が出土した。4は俵を背負った

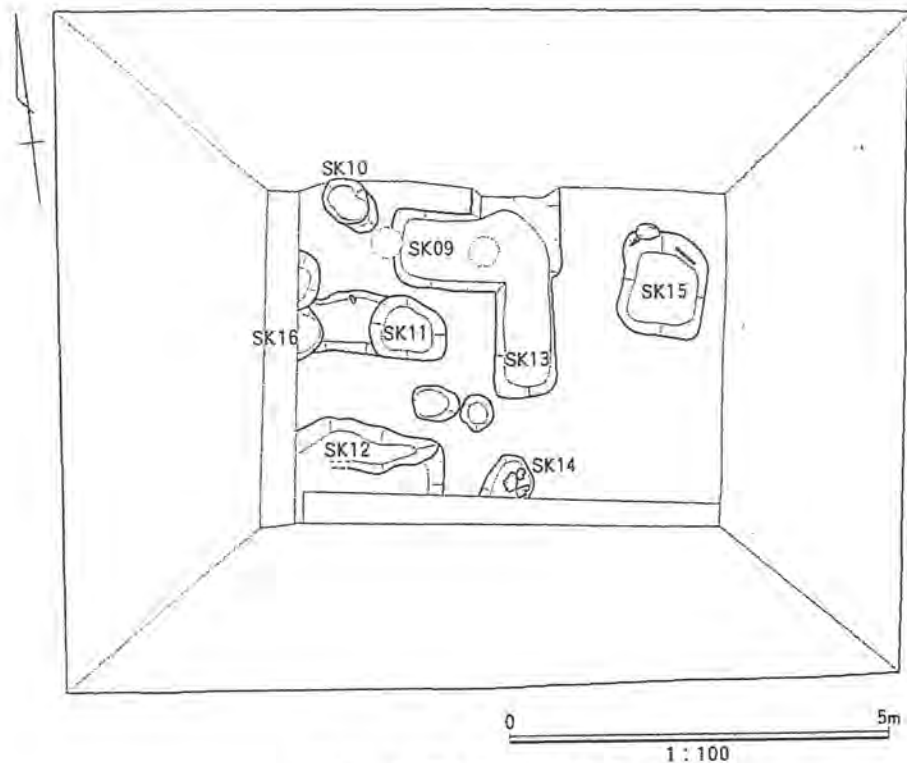


図7 第2層上面の遺構平面図

馬の人形で、対称の型で作って、合体して成形している。5は丹波焼のお歯黒壺で、器高10.2cmの平底である。口径は6.2cmで片口である。内部には鉄の塊が付着している。

SK10 0.7m×0.6mの楕円形を呈する土壌で、深さは0.5mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトである。土師器蓋6が出土した。6は火入れの蓋で、口径19.8cmで、中央に径3.9cmの扁平なつまみが付く。

SK11 東西1.0m、南北0.8mの楕円形を呈する土壌で、深さは0.4mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、微細な木片を多く含んでいた。瓦質の灯火具7、瀬戸美濃陶器碗8、肥前磁器碗9が出土した。7は瓦燈の上部で、端部の径は10.0cmである。8はほぼ完形の口径12.0cm、器高7.8cmの丸碗で、18世紀代のものであろう。9は復元口径11.0cm、器高6.5cmで、外面に一重網目文を描くもので、17世紀中葉である。

SK12 東南部で検出した長方形を呈する土壌である。東西1.9m以上、南北0.7m以上で、深さは0.4mである。埋土はオリーブ黒色細粒砂質シルトで、炭化物を含んでいる。肥前磁器碗10・11が出土した。10は外面に一重網目文を描く碗で、口径10.4cm、器高7.4cmである。11は口径11.0cm、器高6.2cmで、高台内に崩れた字で「太明年製」と書く。この土壌の時期は、18世紀前半であろう。

SK13 SK09に接する南北方向の長方形を呈する土壌である。東西0.8m、南北2.6m以上で、深さは0.4mである。埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、炭や木片を含んでいる。肥前磁器油壺12、肥前磁器碗13、壺14が出土した。12は、色絵の油壺で、復元最大幅は9.4cmである。13は、口径9.6cm、器高6.6cmで、外面には丸文を描く。17世紀後半代のものである。14は小壺で下部を欠いている。

SK14 南端部で検出した土壌で、南半分は未検出である。東西0.7m、南北0.6m以上で、埋土は

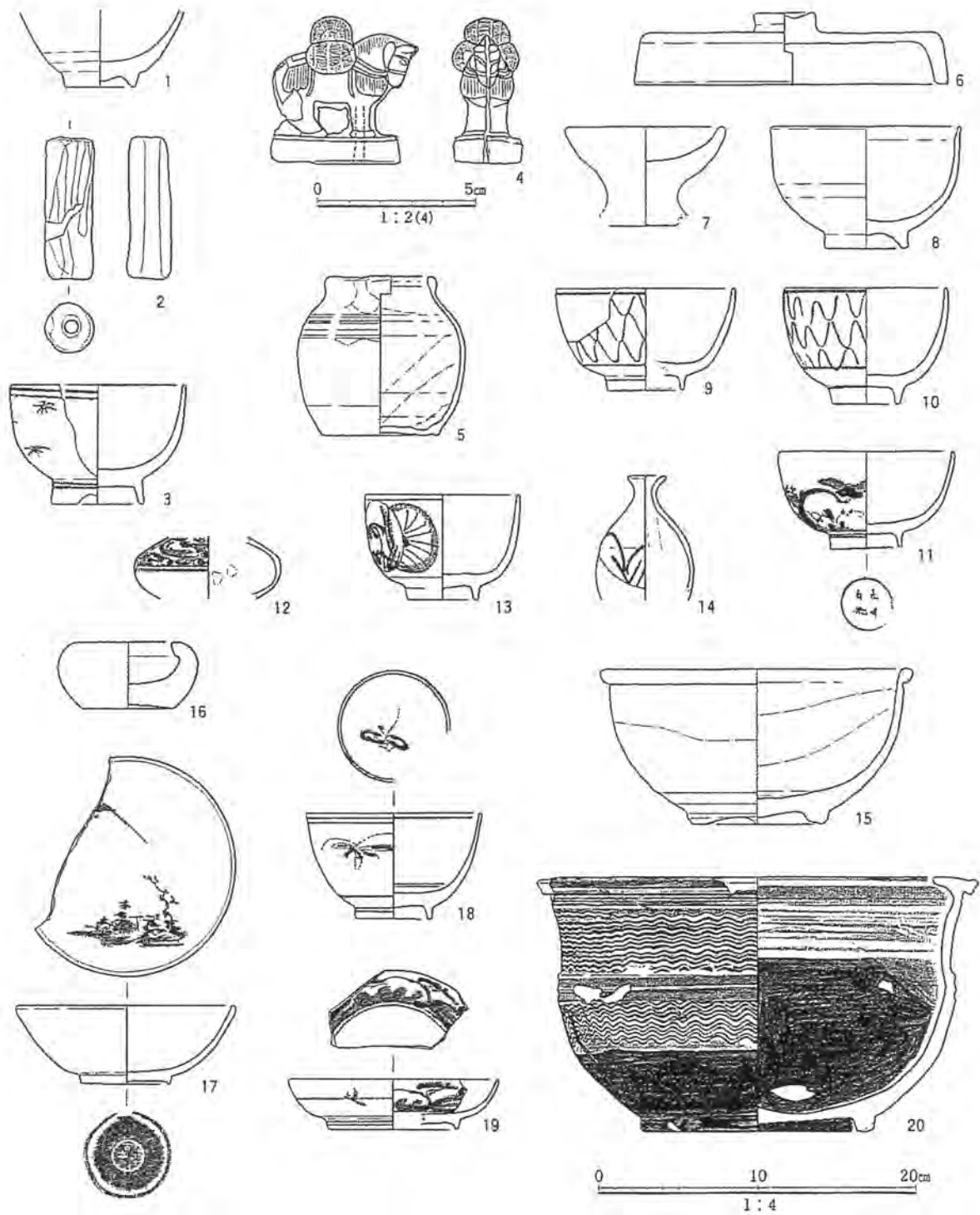


図8 出土遺物実測図

SK01(1・2)、SK05(3)、SK09(4・5)、SK10(6)、SK11(7～9)、SK12(10・11)、SK13(12～14)、SK14(15)、
第2層(16～20)

黒褐色細粒砂質シルトで、深さは0.2mである。底から20～30cm大の石が3点出土したが、上面が平坦でないことから礎石ではないと考えられる。中国南方産陶器鉢15が出土した。15は鉄釉の鉢で、釉は内面にまだらに掛けられ、外面は上部にのみ施される。復元口径19.8cm、器高9.8cmである。17世紀前半のものであろう。

SK15 東部で検出した東西1.0m、南北1.4mの方形の土壌である。深さは0.2mで、埋土は黒褐色細粒砂質シルトで、微細な木片を多く含んでいる。

SK16 西部で検出した円形と推定される土壌で、東半部を検出した。直径は0.7mと推定され、深さは0.2mである。両端を切断した大型ほ乳類の骨幹部が1点出土した。

d. 第2層出土遺物(図8)

焼塩壺16、陶器皿17、肥前陶器甕20、肥前磁器碗18・皿19が出土した。16は完形で、口径6.0cm、器高4.2cmを測り、器壁の厚いものである。17は口径13.8cm、器高5.0cmの皿で、内面には山水を描き、高台内には「小松吉」の刻印を捺す。高台が低く、胎土も灰褐色で、肥前産のものとは決められない。京焼である可能性も考えられる。18は、口径10.9cm、器高6.7cmで、内外面に草花文を描く。17世紀前半代であろう。19は口径13.0cm、器高3.2cmを測る。20は口径23.0cm、器高16.0cmで、褐色の胎土に白泥で波状文を描いた刷毛目の小型の甕である。18世紀前半代のものである。

3)まとめ

今回の調査での第4層の細粒砂層は、OJ05-9次調査の第6層に相当すると考えられるが、豊臣期の顕著な遺構は認められなかった。今回の調査地は、建物の裏庭に該当する箇所のように、豊臣期の確実な建物等の遺構は検出しなかったが、今後の調査によって大坂城下町の南西端付近の様子が明らかになることが期待される。

機械掘削状況
(北西から)



第4層上面の遺構
(西から)



第2層上面の遺構
(西から)



大坂城下町跡発掘調査(OJ07-10)報告書

調査個所 大阪市中央区淡路町1丁目21-5
調査面積 38m²
調査期間 平成20年2月22日～2月27日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大坂城下町跡の中央部に位置し、周辺では多くの発掘調査が実施されている(図1)。南側に位置する調査区(OJ92-20次)では豊臣期の瓦溜・建物跡などが検出された。

今回の調査は、敷地内北側に調査区を設定し(図2)、周辺調査の結果と当地での大阪市教育委員会による試掘調査で地表下2mまで江戸後期以降の堆積層と判断されたため、地表下2mまで重機掘削を行った後に開始し、以下は人力で掘削した。

また、調査開始時には壁面の崩落防止のために横矢板が設置されていたため、掘削面より上の地層堆積状況は確認していない。

なお、本報告で用いた指北記号は図1は座標北で、その他は磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序

先述したように、地表下2m以下の層序を確認した(図3・4)。

第0層：重機で掘削した近世以降の地層。

第1層：褐色細粒砂層で、層厚は40cm前後の盛土層である。層内からの出土遺物はないが近世初め頃の盛土層であろうか。この層の上面でSK04~09、SE10を確認した。

第2層：暗褐色細粒砂層で層厚は20cm前後の盛土層である。この上面でSK01~03を検出した。

第3層：褐色細粒砂の堆積層で、層厚は30cm以上あり、下限は確かめていない。

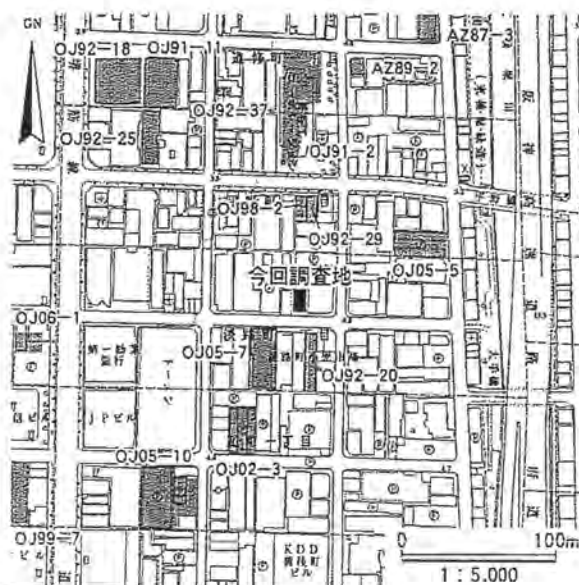


図1 調査地位置図

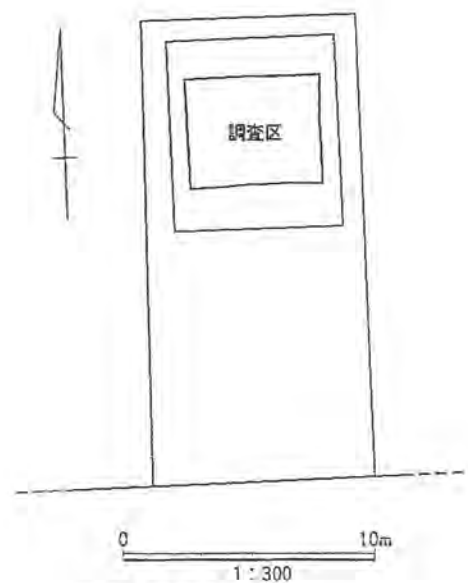


図2 調査区位置図

ii) 遺構と遺物

検出した遺構は全て近世以降のものである。(図4～7)

第2層上面の遺構と遺物(図4・5・7)

SK01 北東隅で検出した1.1m×1.8m以上の不定形な土塋である。深さは0.4mで、埋土は褐色細粒砂であった。中国製白磁皿3が出土した。3は復元口径12.8cm、器高3.1cmで16世紀代のものであろう。

SK02 北西部で検出した土塋で、楕円形を呈する。1.2m×0.6m以上で、深さは約0.2mである。埋土は褐色細粒砂である。

SK03 西部で検出した円形の土塋で、径約0.3m、深さは約0.3mである。埋土は、SK01・02と同様に褐色細粒砂である。

第2層出土遺物(図7)

1は須恵器壺の小片で、外面はタタキで整形する。復元口径は26.6cmである。2は瀬戸美濃焼陶器皿の底部で、豊臣後期に属する。

第1層上面の遺構と遺物(図4・6・7)

第1層上面では、土塋などの遺構を確認したが、前述のように上部を重機で掘削したため、遺構の正確な構築面は不明である。ここでは、比較的古いと思われるものや遺物が出土した遺構について記述する。

SK04 西端で検出した土塋で、0.8m×0.4m以上の楕円形を呈する。深さは約0.3mで埋土は褐色細粒砂である。

SK05 北西部で一部を検出した土塋で、東西0.7m以上、南北0.8m以上である。深さは約0.9mで、埋土は褐色細粒砂である。青花皿4が出土した。4は景德鎮製で16世紀代のものであろう。

SK06 北部で検出した土塋で、東西0.7m、南北0.7m以上である。深さは約0.5mで、埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。ニホンジカの脛骨、イノシシの肩甲骨・下顎骨が出土した。

SK07 SK06の東で検出した土塋で、東西0.6m、南北0.8m以上である。深さは0.3mで埋土は褐色細粒砂である。

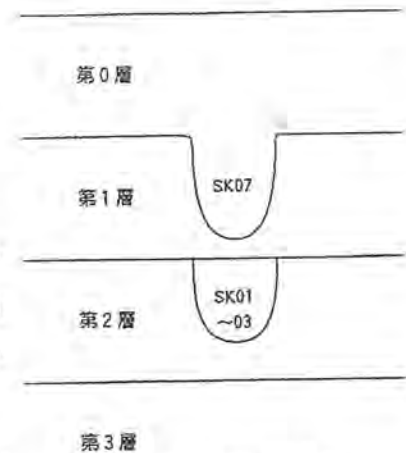


図3 地層と遺構の関係図



図4 北壁断面図

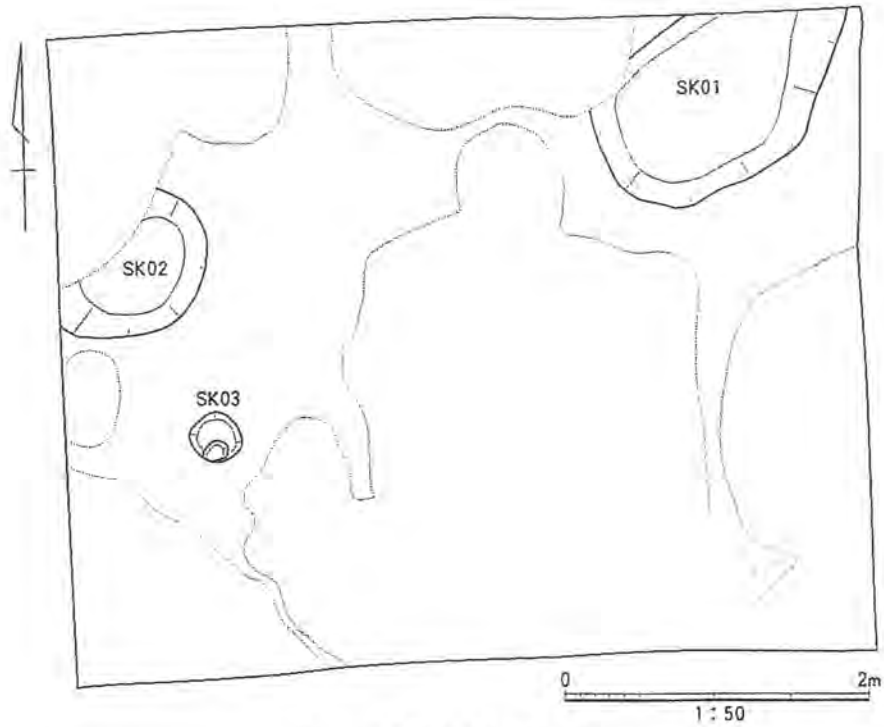


図5 第2層上面遺構平面図

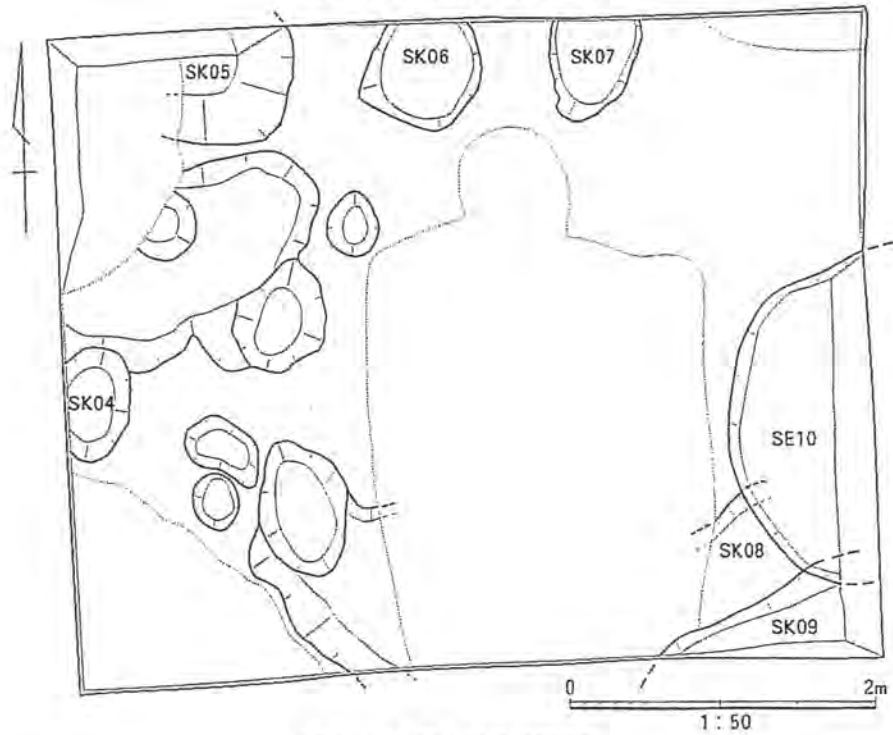


図6 第1層上面遺構平面図

SK09 南東隅で検出した土壌である。重複関係からSE10より古いものである。埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。17世紀中頃の肥前磁器染付皿5が出土している。

SE10 東部で検出した遺構で、その形態と壁面が垂直に近いことから井戸と思われる。直径は2.2m以上で、埋土は暗褐色細粒砂質シルトである。深さについては、工事深度との関係で約0.7mまでを確認したのみで、井戸側等については不明である。

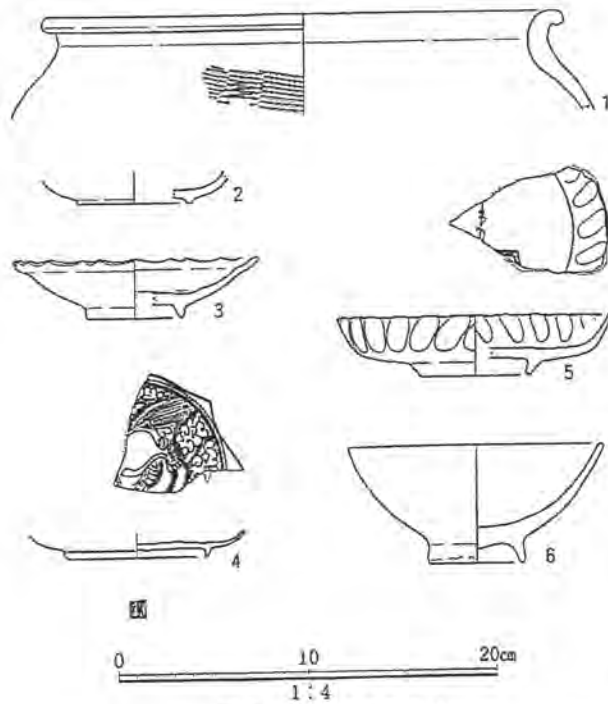


図 7 出土遺物実測図

第2層(1・2)、SK01(3)、SK05(4)、SK09(5)、第0層(6)

第0層出土の遺物(図7)

調査開始時に掘削土中から採集したほぼ完形の肥前陶器碗6がある。6は17世紀代のものである。

3)まとめ

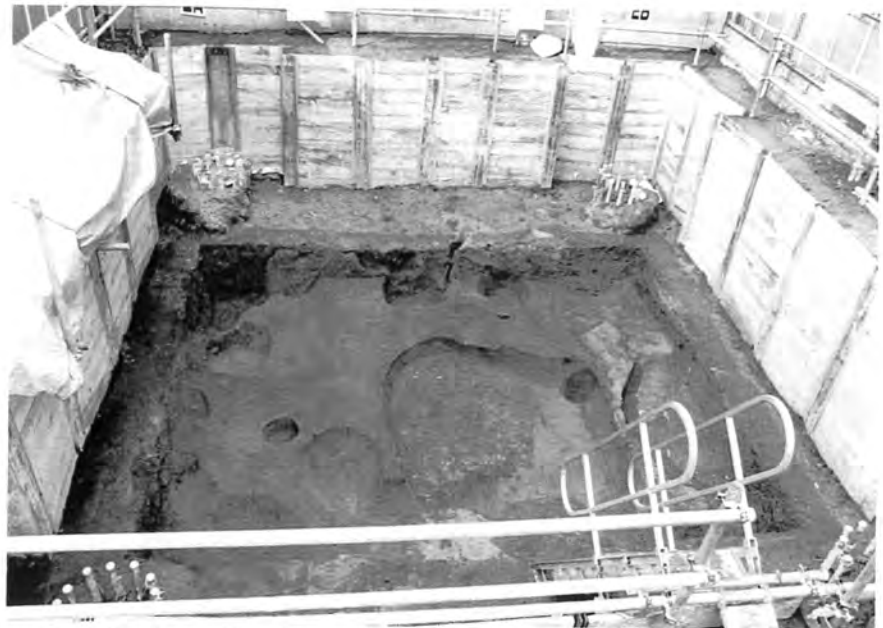
今回の調査では、OJ92-20次調査で検出された豊臣後期の遺構は認められなかった。ただ、第2層中から豊臣後期や中世の遺物が出土していることから、近くに当該時期の遺構の存在が想定される。

また、SK06からイノシシ・ニホンジカの骨が同時に出土したことは、例が少なく注目される。伴出した陶磁器が細片のため、正確な時期

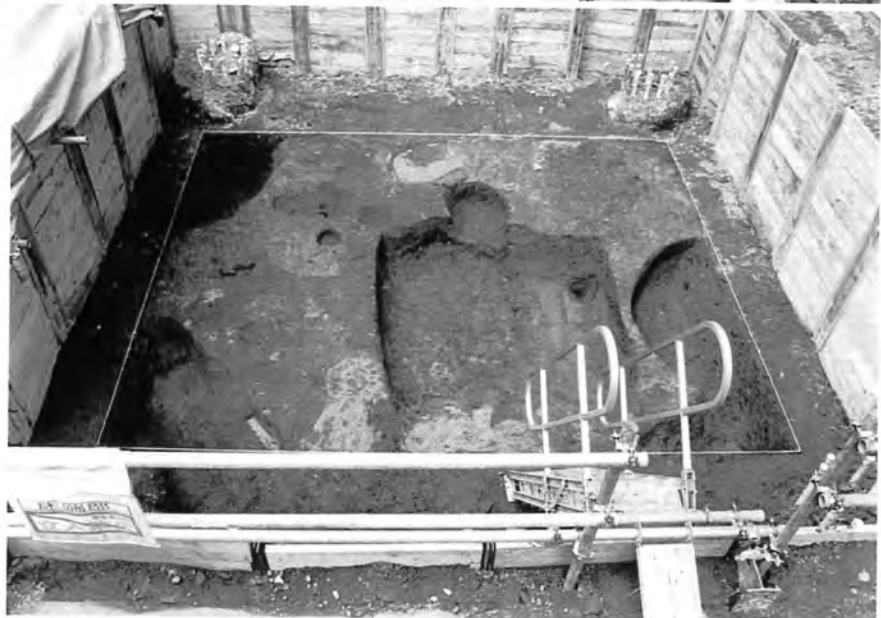
は決定し難いが、少なくとも17世紀前後であり、今後の調査において同様な例があれば注目されよう。

今回は狭小な調査であったが、今後行われる周辺の調査にとって、貴重な資料を提供したといえよう。

第2層上面の遺構
(南から)



第1層上面の遺構
検出状況(南から)



北壁の地層堆積状況
(南から)



Ⅲ 西 区

埋蔵文化財発掘調査(TL07-1)報告書

調査箇所 大阪市西区土佐堀2丁目2-7
調査面積 100m²
調査期間 平成19年11月1日～11月13日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

当調査地周辺、すなわち土佐堀・中之島・堂島周辺にかけては、「天下の台所」と称された大坂の経済の中心地であり、日本全国の各藩が米など領内の産物を貯蔵・販売するための蔵屋敷が軒を連ねていた。調査地は摂津・尼崎藩が青山氏時代(1635～1711年)に蔵屋敷を構えていた地に当り、以後は古絵図を見るかぎり、伊予・新谷(にいのや)藩蔵屋敷や町屋が立地していたと思われる。

2007年3月10日に大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下90cmで江戸時代の遺構面を確認したことから、本調査を実施することになり、同年11月1日から13日まで調査を行った。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±0mとしている。また、平面図は磁北を基準に作図した。

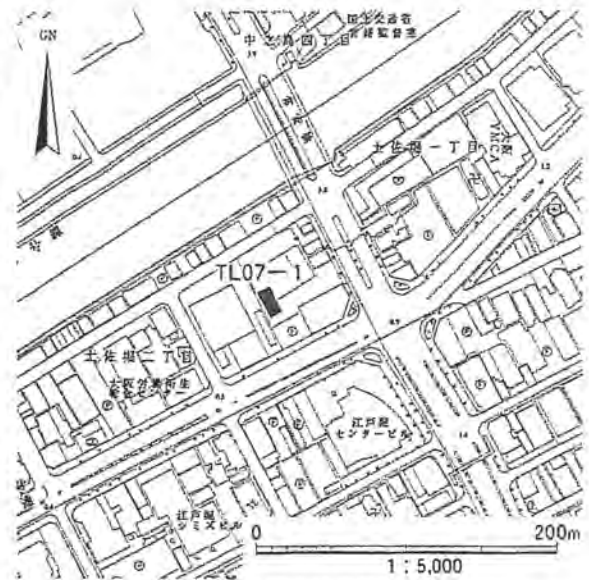


図1 調査地位位置図

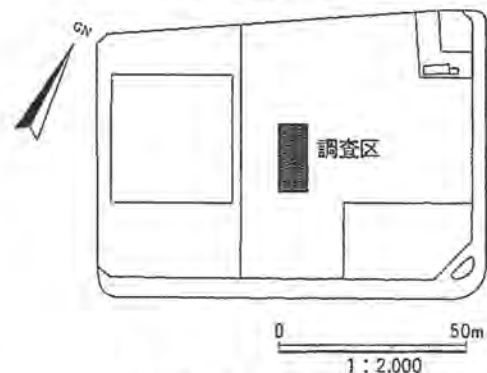


図2 調査区配置図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・7～9)

現代攪乱により上部層は欠失した部分が多い。またTP-0.4m以下は出水のため調査は不可能だった。

第0層：層厚50～120cmの現代盛土層で、大半は最近のものである。

第1a層：層厚10～25cmのにおい黄色細礫混り粗粒砂層である。

第1b層：層厚15cmのにおい黄橙色シルトの焼土層である。

第1c層：層厚5～20cmの炭を含むにおい黄色細粒砂層である。

第2a層：層厚15～40cmの灰黄褐色シルト偽礫を含むオリーブ褐色中粒砂で、肥前磁器蓋7、碗53、肥前陶器碗14・56、瀬戸磁器皿51・52、瀬戸美濃焼甕58を含む。

第2b層：層厚5～25cmのオリーブ褐色シルト中粒砂で、瀬戸磁器器絵蓋54、肥前磁器碗55、軟質施釉陶器灯明皿57、軒平瓦40・

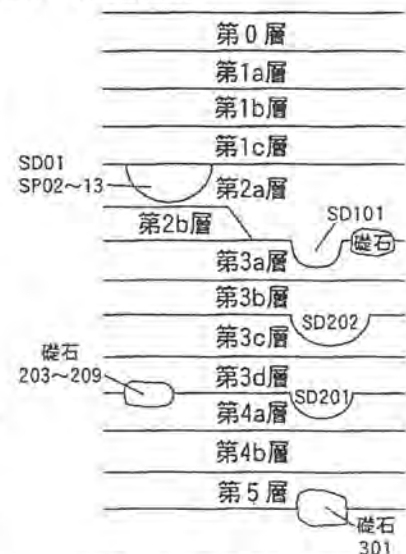


図3 地層と遺構の関係図

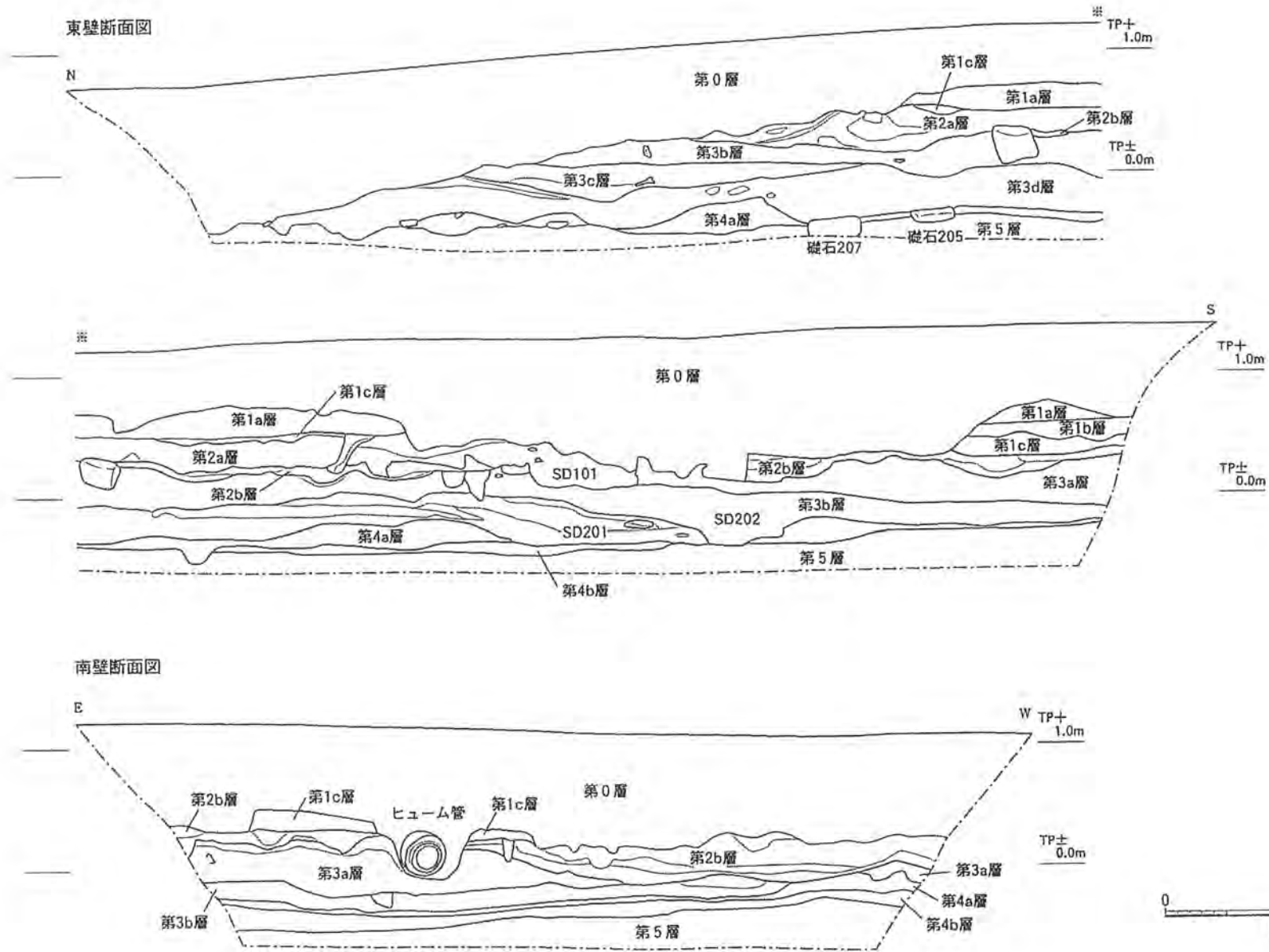


図4 東・南壁断面図

42・48が出土した。

第3a層：層厚10～50cmのにぶい褐色細粒砂層で、軒丸瓦37を含む。

第3b層：層厚10～50cmのにぶい褐色細粒砂層で、肥前磁器蓋1、碗4、香炉6、皿8・9、色絵人形鶏12、肥前陶器瓶13、碗15・16、火入17、土師皿21・22、焼塩壺27・28、丹波焼播鉢30、備前焼播鉢31・32、軒丸瓦37が出土した。

第3c層：層厚10～30cmのオリーブ褐色シルト偽礫を含む細粒砂層である。

第3d層：層厚15～40cmの黄褐色シルト偽礫を含む中粒砂層で、肥前磁器小杯2、碗3、仏飯器5、皿10、肥前陶器皿11、碗18・19、皿20、鉢29、土師皿23・24、ミニチュア鉢25、土人形船26、軒丸瓦35・36、軒平瓦39・41・43～45・47、雁振瓦50が出土した。

第4a層：層厚5～25cmのオリーブ褐色シルト層である。

第4b層：層厚5～10cmの黄褐色シルト偽礫を含む細粒砂層である。

第5層：層厚20cm以上のオリーブ褐色粗粒砂混りシルト層である。

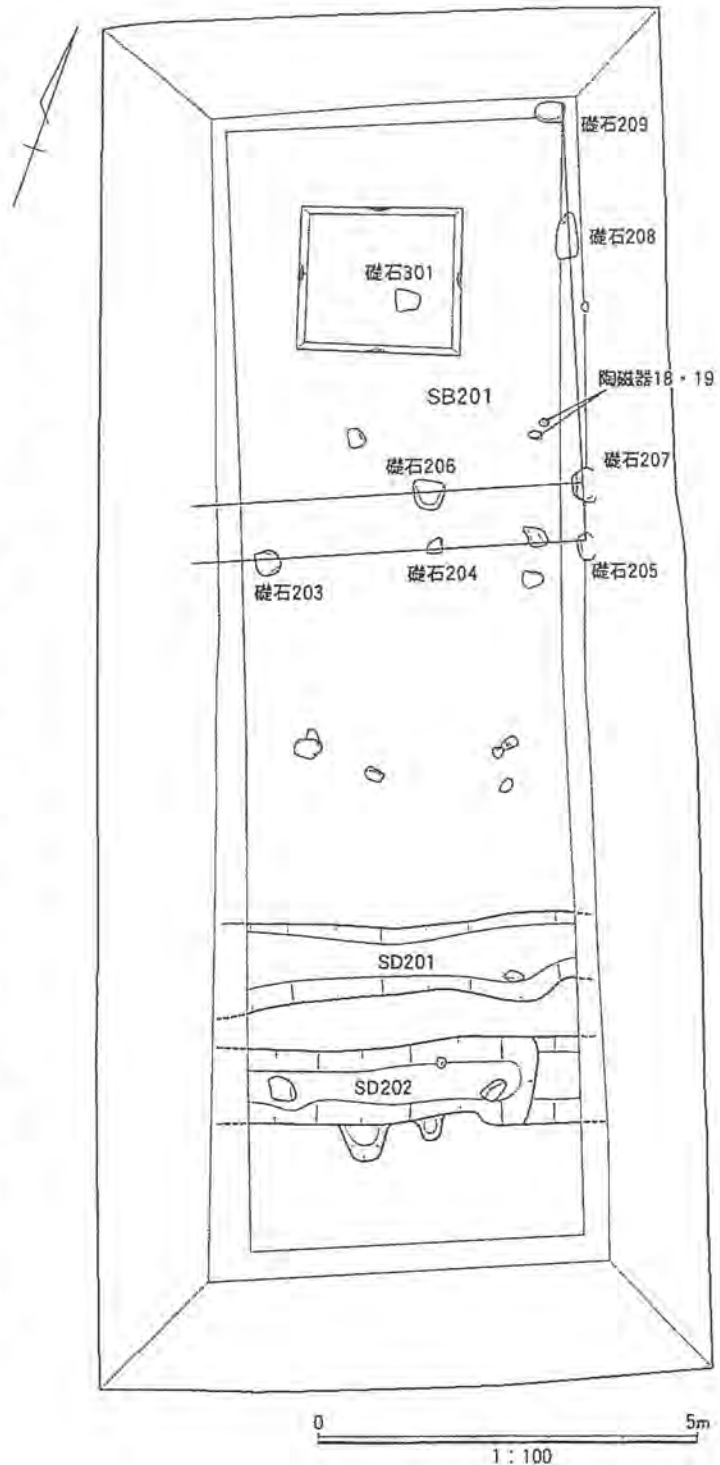


図5 第4a層上面平面図

ii) 遺構と遺物(図4～9)

a. 第4a層上面の遺構

南部でSD201・202の溝と北部でSB201の礎石建物を検出した。

SD201 幅0.8～1.2m、深さ0.2mの東西溝で、第3d層で埋まる。

SD202 幅1.0～1.2m、深さ0.2mの東西溝で、第3b層で埋まる。

SB201 南面に庇をもつ礎石建物である。南北3間、東西2間を確認した。

礎石の天端の標高を示すと、礎石203がTP-0.20m、礎石204がTP-0.25m、礎石205がTP-0.28m、礎石206がTP-0.28m、礎石207がTP-0.35m、礎石208がTP-0.30m、礎石209がTP-0.29mであ

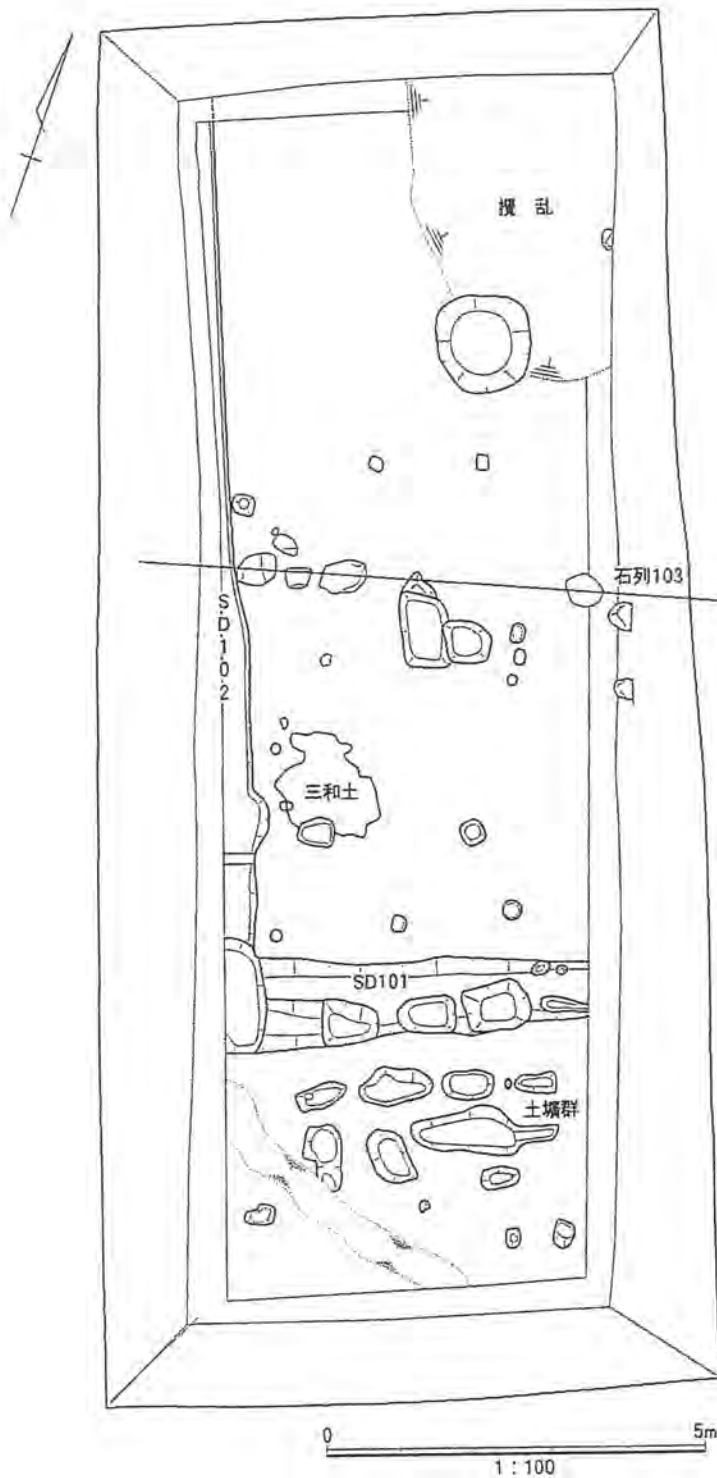


図6 第3a層上面平面図

うな重量物の基礎と考えられる。攪乱からも同種の石材が出土したから、長さ6m以上ある。

SD01 石列を据えるための掘形で北肩は不明瞭だが、幅1.3m程度と見られる。にぶい黄橙色細粒砂である。

SP02～SP13 石列の周囲に分布するピットで、平面が直径0.3～0.5mの円形・方形・楕円形、深さ0.1m前後である。埋土は明黄褐色シルト～中粒砂で、配置に規則性を見出しえない。

d. 遺物

る。ちなみに下層の第5層の途中で検出された礎石210がTP-0.56mであった。礎石の天端は多少の出入りはあるが、揃っているといえる。芯々間は東西柱筋が2.1mを基準にしているのに対して、南北柱筋は1.7m前後である。庇の出は0.8mを測る。

b. 第3a層上面の遺構

SD101 幅0.8～1.3m、深さ0.2mの東西溝で、第2a層で埋まる。底面に土塊状の凹凸が見られる。

SD102 長さ12.5m以上、幅0.4m以上、深さ0.3mで、指頭大の小石を詰めた南北暗渠である。

石列103 長径0.3～0.6mの石を東西に並べたもので、土塊状の凹みも石が据わっていた跡である。

三和土 貝殻の粉を混ぜたタタキ土が分布する。

土塊群 長径0.5～1.5m、深さ0.1m前後の不整楕円形の土塊が分布する。埋土は漆喰・貝殻の粉を含む明黄褐色細粒砂である。

c. 第2a層上面の遺構

調査区の南半は現代攪乱によって遺構が残っていない。

石列 一辺0.3～0.5mの方形の石を上面が水平になるよう東西方向に据えたものである。近代建物の躯体部のよ

図7～9で紹介したものは全て各層からの出土遺物である。

第3a～3d層は、5や11のように特徴が18世紀前半まで残るものもあるが、概ね17世紀末に納まる。また第2b層は第3a層上面の遺物を多く含むようである。軒平瓦39～44は豊臣時代後期によく見られる文様である。40・42は第2b層から出土したことから、既存の豊臣時代の建物を当地に移設した可能性も考えられる。第2a層は瀬戸磁器を含むことから19世紀の整地層と考えられる。

3) 考察

遺構面を3面調査した。すなわち第2a層、第3a層、第4a層上面である。各遺構面間は20～60cmの盛土で地上げされている。第3a～3d層は上面が北高南低で、北の土佐堀側から土砂を投入されたと見られる。層理面は土壌化されていないことから、作業工程での堆積と考えられる。第4b層上面はTP-0.2～0.4mと低く、その下層の礎石210は天端がTP-0.56mといよいよ低く、後世の地盤沈下も考慮に入れねばならないが、当地周辺はもと低湿地で、すぐには屋敷地になりかねるような土地であったのを、堀川の掘削や淀川の浚渫で盛土を得て地上げしたものと思われる。

阿波堀(15間[27m]幅)が1600(慶長5)年に掘られ(西横堀も慶長年間[1596～1615年]の開削)、次いで京町堀(19間[34.2m]幅)、江戸堀(13～18間[23.5～32.6m]幅)が1617(元和3)年、やや離れるが長堀が1625(寛永2)年、立売堀が1626(寛永3)年に掘られる。

ただ第3a～3d層に含まれる遺物に17世紀末のものが見られるから、上記の堀川掘削時の地上げは考えられない。時期的に該当するものは河村瑞賢による淀川本支流の改修である。第1回工事は1684

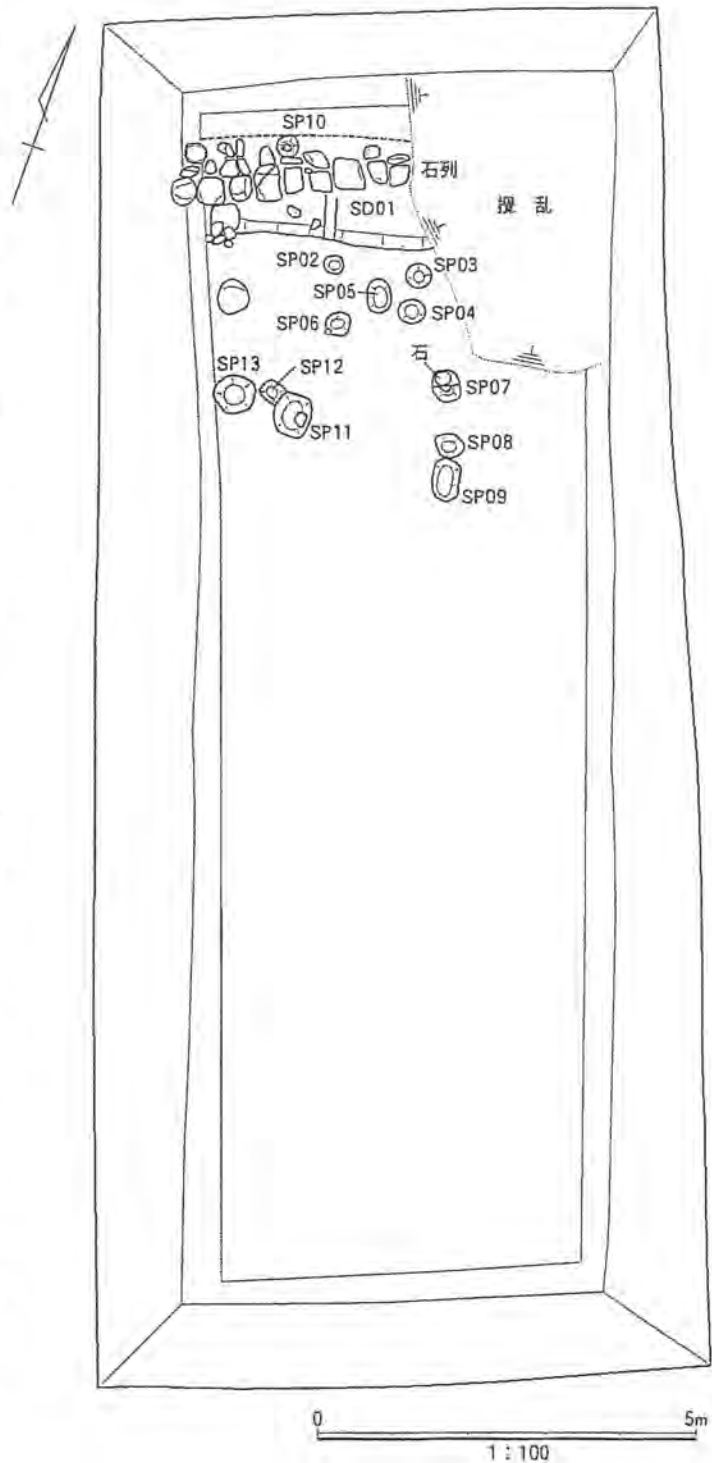


図7 第2a層上面平面図

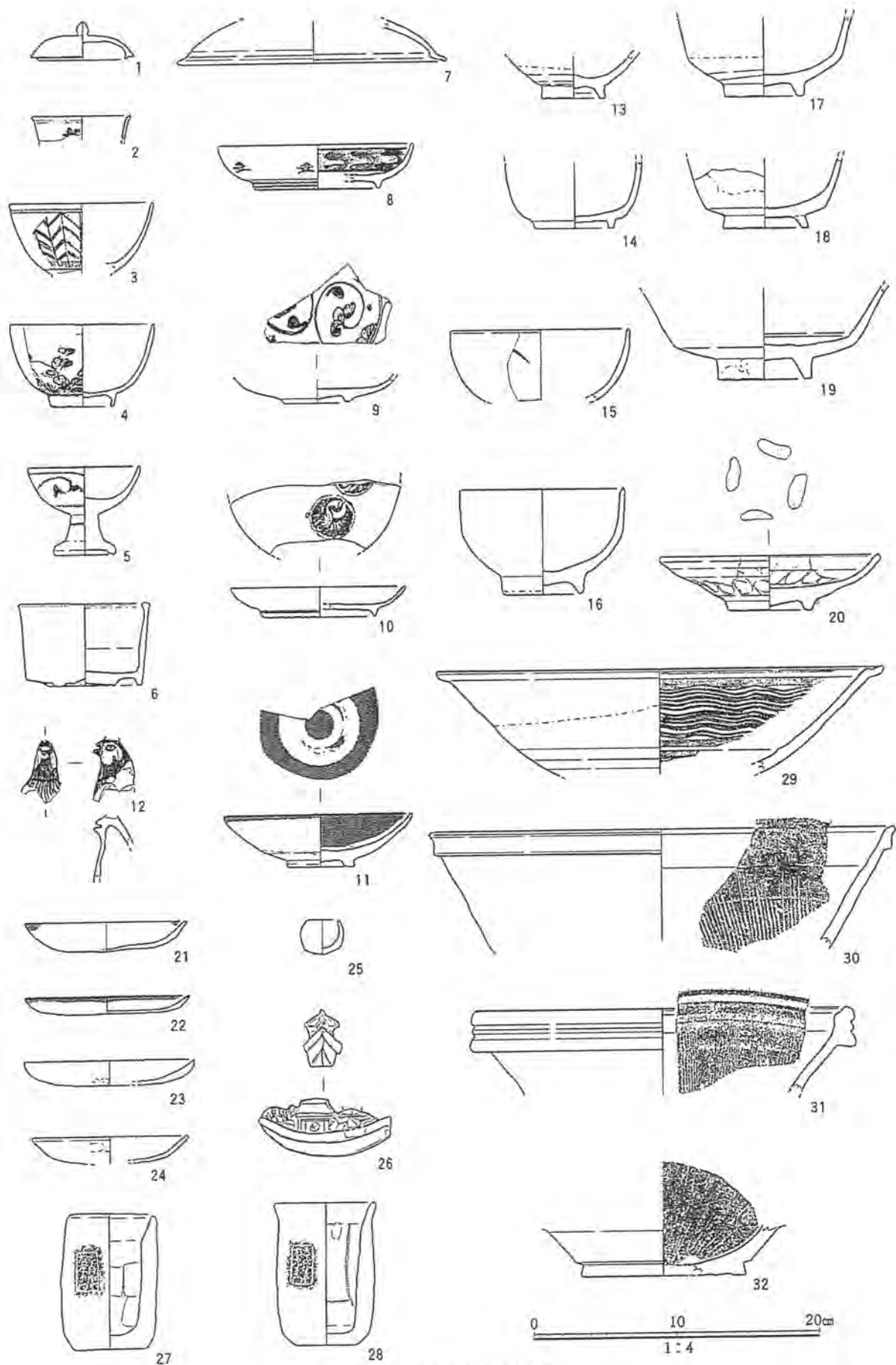


图8 遺物実測図(1)

第3b層(1·4·6·8·9·12·13·15~17·21·22·27·28·30~32)、
 第3d層(2·3·5·10·11·18~20·23~26·29)、第2a層(7·14)

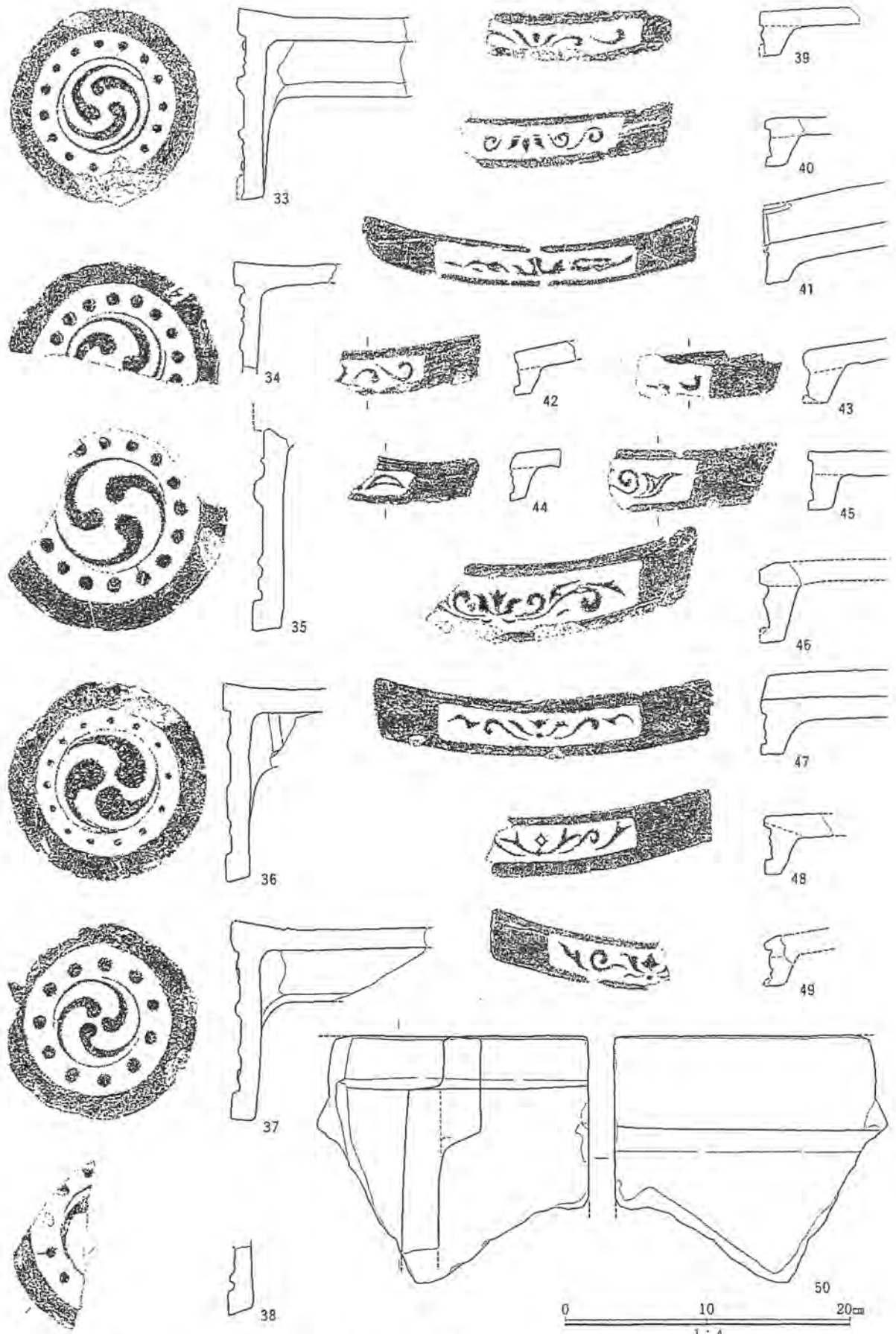


图9 遺物実測図(2)
 第3b層(33・34・38・46・49)、第3d層(35・36・39・41・43~45・47・50)、
 第3a層(37)、第2b層(40・42・48)

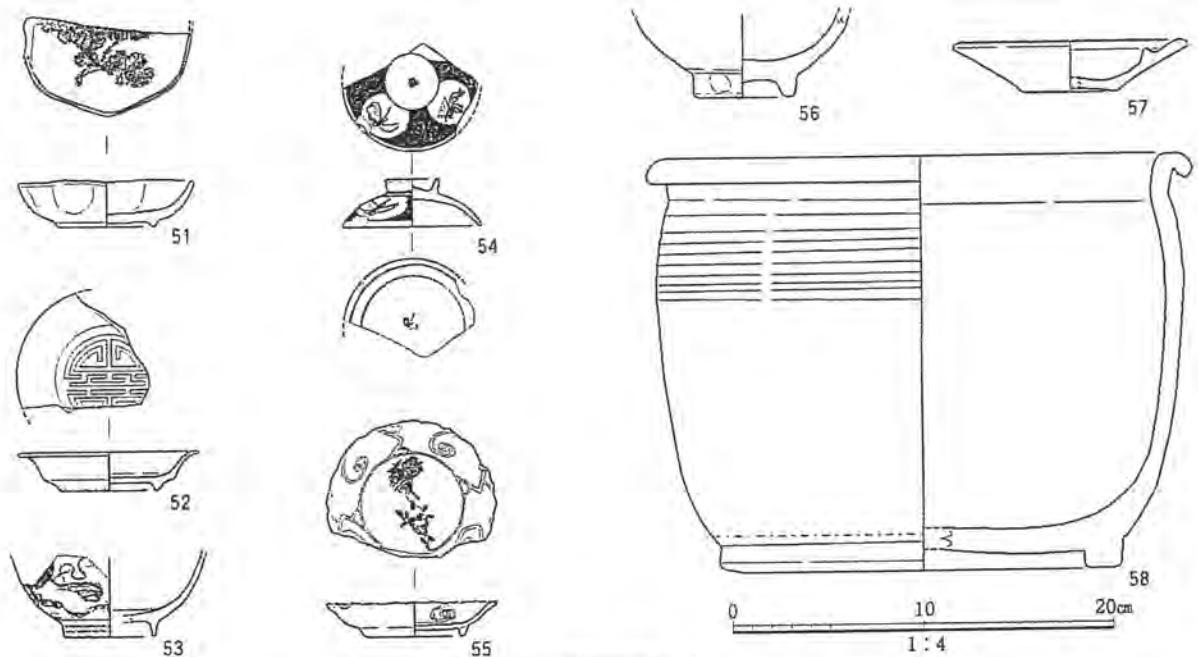


図10 遺物実測図(3)
第2a層(51~54・56・58)、第2b層(55・57)

(貞享元)年から4年まで、第2回が1698(元禄11)~99年である。この工事で大坂市中の諸川も改修されたから、可能性として挙げられる。大坂市中は豊臣時代に5千石であった石高が、松平忠明の時さらに1千石増え、1634(寛永11)年には1万1千石余になり、貞享・元禄年間には再び伸びたという。これはひとえに堀の開削、淀川改修による水運の発達と、地上げによる屋敷地強化の賜物である。当調査地の地上げもその一環であろう。

当地の尼崎藩蔵屋敷の初見は青山氏時代の1703(元禄16)年である[大阪市1912]。松平氏時代の1843(天保14)年には堂島川右岸の天満11丁目に蔵屋敷を置いていたから、屋敷を移したことがわかる。第3a層上面遺構が尼崎藩蔵屋敷のものである可能性がある。古絵図から当地の変遷を概観したのが表

表1 絵図による当地の変遷

番号	地図名	発刊年	板元	屋敷地の表記
1	新版大坂之図	明暦3(1657)年	記入なし	青山大膳
2	辰歳増補大坂図	元禄元(1688)年か?	大坂出版か?	青山大膳(東半)
3	新撰増補大坂図大絵図	元禄4(1691)年	林吉永	青山大膳
4	撰津大坂図鑑綱目大成	享保年間(1716~35年)か?	大坂、野村長兵衛	町屋(東半)
5	撰州大坂画図	寛延改正(1749年頃)	大坂、赤松九兵衛	伊予大洲之内新谷 一万石加藤近江守
6	改正懐宝大阪図	宝暦2(1752)年以降	大坂、播磨屋九兵衛	イヨシン谷
7	新撰増補大坂大絵図	宝暦8(1758)年以降	京都、林吉永	青山大膳(東半)
8	増修大坂指掌図	寛政9(1797)年	大坂、野村長兵衛	伊予新谷
9	増修改正撰州大阪地図	文化3(1806)年	大坂、赤松九兵衛	町屋(東半)
10	文政新改撰州大阪全国	文政8(1825)年	大坂、播磨屋九兵衛	新谷
11	弘化改正撰州大坂細見図	弘化2(1845)年	大坂、播磨屋九兵衛	久留目
12	改正増補国宝大阪全国	文久3(1863)年	大坂、河内屋太助他	新谷

1である。

4)まとめ

今回の調査成果として、17世紀末の地上げを境にした、それ以前の礎石建物とそれ以後の遺構・遺物を挙げられる。17世紀末と考えられる地上げ後の第3a層上面の遺構は、青山氏時代の摂津・尼崎藩の蔵屋敷の一部である可能性があり、それに伴う瓦類も多く出土した。また上層の第2a層上面の遺構は伊予・新谷藩蔵屋敷の一部であるかも知れない。

今回の調査は「天下の台所」大坂の発展の原由をなす、屋敷地の整備時期についての重要な資料を提供した。

参考文献

大阪市1912、『大阪市史』付図

大阪町名研究会1977、『大阪の町名—大坂三郷から東西南北四区へ—』、清文堂出版

第4a層上面
(北から)



東壁断面



第4a層上面出土遺物
(西から)



第3a層上面
(北から)



第2b層内遺物出土状況
(南から)



第2a層上面石列
(北東から)
〔手前左の石群は
現代攪乱〕



IV 天王寺区

堂ヶ芝廃寺発掘調査(DS07-1)報告書

調査個所 天王寺区堂ヶ芝2丁目3-20(165~168番)
調査面積 39m²
調査期間 平成19年10月9日~10月12日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

堂ヶ芝廃寺は、細工谷遺跡にあったと推測される「百済尼寺」と対になる「百済寺」に比定される説がある古代の寺院跡である。今回の調査地と玉造筋を挟んで北東に当る豊川稻荷・観音寺の付近が寺院の中心部と推測され、明確な遺構は見つかっていないが、7世紀後半～8世紀の瓦が数多く出土している(DS87-3・88-1・04-1次調査、図1)。一方、玉造筋の西でも3次の調査があるが、古代の瓦の出土は少ない。今回の調査地の西は、四天王寺東門付近から細工谷交差点へ延びる谷に向けて急激に低くなり、寺院に関する遺構が広がっていたとしても、調査地付近が西の限界と推測される。

2007年9月14日、当地にて大阪市教育委員会により2箇所を試掘が行われ、瓦器や土師器が出土する遺構が見つかったことから本調査を実施することになった。この遺構が見つかった西側の試掘堀を含むように調査区を設定し、10月9日より重機掘削を開始し、10月12日にはすべての調査を終えて埋戻した。

報告に使用した方位は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)で、TP+〇mと記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

第1層：黄褐色(2.5Y5/4)粘土・粗粒砂の偽礫などからなる江戸時代の盛土層で、最大で厚さ40cmある。18世紀の陶磁器が出土した。

第2層：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト混り粗粒砂層で、層厚は18cmである。直径2～3mmのシルトの偽礫を含んでいる。本層以下は遺物が出土しておらず、洪積層の地層である。

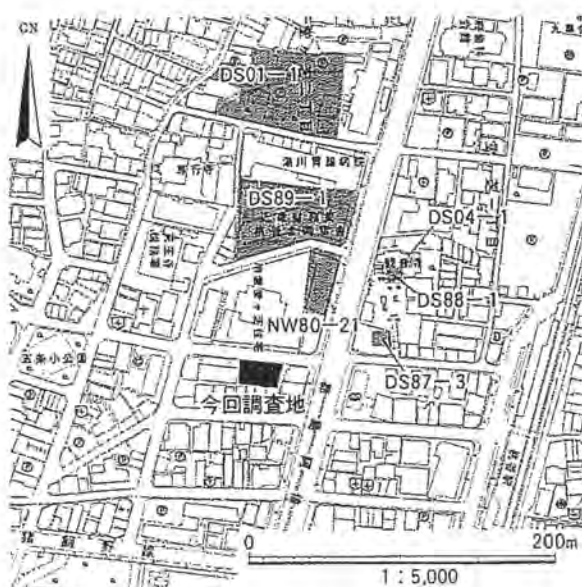


図1 調査地位置図

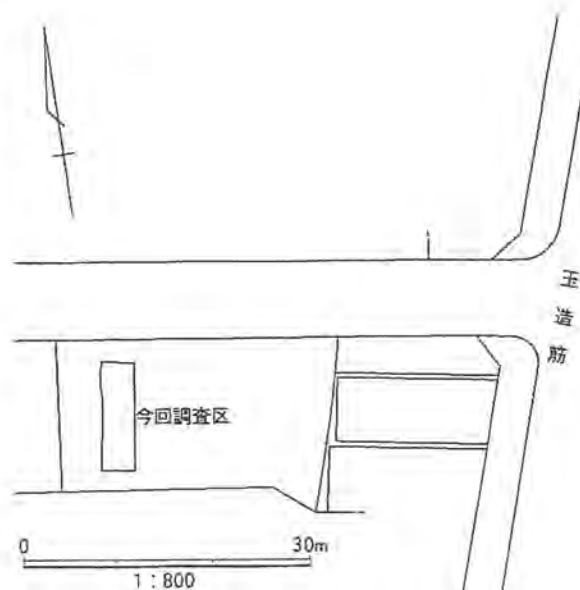


図2 調査区位置図

第3層：極細粒砂の偽礫が混る黄灰色(2.5Y5/1)粗粒砂層で、層厚は25cmである。極細粒砂の偽礫の中には水平にラミナが見られ、これは、本来の極細粒砂層が地震動により断ち切られたゲーディンと呼ぶ変形現象とみられる。

第4層：明褐色(7.5YR5/8)粘土層で、層厚は30cmである。下部に厚さ1～2cmのオリーブ黄色粘土の薄層があり、地層の水平ズレの痕跡ではないかと考えられる。下限は水平ズレ断層により境され、下限直上の厚さ1～2cmはオリーブ黄色に脱色している。乾痕が多数ある。

第5層：オリーブ黄色(5Y6/3)粘土層で、層厚は20cm以上である。

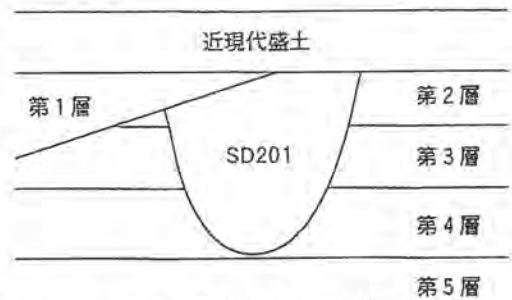


図3 地層と遺構の関係図

ii) 遺構と遺物(図4)

調査区の南4.5mの間は、以前の建物のコンクリート基礎で現地表から約1.1mまで攪乱されていた。遺構は第2層上面の東西方向の溝SD201のみであった。SD201は幅2.3～2.6m、深さ0.7mである。

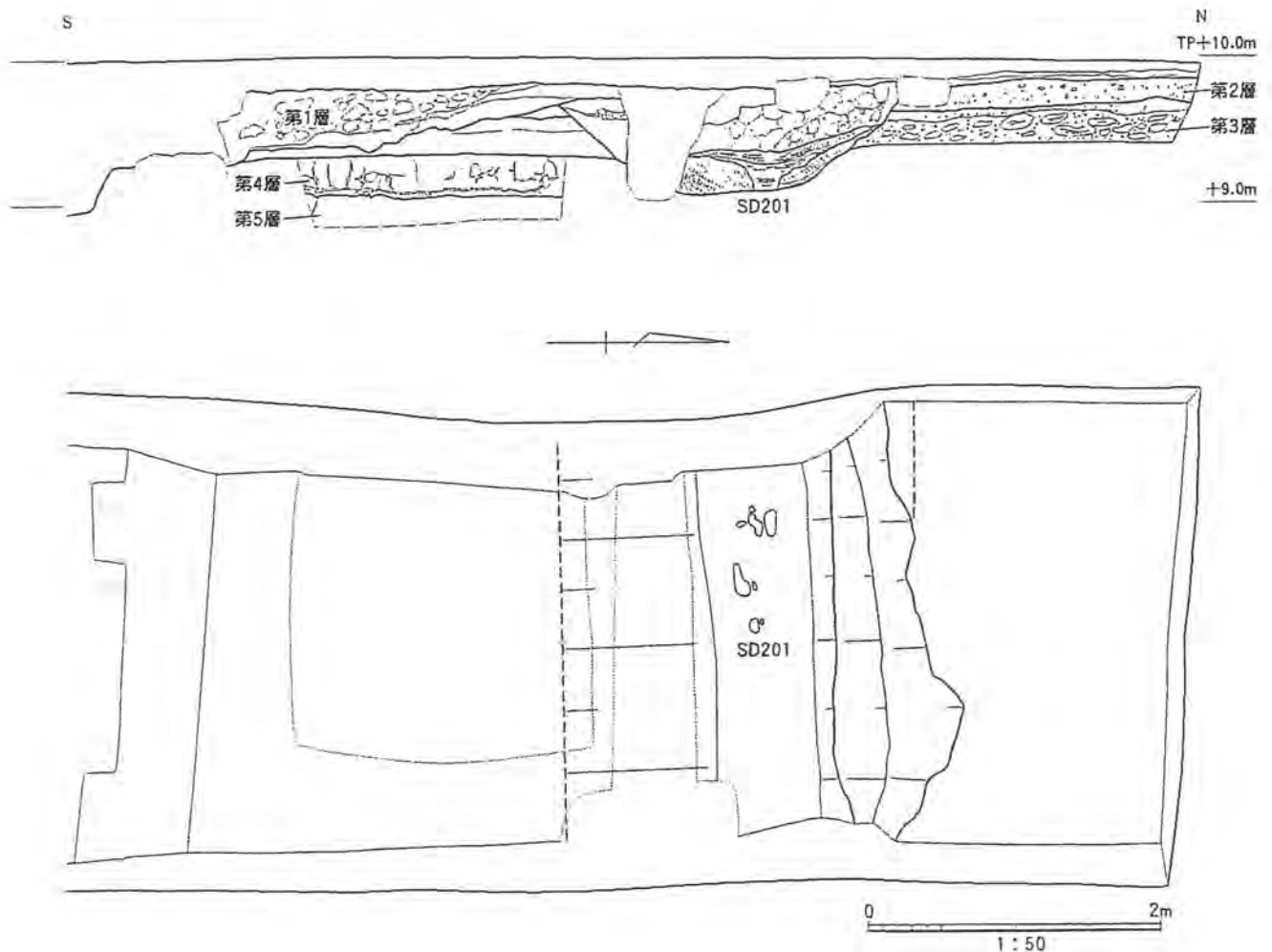


図4 西壁地層断面図と遺構平面図

埋土は3層に分かれ、中粒～極粗粒砂の水成層で埋った後、一旦、中央部が深く掘直される。その後、粘土の水成層で埋った後、粘土偽礫で一挙に埋められる。SD201の底には足跡等の窪みがいくつか残っていた。SD201からは遺物がほとんど出土していないが、江戸時代と推定される平瓦があった。1886年製5千分の1『大阪実測図』では、周辺にはほぼ東西南北に合った方向で区画された耕地があり、SD201もほぼ真東西の方向に延びていたと考えられる。東から西へ流した江戸時代の用排水路と考えられる。また、SD201を境に北が高く、南が低くなっていた可能性がある。

3)まとめ

本調査では古代から中世の遺物と特定できるものは出土していない。SD201の北では現地表から10cmで洪積層の地層になり、近現代の作土も残っていないことから、調査区周辺は削平されていると考えられる。また周辺の地形からみて、堂ヶ芝廃寺との関係では、関連の遺構が分布する西の限界と考えられる。

今後、周辺の地形を復元しつつ地道に調査を重ねることが、堂ヶ芝廃寺の遺構やその分布を明らかにすることにつながると考えられる。

調査区全景
(北より)



SD201
(北より)



SD201断面
(東より)



伶人町遺跡発掘調査(RJ07-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区逢坂2丁目155
調査面積 70m²
調査期間 2007年9月18日～27日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、奈良時代～中世の集落遺跡である倭人町遺跡の南部、府指定史跡である茶臼山古墳の北に当り、一心寺の境内地内に位置する。浄土宗一心寺は1185(文治元)年、法然上人により開基されたと伝えられるが、[一心寺・高口恭行編、1982]によれば、何度かの消失・荒廃の時期を経て、1615(元和元)年、大坂冬ノ陣以降に徳川家康の加護の下、一心寺として復興したという。一心寺での考古学的調査は今回がはじめてであるが、これまで近隣で行った発掘調査では、おもに中世～近世の遺構が検出され、土器・陶磁器・瓦といった遺物が多量に出土している。

当該地は本堂の裏にあり、第2次大戦以前には客殿があった場所で、大阪市教育委員会が試掘調

査を行い、地表下約0.7mで江戸時代前期以前と考えられる焼土層、同1.0mで地山層が検出され、遺構があることも確認された。そこで、このような地層や遺構の年代を明らかにして、古代から近世における土地利用の状況などの、この地域の歴史の変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施することになった。

調査は現代の攪乱層を重機により掘削し、その後、人力により無遺物の地山層まで掘下げて遺構遺物の検出に努めた。検出した遺構は実測と写真撮影を行い記録した。調査中の掘削残土は場内に仮置きし、調査終了後は埋戻して更地に復した。

本報告で用いた示北記号は図1・2が座標北、図5・6が磁北であり、標高はT.P.値(東京湾平均海面高)を用い、TP+○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地の標高はTP+18.3m前後あり、現地地表下25～70cmにある現代の攪乱および整地層である第0層の下位の地層を6層に区分した。

第1層はオリーブ灰色をおもな色調とする大～中礫質粗粒砂質シルトからなる盛土層であり、層厚は35cm以下であった。近代の瓦、焼締陶器などが出土した。

第2層は灰黄色をおもな色調とする粗粒砂質シルトからなる整地層であり、層厚は15cm以下であっ

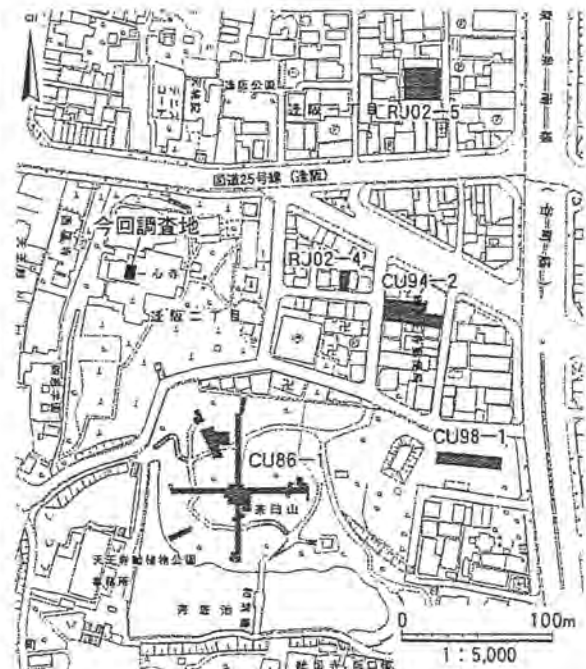
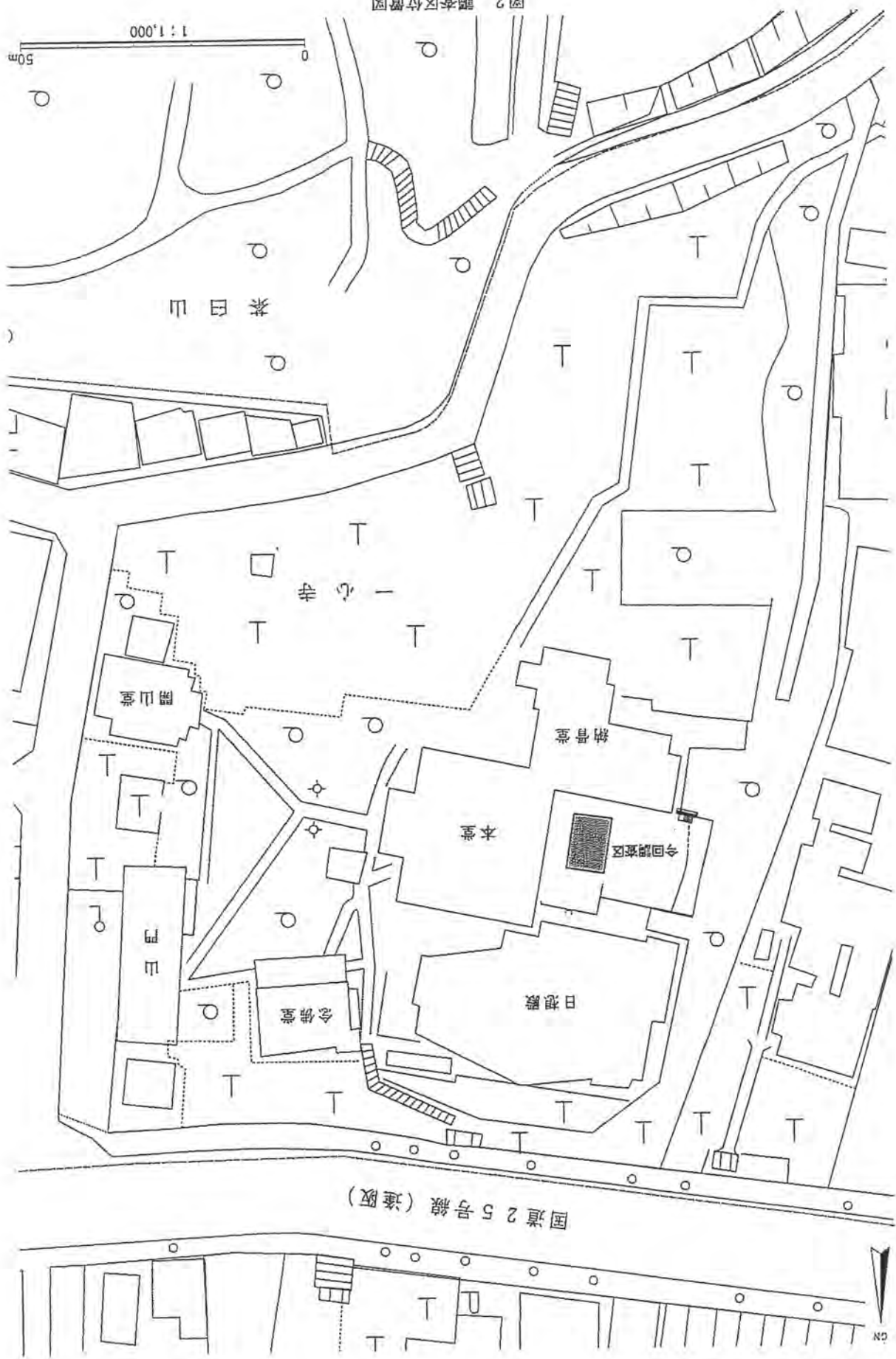


図1 調査地位置図

図2 調査区位置図



た。最上部に層厚2cm程度の暗灰黄色腐植質砂質シルトの薄層を伴った。瓦、肥前磁器、肥前磁器染付・褐釉、関西系陶器、アルファベットで刻印された白磁、煉瓦、ガラスなど、近世～近代の遺物が出土した。

第3層は黄褐色をおもな色調とし、黒色シルト偽礫質粗粒砂質シルトからなる盛土層であり、層厚は15cm前後であった。肥前陶器、軟質施釉陶器、丸・平瓦など、近世の遺物が出土した。

第4層は炭を特徴的に含む層であり、3層に区分した。上部の第4-1層は炭を含む黄褐色砂質シルトの整地層であり、層厚は4cm前後であった。中部の第4-2層はSK15をはじめとする遺構の埋土層であり、炭を含む大～中礫の砂質シルト偽礫や第6層堆積物の偽礫と極粗粒シルトからなり、最大層厚は50cmであった。下部の第4-3層は炭を多含する砂質シルト層で、最大層厚は14cmであった。4-2層からは近世の瓦のほか、須恵器、土師器、焼壁などが出土した。第4-2層の上面で多数の柱穴を、第4-3層上面で土壌群をそれぞれ検出した。

第5層は第4層の下位で第6層の上位にある地層を一括して呼び、3層に区分した。上部の第5-1層は第6層最上部に由来する灰オリーブ色粘土偽礫からなる土壌の埋土層であり、下半部の偽礫が主体の部分(第5-1b層)と偽礫質極粗粒砂質シルトの部分(第5-1a層)とに分けられる。中・下部の第5-2・3層は、SD69を埋立てて盛土した人為層であり、5-2層はにぶい黄色の細礫質砂質シルト層で、最大層厚は60cm、5-3層はわずかに細礫質粗粒砂質シルト層で、最大層厚は20cmであった。5-2層からは土師器のほか中～近世の瓦、焼けた砂岩などが、5-3層からは中世後半～末ごろの瓦が多数出土した。第5-2層上面でSK48・68を検出した。

第6層はTP+16.4m以下に分布した上町層であり、TP+15.8mまでの厚さ60cmの範囲では浅黄色シルト質極細粒砂層で、上限付近で灰色シルトに層相変化した。無遺物層であった。上面でSD69・SK70を検出した。

ii) 遺構と遺物

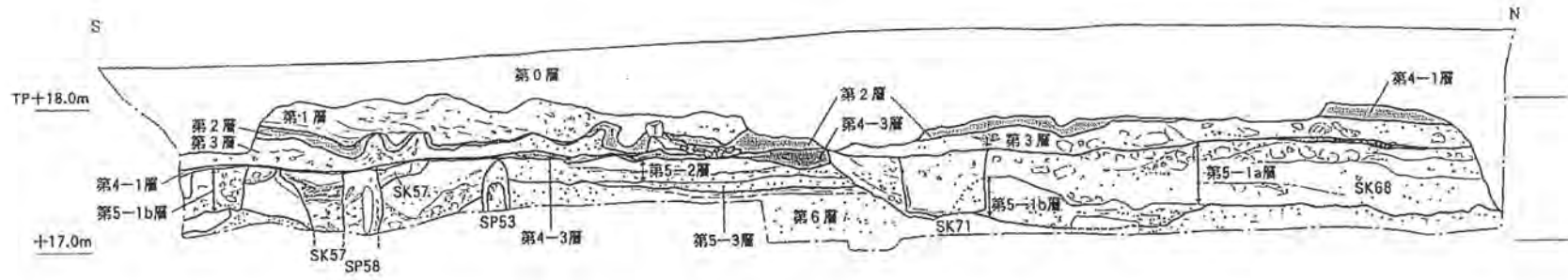
a. 中世末～近世初頭ごろの遺構

SD69・SK70は第5-3・2層に埋る第6層上面の遺構である。SD69は調査地西部を南北に延びる溝である。幅は南側で広く1.0m、北側では0.5m、深さは0.2m程度であった。調査地東部で検出したSK70は、西肩が南北に延びる深さ0.1～0.2mの浅い窪地で、中ほどと北端がさらに緩く窪んでいた。幅は2.0m以上あった。ともに第5-3層が機能時層、5-2層が廃棄後の埋立て層とみられる。SK70の第5-3層堆積物は作土のようによくこなれていたため、SK70は耕作区画であったのかもしれない。

第0層			現代
第1層			
第2層		←SK01	(昭和)
第3層			
第4層	4-1	←SB22, SK57, SD02ほか	近代
	4-2		
	4-3	←SK15・24ほか	近世
第5層	5-1	5-1a	
		5-1b	近世初頭
	5-2	←SK48・68	
	5-3	←SD69, SK70	中世末
第6層			

図3 地層と遺構の関係図

西壁



南壁

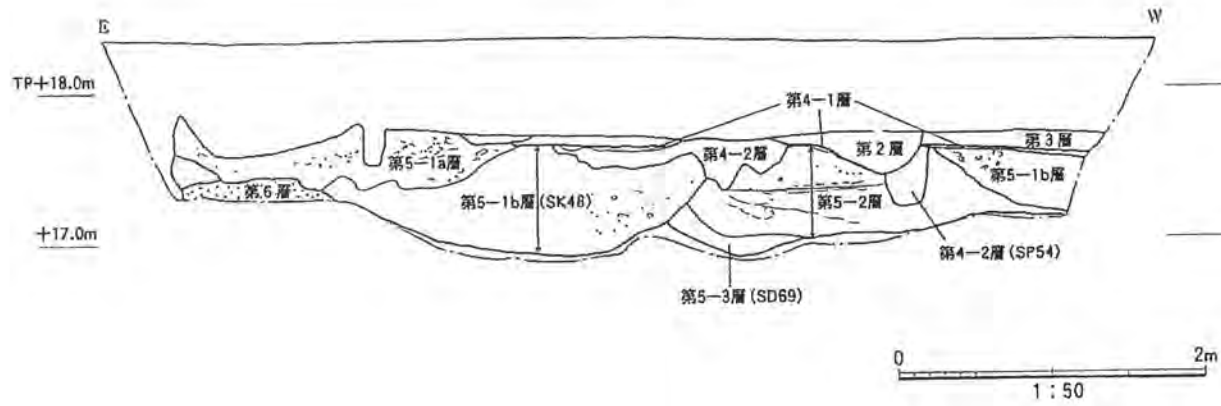


図4 地層の断面図

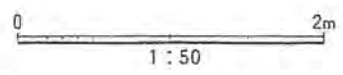
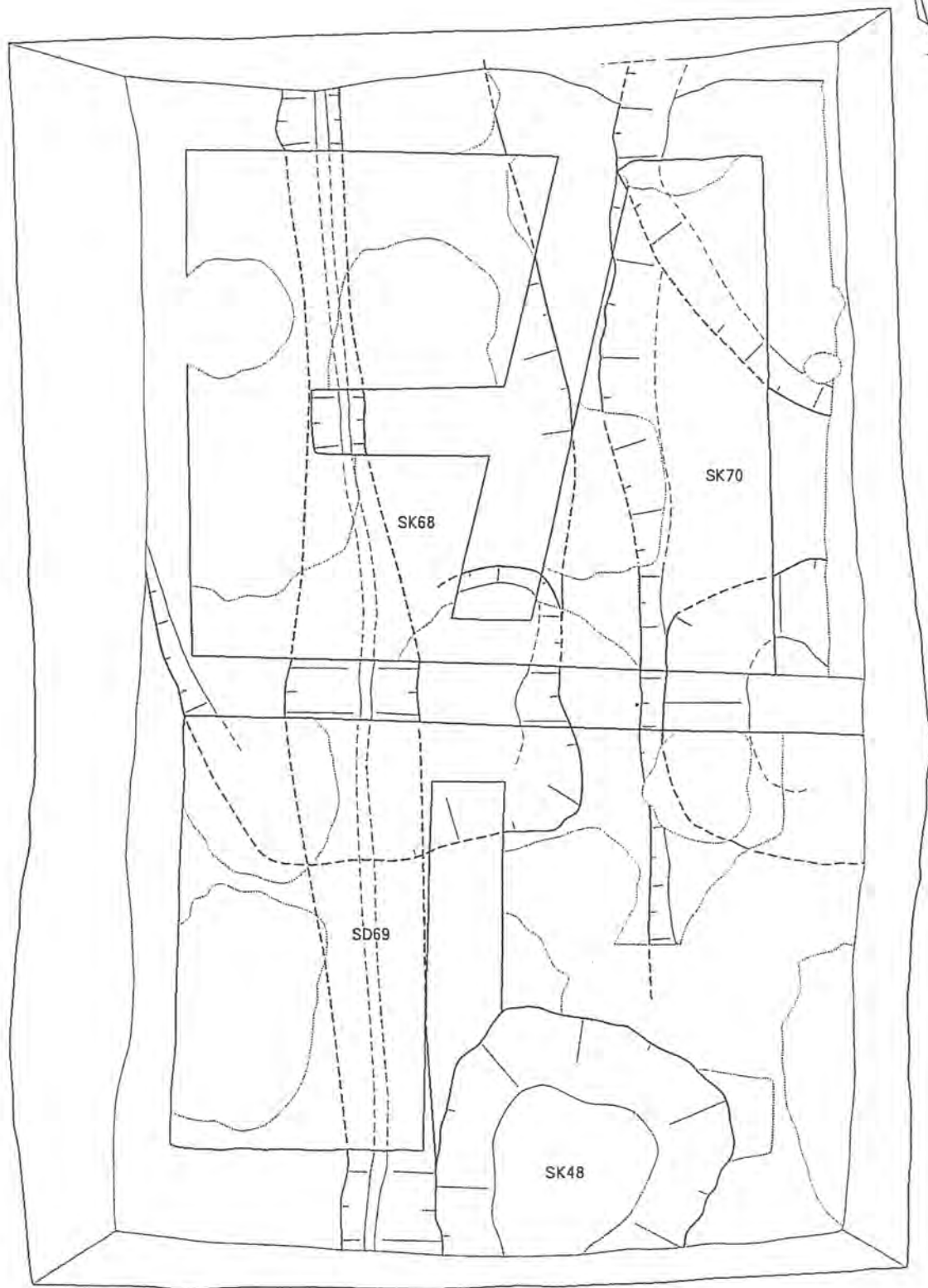


図5 中世末～近世初頭の遺構平面図

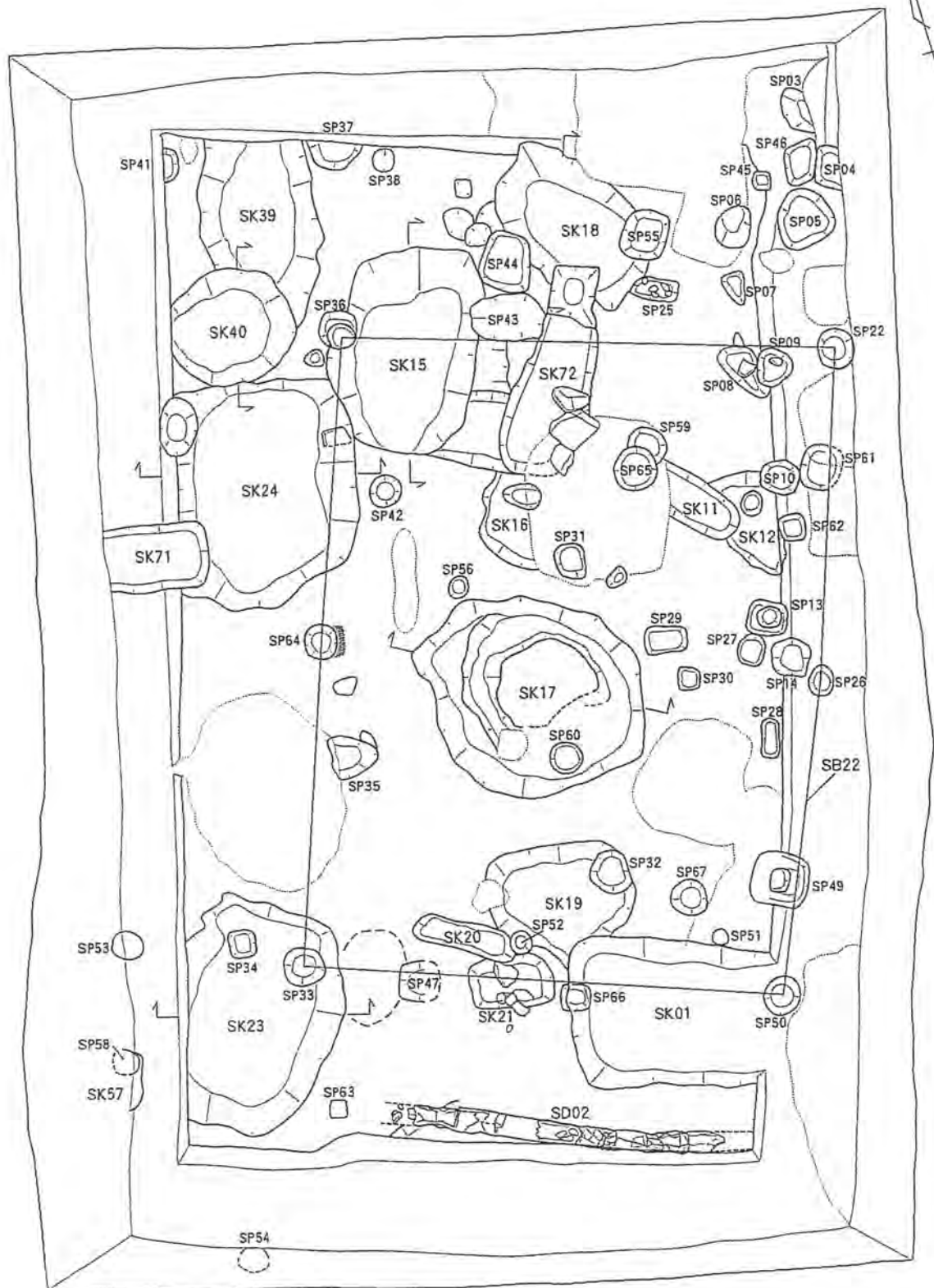


図6 近世～近代の遺構平面図

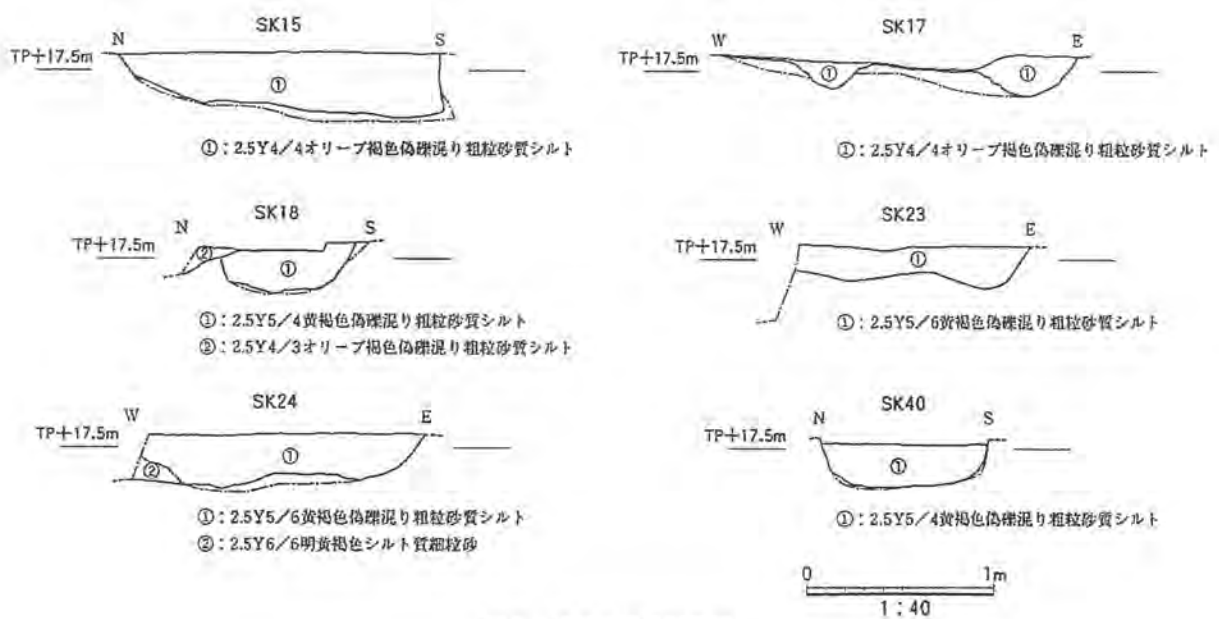


図7 近世の遺構断面図

SK48・68は第5-2層上面の遺構である。SK48は第5-1偽礫層で埋る土壌で、長径2.2m、短径1.9m以上であった。SK68は第5-1a・b層で埋る土壌で、調査地中ほどから北側で幅3.5m前後、長さ6.2m以上で調査地北側に延びていた。

これらの遺構の時期は第5-2・3層の出土遺物から推定される。いずれも破片で瓦が多いが、遺構の時期は比較的新しく、近世に属する可能性がある。

b. 近世～近代の遺構

第4層関連の確認できた範囲で、土壌が埋った後に柱穴が掘られている(表1)。

SK11・12・15～21・23・24・39・40は第4-3層上面か、同層上面とみられる土壌である。長径は0.7m～2.1mまでで、深さは0.3m以下で平均0.2mとあまり深くない。すべて偽礫混りでオリブ褐～黄褐色の粗粒砂質シルトで埋っている。

SB22は第4-2層上面の梁行1間・桁行2間、柱間は桁行3.9m、梁行2.4～2.6mで、中央に桁行柱間1.6mの2本の柱を伴う特殊な建物である。四周の柱穴はSP22・26・33・36・50・64からなり、柱穴の直径は0.23～0.36mである。すべての柱穴に柱痕や柱が朽ちた材片が残り、SP36の柱痕は直径0.20mであった。どの柱穴も深く、第4-2層上面からは0.7m以上の深さがあり、SP26・36・64は1.0mであった。柱痕の下端は柱穴にほぼ接することから、自沈した可能性がある。また、建物中央にあって柱間が1.6mのSP31・60は四周の柱と同程度の直径と深さがあり、東柱という程度のもではなく、重量物を支えた柱であったと思われる。掘形からは近世の瓦類や瓦質土器火入れ、関西系陶器鍋などが出土し、18世紀後半以降の年代が得られるが、後述するほかの遺構との関係から、近代に属する可能性がある。

西壁の第4-2層上面で見つかったSK57は、炭を多量に含み、土壌壁が赤褐色に焼けており、焼却のために使用された穴と考えられた。19世紀代の軒平瓦、寛永通宝などが出土した。炭の1つはヒノキであり、放射性炭素年代を測定したところ(Code No.IAAA-71369)、360±30年BP(補正年

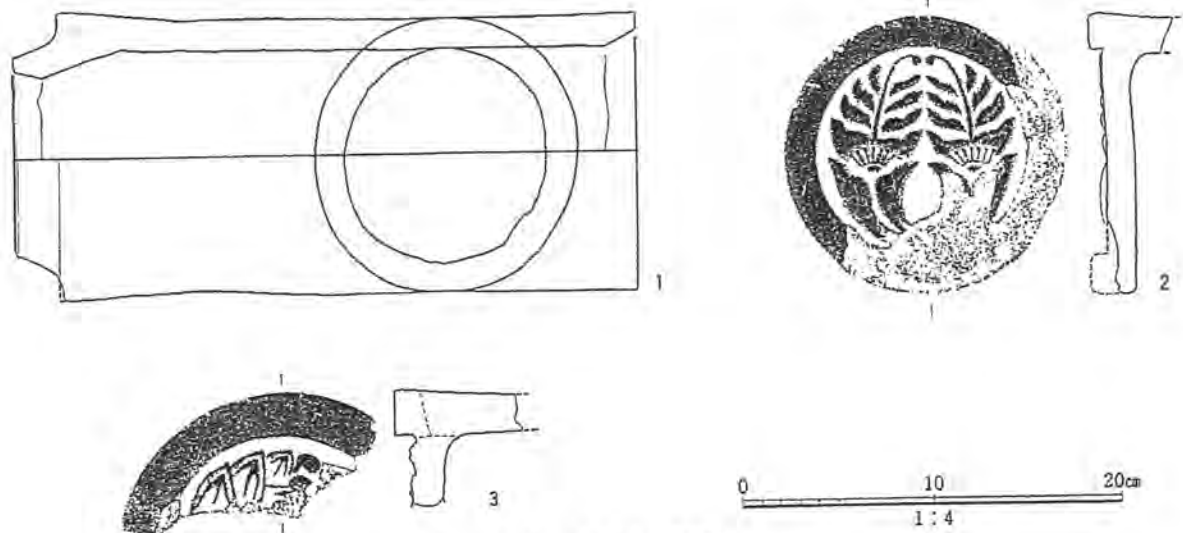


図8 出土遺物実測図
SD02(1)、SP07(2)、第2層(3)

代)で豊臣前期の1590年を中心とする年代を示している。ただし、暦年較正年代はcalAD1470~1625年となり、応仁の乱直後から江戸時代初期の年代となる。一心寺は法然上人の草庵として13世紀に造られた源空庵が消失・荒廃の後、15世紀に復興され、再び16世紀後半~17世紀初頭に荒廃し、その後、坂松山高岳院一心寺として誕生したといわれている[一心寺・高口恭行編、1982]。SK57の19世紀に焼却された材ではあるが、一心寺誕生のころに使われた材であったのかもしれない。

SD02は第4-1層を埋土とする第4-2層上面と推定される暗渠である。西側が高く東側が低く、玉縁は東向きであった。暗渠に使用された瓦質の土管1は、長さ33cm、直径14cm、胴部の厚さ2cmで、内側に製作時の鉄線によるコビキ(コビキB)と布目痕が、外側は横方向のナデが明瞭に残る。

その他、図6・表1に示すように、第4層以上で多数のピットや小土塋が見つかったが、建物等を復元するには至らなかった。また、出土した遺物の多くは廃棄されたとみられる近世瓦類の破片であり、遺構の詳細な時期はわかっていないが、土塋の1つのSK57が19世紀代の瓦を含んでいたことから、土塋が埋った後に掘られた柱穴は、近代に属する可能性が高い。

c. 出土遺物

軒丸瓦2は家紋瓦で、杏葉紋と思われる。SP07から出土した。

3も家紋瓦で、上部の破片だけであり、葉脈のある葉か花を象っていると思われる。形から茗荷紋の可能性はあるが、杏葉紋の葉の中にも葉脈があるものがあり、この2つの紋は混同されやすい。杏葉紋は宗祖法然上人の生家の紋であるので、浄土宗の寺院に多く使われている。一心寺は浄土宗なので、ともに杏葉紋であるのかもしれない。第2層から出土した。

3) まとめ

今回、伶人町遺跡の南限に当る一心寺境内ではじめて発掘調査を行い、中世末~近代にかけての遺構を検出した。その中で、SB22は中央に2本の柱をもつ特異な建物であることから、寺院施設に係わる建物であった可能性がある。また、集落遺跡で普通に見られる土器類が非常に少なく、一心寺に

表1 遺構一覧表

層 準	遺構番号	規 模 (m)	深さ A (m)	深さ B (m)	備 考
第3層上面	SK01	長径1.50(+) \times 短径1.05	0.35	-	瓦溜り
第4-2層上面	SD02	長さ2.50 \times 幅0.25	0.08	0.08	土管暗渠
	SK57	長径1.05 \times 短径0.10	0.42	0.42	焼土塊
	SK71	長さ0.83(+) \times 幅0.63	0.44	0.44	
	SP22 (SB22)	直径0.25	0.7(+)	0.9(+)	四隅柱
	SP36 (SB22)	直径0.29	1.0	1.0	四隅柱
	SP33 (SB22)	直径0.31	0.6(+)	0.6(+)	四隅柱
	SP50 (SB22)	直径0.32	0.5(+)	0.9(+)	四隅柱
	SP26 (SB22)	直径0.23	0.6(+)	1.0	桁中間柱
	SP64 (SB22)	直径0.36	0.7(+)	1.0	桁中間柱
	SP31 (SB22)	直径0.30	0.9(+)	0.9(+)	中柱
	SP60 (SB22)	直径0.27	0.6(+)	0.6(+)	中柱
	SP03	直径0.35	0.19	0.32	
	SP04	直径0.35	0.04	0.20	
	SP05	直径0.55	0.70	0.84	
	SP06	直径0.40	0.38	0.49	
	SP07	直径0.35	0.16	0.18	
	SP08	直径0.50	0.21	0.23	
	SP09	直径0.25	0.17	0.20	
	SP10	直径0.28	0.23	0.25	
	SP13	直径0.27	0.15	0.19	
	SP14	直径0.33	0.29	0.34	
	SP25	直径0.40	0.27	0.29	中継多く含む
	SP27	直径0.24	0.03	0.08	
	SP28	直径0.36	0.06	0.11	
	SP29	直径0.35	0.51	0.53	
	SP30	直径0.22	0.05	0.07	
	SP32	直径0.36	0.21	0.23	
	SP34	直径0.20	0.05	0.17	
	SP35	直径0.34	0.11	0.13	
	SP37	直径0.35	0.27	0.27	
	SP38	直径0.17	-	-	
	SP41	直径0.30	0.09	0.12	
	SP42	直径0.23	0.31	0.32	
	SP43	直径0.50	-	-	
	SP44	直径0.40	0.18	0.18	
	SP45	直径0.15	0.02	0.17	
	SP46	直径0.30	0.05	0.19	
	SP47	直径0.32	0.25	0.32	
	SP49	直径0.45	0.27	0.58	
	SP51	直径0.13	-	-	
	SP52	直径0.30	-	-	
	SP53	直径0.24	-	-	
	SP54	直径0.26	-	-	
	SP55	直径0.35	0.29	0.29	
	SP56	直径0.13	0.22	0.24	
	SP58	直径0.24	-	-	
	SP59	直径0.30	0.08	0.34	
	SP61	直径0.36	0.23	0.53	
	SP62	直径0.25	0.23	0.54	
	SP63	直径0.15	-	-	
	SP65	直径0.32	0.21	0.53	
	SP66	直径0.21	-	-	
	SP67	直径0.30	0.15	0.15	
第4-3層上面	SK11	長径0.75(+) \times 短径0.35	0.09	0.10	
	SK12	長径0.63 \times 短径0.50(+)	0.25	0.27	
	SK15	長径1.70 \times 短径1.20	0.25	0.25	
	SK16	長径0.55(+) \times 短径0.50(+)	0.06	0.06	
	SK17	長径2.02 \times 短径1.60	0.16	0.19	
	SK18	長径1.08(+) \times 短径0.90(+)	0.27	0.27	貝殻多く含む
	SK19	長径1.14 \times 短径0.90	0.11	0.12	
	SK20	長径0.86 \times 短径0.25	0.04	0.04	
	SK21	長径0.65 \times 短径0.45(+)	0.06	0.08	大-中継含む
	SK23	長径1.84 \times 短径1.12(+)	0.19	0.22	
	SK24	長径1.80 \times 短径1.40	0.25	0.27	
	SK39	長径1.03 \times 短径0.85(+)	0.24	0.24	
	SK40	長径1.10 \times 短径0.90	0.27	0.30	
第5-2層上面	SK72	長径1.31(+) \times 短径0.65	0.04	0.04	巨-大継含む
第5層上面	SK48	長径2.17 \times 短径1.87(+)	0.20	0.73	
	SK68	長さ6.2 \times 幅約3.5	0.50	0.50	
第6層上面	SD69	長さ9.3(+) \times 幅1.0-0.5	0.20	-	
	SK70	長さ7.0(+) \times 幅2.0(+)	0.1-0.2	-	

(+): 以上
 深さA: 残存した深さ
 深さB: 第4-2-3層上面(平均T P + 17.60m)からの深さ

因む杏葉紋の家紋瓦をはじめとする大部分の遺物が瓦であったことも、当地が寺院の境内であった所為であろう。

一心寺本堂の裏手に当る当該地が積極的に活用されたのは、近世も終わりごろ以降と推測され、SB22が建てられた時期は、近代に属する可能性がある。それ以前はゴミ穴が掘られる程度であったらしい。今後、周辺地域での調査が進めば、中世以降の当地域の変遷がより具体的に明らかにできるであろう。

参考文献

一心寺・高口恭行編1982、『一心寺風雲覚え書き』、320p.

調査地遠景
(西から)

調査地は写真中央左手、
瓦屋根の本堂の手前。
右端の池は河底池、
その左の繁みは茶白山。



調査地全景
(西から)

写真奥は本堂



調査地全景
(南から)



地層の断面
(西壁、南東から)

左端の炭の入った
土層はSK57



SD69
(部分・南東から)

左手前はSK48



暗渠SD02
(東から)



撰津国分寺跡発掘調査(SK07-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区国分町 198 - 1 ・ 198 - 2
調査面積 63m²
調査期間 平成19年 10月31日～11月6日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋寛

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は天王寺区に所在する国分寺および国分公園を中心にして推定されている摂津国分寺跡の西部に当る。周辺でのこれまでの発掘調査によって古代から中世の遺構・遺物が検出されているが、特に今回の調査地北に隣接する敷地でのSK88-5次調査では、古代の土壙や中世の井戸・土壙が検出されており、当該地でも同様の資料が出土することが予想された(図1)。

事前に行われた大阪市教育委員会による試掘調査では、現地表から約0.4m下で黄灰色砂の地山層が確認され、ピットや中世の遺物を含む大型の遺構が確認されたため、発掘調査を行うこととなった。

調査は三角形をなす敷地の中で、工事用の基礎杭を避けた敷地中央部の6m×10.5mの範囲を調査することになった(図2)。重機による表土掘削が行われた後の10月31日から現地に入り、人力掘削による調査を開始した。

11月6日には記録作業などの調査作業を完了し、同日中に機材類の撤収などを含めた現地におけるすべての作業を完了した。

この調査で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、本文・挿図中ではTP+〇mとしている。また、平面図における座標値は、調査区位置図を大阪市道路現況図(1/500)に照合させて得た値(世界測地系)である。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地の大半は近現代の地層の直下が地山



図1 調査地位置図
(薄い網掛けは摂津国分寺跡)



図2 調査区位置図

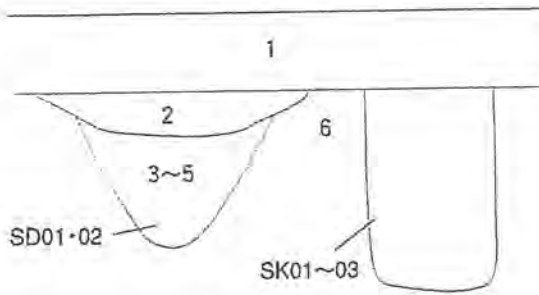


図3 地層と遺構の関係模式図

層となるが、SD01付近のみに整地層が残る（図3・4）。

第1層：近現代の整地層および攪乱の埋土で、層厚は20～40cmである。

第2層：オリーブ褐～黄褐色シルトで、調査地北部のSD01の上部のみに残る整地層である。

第3～5層：SD01の埋土であり、このうち最下層

の第5層はSD02の埋土である。

第6層：灰白～灰黄色細粒砂の地山層である。上部20cmほどが灰白色で、上面からの生痕が顕著に認められる。

ii) 遺構と遺物

遺構検出は第1層および攪乱を掘削したのち、ほぼ地山層上面で行った。以下に主要な遺構について記述する（図4～7）。

a. 溝

調査区の北隅でSD01・02を検出した。試掘時に中世の遺物を含む遺構とされたものである。

SD01はほぼ正東西の溝で、幅約2.5m、深さ0.7～0.9mの規模である。長さ約6.5m分を検出

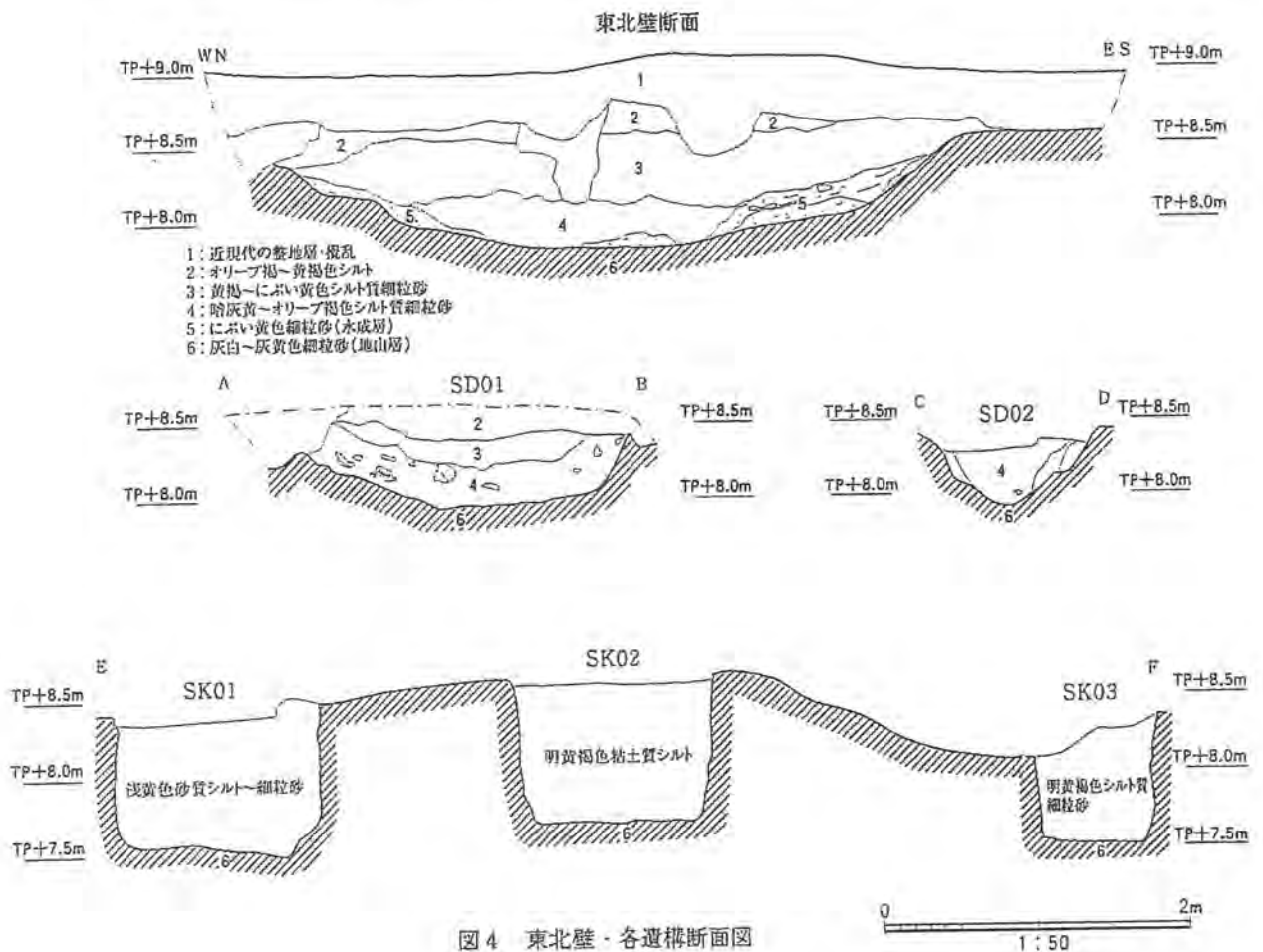


図4 東北壁・各遺構断面図

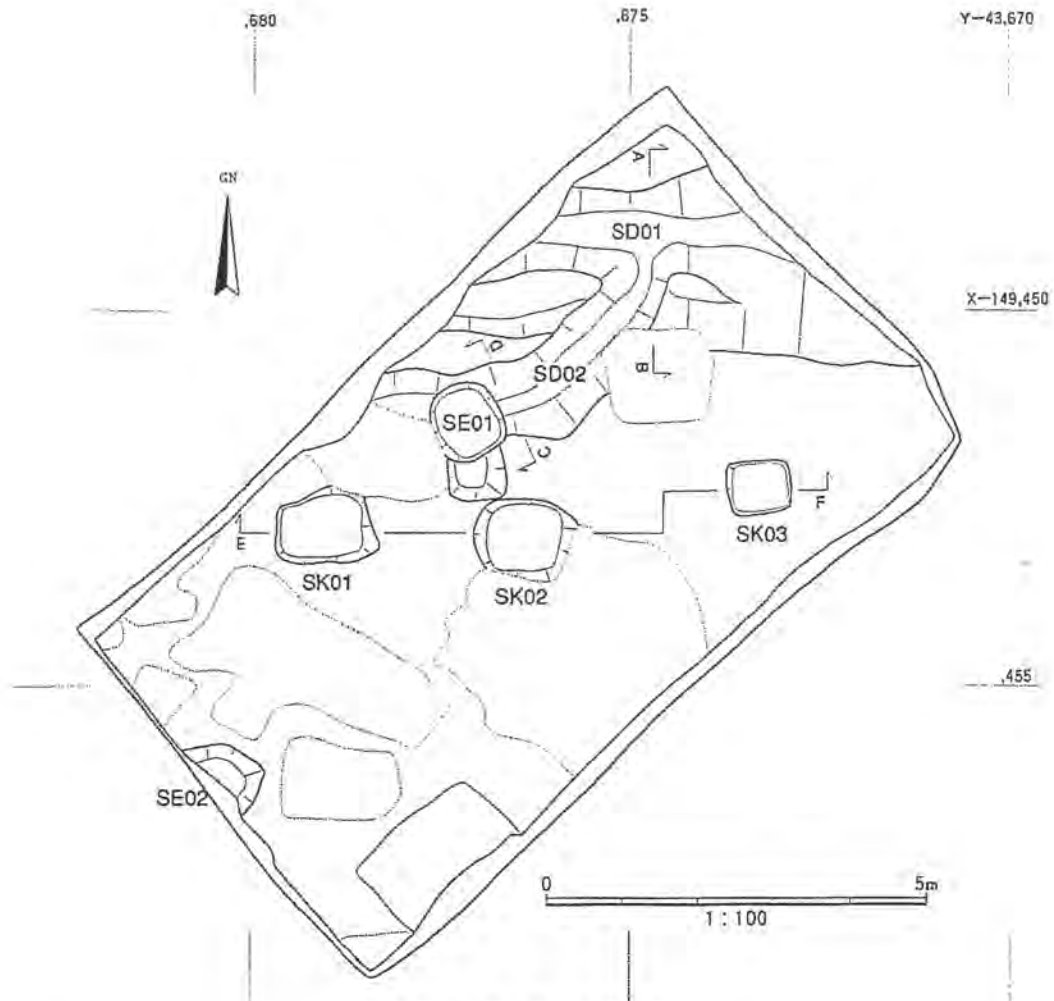


図5 第6層上面平面図

した。埋土は大きく3層に分けられる。最下層は機能時の堆積と思われる暗灰黄～オリーブ褐色シルト質細粒砂(4)で、瓦や土器が多く含まれる。東端では溝の底面に薄く水漬きのにぶい黄色細粒砂(5)が認められた。その上部に整地層である黄褐～にぶい黄色シルト質細粒砂(3)が、さらに明黄褐～にぶい黄色の中粒砂を含む砂質シルト(2)が堆積する。

出土遺物には土器・陶磁器では、土師器小皿10・13・15、瓦器椀16・17、瓦質土器甕29・羽釜26・播鉢24・25・火入23・28、線描蓮弁文の碗を含む青磁碗1～8、内面に幅広の蓮弁がある皿9、白磁、備前焼播鉢18～21・甕などがある。瓦類では、複弁蓮華文軒丸瓦30・31、重圈文軒丸瓦33、唐草文軒平瓦36・37・39の古代に遡る瓦片のほか、複弁蓮華文軒丸瓦32、巴文軒丸瓦34・35、波形文軒平瓦40・41、同一個体と思われる連珠文軒平瓦42・43のほか、「四天王寺」の文字文軒平瓦38など平安時代後期から鎌倉時代のものがある。30・31の軒丸瓦と37の軒平瓦が従来、摂津国分寺創建時の瓦と考えられているものである。「四天王寺」の文字文軒瓦は40m北側のSK96-9次調査でも軒丸瓦が出土している。

このほか、格子タタキの平瓦46、瓦を加工した土製円板47・49～55が出土した。

土器・陶磁器が16世紀まで下るものがあるのに対して、軒瓦が鎌倉時代までのものが主体を占める点は、近隣に存在していた瓦葺き建物の存続年代を反映している可能性がある。

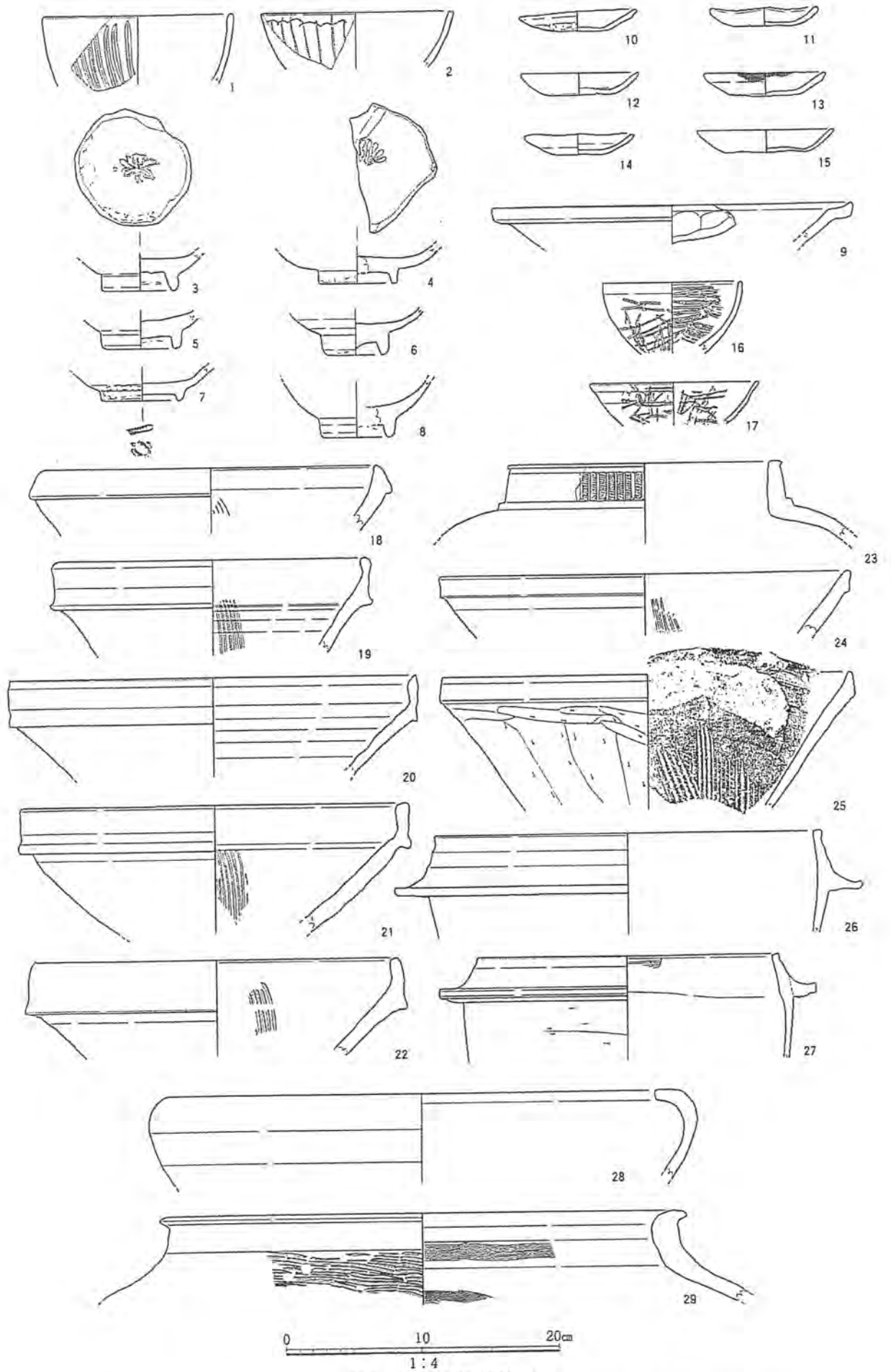


図6 出土遺物実測図(1)
 SD01 (1~13・15~21・23~26・28・29)、SD02 (14)、SK01 (22・27)

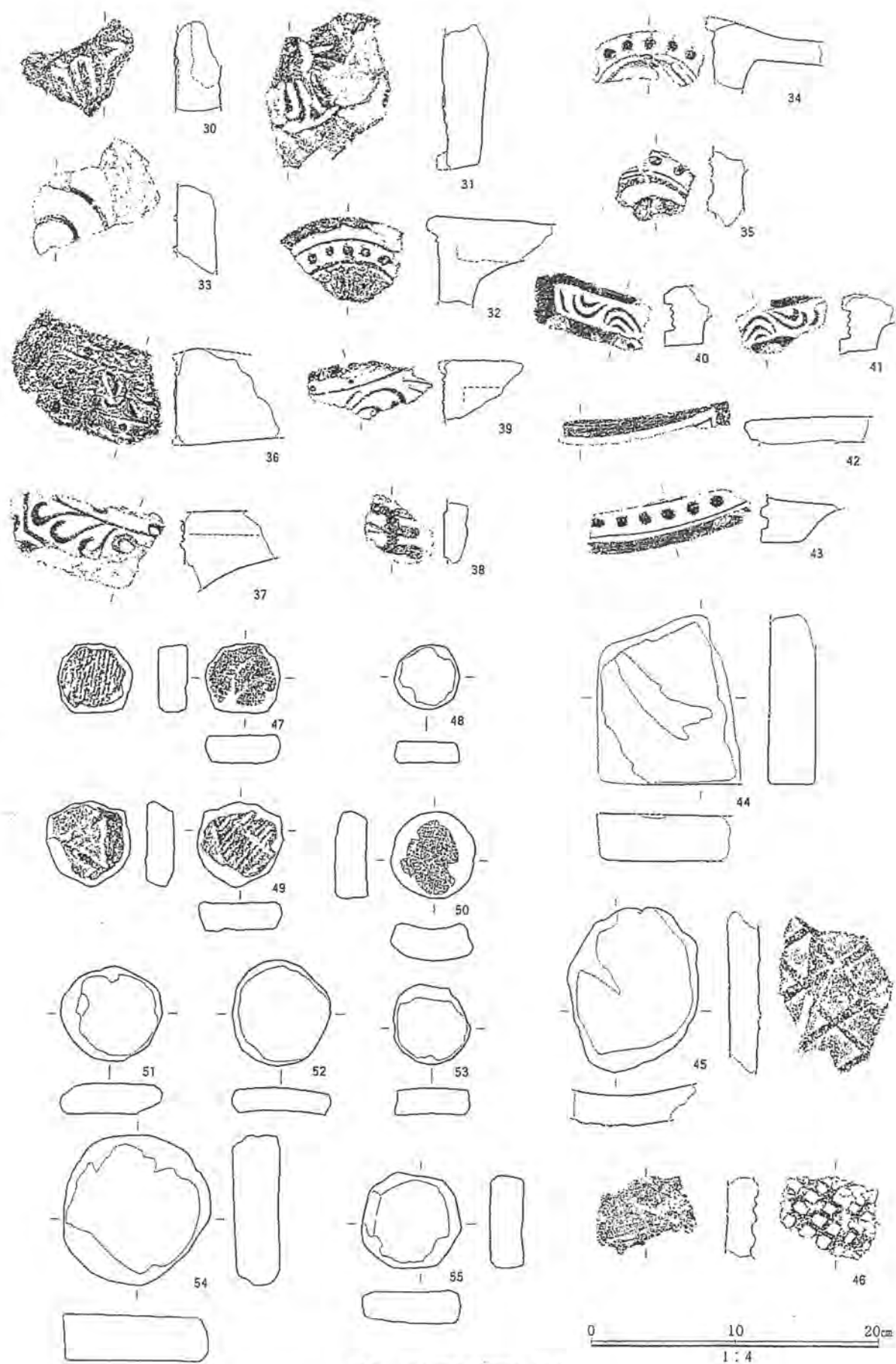


图7 出土遺物実測図(2)
SD01 (30~44・46・47・49~55)、SD02 (45・48)

また、出土遺物に鉄滓や瓦片を加工した円板、砂岩・花崗岩の碎片が多く含まれる点も特徴である。溝SD02はSD01の南側に平行する溝で、東端が北に屈曲してSD01に連結する。幅1.0m、深さ0.5mである。埋土はSD01埋土の最下層に対応するに於いて黄色砂質シルト(4)である。出土遺物には土師器小皿14、瓦質土器羽釜、丸・平瓦、土製円板48などがあり、SD01と同様の時期である。

b. 土壙

SK01～03はSD01・02の南側に正東西に並ぶ長方形の土壙である。

SK01・02はともに平面形が南北1.0m、東西1.3mの長方形を呈し、ほぼ垂直に掘込まれて深さ1.0mを測る。1.4mの間をおいて並ぶ。いずれも地山を主体とする土で一気に埋められているが、SK01が浅黄色砂質シルト～細粒砂、SK02が明黄褐色粘土質シルトで若干異なる。また、SK01からは土師器小皿、瓦質土器鉢・羽釜27、備前焼播鉢22、丸・平瓦、磚が出土した。SK02からは土師器小皿片が少量出土しただけである。

SK03はSK02から2mの間をおき、前二者の並ぶ軸から約0.5m北にずれた位置にある。規模はやや小さく南北0.7m、東西0.8m、深さ0.8mである。同様に一気に埋められているが、埋土は前二者とは違い、地山とは異なる明黄褐色シルト質細粒砂で埋めている。須恵器・土師器・瓦質土器・瓦の細片が少量出土した。

c. 井戸

SE01はSD02が埋まったのちに掘られた井戸である。直径1.0m、深さ1.5m以上である。埋土は灰白色細粒砂の偽礫を多く含む黄褐色シルト質細粒砂であるが、底まで掘削できなかった。土師器焙烙、青花・瓦片が少量出土した。

SE02は調査地の南西壁際で検出され、直径1.1m、深さ0.8m以上である。埋土はに於いて黄褐色砂質シルト～細粒砂であるが、下半部は掘削できなかった。丸・平瓦、関西系陶器が出土した。

3) まとめ

当初検出されると思われたSK88-5次調査の古代の土壙は検出されず、中世の東西溝SD01とそれに繋がるSD02が検出された。埋土の中・下層から多くの土器・陶磁器・瓦片が出土し、瓦質土器や青磁碗、備前焼播鉢は15世紀から16世紀前半までのものが含まれていた。SD01の100m真東のSK86-1次調査地では東西溝は検出されておらず、玉造筋を越えて東に続く遺構ではないと思われる。また、SK01～03も出土遺物は少なかったが、遺構の配置からみてほぼ同時期で、溝に伴うと推定されるが、用途は明らかにできなかった。

今回の調査では、摂津国分寺に関連する遺構は発見できなかったが、従前から蓄積されてきている中世の資料に、新たな資料を加えることができたといえよう。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 1988、「共栄産業株式会社による共同住宅建設に伴う摂津国分寺跡試掘調査(SK86-1)略報」:『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- (財)大阪市文化財協会 1988、「吉村英一氏による建設工事に伴う摂津国分寺跡(SK88-5)略報」
- 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 1991、「摂津国分寺跡における範囲確認調査(SK90-2)略報」:『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会 1998、「養父孝乃介氏の建設工事に伴う発掘調査(SK96-9)」:『平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

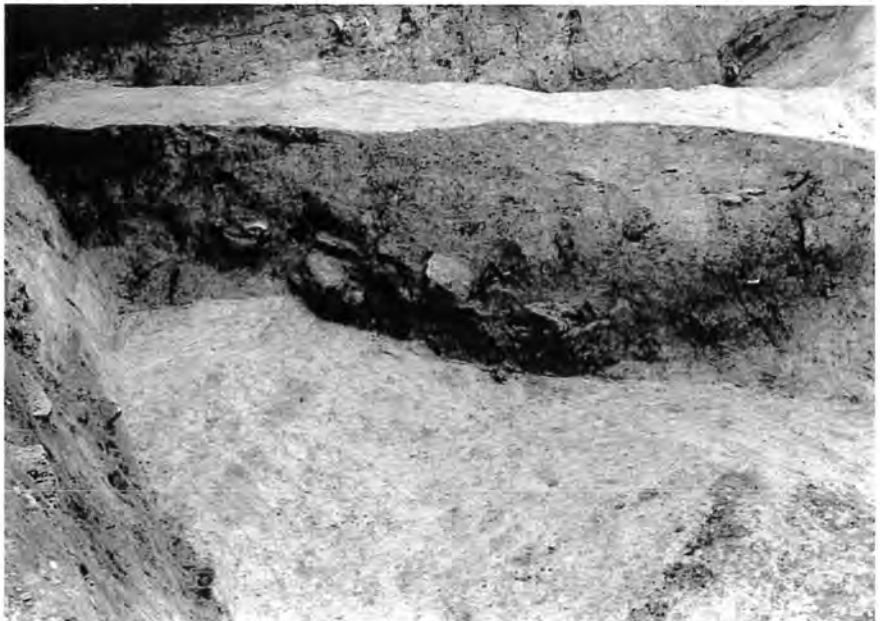
全景
(南東から)



SD01
(西から)



SD01断面
(西から)



SK01~03
(西から)



SK02
(南から)



SK03
(南から)



上本町遺跡発掘調査(UH07-2)報告書

調査箇所	大阪市天王寺区上汐5丁目4-12・4-13・4-14
調査面積	50m ²
調査期間	平成19年7月3日～7月13日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当	文化財研究部次長 南 秀雄・櫻井久之

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は南北に走る上町台地の脊梁部にある。北側の隣接地ではUH07-1次調査[大阪市文化財協会2007]が行われ、古代の土塋・小穴などが確認された(図1)。また、北250mにあるUS06-1次調査[大阪市文化財協会2006a]では奈良~平安時代初めにかけての掘立柱建物群や井戸が検出されている。さらに、南東150mのNW81-4次調査[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]でも奈良時代の井戸の存在が確かめられている。こうした調査などにより、近年、上本町遺跡周辺では、難波京に関連する時期の遺構の存在が注目されてきている。

そうした当地において、建設工事が行われることになり、事前に大阪市教育委員会による試掘調査が行われ、地表下約80cmに地山層、そして古代~中世と考えられる遺構が検出された。その結果を受け、遺構の分布状況や年代を明らかにするため本調査は実施された。

調査地の敷地は南北約25m、東西約14mあり、残土置き場を考慮して、敷地のやや北東寄りの位置に南北10m、東西5mの調査区を設けた(図2)。

調査の着手日は7月3日であったが、前日に事業者側による現代盛土・攪乱部分の重機掘削が行われた。既存建物の基礎の一部が残されていたため、この作業にほぼ1日を要した。その後、人力掘削により、遺構検出およびその掘削を行った。その過程で調査区北寄りに東西溝、東壁沿いに大土塋が確認された。遺構の深さを確認するために一部にトレンチを入れたところ、両者ともかなりの規模を有しており、予定期間内に掘上げることは困難に思われた。また、掘削残土の仮置きさえできない状況であったため、6日に市教委と協議を行い、部分的に遺構の底を調査するに留めることとした。調査区の中央には奈良時代の土塋も確認された。当初、この遺構はその平面的な規模や形状から井戸の可能性が考えられたが、遺構の深さから土塋と判断した。当該時期の土器資料が多量に出土した。梅雨が影響し、調査終了は13日となった。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いている。本文・挿図中では「TP+〇m」としている。本報告では磁北と座標北、2種類の指北記号を用いている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

この調査地の現地表は、TP+20.1m前後にある。調査地の南面する道路は東に向かって緩やかに下降しており、調査地は台地高所の東縁に立地している。基本的には、現代の盛土や攪乱を除去すると、地山層の上面に古代～近世の遺構が検出される状況にある。しかし、調査区の西北部および西南部では、地表下約30～40cmに古代の包含層

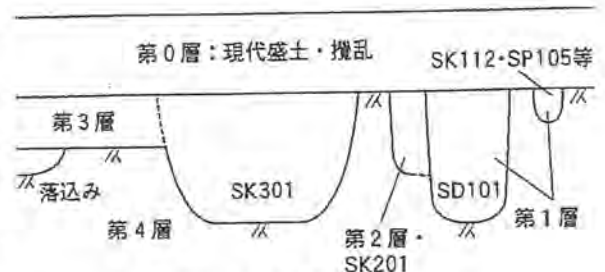


図3 地層と遺構の関係図

があり、さらにその下20～30cmほどで地山層が現れる。江戸時代後半からの大規模な造作による改変が著しいが、調査区各壁の地層断面から考えると、この状況が調査区域内の本来の姿であったと思われる。

第0層：現代の盛土および攪乱である。

第1層：近世の整地層および遺構の埋土である。

第2層：中世の遺構と推定されるSK201の埋土である。

第3層：褐灰色シルト層で、層厚は約20cmある。調査区の西南部と西北部に限られた範囲に残り、また、遺構の埋土として存在する。調査区南西部では本層の上部が火を受けて赤変していた。

第4層：地山となる中位段丘構成層である。調査区内では西南部に最高所がありTP+19.7mである。そこから-100cmの範囲は明黄褐色粘土質シルト、-140cmまでは明黄褐色極細粒砂～シルト質粘土、さらに-190cmまでには明緑灰色細粒～粗粒砂が見られる。

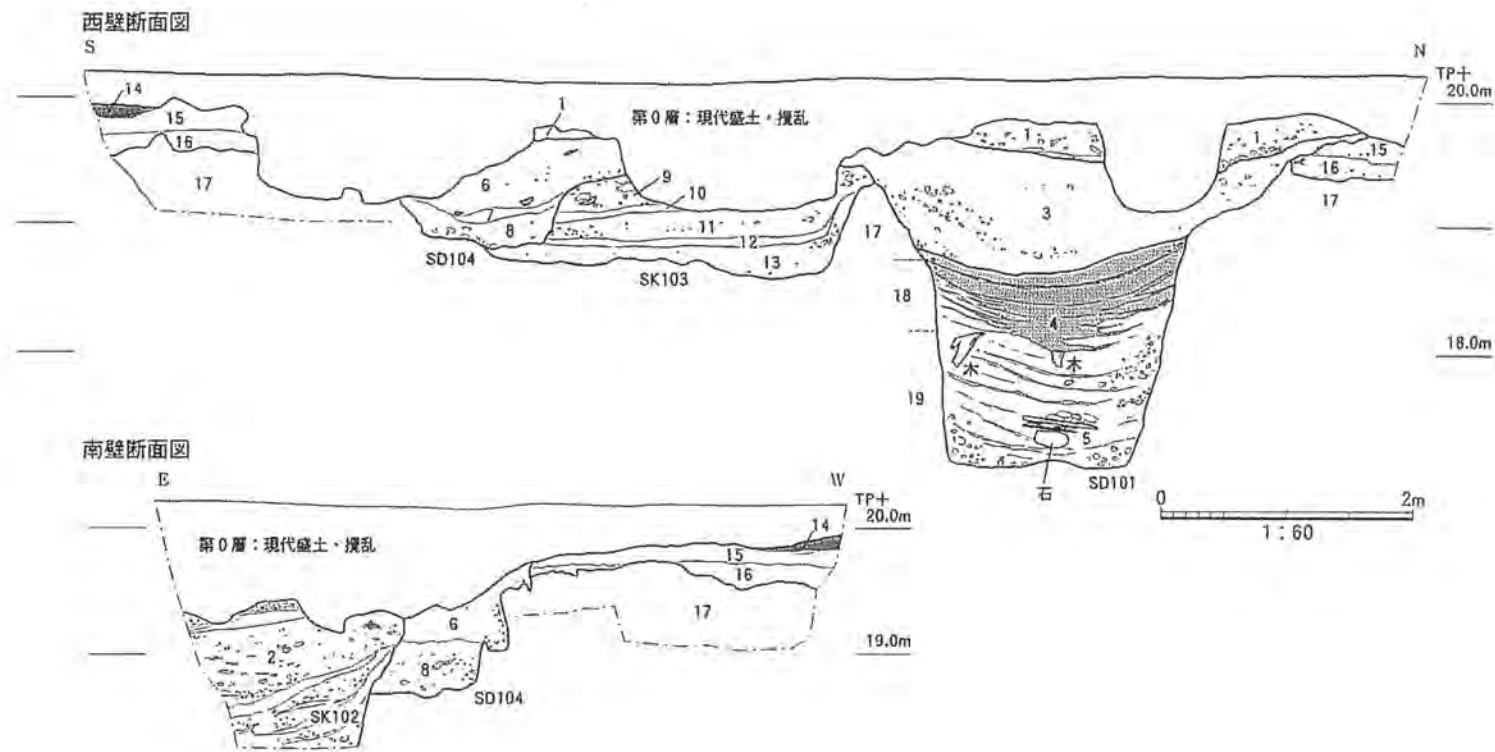
ii) 遺構と遺物

今回の調査では地山層の上面において遺構検出作業を行った。遺構群は古代のもの、中世・近世のものに大別することができ、前者に300番代の遺構番号、後者に200番代と100番代の遺構番号を付している。以下、両者を分けて報告する。

a. 古代(図5～9)

調査区の西北部および西南部に残る第3層の下面に浅い落込みが認められ、調査区中央には大型の土塋SK301がある。

SK301 調査区中央部にある直径2.5m、深さ0.9mの土塋である(図6)。底部分は直径0.9mほどの範囲が平坦に掘削されており、全体として楕円状の形状をしている。検出地点は攪乱によって本来の地山面が-0.5mほど下がっていると考えられるため、当初の遺構の規模は直径3m、深さ1.5m程度になろう。埋土は①～⑦層に分かれる。そのうち①・③・⑤の各層には、人為的に埋戻されたこ



- | | |
|---|---|
| <p>1 : オリーブ灰色 (2.5GY6/1) ~ 褐色 (10YR4/1) 極細粒砂 ~ 砂質シルト (第1層整地層)</p> <p>2 : 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質粘土 (偽礫を多く含む)、黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質粘土 (SK102埋土)</p> <p>3 : オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト ~ 砂質シルト (SD101埋土)</p> <p>4 : 暗灰色 (N3/0) シルト質粘土 (SD101埋土)</p> <p>5 : にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細粒砂 ~ 粗粒砂 (SD101埋土)</p> <p>6 : 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト ~ シルト (SD104埋土)</p> <p>7 : 灰色 (7.5Y4/1) シルト質粘土 (SD104埋土)</p> <p>8 : 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) ~ 黄灰色 (2.5Y4/1) 細粒砂 (SD104埋土)</p> <p>9 : 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂混り粘土質シルト (SK103埋土)</p> | <p>10 : 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト質粘土 (SK103埋土)</p> <p>11 : 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘土質シルト (SK103埋土)</p> <p>12 : 灰色 (N4/0) シルト質粘土 (SK103埋土)</p> <p>13 : 暗灰黄色 (2.5Y5/2) ~ 灰オリーブ (5Y5/2) 細粒 ~ 粗粒砂 (SK103埋土)</p> <p>14 : 橙色 (5YR6/6) 砂質シルト (15上部の赤変した部分)</p> <p>15 : 褐色 (7.5YR4/1) シルト (第3層)</p> <p>16 : 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土質シルト (落込み? 埋土)</p> <p>17 : 明黄褐色 (10YR6/8) 粘土質シルト (地山)</p> <p>18 : 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極細粒砂 ~ シルト質粘土</p> <p>19 : 明緑灰色 (7.5GY7/1) 細粒 ~ 粗粒砂</p> |
|---|---|

図4 西壁・南壁断面図

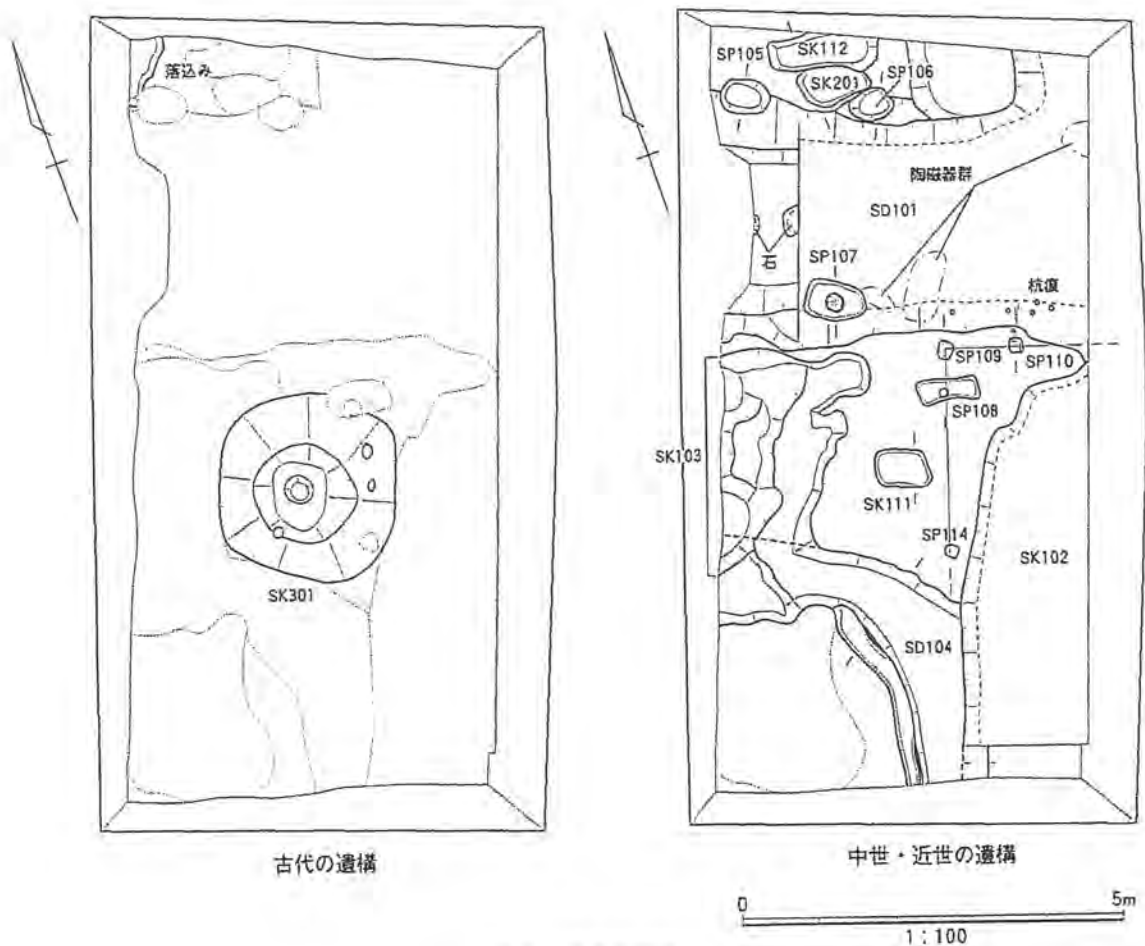


図5 遺構平面図

とを示す地山層起源の偽礫が全般に多く見られた。一方、④・⑥層はシルト質粘土層で、偽礫もほとんど含まない。遺構内に一定の水位があった時期の堆積とみられる。②層は下半部に⑤層に似た偽礫群を認めるが、細粒砂を主体としていて、主に自然堆積した部分であろう。⑦層は底付近にあり、地山層との境界に残る加工時形成層である。

この遺構からはコンテナパット8箱分の土器資料が出土した。その多くは①層からであったが、②・④・⑥層といった自然堆積層とみられる層準からは、完形に近い土師器皿・杯が出土している。これらの資料は平城宮土器Ⅲ[古代の土器研究会1992]を下限とするものとみられる。

①・②層の土器には、須恵器1~8・27、土師器9~26・28~31があり、土師器の占める割合が高い。まず須恵器を見ると、杯B蓋1、杯B2~5、杯G6、壺A蓋7、鉢8、大甕27がある。1は焼成不良で土師器に類似する焼成具合である。2~5は高台が底部外周よりも若干内側に付く。6は飛鳥時代の土器である。7は口縁端部が内側につまみ出されていて、皿の可能性もある。8は体部が鉄鉢形をした鉢であるが、底部が尖らず、平底となっている。27は大甕の口縁部で、大きく外反したのち、端部が上下方向に鋭くつまみ出される。古墳時代中期のものである。

土師器には杯A9~13、皿14~18、杯B19~21、鉢22・23、壺A24、甕25・28・30、甑26、鍋29、羽釜31がある。杯A・皿は底部と体部との境界付近をヘラケズリしており、器表面の残りのよい個体では内面に輪状暗文・放射状暗文が認められる。杯B・鉢・壺Aの外面には横方向のヘラミガキ

が施されている。甕26の口縁部内側には細い粘土帯が巡る。甕30には体部最大径位置に把手が付く。羽釜31は生駒西麓産の胎土である。

②層からは土師器の杯A32～36、皿37・38、二彩陶器39・40が出土した。39は口縁部または脚台部、40は体部で、両者は同一個体のもので、花瓶形の器形かと推測する。

④層からは製塩土器41、土師器杯A42・皿44～46が出土した。土師器皿3点は正位置を保って出土し、口縁部の一部分を欠くものの、ほぼ完形である。46の内面全体には輪状暗文があるが、それと重なる位置に「中」字状の針描きが焼成後に施されている。これとよく似た描きが大坂城跡下層の調査(OS90-50次)の土師器鉢[大阪市文化財協会2003; p.118]にもあり、何らかの意味をもった記号と考えられる。

⑤層からは土師器杯A43、⑥層からは須恵器イイダコ壺47が出土した。

本遺構は地山層を明黄褐色細粒砂混り粘土質シルトから黄色粘土混り細粒砂にかけて掘込んでいるが、湧水深度までは達していない。長原遺跡(NG95-2次)でも13世紀前半の事例であるが、直径約5m、深さ約1mの浅い土塋から、完形に近い瓦器碗が数点出土し、灌漑用に設けられた水溜めと考えられているものがある[大阪市文化財協会2006b; p.140]。④・⑥層といった水成堆積層が底から0.4～0.5mの高さまで分布することから、相応の水位があったと考えられ、水溜めとして機能したものと思われる。そして、口縁部の打欠きから祭祀に供されたと思われる皿・杯の投棄後に、一

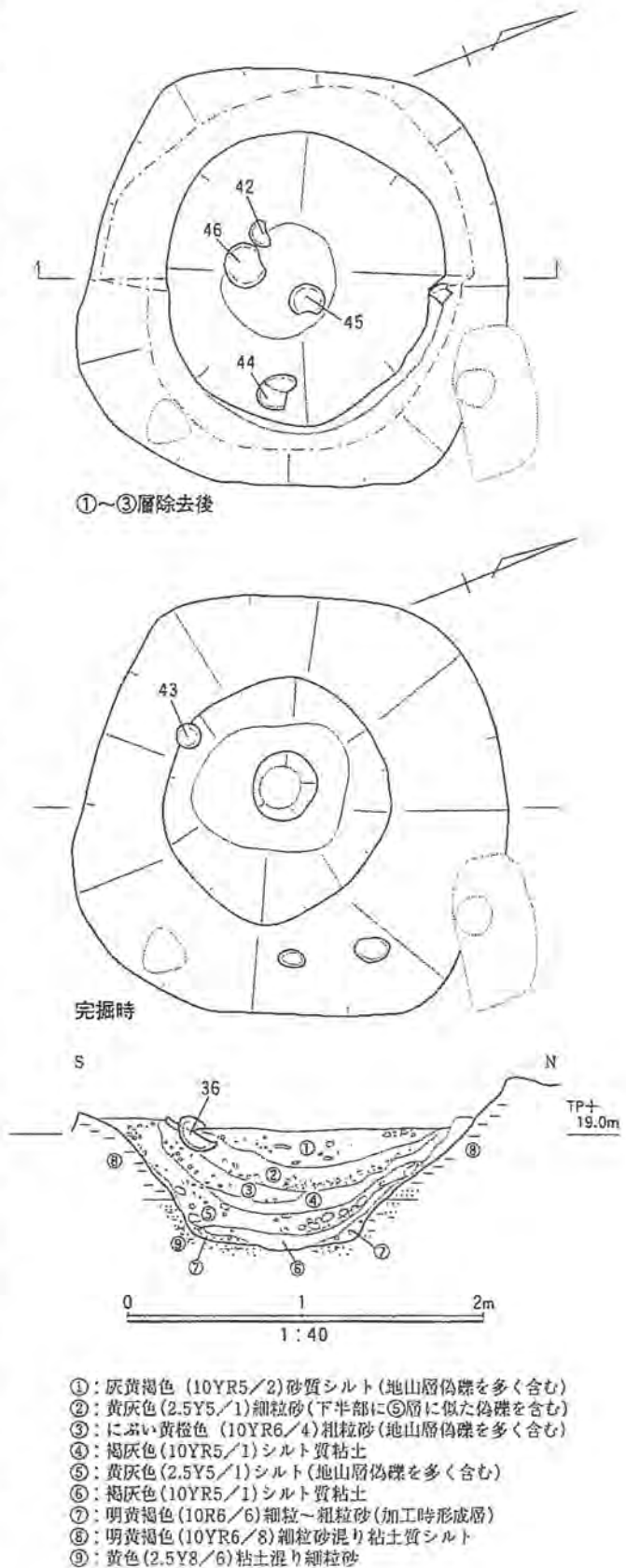


図6 SK301平面・断面図

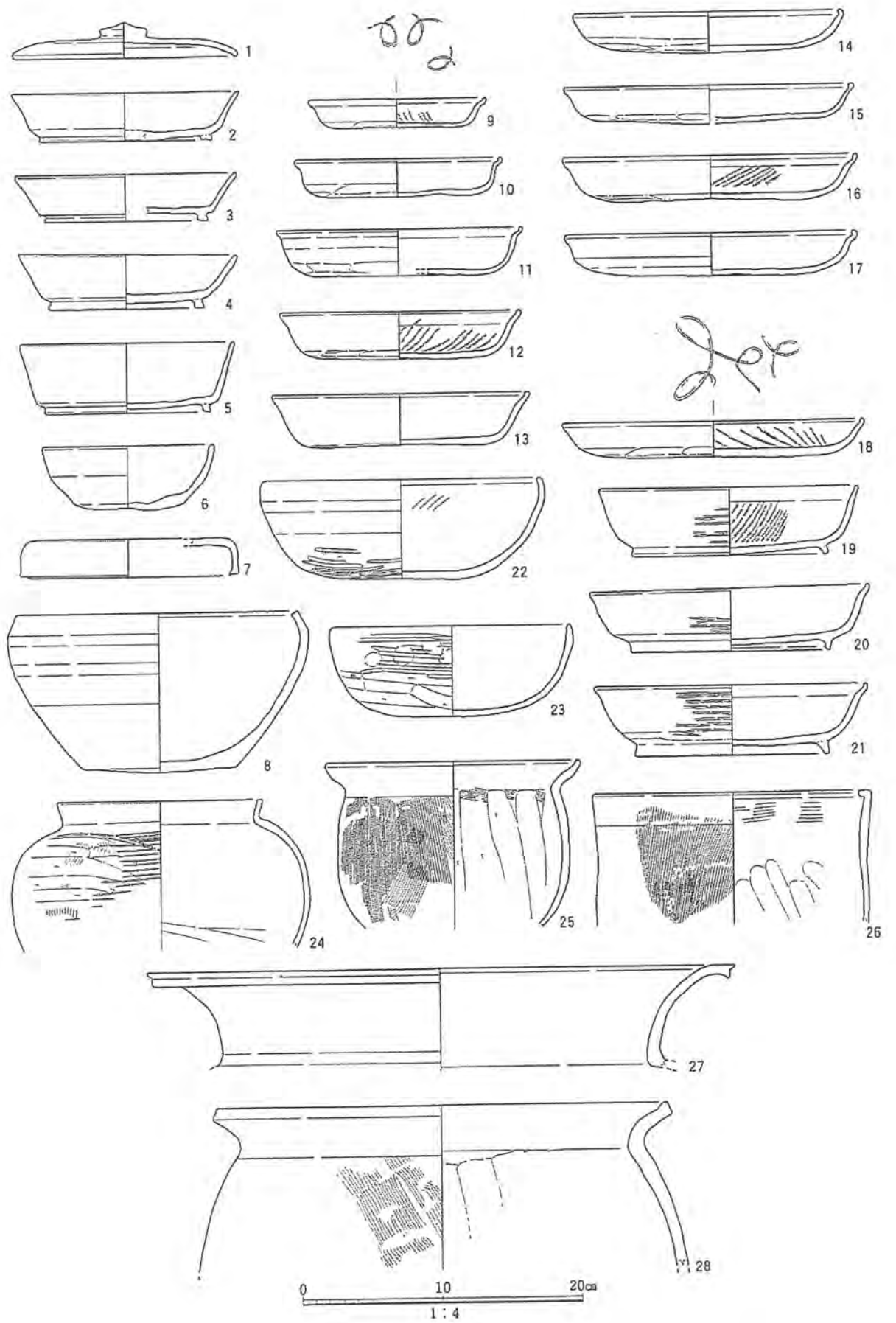


图7 SK301①·②層出土遺物(1)

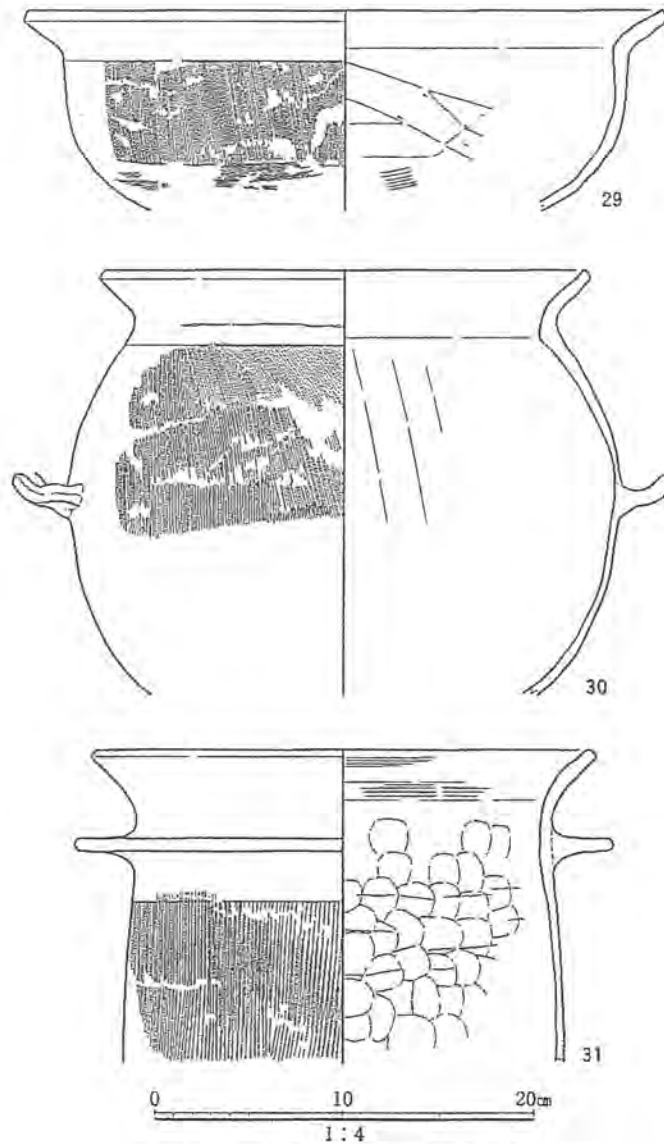


図8 SK301①・②層出土遺物(2)

部を埋戻すという行為を何度か繰り返したのち、廃棄土壌として使われ、役割を終えたものと推測する。

b. 中世・近世(図5・10・11)

調査地の位置は江戸時代に南平野町と呼ばれたことが示すように、豊臣秀吉の城下町建設の一環として、平野郷の住人が1583(天正11)年に移住させられた地域である[内田九州男1989]。豊臣期の遺構は確認できなかったが、江戸時代後葉以後の溝・土塙・柱穴といった遺構が見られた。

溝

SD101 調査区北半にある東西溝で、東壁位置で北に屈曲する可能性もある。幅3.7m、深さ2.5mある。肩位置から-0.7mまでは約45度の傾斜であるが、それ以深になると垂直に近い傾斜となる。底は平坦で、幅1.3mある。埋土は大きく二分され、傾斜変換点より上方は人為的な埋戻し層、下方は水成堆積層である。上層には18~19世紀の土器・陶磁器が多量に含まれていた。中には直径数十cmから1mほどの範囲にまとまる個所がいくつかあり、廃棄単位であったと推測されるものもあった。

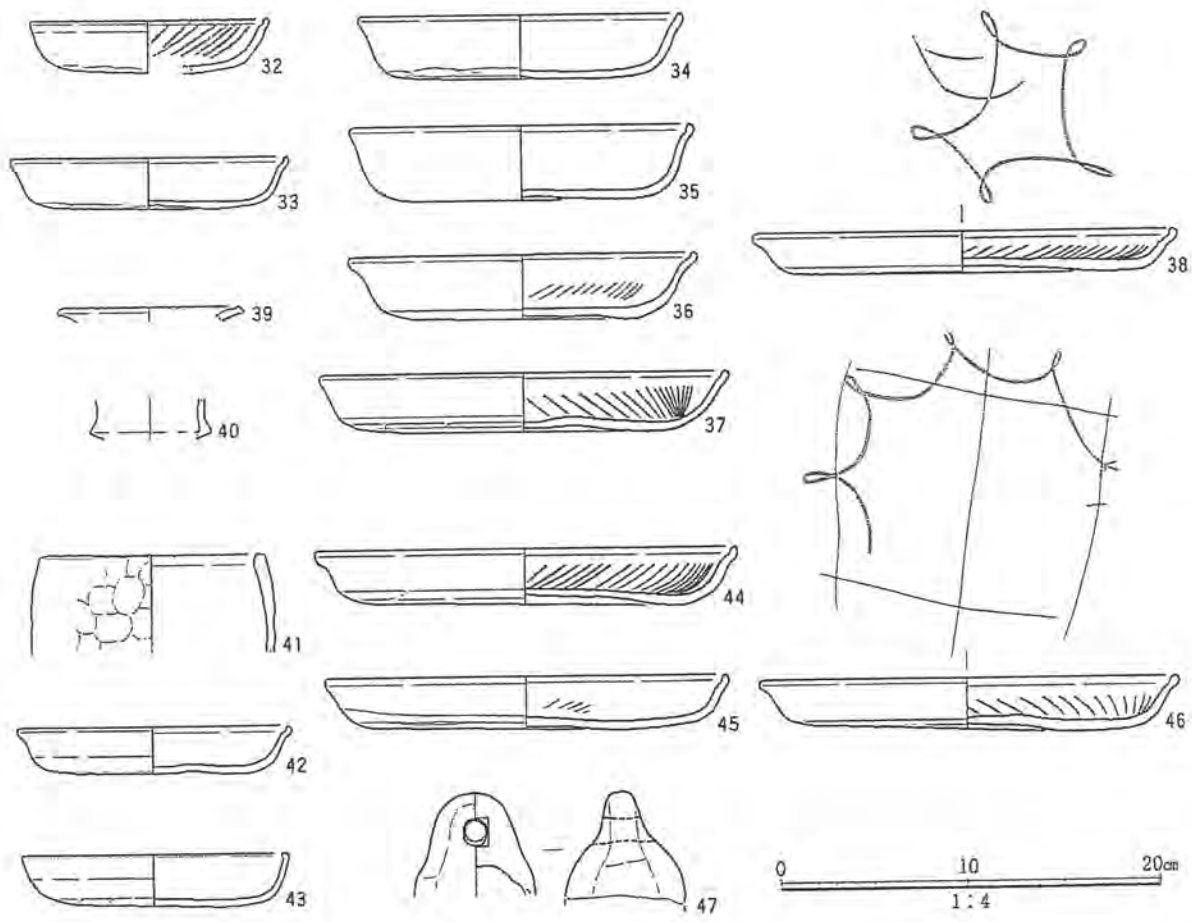


図9 SK301②・④～⑥層出土遺物
 ②層(32~40)、④層(41・42・44~46)、⑤層(43)、⑥層(47)

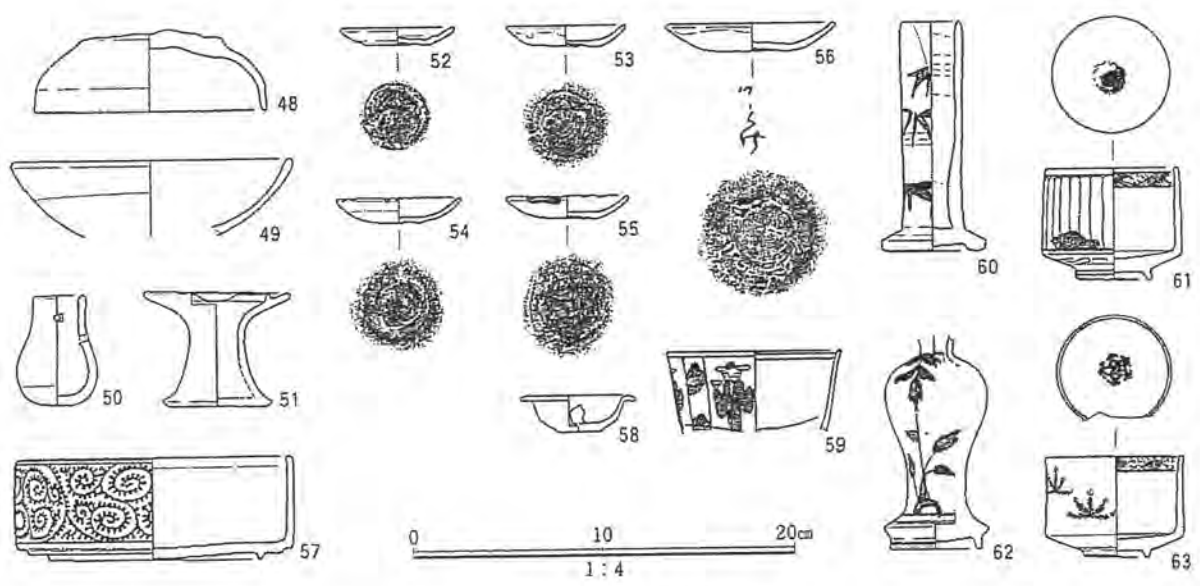


図10 中世・近世の遺構出土遺物
 SK201(48)、SK102(49・50)、SD101(51~63)

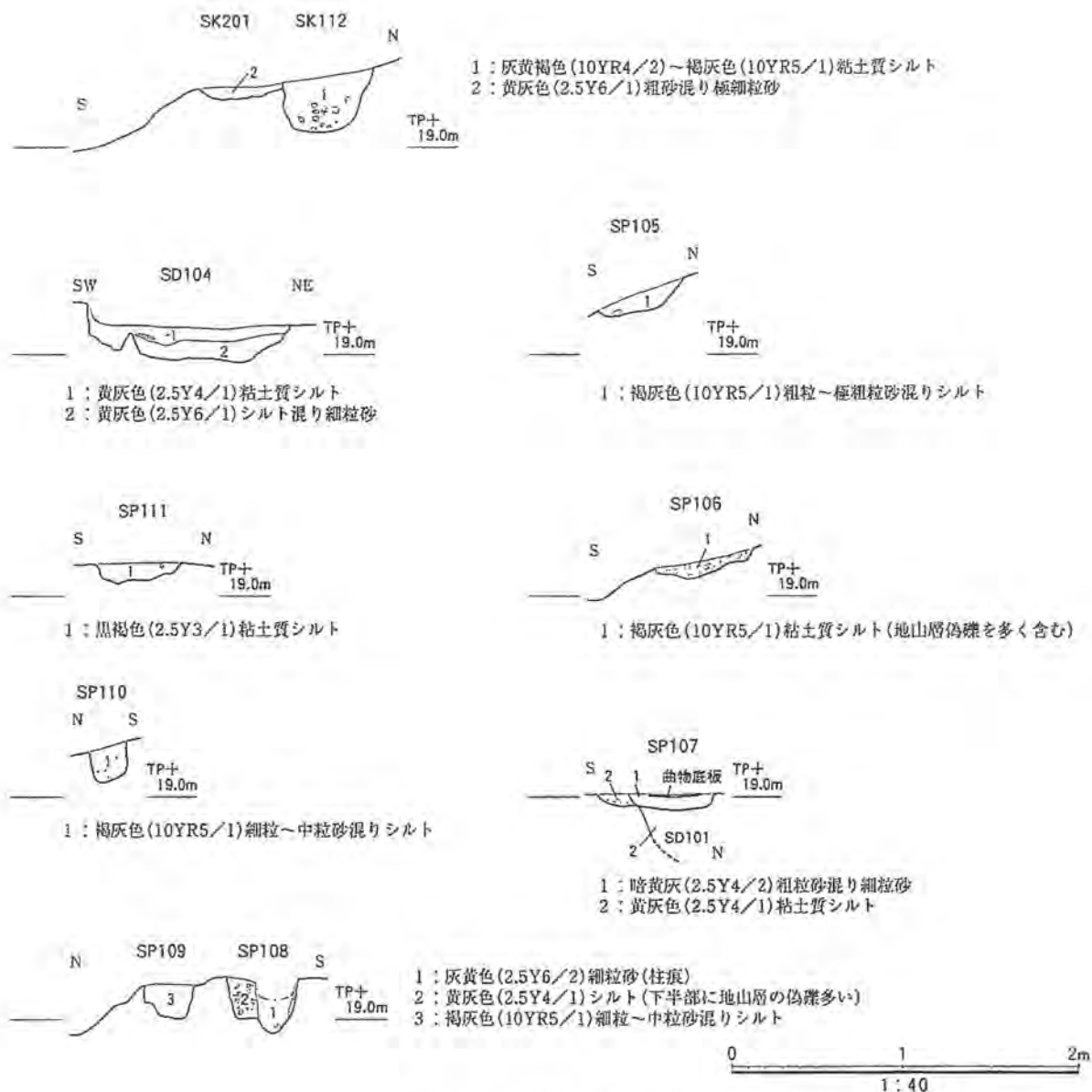


図11 中世・近世の遺構断面図

下層については、調査区西壁沿いに幅1mのトレンチ調査を行うに留めたが、遺物の出土傾向は上層に比べて極端に少ない。19世紀前半の肥前磁器御神酒徳利がみられ、その時期までは機能していたことがわかる。

51~56は軟質施釉陶器の灯火具で、52~56が灯明皿、中空に作られた51はそれを受ける台であろう。灯明皿の底部にはみな糸切り痕がある。56の底部外面には「□□け」という墨書がある。58は関西系陶器の乗燭で見込み中央に捻りを加えられた突起が付く。57・59~63は肥前系磁器で、57は外面に蛸唐草文が巡る段重、59は扇を持った唐人風の人物が描かれた碗、60は竹文の線香筒、62は草文の御神酒徳利、61・63は筒茶碗で口縁部内側に四方禪文、見込みにコンニャク印判がある。62・63は埋土下層、その他は上層から出土した。

SD104 南壁中央から北に3m延びた後、西壁側に向う溝である。東肩部はSK102に破壊されているが、西壁沿いにあるSK103に対してはその南肩を掘込んでいる。西壁で確認できる溝幅は1.3m、

深さは0.4mである。南北に掘られた部分では西肩に沿って幅0.2mの小溝が伴う。埋土は2～3層に分かれるが、最上層はSD101の埋土上層と類似し、同時期に埋戻された可能性がある。仮にそうならば、SD101とは一連の水路で、基幹と枝という関係にあったことも考えられる。

土壌

SK201 調査区の北端部で土壌SK201を検出した。この遺構の埋土は灰黄色粗粒砂混り極細粒砂で、包含する遺物から近世の遺構といえる100番代のものとは層相を異にする。また、遺物に須恵器杯G48のほか産地不明陶器・土師質土器が出土したことから、中世に属するものとした。北肩部をSK112に切られるが、東西0.9m、南北は推定0.4m、深さ0.1mの規模である。

SK102 調査区南壁内から東壁に沿って掘られた溝状の土壌である。南北5.5m以上、東西1.5m以上あり、南壁沿いに深掘りしてみたが、溝肩から1.1m掘下げても底の検出には至らなかった。埋土には数枚の水成堆積層を挟むことから、完全に埋るまでにはある程度の時間幅が考えられる。軟質施釉陶器碗49、小型の陶器壺50のほか埋土最上部からは明治以降とみられる葡萄唐草文をあしらった植木鉢が出土している。

SK103 西壁中央部付近にある大型の土壌である。遺構の南肩はSD104に壊され、また、北・東側も攪乱の影響で、遺構の輪郭も歪なものとなっている。西壁断面にみる埋土最下部には、層厚25cmの細粒～粗粒砂の水成堆積層が見られ、水溜りであったと思われる。南北3.7m、東西1.9m以上、深さ0.7mほどの規模である。SD101の掘削によってその役目を終えたものと推測する。

SK111 調査区中央にある方形土壌で、東西0.7m、南北0.5m、深さ0.1mある。

SK112 調査区北壁沿いにある長方形土壌で、東西1.4m、南北0.6m、深さ0.3mある。横断面形がU字形をする。埋土は灰黄褐～褐灰色粘土質シルトである。

ビット

SP105・106 SD101の北法面にある直径0.5mほどの小穴で、深さ0.1mある。

SP107 SD101の埋戻しが休止した一時期に掘削された小穴で、底には直径30cmの曲物の底板が敷かれていた。

SP108・109・110・114 掘立柱建物を構成する柱穴とみられる。SP108には長方形の掘形が残るが、その他は方形の柱痕跡のみである。

3) まとめ

今回の調査成果としては、奈良時代中葉の土壌SK301と江戸時代後半の水路SD101を検出したことが大きい。前者は当該時期の遺構の拡がりを示すとともに、まとまった土器資料を提供し、後者はこれまで知られていなかった水路が上町台地の高所に掘削されていることを明らかにした。

SK301出土の土器が示す平城宮土器Ⅲは8世紀第2四半期に当り、後期難波宮が存在した時期である。その中に花瓶形かとみられる二彩陶器片も含まれていた。奈良～平安時代初めの掘立柱建物群が検出されたUS06-1次調査でも、建物の1棟から緑釉(単彩)陶器杯が出土している。こうした施釉陶器が難波京の推定域内の南部で確認されはじめたことが注意される。

一方、SD101は上町台地の脊梁部を東西に掘込む水路である。この調査地の西30mには熊野街道が南北に通っており、さらに100m進めば谷町筋で、その先は台地西側斜面である。このような場所に、固い地山層を2m以上掘削して水路を設けた意図が明らかでない。また、19世紀前半まで機能していたにもかかわらず、1886年の『大阪実測図』にはその痕跡を残していない。

予想を上回る調査成果をうることができた一方で、今後の調査に投げかける課題も生まれた。冒頭にも記したように、上本町遺跡周辺の調査はこれから特に注目されるものとなってこよう。

参考文献

内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：『よみがえる中世』2、pp.34-55、平凡社

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81-4次)発掘調査概報」：『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57-62.

大阪市文化財協会2003、『大坂城跡』Ⅶ

大阪市文化財協会2006a、『昭和住宅株式会社による建設工事に伴う上本町南遺跡発掘調査(US06-1)報告書』

大阪市文化財協会2006b、『長原遺跡発掘調査報告』XV

大阪市文化財協会2007、『上本町遺跡発掘調査(UH07-1)報告書』

古代の土器研究会1992、『古代の土器1 都城の土器集成』

SK301検出状況
(南から)



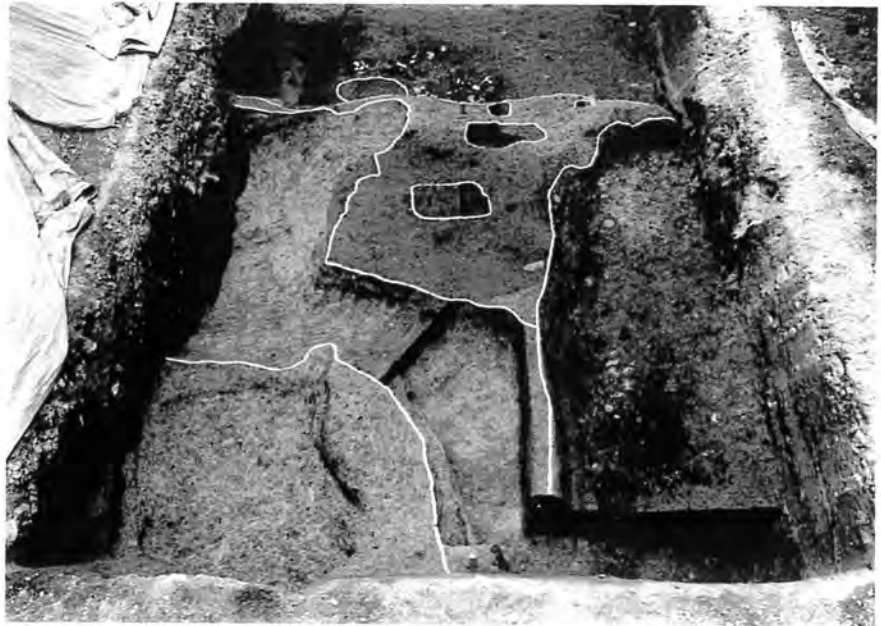
SK301④層内
遺物出土状況
(北東から)



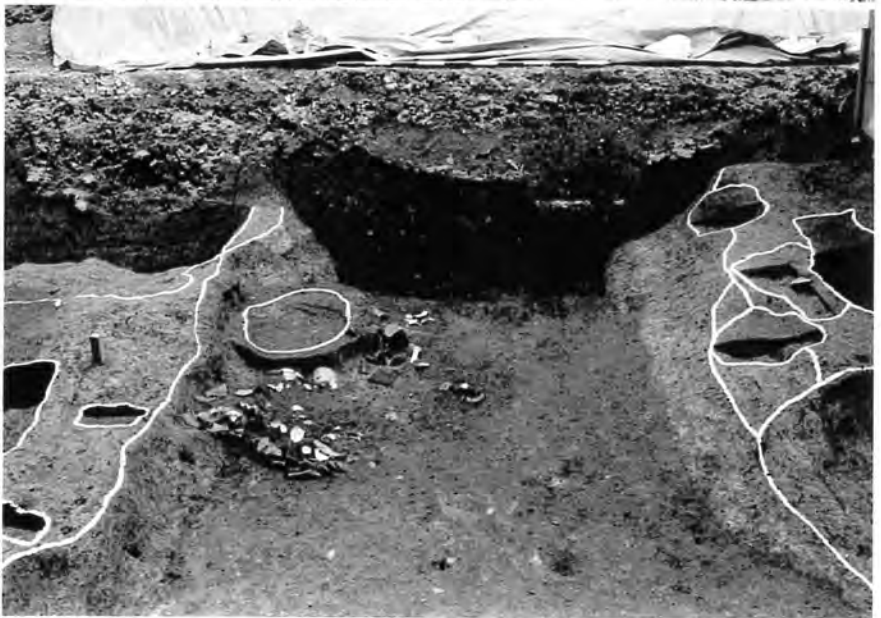
SK301完掘状況
(東から)



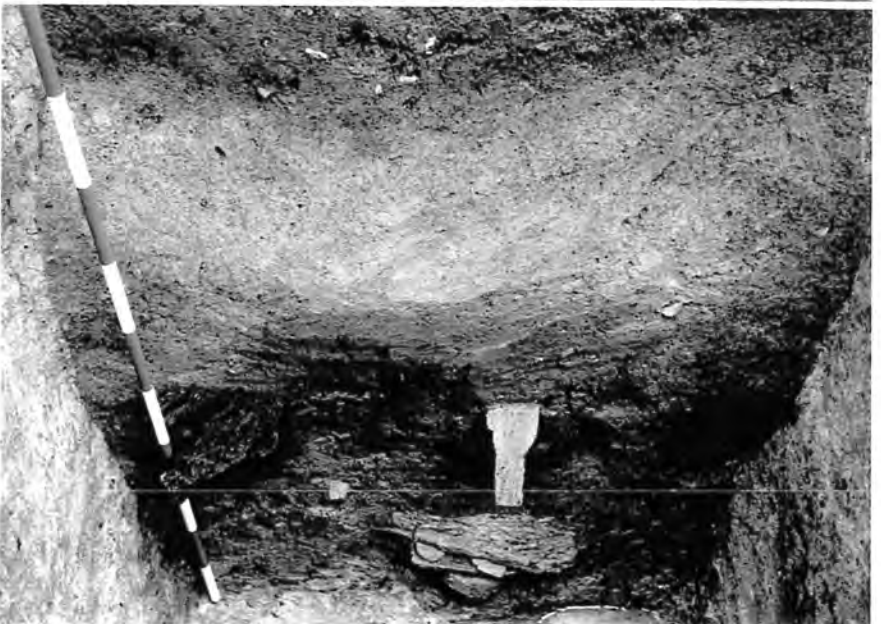
調査区南半部の近世遺構
(南から)



調査区北部の近世遺構
(東から)



SD101断面下部
(東から)



上本町遺跡発掘調査(UH07-5)報告書

調査箇所 大阪市天王寺区東高津町 7-8・7-10・7-11・7-12・
7-13
調査面積 50m²
調査期間 平成20年2月4日～2月6日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は千日前通の北側、上本町遺跡でも北部に位置する(図1)。大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下0.8mで地山に至り、遺構が確認されたことから、本調査を行うこととなった(図2)。

2月4日に近現代の地層を重機で除去し、ほぼ地山面直上に至った。以後、人力で地層と地山面上の遺構を精査した。また各層の堆積時期を知るため、調査区の南西部を人力掘削し、遺物採集に努めた。2月6日に現地におけるすべての作業を完了した。

当調査で使用した方位は磁北だが、位置図のみ『大阪市地形図』に準拠して指北記号に座標北を用いた。水準はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文・挿図中では「TP+〇m」と記した。

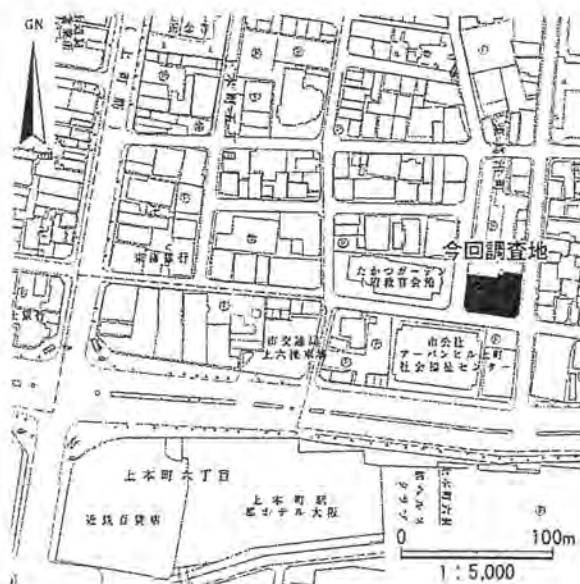


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

2) 調査の結果

i) 層序

本調査地の基本的な層序は以下のとおりである(図3・4)。

第0層：層厚15～70cmの現代盛土層で、コンクリート片を含む。

第1層：層厚10～20cmのにおい黄褐色シルトの現代表土である。

第2層：層厚2～6cmの灰黄褐色シルト～細粒砂層である。

第3層：層厚20～30cmのにおい黄褐色シルト混り中粒砂層で、関西系陶器など19世紀以降の遺物を含む。

第4層：明黄褐色粗粒砂混りシルトの地山層である。

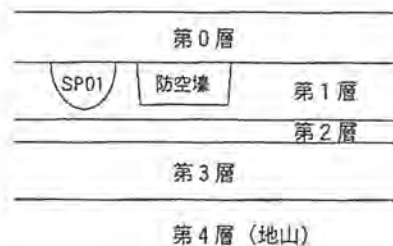


図3 地層と遺構の関係図

ii) 遺構と遺物

検出遺構(図5)

すべて第4層上面で検出した近代以降の遺構である。

SP01:長径0.5m、短径0.3m、深さ0.3mのピットである。壁面が焼け焼土が詰っており、ガラス・モルタル・金属製円板・碇子、瀬戸美濃焼磁器が出土し、第2次大戦時に被災した遺構と考えられる。

SK02:東西2.0m以上、深さ0.3m以上のに黄褐色細粒砂を埋土とする土壌で、磁製の小型レンゲが出土した。

SK03:東西1.2m、南北0.5m以上、深さ0.1mの灰黄褐色シルトを埋土とする土壌である。

防空壕:SK03:東西1.7m以上、南北2.1m、深さ1.2mを測り、北側から主として第1層と第4層の土で埋め戻されている。

3)まとめ

当調査地は調査区を除いたほとんどの部分で、近代のビルの基礎や地下室等が存在し、唯一調査区のみが旧状を伝えており、周辺の歴史を考える上で重要な調査であった。地山直上の第3層の時期が19世紀と確認できたことで、近代の区画整理などで当地が削平された可能性が出てきた。

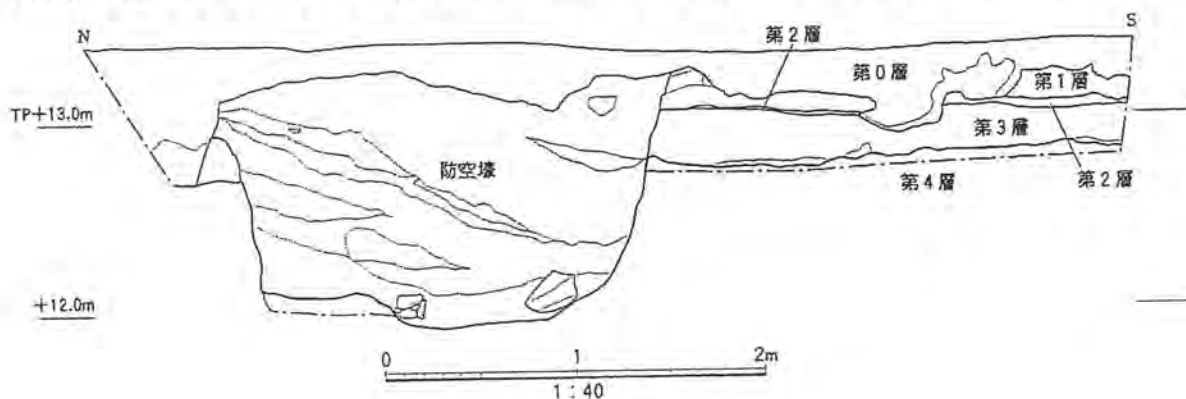


図4 調査区断面図

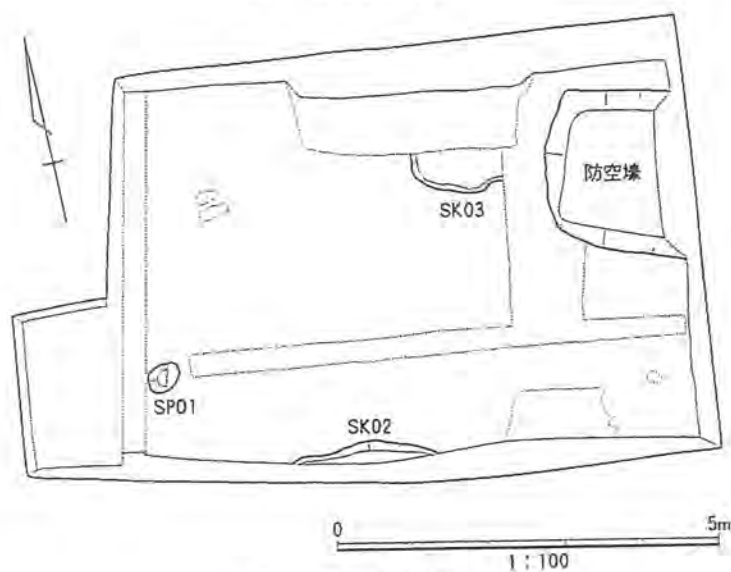


図5 調査区平面図

全景
(西から)



SP01
(西から)



防空壕断面
(西から)



V 浪 速 区

埋蔵文化財試掘調査(RJ07-1)報告書

調査個所 大阪市浪花区下寺2丁目8・9、3丁目1
調査面積 約20m²
調査期間 平成19年8月9日～8月10日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の西側にある大阪湾沿いの砂堆に位置し、東の上町台地上の伶人町遺跡では古代から中世の遺構が稠密に存在している(図1)。近接地で発掘調査が行われたことはないが、最近では、北北西の高津御蔵跡(KD07-1)や西方の南海難波駅南の船出遺跡(FD04-1・05-1)、木津市場跡の敷津遺跡(SX06-1)で発掘調査を行い、海浜部における古墳時代中期以降の陸化のようすや中世の開発の状況などに関する資料が得られ始めている。

今回の試掘は、市営住宅敷地での遺構と遺物の有無やその深さを把握し、遺跡の分布状況についての基礎的データを得ることを目的とした。試掘は、解体された住棟の位置を外して南側敷地の2箇所(トレンチ1・2)、北側敷地の4箇所(トレンチ3~6)で行った(図2)。報告で使用した方位は座標北、標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記している。



図1 調査地位置図

2) 調査の結果

各トレンチで共通の地層を対比し、表土を除く地層を第1~8層に区分した(図3)。試掘時の掘削深度は地表から1.7~1.8m(TP+1.0~1.1m)である。

第1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混り粗粒砂層で、層厚は15~35cmである。2層程度に区分できるところがある。近世以降の島の作土であろう。

第2層：褐色(10YR4/4)シルト混り粗粒砂層で、層厚

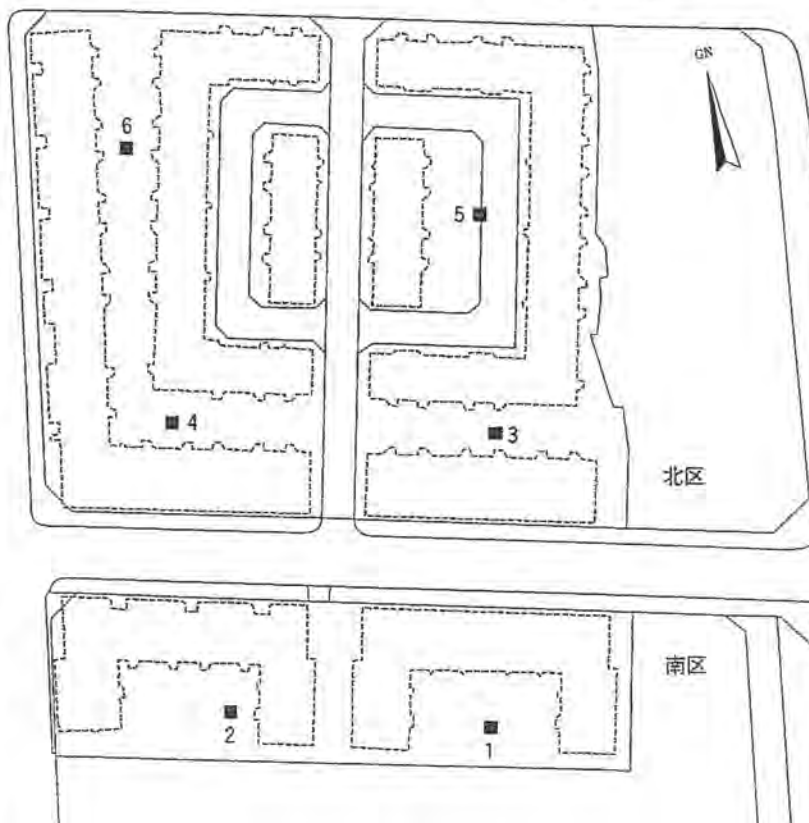


図2 試掘トレンチ位置図(約1:1,000)

は7~35cmである。これも2層程度に区分できるところがある。中世~近世の畠の作土であろう。トレンチ5では、灰黄褐色(10YR5/2)粗粒砂混りシルトの水田作土と推定される地層がこの層準に相当すると思われる。

第3層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粗粒砂混り粘土~シルト層で、層厚15~28cmである。2~3層に区分できるところがある。水田の作土である。中世の瓦器や土師器を包含し、トレンチ3では布目痕のある中世以前の丸瓦片が出土した。トレンチ5で本層の層準に当るのは、暗褐色(10YR3/4)シルト質粗粒砂層(層厚6cm)とそれを覆う水成の黄褐色(10YR5/6)粗粒~極粗粒砂(層厚12cm)と思われるが、これは次の第4層の層準に当るかもしれない。

第4層：暗褐色(10YR3/3)シルト混り粗粒砂層で、層厚は4cmである。トレンチ1にある。

第5層は砂堆の低いところ、後背湿地に堆積した地層と推定される。このうち、元来の堆積そのままのものを第5b層、耕起等により攪拌された部分を第5a層と呼ぶ。トレンチ2には第5b層が残っておらず、他のトレンチより第5層が高かったと考えられる。中世の遺物が多く出土したのが第5層で、西側のトレンチ2・4・6とトレンチ3で遺物は多く、トレンチ1・5では遺物は少ない。砂堆の上面と第5層上面の高さは敷地内で微妙な高低差があり、これが遺物の多少など、遺跡の状況に影響を与えていた可能性がある。

第5層からは、あまり退化していない高台をもつ瓦器椀と糸切り底の土師器皿、馬または牛の歯などが出土し、古代の土器がごく少量含まれている。

第5a層：黒褐色(10YR2/2)細粒砂~小礫混りシルト層で、層厚は7~16cmである。

第5b層：黒褐色(10YR2/2)シルト~細粒砂層で、層厚は5~10cmである。直径5cm程度の円礫が混る。

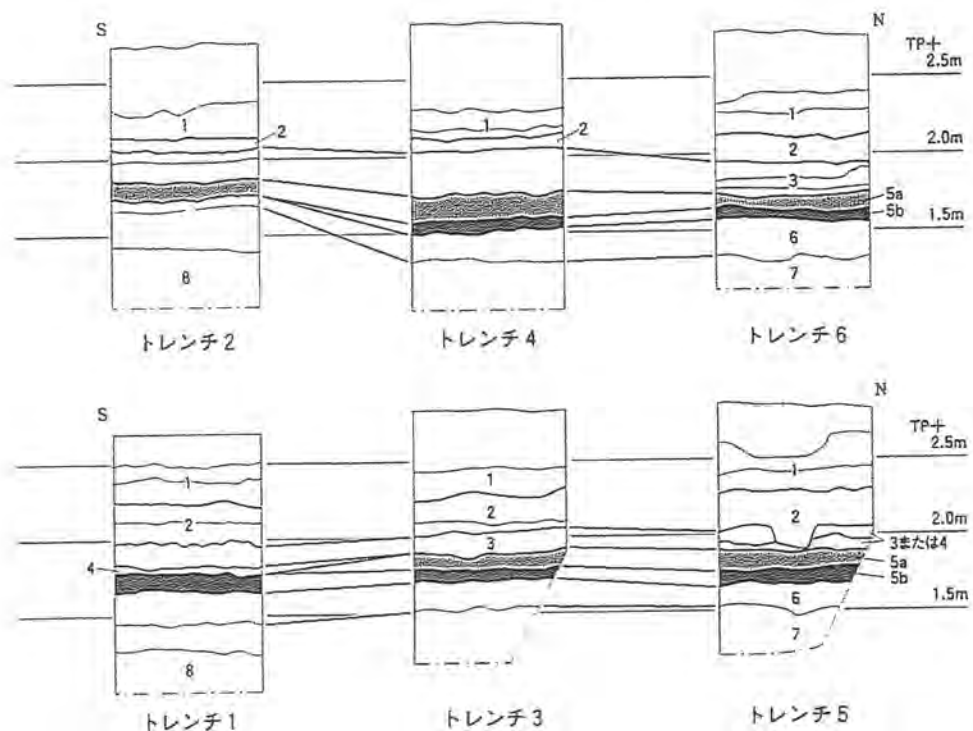


図3 トレンチ断面図(1:50)

第6層：第6層以下は砂堆を形成する自然堆積層である。その最上層で植物等の擾乱を受けていた部分を第6層とした。暗褐色(10YR3/4)中粒砂層で、層厚は8～28cmである。土器は出土していないが、トレンチ6で木材があった。

第7層：にぶい黄褐色(10YR4/3)中粒～粗粒砂層で、層厚20cm以上である。

第8層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫層で、層厚40cm以上である。礫は最大で長径4cm程度である。

3)まとめ

試掘トレンチでは遺構は検出されていない。しかし、遺物の出土状況から、中世の段階にこの敷地内や近くに人が住んでいたことは間違いなく、第6層上面で中世以前、第5～3層で中世の遺構が存在する可能性がある。

今回の調査地は、隣接する伶人町遺跡がある上町台地上と異なり、難波砂堆の船出遺跡や敷津遺跡と遺跡の立地や開発の歴史の上で似ていると思われる。船出遺跡や敷津遺跡では古墳時代中期の土器や埴輪も出土しているが、今回の試掘では古代以前の遺物はほとんど見つかっておらず、中世から本格的な開発・居住が始まったのではないかと推測される。

北区試掘のようす
(南東より)



トレンチ6南壁
(北より)



トレンチ2北壁
(南より)



埋蔵文化財試掘調査(RJ07-3)報告書

調査個所 大阪市浪速区下寺3丁目4-20・4-21
調査面積 約12m²
調査期間 平成20年1月10日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は上町台地の西に湾岸流によって形成された砂堆上に位置する(図1)。東約300mにある縄文時代の波蝕崖と推定される台地西斜面の上には伶人町遺跡があって、古代～中世の遺構が数多く発見されている。北約300mのRJ07-1次試掘調査では、少量ながら中世の遺物が出土している。今回の調査は大阪市建設局中央工営所旧日本橋出張所敷地内において、埋蔵文化財の有無および地層の堆積状況を把握するために行った。敷地内に3箇所のトレンチ(1～3; 図2)を設定し、各々で地層の断面観察を行ったが、第2トレンチについては旧建物の基礎が残る部分に相当し、掘削できなかった。本報告で用いた方位記号は座標北を示す。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+〇mと記した。

2) 調査の結果

各トレンチの所見から、表土を除く地層を第1～3層に区分した(図3)。

第1層：黄褐～オリーブ褐色礫混り中粒～粗粒砂からなる作土層である。層厚は10～50cmで、第1トレンチでは本層の下面で溝が検出された。溝の方向は東南東～西北西であった。

第2層：オリーブ褐色礫混り粘土質細粒～中粒砂からなる作土層である。層厚は約15～40cmであった。

第3層：黄褐～明黄褐色砂礫からなる地山層である。第1トレンチでは平行ラミナ・上方細粒化が顕著であった。海成層である。

各層準からは遺物が出土しなかったため、帰属する年代は不明であるが、層相からみて第1・2層は近世のものであろう。



図1 調査地位置図

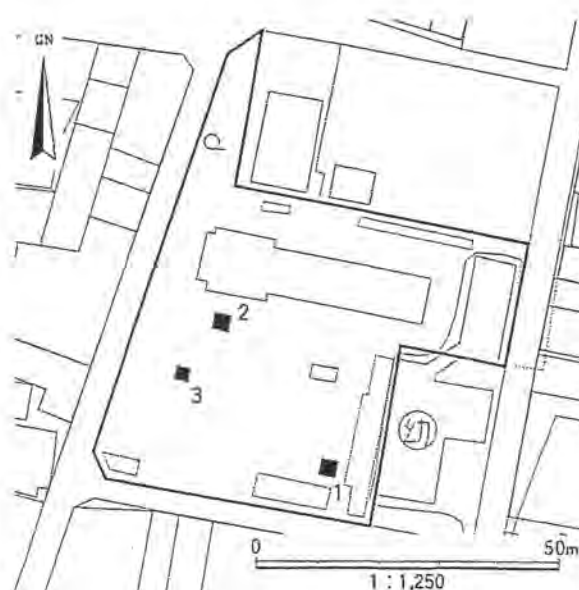


図2 調査区位置図

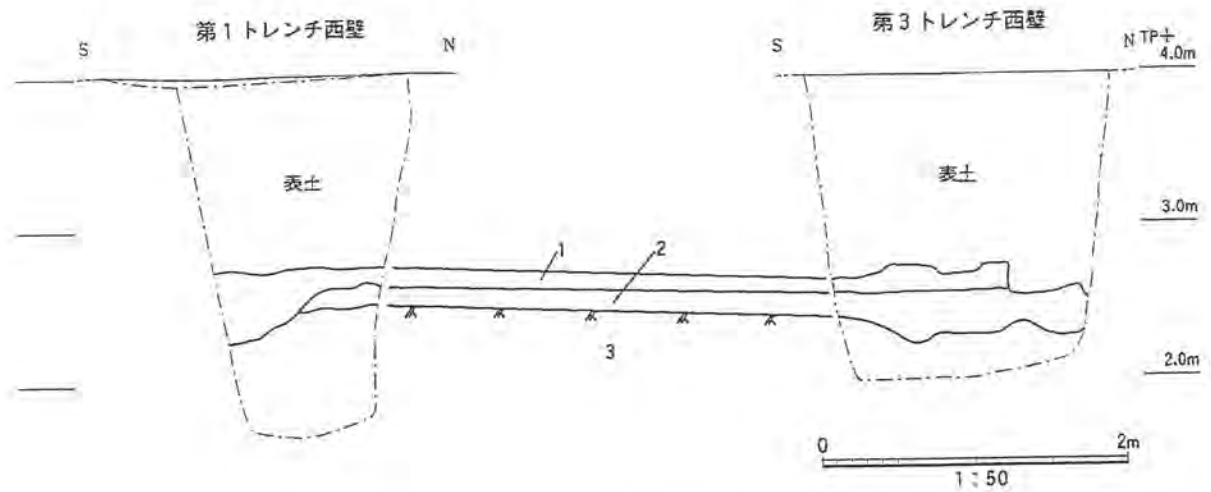


図3 地層断面図

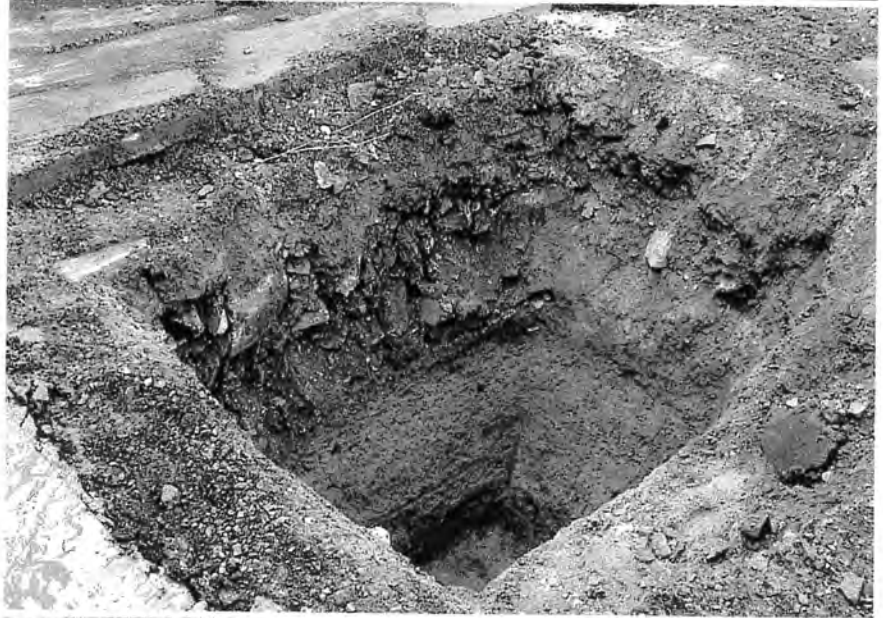
3) まとめ

今回の試掘調査では遺物は出土しなかったものの、近世とみられる作土層を確認することができた。溝はこの作土層の耕作に係るものであろう。周辺の陸地化、土地利用の開始は古墳時代以降と考えられるが、本調査地での確実な土地開発の開始は近世に下る。しかし、中世以前の地層が近世に耕起された可能性はある。

調査地
(南西から)



第1トレンチ
(北東から)



第3トレンチ
(東から)



VI 淀川区

埋蔵文化財発掘調査(JH07-1)報告書

調査箇所	大阪市淀川区十八条1丁目4-6
調査面積	100㎡
調査期間	平成19年11月21日～29日
調査主体	財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者	文化財研究部次長 南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

本調査は十八条遺跡での最初の本格的な発掘調査となる。本遺跡の南には東三国遺跡があり、HM98-1次調査で古墳時代初めの土器と15世紀頃の屋敷地と関連する溝[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000]、HM97-1次調査で弥生時代から15世紀頃の土器が出土しているが[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999]、大阪市側では周辺で他に発掘調査はない(図1)。一方、神崎川を挟んだ北東の五反島遺跡では、南吹田下水処理場の増設に伴い大規模な発掘調査が行われ、平安～鎌倉時代の堤防跡や祭祀遺構の発見などの大きな成果があがっている[吹田市教育委員会1996・2002・2003]。調査地点は南の地下鉄東三国駅周辺などよりも標高がわずかに高く、周辺は神崎川流域では居住条件の良い場所であったと考えられる。

平成19年10月22日、マンション新築に先立って大阪市教育委員会が行った試掘調査では、現地表から約1.6m以下で中世以前の遺物包含層が確認された。このため、敷地北東の立体駐車場建設予定地の100㎡を対象に発掘調査を行うことになった(図2)。

調査では、現地表から約1.6mの深さの第1層上面までを事業者側で掘削し、第4層の上面までの約30cmの間を平面的に調査した。

その後、東壁と南壁のトレンチで地層の堆積状況を確認した。また11月28日に、調査地の近くにある東三国小学校6年生約40名が発掘現場を見学した。

本報告で使用した方位は図1が座標北で他は磁北、標高はT.P.値(東京湾平均海水面値)でTP±0mと記している。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

ここでは本調査を開始した現地表より深さ約1.6m以下の地層を記す。第2層を除けばプライマリーな水成層である。

第1a層：黄褐色(2.5Y5/4)中粒砂層で、層厚は10cmである。

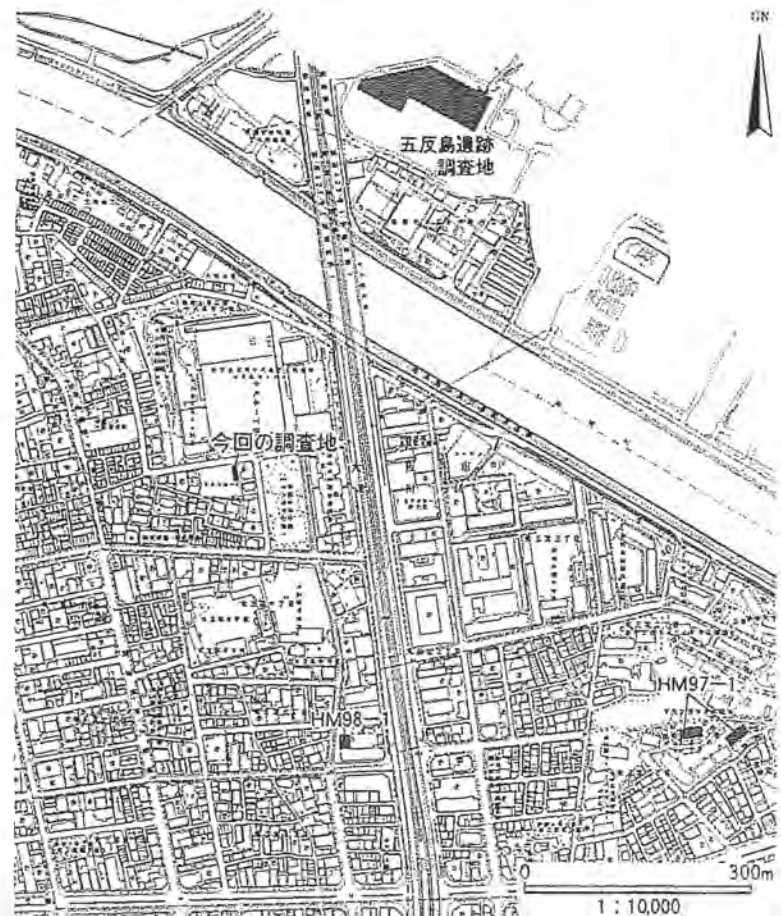


図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

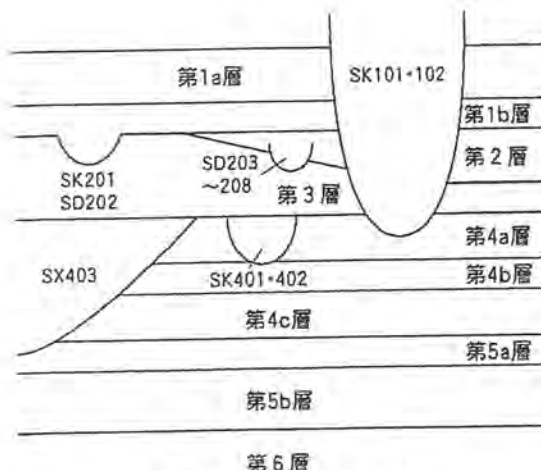


図3 地層と遺構の関係図

第1b層：明黄褐色(2.5Y7/6)極細粒砂層で、層厚は3cmである。

第2層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂混り粘土からなる作土層で、層厚は10~15cmである。砂と粘土の混り具合からみて、耕作地としての使用は短かったと考えられる。図6の3~5が出土し、14世紀頃と推定される。

第3層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘土層で、層厚は5~10cmである。水成層である第3層の耕起されたものが第2層である。瓦器・土師器片が出土した。

第4a層：におい黄色(2.5Y6/4)細粒砂層で、層厚は10~35cmである。北に行くに従って厚い。調査区南端から3~9mの東壁で、多くのトラフ型斜交ラミナの切合いが観察された(写真1枚目上段)。本層以下は遺物が出土しておらず、時期は不明である。上面でSK401・402、SX403を検出した。

第4b層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト層で、層厚は7cm以下である。本層上面より植物の根の痕跡が延びる。

第4c層：灰黄色(2.5Y4/3)細粒砂層で、層厚は18cm以下である。フォアセットラミナは東から西に傾

く。第4a層のトラフ型斜交ラミナの方向も同様で、第4層堆積時の流向は東から西となり、神崎川の氾濫時の堆積である。

第5a層：灰黄褐色(10YR5/2)極細粒砂層で、層厚は5cm以下である。

第5b層：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト層で、層厚は12~18cmである。第5・4層は調査区北端から約3mの東壁で明瞭な褶曲が見られ、地震などの影響が考えられる。

第6層：灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂層で、層厚は40cm以上である。植物の根の痕跡がある。

ii) 遺構と遺物

a. 第4層上面(図4)

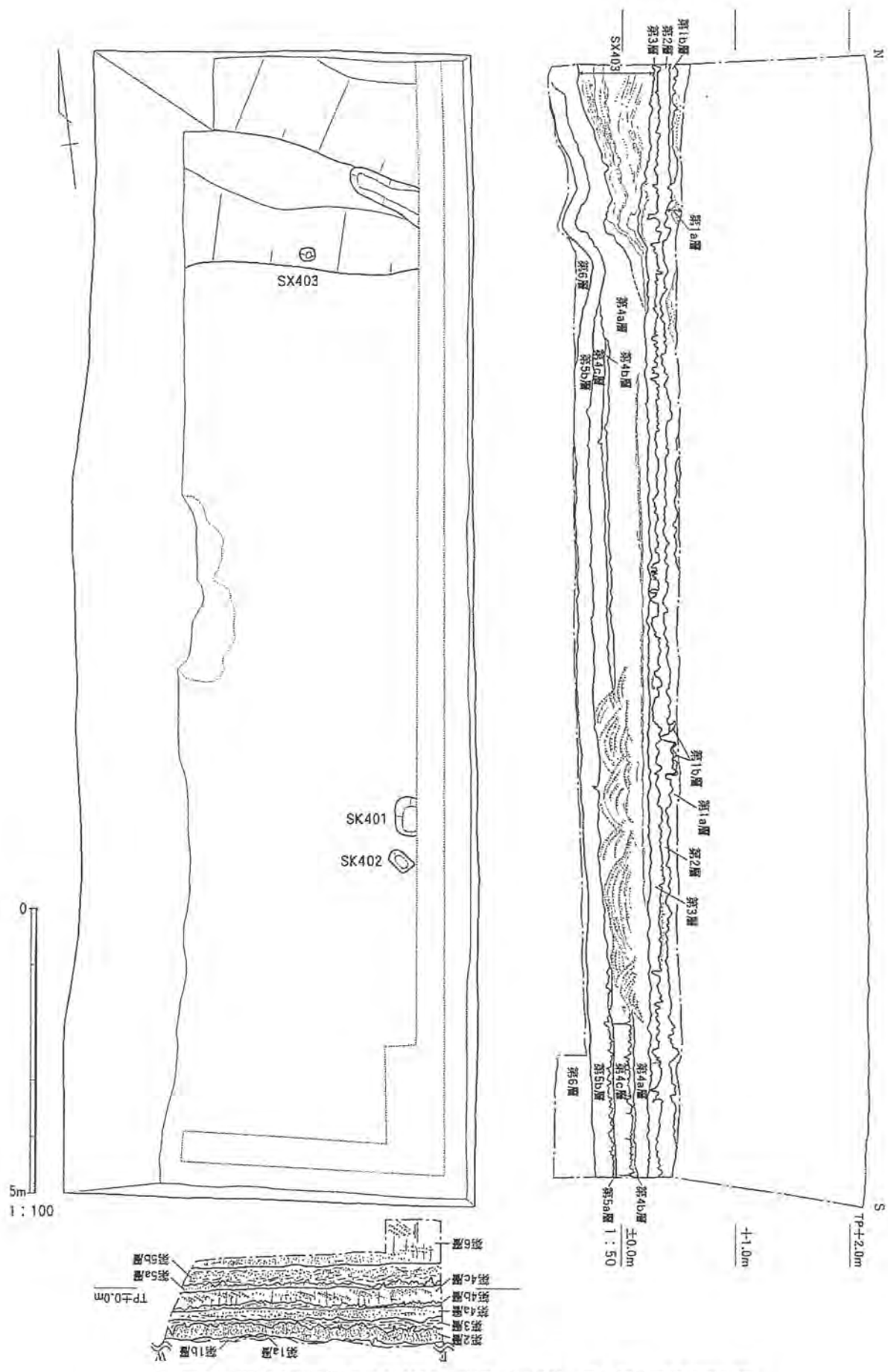


图4 東壁·南壁断面図(水平:1/100、垂直:1/50)、第4a層上面遺構平面図

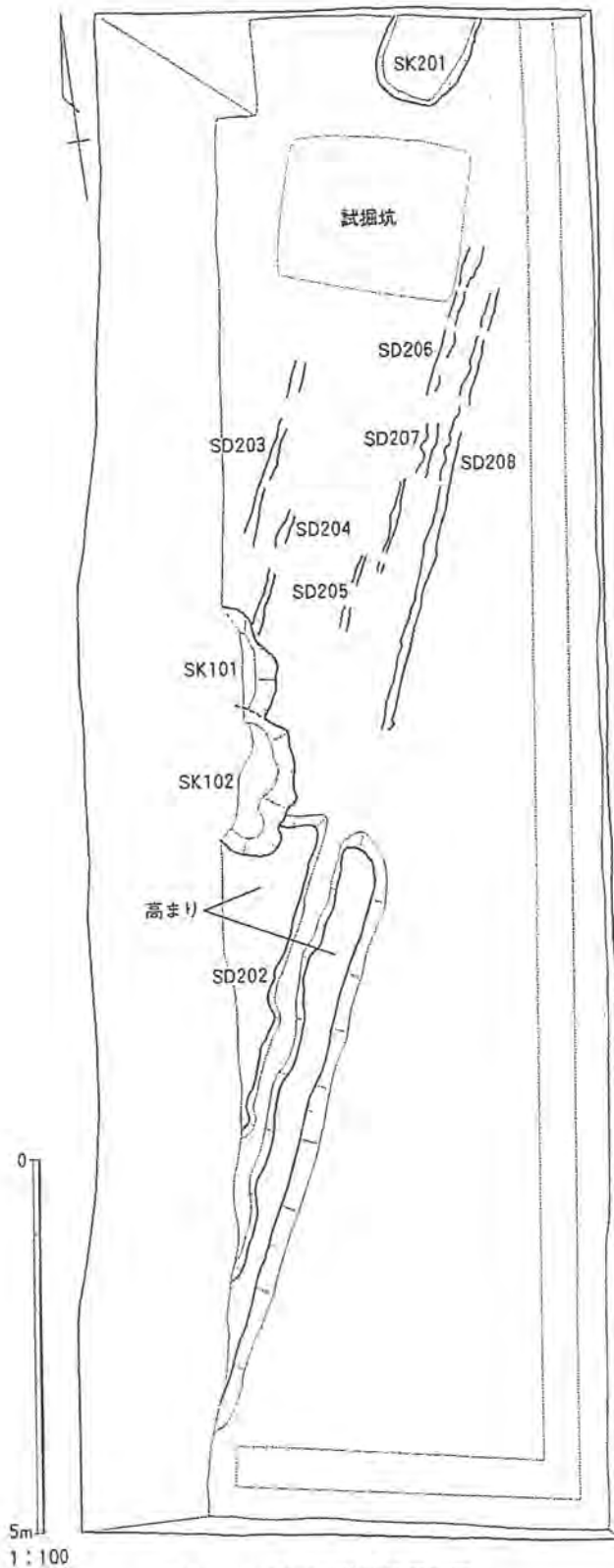


図5 第2層下面等遺構平面図

c. 第1層(図5)

調査区中央のSK101・102の掘込み面は第1層より上になる。SK101は南北1.8m以上で深さ0.5m以上、SK102は南北2.4m以上で深さ0.65m以上である。SK101がある程度埋められた後にSK102が掘られている。詳しい時期や用途はわからない。

北側にSX403がある。SX403は自然の落込みで北へしだいに深くなり、北端で深さ0.7mである。SK401は南北0.7m、東西0.4m以上、深さ0.38mで、下半は粘土混りの細粒砂、上半は粘土で埋められる。SK402は長径0.45m、短径0.25m、深さ0.12mである。以上から遺物は出土していない。

b. 第3～2層(図5)

第3～2層に関係する遺構は、すべて北北東-南南西の方向である。

第2層を掘削した段階で、調査区の南西にわずかな高まりが残る。これは、本来の第3層の暗オリーブ褐色粘土層がほとんど耕起されなかった範囲で、方向は北北東-南南西である。また、ここには第1層で埋るSD202が同方向に延びている。SD202の東で北北東-南南西に続く高まりの東縁が直線的なことから、第2層を作土とした田畑の何らかの境を表していると考えられる。SD202は幅0.45m、深さ0.05mである。

第2層の層中や下面でSD203～208を検出した。これらは北北東-南南西で、幅が0.05～0.15mのごく浅い鋤溝である。また、第1層の砂で埋る牛や人の足跡と推定される窪みが多数存在した(写真2枚目下段)。

第2層が耕作地として使用されたのは、出土遺物から14世紀頃と推定される。調査地点は神崎川の堆積作用によって徐々に高くなったが、この時期になって初めて耕地化された。その使用期間は短く、第1層の砂で埋る。

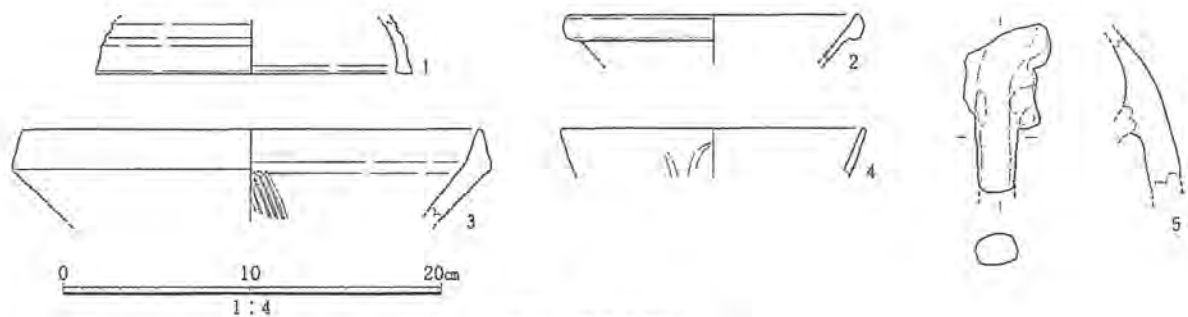


図6 遺物実測図

第3層(1)、第2層(3~5)、第1~3層(2)

d. 各層出土の遺物(図6)

1は第3層出土で、須恵器の脚底部である。古墳時代の筒形器台などの可能性が考えられる。2は第3~1層のいずれかに伴う玉縁の中国製白磁である。3~5は第2層出土で、3が備前焼播鉢、4が鎗蓮弁の中国製青磁、5が瓦質三足羽釜の脚部である。3は14世紀頃のものであろう。

3)まとめ

神崎川の河畔には、瀬戸内海から京都、北摂などへ至る重要な交通路にあることから、古代以来、江口、加島、尼崎などの港津機能を有する集落が栄えたことが文献に残る。また、加島庄には摂津国で史料に残るもっとも古い美六市があったことが知られており、商業も盛んな地域であった。

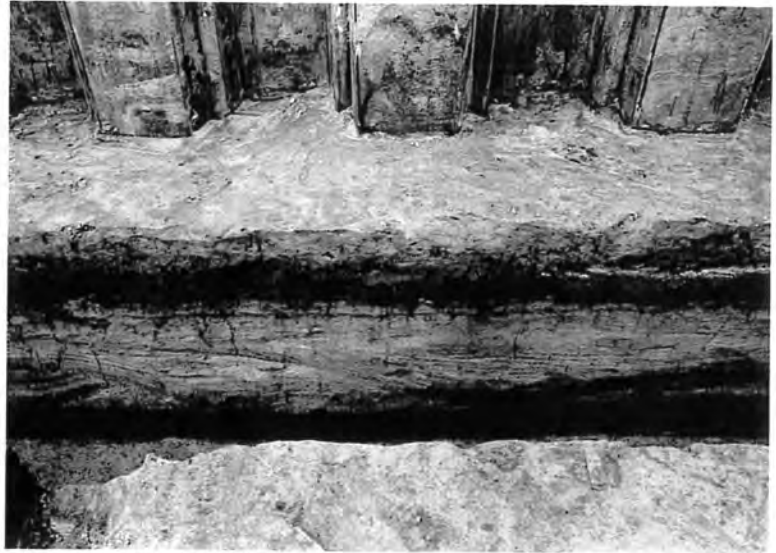
今回の調査地点では西に向けて地層が少し高くなっており、第2層を耕作した人々の集落は西側の微高地(自然堤防上)に位置していたのではないかと推定される。この場所には十八条の旧集落がある。淀川・神崎川下流の中世集落と近世から近代に至る集落は、自然堤防上などの立地条件の良いところを選び、両者は重なったところにある可能性が十分に想定される。これらは川と中国街道などの道路で繋がっていた点も近世以降の集落の立地とかわらないと推定される。

淀川・神崎川下流域は古代から中世の歴史での重要度に比べて考古学的な調査は少なく、今後に期待されるところが大きい。今回の調査地のように、旧集落とその周辺や街道沿いを重視し、微地形を復元しつつ調査を積み重ねていくことが必要である。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1999、「住宅都市整備公団による建設工事に伴う確認調査(HM97-1)」：『平成9年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 3-16
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2000、「モンセーヌ東三国建設工事に伴う確認調査(HM98-1)」：『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 3-10
- 吹田市教育委員会1996・2002・2003、『吹田市五反島遺跡発掘調査報告書 写真図版編 自然科学編 遺構編 遺物編』

東壁断面 第4層の
トラフ型斜交ラミナ(部分)



第4層上面全景
(北より)



SX403
(西より)



SK401
(南より)



第3層上面全景
(北より)



SD208と牛の足跡



VII 東 淀 川 区

埋蔵文化財試掘調査(SP08-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区瑞光4丁目8番25号
調査面積 4 m²
調査期間 平成20年5月8日～5月12日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小倉徹也

1) 調査に至る経緯と経過

三宝寺は平安時代末の文治年間(1185～89年)に禅僧の大日房能忍によって建立された大寺院で、七堂伽藍のほか僧坊48房を有していたとされている。また、室町時代末の永禄年間(1558～69年)に兵火によって消失したと伝えられている。調査地は三宝寺跡伝承地の東北部にあり、建設省国土地理院(1983)の土地条件調査報告書(大阪地区)によれば、淀川低地と大阪湾岸低地に挟まれた淀川右岸の吹田砂堆に位置する。調査地周辺ではこれまでに、5回の発掘調査(SP96-1、DT00-1、SP01-1・02-1・05-1)が行われてきた(図1)。この中で、SP02-1次調査では縄文時代中期末～後期前半の縄文土器が、ほとんど磨耗を受けていない状態で中世から近世の地層に混って出土した。吹田砂堆は縄文海進以降の早い段階から離水し始めたと考えられており、SP02-1次調査の結果から付近は縄文時代中期末～後期前半頃には人々が活動できる環境にあったことが推測されている。

今回の試掘調査は大阪市水道局の瑞光用地に当たる。2008年5月8日に敷地内に2m×2mの試掘トレンチを設定し(図2)、アスファルトを切断・除去した後、重機掘削を開始した。現代盛土層以下、遺構・遺物の有無の確認と平面および断面の精査を行いながら、現地表下2.25mまで慎重に掘り下げた。断面の実測および写真撮影などの記録作業を行なったのち、その日のうちに埋戻した。5月12日に舗装を行い、現地における調査を完了した。

なお、図面に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)、指北記号は図1が座標北、図2が磁北である。

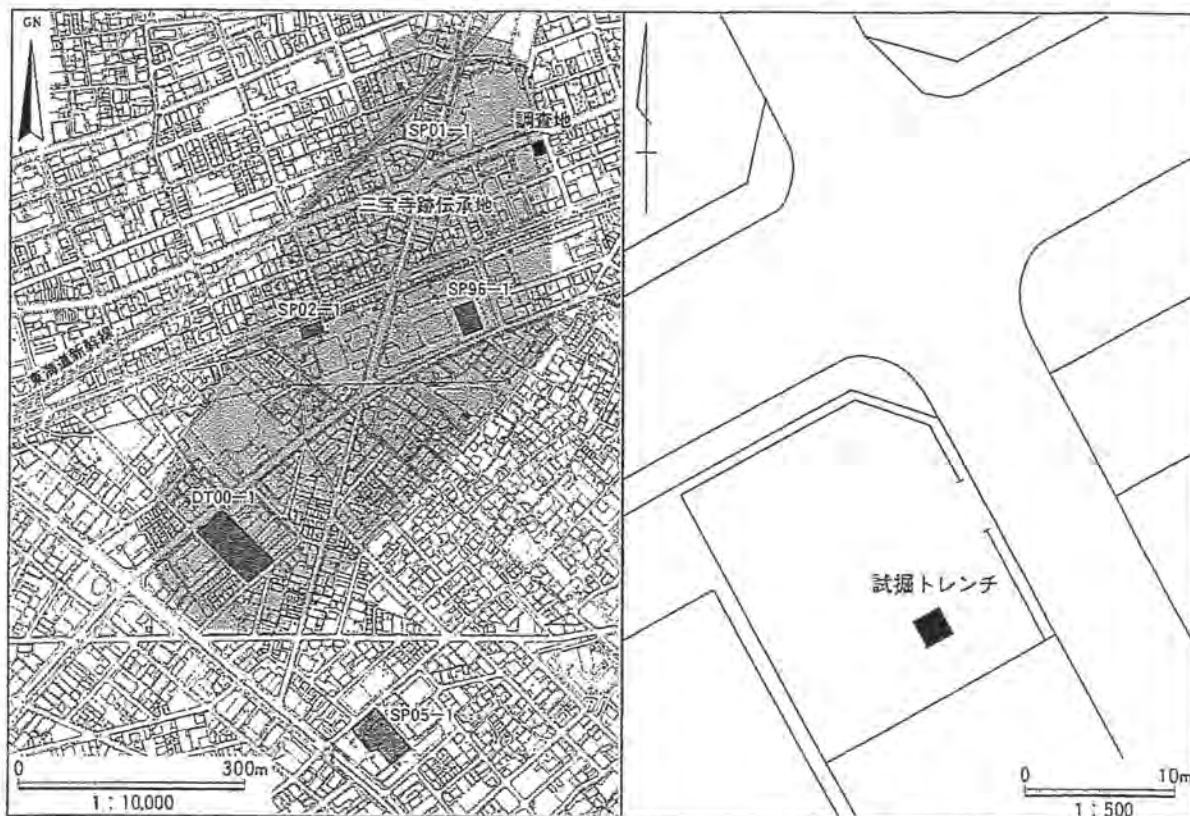


図1 調査地の位置

図2 試掘トレンチの配置

2) 調査の結果

i) 層序

調査地の現地表面の標高はTP+3.9mである。現地表下2.25m(TP+1.65m)までの地層を観察した。人為によって形成された地層である第2層以上と、自然の営力による第3層以下に区分できる(図3)。なお、地層の構成物質の記載については、構成物質の主体を占める碎屑物粒子と、その運搬・堆積(沈着)条件を決定する営力の大きさととの運動関係がもっともよく反映されている碎屑物の粒径区分(ウェントワース・レイン式)によって行った。また、地層の色については、『新版標準土色帖』[小山正忠・竹原秀雄1996]を用いて記載した。

第0層は現代の盛土層、第1層は現代の作土層である。第2層は磁器を含む近世の作土層で、層厚は10cmであった。第3層は調査地付近一帯に分布する吹田砂堆を形成する砂層で、第3i層～第3iv層に細分した。第3i層は下部～中部が上方細粒化、中部～上部は上方粗粒化し、ラミナは観察できなかった。最上部に甲殻類の巣穴とみられる生痕が観察された。これに対して第3ii層には上方細粒化が2サイクル、第3iii層、第3iv層にはそれぞれ1サイクルの上方細粒化が見られ、ラミナは明瞭に観察できた。第3層は共通して淘汰は良いが、土粒子の密度の低い締まりの悪い堆積物であった。なお、前述の吹田砂堆に関して、淀川デルタの一部とする考えのあることを言い添えておく。

ii) 遺構と遺物

第2層から近世の磁器が、第3i層の下底部付近から土師器の細片が1点出土したのみで、これ以外

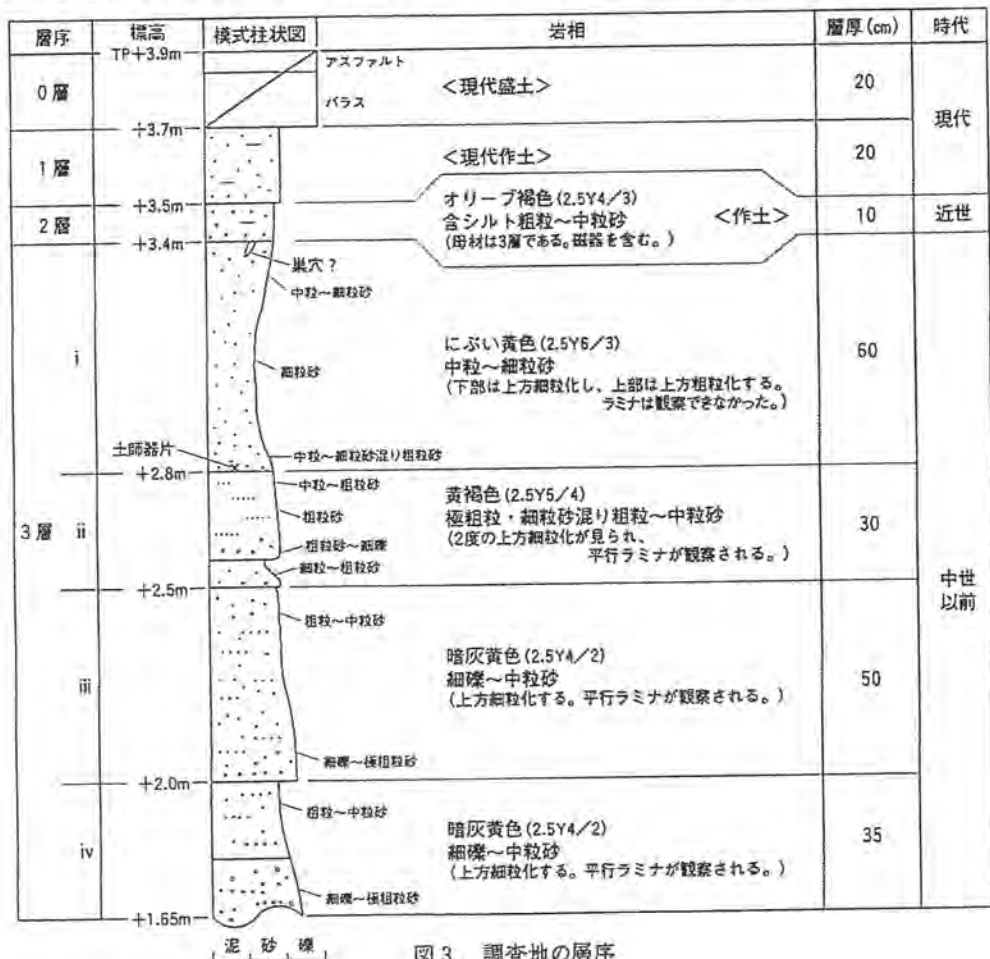


図3 調査地の層序

には遺構・遺物は認められなかった。

3)まとめ

今回の試掘では第3層から土師器の細片が出土したのみで、これ以外には遺構・遺物は検出されなかった。しかし、第3層以下の地層は堆積構造が良く残っており、調査地周辺には攪乱をまぬがれた縄文時代中期～中世の遺構が残されている可能性がある。三宝寺跡伝承地は調査事例が少なく、まだ不明な点も多い。今後、調査地周辺で行われる調査の結果を合わせて、人間活動や土地利用の変遷についてさらに検討していくことが必要である。

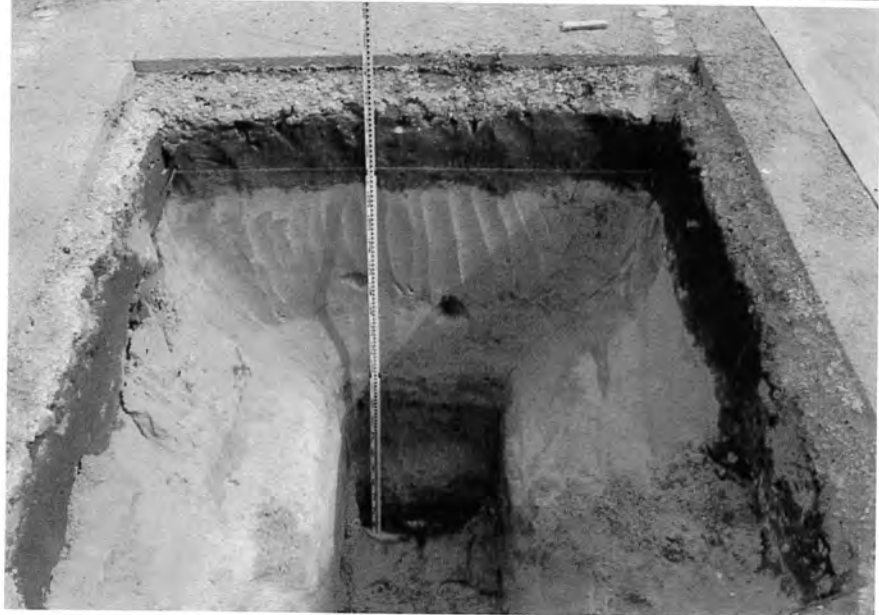
参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「大阪経済大学による建設工事に伴う発掘調査(SP96-1)報告書」
：「平成8年度 大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3-9
- 2002、「大阪経済大学による建設工事に伴う大桐2丁目所在遺跡発掘調査(DT00-1)報告書」：「平成12年度 大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3-7
- 2006、「三宝寺跡伝承地C地点発掘調査(SP05-1)報告書」
：「平成17年度 大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.59-64
- 大阪市文化財協会2003a、「三宝寺跡伝承地の調査 SP01-1次調査」：「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書」2001・2002年度、pp.127-130
- 2003b、「三宝寺跡伝承地の調査 SP02-1次調査」：「大阪市埋蔵文化財発掘調査報告書」2001・2002年度、pp.131-136
- 小山正忠・竹原秀雄1996、「新版 標準土色帖」17版 日本色研事業株式会社

調査地全景
(北西から)



南壁地層断面
(北西から)



南壁地層断面
(北西から：近接)



埋蔵文化財発掘調査(TY07-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区豊里6丁目474番
(住居表示：豊里6丁目2番)
調査面積 75m²
調査期間 平成19年7月27日～8月7日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は東淀川区中央部南寄りに位置する。周辺には弥生～古墳時代の豊里菅原遺跡、銅剣かと推測されるものが出土した弥生時代の上新庄遺跡、室町時代の寺院である三宝寺跡伝承地などの遺跡が存在する(図1)。これらの遺跡は、縄文時代前期の最高潮期後の海退時に拡大・前進した淀川デルタ上に立地する。調査地の北東方にある三宝寺跡伝承地のSP02-1 調査地では、縄文時代中期末～後期前半に比定される縄文土器が出土しており、デルタの拡大と遺跡の形成の係りが注目される地域である。

当該地における埋蔵文化財の存在はこれまで未確認であったが、大阪市教育委員会が行った試掘調査で、開発敷地の西部の地表下1.2mで4～5世紀代の土師器を含む遺物包含層が確認され、また、敷地東部でも地表下1.8mまでの包含層が確認されたことにより、本調査を実施することになった。

本調査では、試掘調査で遺物が出土した開発敷地の西南部に調査区を設定した(図2)。7月26日に



図1 調査地位置図

重機による現代整地層と近世以降の盛土層・作土層の事前掘削を行った後、翌27日から本格調査を開始した。調査は実働9日間行い、人力により第3層から順次掘下げを行い、遺構と遺物の検出と記録に努めた。また、遺物が比較的多く出土したひとつの土壌に対しては、その全容を知るために調査範囲を一部拡張して調査した。本調査では縄文後期、並びに古墳前期～中世の遺構・遺物を確認し、予定どおり8月7日に終了した。



図2 調査区配置図

本報告で用いる水準は東京湾平均海面値を用い、TP±0mと表記する。また、示北記号は図1が真北を、それ以外は磁北を示す。

2) 調査の結果

i) 層序

現代の整地層(第0層)は層厚20cm前後あり、その下位の地層を第1層～第6層に区分した(図3・4)。

第1層は下位層に由来する角礫の偽礫を多く含有する砂質シルトの盛土層であり、最大層厚は70cmであった。

第2層はシルト偽礫と粗粒砂質シルトが混在するオリーブ褐色の作土層であり、層厚は10～20cmであった。18世紀以降の肥前磁器染付、土師器、土人形等が出土した。

第3層は粗粒砂質泥からなるにぶい黄褐色の作土層であり、上部数cmは酸化鉄により褐色を呈しており、層厚は15cm前後であった。下面で鉄痕が南北方向に並行して走った。

瓦器や土師器、瀬戸美濃焼陶器、青磁の破片が出土した。

第4層は暗褐色の粗粒砂質泥からなる暗褐色の作土層であり、主として拡張した東側の範囲に層厚30～40cmで分布した。水田SF12の作土層である。瓦器、須恵器、土師器の破片が出土した。

第5層は泥質極粗粒～粗粒砂からなる黒褐色の古土壌であり、下限は下位層と漸移して不明瞭であった。層厚は20cm以下で、西側で尖滅した。古墳時代前期の布留式甕のほか、須恵器、縄文土器の破片が出土した。

第6層は粗粒砂を主体とする細礫混り極粗粒～中粒砂からなり、浅黄色を主たる色調とする河成～三角州成層で、層厚1.2m以上、TP-0.3mまで確認した。上限から約40cmを境に上下に2回の上

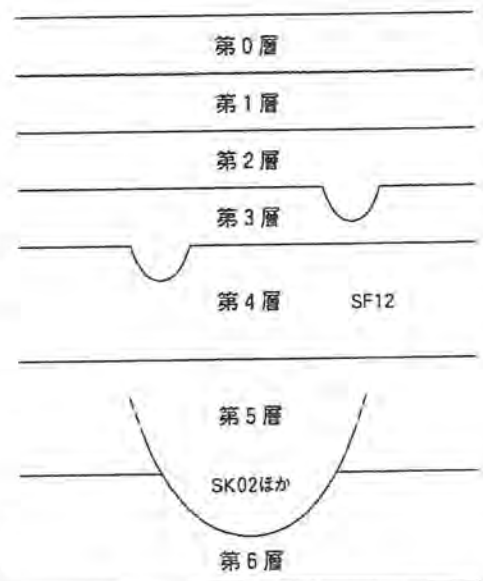


図3 地層と遺構の関係図

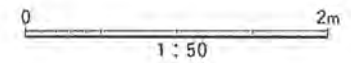
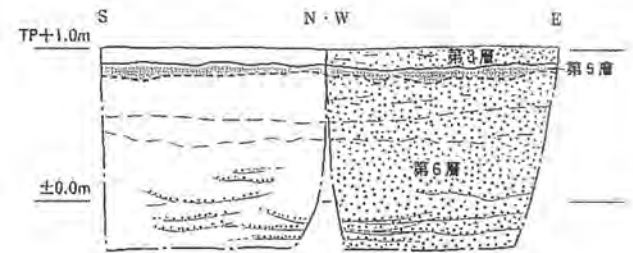
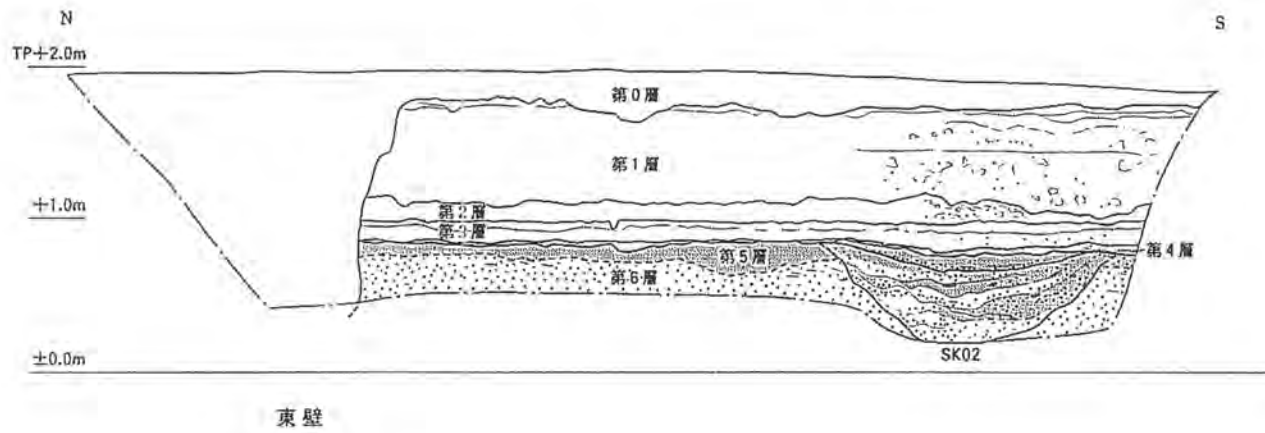
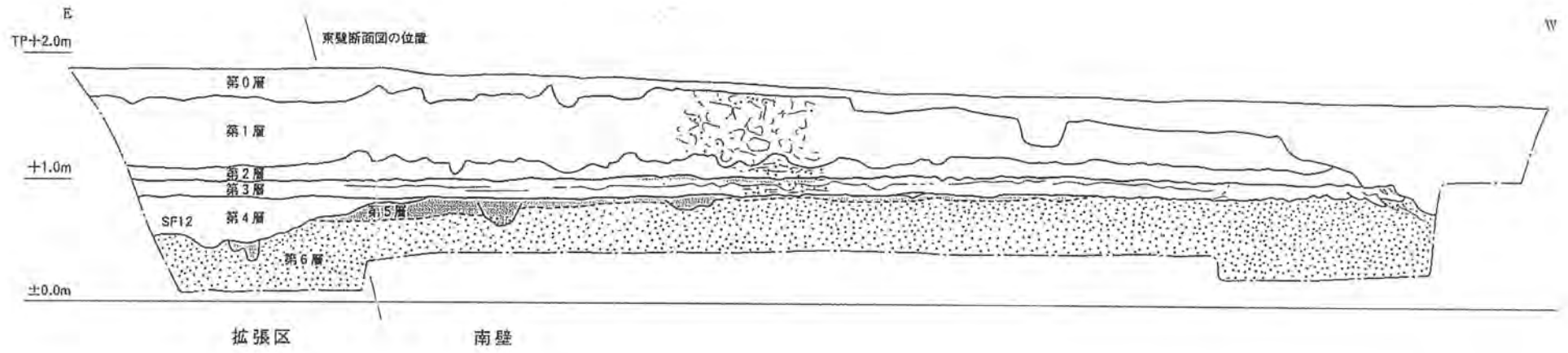


図4 地層断面図

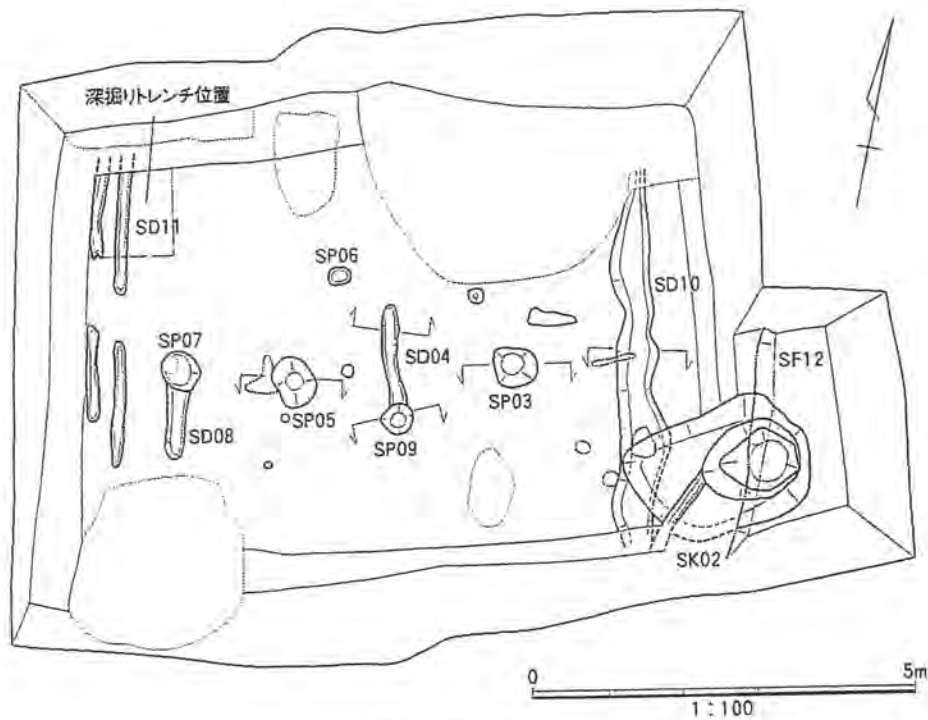


図5 遺構分布図

実線は第5層内の遺構、2点鎖線は第4層下面の遺構

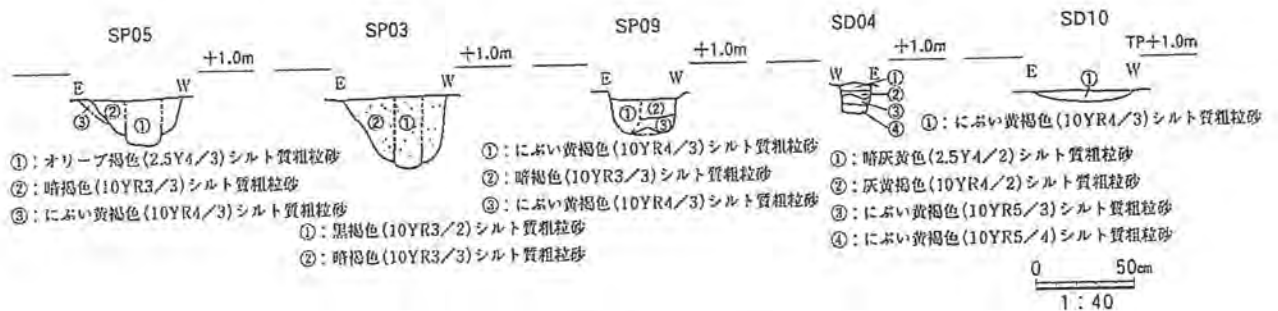


図6 遺構断面図

細粒化構造が認められた。また、下部約50cmには幅数10cm、深さ数cmのごく浅いトラフ形斜交ラミナが複数認められ、トラフの伸長方向から求められる古流向はS42~53°Wのほぼ北東から南西へであった。最上部からサヌカイト剥片が出土した。

ii) 遺構と遺物

a. 縄文時代の遺物(図7の1・2)

1・2は第5層から出土した滋賀Ⅲ式の縄文土器である。1は口縁部、2は頸部の資料であり、外面に二枚貝による条痕が認められる。本地域で縄文時代晩期の土器が出土したのは初めてであろう。

b. 古墳時代前期の遺構と遺物(図4~6・7の3~7)

調査区西南部で見つかった第5層内のSK02は、東西の長さ2.5m、南北の幅1.6mのやや歪な方形の土塼であり、深さは0.8mで、最深部は土塼東部にあつて小刻みに3段に落ちる直径1.0mの窪み内

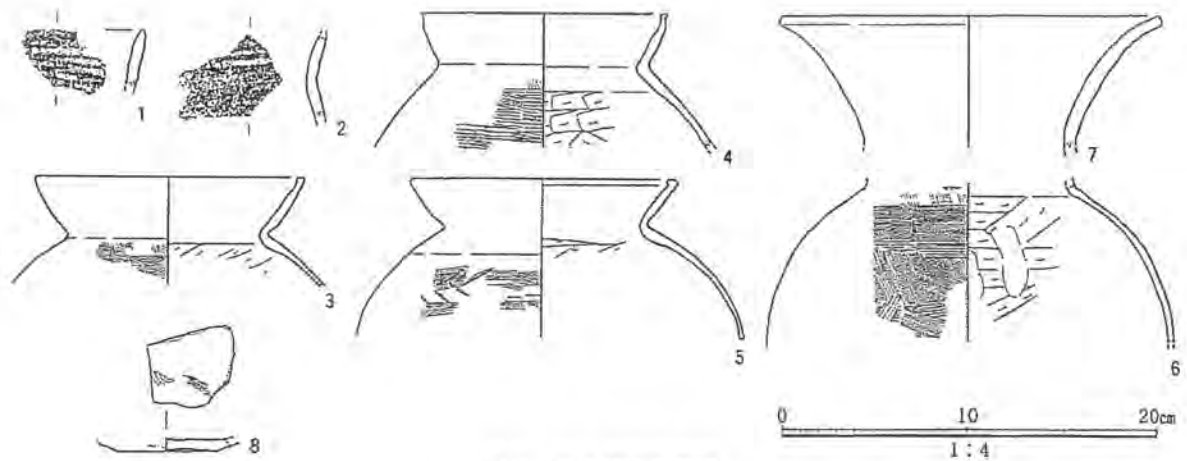


図7 出土遺物実測図

SK02(3~7)、第5層(1・2)、第3層(8)

にあった。最下段の落ちは歪な六角形を呈することから、井戸枠のようななんらかの設備があったのかもしれない。幅0.17mで深さ0.15mの小溝が取付いていた。埋土は2層に大別でき、下部は黒～黒褐色の泥質粗粒砂層と黒褐～暗褐色の極粗粒～粗粒砂層の互層からなる機能時～放棄時の堆積層であり、上部約20cmは黒褐色砂混りシルト質粘土からなる放棄後堆積層である。下部層からは布留式甕3~6と壺7が出土し、上部層からも土師器の細片が出土している。

その他に第5層内からは、溝、ピットなどが見つかった。埋土はいずれも第5層と同質のシルト質粗粒砂であった。

SP03・05・07・09は柱穴であった可能性のあるピットであり、それぞれの掘形の最大径は0.70m・0.70m・0.52m・0.44m、深さは0.38m・0.23m・0.18m・0.22m、柱痕跡とみられる部分の直径0.18m・0.15m・0.19m・0.13mであった。

SD04は調査区中央のSP09に取付くように見える溝で、幅0.22m、深さ0.16m、長さ約1.3mを検出した。埋土は複数の色調に分かれていた。SD08とSP07はSD04とSP09の関係を南北反転したような位置関係にあった。SD10はSK02に重なる南北方向の溝で、幅0.5~0.6m・深さ0.06mあり、4.8m以上の長さがあった。SD11は2条の南北方向の細い溝で、幅0.13~0.21m、深さ0.05m以下で断続的に続いていた。

以上の溝やピットからは、土師器の細片が出土した。

c. 中世の遺構と遺物(図4・5・7の8)

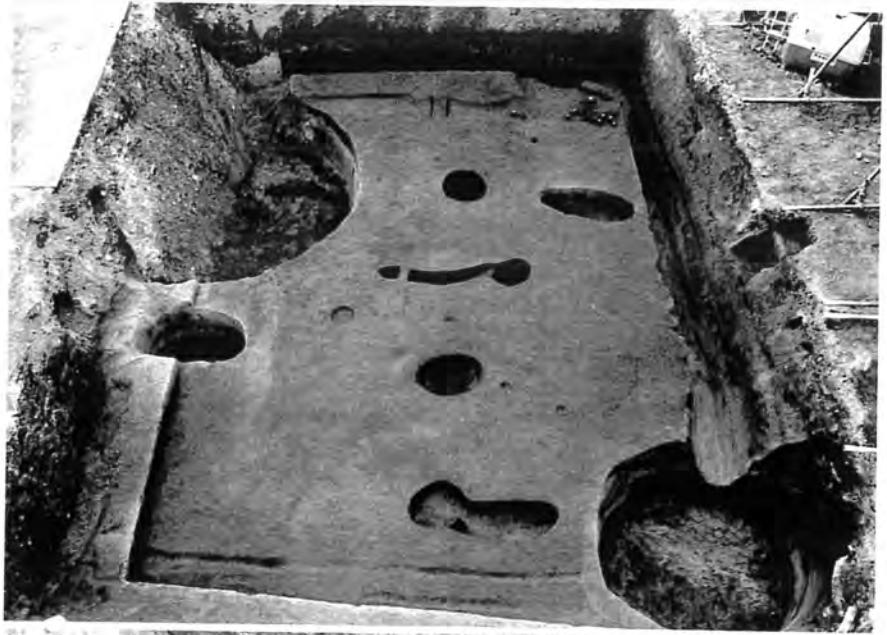
第4層は第5層最上部に当るSK02放棄後の粘土層を耕起してつくられた作土層である。本来の上面は第3層の作土層の耕起により壊されて遺存しないが、岩相からみて第4層は水田(SF12)の作土であったと推定される。調査区東辺に段があり、水田は段の東側の拡張区側に広がっていたと考えられる。

第3層から出土した8は中国龍泉窯または同安窯の所産とみられる青磁の破片であり、見込みに櫛状の工具による施文がある。

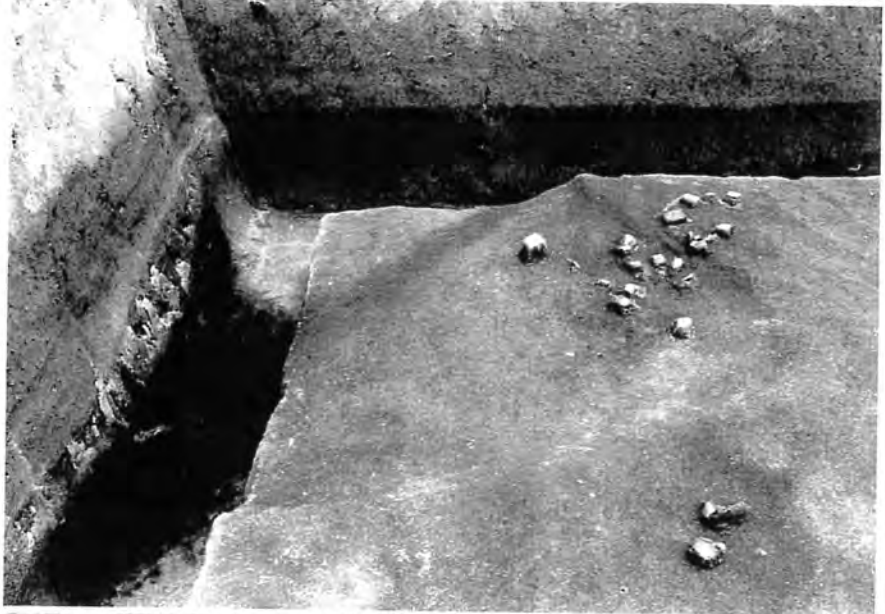
3) まとめ

当該地域の埋蔵文化財はこれまで未確認であったが、本調査の実施により、縄文時代晩期の土器、古墳時代前期の遺構や土器、古代の土器、中世の作土と土器など、多時期の遺構遺物を発見し、遅くとも縄文時代晩期から以降、人間活動が行われてきた地域であることが明らかとなった。発掘面積が狭かったために各時代の具体的なようすまでは復元できていないが、淀川デルタに展開した遺跡の解明は、今後の周辺調査に期待できよう。

第5層上面における
遺構掘下げ後の状況
(東から)



SK02掘下げ後の状況
(北から)



SK02断面
(西から)



西淡路 1 丁目所在遺跡 B 地点発掘調査(WA07-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区西淡路1丁目3
調査面積 450m²
調査期間 平成19年4月2日～4月26日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

西淡路1丁目所在遺跡は淀川右岸の東淀川区にあり、同川のデルタ地帯に立地している。本遺跡の西には平安～室町時代の集落遺構や農業生産遺構が発見されている宮原遺跡があり、東には弥生時代末～古墳時代・室町時代の集落遺構や遺物が発見されている崇禪寺遺跡がある(図1)。特に後者の弥生時代末～古墳時代については、他地域からの搬入品を含む古式土師器が豊富に出土しており、河内湖の出入り口付近にも当ることから、当時における交通の拠点的な集落として重要視されている。このような両遺跡に挟まれた西淡路1丁目においては、2006年2月、大阪市教育委員会によって行われた試掘調査で中世の遺物包含層・遺構が発見され、西淡路1丁目所在遺跡と命名された。これを受けて行われたWA06-1次調査では、中世と古墳時代前期の遺構が発見された。

今回の調査地はJR新大阪駅の東海道・山陽新幹線高架北側に隣接する(図1)。当地において、2007年3月15日、大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、中世の遺物包含層が存在することが明らかになり、本調査を行うことになった。調査は、2本のトレンチを配し(図4)、中世の包含層とみられた地層・遺構などの詳細を把握することを目的として行った。掘削は、現代の盛土層から第2層と第3層の一部について重機を用いて行い、それ以下については人力で行った。掘削中に遺構・遺物が発見された場合は適宜に写真・図面の記録を行いながら調査を進めた。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、「TP+〇m」と記した。本報告では磁北と座標北、2種類の指北記号を用いている。

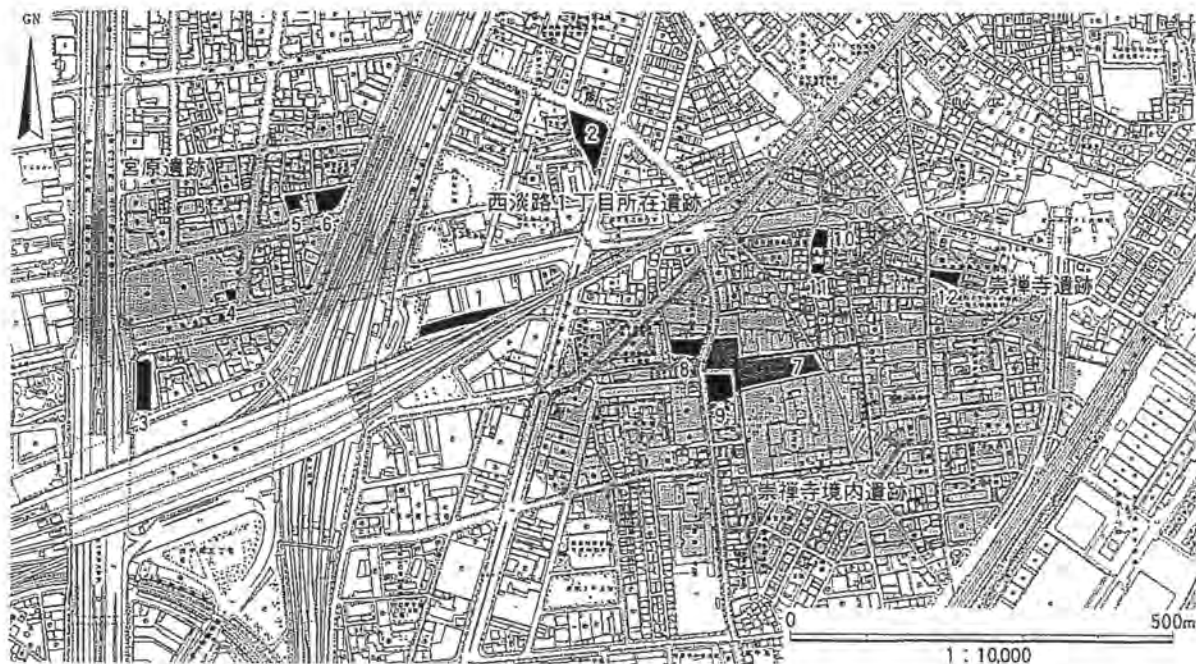


図1 調査地位置図

1 : 今回調査地、2 : WA06-1、3 : MH94-2、4 : MH06-1、5 : MH06-2、6 : MH99-3、
7 : 81年度大阪府教委調査、8 : SZ89-13、9 : SZ89-6、10 : SZ88-2、11 : SZ88-4、12 : SZ98-1

2) 調査の結果

i) 層序(図2・3)

第0層：現代の盛土層で、層厚は60~100cmである。調査地内の本層上面の標高はTP+1.5mほどである。

第1層：黒褐色細粒~中粒砂からなる。上面は、西方では激しく削剥を受けているが、東方では遺存状態がよく、畦畔が遺存している。層厚は最大で20cmである。現代の地層で、第0層の盛土が行われる直前段階の水田作土である。

第2層：暗灰黄色中粒砂混りシルトからなり、層厚は最大で15cmである。下面の層界が明瞭で凹凸が激しく、作土である。東方では2層に細分できる個所があった。関西系陶器片などを含み、近世の地層であるが、下位の第3層上面で検出されたNR13は19世紀に下るので、それ以降に形成された地層ということになる。

第3層：灰色粗粒砂混り粘土質シルトからなり、下位の第3層を母材とした作土層である。6区以東に分布し、層厚は約20cmである。分布範囲は第3層の細粒化・暗色化が著しい個所とほぼ一致しており、耕作の開始に当ってこのような土壌が選択されたものとみられる。瓦器皿12(図7)や総黒系の漆器椀の破片などが出土し、これらから、本層の年代は13世紀頃である。

第3層：灰オリーブ色細粒砂~褐色シルトからなる河成堆積層である。調査区の東半分を南流したNR26を削剥し、側方に向ってやや細粒化する。本流部分では下位層を大きく下刻している。NR26の中央部分での層厚は120cm以上、溢れ出た部分では約40cmである。本層からは外面のミガキが疎らな瓦器片が出土し、平安時代後期に堆積したものである。上面ではSA17・SX01などが検出された。

第4層：暗灰褐色シルトや灰褐色極細粒砂などからなる河成堆積層で、層厚は約20cmある。砂からシルトへの上方細粒化が複数回観察された。層中から時期が判明する遺物は出土しなかったが、上面からは古代の遺構であるSE25が掘込まれており、古代以前に堆積した地層である。

第5層：黒褐色極細粒砂~シルト質粘土からなる後背湿地の黒色泥層である。層厚は最大で30cmであるが、西に向って薄くなり、2区では第6層上面に収斂する。層中には植物遺体が含まれ、マツ類毬果の化石が出土した。

第6層：灰黄褐色細粒~粗粒砂からなる海浜砂礫である。層厚は最大35cmである。上方に細粒化し、上部では巣穴などの生痕化石が無数に観察された。第5層および本層から人工の遺物は発見されなかった。

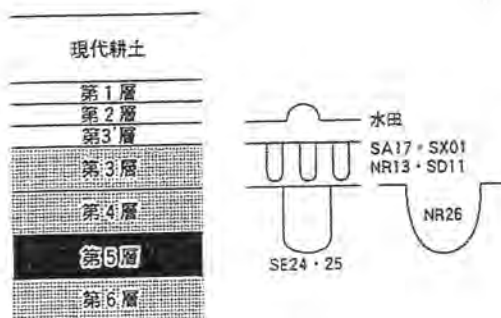


図2 地層と遺構の関係図

ii) 遺構と遺物

a. 第4層上面の遺構(図4~7)

第4層上面では、井戸・自然流路を検出した(図4・6)。また、同面検出のNR13の底部において、埋土を除去した時点でSE24を検出した。厳密な意味での掘込み面は不明であるが、出土遺物からみると第3層堆積以前なのでここで報告する。

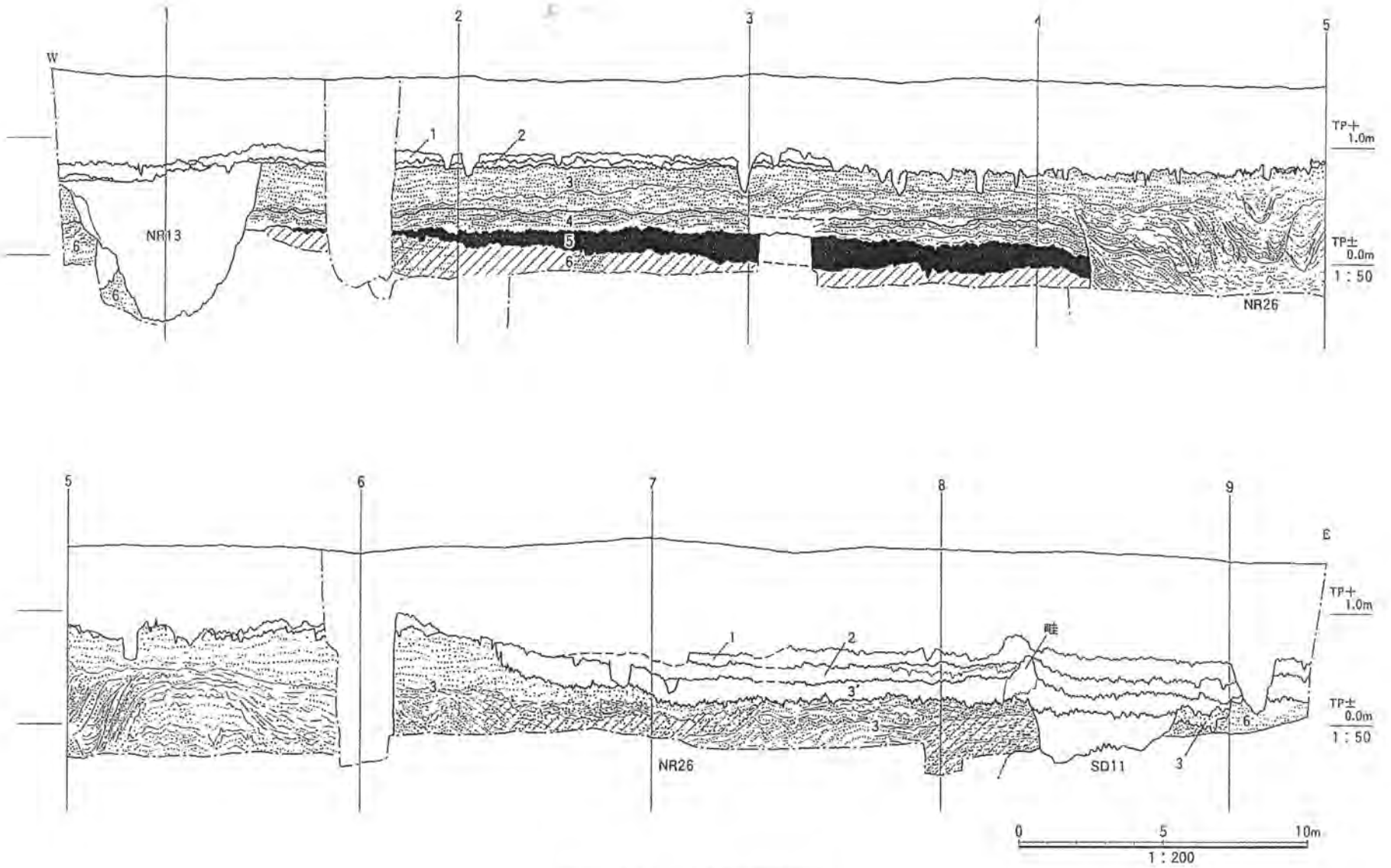


図3 北トレンチ北壁地層断面図

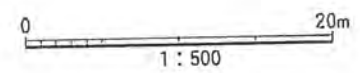
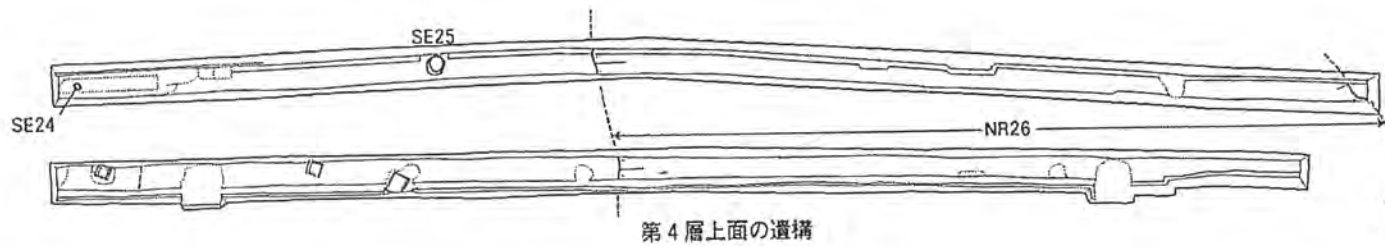
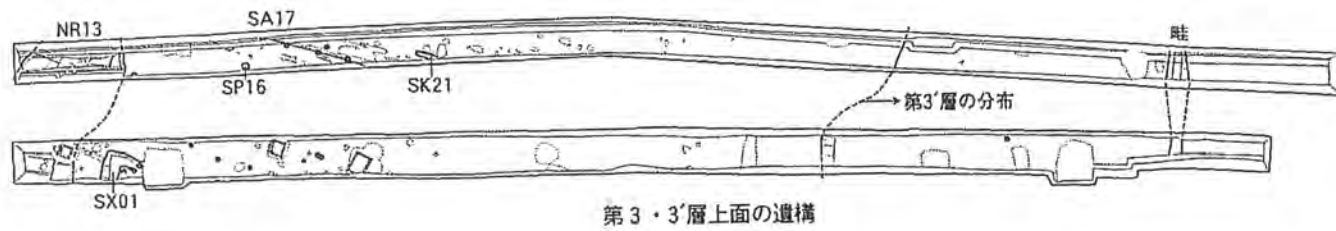
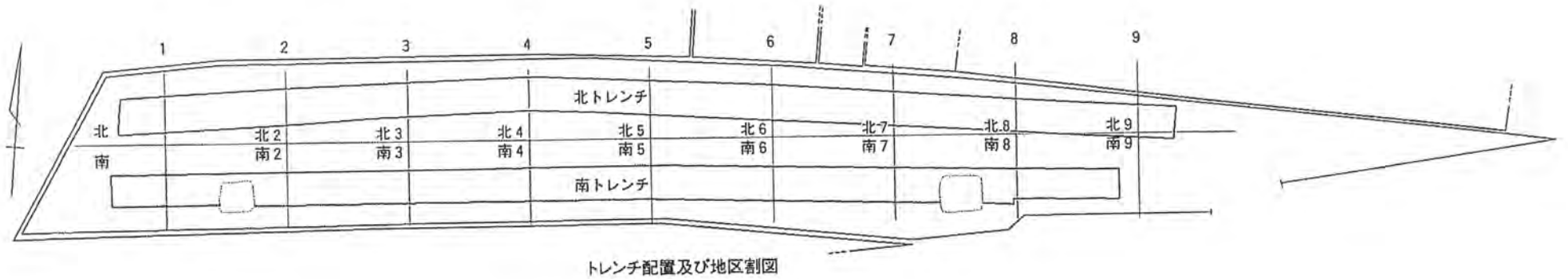


図4 トレンチ配置・各層遺構平面図

SE25 北4区で検出された井戸である(図5)。掘形は検出面で長径1.3m、短径1.1mの楕円形で、深さは0.9mである。井戸側は曲物で5段目が遺存していた。5段目(下から;以下同)は直径0.9mで、上部は破壊され、高さは数cm分しか残っていなかった。4段目以下は0.4m未満と直径を大きく減じ、4段が重ねられている。4・5段目の間は高さにして約0.15mほどの間隙があり、その間は裏込めの土がすり鉢状に露出している。そこには径3~4cmほどの円礫が敷かれていた。この部分と4~2段目の井戸側内部は灰色粘土質シルトの偽礫で埋め戻されており、その中から土師器鉢17が出土した。裏込めは細粒の堆積物からなる偽礫である。埋戻しの作業単位を示す裏込め層の分層線は曲物の上下端におおむね合致し、1段ずつ裏込めをしながら曲物が据えられたものとみられた。3段目上縁には、これに対応する裏込め層との間に径0.5cm以下の礫が最大4cmの厚さで敷かれていた。また、1段目に対応する裏込めにも同様な礫が用いられていた。

井戸側内は、1段目の内側底部に径2~3cmの円礫が充填されており(写真)、その上は若干の自然堆積層を挟んで、最上部と同じ灰色粘土質シルトの偽礫で埋め戻されていた。底部の円礫や裏込め層

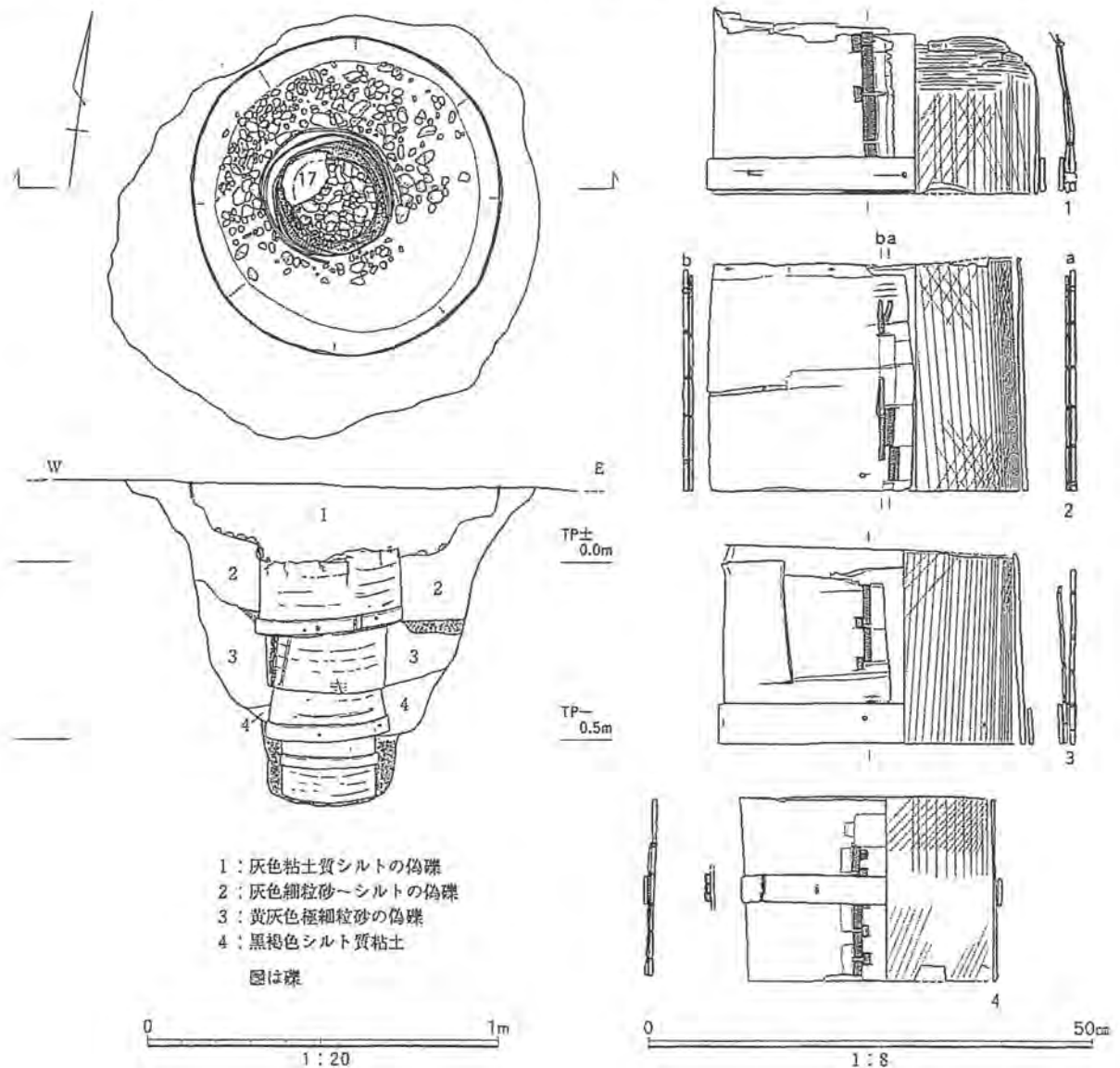


図5 SE25平面・断面図・曲物実測図

中の礫は、地下水の溜まりをよくするための工夫と考えられる。

曲物は4段目の1が直径39cm、1段目の4が直径29cmで、下方ほど小さいものが用いられている。2～4段目は上縁ないし下縁の側面に木釘の穴があるので、本来はまっていた底板を取り外した木桶の転用品であろうが、1段目の4には木釘穴や底板固定用の樺皮の穴がみつめられないため、井戸側専用の曲物なのかもしれない。

井戸側内の埋戻し土から出土した土師器鉢17(図7)は直径が20.5cmで、外面下部をケズリで、外面上部と内面をナデで仕上げている。共伴した遺物もないので正確な時期を決めたいが、ミガキや暗文調整がなくなり、外面にケズリ調整を加えるものが増える奈良時代後葉から平安時代初頭頃のものと思われる。

SE24 NR13によって上部を削剥されている。直径0.45m、残存部分の深さ0.45mを測る井戸である。これも井戸側に曲物を使用していたが、腐朽が激しく、井戸側の詳細な構造は不明であった。井戸側内からは土師器皿8が出土した。共伴遺物もなく詳細な時代判定は避けねばならないが、口縁部は「ての字」状で器壁は薄く、11世紀頃のものであろうか。

NR26 5区から10区にかけて検出された自然流路である。幅は40mを超える。北から南へ流れ、西岸はほぼ垂直に侵食され堆積物は粗粒であるが、東岸は緩やかで細粒の堆積物が優勢である。このことから、西岸が蛇行する部分の攻撃面であった可能性が高い。

b. 第3層上面の遺構(図4・6・7)

掘立柱建物・小穴・水田・不整形な落込み・自然流路を検出した。

SA17 北3区で検出された掘立柱の柵である。3間分が調査区内にかかっていた。主軸方位は磁北から東へ98°振っている。柱間寸法は1.93m(平均値)である。柱穴は直径約0.3m、深さは0.2～0.4mほどで、主に第3層起

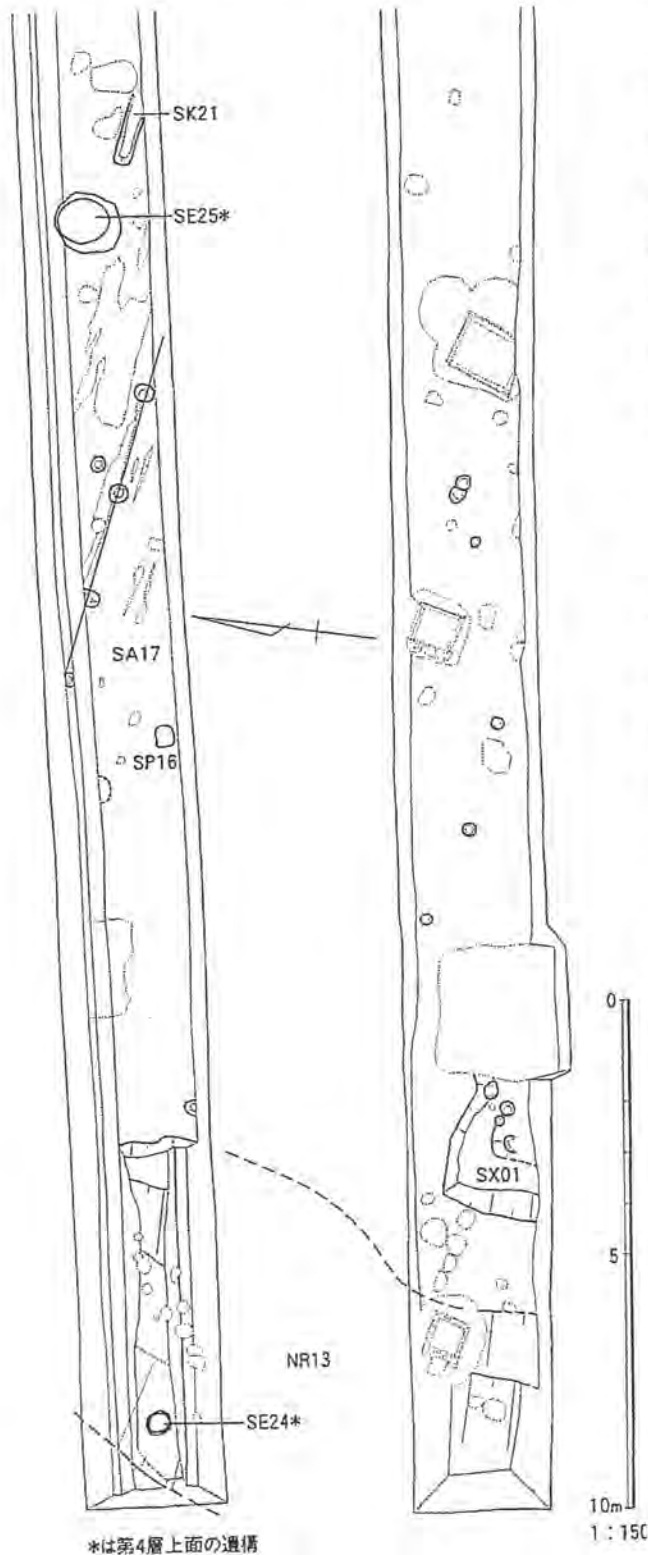


図6 第3層上面の遺構平面図

源の偽磔で埋められていた。明確に柱痕跡が観察されたものではなく、小規模なものなので柱を抜き取る際に根こそぎ掘り起されたものとみられ、正確には抜取り穴である。

柱穴からは土師器皿10・11や瓦器の細片などが出土した。10・11は12世紀頃のものであろう。

SK21 北4区で検出された小規模な土窟である。現存長1.2m、幅0.4m、深さ0.05mで、主軸方向はSA17にほぼ等しい。第3層の偽磔で埋められており、土師器皿5~7が出土した。これもやはりSA17出土品とほぼ同じ時期のものである。

SX01 南2区で検出された不整形な落込みである。東側は試掘窟で破壊されており、東西2.9m以上、南北1.7m以上、深さ0.3mである。埋土はオリブ褐色細粒~粗粒砂で上方に細粒化しており、自然堆積によって埋没していた。埋土からは瓦器13~16や土錘24が出土した。瓦器は椀外面のミガキが省略される時期のものとみられ、13世紀の年代が与えられよう。

小穴 SA17の近辺や南3区などで小穴が検出された。埋土などの特徴はSA17に類似しており、一連の遺構群の一部であろう。南2~3区では3個の小穴がSA17とほぼ同じ方位で並ぶが、柱筋の振れが大きく、建物かどうかは不明であった。北3区のSP16からは土師器皿9が出土し、SA17などと

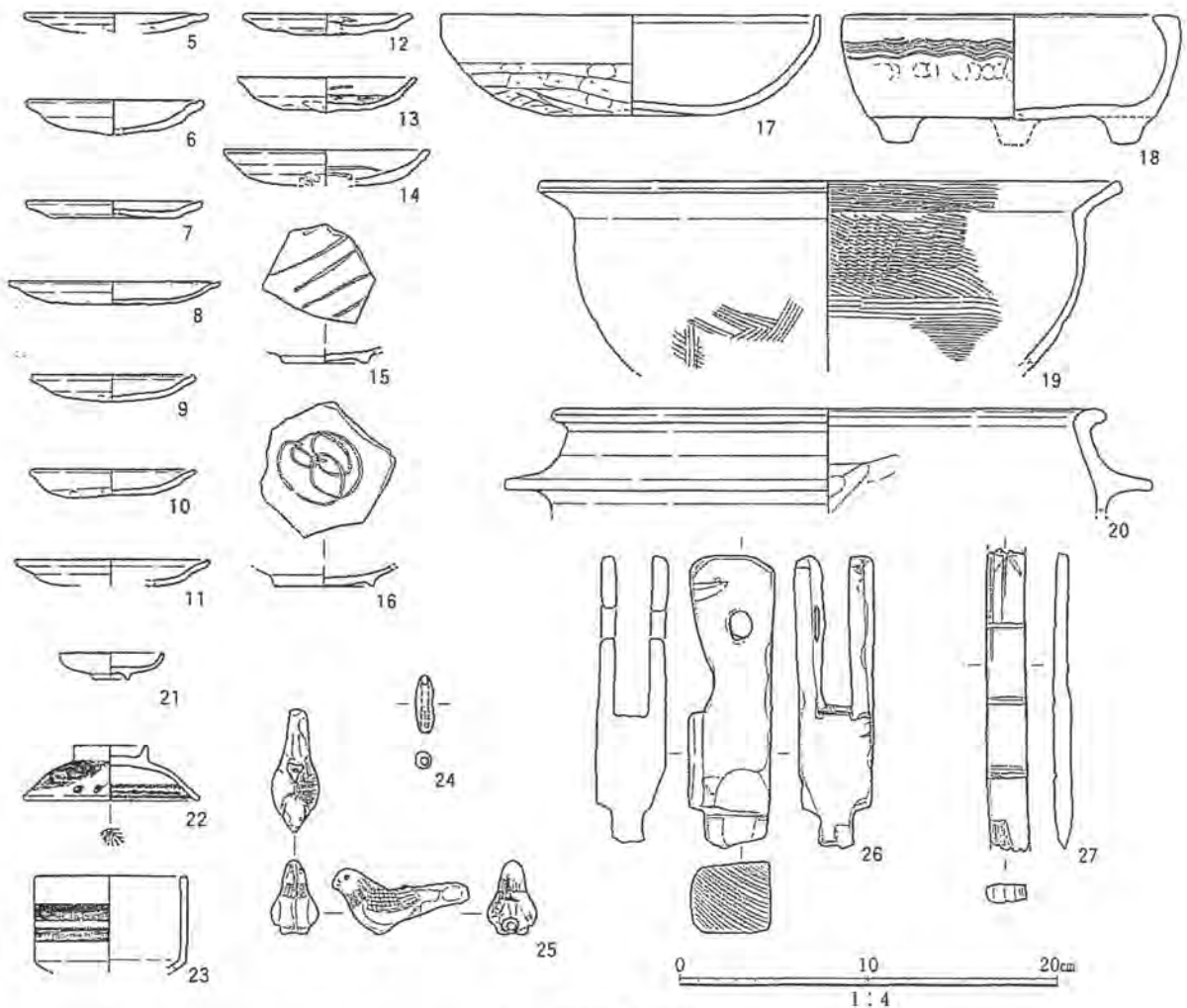


図7 出土遺物実測図

SK21(5~7)、SE24(8)、SP16(9)、SA17(10・11)、第3層(12・19・20・27)、SX01(13~16・24)、SE25(17)、NR13(18・21~23・25・26)

さほど隔たらない時期のものと思われる。

NR13 2区から1区にかけて検出された自然流路である。幅約6m、深さ約1.3mである。灰色シルト～粗粒砂が堆積している。堆積層上部は土壌化が著しい。埋土から、瓦質土器火鉢18・白磁小皿21・肥前磁器蓋22・関西系陶器筒形碗23・鳥形土笛25・不明木製品26などが出土した。18は近世に属し、周辺にこの時期の遺跡があることを示している。22は19世紀前半、23は18世紀後半のもので、NR13の時期が江戸時代後期に下ることを示している。

SD11 9区において、次に述べる第3層水田の作土を除去して検出された溝である。埋土は黒褐色中粒砂混り粘土である。遺物は出土せず、詳細な年代は不明である。

c. 第3層上面の遺構(4・7)

水田 6区以東に分布していた。9区では、幅0.7m、高さ0.2mの畦畔が検出された。作土中からは、瓦器皿12の他に、土師器鍋19・同土釜20・不明木製品27などが出土した。これらからみて、詳細な年代は確定できないが、13～14世紀頃のものとしてよいであろう。となれば、西方のSX01と同時期であった可能性もあり、西方の遺構が居住域の縁辺部で、その東方で水田が営まれた集落の景観が彷彿される。

iii) 調査地周辺の遺跡の形成過程について(図8)

今回の調査では、地層の観察によって当地が陸地化する過程が明らかにできた。それは、第6層から第3層への堆積プロセスに現れており、要約すると以下ようになる。

第6層は、無数の巣穴とみられる生痕化石からみて、海浜近くで堆積した砂礫層であった。この層が堆積した当時、調査地周辺は海浜にほど近い海中にあった。

第5層は後背湿地に堆積した泥層で、植物遺体やマツ類の毬果などが出土した。この層が堆積した頃、主に調査地の東側は後背湿地に当り、水際の植物が茂り、マツ類の林なども近くにあった。類似した堆積層は調査地点5でもみつかっており、周辺は湿地帯であった可能性がある。

第4層では、上方に細粒化する河成堆積層が繰返し堆積した状況がみられた。後背湿地に小規模な河川が流入して湿地を埋積していったのであろう。そして、この層の上面で、奈良時代後葉から平安時代の早い時期とみられるSE25が発見されたことは、人間が活動可能なまでに陸地化が進んだのがほぼこの時期であったことを示している。しかし、これより下位の堆積層から遺物は発見されず、海浜・後背湿地の年代については明らかにできていない。

第3層は、かつての後背湿地を蛇行しながら流れるNR26から供給された河成堆積層で、厚さ40cmほどの砂を堆積させた。これにより、人間が活動するより確固とした地盤が形成され、この層の上に古代～中世の居住地や水田が営まれた。

このような地形の変化について、やや視野を広げ、東の崇禅寺遺跡と西の宮原遺跡も含めて概観してみたい(図8)。各調査地点では、各時代の遺構・遺物が発見された地層の下に遺物を含まない砂層(あるいは泥層)が発見されている。これらの地層は、出土遺物がないため異なる層準である可能性はあるが、弥生時代末以降の遺跡が展開する地盤であることはほぼ間違いはない。砂層の上面の標高を拾ってゆくと、この地域の遺跡の立地は、崇禅寺遺跡側の高地と宮原遺跡側の低地に2大別できる。

崇禪寺遺跡側は、TP+1～2mを測り、弥生時代末～古墳時代前期の遺構が立地することから、この時代には完全に陸地化していたことがわかる(図中第2・7～11地点)。この高地が形成された要因については、大阪湾の沿岸流で形成された「長柄砂洲」の一部とされてきた[梶山彦太郎・市原実1986]が、近年では淀川の沖積作用をより大きく評価する意見[趙哲済2005]が提出されている。この点については、図中第12地点での砂層(第8層)の堆積方向は東南東→西北西[大阪市文化財協会2001]、同第2地点(第4層下部)では北北東→南南西で[大阪市文化財協会2006]、大勢として東→西の流向が優勢とみられることから、後者に従うべきであろう。また、弥生時代末～古墳時代前期の遺跡がこの高地上に分布すると仮定すると、その分布域(図中破線内)は南東-北西方向に長く、大きくみて東→西方向に形成された河川堆積層からなる微高地上に当る可能性が高く、この点からみても後者の意見を支持できる。

西淡路1丁目所在遺跡以西の宮原遺跡側はTP±0.3mで、ほぼ平坦とみてよい(図中第1・3～6地点)。こちら側で最も古い遺構は本調査の奈良～平安時代のもので、平安時代のものは第3～6地

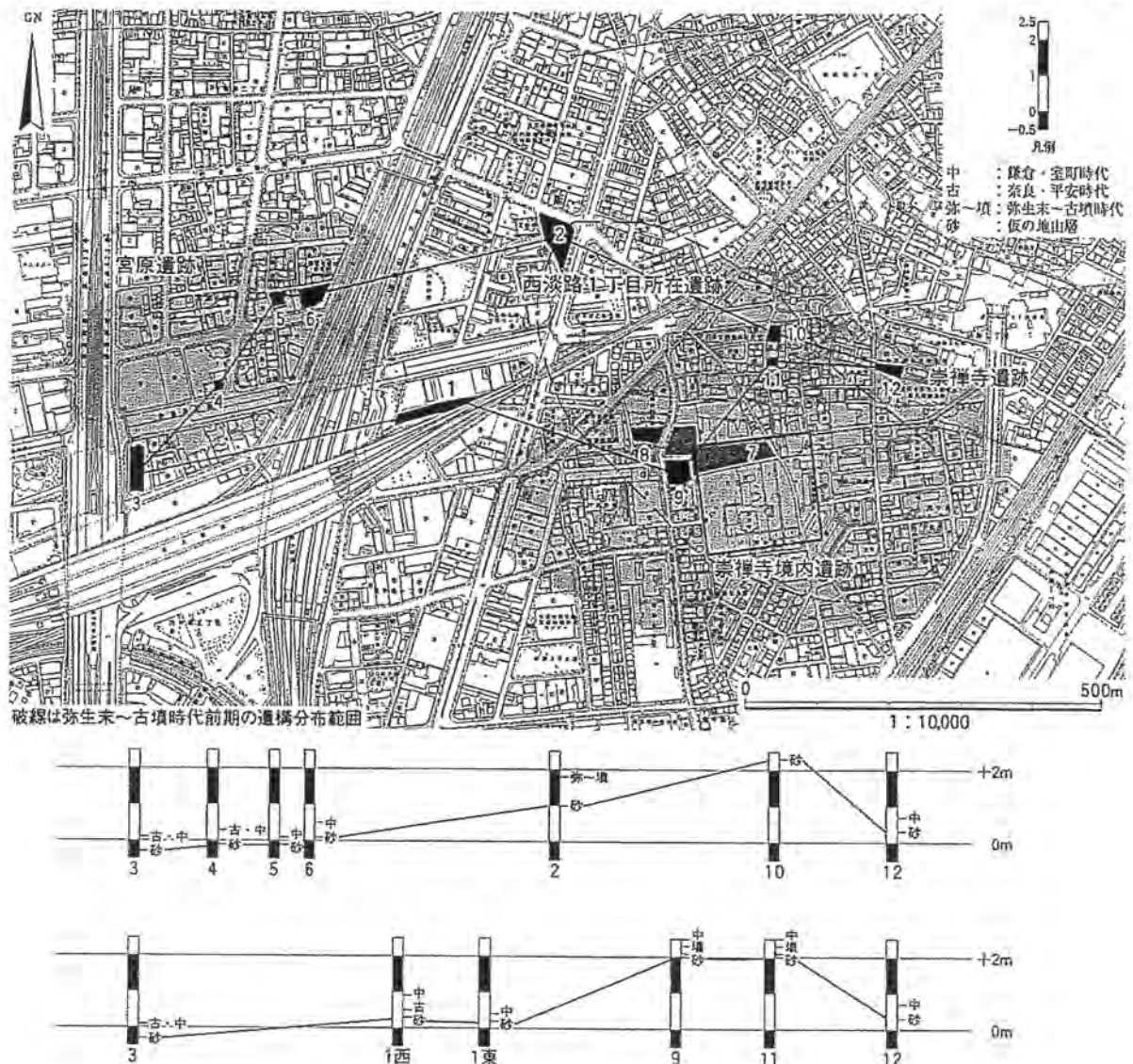


図8 宮原遺跡・西淡路1丁目所在遺跡・崇禪寺遺跡と地形
(調査次数は図1参照)

点でも発見されている。このことから、陸地化は高地側より遅れ、平安時代頃であることがわかる。

その後も両地域はやや異なる歴史の変遷を辿る。低地側は平安時代以後、中世室町時代までの遺構・遺物が連続して発見される。このことは、鎌倉・室町時代に当地域が南都の有力社寺や天皇家・將軍家が関係した収奪の舞台、宮原荘となったこととの関係で捉えられよう。今回の調査で発見された古代～中世の居住に係わる遺構は調査地内でも西側に偏っており、東側では中世に水田耕作が行われていたことがわかった。このことから、これらの遺構は宮原遺跡側の集落の東限付近に当る可能性があり、宮原荘に直接関係するものとみてよいであろう。

高地側では、古墳時代以後の遺構・遺物があまりみられなくなるが、室町時代になると再び多くの遺構・遺物が発見されている。これは足利將軍家の寄進で中興期を迎えた崇禪寺との関係で理解できる現象である。

3)まとめ

今回の調査で得られた成果は以下の通りである。

- ・時代は明らかにできなかったものの、地層の観察から、調査地における海から陸地への地形変化の過程を明らかにできた。本地点が陸地化したのは奈良時代末から平安時代初頭頃である。
- ・古代～中世の遺構を発見した。古代の遺構では曲物を井戸側に転用した良好な資料を得た。中世の遺構については宮原荘との関係が考えられた。
- ・周辺遺跡との比較検討から、この地域の遺跡の形成過程を把握することができた。

現在までの調査成果も加えてこの地域の3遺跡を概観したが、より詳細な地形形成に係わる地質学的資料、宮原荘や崇禪寺の具体相に係わる考古学的資料の蓄積は未だ不足の感を否めず、今後の調査件数の増加が待たれる。

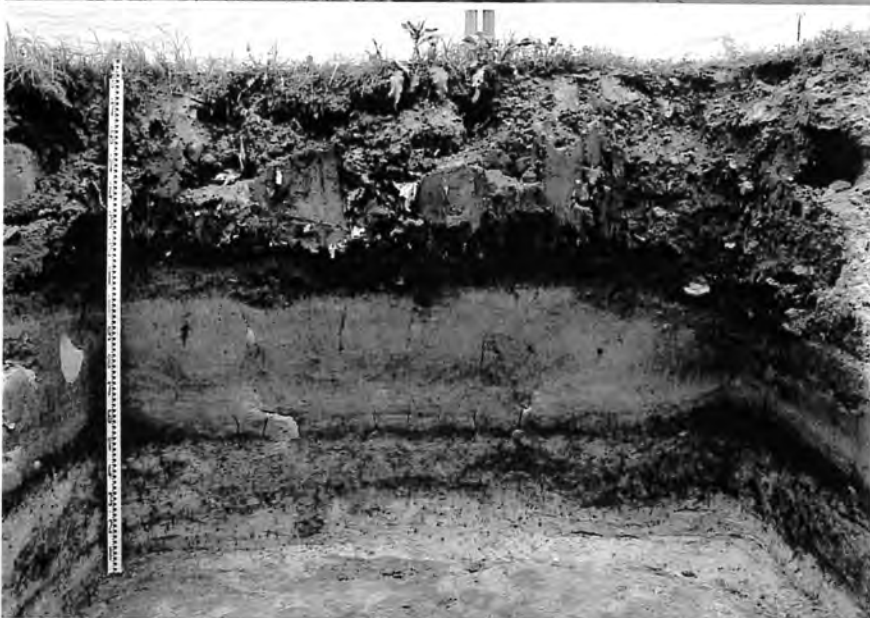
参考文献

- 大阪市文化財協会2001、「崇禪寺遺跡の調査」：『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告』-1998年度一、p.110
- 大阪市文化財協会2006、「市當日之出住宅建設に伴う西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA06-1)報告書」、p.4
- 梶山彦太郎・市原実1986、『大阪平野のおいたち』青木書店
- 趙哲済2005、「河内平野の古地理変遷」：『平野区誌』平野区誌刊行委員会編、p.24

調査地全景
(南トレンチ、東から)



地層の断面
(南2区南壁)



地層の断面
(北5区付近北壁)



SA17等
(北3区、南西から)



SE25断面
(北4区、南から)



SE25底部
(上から)



VIII 生 野 区

埋藏文化財発掘調査(TA07-1)報告書

調査箇所 大阪市生野区巽東3丁目340-5・340-6の一部・340-8の一部・340-14・340-16の一部
調査面積 80m²
調査期間 平成19年7月3日～7月10日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、高橋工

1) 調査に至る経緯と経過

本調査地は河内平野の西南部にあり、古墳・奈良時代の遺物散布地である加美北遺跡の北約1,400mの地点に当る(図1)。本地点周辺では遺跡の存在は知られていなかったが、大阪市教育委員会が2007年6月8日、大規模建設工事に伴う埋蔵文化財試掘調査を行い、現地表下約2mで古代のものとみられる遺物包含層を発見し、本調査が行われることとなった。

掘削は現代の盛土層から第3層までを重機を用いて行い、それ以下については人力で行った。遺構・遺物が発見された場合は、適宜に写真・図面で記録を行いながら調査を進めた。

調査で使用した水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、「TP+〇m」と記した。本報告では磁北と座標北、2種類の指北記号を用いている。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5)

第0層：現代の盛土層で、層厚は約130cmである。上面の標高はTP+3.6mほどである。

第1層：オリブ黒色細粒砂混りシルト質粘土からなる現代の作土層である。上限を削剥され、層厚は約10cmである。

第2層：灰オリブ色細粒～中粒砂混りシルトからなる作土層である。層厚は約40cmで、東・西壁の本層下面では、耕作に係わる溝が観察された。時期を特定できる遺物は出土しなかったが、層相は長原遺跡標準層序の長原2層に類似していた。

第3層：灰オリブ色砂質シルトからなる作土層である。層厚は東部で厚く、最大40cmである。瓦



図1 調査地位置図(1:25,000)



図2 調査区配置図

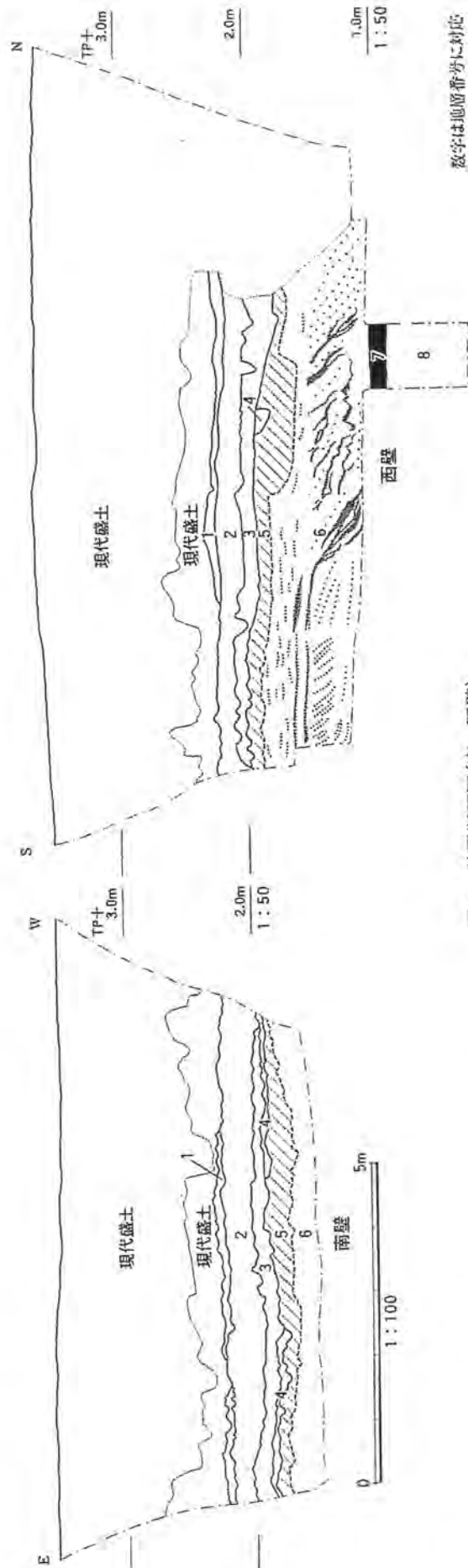


図4 地層断面図(南・西壁)

数字は地層番号に対応

器の細片を含み、中世に属する。

第4層：灰色細粒～中粒砂からなる河成堆積層である。上位層によって上面を削剥され、東半部で部分的に遺存していた。層厚は最大で15cmである。遺物は出土しなかった。

第5層：灰オリーブ褐～オリーブ黒色粗粒砂混り極細粒砂からなる古土壌である。層厚は10～40cmである。本層からは土師器・須恵器が出土した。土師器杯3・4(図6)は暗文が消滅して外面にヘラケズリを加える段階のものである。それらの特徴からみて、本層の年代は奈良時代後半から平安時代初頭である。須恵器杯蓋1も奈良時代に属し、本層に含まれていたものであろう。

第6層：暗灰オリーブ色粘土質シルト～灰黄色粗粒砂からなる河成堆積層である。層厚は約15cmである。西部では北傾斜の斜交ラミナが発達し、堆積物の粒径も粗く、上面の高さは東部より約30cm高い。このことから、本層を堆積させた水流は調査地の西部に近かったものと考えられる。本層からは、土師器・須恵器が出土した。細片のため図化はできなかったが、その形態からみて奈良時代のものである。

以下は西壁際で行った下層確認のための深掘り調査坑での所見である。

第7層：暗褐色シルト質粘土からなり、下面の層界が明瞭なことからみて作土層である。層厚は13cmである。本層上面で水田畦畔が検出される可能性がある。上位の第6層から出土した遺物は、本来、本層準に帰属するものであろう。

第8層：暗青灰色シルト～中粒砂からなる河成堆積層である。下限は未確認で、層厚は70cm以上

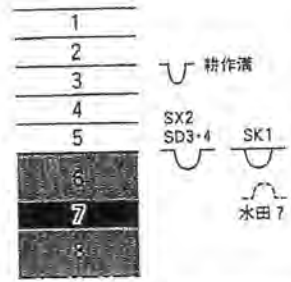


図3 地層と遺構の関係図

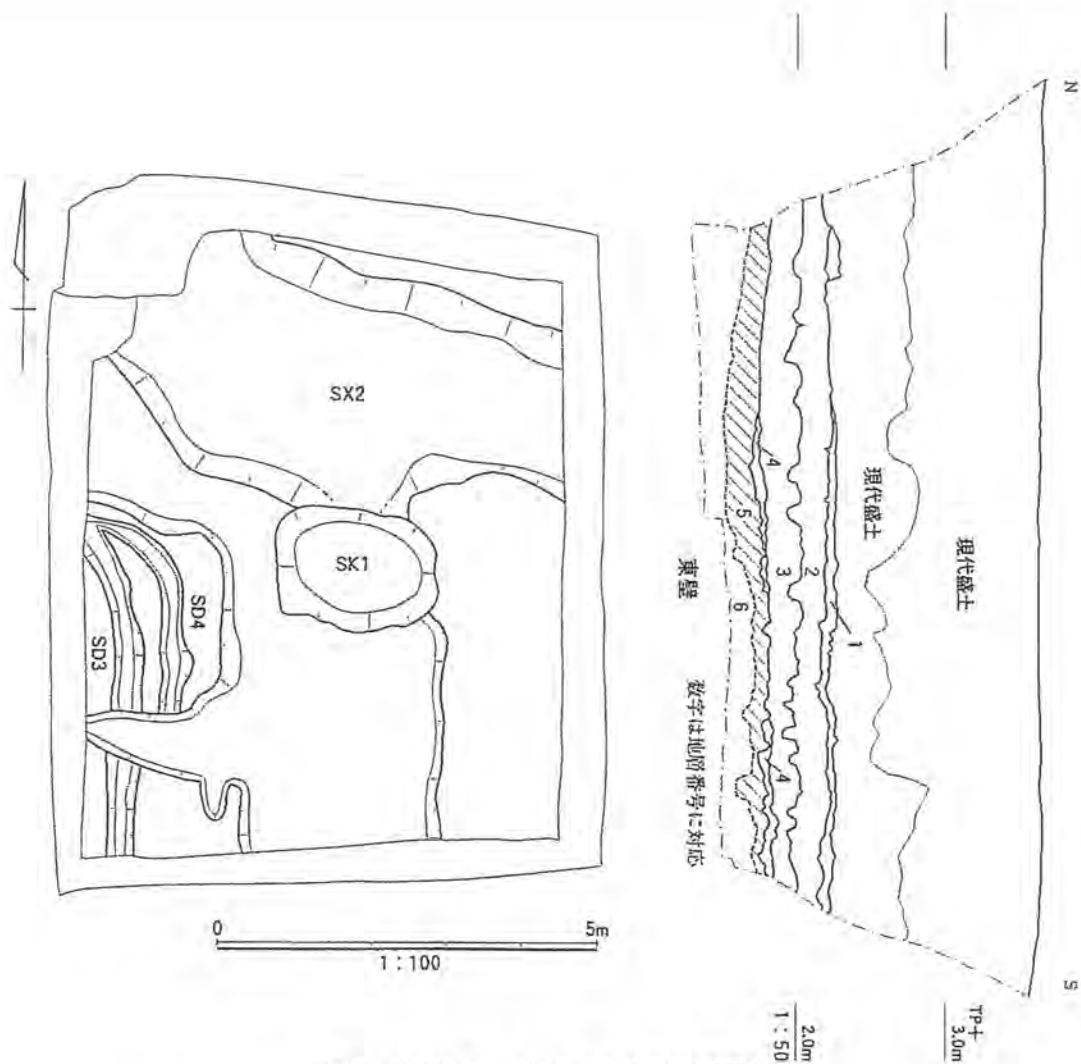


図5 検出遺構平面図・地層断面図(東壁)

である。遺物は出土しなかった。

ii) 遺構と遺物(図5・6)

第6層の上面で、以下の遺構を検出した。いずれも古代の遺構で、本来の遺構面は古土壌の第5層内か第5層上面付近であったものと推定される。

SK1 調査区の中央で検出された土坑で、東西2.05m、南北1.60m、深さ0.30mである。第7層の粘土偽礫と灰色粘土質シルトの混合土で埋め戻されていた。土師器・須恵器の細片が出土したが、詳細な年代の特定はできなかった。

SX2 溝状の遺構で、幅2～3mの溝がT字形に交差しているようにも見たが、調査区内では溝かどうかは特定できなかった。深さは0.06～0.20mで、埋土は第5層の粗粒砂混り極細粒砂である。埋土からは土師器・須恵器が出土した。須恵器杯2や、前述した第

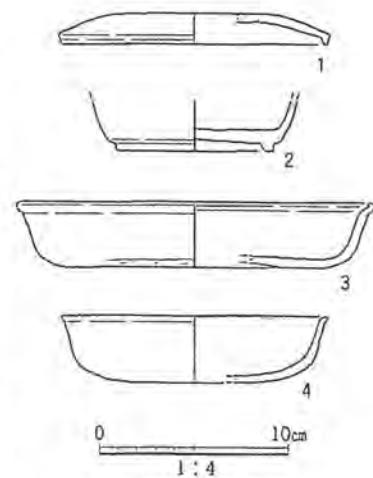


図6 出土遺物実測図
第3・5層上面清掃中(1)、
SX2(2)、第5層(3・4)

5層出土の遺物からみて、奈良時代後半から平安時代初頭の遺構である。耕作地や居住地の区画溝である可能性がある。

SD3・4 幅0.30～0.40m、深さ0.05mの溝で、SX2と平行するように西へ屈曲していた。埋土は灰色粘土質細粒砂で、遺物は土師器・須恵器の細片が少量出土した。

3)まとめ

今回の調査で得られた成果は以下のとおりである。

第5層中で、奈良時代後半～平安時代初頭頃に属する溝状の遺構SX2、土壌SK1などを検出した。これらについて明確に遺構の性格を特定することはできなかったが、コンテナ1箱程度の遺物が出土したことを考えると、近隣に居住地が展開していることが想定できる。南の加美遺跡北部では、KM00-3～5次調査やKM95-15次調査などで、北西に流れるほぼ同時期の大溝SD401が発見されている。この溝は人工の運河と考えられており[大阪市文化財協会2003]、この地域の開発に重要な役割を果たしたであろうことは想像に難くない。今回の調査結果を合わせ考えると、この時期の開発がさらに北方の本調査地周辺にも及んでいた可能性があることは重要である。

また第7層の所見から考えて、下位層準でも奈良時代の水田が発見されることが期待される。

このように、調査地周辺は遺跡の存在が知られていなかった地域であるが、今回の調査によって遺跡の存在が明確なものとなった。今後、本地点周辺ばかりでなく、より広く、河内平野全体について未知の遺跡が埋没していることに注意し、その実態の把握に努めることが肝要である。

参考文献

大阪市文化財協会2003、『加美遺跡発掘調査報告』Ⅱ、p.188

層序(東壁)



第5層内の遺構
(西から)



第5層内の遺構
(南から)



区 鶴 見 区

埋蔵文化財試掘調査(ML07-1)報告書

調査個所 大阪市鶴見区諸口6丁目6-1・7
調査面積 16m²(2m×2m 4箇所)
調査期間 平成19年12月10日・12月11日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、京嶋寛

1) 試掘調査に至る経緯と経過

調査地は茨田安田遺跡の西700mの地点であるが、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなく、周辺ではほとんど発掘調査が行われていない地点である(図1)。2000年に地下鉄今里筋線の検車場建設に伴う試掘調査が北西1.5kmで行われているが、その際には、TP+1mの近世の地層から弥生土器や土師器の細片が出土している。

今回の試掘調査は大阪市建設局の旧技術試験所跡地内で、2m×2mの試掘ピットを図2で示したとおり4箇所にて、地下2mまでの地層の確認を行うものである。敷地全域が既設建物以外、アスファルト舗装されていたため、3m四方の範囲のアスファルトをカッターで切断・除去したのち、2m角の範囲を重機により掘削してNo1～4ピットを設けて地層を観察した。

試掘調査で用いた水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)であり、TP+〇mと表記する。

2) 試掘調査の結果

敷地北部のNo2・3の試掘ピットではGL-2.5m(TP-0.6～0.8m)まで掘削したが、全面が近現代の廃棄物の堆積であり、古い地層は認められなかった。

以下には、古い地層が確認された敷地南部のNo1・4ピットの地層について記述する(図3)。

第1層：灰～オリーブ黒色シルト～細礫からなる現代の盛土である。

第2層：灰～オリーブ黒色粘土質細粒砂からなり、層厚は20～30cmである。下位の第3層の粘土質シルトの偽礫が多く含まれており、人為的に攪拌されたものと思われる。両試掘ピットで認められた。

第3層：灰色粘土質シルトからなる砂粒を含まない均質な地層である。作土層と思われる、層厚は約

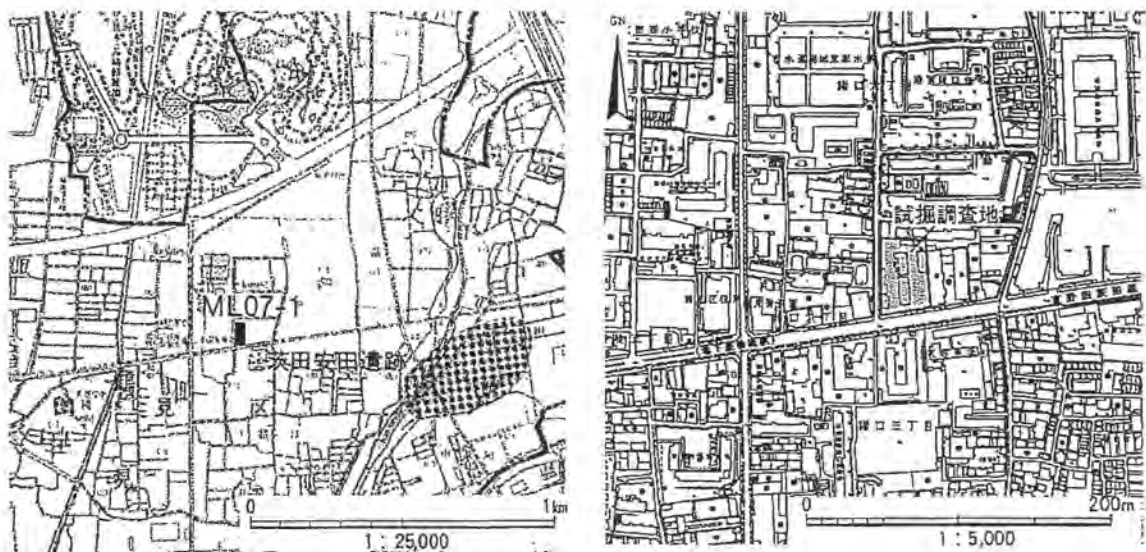


図1 調査地位置図

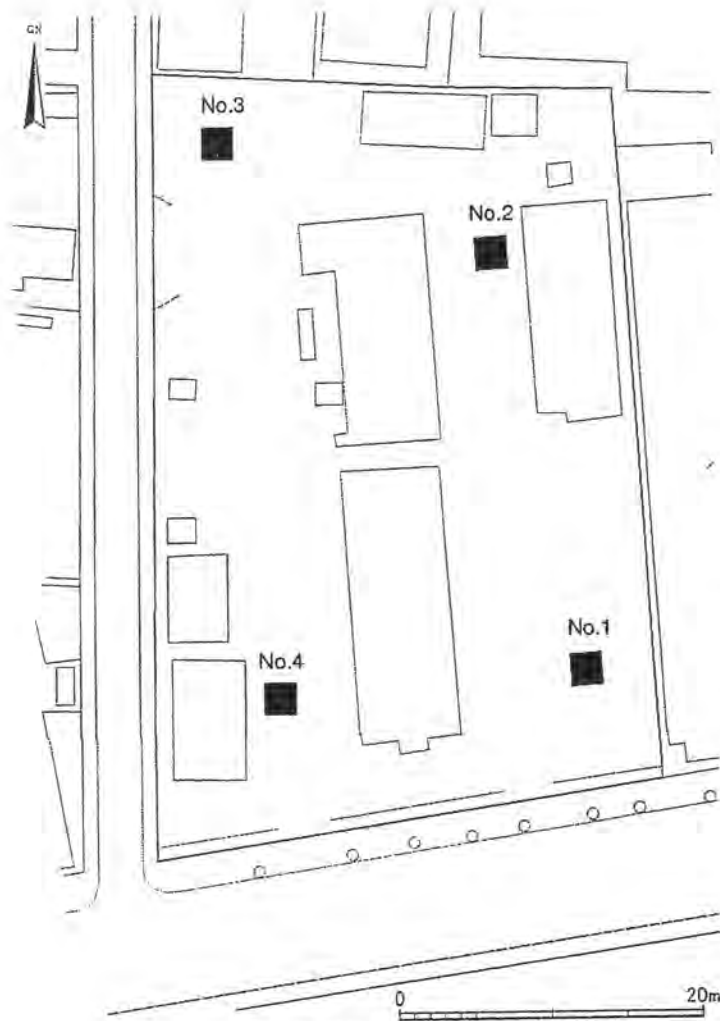


図2 試掘ピット位置図 1:500

20 cmである。No1ピットでは第2層中の偽礫としてのみ遺存する。

第4層：オリブ黒色細粒砂からなり、下位層上面に堆積する水成層である。No4ピットのみ存在する。

第5層：オリブ黒色細粒砂混り粘土質シルトからなる作土層である。No4ピットのみ存在する。

第6層：オリブ黒色中粒～粗粒砂混りシルトの作土層である。

第7層：オリブ黒色中粒砂混り粘土質シルトからなり、下位層上部に人為が加わった地層である。

第8層：オリブ黒色粘土質シルトからなり、層厚は40 cm以上ある。上面の標高は約TP±0 mである。

第4・5層はNo4のみで確認され、第6～8層はNo1・4ピットとも確認された。人為的な活動の痕跡は認められるものの、出土遺物はすべての地層で認められず、時期は明らかにできなかった。

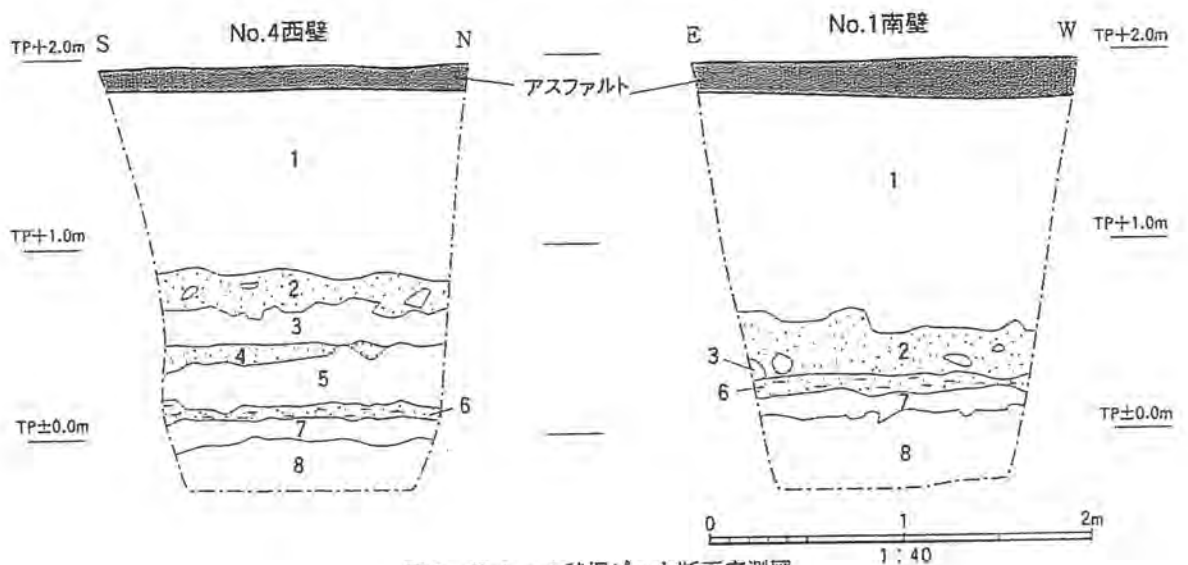


図3 No1・4試掘ピット断面実測図 1:40

3)まとめ

今回の試掘調査では、敷地北部のNo 2・3ピットについてはTP-0.6～0.8 mまで古い地層が確認できなかった。敷地北部に大規模な攪乱層が存在している可能性がある。一方、南部のNo 1・4ピットでは共通した地層が確認できたが、遺物がまったく出土しなかったため、各層の時期は確定できなかった。

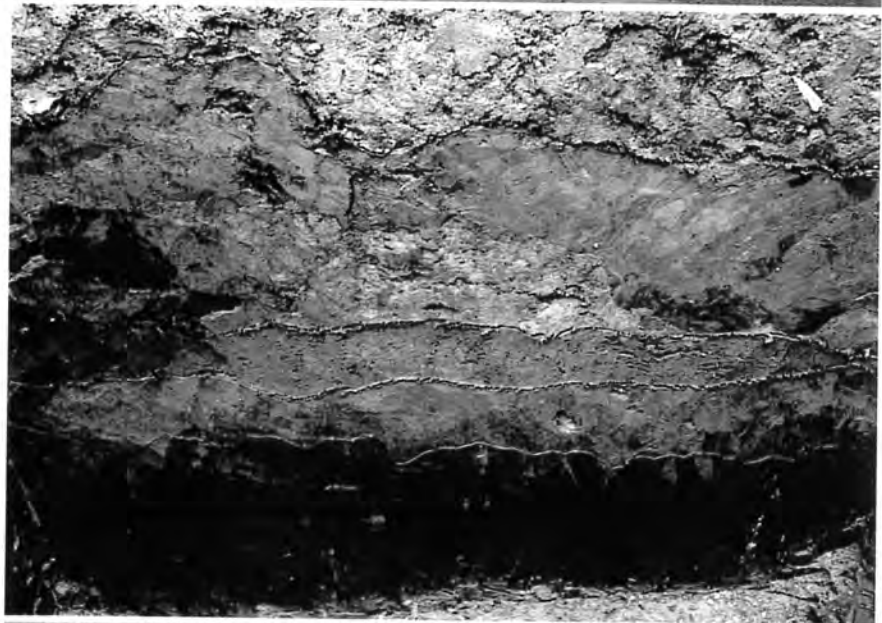
近代の地図によれば、今回の試掘調査地周辺は一帯が田地となっている。南部の試掘ピットで確認された地層は粘土質シルトを主体とする作土層だが、稲作ではなく、近年まで鶴見緑地周辺に広く分布していた蓮田であった可能性も考えられる。また、これらの地層の標高から考えると、これ以下に人の活動痕跡が存在する可能性は低いといえる。

今後、周辺での試掘等による新たな知見が得られることを期待したい。

No.4 ピット
(北から)



No.1 ピット断面



No.4 ピット断面
(北から)



X 阿 倍 野 区

埋蔵文化財発掘調査(OZ07-1)報告書

調査個所 大阪市阿倍野区王子町四丁目
調査面積 55㎡(A区30㎡・B区25㎡)
調査期間 平成19年11月19日～11月28日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、趙哲済

1) 調査の経緯と経過

調査地は阿倍野区の南部、上町台地の緩やかな稜線の東側に位置する。阿倍野筋に面して、北約300mには大阪府指定史跡の伝北畠顕家墓、北西約400mには平安時代の陰陽師として著名な安倍晴明の生誕地と伝えられる阿倍野晴明神社、熊野大社の末社で、平安時代以降の熊野信仰が盛んな頃に設けられた熊野九十九王子社が唯一残存する阿倍野王子社などがある。また、遺跡の北西には古墳時代～中世の集落遺跡である阿倍野元町所在遺跡があり、当該地周辺が中世以前から繁栄してきた地域であったことがうかがえる。

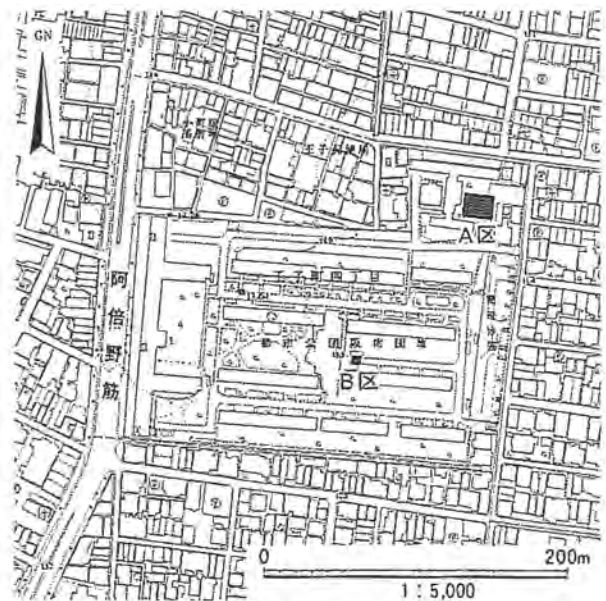


図1 調査地位置図

当該地で大阪市教育委員会が2箇所で試掘調査を行ったところ、A区の地表下2.7mに中世以前とみられる作土層が、同2.8mに当地域の基盤層である上町層が検出され、B区では地表下1.3mに中世の遺物包含層、同1.5mに上町層が検出された。そこで、このような地層の状況や年代、並びに遺構・遺物の有無を明らかにし、この地域の歴史的変遷を復元する基礎資料を得ることを目的として、本調査を実施した。

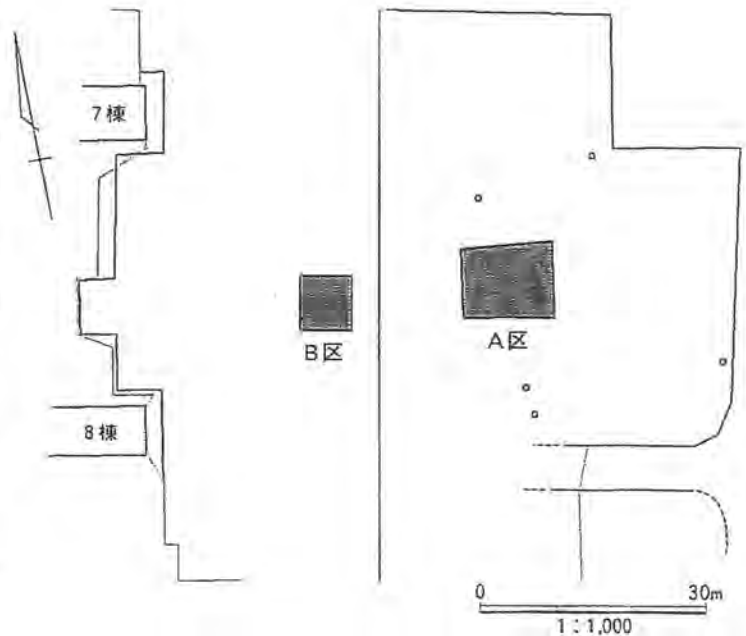


図2 調査区位置図(右図の○印は立木)

調査はA区とB区2地点で行った。期間と経費の削減のためA区では地表下2.7mまで、B区では約1mまでの地層を重機で掘削し、両調査地のそれぞれの深度で上記の調査面積を確保した。その後、人力によって遺構の検出や遺物の収集作業を行いつつ基盤層まで掘下げ、写真撮影と実測作業を適宜行った。掘削残土は場内仮置きし、調査終了後に埋戻しを行って更地に復した(図1・2)。

本報告で用いた示北記号は図1が座標北、それ以外の図が磁北であり、標高はT.P.値(東京湾平均海面高)を用い、TP+〇mと表記した。

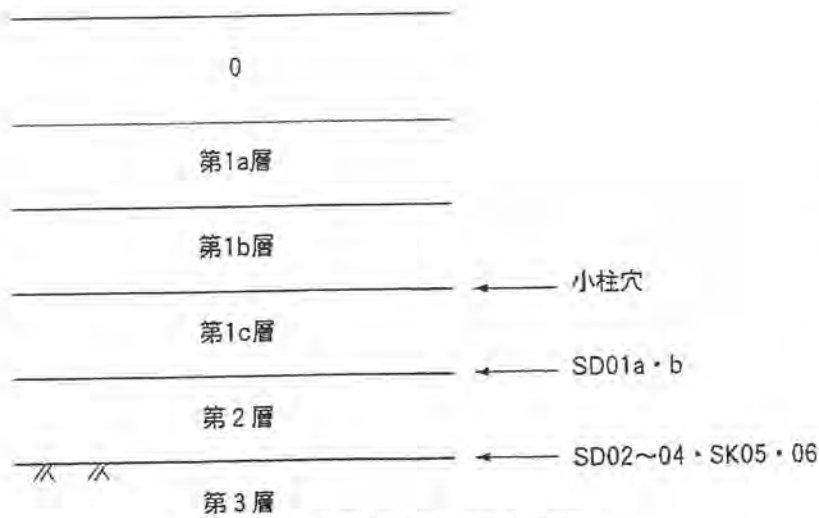


図3 B区の地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

中世の遺構と遺物が見つかったB区から述べる。

i) B区の層序(図3・4)

第0層は団地建設時の盛土層であり、層厚は50～60cmであった。

阪南団地建築前の作土層や溝の埋土層である第1層は3層に区分される。

第1a層は褐色を主たる色調とする第4層の大～中礫の偽礫からなる盛土層であり、層厚は20cm以下であった。

第1b層はオリブ褐色を主たる色調とする中～細礫・粗粒砂質シルトからなる作土層であり、層厚は平均10cm程度で調査地東部で厚く20cm、中央で薄く5cmであった。

第1c層はオリブ褐～にぶい黄褐色を主たる色調とするわずかに中礫質・細礫～粗粒砂質シルトからなるSD01などの埋土層であり、最大層厚はSD01bの最大深度に相当する45cmであった。上面で複数の柱穴を検出した。

第2層はオリブ褐～褐色を主たる色調とする第4層の偽礫を含む粘土質シルト～粗粒砂質シルトからなるSK05・06などの埋土層であり、最大層厚はSK05の最大深度に相当する40cmであった。

第3層はTP+12.8m以下に分布する灰色中礫質粗粒砂から明黄褐～褐色のシルト質細粒砂～粘土質シルトに上方細粒化する自然堆積層であり、当該地の基盤層である上町層上部である。TP+11.0mまで分布を確認したが、この付近の礫質粗粒砂層には巣穴の化石が認められた。

B区の北約60mの工事用豎坑で観察した第3層は残りがよく、上限がTP+13.9mで上町層の最上部の岩相である褐色極細粒砂質粘土層が分布した。

ii) B区の遺構と遺物

a. 中世後半～近世初頭の遺構(図4～8)

第3層上面でSD02～04、SK05・06等を検出した。また、これらの遺構に削られて、偽礫を含みにぶい黄褐色シルト～粘土を主体とする埋土をもつ倒木痕とみられる窪みが4箇所認められ(図4のA-A'断面)、その範囲を図5に点線で示した。

SD02は調査区東部を南北に延びる溝で、幅1.1m以上、深さ0.1m以上あり、埋土は砂・粘土質シルトであった。瓦、土師器、磁器など、中世～豊臣前期の遺物が出土した。図7の1は青花の皿である。

SD03は最大幅0.4m、深さ0.2mの溝で、南北方向から南で東に屈曲した。埋土は褐色砂質シルト

であり、2の中国製青磁碗のほか、土師器、常滑焼が含まれていた。

SD04はほぼ南北方向の幅0.4m、深さ0.1m未満の溝である。埋土は褐色砂質シルトであった。極く浅いため、SD03に重なる付近で追跡できなくなる。

SK05は長辺3.4m以上、短辺1.8m以上、深さ0.4mの土坑であり、第2層を埋土とする。底面は比較的平坦である。3の東播系播鉢のほか、土師器、須恵器、瓦質土器、青花、瓦、鉾滓、受熱礫が出土した。遺構の性格は明らかではない。

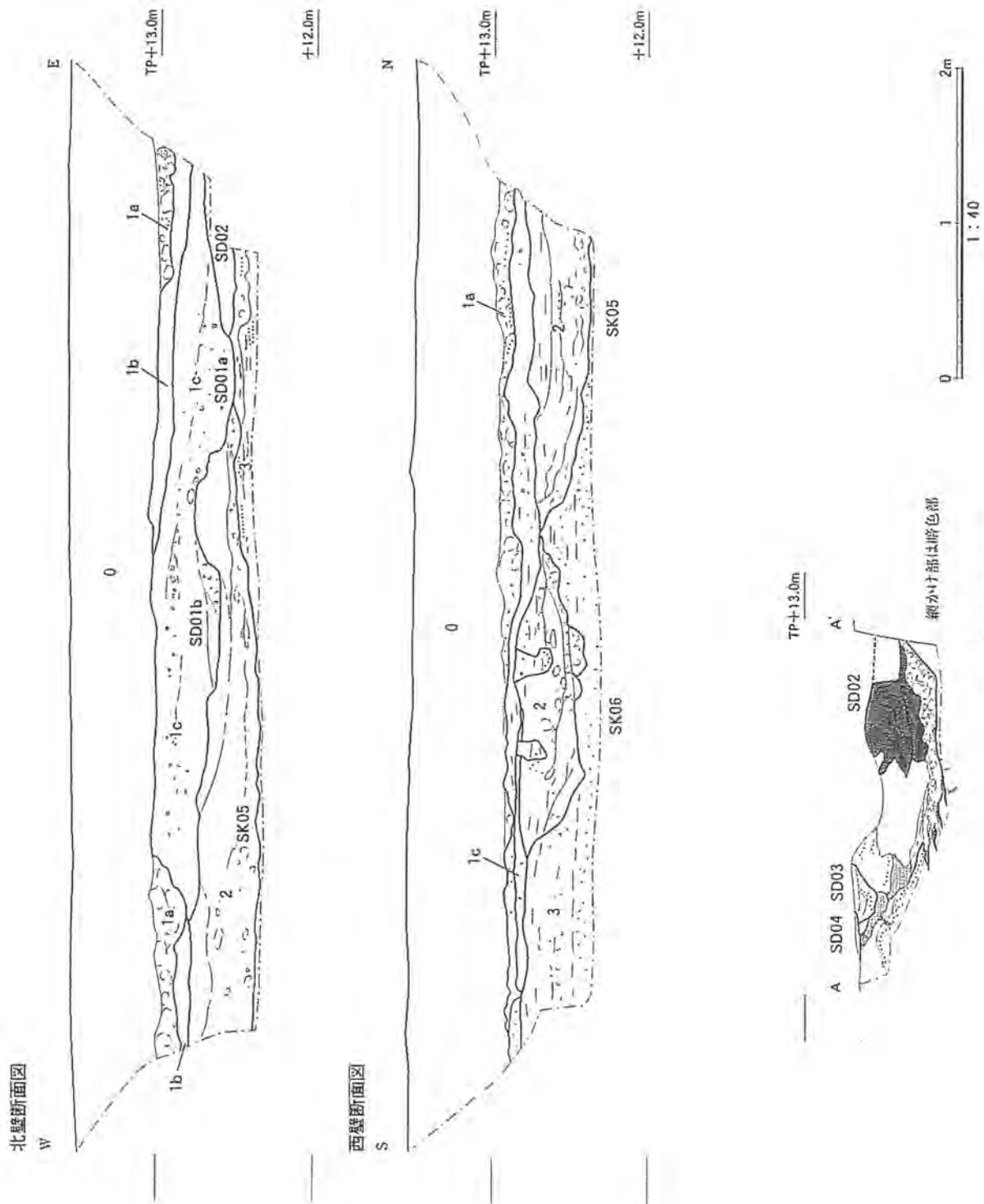


図4 B区地層断面図

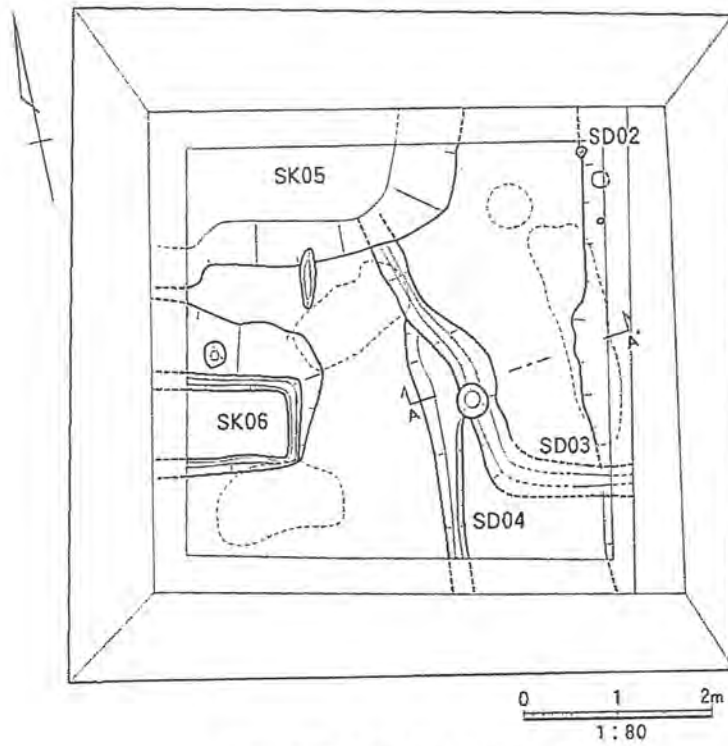


図5 B区第3層上面の遺構平面図

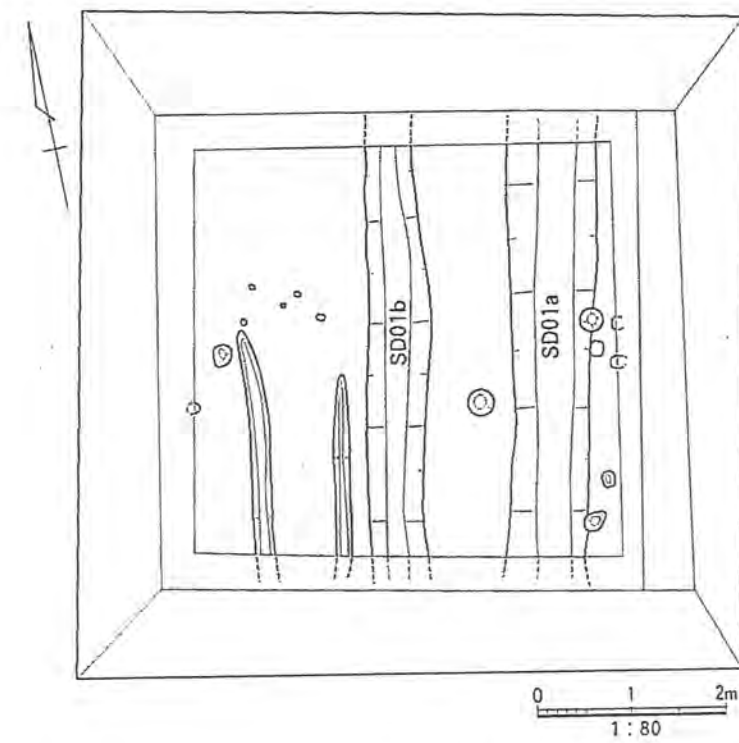


図6 B区第2層上面の遺構平面図

また、埋土の上部から、古銭15枚がまとまって出土した(図版2枚目上)。一部に紐が残っており、緡銭であったとみられる。種類が判明した5枚はすべて北宋銭であり、至道元宝(初鑄995年)、景德元宝(同1004年)、嘉祐元宝(同1056年)、熙寧元宝(同1068年)、嘉祐通宝(同1068年)である。

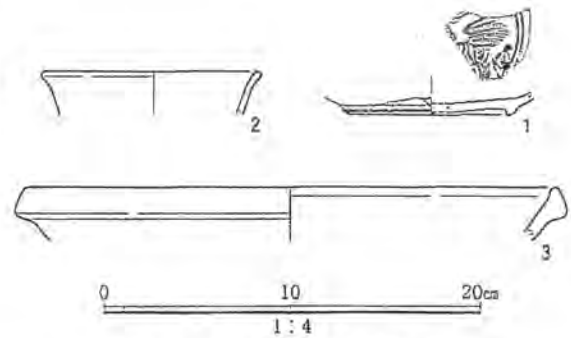


図7 B区出土遺物実測図

SK06は長辺2.0m、短辺1.8m以上、深さ0.5mの土壙であり、第2層を埋土とする。底面には幅0.1~0.2mで深さ0.1m未満の溝がコの字状に廻っていた。土師器、須恵器、瓦類のほか、鉞滓が出土した。遺構の性格は明らかではない。

b. 近世後半以降の遺構と遺物

第2層の上面で第1c層を埋土とする複数の溝を検出した(図6)。

SD01aは幅0.9m、深さ0.1m、SD01bは幅0.7m、深さ0.1mで、ともに北でやや東に振る阿倍野筋とはほぼ平行する溝である。肥前磁器、土師器、軟質施釉、瀬戸美濃陶器、関西系陶器鍋、瓦のほか、鉞滓、螢石、基石、ミニチュア独樂などが出土した。

iii) A区の層序

地層と遺構の関係を図8に、地層の断面図を図9に示す。

第0層は中礫、ガラ、赤褐色粘土・シルト質中粒~粗粒砂偽礫からなる現代の盛土層で層厚は1.2~1.4mであった。

第1層は黄褐色粘土偽礫の層厚10cm以下の盛土層(第1a層)と、黒褐色シルト質粗粒砂~細礫の層厚10cm内外の盛土層(第1b層)が重なった。



図8 A区の地層と遺構の関係図

第2層は、灰褐色シルト偽礫、淡黄灰色砂質シルト偽礫、褐色粗粒~中粒砂質シルト、暗灰色砂質シルトなどからなる層厚50~80cmの盛土層(第2a層)と、これに覆われた暗灰~暗青色粗粒砂質シルトからなる層厚20cmの作土層(第2b層)であった。

第3層は灰~灰黄色砂質シルト~シルト質粘土からなる擾乱層(第2c層)であった。

第4層は当該地の基盤層である上町層上部であり、B区の第3層と同じ地層である。

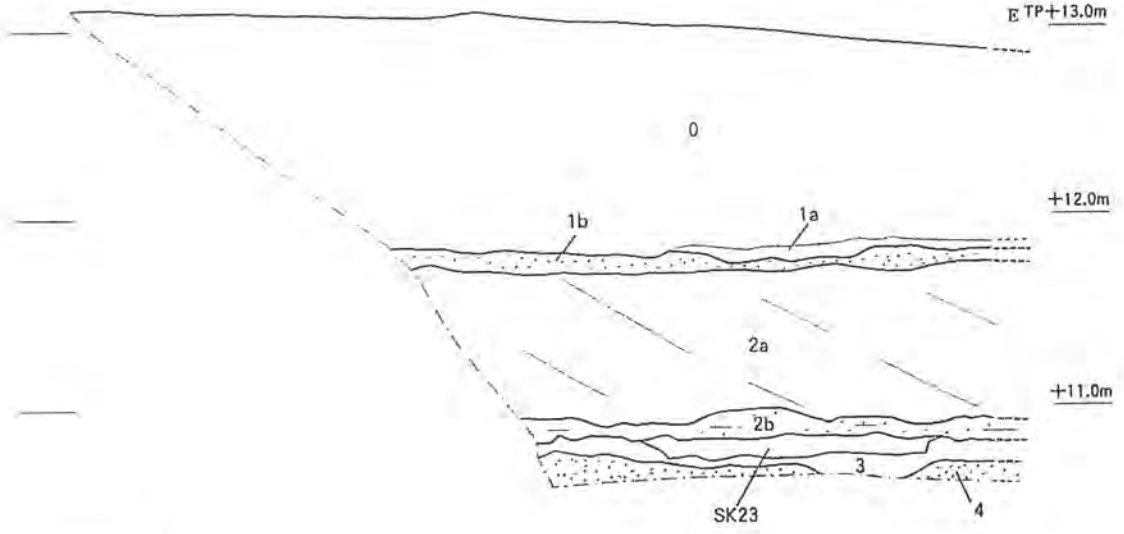
iv) A区の遺構と遺物

第3層の上面で暗紫砂・粘土質シルトからなる土壙状の窪みSK23を検出した。遺構の性格はわか

北壁断面图

W

E TP+13.0m



西壁断面图

S

N

TP+13.0m

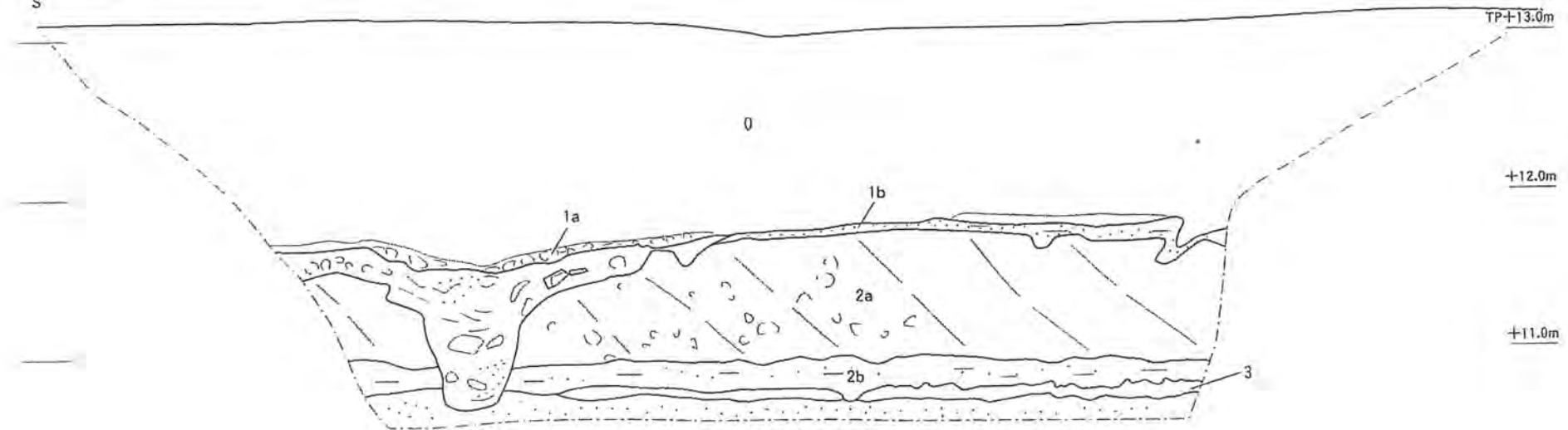


图9 A区地层断面图

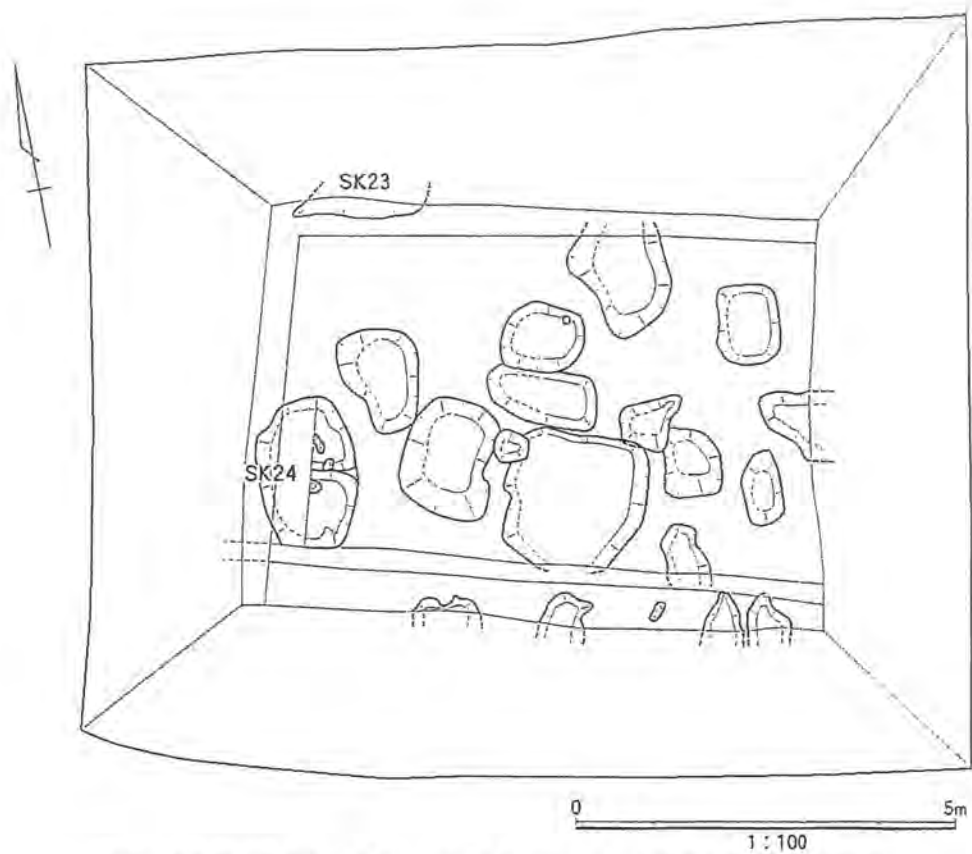


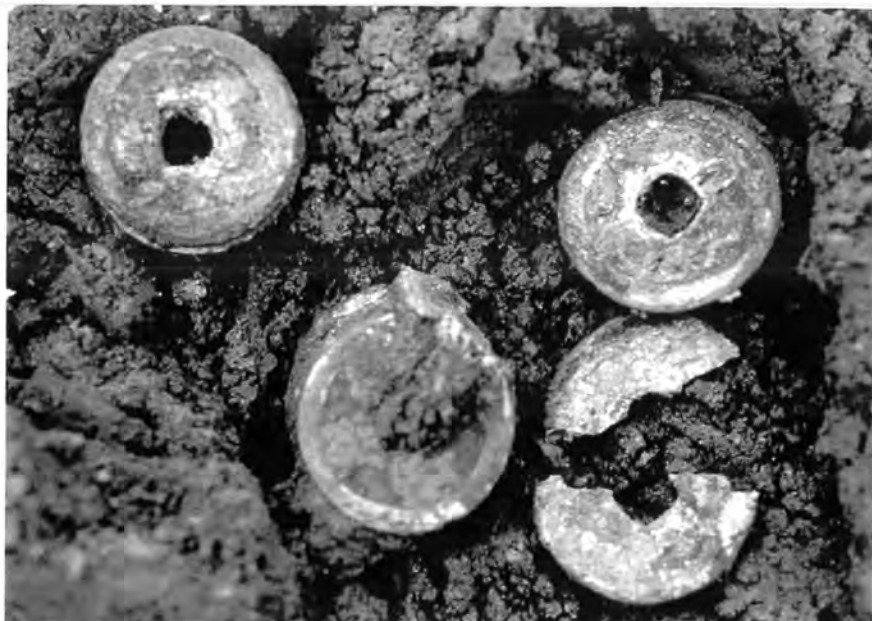
図10 A区第3層上面の遺構平面図(遺構番号は記述に係わるもののみ符号)

らなかった。また、偽磔埋土からなる多数の土坑を検出した(図10)。これらの土坑からは肥前陶器ほか、近代の遺物が出土した。遺構の性格は明らかではない。

3)まとめ

本調査では当該地で初めての発掘調査を行い、中世に遡る土坑や溝を検出した。このことは、当該地が中世以前から繁栄してきた地域であることを考古学的に実証した最初の発見である。当該地には基盤層がほとんど削られずに残る個所があり、遺構や遺物が良好に残っている可能性が高く、今後の調査が期待される。

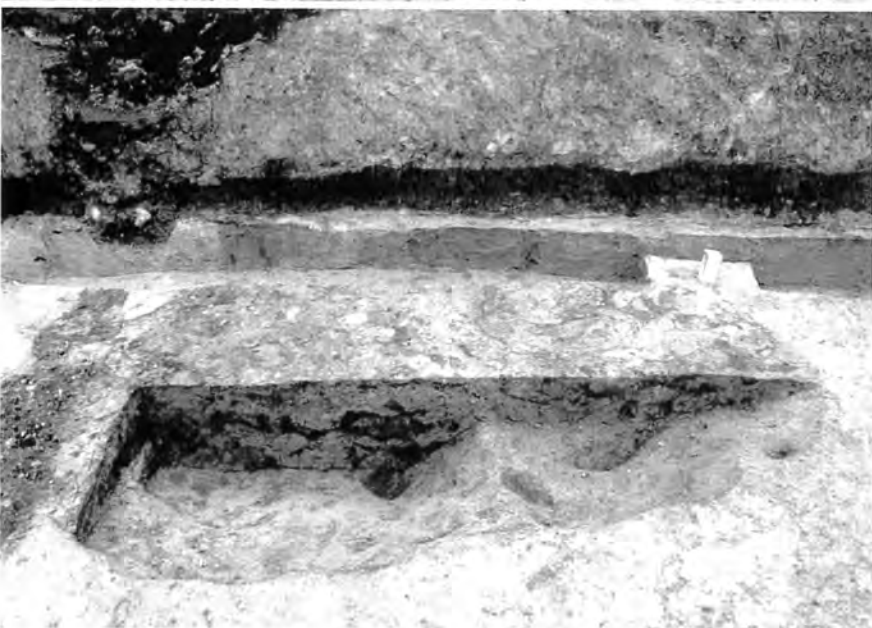
B区の第2層から出土
した北宗銭



A区全景
(東から)
第2層(基盤層)上面の
近・現代の遺構



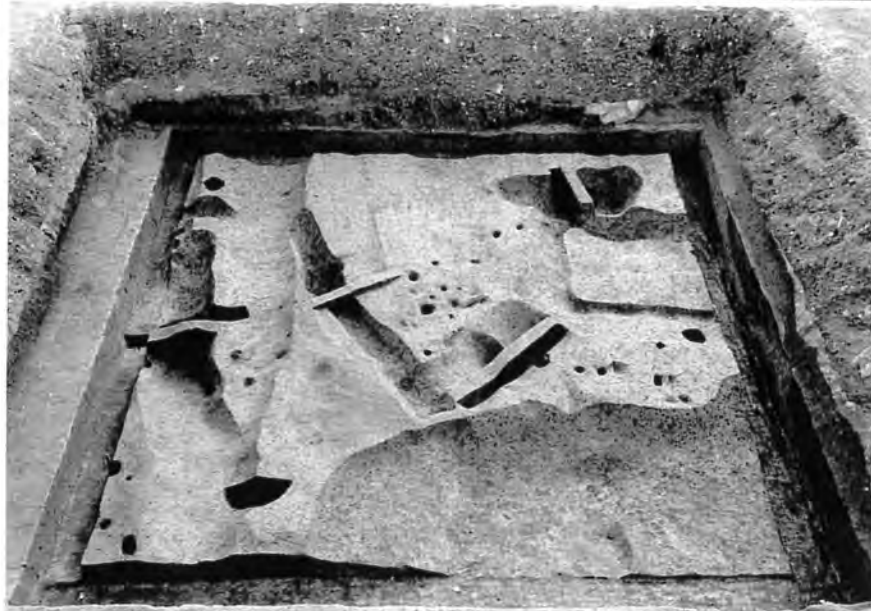
A区
近代の土壙SK24
半截状況



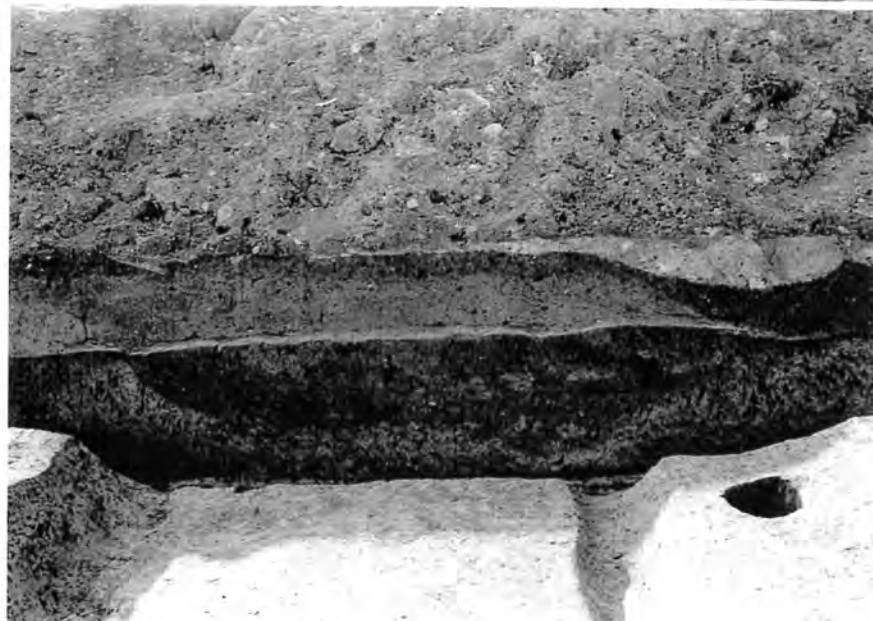
調査地近傍
(西から)
右手前がB区、左奥の
バックホーのある場所
がA区



B区全景
(北から)
第3層(基盤層)・2層
上面の中・近世の遺構



B区 SK06の断面
(東から)



XI 住 吉 区

埋蔵文化財試掘調査(MN07-1)報告書

- ・調査箇所 大阪市住吉区南住吉四丁目5外
- ・調査面積 約20m²
- ・調査期間 平成20年3月25日～3月28日
- ・調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
- ・調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、藤田幸夫

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は上町台地上に位置し、弥生時代から中世にかけての遺跡である南住吉遺跡の南方に当たる。南には旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である山之内遺跡が存在する(図1)。

今回の調査は、遺構の有無や地層堆積状況の確認を主たる目的として実施した。調査は2m×2mの試掘坑を5箇所を設定して実施した(図2)。

調査は2月25日から舗装切削、掘削を開始し、25日、26日の両日で調査、埋戻し作業を終了し、28日に舗装、フェンス復旧の作業を行った。

なお、本報告で使用した指北記号は図1は座標北、図2は磁北で、水準はT.P.値(東京湾平均海面値)を使用し、本文・挿図ではTP+〇mと記す。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3)

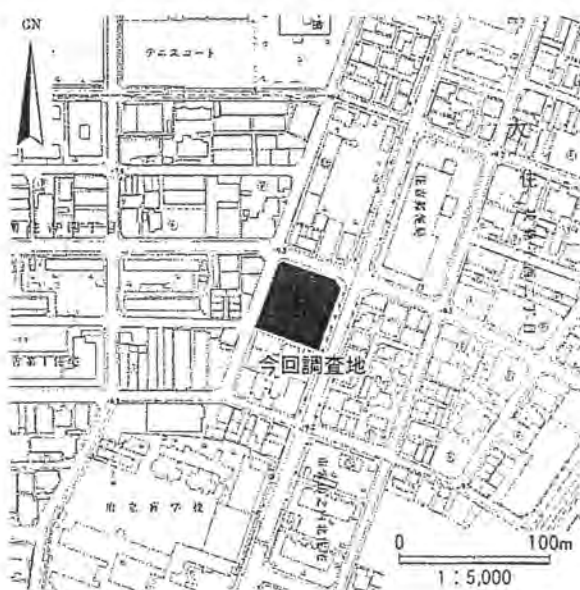


図1 調査地位置図

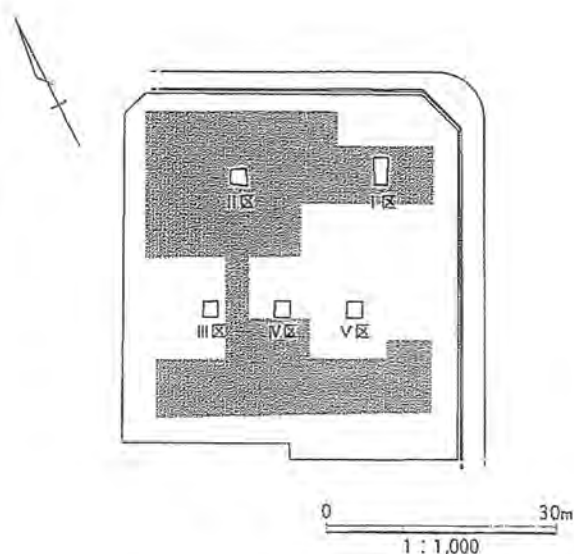


図2 調査区位置図
(網部分は旧建物)

第0層：近代以降の盛土層である。
 第1層：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト層で地山である。この層はⅡ区でのみ確認した。

2. 遺構と遺物

今回の調査では、近代以前の遺構・遺物は見つからなかった。

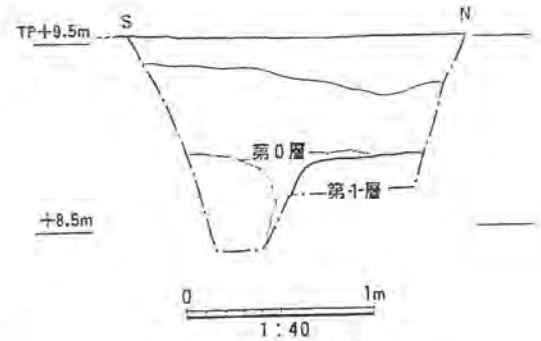


図3 Ⅱ区西壁地層断面図

〈まとめ〉

今回の調査で唯一の地山面を検出したⅡ区では、近代より古い遺構や遺物は見つからなかった。その他の箇所は近代以降の埋立土や旧建物の基礎を検出したのみである。図2は、旧建物と調査区の関係を示したものである。Ⅰ・Ⅱ区は建物位置に相当し、建物基礎を検出した。一方、Ⅲ～Ⅴ区は旧建物以外の場所に当たり、地表下約2mまで掘削したが、コンクリートを含む近代以降の盛土を検出したのみである。

今回の調査を実施した敷地は大半が近代以降に盛土などの改変を受けていることが明らかになった。

II区西壁断面



III区西壁断面



V区西壁断面



XII 東 住 吉 区

桑津遺跡発掘調査(KW07-1)報告書

調査個所 大阪市東住吉区桑津3丁目
調査面積 16m²
調査期間 平成19年5月7日～5月9日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小倉徹也

1) 調査に至る経緯と経過

桑津遺跡は大阪市東住吉区桑津・駒川・西今川・北田辺に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡で、大阪府下を代表する弥生時代の遺跡として知られている。調査地はそのほぼ中央部に位置する(図1)。これまでに調査地周辺では、本調査地南西側の桑津小学校内で行われたKW90-14次調査で弥生時代中期後半の井戸・土塀・柱穴群と平安～鎌倉時代とみられる柱穴、南東側の東住吉中学校内で行われたKW82-7次・83-8次・93-2次調査で弥生時代中期の方形周溝墓群、北東側で行われたKW91-8次調査で飛鳥時代の掘立柱建物群や井戸が見つかった。

住宅建設に伴い、2007年4月3日に行われた試掘調査で、近世作土層の直下から古代および中世と思われる遺構が確認された。この結果を受け、工事に先立って発掘調査を実施することになった。敷地内の南端に調査区を設定して(図2)、2007年5月7日から本調査を行った。

調査はまず、重機によって現代盛土を除去した後、以下を人力によって掘下げた。遺構や遺物の検出に努めるとともに、それらの平面図や断面図の作成、写真撮影などの記録作業を行った。5月9日に埋戻し作業を含めた現地におけるすべての作業を完了した。

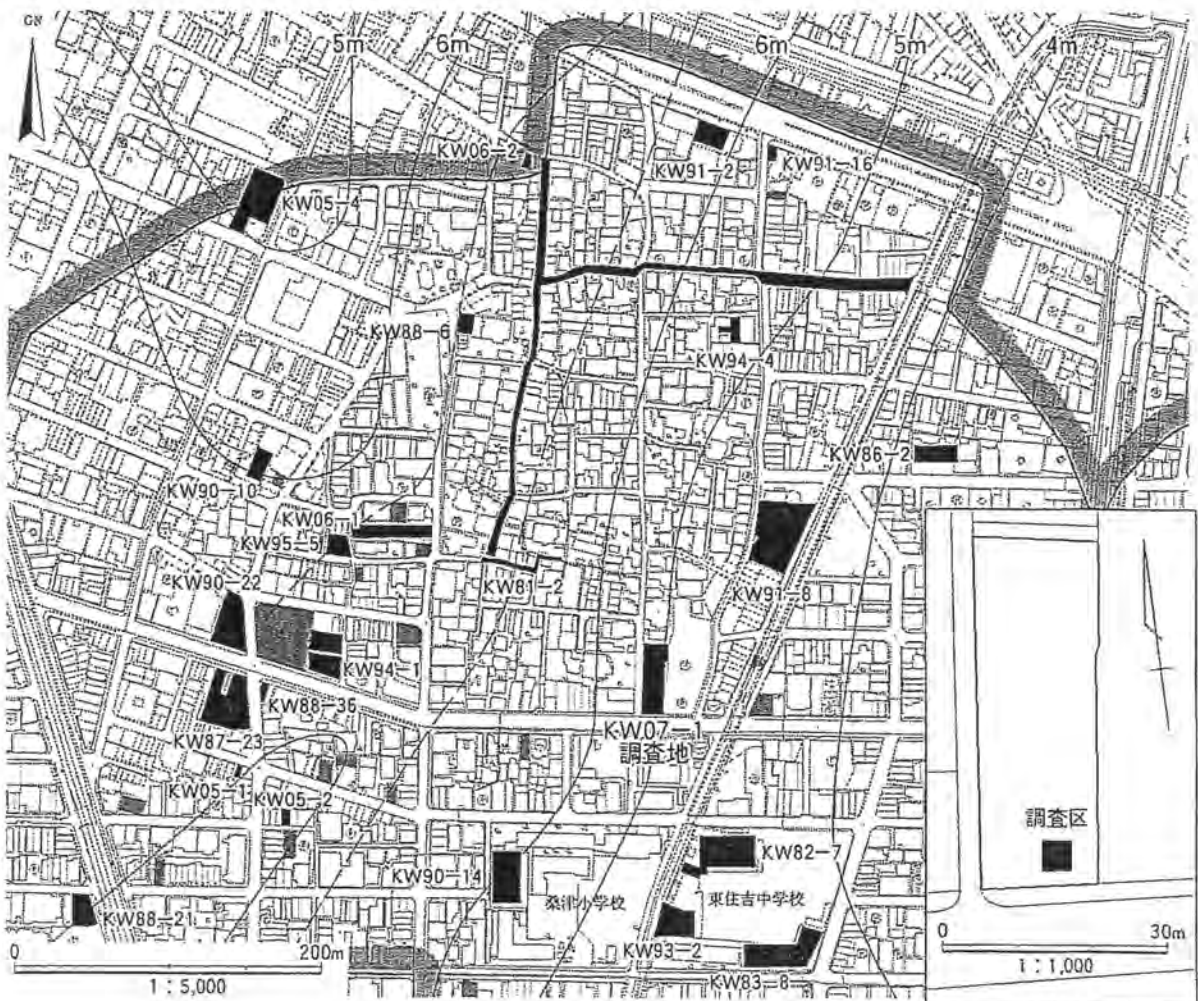


図1 調査地位置図

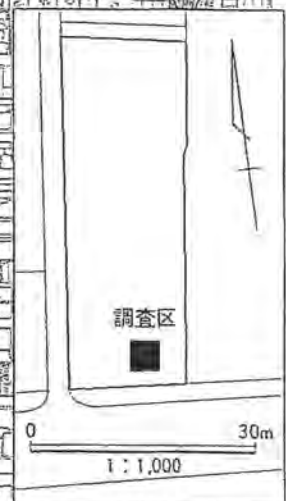


図2 調査区配置図

以下、報告で使用した図面に示す標高はT.P.値(東京湾平均海面値)、示北記号は図1が座標北、それ以外は磁北である。

2) 調査の結果

i) 層序(表1、図3~4)

調査地の現地表面は標高TP+4.6~4.9mで、南に傾斜していた。現地表面下約1.3m(TP+3.3m)までの地層を観察し、その結果に基づいて本調査地の層序を確立した。堆積層は沖積層(難波累層)および段丘構成層に相当し、人為によって形成された地層である第2層以上と、主として自然の営力による第3層以下に大別される。以下に層序の概略を記し、各層の岩相や特徴、桑津遺跡基本層序との対比を表1に、地層と遺構の関係図を図3、地層断面を図4に示す。桑津遺跡基本層序の地層名については、地層番号の前に「桑津」を付して「桑津〇層」と表す。また、地層の構成物質の記載については、構成物質の主体を占める碎屑物粒子と、その運搬・堆積(沈着)条件を決定する営力の大きさとの運動関係がもっともよく反映されている碎屑物の粒径区分(ウェントワース・ペディジョン式)を用いて記載した。

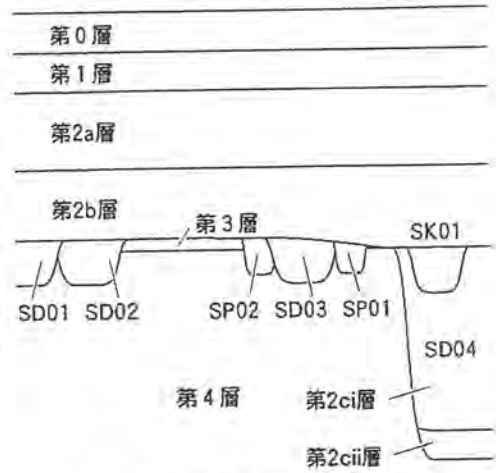


図3 地層と遺構の関係図

第0層：現代の盛土層および攪乱層で、層厚は10~20cmである。桑津0層に対比される。
 第1層：旧表土で、層厚は10cm以下である。桑津1層に対比される。
 第2層：近世の作土層および後述するSD04の埋土で、第2a層~第2c層に細分した。第2a層はシルト・粗粒砂~中礫を含むにぶい黄褐色の細粒砂からなり、層厚は10~20cmである。第2b層は上半部が粗粒砂~中礫・シルトを含む褐色ないし暗褐色の細粒砂からなり、下半部が粗粒砂~中礫・シルトを含む褐色ないし暗褐色の細~中粒砂からなる。上半部と下半部との境界は一部不明瞭ではあるが層理面によって境されており、耕作時期の違いを示すものと考えた。層厚はそれぞれ10~40cm、20cm以下である。第2b層下半部は西部のみに分布していた。第2a層~第2b層は桑津2層に対比される。

第0層：現代の盛土層および攪乱層で、層厚は10~20cmである。桑津0層に対比される。

第1層：旧表土で、層厚は10cm以下である。桑津1層に対比される。

第2層：近世の作土層および後述するSD04の埋土で、第2a層~第2c層に細分した。第2a層はシルト・粗粒砂~中礫を含むにぶい黄褐色の細粒砂からなり、層厚は10~20cmである。第2b層は上半部が粗粒砂~中礫・シルトを含む褐色ないし暗褐色の細粒砂からなり、下半部が粗粒砂~中礫・シルトを含む褐色ないし暗褐色の細~中粒砂からなる。上半部と下半部との境界は一部不明瞭ではあるが層理面によって境されており、耕作時期の違いを示すものと考えた。層厚はそれぞれ10~40cm、20cm以下である。第2b層下半部は西部のみに分布していた。第2a層~第2b層は桑津2層に対比される。

表1 調査地の層序表

桑津遺跡基本層序	KW07-1層序	岩相	土色	層厚(cm)	自然現象ほか	遺構	おもな遺物	時代
0層	第0層	現代盛土および攪乱層	-	10~20				現代
1層	第1層	暗オリーブ褐色シルト混り砂・礫 [旧表土]	3.5Y3/3	≤10			陶磁器	(~近代?)
2層	a	含シルト・粗粒砂~中礫 にぶい黄褐色細粒砂	10YR4/2	10~20			陶磁器	近代
		上半部：含粗粒砂~中礫・シルト 黄・暗褐色細粒砂 下半部：含粗粒砂~中礫・シルト 黄・暗褐色細~中粒砂	10YR3.5/4 10YR3.5/4	10~40 ≤20	(西部のみ分布)			
	c	上半部：含粗粒砂~中礫・シルト にぶい黄褐色細~細粒砂 下半部：含粗粒砂~中礫・シルト 黄・暗褐色細~粗粒砂	10YR4/2 3.5Y3/15 10YR4/2	≤40 ≤45			瓦器・陶磁器	近代
		ii 灰色細~中粒砂	7.5Y4/1	≤10	ラミナあり	SD01~04, SK01, SP01-02		
3~7層	第3層	暗褐色シルト混り砂礫~粗粒砂 [古土築?]	10YR3/3	≤15	砂礫質	礎石		(中世~近世?)
地山層	第4層	i 含シルト・粗粒砂~粗礫 褐色細粒砂	10YR4/4	≤20	生物擾乱			旧石器
		ii 含シルト・粗粒砂~粗礫 暗褐色細~中粒砂	10YR3/3	≤20	上部：生物擾乱 (木の板)			
		iii 黄褐色中粒砂~礫	10YR5/6	40±				

黄褐色帯 一 上面検出遺構 ↓ 下面検出遺構 ▲ 層内検出遺構

第2c層はSD04の埋土で、埋立て層である第2ci層と機能時堆積層である第2cii層に細分される。第2ci層はさらに埋立ての単位として上半部と下半部とに細分され、上半部が極粗粒砂～中礫・シルト・シルト偽礫を含むにぶい黄褐色の粗粒～細粒砂、下半部が極粗粒砂～中礫・シルトを含む黒褐色ないし灰黄褐色の細粒～粗粒砂からなる。第2cii層は灰色の細粒～中粒砂からなり、斜交ラミナが観察された。層厚は第2ci層の上半部が40cm以下、下半部が45cm以下、第2cii層が10cm以下である。

第3層：暗褐色のシルト混り極細粒～細粒砂からなる古土壌で、層厚は15cm以下である。遺物は出土していないが、上・下位層から桑津3～7層に対比される。

第4層：段丘構成層に相当する河成層である。第4i層～第4iii層に細分した。第4i層はシルト・粗粒砂～細礫を含む褐色の細粒砂からなる。第4ii層はシルト・極粗粒砂～細礫を含む暗褐色の粗～中粒砂からなり、一部に斜交ラミナが観察された。第4iii層は黄褐色の中粒砂～細礫からなり、斜交ラミナが観察された。層厚はそれぞれ20cm以下、20cm以下、40cm以上である。第4i層上面には灰色砂質シルトで充填された乾痕が観察された。また、第4ii層上半部には黒灰色砂質シルトで充填された木の根の痕跡が見られた。

ii) 遺構と遺物

平面的な調査は第3層上面および第4i層上面、第4ii層上面において行った。

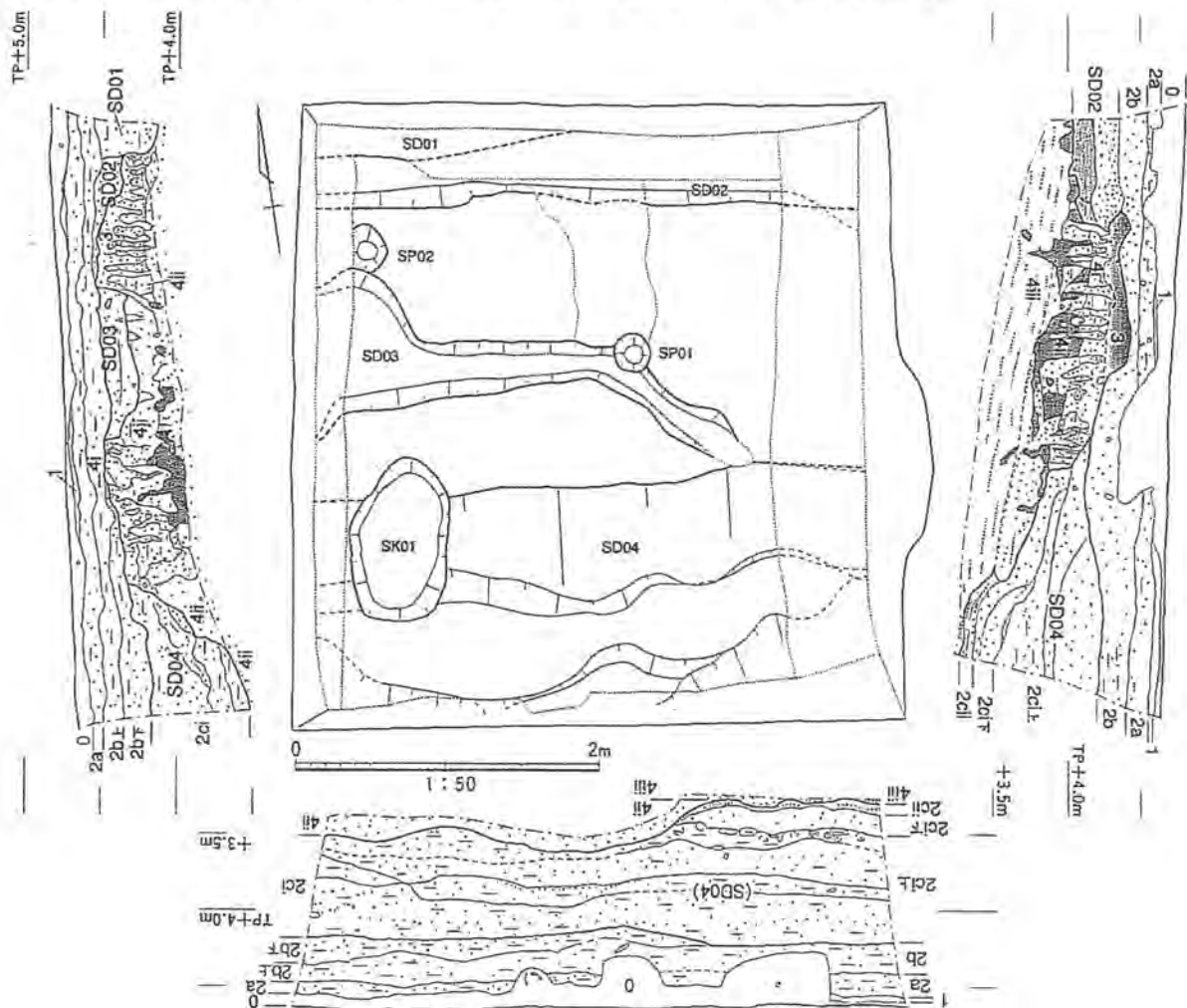


図4 第3層上面の検出遺構平面図および西壁・南壁・東壁の地層断面図

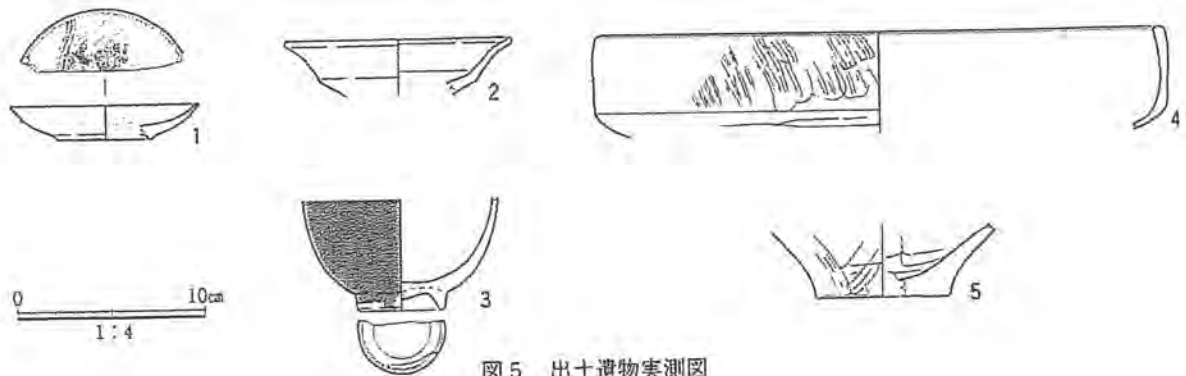


図5 出土遺物実測図
SD03(5)、SD04(1~4)

a. 第3層上面の遺構と遺物(図4・5)

溝SD01~SD04、土塹SK01、ピットSP01~SP02を確認した。第3層上面の遺構検出状況を図4、出土遺物の実測図を図5に示す。

SD01 北端部で確認した溝である。北側および西側が調査範囲外であったため、大きさは不明である。埋土は粗粒砂~中礫を含む灰黄褐色ないしにぶい黄褐色の中粒~細粒砂からなる。後述するSD02を切っていたこと、埋土の特徴および周辺の調査結果から近世かそれ以降の遺構と思われた。

SD02 北部で確認したほぼ東西方向の溝である。北側は調査範囲外であったため大きさは不明であるが、残存する幅は0.3~0.7m、深さは約0.4mであった。延長は(西壁および東壁断面に溝が認められたことから)4m以上と推測された。埋土は下部が粗粒~極粗粒砂を含む灰黄褐色のシルト混り細粒砂、上部が暗褐色の中粒砂~中礫であった。上部には一部に平行ラミナが観察された。遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、周辺の調査結果と埋土の特徴から近世の遺構と考えられた。

SD03 中央部で確認したほぼ東西方向の溝である。残存する幅は西側で約1.0m、深さ約0.2m、東に向かって浅くなり、東端部は上位層の削剥によって失われていた。延長は(西壁断面に溝が認められたことから)3m以上と推測された。埋土は下部が粗粒砂~中礫を含むにぶい黄褐色の細粒~中粒砂からなり、上部が中粒砂~細礫を含むにぶい黄褐色の細粒砂からなる。埋土から陶磁器のほか弥生土器5や須恵器の細片が出土した。調査地周辺の地形は西側に標高が高く、東側に低いが、本遺構は東側に浅く、西側に向かって深くなっており、地形とは非調和的な溝であった。

SD04 南端部で確認した溝である。南側は調査範囲外であったため大きさは不明であるが、残存する幅は約1.7m、深さは約1.0mであった。延長は(西壁および東壁断面に溝が認められたことから)4m以上と推測された。埋土は前項で述べたように盛土層である第2ci層と機能時堆積層である第2cii層に細分される。第2cii層は東側でのみ確認した。第2ci層からは肥前磁器皿1、肥前陶器皿2、肥前磁器青磁碗3、炮烙4などのほか、須恵器や土師器片が出土した。第2cii層は東側でのみ確認したことから溝の延長方向はほぼ東西方向と考えられたが、東側に流れていたことを確認することはできなかった。

SK01 南西部で確認した平面楕円形の土塹である。上部は上位層の削剥によって失われていたた

め正確な大きさは不明であるが、残存する長径は約1.1m、短径約0.7m、深さは約0.3mであった。埋土は中粒砂～細礫を含むにぶい黄褐色の細粒砂からなり、SD03の上部の埋土と同質であった。SD04を切っていたことと、埋土の特徴がSD03の埋土と同質であることから近世の遺構と考えられた。

SP01 中央部で確認したピットである。直径約30cm、深さ約25cmの平面がほぼ円形で、SD03を切っていた。埋土は粗粒砂～中礫を含むにぶい黄褐色の細～中粒砂からなる。SD03を切っていたことと、埋土の特徴から近世の遺構と思われた。

SP02 北西部で確認したピットである。南側はSD03によって切られ、西側は側溝トレンチによって失われたため正確な大きさは不明であるが、残存する南北長は約23cm、東西長約20cm、深さ約20cmの平面がほぼ円形の遺構である。埋土は中粒砂～細礫を含むにぶい黄褐色の細粒砂からなる。SD03に切られていたことや、埋土の特徴からみて近世の遺構と考えられた。

b. 第4i層上面および第4ii層上面の検出状況

第4i層上面では乾痕をはじめ、第4ii層上面で木の根の痕跡が確認されたが、遺構や遺物は見つかることはできなかった。

3)まとめ

今回の調査地は弥生時代や飛鳥時代の遺構・遺物が付近で検出されている地域であったが、検出された遺構は溝が4条、土壇が1基、ピットが2基で、いずれも近世のものと考えられた。しかし、溝からは弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が出土しており、上述の周辺調査成果を裏付けるものである。今後、調査地周辺で行われる調査の結果を合わせて、人間活動や土地利用の変遷についてさらに検討していくことが必要である。

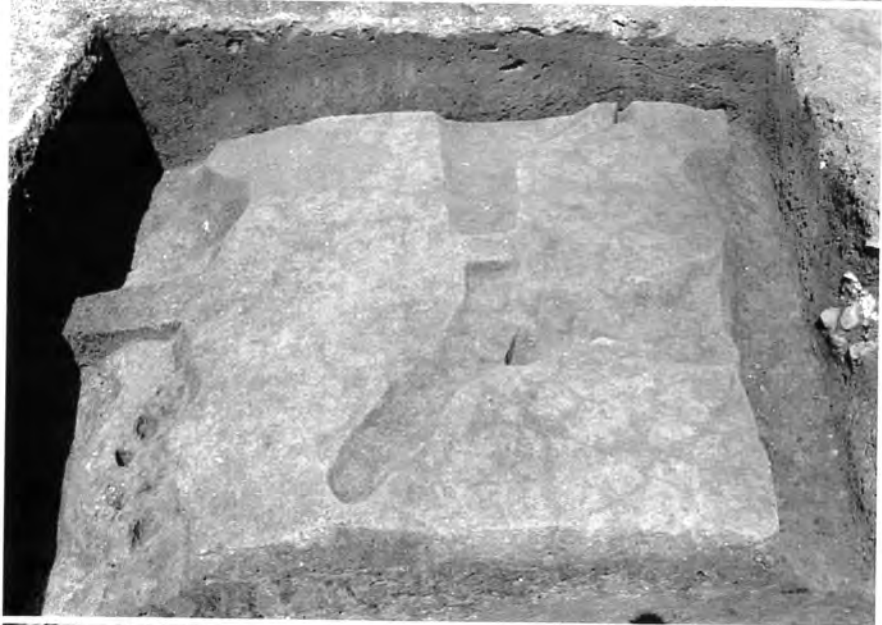
引用・参考文献

大阪市文化財協会1998、『桑津遺跡発掘調査報告』

東壁地層断面
(北西から)



第3層上面検出状況
(東から)



第4ii層上面完掘状況
(東から)



XIII 平 野 区

平野環濠都市遺跡発掘調査(HN07-1)報告書

調査個所 大阪市平野区平野本町1丁目10番20号
調査面積 7.5㎡
調査期間 平成19年10月2日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査研究部次長 南秀雄、杉本厚典

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は大念仏寺の南290mであり、1763(宝暦13)年の『摂州平野大絵図』によると西辺の環濠に当たる(図1)。本調査地の東に隣接するHN86-22次調査地では平野環濠の一部が見つかった[大阪市文化財協会1987]。

これまでに平野環濠都市遺跡では大阪ノ陣の時の焼土層が、現地表下1.5~2.0mに分布していることが明らかにされており、HN86-22次調査地でも表土直下に濠の輪郭が見つかったことから、環濠の状況と中・近世の地層の確認を目的に、掘削深度を約2.0mに設定して調査を実施した。

今回の報告では調査区の位置をデジタルマップ上で合成し、世界測地系の座標を記したものをを用いる(図2)。



図1 調査地の位置

図中の環濠跡は明治19(1886)年参謀本部陸軍測量部の地形図(国土地理院蔵版複製)をもとにトレース

2) 調査の結果

i) 層序(写真1・図3)

厚さ50cmの現代盛土と厚さ25cmの整地層を除去すると、3層に分かれる湿地性の堆積層が認められた。調査はGL-230cmまで行った。

第1層：GL-75~120cmに堆積しており青灰色細粒砂で構成されていた。層厚は45cmで、層中には戦後の廃棄物が多く認められた。

第2層：GL-120~165cmに堆積し青灰色細粒砂で構成されていた。層厚は45cmで、層中には腐植物が多く含まれており、板ガラスやナイロンも認められた。

第3層：GL-165cm以下に堆積し暗灰色粘土で構成されていた。層厚は65cm以上で、層中には瀬戸焼磁器が含まれていた。

ii) 遺物

第1層からは陶製の水量器の蓋、煉瓦、第2層からは牛乳瓶、^{しびん}浸瓶、第3層からは瀬戸磁器の破片、万古焼の破片などがそれぞれ出土した。陶製の水量器の蓋には大阪市の市章と「量水□(器カ?)」の文字が右から横書きで入る(写真2)。煉瓦には「+」の印刻が認められる。牛乳瓶には「搾取自家販賣澤



図2 トレンチ位置図

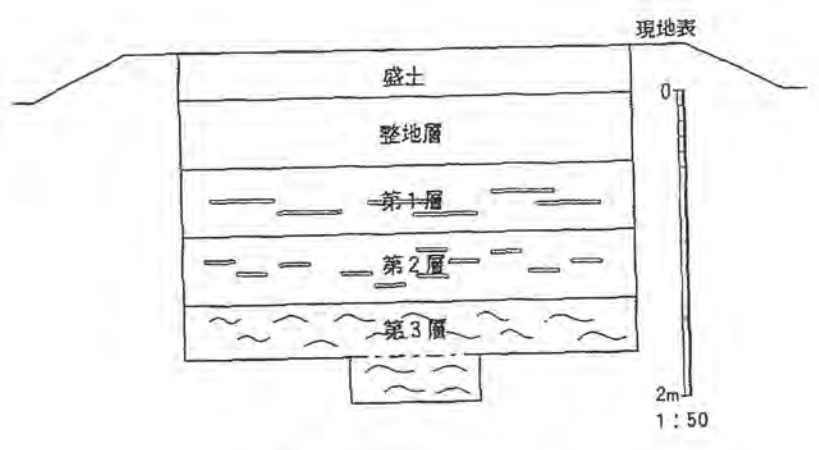


図3 トレンチ南壁断面模式図

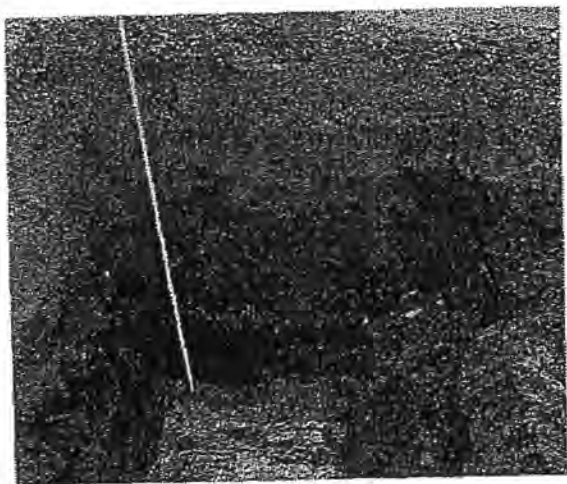


写真1 南壁地層

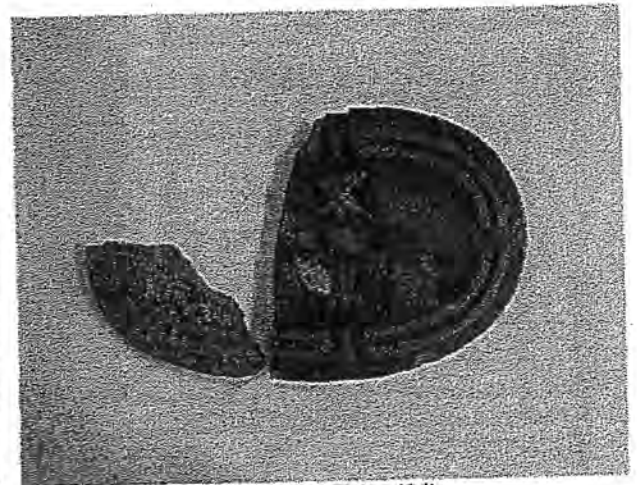


写真2 第2層出土遺物

田牧場」といった文字が読み取れる。これらの遺物はいずれも近代以降のものである。

3)まとめ

HN86-22次調査地では幅16m以上深さ3mの濠が東西方向に延びていることが確認されている。本調査地ではこの濠の南側の肩が見つかるかと予想していたが、地層の堆積状況からまだ濠の中であったものと推測される。今回見つけた濠の堆積がHN86-22次調査地の濠と一連のものとする、濠の幅は絵図や1886(明治19)年の地図から読みとることのできる幅22mの規模を越すものになると考えられる(図5・6)。周辺調査を行うことで、濠の幅や埋没のようすなどについて、さらに詳細に明らかになるものと期待される。

引用参考文献

- 豆谷浩之1999、「平野環濠都市遺跡における地割の転換をめぐって」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.355-363
- 大阪市文化財協会1987、「大平市場新築工事に伴う平野環濠跡発掘調査(HN86-22)略報」



図5 調査区の位置と想定される
「摂州平野大絵」図上での位置



図6 絵図・明治19年の地図から推定される環濠の
ラインと発掘調査からうかがえる環濠の範囲

埋蔵文化財試掘調査(KG07-1)報告書

調査個所 大阪市平野区喜連5丁目540-1
調査面積 16m²
調査期間 平成19年12月5日～12月7日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、絹川一徳

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、弥生時代から中世の集落遺跡である喜連東遺跡と中世から近世の集落遺跡である平野環濠都市遺跡との中間に位置する(図1)。調査地周辺ではこれまで発掘調査が行われたことがなかったが、上記の両遺跡が中世以降に大きく開発が進んだ集落遺跡であるため、中間地点に当たる調査地周辺でも当該時期の遺跡や遺物が存在する可能性があった。そこで、当該地において遺構・遺物の有無と地層の堆積状況を把握するため試掘調査を実施することとなった。

調査地内に2m×2mほどの試掘坑を4箇所(トレンチ1～4)設定し、それぞれ深さ約2mまで重機により掘削した(図2)。現代盛土以下は平面および地層断面を精査しながら遺構・遺物の有無を確認し、実測・写真撮影等の記録作業を併せて行った後、各試掘坑を埋戻してすべての作業を完了した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

調査地の標高は約6mである。各トレンチで現代盛土の下に堆積した第1～7層の地層を確認した。

第1層：暗緑灰色細粒砂混り粘土層である。トレンチ1～4のすべてで認められた。旧表土で作土である。トレンチ3では本層の下部で客土とみられる粘土塊が混入していた。

第2層：暗緑灰色細粒砂混りシルト質粘土層である。トレンチ2～4ではa・b層に細分できた。第2b層は第2a層より砂質が強く、マンガン粒が顕著に認められた。いずれも作土である。

第3層：暗緑灰色シルト混り細粒砂層である。トレンチ1で認められた。水成堆積層である。

第4層：トレンチ3以外で認められた灰オリーブ色シルト質粘土層である。締りがよい作土である。



図1 調査地の位置

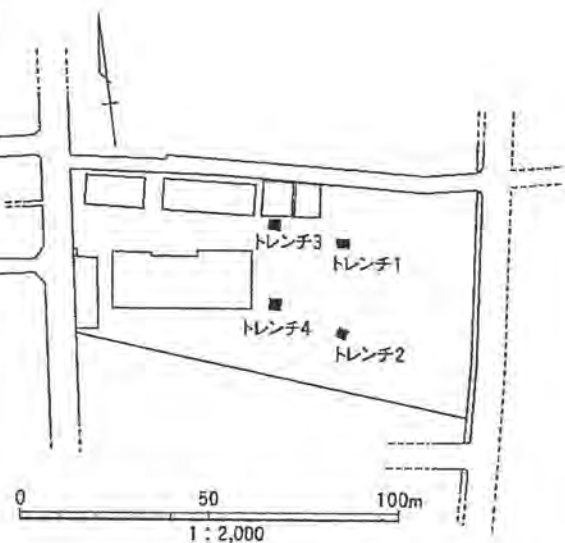


図2 試掘坑の位置

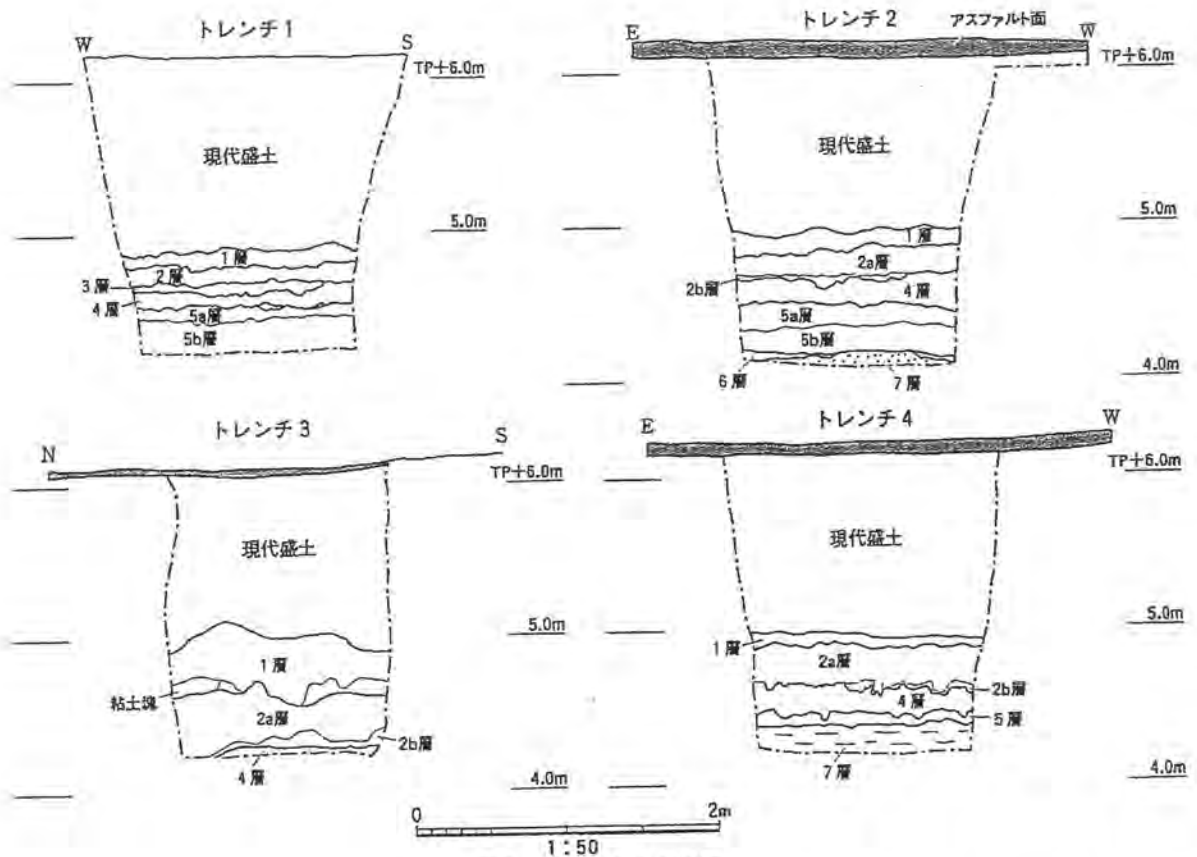


図3 各トレンチの地層

第5層：緑灰色シルト質粘土層である。酸化鉄の斑紋が顕著に認められた。トレンチ1・2ではa・b層に細分できた。下位の第5b層は上位の第5a層より灰色味とともに粘土質が強まる。いずれも作土である。

第6層：灰オリーブ色極細粒砂混りシルト質粘土層である。トレンチ2で確認された。水成層が耕起された作土である。

第7層：オリーブ灰色粘土質シルト～礫混り中粒砂層である。トレンチ2・4で確認された。河川とみられる水成堆積層である。層相の側方変化が著しい。

旧表土以下の第2～6層は近世から近代にかけての作土層とみられる。第7層の河川堆積層も周辺の状況から近世の地層の可能性はある。

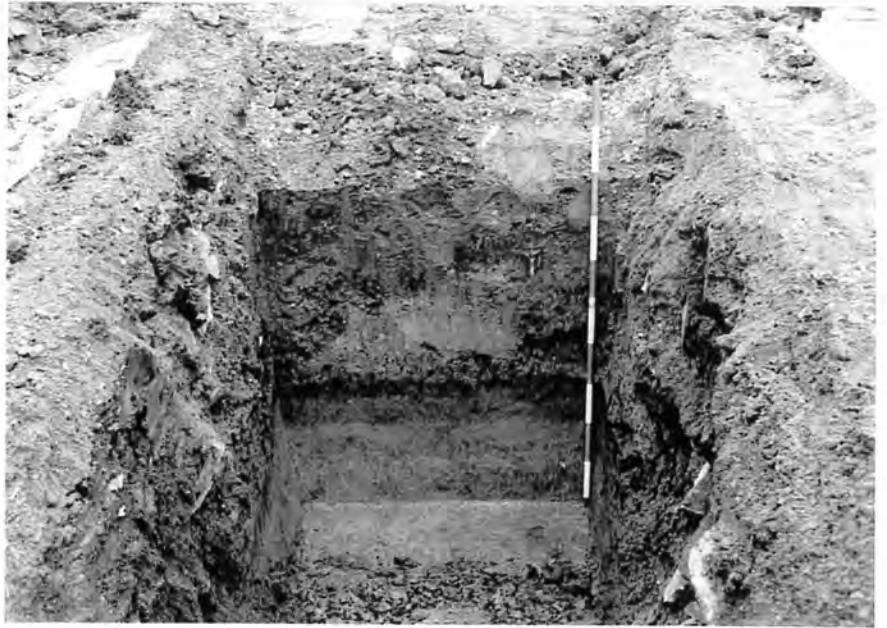
ii) 遺構と遺物

トレンチ2の第2a層において近世の瓦片が出土したが、それ以外には遺構・遺物は認められなかった。

3) まとめ

調査地では、旧表土以下で水田とみられる作土層の累重が認められた。遺物がほとんど出土しなかったため、地層の年代を正確に論じることはできないが、堆積状況や周辺地における調査結果を参考にすると、すべて近世以降の堆積層である可能性が高い。また、調査地東側では旧河川を利用した溜池が流域に点在していたことから、第7層の水成堆積層は埋没河川の一部であったと考えられる。

トレンチ1 東壁断面
(西から)



トレンチ2 南壁断面
(北から)



トレンチ4 南壁断面
(北から)



亀井北遺跡発掘調査(KK07-1)完了報告書

調査個所 大阪市平野区加美東7丁目～加美南2丁目地内
調査面積 19m²
調査期間 平成19年3月12日～平成19年3月26日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、積山洋

1) 調査に至る経緯と経過

亀井北遺跡は弥生時代から奈良時代にいたる集落遺跡である。調査地はこの遺跡の北端部に位置し、北は加美遺跡、東は八尾市久宝寺遺跡に隣接している。この地を南北に貫く近畿自動車道の建設に伴う発掘調査では弥生～古墳時代の墳墓を含む多くの遺構・遺物が発見されている(図1)。

今回の調査は、JR関西線の地下に水道管を埋設する工事に伴うもので、大部分が地中推進工法によっている。そのため、調査は軌道の北側の発進坑と南側の到達坑に限定して行うこととなった(図2)。

3月12日から、まず発進坑の掘削が始まったが、近年の攪乱層がかなり深く、地表下2.6m以深に及んでいることが判明した。そこで、協議のうえ、ここでは工事の最深部の調査に限定することとし、その間に掘削工事が進められた。所定の深度に達した3月25日、発進坑での調査を再開し、また同時に到達坑も調査を開始した。いずれの地点でも顕著な遺構は見られず、調査は地層断面の記録が主となった。3月26日、現地での調査を終了した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3)

発進坑では地表下7m以深での断面観察を行った。堆積層は部分的に粘土が挟在する灰～褐色の砂

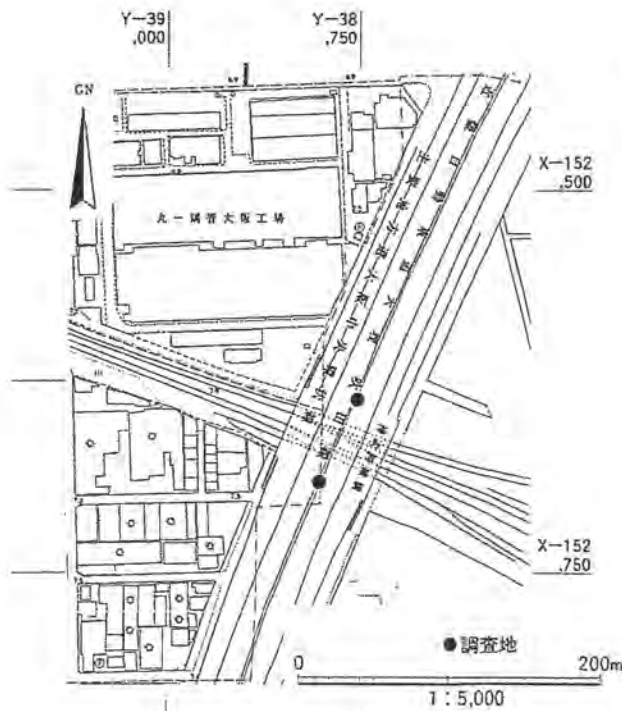


図1 調査地位置図

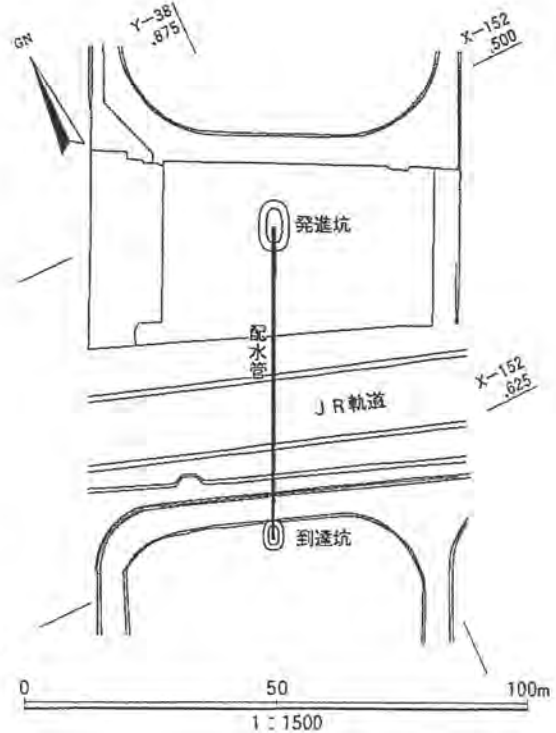


図2 調査地点位置図

礫層で、軟弱な水成層である。かなり深い、沖積層である。遺物は出土していない。

到達坑では、当初の予定どおり地表下1.4mから4mまでの深度が調査対象となった。ここでも堆積層はすべて水成層であったが、記録を残した地表下2.1m以深では粘土層と砂層が互層を成していた。沼状の環境下で、幾度か洪水に見舞われたことを示している。遺物は出土しなかった。

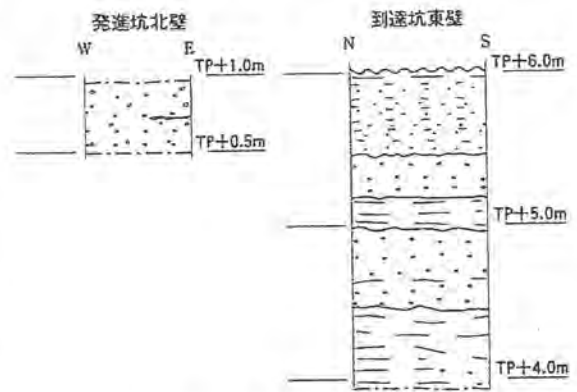


図3 地層断面柱状図

3)まとめ

今回の調査では顕著な遺構は見られず、遺物の出土もなかったが、地下深くまで沖積層が堆積していることが判明した。今後、この地域での古環境を復元する基礎データとなるであろう。

到達坑
(西から)



到達坑東壁の断面
地表下4 m付近
(西から)



発進坑北壁の断面
地表下7 m付近
(南から)



長原遺跡発掘調査(NG07-2)報告書

調査個所 大阪市平野区長吉川辺2丁目814-6
調査面積 35㎡
調査期間 平成19年9月10日～9月13日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小田木富慈美

1) 調査に至る経緯と経過

今回の調査地は、長原遺跡の中央から南寄りに位置し、区画整理事業報告などによる長原遺跡の南地区に属する(図1)。周辺では長吉瓜破土地区画整理事業や建物建設などに際して数多くの調査が行われている(図2)。これらの調査成果によると、調査地は古墳時代には長原古墳群の一面に当り、付近には数多くの古墳が分布している。調査地の南で区画整理事業に伴い行われたNG81-2次調査では、長原44~55号墳が検出され、武人埴輪をはじめとする埴輪類や土器類が数多く出土している[大阪市文化財協会1989]。このほか、調査地の北で行われたNG85-34次調査でも同様に古墳が数基検出されている[大阪市文化財協会1993]。飛鳥時代以降には周辺一帯は水田化され、現代に至るまでおもに耕作地として利用されてきた。

調査に先立ち行われた試掘調査で、古墳時代から近世までの地層が良好に残存していることが確認

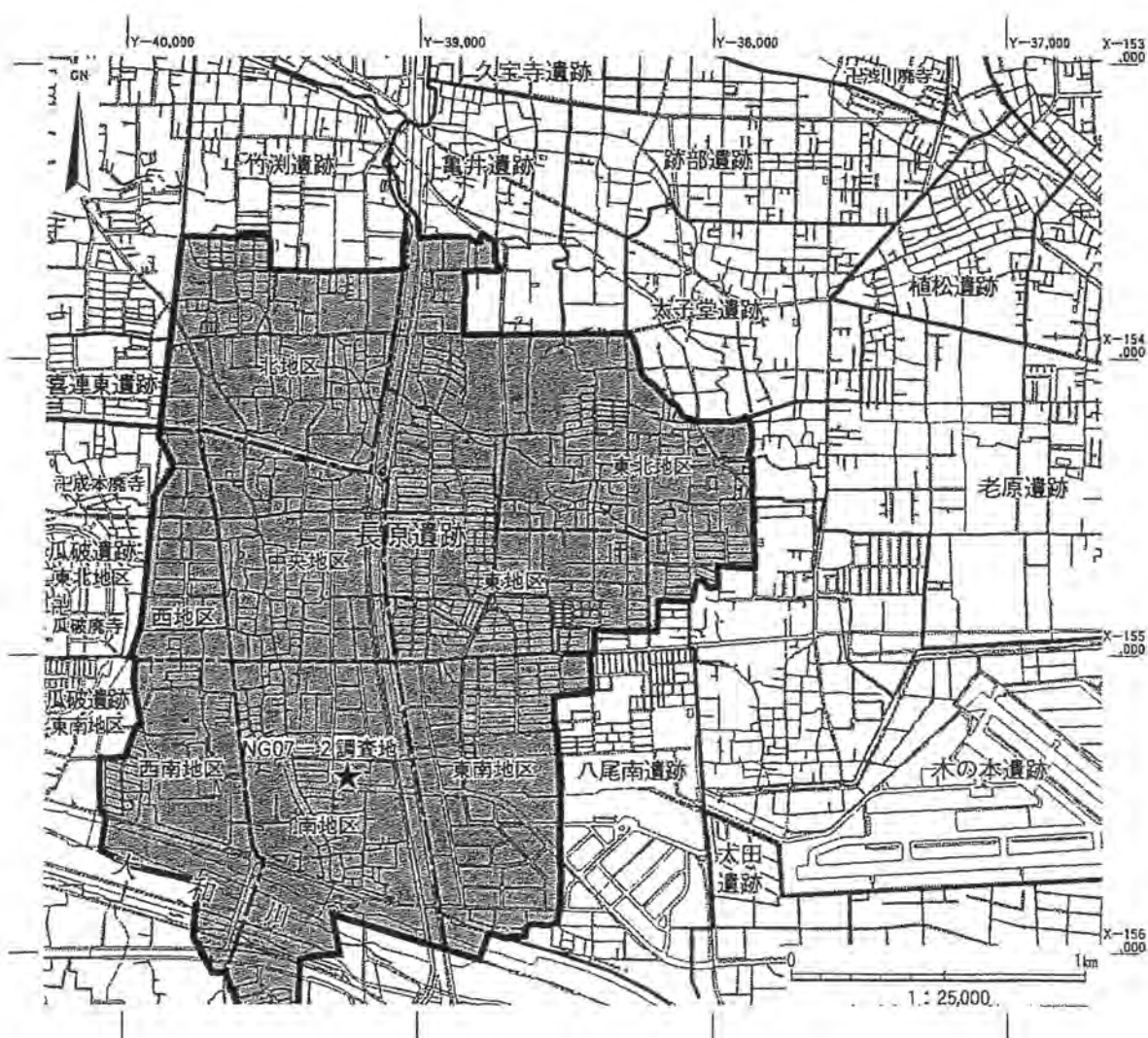


図1 調査地の位置

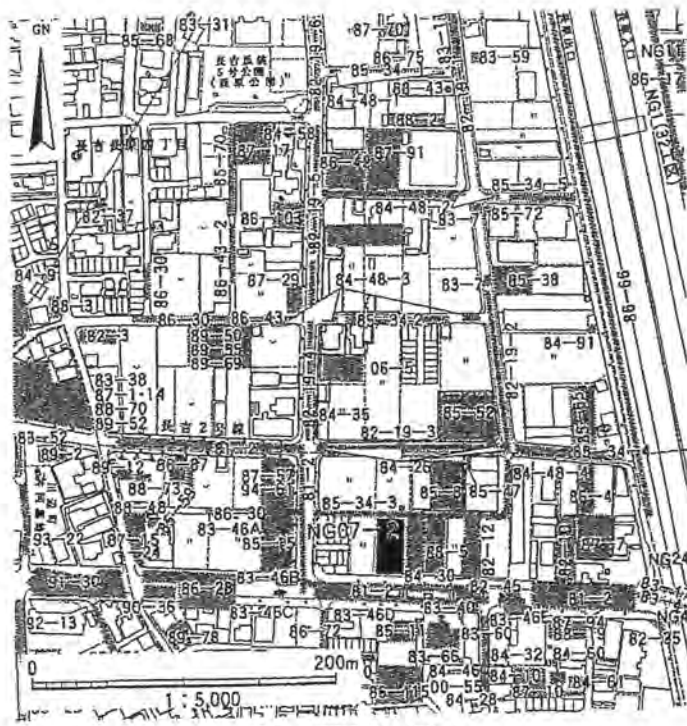


図2 調査地周辺図

されたため、今回の調査を実施することになった。

調査では新たな古墳の確認をはじめ、古代から近世の各時代の遺構を検出することが期待された。調査区は敷地の南西に設定した(図3)。重機掘削は2007年9月10日に開始し、奈良時代末～平安時代初頭の河川の氾濫堆積層である長原5層までを重機によって掘削した。以下の地層はすべて人力で掘削した。調査では奈良時代の水田遺構および弥生～古墳時代の土器・埴輪が確認された。調査期間内は、適宜写真撮影と記録作業を行い、9月13日に現地での作業をすべて終了し、引き続き撤収作業を行った。

なお、図1～3で使用した指北記号は座標北で、図5のそれは磁北である。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文および挿図中ではTP+〇mと略記する。

2) 調査の結果

i) 層序

厚さ約30cmの表土より下位には、現代作土以下に各時代の地層が良好に残存していた。第5層から上位の各層については重機を用いて掘削したため、断面で地層を観察したのみである。現地表面の標高はTP+11.8mで、北が高く南へ向って緩やかに低くなる。段丘構成層である第8層上面の標高はTP+10.3mで、ほぼ平坦であった。遺構は長原6A層に相当するとみられる第6層上面で検出された。以下で各層の特徴について述べる(図4・5)。

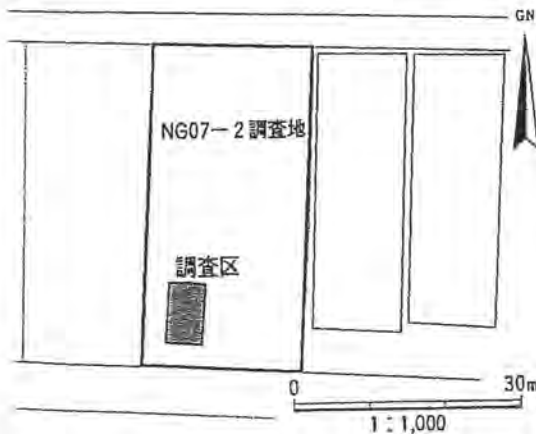


図3 調査区配置図

表土	
第1層	
第2層	2a 2b 2c
第3層	3a 3b 3c
第4層	4a 4b 4c
第5層	SR601
第6層	
第7層	
第8層	

図4 地層と遺構の関係図

表土：厚さ20～30cmで、現代の農圃造成に伴う盛土層である。

第1層：層厚10～20cmの暗灰黄色粗粒砂質シルト層で、現代の作土層である。

第2層：層厚30cm前後で、作土層である。第2a～2c層の3枚に細分された。第2a層は層厚10～20cmのオリブ褐色中粒砂質シルト層で、調査区の全域に分布する。第2b層は層厚10cmの含礫黄褐色中粒砂質シルト層で、調査区の全域に分布する。第2c層は黄褐色中粒砂質シルト層で、調査区の北部におもに分布する。以上の各層の間には、部分的に河川の氾濫堆積層が認められる。第2層からの出土遺物はないが、層序関係から江戸時代の長原2層に相当する。

第3層：層厚30cm前後で、作土層と河川の氾濫堆積層からなる。第3a～3c層の3枚に細分された。第3a層は層厚10cmの浅黄色粗粒～中粒砂質シルト層で、調査区の北部にのみ堆積する河川の氾濫堆積層である。第3b層は層厚10～20cmのにおい黄色中粒砂質シルト層で、作土層である。調査地の南西に厚く堆積している。第3c層は層厚10cmのにおい黄色粗粒砂質シルト層で、作土層である。上位の第3b層との間には部分的に河川の氾濫堆積層が挟まれる。なお、第3層からの出土遺物はないが、層序関係から室町時代の長原3層に相当する。

第4層：層厚30cm前後で、作土層である。第4a～4c層の3枚に細分された。第4a層は層厚5～10cmのにおい黄色中粒～粗粒砂層で、河川の氾濫堆積層である。調査区の南部に厚く堆積している。第4b層は層厚10cmの黄褐色またはオリブ褐色シルト質粘土層で、作土層である。第4c層は層厚10cmの含礫暗灰黄色粘土層で、作土層である。第4c層からは須恵器・土師器の細片が出土している。層序関係と出土遺物から第4層は平安～室町時代の長原4層に相当する。

第5層：層厚10～20cmの灰黄色粗粒砂～礫層で、長原5層に当る奈良時代末～平安時代初頭の河川の氾濫堆積層である。本層からは土師器甕が出土している。

第6層：層厚10～20cmの暗オリブ灰色シルト質粘土層で、上面には足跡や畦畔、下面には耕作痕跡が検出される。長原6A層に相当する奈良時代の水田作土層である。

第7層：層厚10cmの灰色粘土質シルト層で、下部はシルトが主体である。弥生時代後期～飛鳥時代の長原7B～6B層に相当する。本層には埴輪および土師器のほか弥生土器が含まれる。

第8層：灰色シルト質粘土層で、段丘構成層である。長原13層以下に相当する。

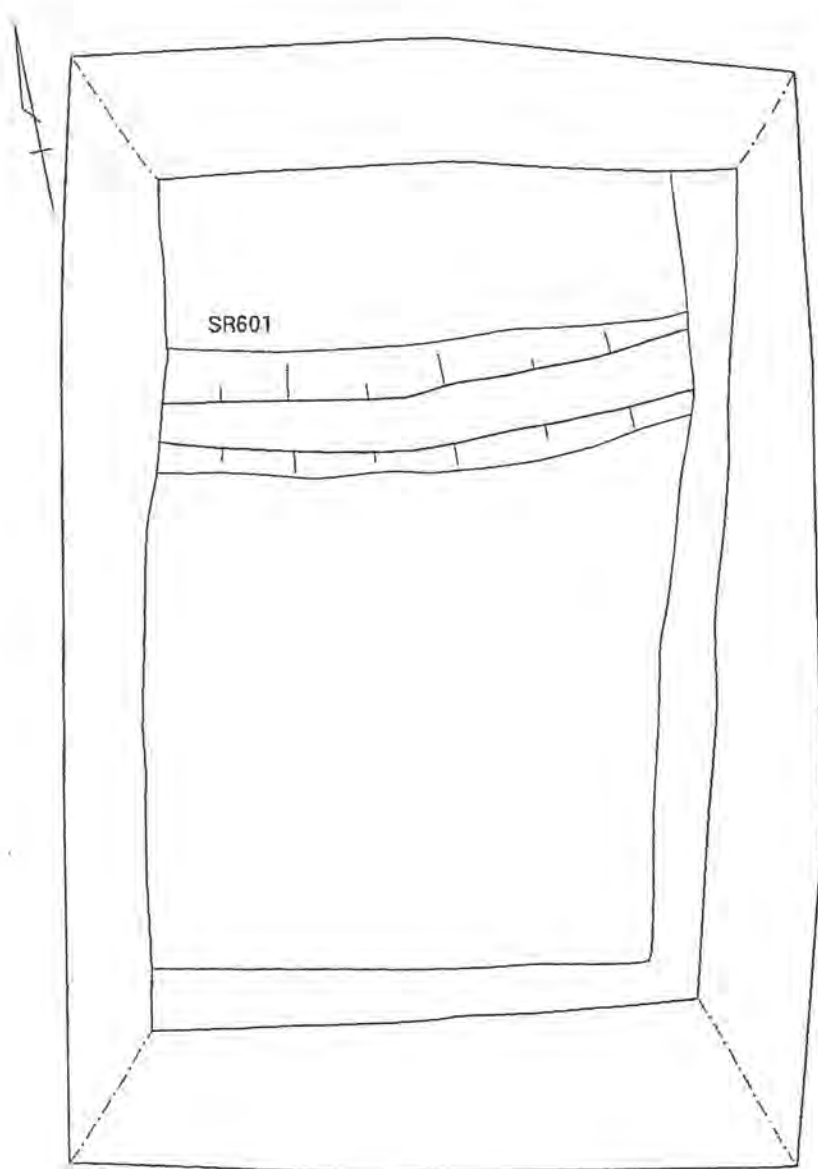
なお、調査区の北端部では、第8層の上部に長原12/13層漸移帯とみられる灰色シルトが堆積していたため、この部分を精査したが、旧石器～縄文時代の石器遺物は確認できなかった。

ii) 遺構と遺物

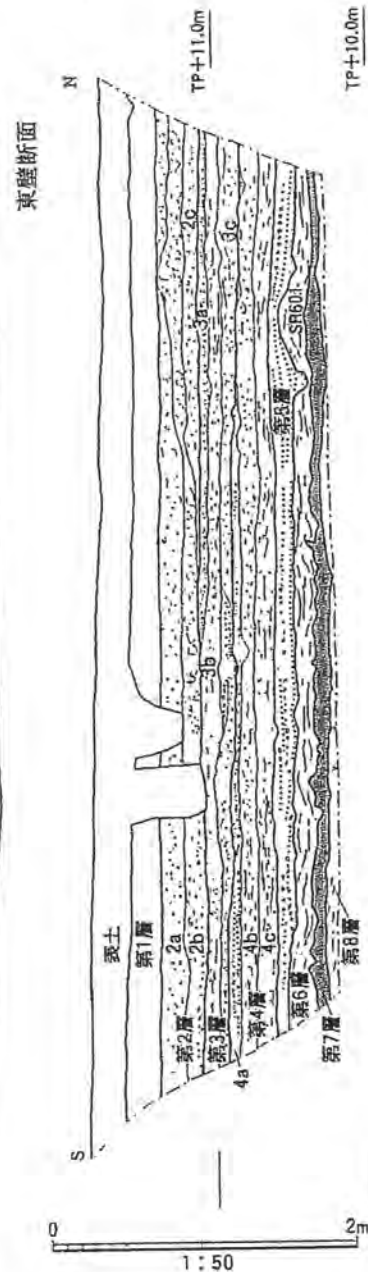
第6層上面では、東西方向の水田畦畔SR601を検出した(図5)。方位は東でやや北へ屈曲する。下端での幅は0.8～0.9m、高さは0.1mを測る。このほかに遺構は検出されなかった。

遺物は遺構に直接伴うものは出土しなかったが、第5層から土師器甕の把手、第7層からは弥生土器高杯と円筒埴輪が出土している。

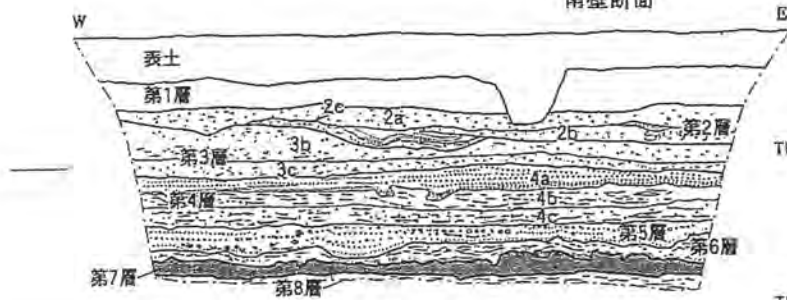
1～3は第7層から出土した。1は弥生土器高杯の脚部である。外面は磨滅が著しく、縦方向のハケメで調整したのちに、ヘラミガキを施すとみられる。円形のスカシ孔が認められるが、個数は不明で



第6層上面検出遺構



南壁断面



- | | |
|--------------------|------------------------|
| 第1層：暗灰黄色粗粒砂質シルト | 第4a層：にぶい黄色中粒～粗粒砂 |
| 第2a層：オリブ褐色中粒砂質シルト | 第4b層：黄褐色またはオリブ褐色シルト質粘土 |
| 第2b層：含礫黄褐色中粒砂質シルト | 第4c層：含礫暗灰黄色粘土 |
| 第2c層：黄褐色中粒砂質シルト | 第5層：灰黄色粗粒砂～礫 |
| 第3a層：浅黄色粗粒～中粒砂質シルト | 第6層：暗オリブ灰色シルト質粘土 |
| 第3b層：にぶい黄色中粒砂質シルト | 第7層：灰色粘土質シルト |
| 第3c層：にぶい黄色粗粒砂質シルト | 第8層：灰色シルト質粘土 |

図5 調査区平面・断面実測図

ある。胎土には1mm大の長石・石英を多く含む。弥生時代後期前半であろう。2・3は円筒埴輪である。両者とも円形とみられるスカシ孔を有する。タガの断面はM字形から台形で突出度は低い。2の外面の調整はタテハケである。内面は一部に粗雑なハケメが認められるほか、ユビオサエ痕や粘土紐の接合痕跡を残す。焼成はあま

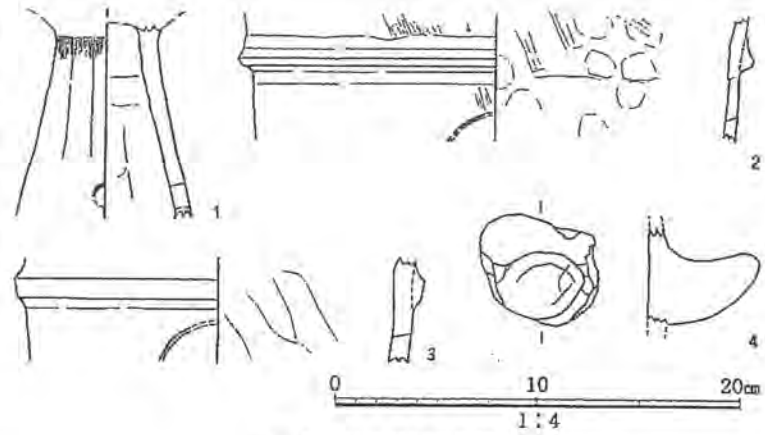


図6 出土遺物実測図

い。3は磨滅が著しく、外面の調整は不明である。内面はユビナデで仕上げる。胎土には砂粒を多く含む。これらは川西宏幸氏の編年によるV期に属する[川西宏幸1988]。これらの埴輪は調査区の南部を中心に出土しており、南で行われたNG81-2次調査の成果とあわせると、長原52号墳に伴う可能性がある。4は第5層から出土した土師器甕の把手である。飛鳥~奈良時代のもと思われる。

3)まとめ

今回の調査では古墳の確認が主目的とされたが、設定した調査範囲内では墳丘や周溝は検出されなかった。ただし、調査では図示したもののほかにも埴輪片が少なからず出土しており、すでに報告されている52号墳とは別の古墳が近くに存在した可能性も否定できない。

また、今回1点ではあったが弥生時代後期と考えられる高杯が出土したことは注目される。これまで長原遺跡南部での当該期の遺物は報告例が少ない。今回の例は、従来中央地区寄りで確認されていた弥生時代後期の遺構の分布域がさらに南へ広がる可能性を示唆する資料といえる。

奈良時代については長原6A層上面で水田面を検出し、東西方向の畦畔が確認された。ここで周辺の同時期の水田遺構の検出状況を示した(図7)。これによると、調査区で確認されたSR601を西へ延長すれば、NG81-2次調査で検出されている東西方向の畦畔のラインと一致し、ほぼ正東西方向となる(図7破線部分)。周辺では特に調査地よりも南において、条里方向とは異なった畦畔の配置がなされているものの、西や北ではほぼ条里に沿った配置が認められる。なお、近年まで残存していた東西方向の坪境線は、調査地の南を通る出戸川辺線とほぼ一致している。ただし奈良時代においては、これに該当する大畦畔や大溝などは現在のところ検出されていない。周囲では古墳の墳丘が高まりとして各所に残存する景観であったと想定される。古墳が多く残る地点や、調査地南の地形が傾斜する場所では、条里の坪境に沿った規則的な畦畔の配置がしにくい状況であったとみられる。

以上のように、今回の調査では、長原遺跡南部の奈良時代における土地区画のありかたを知る上で貴重な手掛りをうることができた。また、弥生・古墳時代についても近隣に遺構が存在する可能性を指摘しえた。調査地周辺では、区画整理事業に伴う道路敷設によって線としての調査が多く行われている。資料の蓄積は進んできてはいるが、古墳の分布状況をはじめ長原遺跡南部一帯のかつての姿を

知る上ではまだ十分とはいえない。今後の調査成果に期待したい。

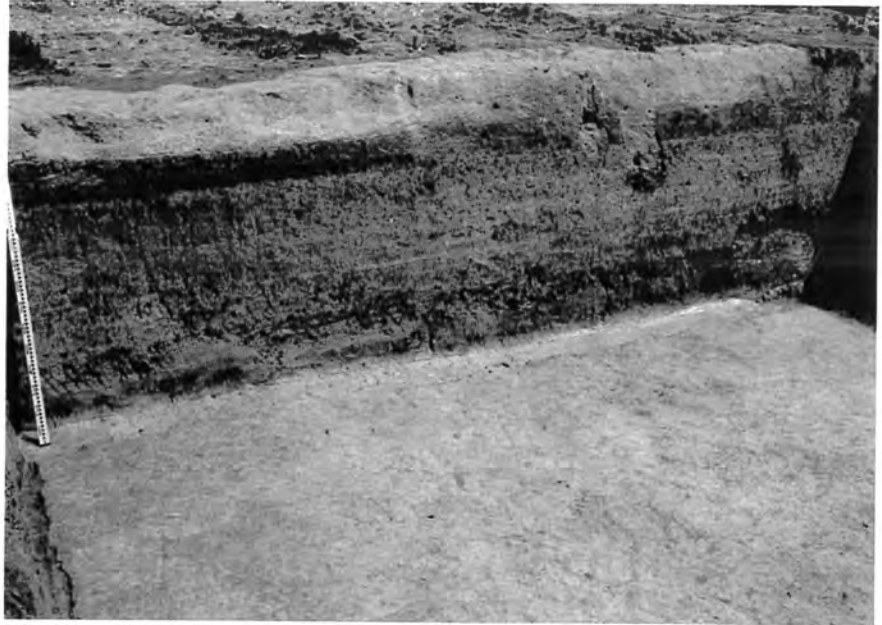
参考文献

大阪市文化財協会1989、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」I

大阪市文化財協会1993、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」V

川西宏幸1988、「円筒埴輪総論」：『古墳時代政治史序説』 塙書房、pp.225-360

調査区東壁地層断面
(北西から)



第6層上面
遺構検出状況
(北から)



SR601検出状況
(西から)



瓜破遺跡試掘調査(UR07-7)報告書

調査個所 大阪市平野区瓜破東4丁目 瓜破霊園内
調査面積 約12.5m²
調査期間 平成20年1月23日～1月24日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、小田木富慈美

2) 調査の結果

周辺は調査地南の池部分が最も低く、東および西側が高くなる地形である。調査区内では、現地表は東が高く西に低くなっていた。厚さ20~30cmの現代盛土を除去すると、既存の建物以外の場所では現代作土以下の地層が良好に残存していた。なお、試掘箇所内では遺構は確認されなかった。以下では各層の様相について述べる(図4)。

第1層：含礫黒褐色中粒砂質シルト層で、旧表土である。

第2層：にぶい黄褐色粗粒砂質シルト層で、作土層である。層厚は20cmで、土師器の細片を含む。江戸時代の可能性がある。

なお、第1・2層の上面は現地表と同じく東で高く西が低くなっており、第2層の上面でみると調査区の東西で約20cmの差があった。

第3層：にぶい黄褐色シルト質粘土層で、層厚は20~30cmである。大礫サイズの段丘構成層の偽礫を多く含む。

第4層：にぶい黄褐色シルト質粘土層で、層厚は20cmである。直径3~4cm大の段丘構成層の偽礫を少量含む。

第5層：含礫にぶい黄色シルト質粘土層で、層厚は20cmである。灰色粘土の偽礫を多く含む。須恵器および黒色土器片が出土した。

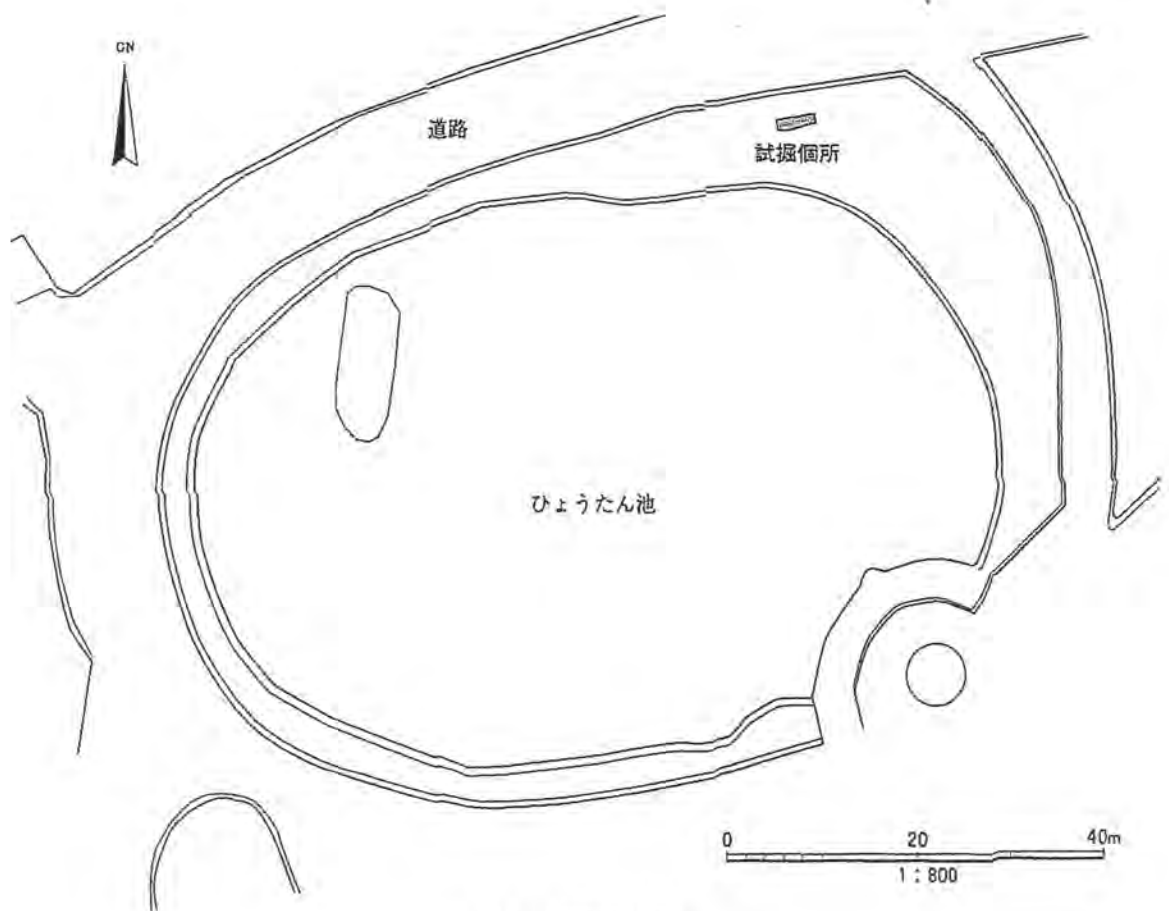


図3 試掘城配置図

第6層：灰黄色粘土質シルト層で、層厚は30cm以上である。

以上の第3～6層は、段丘構成層や粘土の偽礫を含む人為的な盛土層である。東から西に向って急傾斜していることから、「東谷」の埋立て時の地層で一連のものと思われる。

3)まとめ

今回の調査では、瓜破台地北端の「東谷」の様相が明らかとなることが期待された。調査の結果、谷の埋没状況の全容については明らかにできなかったが、江戸時代とみられる作土の下位で、谷を埋戻した地層である第3～6層の存在が確認された。これらには段丘構成層や作土とみられる粘土の偽礫や、須恵器・黒色土器の破片を含むことから、近隣に存在した地層を削平して谷の埋土としたことが推測される。埋戻しの時期は特定しがたいが、第2層が江戸時代以降に形成された可能性があることと、出土遺物の時期から中～近世と推定される。

参考文献

大阪市文化財協会2002、「瓜破遺跡発掘調査報告」Ⅱ

小倉徹也2008、「谷の発掘と竪穴住居の発見」：大阪市文化財協会編『葦火』132号、pp.6-7

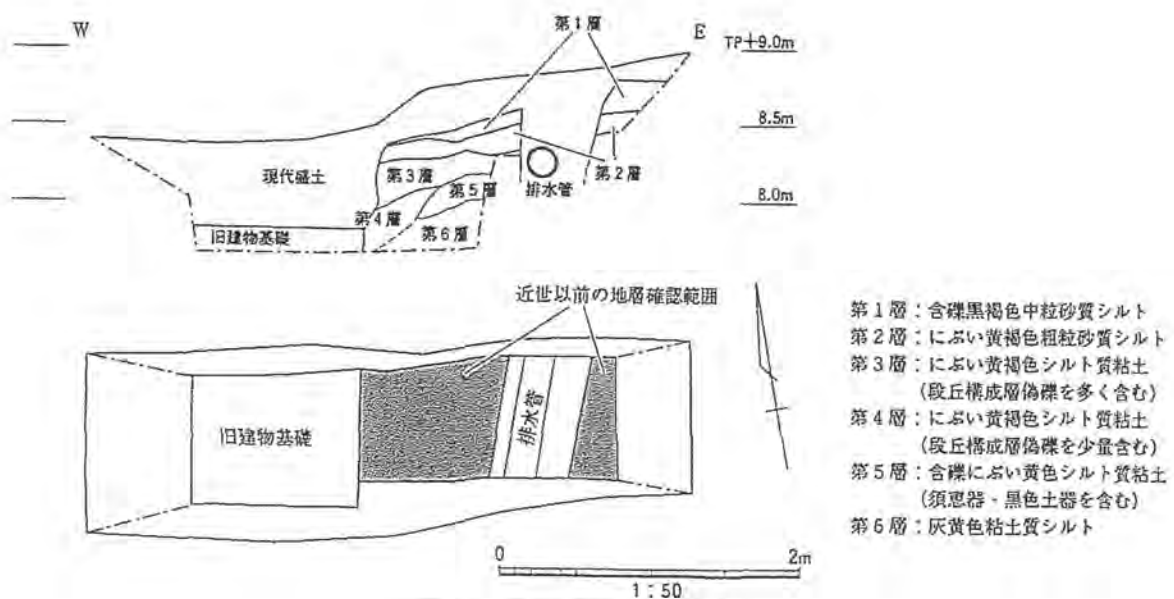
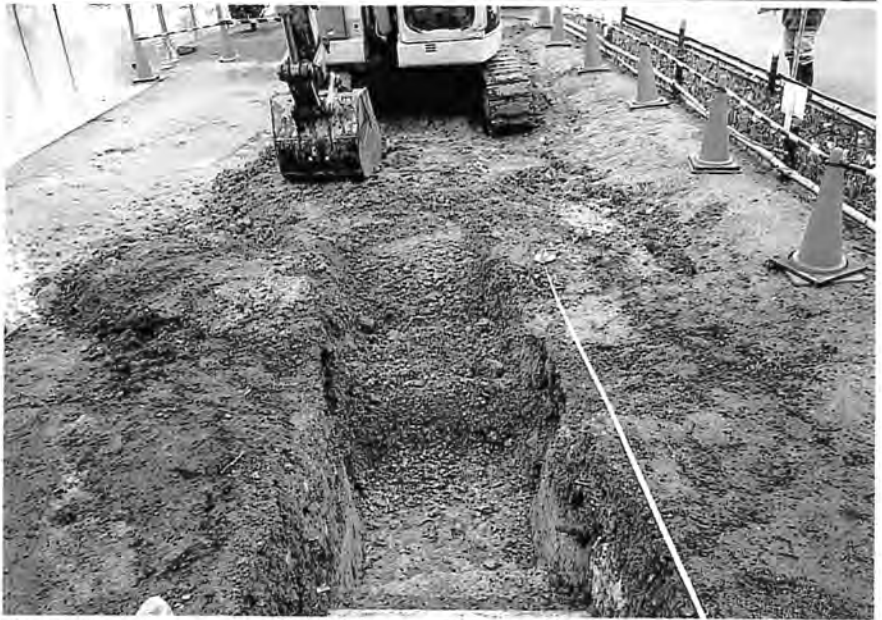


図4 調査区断面・平面実測図

調査地遠景
：中央池の左奥
（西から）



機械掘削状況
（東から）



調査区北壁断面
（南から）



XIV 西 成 区

埋蔵文化財試掘調査(NH07-1)報告書

調査箇所 大阪市西成区長橋1丁目
調査面積 16m²
調査期間 平成19年11月21日～11月26日
調査主体 財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 文化財研究部次長 南秀雄、黒田慶一

1) 調査に至る経緯と経過

当調査地は上町台地の西裾より約1km西の旧砂堆上に位置する長橋遺跡にある(図1)。現地表面の標高は2.4mで、開発に伴う試掘調査を実施した。

調査対象の敷地は、NH00-1次調査地の北西60mにあり、L字形を呈する(図2)。敷地全体の傾向がわかるように4箇所の試掘坑を設定した(図3)。

2007年11月21日から重機掘削と人力掘削を併用し、各地層の遺物・遺構の発見と地山面の検出に努め、26日に埋戻して旧状に復し全ての調査を終了した。実質3日間の調査である。4箇所の試掘坑はそれぞれ、東Tr、中Tr、北西Tr、南西Trと称する。

なお、この調査での水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±0mとしている。また、現場で作成した平面図は磁北を基準とした。

2) 調査の結果

i) 層序(図4・5)

東Trは近代の攪乱が著しく、尖った山状に元の地層が残っていた。

図4上の1~5が近代以降の地層、6・7は攪拌された地層で、8以下が水成層である。6~16からは遺物が出土しなかった。

中Trは1の現代盛土層下に、2の現代作土層がある。5は攪拌されているが、7以下は水成層である。7~14からは須恵器・土師器など古い遺物も出土するが、7から瀬戸磁器や石綿スレート、13から石綿スレートが出土

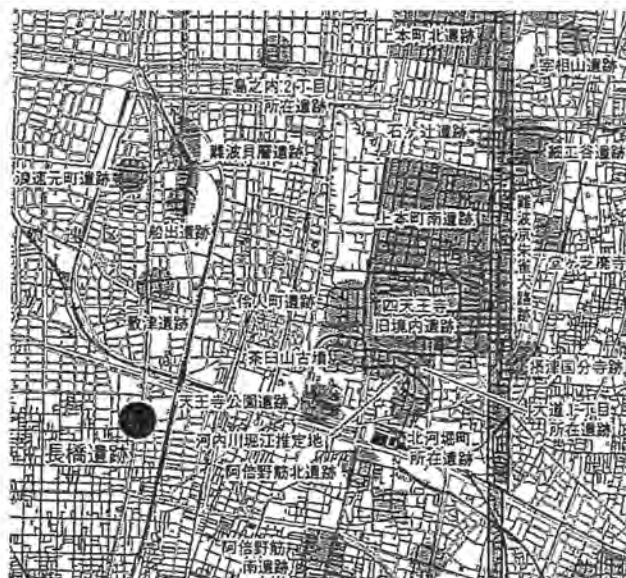


図1 長橋遺跡の位置

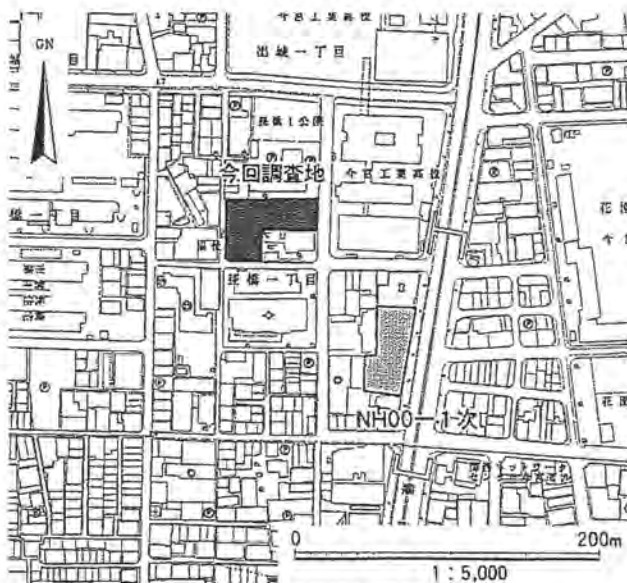


図2 調査地位置図

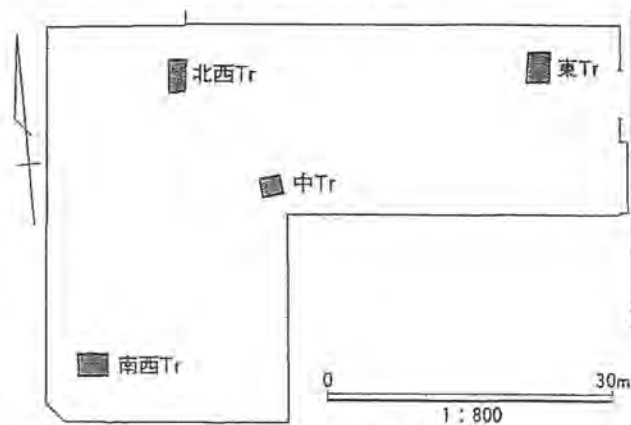


図3 試掘坑位置図

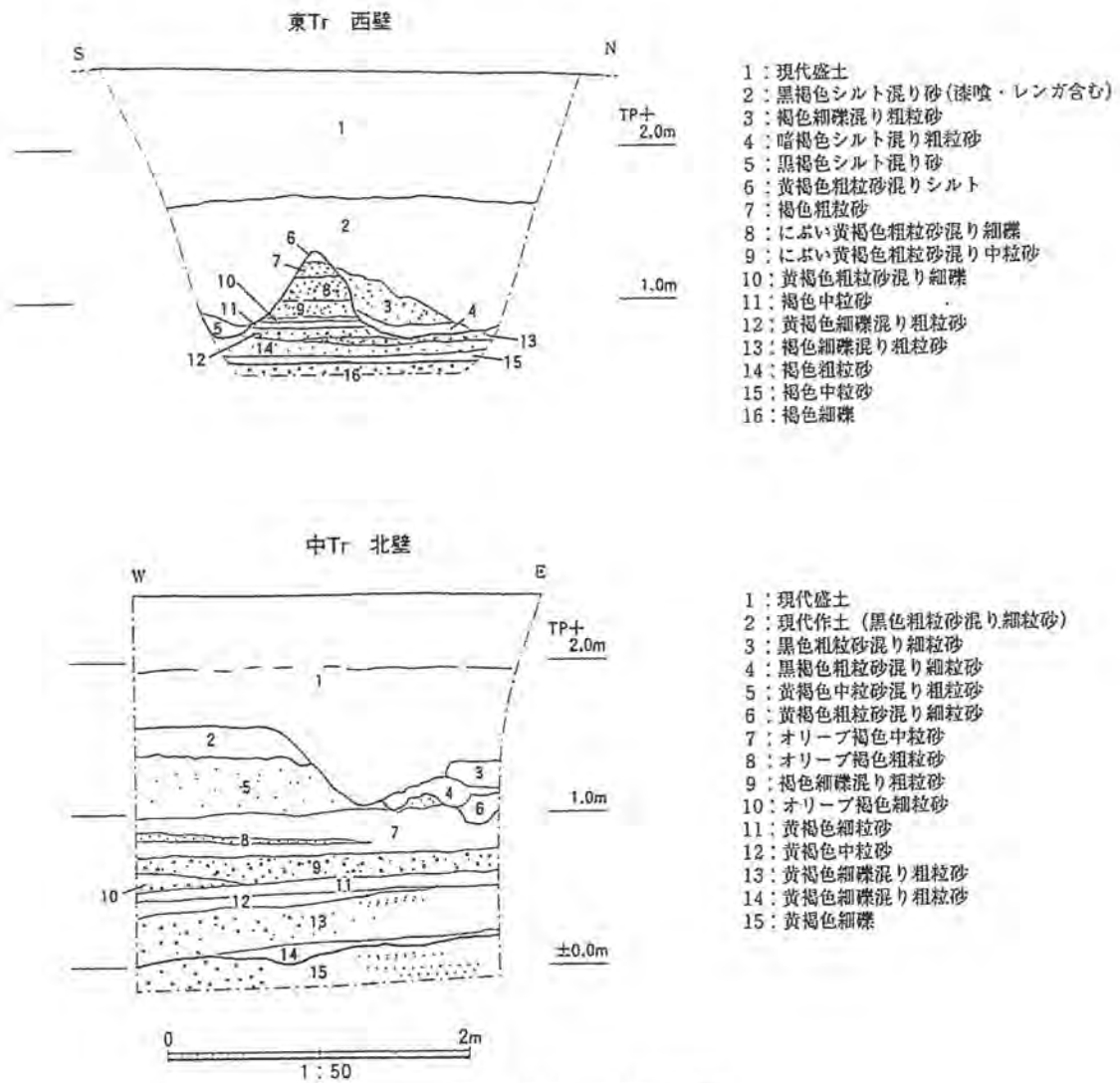


図4 東Tr・中Tr断面図

するなど、明治時代以降の堆積である(註1)。上面がTP+0.2mを測る15の黄褐色細礫層が地山と考えられる。

南西Trと北西Trの現代作土層下は、明治時代以降の盛土層である。

南西Trは5の現代作土層下に、東から西に投入された盛土層6~13がある。10のにぶい黄褐色粗粒砂混りシルト層で平坦化されているが、その上面で土壤化が見られないことから、盛土作業の途中で一旦止め平坦化し、続けて7~9が盛られたと思われる。上面がTP-0.2mを測る16の黄褐色粗粒砂混り細礫層が地山と考えられ、地山上面に層厚150cmの盛土層が施された。地山直上の14からは、図6の須恵器杯が出土したが、石綿スレートも共伴しているので、明治時代以降の盛土である。

北西Trは3の現代作土層下に、4~6を埋土とする木の根による落込みがあり、その下層は西から東に投入した明治時代以降の盛土層7~13がある。上面がTP+0.2~0.5mを測る14の黄褐色粗粒砂混り細礫層が地山と考えられる。

ii) 遺構と遺物(図6)

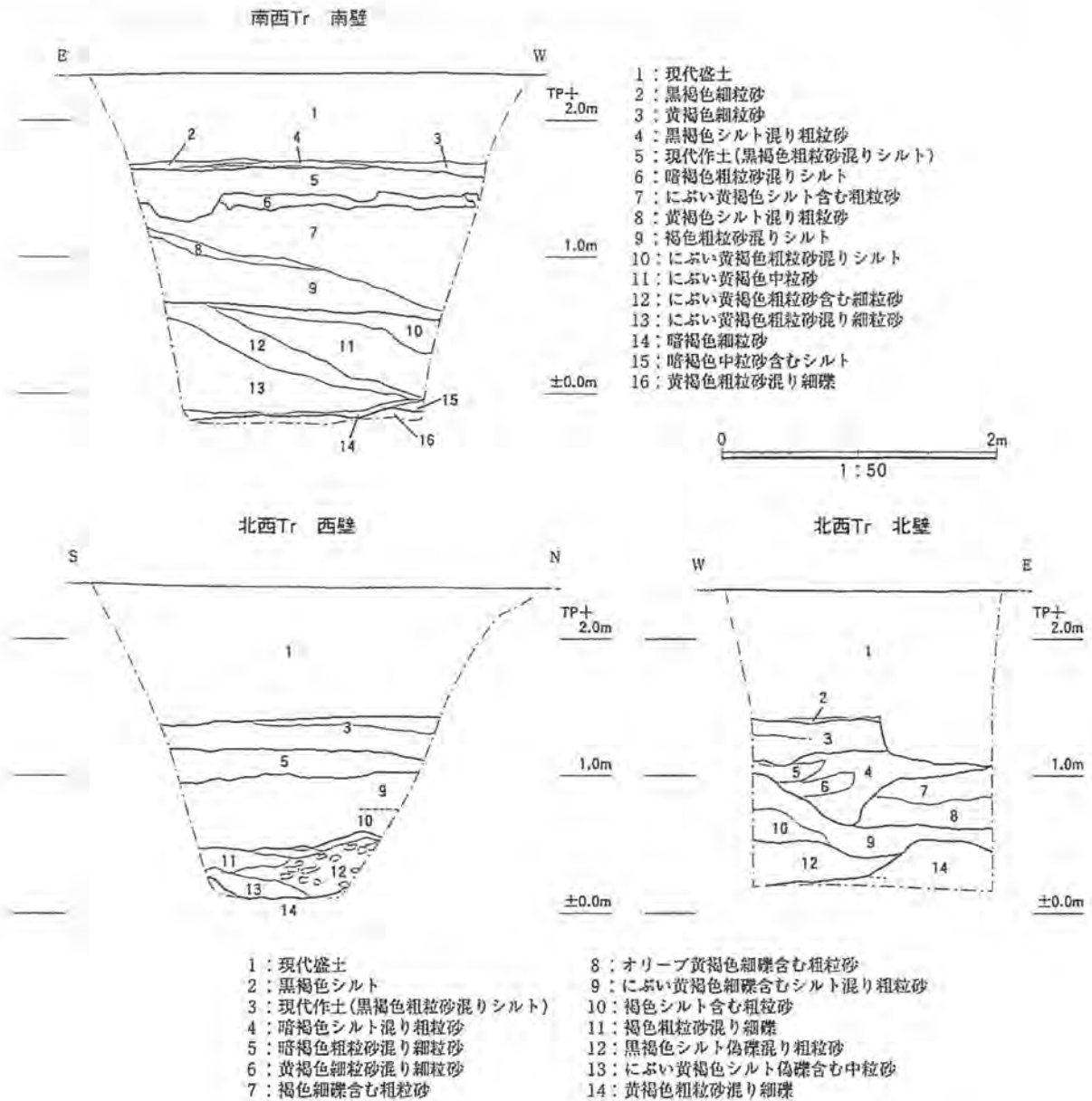


図5 南西Tr・北西Tr断面図

地山直上で、南西Tr・北西Trでは近代の盛土層を、東Tr・中Trでは水成層を検出した。中Trの水成層の堆積はやや東高西低であるから、東に肩をもつ流路の可能性はあるが、南西Tr・北西Trの盛土層と中Trの水成層の前後関係は現状では不明である。

遺物は東Tr以外の3箇所の試掘場で、図6の須恵器杯をはじめとする古代土器と、瓦器などの中世土器が、近代の遺物とともに出土した。

3)まとめ

遺物が出土しなかった東Tr以外で、地山上面に達する人為もしくは自然の営為による近代以降の堆積層を検出した。

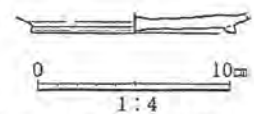


図6 北西Tr出土遺物実測図

当地の北約700mには、旧今宮村の海民集団が信仰した今宮戎神社があり、周辺は敷津遺跡である。同遺跡は鎌倉時代に朝廷の内蔵寮に属し、鎌倉～室町時代に魚介類の販売で活躍した「今宮供御人」[大阪府漁業史編さん協議会1997]の本拠地と考えられている。また南東のNH00-1次調査地からは古代～中世の遺構・遺物が検出されている。今回も古代～中世の土器が見つかったことから、周辺に古代以来の海浜に臨む集落が存在した可能性も考えられる。今後の調査に期待されるところが大きい。

註)

(1)石綿スレートは1901年にオーストリアのL. ハチェックによって、製法の最初の特許が取得され、日本へ輸入されたのは1906(明治39)年が最初といわれている[建築土木資料集覧刊行会1929]。

参考文献

大阪府漁業史編さん協議会1997、「大阪府漁業史」

建築土木資料集覧刊行会1929、「建築土木資料集覧」

調査地
(西から)



東Tr 西壁



中Tr 北壁



南西Tr 南壁



南西Tr 地山上面
(南から)



北西Tr 西壁



大 阪 市 内 埋 蔵 文 化 財
包 蔵 地 発 掘 調 査 報 告 書

発行日 平成21年 3月31日

発行 大 阪 市 教 育 委 員 会
(財)大 阪 市 文 化 財 協 会

編 集 大 阪 市 教 育 委 員 会 文 化 財 保 護 課
(大 阪 市 北 区 中 之 島 1-3-20)

印 刷 和 泉 出 版 印 刷 株 式 会 社
